

# アラス奇譚

11 月号



新しい風俗文献誌

1973. 11

昭和四十八年十月二十日印刷 昭和四十八年十一月一日発行 十七頁 (第七七五号) 毎月一回一日発行 昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十日国鉄大島特別郵便物第一〇号



定価 1,000円 送料 50円



女体緊縛の華

### 本誌写真部構成

緊縛女体の光と影

### 編集部構成

カメラ。ハント楽我記……辻村  
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三 隆

これから、どうするの？

美しき吊り……長井葉津子  
苦痛か悦楽か……前田真知子  
一筋の縄の魔術……中河恵子  
逆エビ縛りに入る……三浦純子  
愛撫の責め……渡部好美  
俯瞰撮影……前田真知子  
黒縄と白肌……中河恵子  
身動きできぬ境地……関谷富佐子  
ボリウムを縛る……座間明子  
浮上した女体……中河恵子  
麗しき背面……中河恵子  
汚辱の縄……金原奈加子  
高手小手本縛り……佐々木真弓  
責めの陶酔境……川路叢子  
失神したマゾ女……関谷富佐子  
前手縛り悶悦……関谷富佐子  
柱の彼方の天国……中河恵子  
荒縄の海老責……三浦純子  
美と縛の女神……前田真知子  
はずれた猿轡……梨花悠紀子  
可憐な置物……長井葉津子  
ながし目の天使……佐々木真弓  
酒の肴になる……川路叢子  
妖蛇の洗礼……関谷富佐子  
奔弄されるままに……前田真知子  
海老縛りの妙味……川路叢子  
柱につながれた女……長井葉津子  
痛さをこらえる異国の女……シラ・ケイ

責の果の諦観……前田真知子  
痛打の一瞬……関谷富佐子  
ホステス裸人生……佐々木真弓



# 女性モデル求めます

## 本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の  
数多くの告白の投稿やモデルの応募によって  
献誌として、真摯な研究熱心な本誌読者の  
方々の期待に応え、写真モデルとして活躍を  
望まれる方は、どうか御遠慮なくお申し込み  
て御応募下さるようお願いいたします。  
○本誌愛読の女性の方で、お持ちの国籍、未  
婚の別、年齢など一切の制限は、採用され、遠  
に拘らず、お申し込み願ひを、採用され、遠  
た方には、お礼金として一回につき、五万円  
拾万円まで、即金にてお払いいたします。  
○応募された方の、個人情報は、絶対秘密の  
は、御本人の許可なく、他の人に提供され、洩  
を、御安心の上、お申し込み願ひを、文  
を、御安心の上、お申し込み願ひを、文  
提供下さる。尚、お申し込み願ひを、文  
な、御安心の上、お申し込み願ひを、文  
幸甚に存じます。お申し込み願ひを、文  
○撮影いたしました写真は、本誌に掲載を原則  
と、お申し込み願ひを、文  
表、お申し込み願ひを、文  
改、お申し込み願ひを、文  
介、お申し込み願ひを、文  
成、お申し込み願ひを、文  
きた、お申し込み願ひを、文  
個々、お申し込み願ひを、文  
○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体  
重などは、必ずお書き添え願ひます。写真が  
あれば、同封下されば、都合ですが、お手元に  
当、お申し込み願ひを、文  
。申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第41号  
暁出版株式会社 編集部

# ◆本誌三百号突破記念◆

## ▽賞金△

入選作品	第一席	二十万円	1
入選作品	第二席	十万円	1
入選作品	第三席	五万円	3
入選作品	第四席	三万円	5
入選作品	第五席	二万円	10
佳作優秀作品		一萬円	15
選外佳作作品		五千円	10

## ▽内容△

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
奇譚、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
この間に、風俗雑誌の多き数を数えるに至り、  
その辛酸を具に、嘗て、な、イ、オ、ニ、ア、と、  
の、御支援を具に、嘗て、な、イ、オ、ニ、ア、と、  
き、御支援を具に、嘗て、な、イ、オ、ニ、ア、と、  
よく、御支援を具に、嘗て、な、イ、オ、ニ、ア、と、  
一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
て、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
に、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
咲、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
い、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
三、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
実、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
て、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
す、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
た、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
嗜好、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
崇、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
色、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ  
に、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ

# 百萬元懸賞原稿募集

## ▽規定△

一、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
り、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
三、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
入、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
掲、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
削、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
ます、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
故、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
一、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
と、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
下、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
住、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
は、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
性の、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
と、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
箱、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
ず、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下  
並、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以下



奇譚クラブ

昭和四十八年十月二十日印刷  
昭和三十一年四月二十日  
第三種郵便物認可  
昭和四十八年十一月一日  
昭和四十九年四月二十一日  
第二十七卷第十一号  
毎月一回、一日発行  
国鉄大島特別郵便承認第20号

# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan





# 異常美の双曲線

〈塚本鉄三・撮影〉



無防備を襲う触手

山原清子





昭和四十八年 十一月号目次 第二十七卷第十一号  
通刊第三〇九号

フォト「豊満のキミに捧げる詩」	△座間明子▽	村尾加根夫	(21)
私達夫婦プレイ旅行の記録	早坂 郁子		(22)
女の縛りに憑か「藁縄の匂いの懐かしさ」	安井 靖二		(30)
仮面に生きる女の思い出「真昼の客」	比叡 嵐		(32)
「日本のどこかで」	「奴隷妾の眩き」	北川まりこ	(39)
M人士の系譜「SM東西対抗」	亜東 忍		(42)
敗戦悲話「悪魔のサイズ・テスト」	鈴鹿 晶子		(48)
北満哀歌	秋津新次郎		(62)
創作「SM企業」	△第二話被虐への道▽	雄松比良彦	(70)
文献研究「女相撲書誌拾遺」	(終)	島崎 慎一	(75)
「犬と人との性」	「人獣交婚」リポート	あたごのぼる	(78)
小説「曲げ屋」	△アクロに憑かれた男▽	風流極道軒	(86)
連載・時代S小説「紫蘭の門」	(27)	塚本 鉄三	(98)
「ペン」と「カメラ」のルポルタージュ	△南加津子の巻▽	品川 民子	(128)
「臨月の妊孕美を暴く」		千葉 青鬼	(136)
レズ創作「獣性の器」		田中早智子	(144)
連載小説「大噴火」	△第六十一回▽	鬼山 絢策	(148)
△感覚に憑かれた女の告白	「病院歩記」	苗木 陽子	(163)
連載・M派交友録(44)	「グラママーな猛女」		
編集長への「私に御主人様をお与え下さい」			
ある手紙	「耽奇房」我楽多控(8)		
「逆吊漫考」	△第二部▽	辻村 隆	(166)
手記「浣腸」という名のシークレット		白木 幸江	(187)
TATTOOについて「SM落書帳」		長谷田 亀治	(190)
浩が行く(2)「病めるヒナゲシ」		久留木 栄	(196)



異常美の双曲線			〔塚本鉄三・撮影〕		
無防備を襲う触手	山原 清子	貞操帯装着図・股間縛り	安井喜久子	悶える・身体検査のポーズ	福井 桃子
浣腸愛好の女・縛られた女	西条 紀代	観念して晒す女体・マゾ好	笠井奈保子	ボリ・ユームの開股縛・縄目	南 加津子
の悦楽に酔う	南 加津子	出産十日前のプレイ・華や	松本 たえ	かな脚線美・太鼓腹緊縛記	深田 菊子
開脚という奇妙な責	松本 たえ	見る人の目に晒す裸身・鏡	大塚 啓子	に映った緊縛女体・牝猫の	荒尾 慶子
革具の猿轡と拘束(二態)	荒尾 慶子	剃毛に諦観する	鈴木千鶴子	強制浣腸のあと	前田真知子
逆さに吊られた麗人・緊縛	前田真知子	感を味わうひととき・白い	高村 浩子	肌はあくまで白い	絹川 文代
縛られた女	高村 浩子	人間馬の調教	逸毛恵須子	碧眼紅毛を縛る	小池 美喜
あどけなき乙女(二態)	小池 美喜	猿ぐつわと瞳	左近麻里子	イメージギャラリー	「棲息場所を吐けッ!」マエダヒオ
ミ(35)	「浣腸器の生贄」四馬孝(37)	「献灯の儀」	須坂旭(41)	「可愛い理解者」志羽利也(53)	「陽の
差しこむ時間」原由貴子(57)	「玩弄を待つ女たち」マ	エダヒオミ(61)	「ある実験」四馬孝(67)	「ムシ寄	せの芳香」小川茂正(77)
「乙女の妄想」須坂旭(92)	「休憩」三鷹I・O(132)	「雨乞いの儀式」春川ナミ	オ(152)	「不老の秘訣」岡たかし(157)	「諦観促進療
法」四馬孝(201)	「実験用生物」マエダヒオミ(206)	「帳の中の悦楽」岡たかし(230)	前田真知子・深田 菊子	目次フォト	

ある観念的	△覗くものと覗かれるもの△との関係	吉田 和男	(212)
美貌のサジスチン春日ルミの手記	『昼は紳士で夜は奴隷』	春日 ルミ	(216)
江戸残酷帳	凶盗気違い伝鬼	白鳥 大造	(224)
読者通信	編集部選		(266)

## 奇クサロン (236)

恋人とのプレイ・レポート	山田 一作	プレイ随想	お処刑申渡し	早木 夢二
プールに関する提言	野村多津男	「野外で放尿させる」	T・T生	
イメーシ画「海の収獲」	小川 茂正	千恵さんと 自転車あそび	秋野 美水	
拝啓、編集長殿	青木 順一	マゾ牝のうた「お客接待」	北川 まりこ	
小池明男氏に答えて	最上 卓也	夫婦交換プレイの妙味	八田 輝雄	
裕子の乳房とプレイ	加納 操	乗馬女性 ゴダイバ夫人	佐野 寿	
「獣交姫」二美人に想う	高橋千寿代	編集者に物申す	山田 一郎	
奴隷光林裕二への命令	原 由貴子	絹川文代の再活躍を乞う	清瀬 不老	
イメージ画「あて替え」	山田 裕治	編集部だより	編 集 部	
おしめカパーの合法性	博多 弘	満員電車通勤もまた楽し	神田 浣吉	
ブルマー狂 灰色とバラ色	舟橋 一郎	滋養浣腸と排便浣腸	石黒 貫二	
甲斐千恵子様の提唱に答えて		女の足の魅力	村井 文彦	
我が青春の思い出		論評 浣腸セックス論	里見 昭夫	
千恵子の後の成長	甲斐千恵子	お灸メイトを「私とお灸」	佐々木 昭夫	







貞操帶装着図



安井喜久子

浣腸愛好の女



福井兆子





観念した晒す女体

西条紀代



ボリュームの開股縛

笠井奈保子

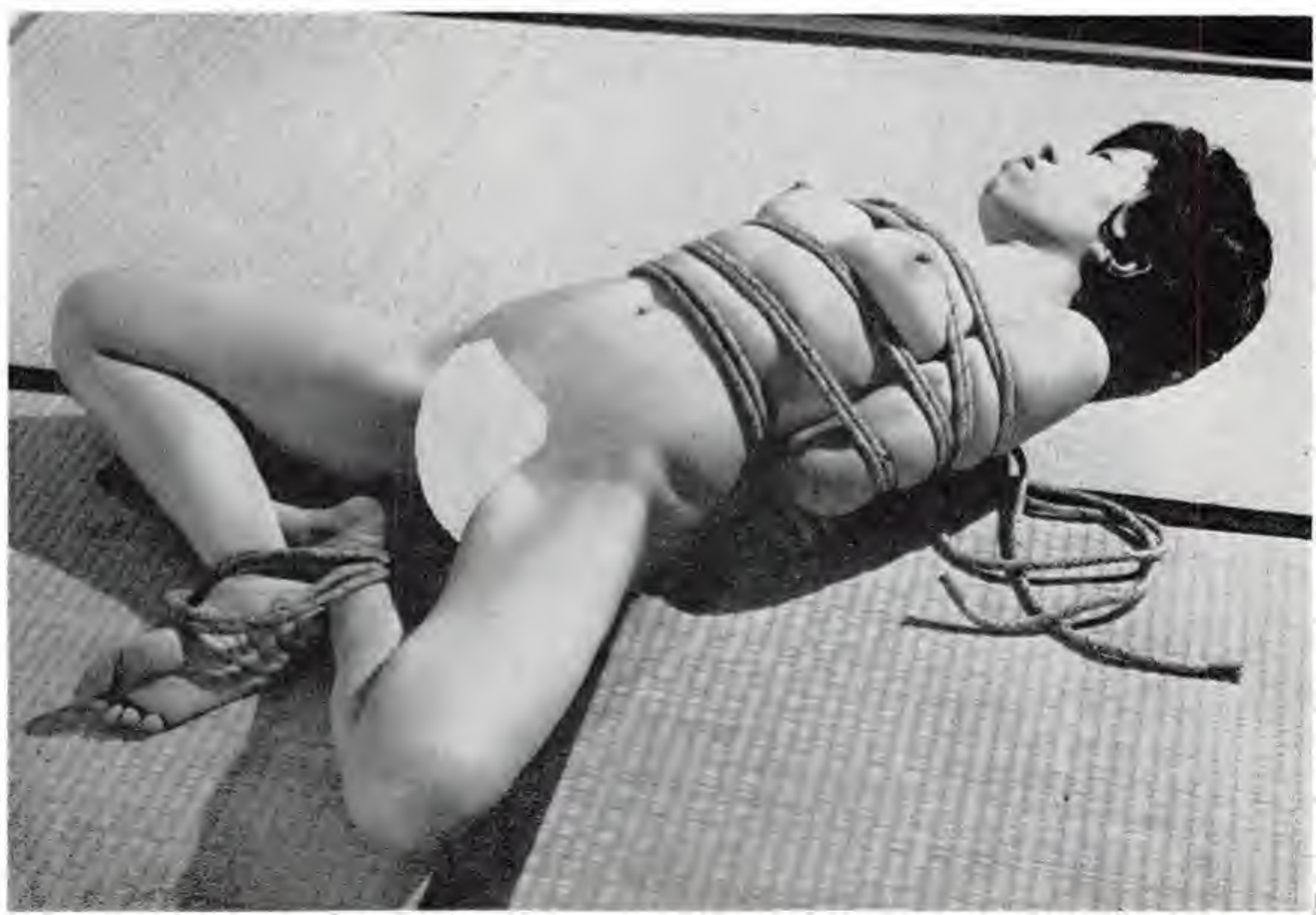




出産十日前のプレイ

南 加津子

開脚という奇妙な責



松本たえ





見る人の目に晒す裸身

鏡に映った緊縛女体

深田 菊子



マゾ女好みの縛り方

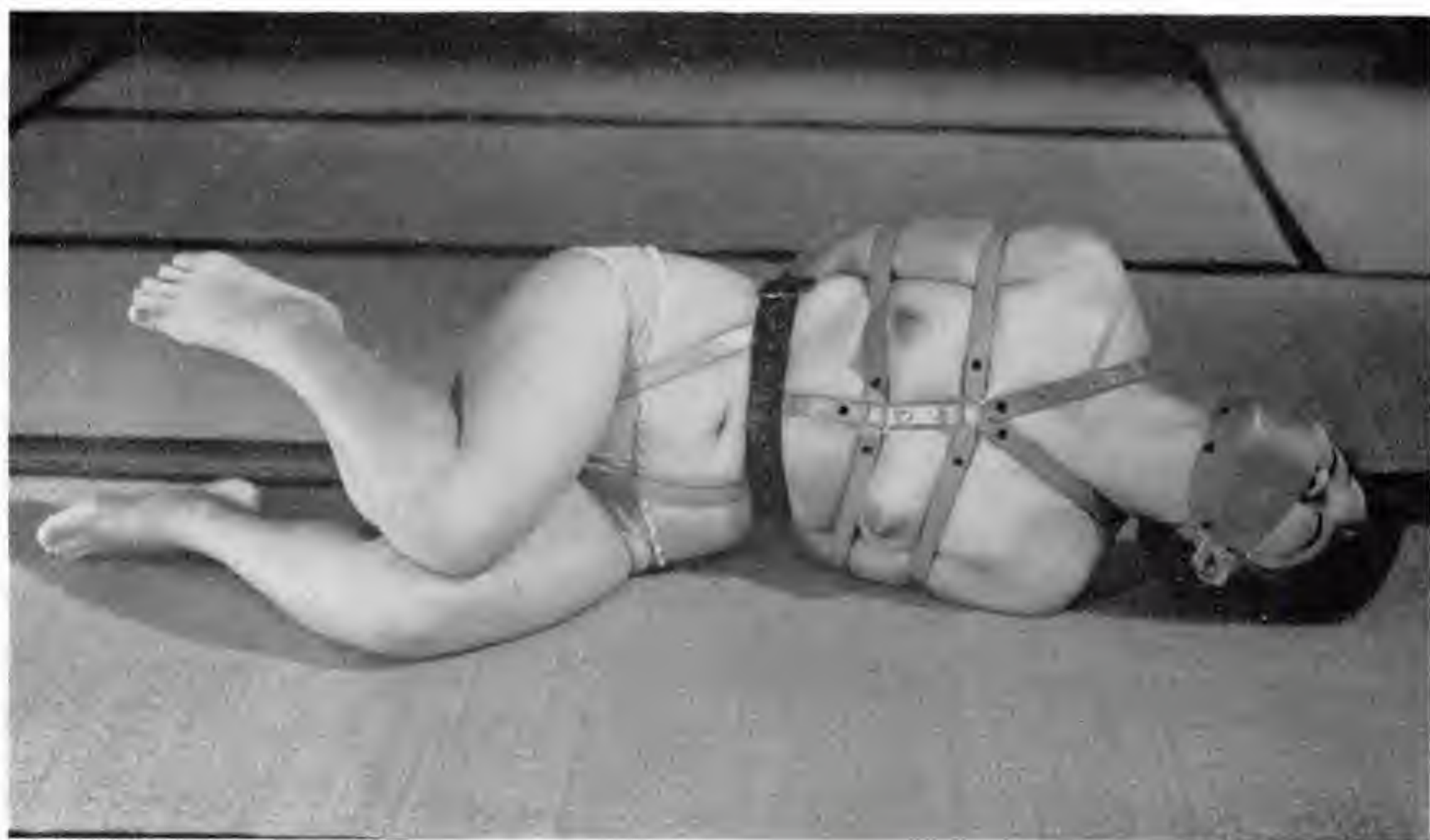


西条 紀代

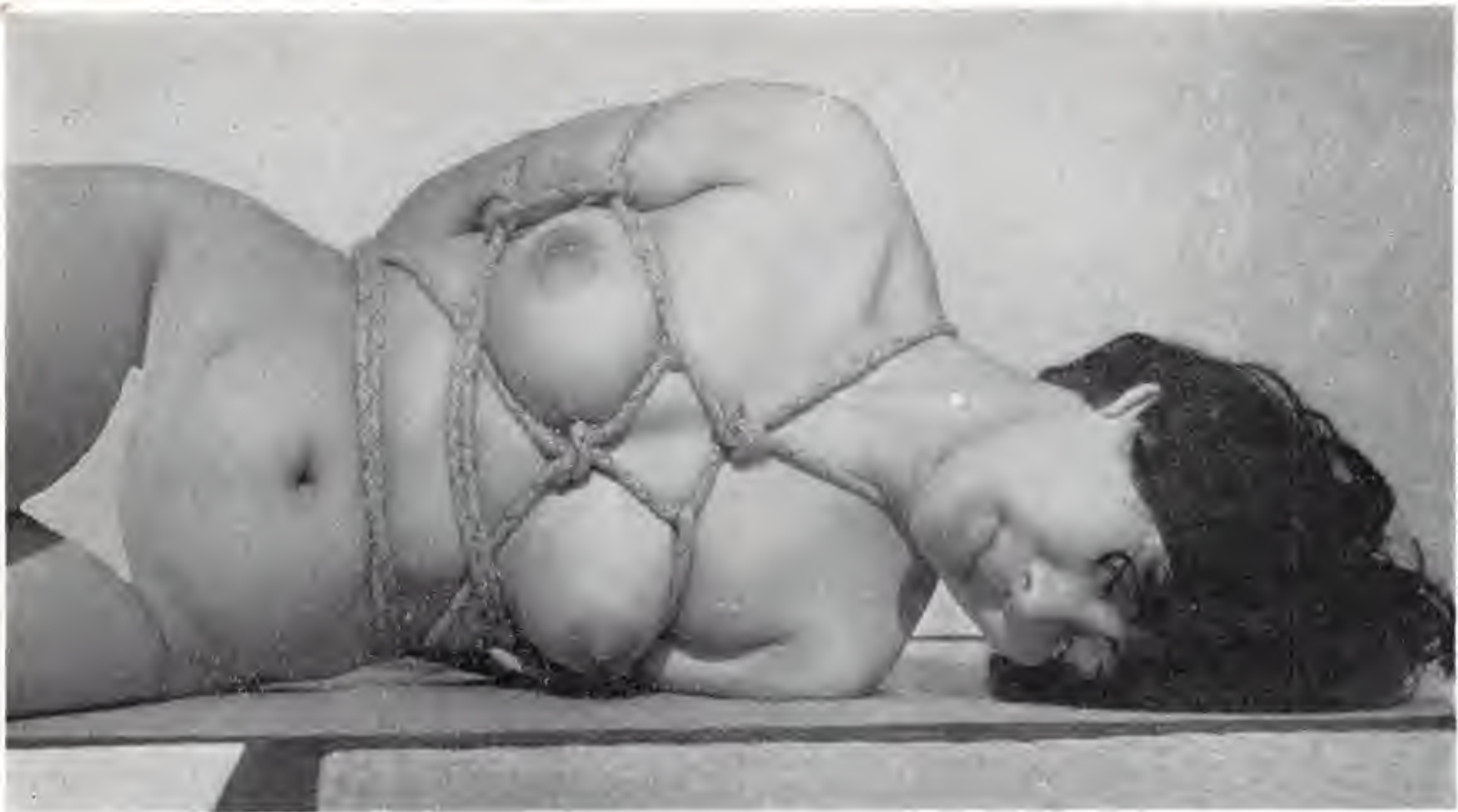


革具の猿轡と拘束

大塚啓子







荒尾慶子

剃毛に諦観する



安井喜久子

股間縛りで悶える

強制浣腸のあと



鈴木千鶴子



深田 菊子



牝猫のような眼



安井 喜久子

身体検査のポーズ



南 加津子

華やかな脚線美





逆さに吊られた麗人

前田 真知子

緊縛感を味わうひととき



白い肌はあくまで白い







福井桃子



高村浩子



深田菊子

縛られた女三様三態

縄目の悦楽に酔う



笠井奈保子



〔M  
フ  
オ  
ト  
・  
セ  
ク  
シ  
ヨ  
ン〕

絹  
川  
文  
代



人  
間  
馬  
の  
調  
教

臀  
臭  
を  
嗅  
が  
す



逸  
毛  
恵  
須  
子



碧  
眼  
紅  
毛  
を  
縛  
る

シーラ・ケニー



太 鼓 腹 緊 縛 記

南 加 津 子





臨月妊婦の縄目

南 加津子



あどけなき乙女

小池美喜







瞳とわつぐ猿



奇

譚

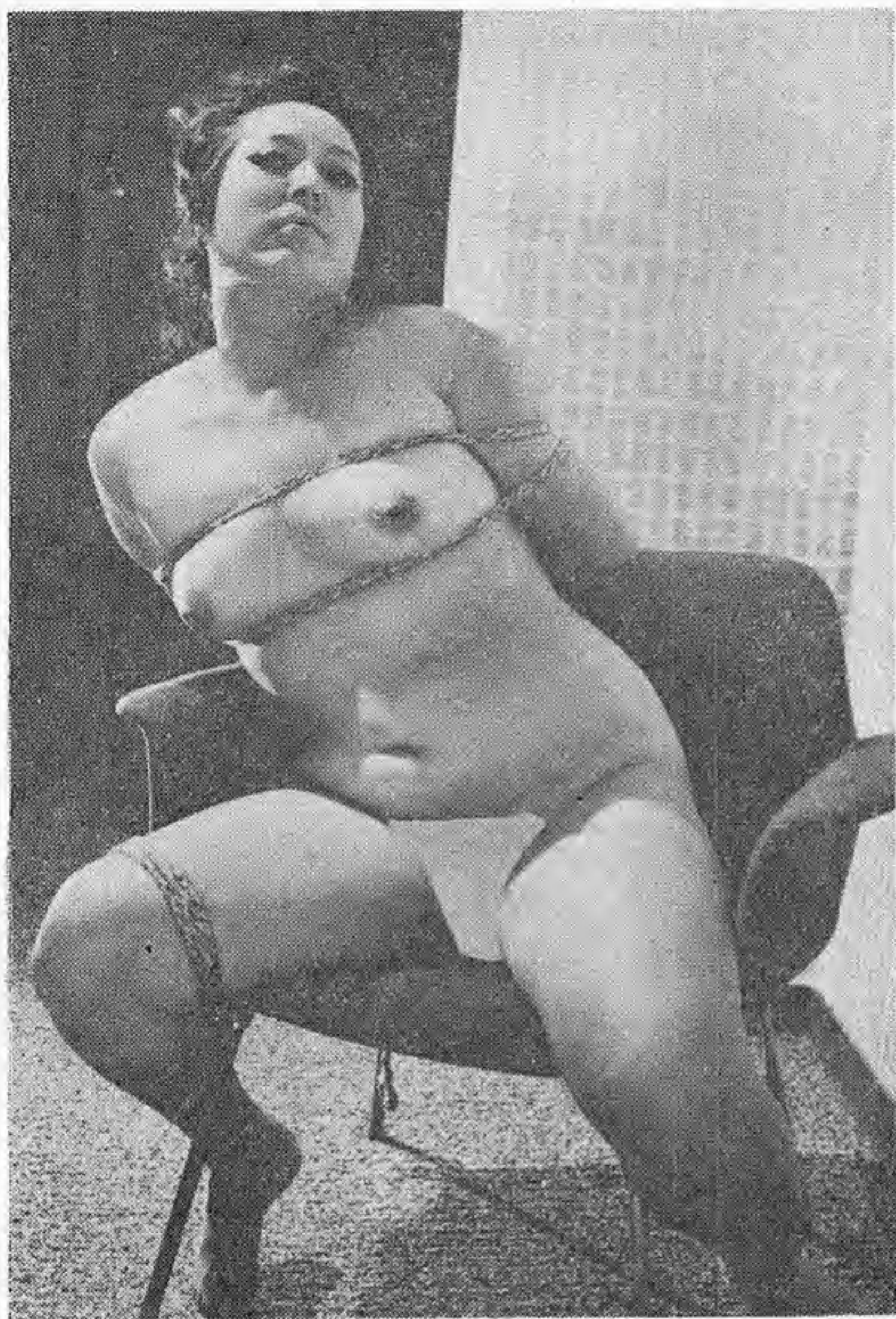
ク

ラ

ブ

昭和四十八年十一月号

第二十七卷 第十一号  
通刊 第三〇九号



### 豊満のキミに捧げる詩

……………モデル…座間明子……………

白く輝く豊かな裸身は、縄をはじきかえすような弾力性を帯びている。

七十四キロのポリウムから発散するエキゾチックで脂ぎった女体は、とても素直に剃毛の儀式を受けた女性とも思えない逞しい魅力に満ち溢れている。

私は貧弱な女体に縄を掛けるのは、どうしても性に合わない。キミのような健康美溢れる女体に、思いきり緊縛をし、更に浣腸とかA責め、その他あらゆる羞恥責めを加えたいと願っている。キミは私にとっては理想的な責めの対象であって、私は今までにキミほどの女性に出会ったことはない。

(村尾加根夫・記)



# 私達夫婦の

## プレイ旅行の記録

早坂郁子



男性的な雲の峯があらわれ、酷暑身をやくように覚える、今日この頃、編集部の皆様方を始め、SM同好家の皆様方には、お元気にお過ごしのことと存じ上げます。

私が、昨年の十一月号に、始めて主人に勧められ、奇クにあの、つたない「愛と倒錯の記録」と題した告白文と、主人の撮った、あられもない羞かしいフォトを、掲載させて頂いてから、早くも、もう一年近くにもなりました。

その間、主人から「お前も、何か書いて送ったらどうだ」と、しきりにすすめられたのですが、何かと忙しく家事に追われ、まして文筆にうとい私にとっては、とても無理なことでございました。

ところが、主人が五月中頃から平素、悪かった肝臓をこじらせ、一と月ばかり、入院を余儀なくされましたので、家のことを親戚の



人に頼みまして、主人に付き添うかたわら、また、つたない文章ですが、主人の助けを借りて、綴らせて頂きました。

思えば、主人と結ばれた頃の遠い昔、始めて奇クを読み、緊縛という生まれて始めての経験に、一抹の不安と、主人の性癖に疑いを抱きましたが、それが、いつのまにか無意識のうちに、主人の手によって、きびしく縛りつけられることを待ち望んでいる、自分自身を知ったのでした。

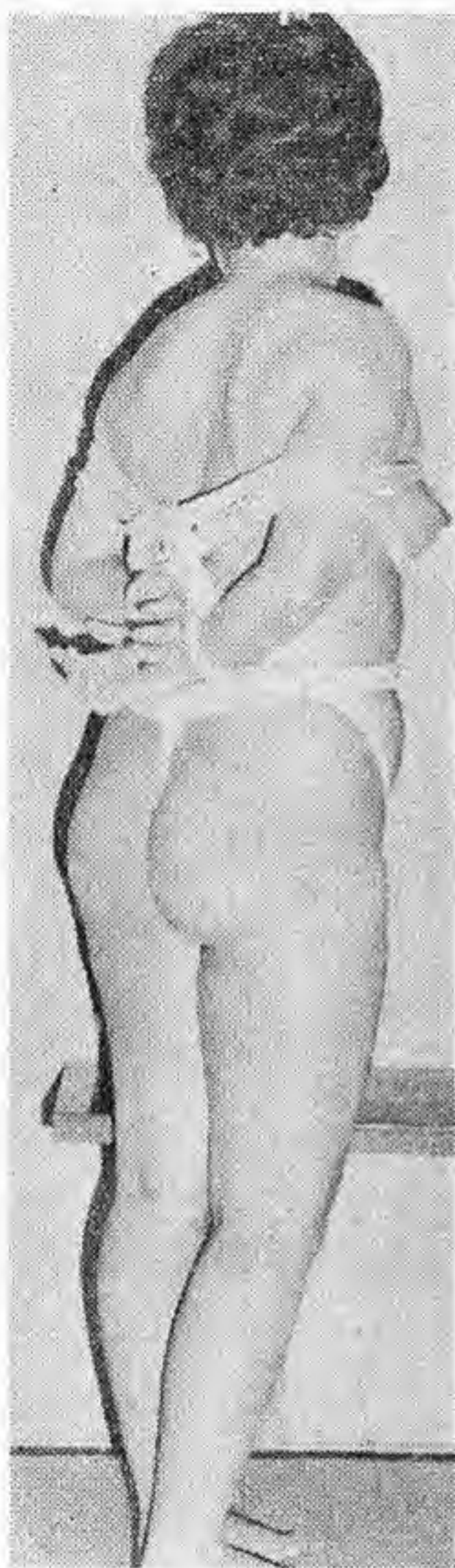
そして今では、到底、私から切りはなすことのできなくなってしまった、この被虐の欲びは、主人のS性が強ければ強いほど、その羞かしめを望み、責めを求める、マゾ女になってしまいました。

SMを、夫婦の中にとり入れ、それが夫婦和合の極と信じながら、私を、より強いマゾ

女に育てようとしていた主人が、知らず知らずの間にマンネリ化に閉ざされ、より新しい刺激を求めたいばかりに、それを奇クに訴え続け、やっと、同好者ご夫婦の交流を得ることが出来ました。

私達の間に新しく芽生えた、SMによる夫婦交換プ

レーの、実現への可能性を含んだ、新しい刺激の欲びは、ここに「私が、主人の見ている前で、S性に強い旦那様から責めを受け、羞



かしい格好をさせられながら、悦虐の欲びにすべてを投げ出し、それを見つめながら主人も、M性の奥様を激しく責める」と言った想像を、口にするだけで、私達のプレイに新鮮な欲びが湧きあがりました。

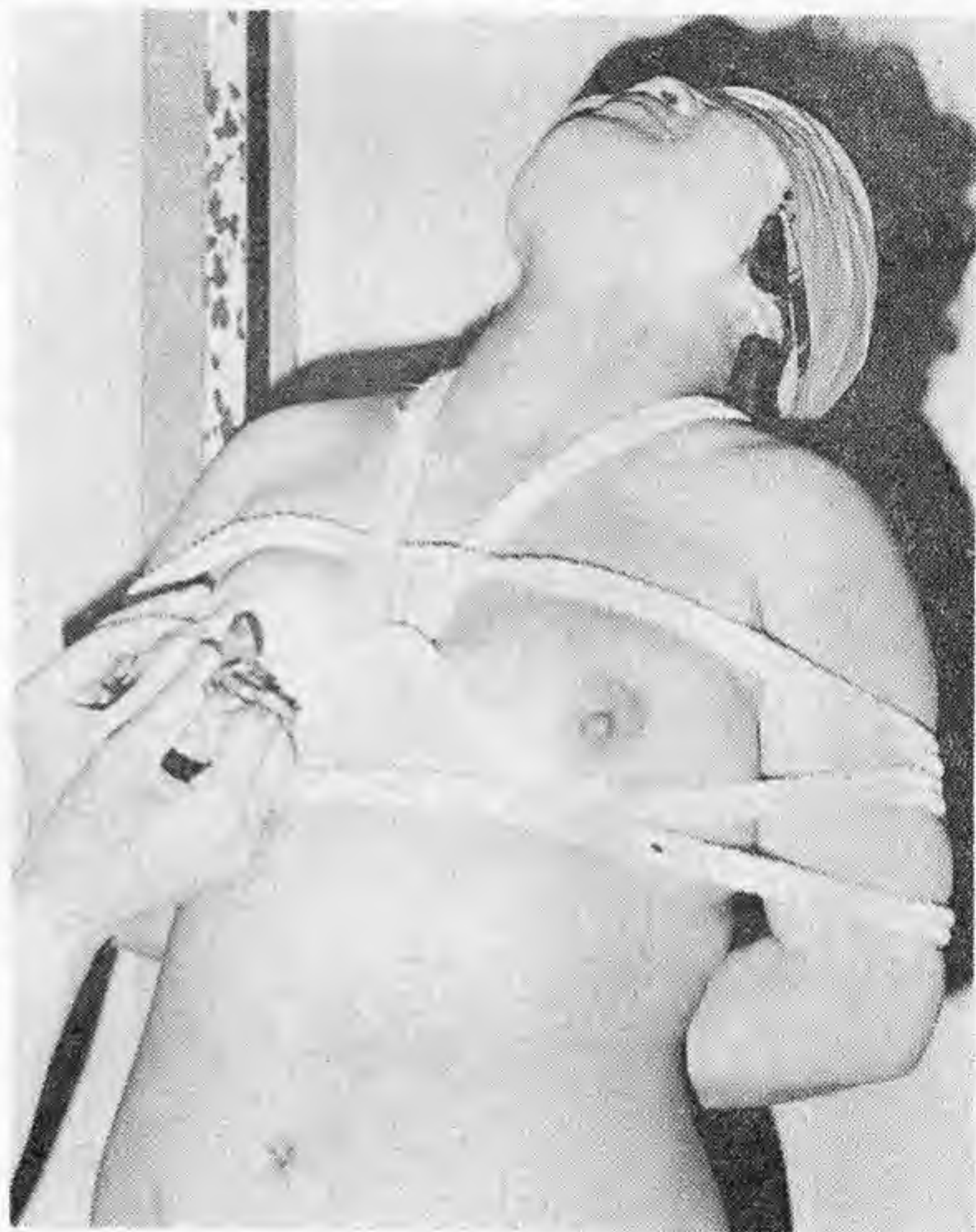
また、主人は、ご交流を得た、相手の旦那様に充分、満足して頂く為にと、特訓プレイの仕置場をしつらえ、そこに私を引き据え、激しいほど燃え上がったS性を、むき出してより強いマゾ女に成長させようと、特訓プレイを始めたのでした。



その特訓プレイの成果は、私自身、驚くほどの被虐に強い女に育てられ、その悦虐の欲びも、一しお、昂まったようでした。

これほどまで、SM夫婦交換プレイを、夢に画き、その目的の為に、特訓プレイを、私に強いた主人の願望は未だに、満たしてあげることができません。やはり、夫婦が、交換し合ってSMプレイを求める場合、私も勿論のことですが、先方様にとっても、お互いの

夫婦の、人間的な結びつきの積み重ね、そして、そこから生まれる絶対的な信頼感が、必要とされるのではないでしょうか。それらが充分に整われた上で、自然的に、実現に移行されると思われるのですが、主人にとってはその人間性や、信頼性を必要とする交換プレイに、不可能でなくても、未だ、かなりの時



間を要することに、焦りか、マンネリ化を感じ始めていたようでした。

この主人の、焦りともマンネリとも知れない様子は、その頃から、夫婦プレイの中で現われ始め、週に一度、責めを受ける私に、きまったように、「期待薄な夫婦交換プレイより、俺が連れてくるサド氏に責めて貰え」と

か、手にした大きなバイブレーターで執拗なほど責めながら「俺の連れてくるサド氏に、こうしてもらったら気分はどうだ」とか、口にしながら私に返事を促すのでした。

しかし、こればかりは、いくら主人が焦りを感じ、マンネリ化から逃れたいからといって、それが平等的な立場で行われる、夫婦交換プレイならば、まだしも、私も心から協力させて頂けますが、ただたんに、性に強い男の方を私に当てがい、それがセックスにまで結びついた結果若し、今の幸せな家庭が、毀れるようなことにでもなれば、と考えるとその不安と恥かしさに、ぎりぎりとうかがわれた身体をゆすって拒んでしまふのです。

長い間にかけて、こうまで主人に飼育された、マゾ女の、その悲しい性とも申しましようか。乳首を引きちぎられるようなクリップの痛さ、臀部に深く突き刺さる投げ針のしびれるよううずき、そしてポトポトと垂らされるローソクの雫の熱さ。これらが全て私には心地よい刺激となって、次第に、つき上



ってくる、悦虐の欲びの中で、ふと「若しこんなことを、主人以外の方から受けたら、どうなるだろう」という思いが頭をかすめると、思わず「モット強く」と、きつい責めを求めてしまい、主人も驚くほど、一きわ大きく、悦虐の咽び声をあげるようになるでしょう。

それにしても、こうまで、私の、心の奥に潜んでいたマゾ性を、根こそぎ引き出し、苛められ、羞かしめられて、始めて、激しい肉体の欲びを覚えることのできる、今日の、マゾ女郁子に成長させられた自分を、ときどき、ふと、恐ろしく思うこともあります。決して後悔したり、悲しく思ったりしたことはありません。

また、女として生まれた以上、肉体の欲びは、殊更、求めたいものです。それも人さまざま、求め方はみな違うと思われませんが、私の場合、こうまで激しく、肉体の欲びを感じることのできるマゾ女に育てて頂いた主人には、心から感謝すると共に、私のマゾ性が強くなればなるほど喜ぶ主人の姿を見ていると「もっと、満足して頂けるマゾ女になってあ



げれたら」と、ふと、考えると、なんとか主人の欲求は叶えてあげたい、心からの満足をさせてあげたいと、気持が移っていく自分に気付き始めました。

その後、心配したこともなく、主人の病気も良くなり、六月中頃、元気になって退院することができました。

それから数日後、元気になった主人が、急に旅行に行こうと言い出し、三泊四日の予定

で、和歌山の方へ出かけました。

久しぶりの二人切りの旅行で、しばらく遠ざかっていたプレイを大いに楽しもうとする主人の車のトランクには、いろいろな責め道具が、一番最初に積み込まれたことは申すまでもありません。

その日は、南紀白浜に宿をとりましたが、夕食のあと、女中さんが膳を引き上げるのを待ちかねるようにな

いた主人から、激しい責めを受けました。プレイの様子は、私が今ここで、拙い筆で細々と、ご説明させて頂くより、このお便りとご一緒に送らせて頂きました、あられもない姿のフォトで、ご推察頂ければ結構かと存じ上げます。

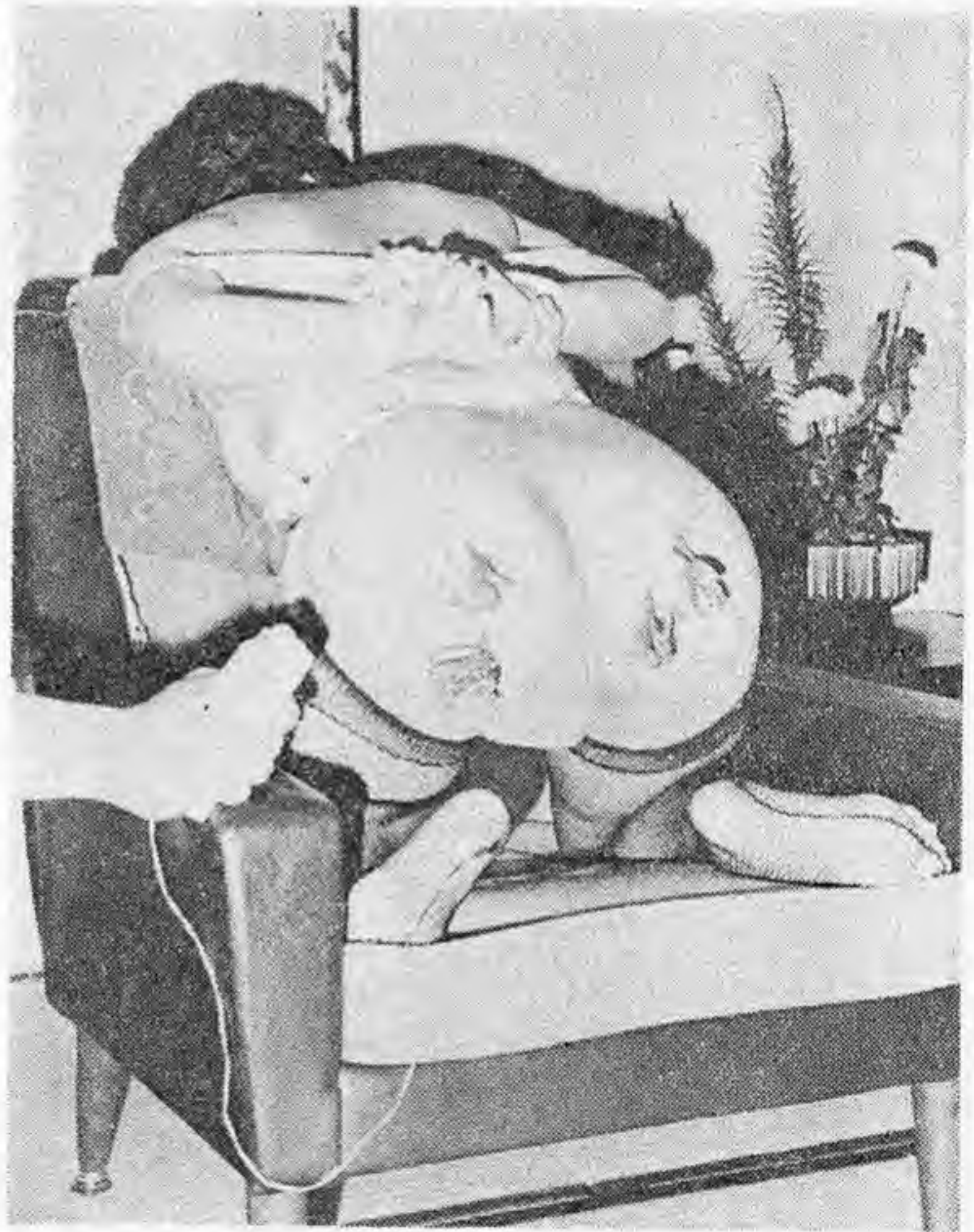
これまで主人が、夫婦交換プレイの実現を夢に画き、その刺激に嗜虐の血をたぎらせ、希求し続けてきたにもかかわらず、その機会



に、恵まれない焦りと、再び、頭の中に巣作ったマンネリ化に、いらだち始めた主人は、今度のこの旅行ではっきりと、私の口から、「貴方以外の方から、責めて頂きます」と、いうことを、確約させようと思っていたのでしよう。

その夜の激しい責めに、すっかり翻弄され、恍惚として余韻をむさぼる私に、しつこく「俺以外の男性にお前を責めさすぞ」と、何度も何度も、促す主人の言葉に、気の遠くなるような陶酔に包まれた、うつろな頭の中から、遂に「あなたさえよければ」と、口走ったのですが、それが早くも、その翌日、私の承諾を裏書きするような破目になってしまいました。

私達は翌朝、白浜を見物した後、次の旅行先、竜神温泉に向かったのですが、車の中でしきりに「竜神温泉に着いたら、絶対、俺の命じる通りにするんだぞ」と、何度となく念



を押す主人に「はい、はい」と、答えていたものの、いったい、どんなことを命じられるのか、気にはなりましたが、まさか、こんな恥かしい目に合わされるとは、夢にも思いませんでした。

私達は、まだ日も明るい四時近く、竜神の宿に着くと、主人は、早速、浴衣に着かえた

私を、河原の小さな露天風呂に連れて行きました。その河原の浴場には、すでに数人の男の方ばかりが入浴しておりその方達に交じって混浴しろと言いついたのでした。

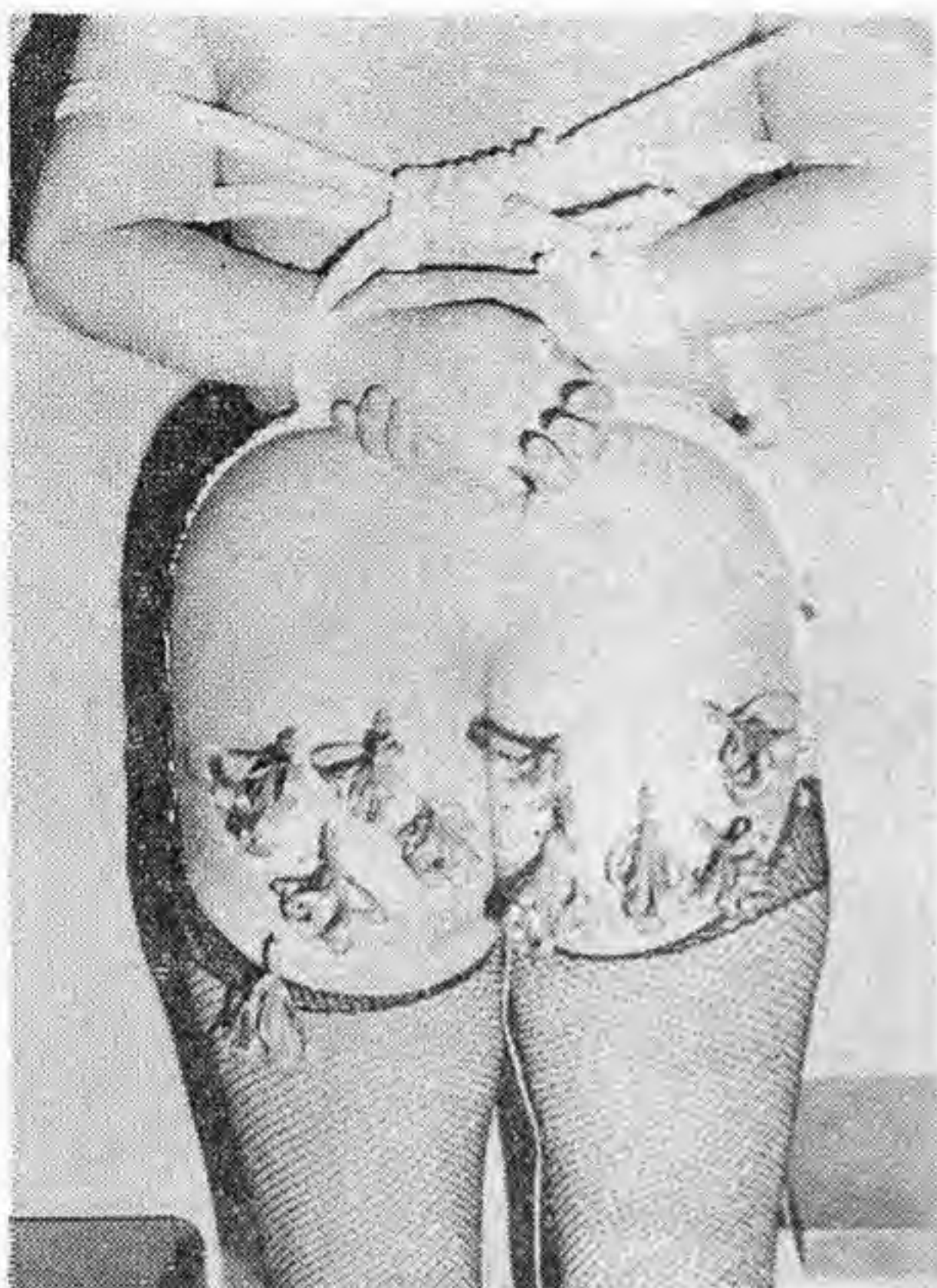
私も、決して若くはありませんが、やはり女です。それも夜間か、他に女性でもはいっていられば、たいして恥かしくもないでしょうが、それが、白昼、まして男の方ばかりが入浴しているところへ混浴しろと、命じられても、「はい」と、素直に入浴できるわけがありません。

ただ、恥かしさにためらっていたのですが、しきりに目を交ぜで、私に入浴を促す主人を見ていると、こうまでして、自分の欲望を満たそうとしている、その気持を考え浮かべて、これも飼育された、マゾ女の宿命とでも言うのかも知れないと、知らず知らず紐をとき、浴衣を脱いで、男の方達の興味の目に、全裸姿を晒しながら、静かに湯にひたっていました。



しかし、このようなことで主人の欲望は、満足して許すはずはありませんでした。案の定、しばらくして風呂から上った主人は、小さくなって入浴している私に、背中を流すよう命じたのでした。

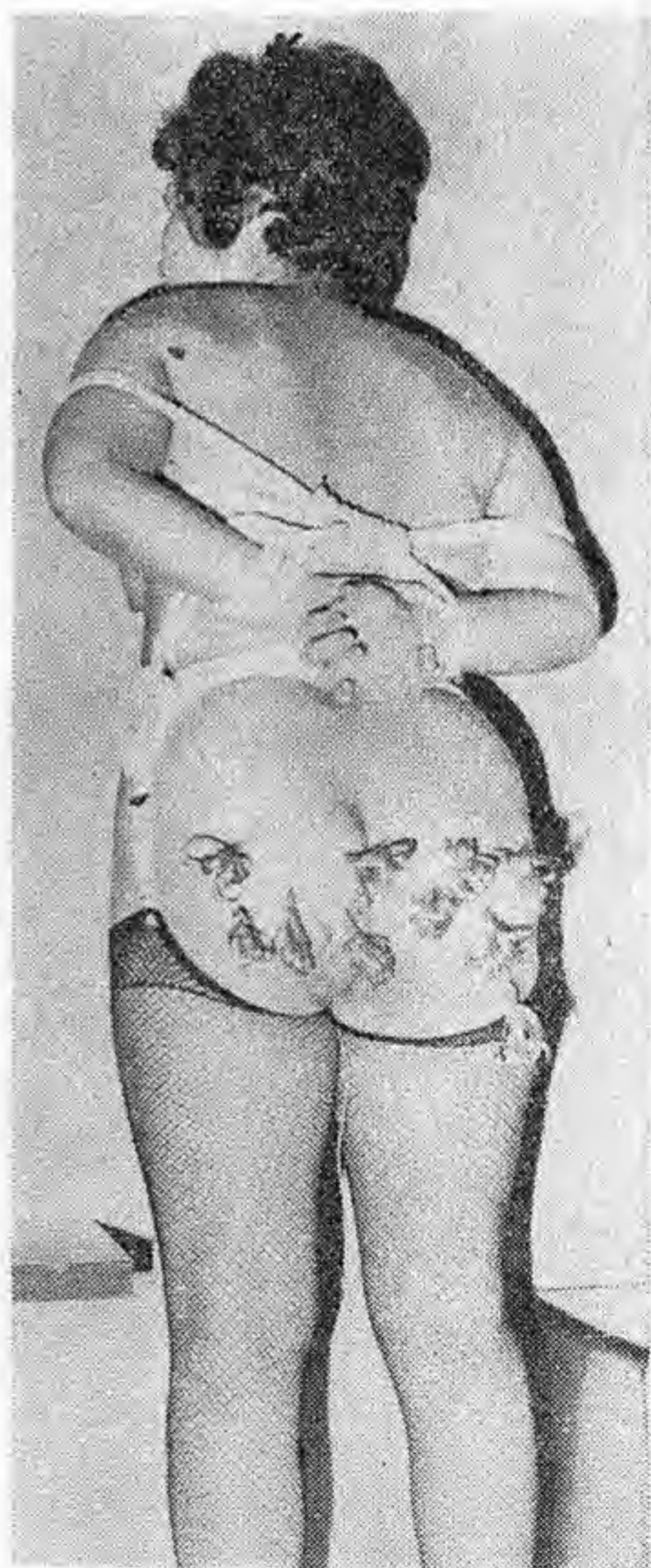
そのときの私の、驚いたあわてようは、ますます、周囲の方達に興味の目を向けさせたようでした。この主人の要求を、人前ではっきり「イヤです」と言われず、ただ、許しを乞う表情を顔一ぱい現わして拒むのですが主人はそれを無視するように「早く」と、た



だ一言、そ知らぬ顔で言うのでした。

しょうことなしに、

タオルと石鹸を手にして、主人の背中にまわった私に、河原を照らす西日の明るい日ざしは、まるで、照明ライトのようにまぶしく私を照らし、浴場の測に作られた洗い場は、私に舞台を思わせ、そこで主人の背中を流す私の裸姿は、丁度、スト



リップショーを演じているように、その周囲の男の方達には、見えたのではなかったでしょうが。

灼きつくようにそそがれる、その方達の熱い瞳を痛いほど肌を感じ、言い現わしようのない恥かしさの中で、いつしか私自身、一種の羞恥責めにも似た被虐感を覚えると、なんとも言えない妖しい欲情に、身体が熱くほてるのを感じていきました。

勿論、その夜も、主人から責めを受けたことは申すまでもありません。ほんの数時間前の、あの恥かしかった露天風呂のことが思い浮かぶ、熱くほてった身体に容赦なく加えられる激しい責めは、いつもに増して速く悦虐



の欲びが身体に燃え始め、それについて幾度も「俺以外の男性に責めて貰いたい。責めて欲しいと言うんだ」の、主人の言葉に「あなた以外の方に責めて頂きます。苛めて欲しいんです」と、悦虐の欲びに激しく身体をうちふるわせながら答える声を、約束したぞとばかり、主人は、それをテープに録音するのでした。

旅行の最終日は、主人の病氣平癒の御礼に高野山へ詣りました。

楽しかったプレイ旅行を語らいながら高野山で一泊して旅行を終え、私は再び、平凡な家庭の主婦に戻りました。

あの旅行以来、家事に追われる私に、ふと主人が近づいてきては「今に素晴らしいS男子を連れてくるよ」とか「郁子、もう充分覚悟はできてるだろうな」と、なぞめいた言葉を口にしたり、急に思い出したように、これまでのプレイフォットの整理を始める主人の様子から察しますと、あの日、テープにとった私との約束を、ほんとうに実行する気ではないでしょうか。

しかし、こうまでマゾ性の強い女に飼育された、今の私には、これから先、どんなことを主人が要求しようと、驚いたり、拒んだり



は、いたさなつもりです。ただ、私にとってS性に強い主人の、あったかい愛にさえ包まれていれば、それがすべて、私の生き甲斐と申し上げても、決して、嘘、偽りではありません。

いま私は、とてもつらい飼育を受けています。それは乳首に穴を開け、金環を取りつけられようとしています。これまでに、羞かしところは、すでに小さな穴を開けられた経験はあるのですが、乳首を注射針で突き通す





痛みは、とても苦しいものです。しかし、薬品まで買いそろえ、なんとしても、私の乳房に吊された鈴の音を聞きながら、プレーをしたいと願っている主人を見ると、辛抱し

てあげねばと思っています。

吊したマゾ女の姿が、主人によって報告されるところと思われますが、こうまでされても愛する主人の、より強いS性を願い、より激しい責めを求める、はしたないマゾ女の性を、お笑

いください。

に、私は、こんなにまで被虐性の強い女となつてしまいました。そのことに関しては、少しも後悔など、いたしておりません。むしろ、ここまで育てて頂いた主人に感謝しこそすれ、恨みがましい気持など、一切、持ち合わせておりません。

主人の手によって加えられるいろいろの苦痛がすべて快楽に変わる、といえは嘘になるでしょうが、私には、それが主人の求めるプレーであると思ひますと、苦痛は苦痛であつても、なにか甘さがしみ出してくるような、なんともしいい表わしようのない不思議な苦痛にすり替わつて感じられる、ということだけは云い切れると思ひます。

こんな、私達夫婦のプレーは、これから先どのようなエスカレートするのか知れませんが、ただ一言、言えることは、正常な夫婦から見れば、気違い沙汰と思われる、こんな行為の中で、誰にも負けない、本当に美しい夫婦愛があることを、信じて頂きとうございます。

私も、これを機会に、同好者の皆様と広く文通などを通して、親しくお友達になつて頂きたく思っております。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。



白

わらなわ  
蔓繩の匂いの懐かしさ

—「女の縛り」に憑かれた男—

&lt;告

安

井

靖

二

いつの頃から、縄にとりつかれたのか、私は知らない。物心ついた頃には、すでに縄に興味を持っていたのだから、生れつきかもしれない。血のつながっている人を、それとなく気をつけてみたが似た人はだれもない。もともと、樂觀的な性格か、この性癖を不思議にこそ思え、悩みなどはしなかった。

本屋で縛られた女性の姿態が載っている本をみつけ、他の雑誌を見るふりをしては、パラパラと盗み見るのが楽しみとなり、それが奇クとの出会いだった。

小学校三年生になった時、悠子というママゴト遊びの友達が出来た。

その子と人目のつかない納屋や林の中で遊ぶ時は、必ず「縛り」をともなった。「お医者さんごっこ」と違って、性器には触れるようなことはなく、ただ縛るだけで、私達は、「縛りあいごっこ」と称していた。

ある日、納屋で、いつものように、ひろげた庭に、荒縄でうしろ手にくくった悠子をやらせ、私は欠け茶碗で、庭の鶏頭の花を御飯がわりに食べさせるような真似をしていたとき、突然、戸が開いて母がのぞいた。

驚愕のあまり、箸をもったまま硬直してしまったが、なにせ電機器具の整備してない時代のことで、母は朝から晩まで、忙しく働きづくめだった。そのときも箸をとるなりすぐに出ていった。明るい所から急に暗い所に入ったせいか、縛っていたのに気づかれなかったのは、私にとっては幸いだった。

悠子は、田舎にしては色白の、やさしい子で、縛っても、いやな顔ひとつせず、私にとっては天使のような存在だった。

その頃、私の家では、蔓繩の間屋のようなことを片手間にやっていた。農閑期を利用して副業として、一台か二台の製縄機で、縄を

なうことが農家で流行していたが、そんな蔓繩を私の家では現金で購入して、まとめて街の包装業者へ捌くのだ。それで、家の周囲の倉庫は勿論、庭にある納屋にまで、蔓繩の玉が、いつも、いっぱい詰まっていた。

私と悠子は、放課後になると、縁側へ鞆をほうりだしておいて、いつも、納屋のなかで遊んだ。カクレンボをするのには、かくれるところが沢山あって、面白かった。

一度、悠子の靴が、積んである蔓繩の玉の間に落ちてしまつて、取れなくて困ったことがあった。子供の力では、二十キロも三十キロもある蔓繩の束を、動かすことなど、とても出来ず、泣きべそをかく悠子を前にして、私も泣きたいぐらいだったが、井戸に落ちた釣籠を拾うイカリを持ってきて、靴を釣り上げたときは、ほっとしたものだ。

新しい縄の玉は、ぶんぶんと蔓繩の匂いを、させていた。私は、その蔓繩の匂いを悠子の体臭のように考えて愛していた。

倉庫に縄の玉が詰まったとき、それは天井近くまで積まれていた。縄の山をよじ登って天井近くのすき間へもぐり込むときの気持はなんととも言えなかった。

そこは下からは、絶対に見られることのない二人きりの別天地であった。私は携えてき



た縄のきれはしで、悠子を、うしろ手に縛った。悠子は素直に、縛られていった。

五年生の冬、悠子は、肺炎にかかって、あっけなく他界してしまった。私は掌中の珠を奪われてしまったような悲しみに泣いた。

私は生れて初めて、人の世の無情と悲しさというものを味わった。

彼女のような子は、二度とみつからなかったが、縄の魅力は、すてがたく、いつしか、自縛へと移っていった。

納屋の中で縄一つになり、荒縄をぎっしりからだに巻きつけ、梁からつるした丸い縄の輪に、うしろ手をこじ入れ、首の方に、ぐいとあげて横たわった。

そこかしこの破れ穴からさし込む光が、肌の上に縞を作り、身もだえすると、舞いあがる塵が、光線に浮きあがり、キラキラと、生物のように、うごめいた。

ふんと、稲藁の匂いが鼻先におってくる、私は悠子のことを思い出して、胸がしめつけられるような気持ちに襲われるのだった。

悠子が亡き今、股間を縛るが、からだを縄がきっちり締めあげ、微や埃の舞いあがる納屋のなかで、薬縄の匂いに包まれて、ひんやりとした床にこらがっていると、無上のしあわせを感じるのだった。

中学になって間もなく、家族の留守に、自分の部屋で裸になり、水泳用の縄のままで自縛し、ごろごろと、畳の上をころがっている。と射精をした。これが自慰を覚えたきっかけになった。

自慰を知ったことと、女性との交際ははじまったことで、いつしか、自縛の行為とも遠ざかり、たまに思い出す程度で、高校、大学へと進んでいった。

相手がみつからぬまま、くすぶらせていた「女体緊縛」の炎を再び燃えあがらせたのははからずも、書店で手にした「奇譚クラブ」という月刊雑誌だった。

この異色ある雑誌は、私の心情にぴったりで、以来、毎月欠かさず手にしたものだ。

最近に至り、SMブームとかが起こり、私などは、隠花植物が、いきなり強烈な陽光を当てられたようで、とまどいを感じながらもつきあっていった女性に、「縛り」をこころみてみたりした。

しかし、はじめの人は、その気が少しもないらしく、うしろ手に簡単に縛っただけなのに、「ほどいて、ほどいて」とあばれたのであきらめざるを得なかった。

次の人には、時間をかけてつきあい、ある夜、絶対に灯をつけない約束で、股縄にして

ころがした。窓をあけると、月光が女体を浮かびあがらせ、その美しさに、ため息をついて、みとれてしまった。

この人なら、生涯の伴侶にしても、と喜んだのも束の間、縄をとき、灯をつけてみた彼女の顔には、侮蔑の表情が、ありありとうかがわれた。

この女性の機嫌のよいときに縛ったり、写真をとったりしたが、しょせんマゾの気は、さらさらなく、いつしか別れてしまった。意気込んだ私の女性に対する調教も、はかない夢におわってしまった。

こうして、いつしか三十路に近い年となり現在はガールフレンドもいず、固い職業についていることもあって、表面は至極、まじめに暮している。

思えば、幼き日の悠子の体臭にも似た、あの薬縄のむんむんする匂いが、なつかしく思われてならない。そして、いつか、あらわれるであろう第二の悠子のために、研究したり、環境作りに心がけている。

結婚も勧められるが、SMに理解や興味の無い人と暮すぐらいなら、まだ、奇クを友として、想像の世界にひたるひとときの方が、甘美なように思えてならない。

(おわり)



〔仮面〕に生きる女の思い出

真 ま

昼 ひる

の

客 きやく

比 ひ

叡 えい

風 おろし

カット・須坂 旭



△まえがき△

娼妓「知子」

のこと――

私は、昭和二十九年頃からの奇譚クラブの愛読者です。その頃、私はよく、大阪の松島遊廓へ遊びに行っておりましたが、そこで、一人の女と知り合い、その馴染みとなって、随分、通いました。

その女は、源氏名を「知子」といって、色が白くて

肉感的な肌の持主で、大人しくて、なんでも言うことを聞く、可愛いくて誠実な性格でした。

私は、彼女の身の上話を、登楼のたびに聞かされていましたので、それをもとにして、一篇の小説を書いてみる気になりました。名前や住所は、そのままですが、もう二十年近くも経っていることとて、許して貰えるものと思います。

彼女は売春禁止法の発令で廃業して、他の水商売に入ったと聞いていますが、今、どうしているのか。ただただ、なつかしい気持ちでいっぱいです。



十時すぎに、朝帰りの客を送り出すと、淡い冬の陽ざしが、格子戸越しにさし込んで、知子<sup>とも</sup>の心に、ほのかな暖か味をよみがえらせた。若い知子には、冬の朝の寒気も、さして気にならなかった。

昨夜の客は、寝る前に二度、朝に一度、知子<sup>とも</sup>を辱かしめたほかは、ゆっくり休ませてくれたので、客を送り出すと、すぐ、部屋の掃除をすませ、たまっていた洗濯物を片づけはじめた。

屋根の上に作られた物干し台は、冬の風にさらされて、ブラジャーやネグリジエがはためいていた。知子は、手をかじかませつつ、手早く洗濯物を竿にひろげていった。

この八ミナトVという廊<sup>くろわ</sup>へ来た当初は、この物干台に括りつけられて、折檻されたのも三度や四度ではなかったが、この頃は、それでも、この商売の要領もわかって、余り叱責されることもなかった。

彼女の故郷名古屋は、ここ大阪の松島遊廓の東北の方角にあったが、その空の下も、彼女にとっては安住の地ではなかった。病弱な両親と、腹をすかした弟妹たちが、破れ畳の六帖一間にひしめいている筈だった。

娼婦知子は、名古屋の稲永新田という所か

ら売られてきた女だった。美人というのではなかったが、気立ての優しい二十四才になる味の濃い女であった。

ときに、彼女は自分の境遇を情けなく思い運命を呪うことさえあった。そんな想いにひたっているとき、階下から遣手<sup>やうて</sup>のお種のだみ声が聞こえてきた。

「知子、知子」

「は、はい」

「なにをしてんのや、お客さんやで」

まだ一時になったばかりだというのに。

しかし、昼のお客は大事にしなければ、と言われていた知子は、急いで二階の自分の部屋へ戻ろうとした。

この遊廓は、内部の廊下を道に見立てて、各部屋を一軒の家になぞらえて、部屋の入口は、玄関まがいに、小さな廂<sup>ひさし</sup>がつけられていた。まだ化粧がしてなかった知子は、急いで顔を作ろうと思った。

ところが、部屋の前には、もう、お種と富山<sup>やま</sup>が立っていた。富山は六回ばかり登<sup>あが</sup>ってくられた客である。胸毛の濃い、四十五、六になる筋肉質の男で、一晩中、責めたてて、寝かせないことが多かった。昼間来たのは、今日が初めてであった。

「いらっしやいませ。すみません、お待たせしました。お洗濯してましたので……」

富山は、ニヤニヤとして、女の体を舐めるように凝視している。

「もう、お勘定すましてもろてるさかいに」

お種は事務的に言ってから

「ほな、ごゆっくりと……」

富山の方へ一寸会釈してから、知子へ、頼んだよ——という目付きをすると、ばたばたと草履の音を立てて降りていった。

知子<sup>とも</sup>は、まだ化粧のすんでいない顔を、かくすように伏せて入口の格子戸を開ける。

富山は、わざと反<sup>そ</sup>り身になり、知子のむっちりと、はち切れそうに熟<sup>う</sup>れ上がった臀部を眺めながら、舌なめずりをする。

「どうぞ」

媚びるようにシナを作ると、知子は男の後ろからついて入る。上がり框<sup>かまち</sup>で、スリッパをぬぐと、朱塗りの鏡台と簞笥の置いてある四帖半の控えの間に入る。その奥が、鏡のはめられた六帖の寝室である。

この部屋で、知子は、夜毎、変った男たちから辱かしめられるのである。この二年間というものは、病気で休んだ二、三日を除いては、夜毎日毎、少ないときでも三人から四人



紋日のときなどは、一日に十人以上の男たちを相手にしてきたのである。

富山は、控えの間に入ると、せっかちに、知子を抱きすくめようとした。

「待って、お化粧がまだなの」

「化粧など、どうでもよい！」

「だって、このままの顔では、お見苦しいでしょう？」

「顔なんか、どうでもいい。俺のほしいのはこのむっちりとした体なんだ」

不遠慮に、手を腋の下へまわしてきた。それを、さりげなく巧みにはずして、そむけようとする顔を、大きな掌に挟まれて正面に向けさせられる。

「いやよッ」

なおも避けようとするのを、男は手馴れたしぐさで唇を吸い上げる。

「むっ、うう」

舌まで吸い上げる強引な接吻であった。

どんなに嫌な男でも、逃げるわけにはいかなかった。金で売り買いされる身であつてみれば、ただ、目をつむって、じっと堪えるより仕方のない娼妓なのだった。

まだ入浴していない女の胸元から、昨夜、情を交わした男たちの体臭が漂ってくるよう

に思えると、富山の異常な欲情が、一段とあふられてくるのであった。

剃り落したあとには、細く、くっきりと、眉が引かれてあつたが、しかし、化粧前の女の顔には、まだ目ばりやアイシャドウは、入っていないかった。

無難作に投げだされた足の太股のあたりに、若い女特有の脂肪が、うっすらと陽の当たらない生活をしている女盛りのなまめかしさが、むっと男の鼻についた。

唇がしびれるほど吸い上げてから、男は、ショートスカートを荒々しくまくると、なんのためらいもなく、あつという間にパンティを、ずり下げてしまった。

咄嗟に、しゃがみこもうとする女を、軽々と抱え上げてから、右手を股の間へ挿し入れてこようとする。

「いや、いや、かんにんして……」

両膝を寄せると、男の手はパンティを、あつという間に、はぎとってしまった。

「ああ、あつ、許して……」

パンティを部屋の隅へ投げすてると、強引に知子を畳の上へ押えつけた。

「ねえ、お願い、お床の中で……」

そこまで言ったとき、ヤニ臭い男の、ぶ厚

い唇が、女の唇にかさなってきた。

ねばねばとした脂汗を浮かべた赫ら顔が、大寫しとなって知子の目に入ってきた。男は得意の両所責めを加えた末、立ち上がって、あわててズボンを脱いだ。

観念した知子は、両手で顔をおおって、少しでも、男の視線から逃れようとする。化粧をしていない素顔を見られることは、娼妓にとって、この上ない羞かしさだった。

男は、そんな女の姿を、足の先まで、じろじろと眺めまわしてから、堅く閉ざした両脚に割って入ってきた。



知子が洗滌をすませて戻ってくると、男は奥の間の褥しとねの上に大の字になっていた。

腹の上に寝巻をまるめてのせているだけの全裸である。筋肉質で胸毛が黒々と乳房のまわりから、お臍の近くまで群生していて、脛にも剛毛が密生していた。

そそくさと、知子は鏡台の前に坐ると、化粧を急いだ。客に素顔を見られたくないのである。

彼女にとって、厚い化粧は仮面であった。本当の自分は、この仮面の下に、そっと秘めておきたいのであった。



遣手のお種さんがつけてくれた知子という源氏名とともに、この廓という牢獄の中に於ける仮面にしておきたかった。  
 △知恵子△という本名から、△知△だけをと

って、△知子△という源氏名をつけてもらったときから、彼女は、知子という仮面をかぶりつづけているのであった。  
 アイシャドウをぬり、目ばりを入れる。つ



イメージギャラリー

『棲息場所を吐けッ!』

マエダ・ヒオミ

けまつ毛はつけない。すぐ間近に、客の目が迫るからである。眉も濃く引く。どうせ、はがされてしまうのだけど、ルーージュも思いきり濃くつける。腫れぼったくて、肉感的な唇である。

「おい、なにしてんや。早よ来んか」

「はい、只今——」

「いくら待たす気や。時間が、のうなるやないか。化粧なんかいいから、くるんや」

今度は、初めからパンティは、はずして、透きとおるように薄い黒のネグリジェを羽織ると、褥の側へ、にじり寄った。

陽にやけて太く、毛深い男の手が、知子の手首を、むんずと、つかむ。

「来い」

女は褥の上に、引きずり込まれた。

「こんなもん、脱げ」

「でも——」

「邪魔だ」

「だって、これを脱いだら、素裸ですわ」

「いいから、脱ぐんだッ」

男は、腹の上にもるめてのつけていた寝巻を、かなぐり捨てると、身を起した。

知子は、今、羽織ってきたばかりのネグリジェを自分の手で脱いでゆく。夜毎の勤めで



どこの誰ともわからぬ数多くの男たちに、抱かれていても、やはり、男の目の前に、裸をさらすのは、恥かしかった。

熟れきった二十四才の女の肌は、それなりに、男の目を楽ませ、溺れさせるに足る美しさを持っていた。

むっちりとした固肥りで、抜けるような色の白さが、ことさらに知子を肉感的な女に見せていた。

男は知子を抱きすくめて、頬を軽く叩きながら彼女の目をのぞき込む。

「化粧をすると、また味が違うな。変った女を二人、抱くような気持や」

元来、富山は化粧した女が好きである。化粧することは、自分自身を見られる物にすることである。つまり、見るものから見られる物への転身である。こうして、女は男の物になるのだ。

知子は男から視線をそらせ、されるがままに身を委ねる。ただ、わけもなく情なくて、目頭が熱くなってくる。

しばらくは、あちらこちらを、いじり回され、舐めまわされて声もなく喘ぎ始める。

富山は、そんな女を、じっと凝視していたが、いきなり立て膝になると、衣桁（えこう）にかけて

あった腰紐をとると同時に、うつ伏している知子の両腕を背中に、ねじあげる。

男は、むっちりと盛りあがっている尻の辺りに跨がると、まことに慣れた手つきで、両手首を腰紐で括り合わせ、何をされるのかと驚いて身を起そうとする女の胸もとを一巻きして締めあげた。

「いや、いや、なにをするのよッ」

「ただ、ごしごしやるだけやったら、おもしろくないよってな。一寸、括っただけや」

男は、言葉つきとは、うらはらに、手荒らに、女を褥の上へ突きはなした。



二十二の春、女郎に売られてきてから、二年の間に、いろんな嫌なお客に会ってきている。縛り上げられた経験も、一度や二度ではなかった。

ああ、また、死ぬ思いをさせられるのか、と、地獄の底へ落ちる思いであった。許しを乞うても、どうせ、せんないことと知りつつ「乱暴なさらないで、お願い」

哀願してみるのも、金で買われた売り物の身であってみれば、それが、せい一杯の、はかない女の努力であった。

男は、息を荒らげて、手首を括った腰紐に

もう一本の腰紐をつなぎ合わすと、首に回してから、再び手首に巻きつけた。

いわゆる首縄である。うつむくと、首がしまるので顔をあげていなければならない。

「お願い。おっしゃることは、何でも致しますから、括ることだけは勘忍して……」

首をねじ向けて、哀憐のまなざしで、男に許しを乞うてみるのだが、所謂は無駄な願いであった。もとより、道理があつての責め折檻ではないので、許してもらえぬ筈はなかった。

「立てッ」

男は、やにわに女の頭髮を掴むと、荒々しく、ひきずり上げる。

「ヒュー、宥して……」

知子は、眉をつりあげ、痛さのためにつられて、よろよろと立ちあがる。

「来い」

男は、なおも黒髪を引っばって、鴨居の下まで引きずってゆく。五十六（と）と、引きしまった知子の裸身が、窓からさす淡い光のなかで浮かびあがった。

黒くて長い毛髪が男の手に巻きつき、白い敷布の上にも、二筋、三筋ちらばっている。

いくら諦めているとはいえ、知子は余りに



も無惨な仕打ちに涙も出ず、ただ小さきみに体をふるわすばかりだった。

富山は知子の裸身を、爪先立ちになるよう後首の腰紐を鴨居に吊るしあげる。

せめて顔でも伏せて、表情を見られまいとするのであるが、首縄がそれを許さない。目を閉じることによって、やっと、この屈辱に堪えることが出来た。

遣手のお種から、男は一步、外へ出れば七

人の敵ありで、緊張のし通しなのだ。ここへは、そんな男たちが、気晴らしに遊びに来るのである。だから、少し位、当り散らかされたって、じっと我慢して、言われるままにされてるんだ——と、言いきかされていた。

客のあしらいが、うまくないと、どの道、お種から、その何倍も責めあげられるのだった。逃れるすべのない買われた遊女の身なのだ。最良の方法は、されるがままに、おもち

やにされ、暴虐の嵐の過ぎ去るのを待っている方法なのである。

いままでも、客に理由もなく縛しめられたときは、なるべく逆らわずに、それが自分の運命と諦めて、ただ、時の経つのを待っているのを常にしていた。

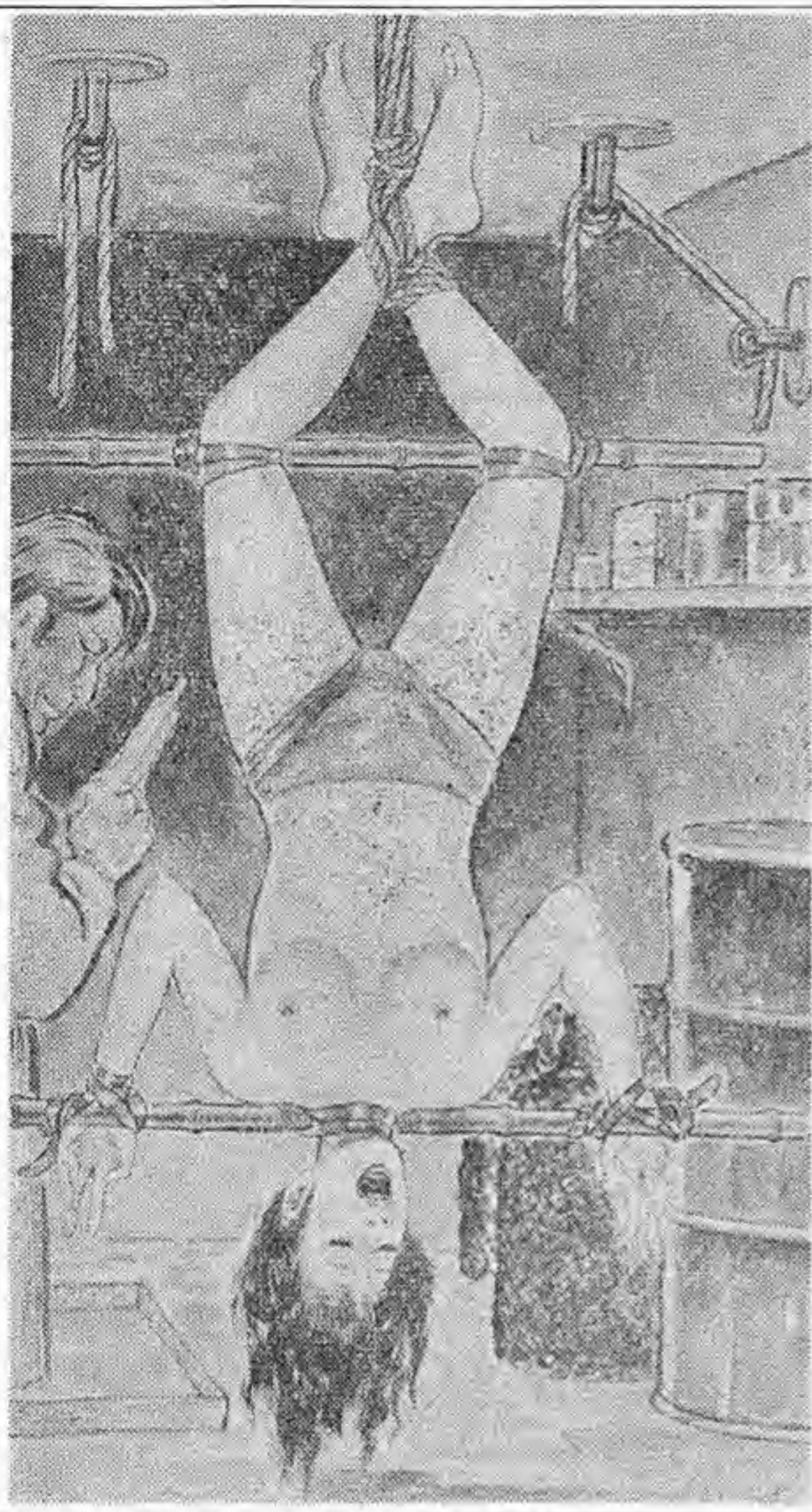
男は知子の裸の肩を抱きしめると、くらくくように口を吸いあげた。女の顔は、折角の化粧もはげ落ち、脂汗と男の唾液とで、ぬらぬらと艶光りしていた。目には、涙が溢れそれが、無言の抵抗のように、頬をつたって畳の上に、ぽつりと落ちた。

富山は、突然、跪くと、女のむっちりとした丰满な臀部にむしゃぶりついた。いとおしむように頬ずりしたかと思うと、太腿を一本宛、抱きかかえるように手をまわしてきた。

「い、いやあーん」

知子は、弓なりに裸身をのけぞらす。両腿を抱え込まれていては、もう、どんなことをされても、身をよじるのみである。

下腹部が波打ち、黒髪も乱れるだけ乱されて肩をおおっている。しばらく二人は、そんな姿でもみ合っていたが、やおら男は立ち上がる、一步下がって褥の端に腰をおろして全裸の女体を、頭から爪先まで、じいっと、



イメージギャラリー

『浣腸器の生贄』 四馬

孝



見すえるのだった。

ふり乱された黒髪が、顔の半分をかくしているのが、せめてもの救いだったが、後手に縛られて吊られているので、全裸の豊満な女体を、男の視線から、かくすすべもなく、いたずらに膝頭を、わななかせていた。

男は煙草の煙を、ゆっくりと天井へ吹きあげながら執拗な視線を女体に這わせ、そんな知子の様子を目で楽しんでる風であった。

この女を、どのようにして、完全に自分の物にするかを考えていた。自分の物にしたという証<sup>あかし</sup>として、なにかをしなければならなかった。

今までに、何回となく、この女を自由にはしてきた。しかし、ただ、それだけでは、この女を自分の物にしたという所有感を満足することが出来なかった。

金で買った、この女を、許されたこの時間の間、完全に自分の物にしたという証が、なんとしても欲しかった。

つと立った男は、短くなった煙草の火を、女の腰紐で、むっくりと飛び出た乳房の中心にあるピンク色の乳首に近づけた。

「ぎゃーッ」

女は鴨居をきしませて、のけぞった。

それが合図のように、男は煙草を灰皿に捨てると、真白い太股に抱きつき、固肥りの肌口を寄せて齒型を当てた。

「ヒー」

笛のような悲鳴が女の口から洩れ、裸身がビクッビクッと、けいれんした。

甘酸っぱい汗の味がした。富山は、齒を肌に、じっくりと喰い込ませていった。

「この女は、俺の所有物だ。俺の所有物だ」

男は、実感として、この瞬間、知子が、自分の所有物であるということを自覚することができた。

鴨居が、きしんだ。

女の噛み殺したような悲鳴が、男の胸を、鋭く貫いた。

「この女は、俺の物だ。俺の物だ」

彼は知子の前へ回ると、両の乳房の間に顔を埋めて、くらくくように、そこを吸い、そして舐めた。

「来い、とどめをさしてやる」

富山は鴨居からの腰紐をとくと、知子を握の上へ、引きずり込んだ。

天井と一方の壁にはめ込まれた大鏡が、この二人の痴態を余ますところなく、映し出していた。

路地の遠くで、子供の叫ぶ声が聞えた。そのあとで、自動車のクラクションが微かに聞え、また、もとの静けさに戻った。

♥

暮れるに早い冬の陽ざしは、ガラス窓の向うで、薄紫に交っていた。

休む間もなく、知子は夜の化粧を急がねばならなかった。腕や膝の節々に、まだ鈍い痛みが残っていたが、そんなことは言っておれなかった。

知子は、鏡に向かって顔を作る。

さっき、思いつき泣かされた臉は、まだ腫れぼったく赤らんでいて、お白粉ののりがよくなかった。

ルージュを引きながら、ふと、軽い目まいがした。しかし、故郷にいる小さい弟妹と、病弱な母の顔が臉に浮かぶと、また眉墨を握るのであった。

階下から、お種婆さんの怒鳴る塩辛声が、聞えて来た。

また、地獄が始まる。  
ネオンに灯が入った。

——（おわり）——





……日本のどこかの橘様にあてて……

## 奴<sup>ど</sup>隷<sup>れい</sup>妾<sup>めかけ</sup>の呟<sup>つぶや</sup>き

北川 まりこ

橘房由様——。

九月号の「奇クサロン」にて、貴男様より  
△奴隷妻まりこ▽宛のお便り、うれしく拝見  
させて頂きました。

生まれたままのまる裸で、みじめなお仕置  
を頂戴している、羞かしいまりこの姿を、御  
想像になって、日本のどこかで、悦に入って  
おられる貴男様のこと、心に刻みつけて一刻  
も忘れないよう心がけます。

今宵も、日の暮れだした頃から、『売春ご  
っこ』の調教につぐ調教で、くたくたになり  
テーブルの脚に、あたしを、開股縛りになさ  
れたまま、主人はお休みになりました。

まりこは、今宵のプレイの最初に、全裸の  
まま、テーブルの上に立たされて、何度も朗

読させられた貴男様のお便りを、改めて、ひ  
とりで繰り返し繰り返し、読み直させて頂い  
ております。

今、筆をとっております。この文章も、朝  
までに、必ず書きあげておくようにとの、主  
人のきつい御命令でございます。貴男様が、  
さぞ、お悦びになるような、羞かしくも浅ま  
しい格好で、僅かに自由を許された、右手で  
したためております。

時々、「奇クサロン」にのせて頂く、まり  
この拙い文章や詩歌が、貴男様のお目を汚し  
ました上、あのような、おほめの言葉を賜り  
穴があれば入りたいような、羞かしい思いで  
いっぱいでございます。

いつも、主人の検閲を賜ります際、「なん

だ、こんなもの。これが女子大を出た者の作  
品なのか」とか、「女教師をやっていたにし  
ては、まるで下手糞な文章だ」と、酷評され  
時には、目の前で、ずたずたに、お破きにな  
り、書き直しを命ぜられます。

そんなときは、罰として、白い肌の上に、  
「ヘボ歌人まりこ」とか、「女子大出の裸パ  
ン助」とか「裸女郎、女教師のなれの果て」  
というような落書きをされて、部屋中を引き  
回された上、ムチ打ち、吊り責め、石抱き責  
めなど、肉体の苦痛を伴う、ひどいお仕置を  
頂戴いたします。

詩、短歌、短文など、誌上に掲載されます  
と、賞として、一日から三日間ぐらい、奴隷  
の身分から解放されます。



久しぶりに着衣を許され、外出も自由になり、世間並みの夫婦のように、同伴で映画を観たり盛り場をぶらつくこともございます。

逆に、掲載されないときは、罰として、はじめな牝犬の特訓を受けます。

たとえば、「奇クサロン」の、ほんの小さな一角でも、自分の書きましたものや、まりこ宛の、お呼びかけの文章を読むときの嬉しさは、言葉や筆では言いあらわせません。

主人が出勤された後、あられない格好で部屋に閉じ込められたまま、『まりこの調教日記』のほか、感想文、詩、短歌などを、せつせと書きためております。

特に、主人以外の殿方とプレイしましたときは、必ず、詳細なレポートの提出を強いられます。

寒中、水の中につけられたり、野外で晒されたり、主人以外の殿方に、なぶられたりしている奴隷妻のみじめさに、御同情賜わり、まりこは、本当に涙が出るほど嬉しゅうございました。でも、まりこは、すっかり今の境遇に諦めて、ただ、ひたすら、主人のお気に召すよう、身も心も捧げて、御奉仕しております。

寒さ責め、吊り責め、鞭打ちなど、苦痛を

伴う責めにも、数年に亘る調教の結果、かなりひどいことをされても耐えられますし、じっと我慢しているうちに、じわじわと燃え上ってくる被虐の悦びに、身も心も酔うことも出来ます。

それに、主人は、絶対に、肌に傷跡の残るようなことは避けて下さいますので、安心です。野外に晒されることは、極力、人目につかない場所とか時刻を選んで下さいますが、矢張り、誰かに見られてはいないかという、羞かしさで、居ても立ってもおられない思いになります。

そうは申ししましても、羞かしさの奥から、被虐の悦びが、にじみ出てくるのが不思議といえば不思議です。

主人以外の殿方になぶられることは、たとえば、主人の仕事の必要上、接待のために、強いられたにしても、一番辛い勤めでございます。さんざん、なぶりものにされた後、貞操まで捧げねばなりませんし、主人以外の殿方に抱かれながら、喜びを感じる女の業の罪深さに、自分ながら恐ろしくなります。

翌日、主人の足許に跪いて、昨夜のプレイの報告をして、お許しを乞います。

その上、全身の精密な検査を受けて、お仕

置を頂戴しますが、このときのお仕置が、きびしければ、きびしいほど、自分の不貞の罪が、少しでも軽くなるような気持でございます。

まりこの入飼育中のミジメな緊縛写真Vを誌上に発表しては——との、貴男様の御希望を承りましたが、誌上に発表する文章や詩歌すら、主人の検閲を受けねばならない奴隷の身にとって、たとえ私が、発表してほしいと思いましたが、主人が、その気になって下さらなければ、どうしようもございません。

まりこの緊縛写真は、アルバムに数冊、たまっておりますので、主人の機嫌のよいときに、そのなかの一枚でも二枚でも、誌上に発表して貰えるよう、私から、お願いしてみます。もっとも、写真のほとんどは、あられない、まりこの緊縛写真ばかりですから、主人の許可を得ましても、誌上に載せて頂けるかどうか疑問です。

以前に、主人は冗談のように、「お前の、この丸出しの写真を誌上に載せて貰ったら、面白いだろうな」と、申ししたこともあります。が、今までのところ、発表の意志はないようです。まりこのアルバムを指さしながら、

「これは、お前の嫁入りの持参金のようなも



のだ。俺は、いつか、お前を捨てる時があるだろう。しかし、決して、捨て放しにはしないよ。取引先の誰かに、お前を世話する。勿論、お前は、まともな結婚など、とても出

来はしない。お妾になるのが関の山だ。そのとき、このアルバムに、ネガをつけて、相手の男に呉れてやるつもりだ。俺は、その男から、相応の身代金と今後の仕事上の便宜を計



イメージギャラリー

『献灯の儀』

須坂

旭

って貰うつもりだ。俺に捨てられるのが嫌なら、せいぜい俺に尽すことだな」  
そんなことを、寝物語に喋ったことを覚えております。

橘房由様。

とりとめもないことを、永々と書きまして申訳けません。それに、貴方様の、折角の御希望に添えませんことを、心から、お詫び申し上げます。

最後に、一言だけ、まりこの希望を述べさせて頂きます。宛名の「奴隷妻まりこ」は、「奴隷妻まりこ」に改めて頂けませんでしょうか。まりこは、主人の籍に入れてもらえない「お妾」の身分でございます。

それから、「まりこさん」と、さんづけはなさらないで、名前を呼び捨てになさって下さいませ。名前の上に、「メス犬」とか「裸パン助」とかを、つけて頂けると、とても嬉しゅうございます。

日本のどこかで、まりこの、あられもない格好を、じっと見つめておられる貴男様のことを思い浮かべながら、筆をおきます。

かしこ

奴隷妾のまりこより

橘房由様お許に



## M 人 士 の 系 譜

## S M 東 西 対 抗

## 亜 東 忍

手前生国と発しまするは、関東です。

このたび、M道修業のため、大阪へ参上しました。手前、奇クの白表紙の前の色表紙の時からファンで、八月号に一文を寄せられた、春日ルミ様のフォトに胸をおどらせたのが高校生のときでした。

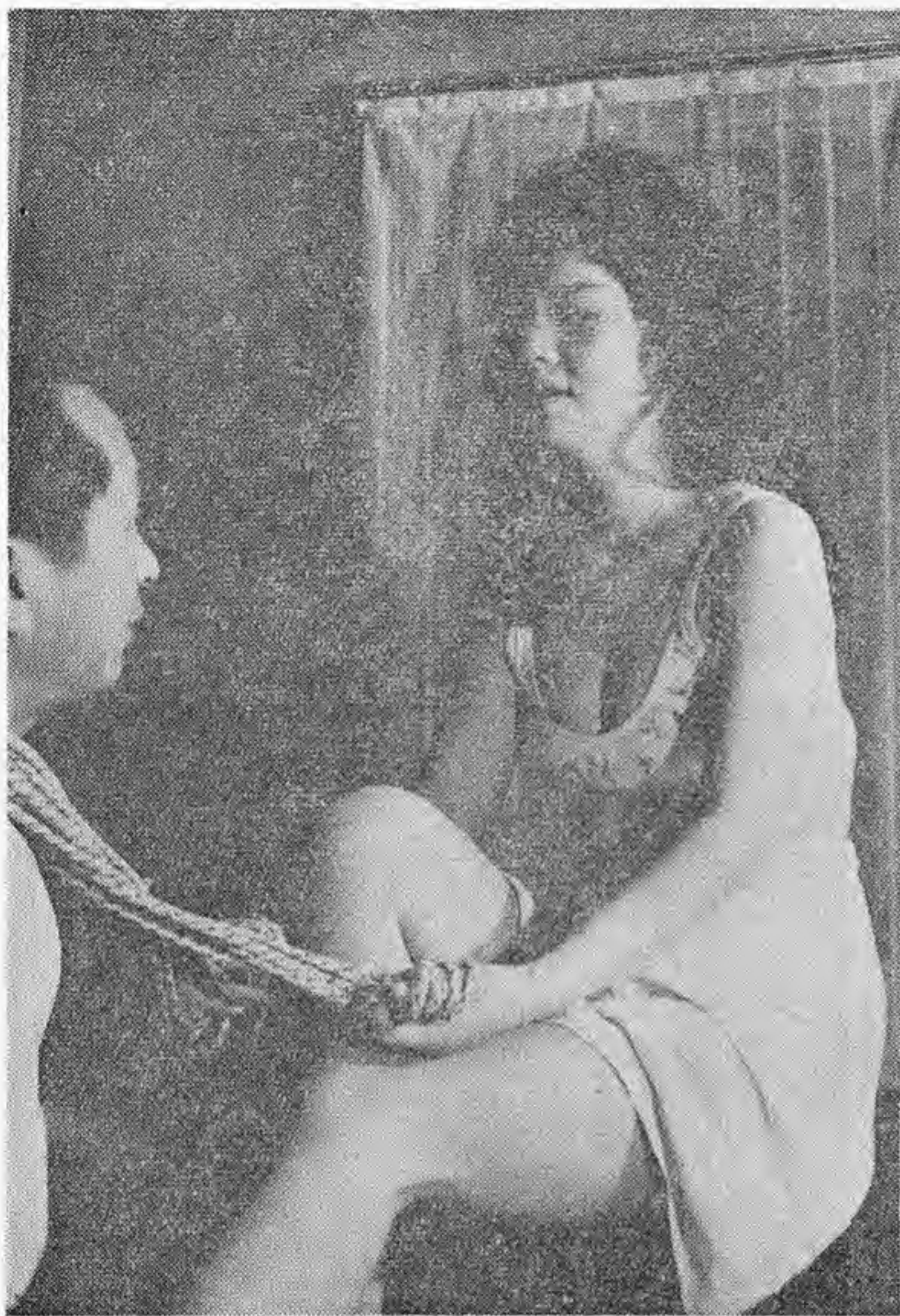
『東男に京おんな』というのは、関東は平将門以来の武門の地で、逞しい男達、関西は都

びとの文化の地で、洗練された女を云い表したのでしょうが、私の知る限り、Sの女王様は関西系列、M紳士は関東に優れた方が多いように思えます。

西方こそ、騎馬民族発祥の地とは、江波博士の学説ですが、騎馬女性の征服ルートも又西より始まるのも歴史的必然なのかも知れません。







奇クだって、関東のF誌や、最近雨後のたけのこみたいに出版されるSM誌では、どうしても出せない本質的な風格が、あるではありませんか。

違いがわかる年代というのでしょうか。

さて、私はこのたび、幸運にも関西アマS M界に比類なきSの女王、N様にご拝眉の栄

を得ました。Hホテルのロビーで初めて、N様のお姿を拝見したとき、「はっ」と全身に感じるものがありました。N様は、知らずに電車の中にでも乗り合わせれば、一見、普通のOLと見過してしまふような方です。

しかし、ある一瞬、その表情にキラッと光る美しさを見逃さなかったならば、それは本

物のS女性だけがもつ、ダイヤの輝きにも似た底光りに気づく筈でした。

ガラスは、いくら、みがいたって、ガラスの光しか出ません。世の中には、残念ながらダイヤみたいな顔をしているガラス女王が多いのです。その意味でも、N様こそは、我々Mの愛するものにとっては、本当に貴重な方だと思います。

私とは初対面でしたので、運転手として奴隷を一人、召連れておいででした。

N様に早速、三助、マッサージの奉仕をさせて頂きましたが、私は長年のMファンのわりには、不器用なので、十分ご満足頂けなかったのではないかと申し訳なく思っています。一見、小柄な方にもかかわらず、舌でおみ足をお舐めしているとき、そのお脚がかなり重量感があり、土踏まずも発達されて居られたので、何か運動をおやりかと、お伺いしたところ、バレエをされて居られたとのこと返事がありました。

お別れの際「お唾を頂きたい」と、おねだりしたところ「そんなことはプレイのときに云うものよ」と次回にお預けとなりました。

私としては奴隷の分ざいで、プレイ中に勝手なお願いをしてはいけないと、それ迄控え



ていたのです。

N女王は、日常生活とプレイとを切り離され、普段は、円満なる社会人として、そしてある時期、天性のS性を発揮される方とお見受けしました。

単なるヒステリーの女性が、Sの女王ではないのです。

アマチュアのSの女王様は、かくあるべきと一層、尊敬の念を深くしました。

これで、もう五百キロも離れた大阪迄来た甲斐は十分あったのですが、かねて知り合いのBちゃんのいる、南のスナック『L』へ電話しました。ところが、幸運にも、永らくご不在を伝えられていたL女王様のお声が耳に入りました。

L様こそは、まさしくも女王中の女王で、このLの店名も、L様にほれ抜いているマスターのO氏がつけたのです。

思えば二年前、L様は入れ墨で有名なY女王と、ご一緒に新宿のKへ乗り込んでこられました。Kでなくて、当時は未だ『ヤプーの館』で営業していた時かも知れません。

実は、この日を境にして、関東のプレイの仕方が変わったのです。

それ迄の関東では、心理的な責めが多くの



比重を占めており、関西型のように、いきなり鞭でバシバシやるというようなことは余りありませんでした。

当時のKの女王、新宿の無政府主義者の仲間であったK女王様、P女王等プレイに移る迄の心のやりとりに秀れて居られました。

それだけ頭も冴えて居られましたし他のひとにない秀れた感覚、センスの持主でした。

又、T女王様におかれては、厳しい中にも常におやさしく、一度、店の外迄お送り下さった時など、タクシーの運転手が、「あの美人ですね」と如何にも感心していていたのも記憶に新しいものがあります。

K店でも、人気のあった女王様で、常連客の中で、彼女の東中野のマンションにお伺いして、ご奉仕した奴隷も、かなり居たと思ひ





ます。

さて、この関西より遠来の、入れ墨の女王と、グラマーな美人女王様を、お迎えした我が新宿派M陣容はと申しますと、まず代表は何といっても、いつも平然としているところから、太平洋というニックネームのY先輩をあげることは、その人柄といい、キャリアアといひ誰も異存のないところでしよう。

Y氏こそは不言実行の型で、つまらない理屈を並べたてて、さもSMの判っているのは俺一人みたいな顔をしている（私もその一人ですが、こういうのが意外に多い）のや、自分一人よがりな、さっぱり訳の判らぬ文章を投稿しては、先生なんて呼ばれて、うれしがつて、本人もその気になってるのや、もつとひどくて、名作『家畜人ヤプー』の代理人

と自称し、それだけでは足りなくて、ある時は、さもそれが自作であるが如きポーズを取るA氏などは遠く及ばない本物でした。

盗作というのは、作品の一部を写し取るのが盗作と云われていますが、作品の全部を盗っちゃったら、何というのでしょうか。

今昔物語の作者は判らないけど、実は俺だなんて名乗り出る人はいません。

万葉集の読みびと知らずの歌は、読みびと知らずであってこそ、歴史の流れの中に生きているのでしょうか。

家畜人ヤプーも、読みびと知らずでいいのです。それでこそ、価値があるのです。

作者が世に表れにくい人の弱味につけ込んだA氏は、Mの仲間では失格だと思っています。

A氏は独得の文体を持って居り、女性専用のアンマをして歩いた文章などは、ねちっこい文体と合いまって、それはそれで、名作だと思っていたものでした。

その点、必ずや真相を、ご承知の筈の、奇ク関係者各位が、黙して語らないのは、実に紳士的で立派であり、スイス銀行にも似た神聖ささえあるものと、目頃より尊敬して居ります。

さて話を舞台のK店に戻して、他のM族で



は、店内で女の子にこき使われたお客のIさん、うさぎの帽子のSーさん。若手を代表しては、坊や（彼女も大阪へやって来てN様にお仕えし、本物のお墨付きを頂いたようです）紳士のOさんは当夜、来ていたかしら。

とにかく、他はみんないい人達ばかりでした。本当に同好の士でしたね、みんな。

そしてプレイ開始。ところが、Y女王はYさん相手に、いきなりバシバシ始まったのには、勝手が違ってびっくりしました。

前技がなくて、いきなり本番に入っちゃったんです。Yさんは流石に長い年期にものを云わせて、相手をつとめていましたけど、Y女王は、ご承知の通り、エスカレートするとブレーキがきかなくなっちゃって、無謀運転です。Kのマスターがブレーキを掛けるのに必死でした。



L女王様におかれては、年配のやせた紳士を、じわじわ、やってもらいました。

私なんか、Y女王のけんまくに恐れをなして、隅っこに小さくなっていました。

プレイが、戦いすんで夜が明けて、L様にお靴をおはかせしたことが、当夜唯一のプレイ参加でした。それも片方だけ。もう一方は

素速く、Iさんがお履かせしていました。

うすのろの奴隷は、最後迄、あまり役に立ちません。

K店の思い出としては、今某誌のフォトモデルをしているR女王が、当時はまだ現役の女社長で遊びに來られて居られました。

前述のY氏とのプレイなんか呼吸がぴったり合って、それは森繁と越路の舞台のように、びったり芝居になって、素晴らしいものでした。今、フォトで拝見するよりも、もっと気品にあふれておられたように思えます。

R女王もご出身は関西と承っておりますので、系譜では関西の代表になりますよう。

関西を代表するMの実践派は、なんといっても、ときどき上京される、和歌山のA氏が第一かも知れません。A氏は、新宿のバーのSママ、A女王様の発見者としても、M界にその名をとどめると思います。

A女王様は、キャリアといい、貫録といい



関東を代表する女王様です。

特に後継者の育成に秀れておられます。

そのため、このバーのホステスは皆様、Sの役をやられます。

しかし、このお店は、いわゆるSMバーではありませんので一般客の方が多く入っています。その中で平然と私にネクタイで靴をみがかせたS女王様は若手No.1です。

頭はいいし、美人ですが、女王蜂の分ぼうのように、今年より、弱冠二十二才でスナッ

クのママになり、経営も立派にやっておられます。

やがては関東を代表するSの女王になられることは必須だと思います。

しかし南九州のご出身ですので、やはり西の代表でしょうか。

しかしながら、和歌山のA氏を始め、関西のM派の方々は、強烈なプレイをされますがそれだけ、自分の欲望を強くさらけ出すきらいがあります。

## 新発足 懸賞入告白、手記、体験、原稿募集

### ☆ 賞金 ☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

### ☆ 規 定 ☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

「武士は喰わねど高ようじ」の自己制御が少ないと思います。

SMは、Mと云えども一種の我が儘で、欲望の表れです。だから、その自我を抑えて抑え抜くところに、Mの極意があり教養があるのだと思います。

Mというのは、決して卑下する必要もないのですけど、さりとて、威張れるような立派なことでもありません。

ただ、無駄を敢えてするところに楽しみを見出すことでしょう。この精神の無駄こそ、これを純粹にすると、宗教に似ていると思います。その意味では、私の祈りにも似た敬愛の念を初めてのプレイで満たして下さった、L女王様こそは、やはり女神の名に相応しい女性でしょう。

今でも私の舌には、あの豊かで、白く、そして何故か少しねっとり甘かったL女王様のお尻の穴の味が、残って居ります。アマ界でNo.1のN様、そして、プロ界でNo.1のL様一層ご満足を頂けるよう、実技の修業に励む所存でありますれば、一層のご指導下さいますことを伏してお願ひ申し上げます。

プレイの描写については、次回に機をみてお話し申し上げたく、一応筆を置きます。





敗戦悲話  
北満哀歌

# 悪魔のサイズ・テスト

国破れて山河あり、異境で捕われの身となった日本女性は、日本軍閥の罪状

を、そのか弱い一身に受けて、惨虐きわまりない瀆罪の裁きを受けなければ

ならなかった。これは、その哀れな女性たちの苛酷な運命の記録である。

鈴 すず

鹿 か

晶 あき

子 こ

私は、さきほど受けた恥かしくもおどましい腔圧測定検査に、全身の力を絞りきってしまいましたので、綿のように疲れ果てておりました。

ロシア軍将校たちの目の前にさらしています私の肌には、玉のような汗がふきだし、それが電燈の光を受けて、キラキラと輝いておりました。精一杯の力を出しきって、りきんだ太腿や、ぎゅっと固く握りしめていた掌からは、まだ、ふっふっと、泉が湧きでるように汗が流れ出てくるのでございしました。

私の体のどこに、このように沢山の水分があるのだろうかと思議に考えながら、甘くけだるい陶酔のなかに酔いしれ、ベッドの上で長々と手足を伸ばしている私でした。

手足の関節という関節が、抜けきってしまったようで、自分の体というものの存在さえ



さだかには、わかりませんでした。

夢うつつというのは、丁度こんな時の状態を言うのでしょうか。あの時は、あれほど、力をこめることの出来た手足に、まるで力が入らないのです。それでいて、胸の鼓動だけはドキンドキンと脈打っているのが、はっきり自分でもわかり、溜っていた息が、知らず知らず、口について出ました。

「フー、フー」

人には切ない吐息のように見えたかも知れませんが。まるで肩で息するように、私は体中の古い空気を全部、吐きだしていました。

「晶ちゃん、どうだったの？ 失神しちゃったよねえ」

先生は、そんな私の体を、やさしく撫でて下さりながら、訊ねて下さいました。

「ええ……」

私は恥かしさで顔を真赤にしながら、控え目に小さく頷きました。

「どんな感じだったの？」

「どくなって……、とても、口では申せませんわ。とにかく、体中が、かあーっとほてったかと思えますと、足の方から電流のようなものが全身を走り、目の前が真っ暗になってしまいましたの。それからのことは、何もわ

からなくなってしまうって、私……」

「そうなの。晶子ちゃんも、生まれて始めてそんな感じを知ったのね」

その時のことを思い浮かべますと、私の体の最深部には、まだ火の塊のようなものが、巢喰っていて、それが燃えたぎっているかのような感触が胸を熱くするのです。

「フー」

私は、もう一度、大きく息をし、その甘酸っぱい、しびれるような陶酔をいとおしむように、両の太腿をぴったりと合わせ、そっと力を入れてみたのでございます。

「晶ちゃんは、本当に感じちゃったのね」

智恵子先生は、また嘆息まじりに、そうおっしゃいました。

「ええ、もう、なんだか、体中の力が抜けてしまって、融けてしまいそうなんですの。でも、最初に測定のお道具を入れる時は、とても、苦しゅうございましたわ」

「そうでしょうねえ。けれども、あれだけ、よく頑張ったわねえ。腔圧が百八十もあるなんて、とっても、皆さん、びっくりなさっていらっしやったわ」

李さんとお八重さんは、交替で私たち二人の会話を通訳しておりました。ロシア軍の

将校たちは、それを聞きながら、私たち二人を、じろじろと名めまわすように見詰めているのでございます。

射すくめるような鋭い視線を裸身に受けて先生と私は、二羽の小鳥のように、ぴったりと肌を寄せ合うようにして、互いにかばいあいながら言葉を交わしておりました。

着る物とて、何一つ与えられてはおりませんでしたが、私たちは若い女性の本能として、隠くすべきところは、すっかり隠くして二人で寄り添っていたのでございます。

「先生」

私は起きようと体を起こしにかかりますと先生は背中を支えて下さいました。

「なあに、晶ちゃん」

「お水、いただけないかしら。晶子、とても咽喉が乾いてしまいましたの」

さっきの検査で、体中の水分という水分が汗となって、ふき出てしまったのでございましょうか。私は咽喉がからからになり、唇や舌が粘ってまいりました。

「そうねえ、頼んでみてあげるわ」

先生は、お八重さんに哀願されました。「お八重さま、晶子が、あのように咽喉が乾いたと申しております。お水を飲ませてやっ



て、いただけないでしょうか」

「そりゃ、晶子も咽喉が乾くだろうよ。あれだけ奮闘したんだからね。うふふふ」

お八重さんは、口もとをゆがめて皮肉たっぷりに含み笑いをしてから、大きなコップに水を、なみなみと汲んで持ってきてくれました。そんな大きなコップは、もともと、この医院にもなかったものですから、きつとロシアの軍隊で持ってきたものでしょう。

乾ききった私には、どんな大きなコップでも、盃ほどの量にしか見えません。一気に飲み干してしまったのでございます。そんな私の飲みっぷりを眺めていたお八重さんは、待っていたように、私に言葉をかけました。

「晶子、まだ足りないようだね」

「はい、戴けるのでしたら、もう一杯……」

「ハハハハ、いくらでも、飲ませてあげるわよ。これから行なう検査にも、頑張って貰わなければならぬからね。う、ふふふ」

不品な笑いに語尾をにがして、今度は、コップに二杯も、水を持ってきて下さったのでございます。さっき、コップ一杯の水を一息に飲んだ私は、更に二杯の水も、難なく飲み干してしまったのでございます。

「まだ欲しい？」

「いいえ、もう十分です。どうも有難うございました。お八重さま」

咽喉の乾きがいやされますと、生気が体中に一度に溢れてくるように感じられました。

李さんが、小型の皮製のトランクを持って来てベッドの上に置きました。

「晶子、次は、お前のサイズを測ります」

「え、えっ、お八重さま、サイズって、一体なんでございますの？」

「うっ、ふふふ、それはね、女性の一番大事なところの大きさの事です。わかる？」

「まあ、そんな……」

「これから、お前が毎日、お相手をしなけりやならないロシアの殿方は、日本人とくらべが多いからね。みんなのサイズを測っておかなけりや、怪我人ばかり出ても困るしね。それに、いろんなショーの訓練にも必要なんだよ。わかったかい」

李さんは、何に使うのか、洗面器に水を入れて来て、トランクのそばへ置き、次に白い麻縄を持ってきたかと思うと将校たちに手渡したのでございます。

「晶子、ベッドの上に立ちなさい」

お八重さんが、そう命令しました。

「今度の検査は、ニコライエフ司令官殿をはじめ、みなさんに、一部始終を、よく見ていただくために立って行なうのです」

お八重さんが何か言いますと、あの熊のように頑丈なイワノビッチ軍曹と、もう一人の大男の方が、ベッドの上に飛び上って参りました。私は何をされるのかと驚き、ベッドの上から逃げようとしたましたが、忽ち、大きな掌でむんずと抱きすくめられてしまったのでございます。

身をもんで嫌がる私を、無理矢理、引っぱりあげ、両手を大きく左右に開かせられ、それぞれの手首に、縄を巻きつけてしまいました。そればかりではございません。それを、天井からぶら下っている鉄の輪に縛りつけられたのでございます。

腕が突っ張ったように引き上げられ、左右の腋の下が、あらわに男の人たちの目にさらされてしまいました。風もないのに腋毛が、さらさらと揺れるような感触に、私は思わず身もだえして体を、よじっていました。

すると、そのよじった足首を掴まれ、縄を巻かれたかと思うと、その端をベッドの脇の金具に縛りつけられてしまいました。

丁度それは、ロシア軍将校たちの方を向い



て、足を左右に大きく拡げて立ち、両手を万才をしているような恰好で体を晒しているの  
でございました。

「いやいや、離して、離して……」

私は必死になって身をよじって縄目から逃れようとしたが、それは徒らに両手がだるくなるだけであって、何の役にも立たないことを悟りました。

将校の一人が、私の全身に光が当るよう、ライトの調節をいたしましたので、私の裸身は、あますところなく、浮きだすように照らし出されてしまったのでございます。

そのまま、しばらくは、将校たちの痛いほどの視線を浴びていましたが、頃合いを見てお八重さんが私に命令しました。

「晶子、下を見なさい」

私が、はっとして目を下げますと、いつの間にか、李さんはトランクの中から細長い桐の小箱をいくつも取り出し、ベッドの端へ並べていたのでございます。

それをジュウコスビッチ参謀が、次々とふたを開けて中の品物を取り出して並べているのです。中に入っていたものは、いずれも黒くて細長い、まるでソーセージのお化けのような形をした異様な品物でございました。

私は、こんなものは今までに見た事もございません。ジュウコスビッチ参謀は、それを手にとり上げ、電光にすかすようにして、しげしげと眺めては、私を見上げ、ニタニタと淫らな笑いを浮かべるのでございます。

いずれも、長さは三十センチばかりで、太さは私の片手の指で充分に握り込めるほどの太さのものから、両手の指を合わさなければ到底握る事が出来ないような巨大なものまで幾通りも揃っていたのでございます。

ピーンと、そり返っており、尖端の方には、少し窪みがつけられています。柔らかいなめし皮に、うるしでもかけて作ってあるのでしょうか、強いライトを受けて、黒く、ピカピカと反射していました。

小箱の中から、全部とり出しますと、参謀と李さんは、細いものから順々に、きちんとベッドの上に並べました。全部で二十本はあったのでございましょうか。黒光りする異様な品物が、ずらりと並んだのを見ていますとなにやら、無気味な雰囲気がただよっているように思えます。

「李さん、もう用意は出来たようね」

「アア、イツデモ、ドウゾ」

「では、ぼつぼつ始めようかしら」

お八重さんは、そう言うってから、先生の方を願って呼びかけました。

「智恵子先生！」

「は、はい」

「先生は、このお道具を細いものから順に、晶子に使っていくのです。いいですね」

「はい」

「お道具には、一番細いものが一号、それから円周が一センチ大きくなるごとに二号、三号と番号がついています。これは、何号まで晶子が受け入れることが出来るのかを調べるのです。わかりますね」

「ええ、わかりました」

「ただど先生、先生は、このようなお道具を使った経験がありましたか？」

お八重さんは、意地の悪そうな笑みを浮かべながら、先生に訊ねました。

「はい、それは、私……」

先生はうつ向いて口ごもっておられます。

「正直ニ答エルノダッ」

追っかぶせるように、李さんは怒鳴って、先生の顎に手をかけ、ぐいと顔を引き起しました。

「使ッタコトガアルノカ、ドツチダッ？」

「は、はい、それは、それは……」



「おほほほ、その様子では、ありそうですね、先生。使った経験があるのでしょうか？」

「はい、ございます」

先生は、いかにも恥かしそうに、声を落して頷かれたのでございます。

「うふふふ、それは一体、いつですか？」

「……はい……」

先生が、しばらく返事をしぼっておられますと、怒声よりも早く、李さんの平手が、先生の頬を殴りつけていました。いつも腰が低くて、おどおどとした態度だった物売り時代の、あのお人好しの李さんとは、とても考えられない形相でした。

「モタモタスルナッ」

「あつ、なんという乱暴なことを……」

先生は頬を押えて抗議されましたが、凄い李さんの顔つきを見られると、仕方なさそうに返事をなさいました。

「し、主人が召集されてからです」

「ほほほほ、それで何回ぐらい使ったの？」

「はい、ほとんど毎晩……」

「ふふ、そうでしょうね。先生のように、若いピチピチした体で、男なしでは、とても、我慢できるものではないわねえ」

「はい……」

先生は顔を真赤にして、消え入るような小さい声です。

「それで、使い心地はどうだった？」

「はい、それは、とっても……」

「絶頂感を感じたこともあるのかい？」

「はい」

「へえー、ベテランなのね。これだけで最高に達するのには、相当の年季がいる筈なんだけどなあ。やっぱり、その方が好きなんだろうかい。じゃあ、使い方を説明する必要なんか、なさそうね。自分が使うのと同じ要領で晶子に使ってやればいいんだからね」

「はい」

「じゃあ、李さん、晶子のことだから、一号や二号じゃ細すぎるでしょ。五号ぐらいから始めてはどうかしら」

「フムフム、ソレハ、ナカナカ、オモシロソウデスネ。私、ヤッテミマシヨウ」

李さんは、沢山並んでいるお道具の中から一本を選び出して洗面器の中へ浸し、水の中でネチネチと揉みはじめたのでございます。

見ていますと、最初はキーンと如何にも硬い感じがしていました品物も、水を吸って、李さんの手で、こねまわされているうちに、次第に柔らかそうになってまいりました。

「晶子、コレヲ見ロ、丁度イイカタサニ、ナツテキタダロ、ウレシクハナイカ」

李さんは水から取り出した握り手のついた品物の下端を指先でつまみ、私の目の前へ、ぐいと、つきつけてきました。

長さ三十センチ、直径三センチぐらいでしょうか。きゅっと宙に反ったような奇妙な形のものなのです。丸味を帯びてふくらんだ先端から、二乃至三センチほど下の所が輪になっていて、そこから下の手元の方へ向って、幾筋もの、ミミズのような筋が走っているのでございます。

李さんの指先で、ピンとお道具の先を弾きますと、まるで、それは生き物のように、ブルンと微妙に振動するのです。

顔をそむけることも出来ず、私は、そのお道具を、目の前で見せつけられてしまいました。この時、私は、急に万才のような格好で挙げさせられている手がだるくなってまいりました。時間にして、私がこのように縛りつけられてから、まだ、余り経っていないのに肩口あたりから、ジーンと抜けそうな感覚が起ってまいりました。

二カ所の体毛が、男の人たちの目に、あらわに晒されているという、恥かしさも、さる



ことながら、私は痛さとはまた違った、腕の  
だるさに悩まねばなりませんでした。

「晶子、ホレ、ココヲヨク見テミロ、シルシ  
ガツイテイルダロ、ナンダカ知ッテイルカ」

李さんが指さしたところを見ますと、品物  
の先端から二十センチほどの所に、赤いしる

しの輪が入っています。

「ココマデ、オ前ノ体の中ニ、入ルノダカラ  
ナ、セイゼイ、楽シミニシテイルノダヨ。オ  
イ、先生、オ前サンモ、ヨク見テオクノダ」  
まあ、李さんたら、なんとむごい事を企ん  
でいるのでしょう。私をこんな恥かしい姿で



イメージギャラリー

『可愛い理解者』

志羽利也

人前に晒しておくばかりではなく、私の体内  
に、あのような異妖なお道具を挿入するなん  
て、まるで鬼畜のような仕打ちです。私は、  
自分の体が、これから、どんな事になってゆ  
くのか、恐れおののいておりました。

私のそばで、先生も、恐ろしいものを見詰  
めるように、目を瞠っておられます。

「オイ、先生、ヨクワカッタナ、ココマデ、  
完全ニ押シ込ムノダゾ。イイナ」

「は、はい、わかっています」

「ソシテ、ホラ、ココニツ、別ノ輪が入ッ  
テイルダロ、ヨク見テミルンダ」

李さんが指さした品物の部分を見ますと、  
さきほどの輪より十センチほど上、つまり、  
先から十センチほど根元に近い所に、もう一  
つの細い輪が入っていたのでございます。

「サッキノ輪マデ押シ込ンダラ、次ハココマ  
デ引キ抜キ、マタ、サッキノ輪ノ所マデ押シ  
込ムノダ。ツマリ、ピストン運動ヲ繰リ返ス  
ノダ。イイナ、ワカッタカ」

「はい、よくわかりました」

先生は、如何にも仕方なさそうに、返事を  
なさっていますが、李さんは調子にのって、  
益々能弁になってまいります。

「ソノ運動ヲ、道具一本ニツイテ、百回繰リ



返す。ソレガ出来レバ、合格シタコトニスルカラ、次ハ、一マワリ大キナ道具ヲ用イテ、モウ一度、前ト同ジ、テストヲスルノダ。ソシテ、何号ノ道具マデ、受ケ入レルコトガ出来タカヲ調べルノダ。イイカ、判ッタナ」

「はい」

「ジャア、オ前ハ、ベッドノ上ニ上ツテ、スグニ、テストヲ始メルンダ」

先生は、李さんに言われた通り、ベッドに上って、私の脚元に坐り込まれました。

「ウム、説明が大分長カッタノデ、チョット乾イタヨウダ。モウ一度、水ニ浸シテ、ヤワラカクシテヤルカラナ」

先生にお道具を渡そうとした李さんは、ふと気づいたように再び水に浸してもみながら「オ八重サン。アナタハ、晶子ノ胸ヲ責メテヤッタラ、ドウデスカ？」

「そうね、それも面白いわね。もう今迄と違って、ロシアが戦争に勝ったのだから、私たちが御主人様なんだもんね。どんな面白い事でも出来るってわけね。晶子あきの上と下とを同時に二カ所責めしてみせたら、将校さんたちも、さぞ、お喜びになるだろうよ」

お八重さんは、そう言うなり、ベッドに飛び上って、私の後へまわり、両の掌で、私の

乳房を、ぎゅっと握りしめました。

「いいかい、晶子。今からお八重が、たっぷりと地獄の味を知らせてやるからね」

「あああ、嫌ッ、やめてエーッ」

不意をつかれた私は、手首を縛った縄が鉄の輪をきしませるほど身をもんで逃れようとしましたが、なにしろ、両手が天井へ吊られたように固定されていますし、それに、両足さえも、大きく広げられて、ベッドの端に固定されてしまっておりまうので、もう、どうしようもありません。

徒らに、空しく、お尻を宙に振るだけの、はかない抵抗でございました。そんなにして私が必死になってもがき、悲鳴を挙げながら激しくお尻を振るのを見て、ロシア軍の将校たちは、野獣の咆哮にも似た大きな声を挙げて、嘲笑するのでございました。

その言葉の意味がわからないだけに、私は一層、不気味で恐ろしい気持を味いました。

お八重さんは、そんな将校たちの機嫌をとるように、私の胸にまわしていた手をずらして腋の下へと持ってきたかと思えますと、腋毛を掴んで引っばったのでございます。

「ああ、嫌よ、嫌よ。お八重さま、お宥しになつて……」

僅かに自由になるお腹を突き出し、お尻を振って身もだえしますと、不思議なことに、上へ挙げさせられていた腕の抜けるようなだるさが、嘘のように消えていました。

「先生、オ前モ、ボサツトシテイナイデ、テストヲスルトコロヲ、モミホグシテ、テストシ易クシテオカナイカツ」

先生の優しい指が、私の体の一番敏感な所へ遠慮勝ちに、そっと触れてまいりました。

おずおずと、控え目なその先生の触手が、私の肌を這いまわりますと、一種言うに言われない痺れるような、ぞくぞくとする感覚が体中を電気みたいに駆けめぐりました。

「晶ちゃん、許してね。言われた通りにしないと、また、どんなひどい目に合わされるかわれないのよ。だから……」

「先生ッ。晶子は嫌でございます。こんな恥かしいテストをされるなんて、どうか、お止めに……。お八重さま、お願い。この縄を解いて下さい」

「晶ちゃん、そんな聞きわけのない事を言うんじゃないのよ。先生を困らせないで……」

先生の指は、妖しいリズムをもって、じんわりと私の肌の上で躍ります。

「甘ったれるんじゃないよ。少し、やさしい



言葉をかけてやりや、すぐ、つけあがりやがって、只じゃ、おかないよ」

お八重さんの弾力性のある、しなやかな指が執拗に私の胸のふくらみに、指先を喰い込ませるように襲ってきます。先生も、動きまわる私のお尻を、片手で抱え込むようになります。そうです。そうして、私のお尻を動けないようにしておいて、それはそれは、とても、お上手な苛じめ方でございました。

どこが痛いといった縛られ方ではございませんでしたが、手足を、こう広げられてしまっていては、体の自由は一切ききません。口から荒い息を、ハアハアと洩らしながら、必死になって耐えていましたが、先生のお優しい手で、お尻を抱えて頂いているのが、せめてもの救いでございました。

「嫌、嫌、お願い、止めて頂戴……」

私は泣きながら拒絶していました。身動き出来ないまま、口から涕泣を洩らしているうちに、私の体の中の感覚は、言葉とは、うらはらに、次第次第に、熱く燃えたぎるものを感じだしていました。

二人の女性から受ける耐え難い責めは、いつしか、全身を包み込むように、甘い陶酔に変ってゆき、私は知らず知らずのうちに、そ

の甘美な擗の上に、とつぷりと身を横たえていたのでございます。

「止めてったら、いけないわ、いけないわ。嫌だったら、許して……、お願い」

悲鳴も、いつしか、甘くて切ない哀願調になってゆきました。そんな私を持っていたかのように、李さんが乗りだしてきました。

「サア、先生、イヨイヨ、コレヲ使ウノダ」

李さんは、水づけにしたお道具を、先生に手渡しました。先生は、白い手に、そっと、それをお受けになったのでございます。

「晶ちゃん、いいわねえ。これからテストを始めるわよ。体の力を抜いて、ゆったりとした気持ちでいるのよ。いいわね」

「でも先生、怖いわ。そんな事、お止めになって下さい。私、ああ……」

「駄目よ、晶ちゃん。そんなわからずやを言っ、通ると思っ？ いい娘だから、おとなしく、先生の言う通りにして頂戴」

「嫌、嫌。先生、私、とっても怖い。テストだなんて言ってるけど、結局、私の体を、おもちゃにするんじゃないの」

「何も、怖くなんかないから、先生の言う通りにするのよ。ねえ、わかって？」

「だって、だって、怖いわ、私……」

「晶ちゃん、そんなに、逃げてばかりいては駄目よ。逃げないで、自分から、お腹を突き出すようにしてごらんさい」

「嫌です、嫌です。先生、どうか、お許しになって。先生、お願い。お止めになって下さい。晶子、怖いんです」

私は泣いて頼みましたが、そんなことをすれば、先生と私に恐ろしい折檻が待っているだけです。許して呉れる筈もございません。

「晶ちゃんたら、無理ばかり言っ、私を困らせるのね。仕方がない娘だわ」

さすがの先生も、たまりかねたのでしようか、私のお尻を、きゅっと、思いきり抓ねられたのでございます。突然のことで、私は、思わず、お尻を引っ込めて、先生の抓られたお指を避けようとした。

「いいー、痛いッ、抓ねらないで……」

「晶ちゃん、許してッ」

先生の悲痛な声が合図でございました。

私はピクツと体をふるわせて、無意識のうちに腰を引いておりました。あの、むくつきロシア兵たちや、狡猾な李さんの手ではなくて、私の崇拜する智恵子先生によって、なされたことに、私は安堵しました。

「これは晶ちゃんには、細すぎたようね。全



然、抵抗がなかったようだわ」

先生は、李さんの言う所謂、ピストン運動を繰り返されながら、そう申されました。

激しく、時にはゆるく、まるで、そうすることを楽しんでいるような先生の手つきは、流石に、産婦人科の専門医らしい落ちつきを見せておられました。

「八、九、十、十一、十二……」

李さんは、先生の手元を見ながら、声を出して数をかぞえております。ロシア軍の将校たちの脂ぎった瞳が、ギラギラと輝き、私の全身や表情を、じっと眺めております。

「三十一、三十二、三十三……」

お八重さんの意地の悪い触手は胸から徐々に、お臍のまわりへと下ってきました。

お臍の窩の中へ指を入れたかと思うと、そのまわりを、虫の這う様に、もぞもぞと、指先が這いまわります。耐え難い擦ったさが、次第に体の深奥部へと伝わって、そこで燃焼したかと思うと、居ても立ってもおれない、じれったいような痒さ<sup>かゆ</sup>となって、皮膚の表面へ出てまいるのでございます。

私は、脇腹を、お八重さんの手で、思いつきり抓って頂きたいとさえ思いました。一思いに、そうして貰った方が、いくら、さっぱ

り、するか知れませんが。

擦ったさが痒さを増し、痒さが、また一層擦ったさを、増していったのです。やるせない感情が、胸いっぱいになりました。

「六十七、六十八、六十九……」

先生も声を出して回数をかぞえておられましたが、まわりにひしめいているロシア将校たちの顔も、今はもう、雲の上をさまよっている私の目には定かに入りません。

ただ、先生の澄んだ声だけが、天籟の声のように、うっとりとした私の耳に快く響いてくるのでございました。手も足も、ふわふわと空中に浮かんでいるようで、大の字に縛られているような感じは、少しもございません。

動かすまいとしても、どうしても、動かしなくなるお尻だけが、びったりと先生のお手で抱えられていますのだけが、妙に、生々しい実感となって、私の夢幻的な感情をゆさぶり続けるのでございます。

「七十九、八十、八十一、八十二……」

先生の綺麗なお声が依然として、数えておられます。私は思わず知らず声を出してしまいました。口走った、あらぬことは、どんな内容だったのか、自分でも、はっきりと掴めないくらい、私にとっては、それは衝動的な

ものでした。

体中が擦ったさと痒さで煮えたぎり、汗が頬から首筋を伝って腋の下から、脇腹へと流れてゆきました。

お八重さんの荒い息が、汗でべっとりと濡れた私の肌に吐きかけられてきます。

私は、はしたないとは思いつつ、また、声を出してしまいました。リズムがびったりと合って、呻き声も叫び声も、スムーズに口をついて出るのは、不思議といえば不思議でした。こうでもしなければ、このたとえようなない今の絶頂感に、とても堪えきれなかったのでございます。

「駄目よ、晶ちゃん。そんなに、お尻を振っちゃ、私のお仕事が出来なくなるわ」

先生の指が、私のお尻に、ぐっと喰い込んではまいります。そんな疼痛というものは、少しも感じません。それどころか、体中の血が一気に逆流して、一点に集中した感じで、突然、全身が硬直してしまいました。

「九十八、九十九、百。ヨウシ、五号テストハ、コレデ合格。次ハ六号のテストダ」

私は、李さんの非情な声を、夢うつつの間に聞いておりました。

咽喉の奥から絞り出すような呻き声を、誰



はばかり、思いの限り、大きく叫び上げた  
 い気持でした。体は、びくびくと微かに痙攣  
 しているのに、へもう終わったのだわ、とい  
 う安堵の気持が、私をして、がっくりと首を  
 落とさせていました。

☆

こうして、私は、五号から十一号まで、続

けてテストされたのでございます。

その間、何度呻き、泣き、叫び、そして、  
 悶絶した事でしょうか。数えきれないほどの  
 絶頂の嵐に吹きまくられて、もう、足を上げ  
 て立っていることすら出来ない程に、疲れ果  
 ててしまいました。

もし、両手を天井から縛り吊りされていな



イメージギャラリー

『陽の差しこむ時間』

原

由貴子

かったならば、とつくに、体を支える力を失  
 ってしまった、ヘナヘナと、ベッドの上に打ち  
 伏していたに違いありません。

もう、息もたえだえに、トロンとした焦点  
 の定まらない瞳をあげて、風にそよぐ尾花の  
 ように、天井から、だらりとぶらさがってい  
 たのでございます。

「ヨウシ、ココラデー休ミダ」

李さんの声で、私をいたぶり続けていたお  
 八重さんも、やっとのことで、私を解放して  
 呉れました。

「ふふ、晶子、とっても感じたようね。見て  
 いたこっちまでが、変な気持になったわよ。

おほほほ、鋭敏なのね、晶子」

ベッドを離れて、先生の方へ行きました。

「へえ、十一号までテストしたって？ 大し  
 たもんじゃないかえ」

お八重さんは、先生の手から最後に使った  
 お道具を受けとって、しげしげと眺めていま  
 す。十一号ともなりますと、もう片手の指で  
 は輪は握り込めない程の太さでございます。

今更のように、私はそら恐ろしくなってい  
 りました。しかも、これから毎日、これに  
 勝るとも劣らないようなロシア軍の将校たち  
 のお相手をしなければならないのかと、想像



してみただけでも、身のけのよだつような思いでございました。

縄から解放された私は、ベッドの上で、うずくまるようにして体をまるめていました。私は本当に、真底から気の遠くなるような、うっとりとした、<sup>け</sup>気だるい気分、身を沈めきっていたのでございます。

「先生、あの……」

そんな私も、少し前頃から、尿意を覚えはじめていました。さっきまでは、そんなことを考える余裕なかなかったのに、今になって、ふと、下腹部の圧迫を感じてしまったのです。一旦、考えだしますと、皮肉なもので尿意は激しくたかまってきました。

「どうしたの、晶ちゃん」

「あの……」

「はっきり言いなさいよ」

「あの、おトイレが使いたいんです」

「そう、だったら、頼んでみてあげるわ」

先生は、お八重さんの方へ向かって哀願されました。

「お八重さま、晶子がトイレへ行きたいって言ってますんですが、やって頂けないでしょうか。お願いします」

「ふーん、トイレをね」

お八重さんは、鼻の先であしらうような素振り、返事をしておきながら、ロシア軍将校たちと、ひそひそと、何かを相談しはじめたのでございます。

しばらく、お互いに頷き合って話していましたが、ジューコスビッチ参謀が、一言二言喋りますと、みんなから、ワァーッという喚声があがりました。私と先生は、何のことかわからず、きょとんとしておりました。

李さんは席を立て隣部屋へ入ってゆきお八重さんは、私の方へ近づいてきました。

「晶子、トイレは、とても行きたいの？」

「はい、辛抱できない位なんです」

朝御飯以来、まだ一度も行っていないで、その上、さきほどは咽喉が乾いたのにまかせて、たて続けに、大コップ三杯の水を飲んでいきます。尿意は、もう我慢しきれない位に、なっていたのでございます。

「じゃあ、させてあげましょう」

「ありがとうございます」

「うふふ、さあ、お礼は、どうだかねえ」

ところが、お八重さんは意味ありげに忍び笑いをし、なかなかトイレへ行かしてくれそうにもないのです。私は、ともすれば、漏れそうになる尿意を、必死になってこらえ、内

股をびったりと合わせておりました。

「お八重さま、早く、トイレへ行かせて下さい。お願いです」

「へえ、そんなにひどいの？」

「ええ、とっても。もう、我慢しきれないくらいなんです。ですから……」

「まあ、可哀想にねえ」

そこへ、李さんが、産室にあったガラス製の尿瓶しびんを持って入ってきました。

「先生、コレヲ、晶子ニ、アテテヤルノダ」

「ええっ、これは、尿瓶ではないですか。これを当てるって？ 一体、どうなさるお積りですの？」

「智恵子先生、晶子は、まだテスト中の囚人なんですよ。いわば、戦勝国の御主人様から見れば捕虜の身分というわけよ。一人でトイレへ行かせて逃げられたら、どうしますか。だから、お情けをかけて、これを使わせてあげるのです」

「まあ、お八重さま、それはまた、何というひどいことを。決して逃げたりは致しませんから、どうか、トイレへ……」

私は思わず絶句してしまいました。なんとこの残酷な折檻でございましょう。ロシアの大男の前に、うら若い乙女の裸身をさらして



いるのさえ、死ぬほどの辛いいたぶりでございますのに、その上、皆の前で排泄をさせるなんて、まるで鬼畜の行為でございます。

お八重さんたちが、地獄の悪魔の使者か、悪鬼の生まれ変わりのように見えました。さきほど、＼お礼はどうだかねえ＼と、あざ笑っていた言葉の意味が、今になって初めてわかったでございます。

「お八重さま、それだけは、お許し下さい。いくら、私をおなぶりになったら、お気が済むのですか。せめて人間らしく……」

「ふざけないでよッ。捕虜の分際で何を言うのよ。一寸、甘くすりや、つけ上がりやがって。晶子、使う、使わないは、お前の勝手だよ。折角、お前のためを思って、わざわざ探して持ってきてやったのに、いらなきや、いらないで、それでいいんだよ」

私は、ともすれば噴き出しそうになるのを必死の思いでこらえました。体中、べっとりと脂汗がにじんでまいます。下腹部をキリキリとさいなむ異様な膨張感が、全身にひろがってくるような感じがします。

「晶子、使ウノカ、使ワナイノカ」

「そうよ、したくないのなら、次のテストを続けるわよ。どちらにするのよ」

「シナイノナラ、コレカラモ、ズット、サセナイゾ、ソレデモイイノカ」

「晶ちゃん、ねえ、我慢出来るの。それともこれを使うの、どうなの？」

先生も、おろおろと、うろたえておられます。みんなから、そんな言葉をかけられますと、一層、尿意が激しくさいなみます。

「もう駄目、先生、助けて……」

「だったら、決心して、これを、お使いなさい。私が介添えしてあげますから」

「だって、先生……」

「晶ちゃん、顔、真っ青よ。いつまでも我慢し続けるなんて、体にも毒だわ。さあ、遠慮しないで、使ってごらんなさい」

先生は、私を居並ぶロシア軍の将校たちの方へ向かって、しゃがませて下さいました。

「さあ、晶ちゃん、思いきって、ここへ出してごらんなさい」

私の後へ回ったお八重さんは、ベッドへ腰を下して、足先で私の脇腹を擦るのです。それでなくても、全身に悪感おかんが走るような尿意と戦っている私ですから、そんな悪戯は、私にとっては、たまりません。

「ううう、お八重さま、許して。そんないたづらをなさるのは、お止めになって。うっ、

駄目よ、駄目よ、止めてエー」

「へへへ、晶子は、たいそう我慢づよい女なのね。辛抱できるものなら、いくら辛抱していても構わないのよ。一時間でも、二時間でも待ってあげるからね」

「イイイイ、そんなに我慢できませんわ。晶子、もう、出そうなの」

体をつき抜けるような悪感に、私は知らず知らずに、激しくお尻を振っていました。

「晶ちゃん、そんなに、お尻を振っちゃ、いけないわ。尿瓶が用をなさないもの」

「だって、先生、私、もう……」

「晶ちゃん、さあ、早く、今なのよ。思いつき、出してごらんなさい」

私には、もう先生の声も、お八重さんの意地悪い言葉も耳に入りません。

「先生っ、晶子、もう我慢できないわア。どうしよう。どうすればいいのよお」

「遠慮しないでいいのよ、さあ、早く。恥かしいのなら、目をつぶっていなさい」

「ナニヲ言ウノカ、目ヲツブツテハイカン。司令官殿ノ方ヲ見テイルノダ」

すかさず、李さんの怒声が響きました。

私は緊張の極限に達していました。もう、これ以上、我慢を続けていれば、身体は張り



裂けてしまいそうです。しかも、お八重さんの指の動きは、益々激しく、私の肌の上をうごめきまわります。

「さあ、晶ちゃん、決心して。前の方へ押し出すようにして、自分でガラスに密着させてごらんなさい。早く、早くよ」

私は言われた通り、お腹を前へ突き出すとガラスの容器に押しつけてみました。でも、いざ、筋肉の緊張をゆるめようとしても、そこへ集中しているロシア軍将校たちの好奇心に溢れた視線を意識しますと、途端に、萎縮してしまうのでございます。

「先生ッ、駄目だわ、出来ないの。とても、恥かしくって、出来ないわ。あああ……」

「そんなこと言わないで、晶ちゃん、決心するのよ。思いきって、楽になるのよ」

「だって、だって……。私には、とても、出来そうにないの。ああ、先生……」

もう、最後の時が来ていました。気が狂いそうになるまで身をさいなんだ膨張感が、忍耐の限度に達してしまっただけです。

「もう辛抱できないわ、先生。いいい、我慢出来ないの。許して、ひい——いいい」

私は体をのけぞらせました。先生は、私の体の変化を目ざとく感じとられて、ガラスの

容器を当てがって下さったのでございます。

私は、悲鳴とも呻きとも、叫びともつかない声をあげますと、全身の力を一気に抜いてがっくりと、首を垂れたのでございます。

ガラス瓶を叩く、激しい水の音が部屋一杯に響きました。それは、長い長い時間のように、私には思えました。

なんという恥かしさでございましょう。私は、弛緩した体を消え入りたい思いで、やっこのことでベッドにもたせかけて、しくしくとすすり泣いていました。いくら泣いても泣き足りない気持で、泣き続けている私を、先生は優しく、なぐさめて下さいました。

でも、それも、長くは許される筈もございけません。一休みしますと、再び、手と足を縛られて、悪夢のようなテストが始まったのでございます。

その縛り方と申しますのが、さっきとは違って、ベッドの上に仰向けに寝かされて、開いた両方の手を、ベッドの脇の金具に括りつけられたのでございます。

それまでは、よかったのでございますが、次に、足を縛られる時には、その余りの恥かしさに、両足をバタバタさせ、膝を屈伸させて、力の限り抵抗いたしました。

「コレカラ行ウテストノ器具ハ、ソレハソレハ、大キイモノダカラ、コノヨウニ、スルノダ。コレモ皆、晶子、オ前ノタメダヨ」

それは、なんという無惨な恰好でしょう。並んでいるロシア軍将校たちの方へ、お尻を向けて、両方の脚を、お八重さんと李さんの二人に、ベッドの左右から引っ張られたのでございます。

か弱い女の身で、どうして、逃れることが出来るでしょうか。もがけばもがく程、意地悪く、足首を頭の方へ引きつけてしまいますので、私は、お腹のところまで二つ折りになって、お尻ばかりを高く高く、挙げさせられてしまったのでございます。

ロシア軍の将校たちは、盛んにウォッカを交わしながら、がやがやと、賑やかに喋り合っていて、そんな、あられもない私を眺めて、指さしては嘲笑っています。

何を喋っているのかは、私にはわかりませんが、その態度からして、きつと淫らなことを話し合っているのでしょう。

先生は、只、おろおろとして、そんな不様な姿を晒している私に寄り添っていて下さいましたが、その先生も、次のテストでは主役を演じなければならなかったのです。



「先生、コレヲテストスルノデス」

李さんが、そう言って先生に手渡した、お道具は、今までとは比べものにならない、大きくて見事なものでした。手にされた先生は私の尻の方へまわられました。

さっきのように、両腕や肩口はだるくありませんが、足首をぐぐっと引きつけて、ベツドの両脇に縛りつけられているものですから私の体は、まことに不安定でございました。

「李さん、診察用の枕ないかしら？」

先生は李さんに頼んで下さいました。

「アア、枕ネ、ソレダッタラ、トナリの医務室ニアルヨ。トツテキテヤロウ」

その枕は腕に静脈注射などを行う時に使っていたもので白いカバーがかぶせてありました。それを先生は、私の尻の奥深く、挿し入れて下さいました。

それから泣き、呻き、脂汗を流しての一時



イメージギャラリー

『玩弄を待つ女たち』 マエダ・ヒオミ

間ばかりの悪魔のような、ひとときが、過ぎました。十六号のテストまで合格してから、やっとのことで、私は許されたのです。

もう、その頃は、全精力を使い果たしてしまった私は、朦朧とした意識の中で、ぐったりと体を横たえておりました。

縄もちぎれんばかりに、足の指に力をこめて、暴れまわったのも、今は夢のようです。

それでも、テスト後、腔圧を測ると、百二十を示しました。この百二十という数字は、普通の方なら、懸命に引き締めて、やっと出来る強さだそうでございます。

これを見て、ニコライエフ司令官を始め、将校の方たちは、一様に驚きの声を上げておりました。あくまでも、そうした科学的な記録を重要視する彼等の傾向は、私たち日本人には、理解の出来ないことでございます。

あとになって、智恵子先生から、いろいろと、そんな話を聞かされて、私は恥かしさに顔を赫らめたものでございます。

こうして、囚われの身となりました私たち日本人女性は、ロシア軍将校たちのなぐさみものとしての恐ろしい生活を余儀なくされたのでございます。

——(この項終り)——



カット・岡 たかし



△創

作▽

## S M 企 業

## 《第二話》被虐への道

秋津新次郎

世の中は、なかなか思うように行かない。そんな解り切ったことを、修一は今更のように、しみじみと感じた。

洋子の調教は順調に進んでいる。だが、それは、ピノキオという調教師と、その鞭の力である。

洋子のマゾ性はSM雑誌を読んでいたときの姿を、つぶさに観察して間違いはない。しかし、それはあくまで空想の中に自分をおいて考えたマゾ性であり、現実には、理不尽な暴力によって与えられる屈辱と苦痛は恐怖以外、何ものでもない。

洋子の一見、マゾ女に見えるしぐさは、ピノキオのもつ、鞭の力以外の何ものでもないことが痛切に感じられる。△まずい！△実にまずい！△取り立てて美人と言う程の女ではない洋子は、年が若いのと、大きな目、色の白い可愛らしい女というだけで、道行く人

が振り返るほどの女ではない。

その洋子の白い裸身はピノキオの鞭で、見るも無惨に変色していた。みみずばれの鞭痕に加えられたムチは、その皮膚をやぶり、癒えかけた傷口には、かさぶたができ、又、その上から更にムチがかさねられて、お世辞にも美しいと言えなかった。SM小説や映画では、白い裸身に赤いみみずばれが幾筋かつく程度で、あんな醜い姿ではなかった。

△なんとか調教方法を変えねばならない▽

小説の世界では羞恥責めの方法として、流し責めが使われるが、どうも現実的には無理なようである。美紀とのプレイで一度やって見たことはあるのだが、部屋一ぱいに立ちこめた臭気に辟易してしまった。



女のアナルに性器とは又ちがった快感がひそんでいることは事実であるが、修一自身のサド性が、それほど強くないのか、それとも修一の鼻が他の人間よりも敏感なのか、どうも現実に使えぬ責めではなかった。

それに、あの密室では、まだまだ不便なことが多い。充分考えた上で事をはこんだつもりであったが、倉庫代りのビルの地下室のことであり、防音装置を施すのが精一杯で、トイレのことまで手が廻りかねた。

洋子の排泄物は大型のおまるにとり、ピノキオ、ボロ武が交替で仕末をしているが、その仕末さえ、二人ともいやがって、その上、部屋にのこる、かすかな臭気さえ、修一は感じるときがあった。

☆

事務所の横にある、更衣室の仕掛けの穴から次の犠牲者である珠子を観察して、そのマゾ性の強さをおしはかっていた美紀は、そつと、あと片付けを、すますと、事務所へ入った。

「ごめんなさい。もういいわよ、帰っても」

「そう、ママこの本、借りていい」

隣の更衣室から、じっと観察されていたの知らない珠子は、実にさりげなく、読みかけのSM雑誌をふせた。

「えっ！ ええ、いいわよ」

「ママ、珠子、ママを、ちょっと見直しちゃった」

「えっ？」

「ううん、じゃあ、おつかれさまー」

美紀は、どきりとした。まさか、こちらの計画を察知されたのではないかと思ひながらも、少し薬が、ききすぎたのではないかと不安

になってきた。

美紀が口実をもうけて、珠子を事務室へともない、SM雑誌のついでである机の前に残して、さりげなく外へ出て、隣の更衣室から覗いて見たのは今日で四度目だった。

洋子の時は、三度とも美紀が入ってくる前に雑誌を元の通りつみなおし、さりげない風を装っていた。だが珠子の場合は、一度目から異様なほどの好奇心をSM雑誌に示した。

まさか、隣の部屋から観察されているとは知らず、物語が佳境に入ってくると、自分で自分の乳房を、わしづかみにして、眉をしかめて陶酔の表情を、あらわにみせていた。

美紀は、その姿を覗き込みながら、修一が現われる前のことを思い出した。世話になっていた中小企業の社長が、ぼっくりと亡くなり、その社長から教えこまれたマゾの血が、おさえようもなく、何人かの客と夜をともにしながら、いま一つ、物足りなさのこつて眠られぬ夜、一人、SM雑誌のマゾ女に自分を擬し、珠子のように自分の乳房を責めぬいた覚えがあった。

修一が現われ、店の客たちが、やっと射落したマダムの美紀を恐る恐る愛撫するのちがいが、ヤーサン独得の荒々しく、まるで女体を責めぬくような愛撫の仕方を残した修一が、美紀にとって忘れられない男になったのも無理のないことだった。

☆

「ねえ、どう思う」

「うむ、……」

珠子の、のこしたハママ、珠子、ちょっと見直しちゃったVという言葉は、考えれば考えるほど、意味のある言葉に、うけとれた。



修一は物事を考えるときの癖である下唇をかみながら、

「お前、どう思う」

「わからないわ。ひょっとすると、珠子は私以上のマゾかも知れないわね」

「やっぱり、そう思うか。でも誰に仕込まれたんだろうな」

「そうね、別れた亭主じゃないことは、たしかね」

「同感だな。とすると、それ以前の男だな。もし珠子が、お前以上のマゾだとすると、願ってもねえことだが……よし、お前、あした店に出たら、みんなのいる前で大きな声できいてみる。『きのうの本、面白かったか』てな。その時の顔色で、あとのことは考えてみる。それより、仕度しろ。これから一号のところへ出かけるんだ」

「えっ、洋子のところへ？」

「ばか！ 名前を呼ぶんじゃない。忘れるな、おめえは奴隷二号、あいつは一号だ!! すぐ仕度しろ!!」

どきりと美紀の胸がなった。洋子の前で行なわれるであろう修一の加虐に血が騒いだ。

美紀はベッドの小引出しをあけると、自分の身につけられる責め具をとり出すとポストンバッグにつめはじめた。美紀は、これからくりひろげられる、修一に対してセックス奴隷としての厳しい責めを想像しながら、一人、耳朶を染めた。

☆

地下室の別室で、黒いブラジャーと、デルタの部分のをぞいて、おしりの割れ目まで、すけて見える薄い黒パンティだけの美紀は、修一の手で、ひしひしと高手小手に、しばり上げられていた。

やや細身の綿ロープは、縛られることに馴れている美紀の身にも

しびれるような疼痛を伴って、くい込んでいる。

ガチャツと音がして美紀の両足首に手錠を改造した足かせがかかる。四十センチ位の鎖でつながれた足かせは、美紀の歩行を幼児の、よちよち歩き以外に、ゆるさない。

修一は、ズボンのポケットから、とっておきの責め道具を取り出した。今日にそなえて、修一が散々苦勞をして作り上げた新しい責め道具であった。直径八センチほどの、にぎりに白いビニールテープが巻かれ、その中には強力な電池が仕込まれている。長さは三十センチ余り。その先端をつまむと、修一は、するするとアンテナを引き出した。自動車のアンテナを改造したものである。

ビュと音がしてアンテナが空を切った。当然、次にくる鋭い痛みを意識し美紀は目を閉じた。修一はいつものように頭巾を被る。

「あるけ！」

ピシッと美紀のお尻に音がした。恐れていたほどの痛みではなく美紀は意外に思いながら修一に縄尻を取られ、一号奴隷のいる部屋へ追い立てられた。

ピノキオとボロ武は修一に貰った小遣いで、今頃、馴染のトルコ風呂へでも、しけ込んでいるのだろう。深夜の地下室の廊下は物音一つなく、静まりかえっていた。

突然、ドアが開き、蹴飛ばされるように、ころがり込んできた美紀を見て、洋子は驚きの声をあげた。

「アッ、ママ……」

両手をうしろ手錠に、首筋の犬の首輪に、高く吊られた身の不由さを忘れて、ベッドから飛び降りた洋子は、美紀の身体に寄り添った。



「バカ者！ 挨拶をせんか!!」

修一の低いドスのきいた声が、とぶ。弾かれたように二匹の奴隷は、修一のそばに、いざり寄ると、それぞれ片方ずつの靴に唇を押しあてた。

「一号！ チャックをおろせ！」

修一は、アンテナの鞭を両手でにぎって、しなわせながら、足を拡げると仁王立ちになった。無理な注文だった。ピノキオの鞭におびえ、何度、仕込まれても、ズボンのチャックを口でくわえ、男性をさぐり出し、口に、はおぼることは出来なかった。

「何をしている。早くせんか」

「お許し下さい、お許し下さい」

「許さん、命令だ!!」

「お許し下さい。それだけは、お許し下さい」

髪を乱して土下座して許しを乞う洋子の姿には、どこか甘えが感じられる。身体に傷がつくことを恐れ、出来るだけ手加減して鞭を使うようにピノキオに命じておいたので、身体の傷は、ほぼ癒っていたが、そのため、土下座をして、ひれ伏せば許してもらえという甘い考えが、その姿に、にじんていた。

「これでもかっ！」

修一はアンテナの鞭をにぎりしめると、そっと洋子の肩に押し当てた。

「ヒェッ！」

すさまじい悲鳴だった。ただ軽く押し当てられたアンテナの鞭の威力は、修一を、いたく満足させた。苦心をして作り上げた電池入りの鞭である。××ボルトの電流が、にぎりのスイッチを押すと発

射される鞭の威力に、洋子は呆然としていた。すうっと鞭が洋子の胸元に這う。

「ひいっ！ やめて、たすけて！」

びくんと身をのけぞらした洋子は、白いブラジャーとパンティだけの姿で、ぶざまに、ひっくり返った。

美紀も知らなかった。修一の手にした鞭の威力が、なぜに、こうも洋子に、悲鳴をあげさせるのか、まるで奇術でも見ているようにぽかんと見とれていた。

「二号、お前がやるんだ。一号、ようく見ておけ」

美紀は一瞬、躊躇した。何度か経験している事なのだが、洋子の前で、あられもなく修一の男性をくわえ込んで愛撫するさまを思うと、さすがの美紀も羞恥で身体が、ほてった。

「二号、お前も、この鞭がほしいか！」

修一の手がうごいて、美紀のブラジャーの中に鞭が入った。

「ひいっ！ ああ！ ぐうう」

すさまじい衝撃であった。美紀は許しを乞うことすら、忘れていた。飛びつくように修一のズボンのチャックに唇を這わすと、高手小手の不自由な姿勢で懸命に歯と唇を使ってくわえ込むために努力をはじめた。

大抵の鞭の痛みには耐えられる。いや、それどころか、その痛みすら快感に変えることが出来る美紀のマゾ性も、修一の電気鞭には恐れふるえた。何とも表現できない苦しさ、頭の先が、くらくらくとする衝撃は、もう二度と受けなくなかった。

美紀は修一のブリーフの中から、なんとか唇でひっぱり出そうと懸命に頭をふり立てた。もどかしくなった修一が、手をそえてやる



と、待ちかねたように、美紀はそれに、むしゃぶりついた。しいんと静まりかえった部屋に、美紀の、いや奴隷二号の奉仕する音だけが陰微に響いた。

「よし、一号、代れ！ お前の番だ!!」

修一は美紀を押しつけると、洋子の前に立ちはだかった。奴隷一号の唾液で、赤黒く光って、思わずあとずさりをしてしまう洋子である。

「どうした。まだ、この鞭がほしいか！」

ぐいっと突き出される電気鞭に、思わずかぶりを振った洋子は、目をつむると、おずおずと口をひらいた。美紀のように修一の感処を知らない洋子は、しっかりと目をつむると首を振りたてた。

「一号、目をひらけ！ なまけるな!!」

激しい叱咤の声に、あわてて目をひらいた洋子は、あまりの情けなさに、口にしたまま声をたてて、むせび始めた。無理に開かされた目からは涙がポロポロと頬をつたう。その姿を、そばで見ていた美紀は、自分では制止しがたい激しい嫉妬に身をふるわせた。

「ご主人様、どうか私にも！ 私にも、いただかして下さい！」

修一は頭巾の下で思わず、にやりとした。

「嫉いてやがる！ 美紀は高手小手の不自由な姿勢でにじり寄ると両膝をついて奉仕している洋子を身体でつきのけ、修一を奪い取った。修一はそのまま美紀に身体をあずけながら声を荒げた。

「一号!! 誰の許しで中止した！ くらえっ！」

電気鞭は容赦なく洋子の身体に押し当てられた。

「ひいっ！ 私じゃありません、ママが、ママが、グウッ、ヒュッ！」

鞭が身体から離れ、のたうち廻っていた洋子は、はっと我に返ったように猛然と美紀に体当りをすると、修一を奪い返した。思わぬ体当りに、ごろんと床に、はわされた美紀は、激しい嫉妬と、いかりで目を吊りあげた。

「やめろ！」

二匹のメス奴隷に鞭がふれる。

「ヒュッ！」

「グウッ！」

けものの咆哮に似た声を立てると二匹のめすは、その場に、うつ伏してしまった。しいんと静まり返った地下室に、二匹の女奴隷の吐く荒い息使だけが、きこえていた。

☆

美紀は事務所で一人、ほお杖をついて珠子を待っていた。

店を閉めてから客に誘われ、寿司を食べに行っている珠子が帰ってくるまでに、まだ一時間ぐらいかかるだろう。

美紀は昨夜の出来事を、ふと思い出した。思い出すたびに羞恥で顔の染まる思いがする。あられもなく、修一の男性を洋子と争って口に含んだその感処が、まだのどの奥に残っていそうだった。あれから、さんざんに洋子の前でいたぶられ、全裸になった身体をベッドに大の字に縛りつけられてしまった。

鞭でおどされた洋子が、美紀の肌へ顔をうずめ、激しく舌をつかい出したとき、思わず愉悅の声をもらした。

大の字のいましめを解かれ、ああこれで終わったと思ったのも束の間で、今度は洋子に対して同じような奉仕を修一に命令されたときは、思わず本気で許しを乞いたくなってしまった。



「許さん。甘ったれるな！ 自分だけいい思いをさせて貰っておきながら、一号が気絶するまで奉仕しろ」

ぐいっと電気鞭をつきつけられると、もう疲れも何もふっとんでしまつて、武者振りつくように洋子の肌を舌をはわしてしまつた。外に自動車の止まる音がして美紀は我に返つた。△珠子が帰つて来た△と思つたのだが、足音は店の前を素通りすると立ち去って行

つた。今日、夜のはじまる前、きのう修一に言われた通り珠子に声をかけた。

「珠ちゃん、きのうの本、面白かった？」

一瞬、珠子は、何のことかと訝かつたが、美紀がSM雑誌の事を言っているのだと悟つたのだろう。さつと頬を染めてうつむいてしまった。店の子のいる前である。素早く体勢を、たて直し、

「ええ、まあ……」

「あら珠ちゃん、何の本なの？」

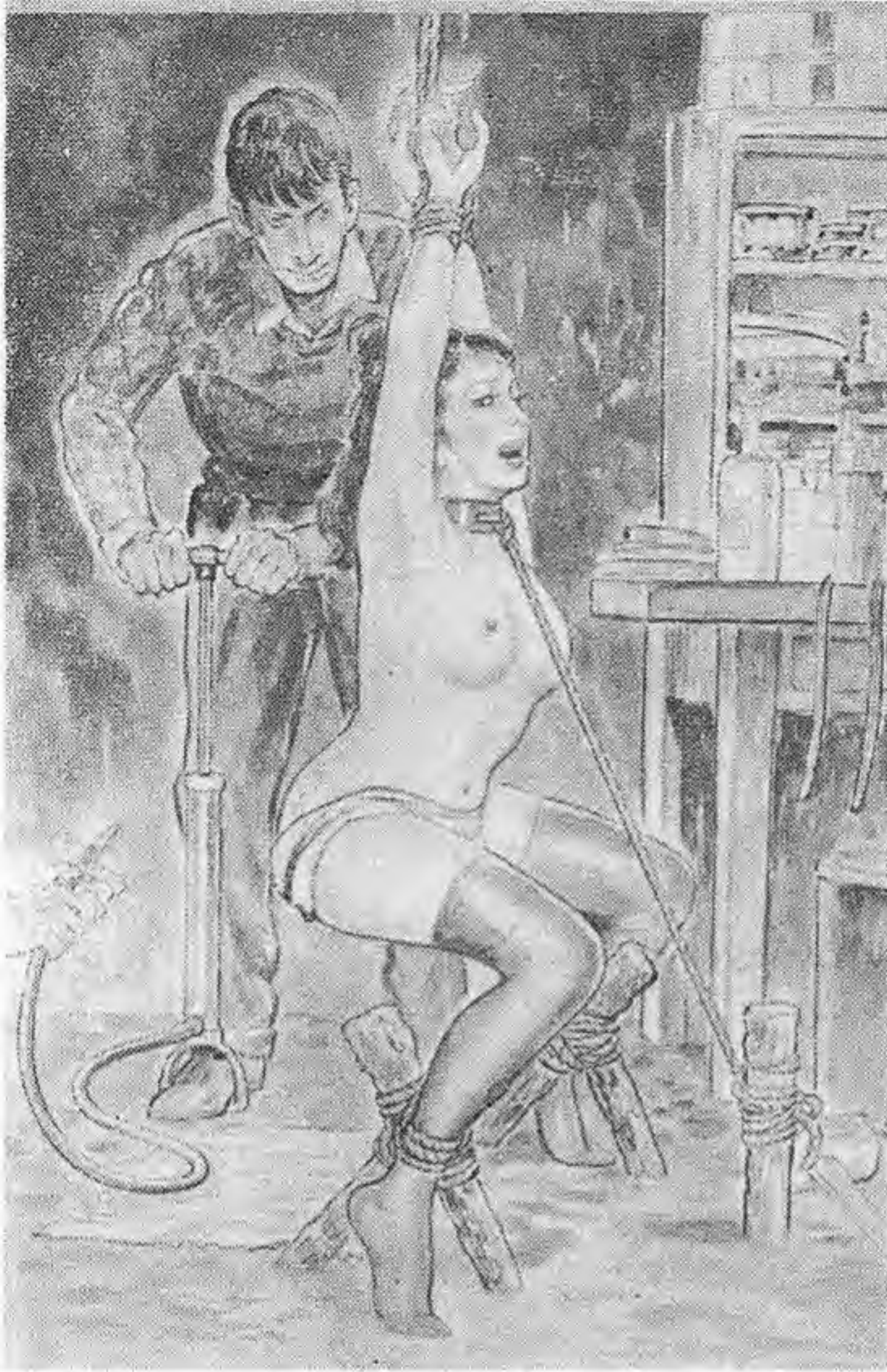
「えっ、うん……推理小説よ」

さすがは年の功である。とっさの場合でありどう答えるかと美紀が心配したほどでなく、水商売に入つて十年の歳月は、珠子をしたたかな女につくりあげていたようである。事情を知らない他の女たちは、なあんだと言う顔をした。

その時、どやどやと客が入ってきて救われた思いをしたのは美紀の方であつた。珠子の顔色が羞恥で染まつたのを、店の暗いこともあって知つたのは美紀だけのようだった。美紀は早速そのことをアパートで待っている修一に電話で知らせた。

「そうか、よし、打ち合せ通り実行しろ！ 電話が、ありしだい、そっちへ行く！」

美紀は腕時計をのぞいた。一時半を少しまわっていた。△帰ってくる、必ず珠子は帰ってくる△修一もそう言っているし、美紀にしても、



イメージギャラリー

『ある実験』

四馬

孝



そう思っている。だが珠子は、なかなか帰って来なかった。その時机の上の電話器が、けたたましく鳴った。どきっとした美紀は、あわてて受話器を取りあげる。

「おう、お前か！ まだか？」

「ええ、まだなのよ。ひよっとしたら帰ってこないかも……、あつ、今、帰ってきたようだよ。まちがいない、帰って来たわ」

「よし、うまくやれよ。成功したら、例の通りな」

受話器をおいて、一呼吸するまもなく事務所の戸があいて珠子が入ってきた。

「ごめんなさいママ。あのハゲちゃん、しつこいのよ。まくのに大骨、折っちゃった」

「ご苦労さま。まあ坐んなさいよ」

美紀と机をはさんで向かい合って坐った珠子は、じっと見つめる美紀の視線に出合ふと顔を伏せた。

「だめ！ 珠ちゃん、わたしの目を見るのよ。そう、いい、珠ちゃん、正直に答えてね。あんたSなの、Mなの！」

美紀に、じっと見つめられて、珠子は、またしても顔を伏せた。「だめ！ わたしの目を見て、MなのSなの。さあ言って頂だい」

「……」

「珠ちゃん、あんたMね。そうでしょう！」

珠子は童女のように、コックリと、うなずいた。気負いこんでいた美紀の肩が、すうっと、さがった。

「そう、やっぱり、Mだったの……」

「ねえ、ママは、ママはどうなの。S？ M？」

思わぬ反撃だった。

「さあ、どう見えて、当ててみなさい」

「Sよ、そうでしょう。私、一目見た時から、じいんと感じちゃったの。ね、ママ、Sでしょう」

「私がSだったら？」

「ママ、お願い、私をママのペットにして！ 私、ママの奴隷になるわ」

「さあ、珠子は女のわたしで満足できて、男の方がいいんじゃないの。珠子はレズの気があるの？」

「ううん、ちがう。男の人で、信頼出来る人、いやしないもの、私こりてるの」

「そうら、本音を、はいたわね。じゃあ、絶対、信頼出来る男の人だったら、プレイしてみる気ある？」

「……」

「大丈夫、身元は私が保証するわ。それとも私の保証じゃ信頼できない？」

「そんな、でも、こわい。だって珠子、もう長いこと、プレイしてないんだもの」

☆

珠子の年は二十九才か三十才になっているだろう。店に出した履歴書では、二十四才となっていた。もし三十才になっているとすれば美紀と二つしか、ちがわない。

栗色に染めた髪をポニーテールにしてみたり、うぬぼれわけにしてみたり、受け口で、あまり高くない鼻が、つうんと尖って、その下にちよっと小さな目が丸顔によく調和していて、一見、二十二、三才といっても通りそうなほど、若く見える。



十年前に、ある店をやめた、バーテンを知っていて、そのやめた経緯を、その店にいて聞いていたと、同僚たちとおしゃべりをしてゐるのを聞かなかつたら、さすがの美紀も珠子の履歴書をうのみにするところだった。

そのほか、いろいろの話のはしから二十四才は眉つばでありわざとあどけなく話すことばの一つ一つに精一杯の演技を見破ったのも、美紀のマダムとしての十年の経験があつたからだつた。

ダブルベッドの美紀のそばに、いつもいるはずの修一の姿が、ない。一緒になつたところの修一は、よく外泊をしてきた。翌日、修一の下着に、自分のとちがう化粧品の匂いをかいだのも一度や二度ではなかつた。

もともと堅気の人間でないのを承知で惚れた修一のことであり、修一の帰らぬ夜は、嫉妬心よりも、どこかでつまらない喧嘩沙汰で殺されるか大怪我でもしているのではないかと、元がもとだけにそっちの方が心配だった。

二年ほど前、S M雑誌を枕元において、そつと様子を窺いながらプレーをさそってみると、満更その気がないでもなく、そのうちにだんだん美紀とのプレーを自分から積極的にするようになってきて美紀には、あつという間に過ぎた二年間だった。

美紀は自分では、それほど嫉妬深い女だとは思っていなかった。だが今、一人寝のベッドの中で、今頃行われているであろう、珠子のセックス奴隷の調教を考えると、自分でも制止できないほど激しい嫉妬の感情を、もてあましていた。

先日、あられもない姿で、洋子と二人、修一の男性を争つたのも自分で制止出来ない身うちから湧き上がってくる衝動が、させたわ

ざだった。その激しい衝動が今、また、制止出来ないほど燃え上つてきて、それをこらえていると涙が出てきた。昨夜、修一にたしなめられたばかりだった。

「美紀！ お前、それほど、この俺が信用できねえのか!!」

ぞつとするような冷たい声だった。かつて修一が組の若い者に制裁を加えたとき、木島のアニキの顔つきの恐ろしさと、チンピラをふるえあがらせた片隣が、のぞけた。

「ごめんなさい。そんな、そんなじゃないんだけど……」

「いいか美紀。おめいにとって、今度のことあ、遊びの延長のつもりだろうが、俺は遊びで、こんなことをやるつもりはねえ。洋子にしてみても、いや珠子だってそうだ。いくら水商売のアカをなめて男を相手に生きてきたとは言っても、今、もしあの二人を逃がしてみろ。二人がサツにかけ込まないって絶対、言い切れるか。そうすりゃ俺だけじゃねえ、おめいだって、ただじゃ済まねえんだぞ、おめいが俺のやることに一々口出しをするんなら、俺には俺の考えがある。よく性根をすえて返事をしろ！」

有無を言わさない激しい調子であつた。修一の目が、それを裏書きしていた。△この人、本気なんだ！ あたしが、つまらない嫉妬をやいたら、この人、出て行ってしまつたりだわ！ V

今の美紀にとって、もう修一なしでの生活は考えられなかった。

「ごめんなさい。もう言わない。だから、捨てないで！ ねえ、すてないでね！……」

美紀がベッドで一人、小娘のように涙を流している頃、あの地下室では、修一、ピノキオ、ボロ武の三人が二匹の牝奴隷の調教の真最中であつた。

(第二話完)





文 献 研 究

女相撲書誌拾遺 (終)

雄 松 比 良 彦 (イラストも)

奇譚クラブ 女相撲関係資料一覧

本誌のバックナンバーは、現在、特志の古書店にはほとんどの号があるから、項目の列挙にとどめる。昭和48年4月現在。なおB5判のときのものは、すでに「雑考」でふれたので、A5判以後のものに限る。因みに、創刊は昭和22年11月、A5判は27年5・6月号(合併)から、30年6月号発禁のため同9月まで欠、同10月復刊から35年9月までは白表紙である。

昭和27年8月 増田史郎：女体相撲艶色史、

土岐相良：見世物としての女相撲、潮マリ

：日本性見世物変遷史

28年10月 土俵四股平：うわなり相撲

29年10月 土俵四股平：女闘美考現(一)

加茂三千彦：女相撲音頭

11月 同 (二)

12月 同 (三)

30年1月 同 (四)

3月 畔亭数久：娘相撲(絵)

31年12月 小西鉄二：美女血闘場面のア

イデア

32年1月 京洛生：大奥裸女血闘

33年7月 土俵：女闘美短歌

8月 土俵：女闘美相伝

9月 土俵：続女闘美短歌

35年5月 雪崎京人：女相撲と女闘美

8月 同



9月 同  
10月 同  
11月 同 : 女の相撲について  
12月 同 : 美術文学にあらわれた  
女相撲  
36年1月 同 : 女相撲と女闘美  
(以上雪崎氏の文にS・E氏の絵が多く入っている)  
2月 浦岸幸雄 : 女相撲ファン  
S・E : 投げの打ちあい(絵)  
3月 室井英山 : 裸女血闘のイメー  
ジ(S・E絵) 和知智義 : 女  
子相撲協会提唱  
4月 滝れい子 : (目次裏絵)  
5月 S・E : 女相撲図絵(絵、以  
下S・E氏はすべて絵)  
6月 S・E : 美女力士の激突  
(カラー)  
7月 滝れい子 : (目次裏絵)  
S・E : 勝負あった!  
8月 円山景三 : 夢の闘舞夫人  
S・E : けい古場の女力士  
9月 雪崎 : 元力士の懐旧談  
S・E : 上手投

10月 江波恵吾 : 女相撲ファン見聞  
記(写真入) 月形半平 : 女相  
撲覚え書(奇クサロン以下  
"サ"と略) カットS・E 2  
枚) S・E : 土俵際の攻防  
11月 雪崎 : 女相撲物語。吾婿博 :  
大奥裸女血闘の果て S・E  
: 外掛け 同 : 女相撲熱戦譜  
12月 S・E : 紅白大将同士の決戦  
同 : 引落し  
37年1月 円山 : 御土産女相撲。南川俊  
平 : 大日本少女相撲協会春場  
所両横綱勝敗の図(絵)。  
S・E : あわやの一瞬  
2月 S・E : 芳汗りんり。同 : 女  
相撲図絵。  
3月 同 : 激突。同 : 柔肌の激突。  
4月 円山 : 娘相撲と格闘場面。  
S・E : 激闘。  
5月 S・E : 豊土俵芸妓相撲。  
同 : 決戦。  
6月 津谷正春 : 女相撲思い出話。  
7月 同 : 同伊万里進 : 女相撲実録  
8・9月 (合併) 津谷 : 同

10月 雄松比良彦 : 高校女子相撲選  
手権大会  
38年2月 岡平吉夫 : 誕生す女相撲会  
4月 同 : 女力士会見記  
5月 円山 : 女房連の女相撲  
6月 岡平 : 女相撲雑感  
7月 同 : 女相撲結成てんまつ記。  
女素舞夫 : 女相撲熱戦譜。  
9月 津谷 : 女相撲思い出話 芦浦  
素舞夫 : (女闘一作あり)  
10月 S・E : 肉弾あいうつ豊麗美  
女  
11月 岡平 : 素人女相撲観戦記。  
同 : 興行女相撲への一提案  
(サ)。S・E : お嬢さん相  
撲のだいご味  
11月15日増刊 : 写真と絵画 S・E  
: 御前相撲。同 : 海辺娘相撲  
江波 : (写真)  
12月 岡平 : 女相撲史一考。S・E  
: お座敷娘相撲。  
39年2月 岡平 : 山中の女相撲。S・E  
: 奉納娘相撲、同 : 激闘する  
二人の美女



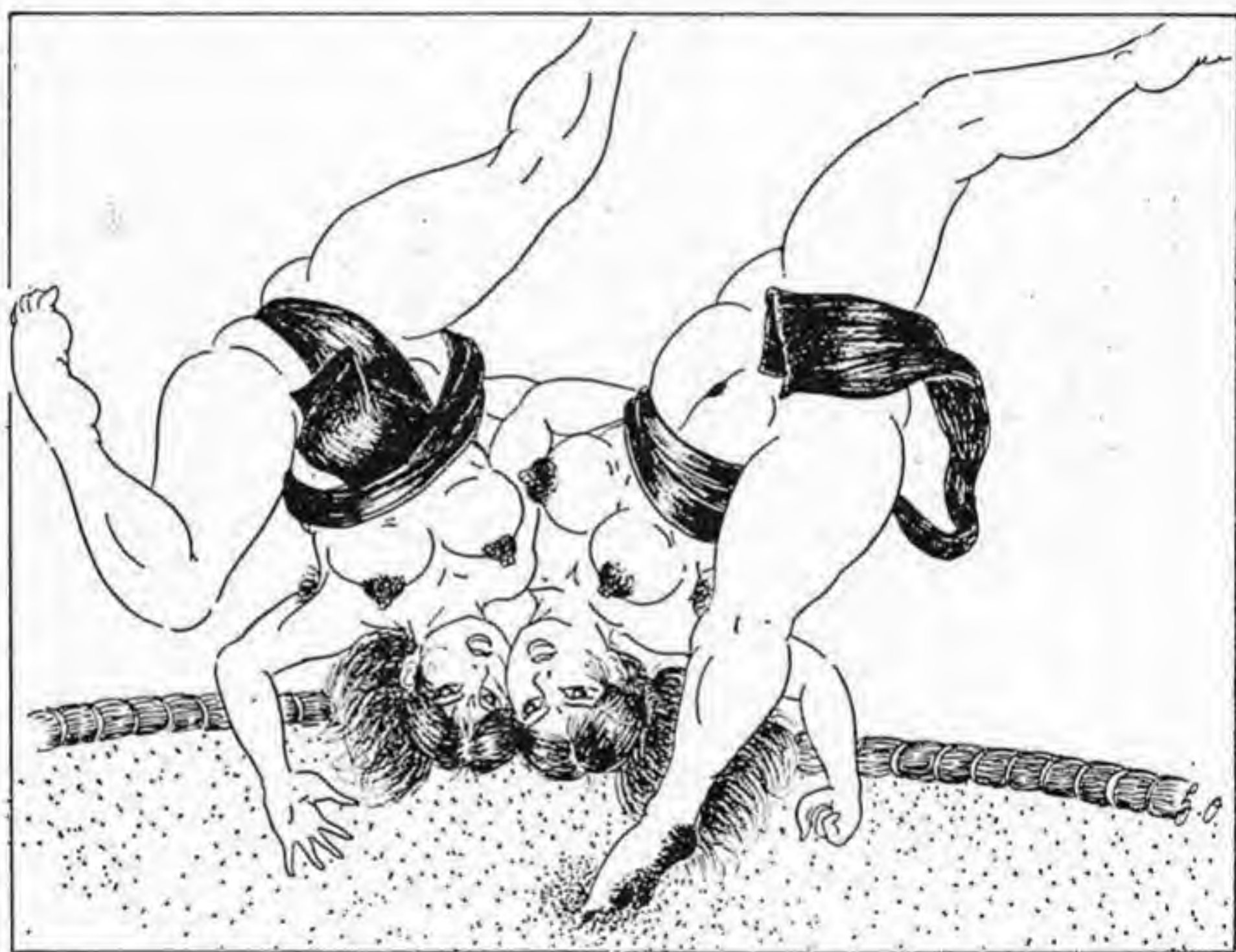
- 4月 S・E：揮を締め直す。同：砂の足形。雪崎：口絵解説 (サ)
- 5月 岡平：殿中妖艶女相撲 S・E：禁じ手五題の一 (前袋を引く)
- 6月 S・E：同右の二 (立揮を掴み吊り上げる)
- 7月 同：同右の三 (髪をつかむ)
- 8月 同：同右の四 (立揮を引いて投げる) 雄松：寒椿抄 (サ) に波多津女相撲の写真 (伊万里市史と同じ)
- 9月 同：同右の五 (突張り乳房突)
- 10月 田中一生：娘相撲勝抜戦。S・E：双差し。同：切返し (サ) 雪崎：口絵解説
- 11月 海野美津男：娘相撲復活。S・E：乙女の対戦 (2枚)
- 12月 海野：娘相撲物語。S・E：小股すくい。
- 40年1月 海野：兄と妹の手紙。 (以下氏の文には自作画多数)
- 2月 芦浦：デパート女相撲

- 4月 同：職場女相撲
- 5月 海野：続兄と妹の手紙
- 6月 同：相撲に魅せられた娘たち
- 7月 同：とよさんの告白。
- 8月 円山：危除女角力
- 8月 万田不二：浪江大五郎 (一) 増田トシロー：伊万里女相撲 (サ) 葉山夕起子：人形の女相撲 (サ、共に写真入)
- 9月 万田：同右 (二)。
- 10月 同：同右 (三)。海野：良男の体験
- 11月 奮斗士好太：花の女闘美たち (一)。(以下「花」と略す) 雪崎：娘相撲物語と湖畔女相撲によせて (サ、海野カット)
- 12月 海野： (サ、カット)
- 41年1月 花 (二)
- 2月 花 (三)
- 3月 花 (四)
- 5月 花 (五)
- 6月 花 (六)
- 7月 花 (七)
- 9月 花 (八)

- 10月 海野：孝二の結婚。
- 11月 花 (九)。奮斗士：女相撲のことなど (サ)
- 12月 花 (十)
- 42年2月 花 (十一)
- 3月 海野：朱美と文子の願い。室井亜砂路： (カット) (サ)
- 4月 花 (十二)
- 5月 海野：久男の結婚 (前) 奮斗士：女相撲の夢と実際 (サ、海野カット)
- 6月 海野：同右 (後)
- 7月 同：女相撲同好会 (一)
- 8月 雄松：女闘片辺 (サ)
- 9月 海野：女相撲同好会 (二)
- 11月 花 (十三)
- 12月 海野：若き領主の試み (上)
- 43年2月 同 (下)
- 3月 (サ、カラー分譲写真湖畔女相撲2枚)
- 4月 花 (十四)。S・E：力闘 (サ)
- 6月 雪崎：美女力士に期待する、 (サ、絵2)



- 8月 雄松：映画の女相撲に  
思う(サ)。(カット  
：T・T生)
- 10月 花(十五)
- 12月 花(十六)
- 44年3月 海野：女の闘士(上)
- 4月 同(下)
- 8月 花(十七)
- 12月 (カット1枚、サ)
- 45年1月 芦浦：二人妻(一)
- 2月 同(二)
- 4月 花(十九)(十八は欠)
- 6月 花(二十)
- 7月 花(二十一)
- 9月 椿寿郎：好敵手発見
- 11月 同：妻の挑戦。雄松：  
女闘ファンの弁(サ、  
カット)
- 46年1月 奮斗士：助太刀娘相撲  
・梢の冒険(上)。奮  
斗士：幻の女相撲を恋  
うる(サ)。妙花山人  
：(カット、サ)
- 2月 奮斗士：同右(中)



3月 同：同右(下)。椿：女房相  
撲。雄松：(目次カット絵)

比良彦、奮斗士好太、阿羅孝二、T・T生、  
芦浦素舞夫、春彦、桂和之。このほか無署名

- 5月 奮斗士：続花の女闘美た  
ち・熱い肌
- 8月 須田司：宝曆美女相撲、  
(上)
- 9月 同(下)
- 11月 椿：組打相撲
- 12月 奮斗士：艶姿土俵祭り増  
田：女力士の出現を願う
- 47年4月 雄松：女闘美雑考(サ)
- 9月 同：女相撲書誌雑考  
(上)
- 10月 同(中)
- 11月 同(下)(絵も)
- 48年1月 室井(亜)：したく(カ  
ット)

なお一部は挙げたが、さし絵等絵画は

上記各文中に入っており、筆者は次のよ  
うな人々である(順不同)：四馬孝、土

俵四股平、S・E(雪崎京人提供)、畔

亭数久、滝れい子、南村俊平、海野美津

男、妙花山人、椿寿郎、津谷正春、雄松



で不明のもの若干あり。

本誌の資料としては、上記の外に次のようなものがあるが、巻号が未詳である：加茂三千彦：春場所娘大相撲・八重桜対双乳山（影絵6）（昭和27～8年ごろ）土俵四股平：相撲取草（32年ごろ）S・E：縁日娘相撲（38年ごろ）

以下いずれも（サ）で：Y・M生：女闘美としての女相撲とプロレス。雪崎京人：天津竜子舞踊団の女相撲。同：第2回ビワ湖畔女相撲。江川乱：女性禪姿態美について。高島大井子：女すもう小信。

今後も多く新しい記事や絵画の掲載されることを希望したい。（この項完）

（補）その後の照会で右記不明分は左のように判明した。

土俵：32年9月、Y・M：38年12月（分譲写真入）、雪崎：41年9月（同）江川：44年4月（阿羅、S・E両氏カット入）、高島：45年9月（椿氏のカット入）なお、次の資料を補っておく▲※以外すべて（サ）▽

39年1月 S・E：高校女子相撲選手権

大会※

40年1月 奮闘士：ビキニとふんどし、

（カット海野）

41年1月 雪崎：女相撲連続写真を見て

（同）

46年11月 雄松：闘志（絵）※奮闘士：夢

の女相撲（カット海野）

又、本誌には「読者通信」欄があり、この関係分も20年間にはおびただしいが、これらのうちにも資料上注目すべきものが若干はあるが、今は省略した。A48・4・10V

### 「滑稽新聞」その他

「相撲の書誌考に滑稽新聞が出てこないなんておかしいじゃないか」と知人に叱られまして、一筆したためます。たしかに「雑考、拾遺」にはのせておりませんが、わたくしもこの新聞（月刊ですが）が女相撲の重要文献なること、勿論知っております。ただこの新聞今日稀観の珍本になってしまっていて、わたくし共昭和生まれの面々にはなかなか見られません。全貌が明らかでないので将来また続編でものせていただく機会があればと存じておりました。しかし将来あまりそういう折もないと思いますのと、女闘美ファンのなかには（長老諸賢は別として）この新聞の存在す

ら御存知ない方々もあるやに承りますので、不十分ですが、わたくしの知り得た範囲に限ってとりあげてみました。同紙はM三十四年一月創刊、休刊や終刊は未詳ですが、女相撲をとりあげた特色あるものでは主筆宮武外骨の「猥褻明治史」（S二・七）をはじめ、「みる生」のものでは「女相撲の都々逸」（S二・十）、「勝負絵馬」（S三・二）、「川柳女相撲」（S三・四）、「女相撲今昔物語」（S三・七及四・二）それにS五・七の愉快な表紙絵。「百合夫」氏の「芸者の裸相撲」（S三・五）、「千代子」氏の「うわなり打ち」（S三・一）、「乳房もみあふ女相撲」（S四・三）。更に耽好洞人の「女角力誌」（S四・八）S五・一。他にも女の格闘一般の記事があり、無署名では「亭主定めの女相撲」（S二・九）など。ある意味では奇クの女闘もののプレデセサーがこの「滑稽新聞」であったといえると思います。今後今少し調べてみたいと思っております。なお「みる生」作の「勝負絵馬」の分譲広告がS三・三以後毎号に写真入りで出ていますので、この実物を御所有の方も多いのではないのでしょうか。S二・五からしばらくは「奇技と滑稽」です。





小杉千恵さんが、七月号で人獣交婚『犬と人との性』と題して、エッセイを寄せられているのを拝見しました。

小杉さんは、率直に人獣交婚への願望を告白されると共に、果たして、それは可能なりや？ の疑問も示されております。

私は、本年五月に或会で人獣セックスのブルーフィルムを観る機会を持ちましたので、小杉さんの疑問の答になるかどうか、わかりませんが、ここにリポートしてみたいと思います。

実は私も、ヒトの女とイヌの男との間に完全なセックスが行われ得るか、非常に疑問に

## 『人獣交婚』リポート

△『犬と人との性』を読み▽

島

崎 慎

一

思っておりまして。最大の疑問は、イヌのPの長さ、ヒトのVの長さの差であります。

イヌの交尾は街中で時折、見かけますが、Pの長さは相当なものでありまして、いわゆる獣姦（ヒトの女が行うもの）は単なるメルヘンに過ぎないのではないかと永年思っておりまして、このフィルムを観た結果、それが現実に可能であることを知らされました。

このフィルムは外国製であります。国籍は不明であります。全体のトーンからみてヨーロッパ、特にドイツ製ではないかと思われるふしがあります。以下、出来るだけ忠実に誌上に再現してみます。

ファースト・シーンは全裸でベッドに寝ているブルーネットの女性の顔のクローズアップから始まります。カメラは次第に下に移動して行き、この女性が仰臥位で左手でオナニーをしている部分をアップでみせます。つまり

熟睡中、夢うつつでオナニーをしているという設定であります。

次のシーンは夢の中の場面です。

彼女がミニスカートの、ソファにすわってTVを見ていると、突然、頭のはげた中年の紳士が入って来ます。紳士は彼女を押さえつけ、ブラウスをはぎとり、ミニスカートをまくりあげます。さらに黒いブラジャーをはずし、やはり黒のビキニのパンティをぬがせて上にのしかかります。彼女はガードルにストッキングをつけたままで犯されます。紳士はセックスのあと、彼女の太ももに顔を沈めて自分のザーメンを飲みます。

ここで夢からさめたことになり、彼女が左手でオナニーをしたまま、パツと目を開けて天井を見つめているシーンが入ります。

やがて、全裸のままベッドから起き上がり部屋のすみにある洋服ダンス（らしい戸棚）



を開けますと、中型の黒い犬が尾を振りながら出て来ます。この犬の種類は不明ですが雑種ではないことは確かです。やせています。

ブルネットの女性は部屋の中央にもどり、カメラの方を向いて立位で太ももを開き、みごとな……をこちらにみせます。犬は後の二本足で立ち上がり、前足を彼女の脇腹にのばして、ペロペロと……中をなめます。

このシーンは案外長く続きます。その部分にバターなどがぬってあり、全部をなめつくすのかも知れませんが、そうではなく、犬としての前戯を、ちゃんとやっている様にもみえます。

女性は、今度は後向きになり、四んばいになります。つまりカメラの方に大きなヒップを見せるわけです。犬は、ためらわずに、そのヒップにかかって行きます。

この時、犬のPは完全に充血していることが確認できましたが、それが、いつからそうになったかは不明でした。戸棚から出て来た時は、未だ縮小状態であったことは確かです。

(フィルムを二度かけ直して確認しました)

ここから、人犬のセックスの本番シーンに入るわけです。カメラは両者の真うしろからとらえているので、スクリーンの上では女性

の白いヒップが犬の黒い体の外側にはみ出しえています。

白い女性の肉づきの豊かなヒップと、黒いやせた犬のヒップが異様な対照を見せます。(申し忘れましたが、このフィルムはモノクロです。)

女性は左手を後方に伸ばして、犬のPをあべき方向にくる様に何度か助けています。犬は、めくらめっぽうにピストンをくり返しているという感じです。

やがて、完全交尾に入った様子で、女性は両手を床に組み、その組んだ手にひたいをのせる姿勢をとります。ですから、ヒップを、やや上方につき出す感じに固定している様に見えます。

犬の方は二本足で、ほぼ垂直に立った姿勢で、ピストンをくりかえしています。カメラは移動し、両者の側方から、彼女の下半身をアップします。

ここで次の二点が確認できました。①犬のPをただ股にはさんでいるのではなく、完全に女のVで受け入れていること。②犬のPは先端から根元まで全部がドッキングしているわけではなく、先端部分寄りの十数センチに過ぎないこと。

さて、この本番シーンですが、われわれの感想では、この撮影は、数度にわたって中断がある様です。その中断は、本番全部を撮ると長すぎるのでカットしたのか、或は、本番がスムーズに行かないので、カメラのスタッフが何回か助けながら行ったので、中断したのか、両方が考えられる様でした。

やがてシーンはファイナーレに入ります。

犬がPを抜きとって女性のヒップから離れるのですが、ヒトとヒトの間で行われるときのオスの側の痙れんが起らず、いかにもするりと、あっさりと犬は体を離しました。

ファイナーレが、いかにも、あっさりとしていましたが、実際の撮影では、ヒトのオスと同じ動きがあったのでしようが都合で、その部分をカットしてしまったという風に見えました。

行為後、女性は立ち上がり、再びカメラの方をむいて両ももを開き、内側の状態を例の調子で観客の方へ見せます。

彼女はタオルで、たんねんに、それをふきとります。犬の方は部屋の隅へ行き、横ざまにすわり、一方の足を(左足)もちあげ、またの間に顔をつっこみ、舌でPをさかんになめています。



## イメージギャラリー 『ムシ寄せの芳香』 小川 茂 正



この両者は同一シーンでとらえていますがいかに二人？ が楽しい一ときを過ごしている感じが、出ていました。この瞬間、犬が畜生などという感じではなく意思の通じるヒトの一種である様な錯覚をおぼえました。

セックスはヒトとヒトとの間で行われるのが正常で、獣との間で行われるのは異常だというのが常識かもしれないが、このシーンは少しも異常という感じがしません。あたりまえのことが、あたりまえに行われたという感じで、何か印象に残るシーンでした。フィルムは、このシーンで終わります。

私は数人の会員と一緒にみたのですが、われわれの感想は、次の様なものでした。

①この女性と、この犬とは、気心の知れたプレイ仲間なのではないか？

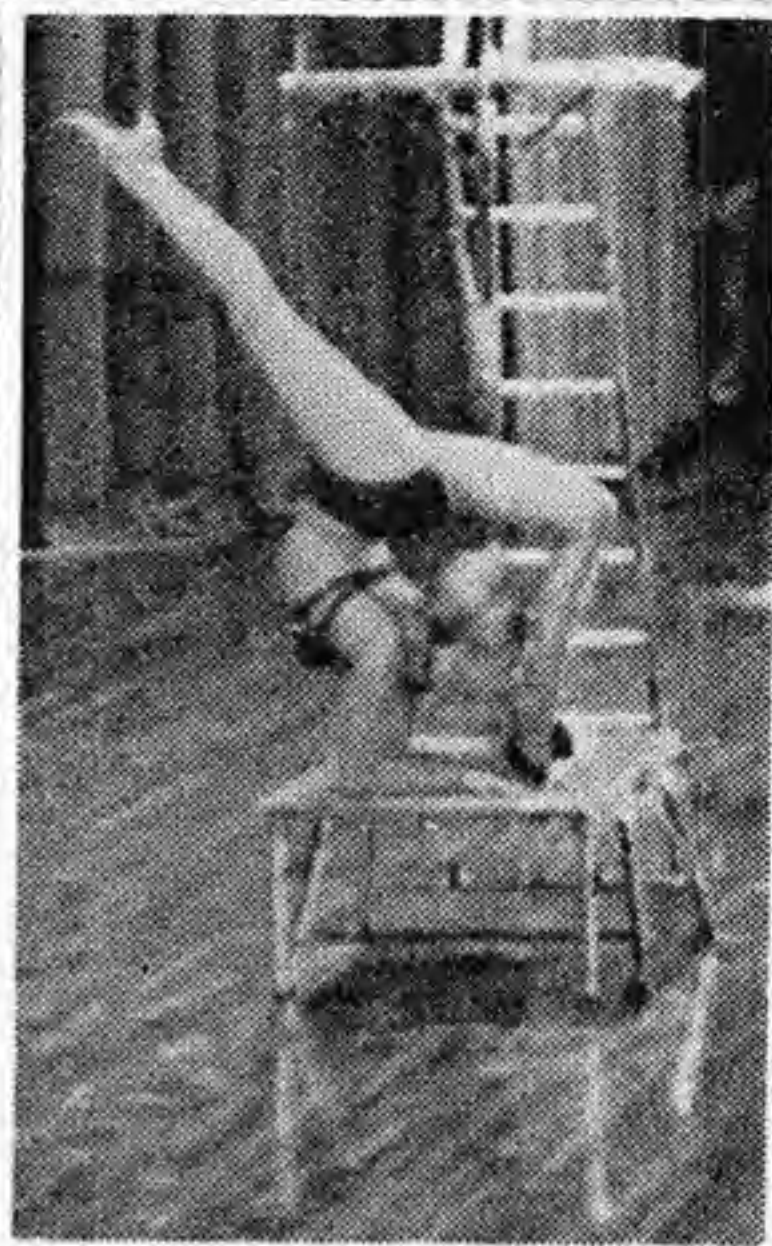
ヒトと犬はいつも、こんな風に、うまく行くとは限らないのではないか？ 特に、始めに犬が女性の……に舌を入れていたシーンがあったが、あれは犬の側で、この女性は自分のプレイメイトであることを鼻と舌で確認しつつ、いつもの前戯を行っていたと解釈すべきではなからうか。

②ヒトのVは雑菌などに犯されない様、清潔にして置く必要がある程、大事な部分であるのに、犬のPは舌と同様、相当に不潔なはずである。この女性はその点、どの様に解決しているのだろうか？

私の今日のレポートは以上の通りです。小杉千恵さん、貴女の御感想は如何なものでしょうか？ また甲斐千恵子さん（七月号二五二頁）の御感想も発表して頂ければ、うれしく思います。

（一九七三年六月十七日 東京・島崎慎一）





アクロバット・ダンサーの弓子から礼状が届いた。

拝啓、あなたの作品、本日入手いたしました。開いてみて、アッ、といったきり、私は声も出ませんでした。まさしく私の顔をもった全裸の女体が、なんと見事に、美しく、無惨に曲っていることか。

寝てもさめても、曲げたい！ 曲げたい！ と思っていた私の肉体が、想像を絶して、くねり曲っているのです。興奮のあまり、体全体が、ポッポと、ほてってくるのを覚えます。

さいわいにして、部屋には誰もおりません。私はさっそくヌードになり、アクロの

## 小説

曲

げ

屋

あたごのぼる

(写真・極場談好氏提供)

限りを尽くして、自分の女体を曲げてみました。もちろん、あなたの作品ほどには曲りません。

でも、興奮というものは恐ろしいものです。いつもなら痛くて苦しくて曲らないほどに、今日は私の女体が曲るのです。かまうものか、背骨なんか折れたって。お腹の皮が破れて内臓が飛び出したって満足だ。私は、自分の女体のほてるままに、めっちゃくちやに曲げて曲げて曲げぬきました。

ぐるっと、逆海老にそった私の首を、足首が包み、そこから私の悪戦苦斗が続きます。まず、足の裏を返して後に押しやれる形に直します。次に両手を上にあげて、そこにきている、それぞれの膝につかまりま

す。さあ、あとは興奮にまかせて、ぐいぐいと膝を下に引っ張るのです。さっきまで足首のあった位置に、私の膝を無理矢理、引っ張り込むのです。両膝の間から、私のほてった顔を出すのです。逆海老に丸まった女体から始めて、肋骨と腰骨と大腿骨ででき上った女体のトライアングルをつくるのです。いいえ、三角ではありません。背中とお尻の間に、空間があっては、いけないのです。ピッチリとつまったムクの折り曲げ女体をつくるのです。乳房をつぶしてうつ伏せになった私の肋骨の上に、ピッチリと私の腰骨を乗せるのです。そして、そこから、私の首のつけ根へと、私の太ももが下がるのです。



背骨をそらせることは、バレリーナでも女子体操の選手でもできます。バレリーナと、私たちアクロダンサーとのちがいは、背骨をそらせることと、背骨を折り曲げることとの、ちがいにあります。背骨を完全に折り曲げたアクロダンサーの背中には、お尻とピッチリ密着してしまつて、少しのすき間もないのです。

うつ伏せに寝たアクロダンサーは肩甲骨の間に玉子をはさみ、背骨を後ろに折り曲げて、静かにゆっくりともつてきた自分の尾骶骨で、この玉子をパチリと割つてニコリとすると、いいます。

ああ、私は今、鏡に映る現実の私の女体と、壁に立掛けた、あなたの作品と、そして私の妄想とが混乱し錯乱してしまいました。あまりの痛さと苦しさに半ば失神してしまつたのかもしれない。私の、ふがいなさを、どうぞお許しくださいます。残念ながら私の女体は、ただ丸めることができないだけで、肉のトライアングルをつくることなど、とうてい、及びもつきません。

でも、私の顔をつけた女体が、現にあなたの作品として、私の目の前で全裸で肉のトライアングルを形づくっているではありません

ませんか。私は決して、あきらめません。必ずや必ずや、たとえ今年は不可能にしても、来年のクリスマスまでには、きっと肉のトライアングルをつくつて、あなた様に妖艶な写真をお送りすることを誓います。

そして、その晩には、私の女体を折り曲げたまま、二日でも三日でも、続けて同じポーズをとりますから、どうか原色等身大の作品をつくってください。名づけて「アクロバット・ガール」何と美しく、何と凄惨な、そして何と誇らしげな名前でしょう。これぞ堪えに堪えた人類最高、極最美の花といえましょう。

今、あなたの作品が、私の女体に点火した炎は、時間と共に燃えあがつて消えることを知りません。あなたの同封のお手紙に添えてあつたひとことが、炎の燃え上がりと共に、私の女の意地を燃やしてやみません。

「これは、現実の白人アクロ・ダンサーのグラビヤに貴女の首を、すげ替えたものにすぎません。その折り曲げには、何の誇張もありません。貴女の女体が、一刻も早くここまで、折れ曲ることを祈つてやみません」

白人のグラビヤ・ダンサーが女なら、私も又、日本の女です。白人の女にできることが、日本の、女にできない筈はありません。

もっと曲げます。もっと曲げます。苦しい！ 苦しい！ 痛い！

いま、私は全裸です。頭の上では、私の花芯がじっと、このお手紙を読んでおります。女が女の花芯に誓つて、いまこの一文を、あなたに捧げます。

御身御大切に。

弓 子

◎

もっと曲げたい！ というアクロ・ダンサーの悲願が、いま、私の商売を支えている。私が十六才の、終戦一年前のことだった。私は床屋の雑誌で、生れて初めてアクロバットというものに、お目にかかった。「真の曲線美」と題したアクロバットのグラビヤだった。いまから考えれば、多分、岡本姉妹のどなたかの写真だったにちがいない。婦人雑誌のこの一頁が、一見した途端に、私の脳裏に灼きついて離れなかった。戦時中のことだから、この少女は、ヌードどころか、ズボン



をはいていた。しかし私には、そんなことはどうでもよかった。とにかく、曲り切った女体が、すばらしかった。

以来、私は、アクロバット女体の夢を見つづけて少年兵の戦陣に立った。

やがて終戦。戦後、間もなく、横浜の宝塚劇場で、私は本物のアクロバット女体に初めて、お目にかかった。そして、このきれいな人が、明日をも知れぬ空襲下で、こうやって毎日、肉体を折り曲げる練習に明け暮れていたことに、いい知れぬ深い感動を覚えた。その肉体は、まことに柔らかく、奇妙きてれつに折れ曲って、一体、どこがどうなっているかも、わからないほどに、くねり曲った。まことに夢のようであった。私は深い感動と興奮で夜も眠れなかった。

以来、私はアクロバットのグラビヤを片っ

端から集めた。外国のサーカスは必ず見に行った。ストリップも、まだヌード以前、パレスクの時代から、しきりに通った。ただ曲がる女体を見たいだけの一心だった。

しかし、いつの間にか、私は大部分のアクロバットに満足しなくなった。アクロバットショーの広告に飛込んでみると、バレリーナ程度にしか曲らない女体が多かった。町で見掛けるグラビヤの大部分も、結局は似たりよったりだった。

しかし、年に二度や三度は、胸のすくようなアクロのグラビヤに、お目にかかった。それらは皆、外人のものばかりであり、共産圏のものが概して、すばらしかった。こうして私のコレクションが集まると、私はそれらを手本にして、いつしか、ヌードアクロの絵を画くようになっていた。

しかし、アクロの写真もあり、ヌードの写真も手元に沢山あったが、画いてみると、ヌード・アクロの絵を画くことは意外に難しいことだった。とにかく、無理の限りを尽した女体である。着衣のお手本では、まるで見当のつけようもなかった。

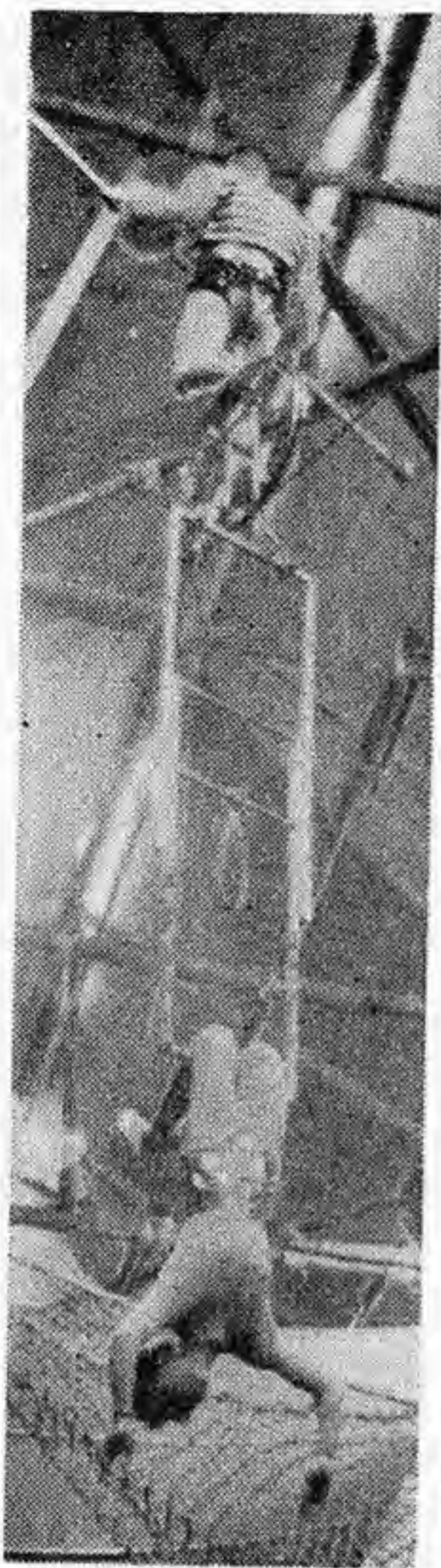
私には、まるでお手上げだった。しかし、それでも私の腕前は、徐々に上達していった。好きこそ、もの上手なれである。

ある日、浅草で、姉妹アクロダンサーのショーに感激し、こよなく曲る、その妹の方に私の作品を送った。もちろん、背中には誇張して極端に折り曲げた。乳房はひきつり、みぞ落ちは、ひどく凹み、肋骨の下部と、腰骨の上部は凄惨なまでに飛び出していた。

画面いっぱい折れ曲った女体のかたわらには、男が二人、立っていた。彼女は飛び抜けた美人だったから、顔は誇張することもなくプログラムのそのままを画けばよかった。

二人の男の前で、全裸のまま、凄惨なアクロバットポーズを露出している、この絶世の美少女の白黒点描のペン画は、このアクロダンサーを、いたく感激させた。

数日後、彼女は手紙に添えて、自分の全裸





アクロポーズの写真を二十枚も送ってきた。

……全く見事な作品ですのに、甚だ申しあげにくいことですが、少し事実とちがっているように思われます。

姉が申しますのには、アクロバット芸術と貴男のために、私が、ぜひとも、女の代表として、貴男に教えてあげる義務があるということですよ。

私は、恥ずかしさのあまり、思わず顔が赤くなってしまう。「じゃあ、あした、写真をとりますよう」きつく姉は私に申渡しました。そして更に、お腹を凹ませるために、夜、朝、昼の食事と飲み水を禁じられました。

あくる日、出すものは、すべて出し、お風呂から帰ってくると、姉は、すでに、くすりを用意していました。筋のつかないように、下着をつけないで帰った私は、思いきりよく着衣を脱ぎ捨てました。すでに私には、貴男とアクロバット芸術のために、女の代表として、覚悟ができていました。

私は手をついて、姉に「お願いいたします」と告げました。「はい」姉のことばには威厳がありました。

私はヌードの身で、姉の前にスックと立上がり、おもむろに両手を上げ、大きく後に振り返りました。お風呂で充分、暖めた私の女体は、お腹が空っぽなのと、相まち『自由』という、ことばの通りに見事に曲りました。ポーズが固定すると、姉は事務的に、私の女に脱毛剤を塗りました。乾くまで、姉は壁に寄り沿って、私の折れ曲ったヌードを、じっと眺めていました。

アクロバット姉妹というものは、必ず妹の方が、よく曲るものです。当然、お客様の拍手は妹の方に多いものです。そんな日など、宿に帰ってから練習していると、姉に「今日は、このポーズで寝なさい」と命令されることがあります。

姉は、そんな姿の私をタバコを吸いながら、四時間も五時間も眺めていることがあります。そして、やがて、ものもいわずにふとんに、もぐって寝てしまいます。もちろん私は、折れ曲った体が痛くて眠れませんが。朝十時、姉はキチツと身なりを整えると「もういいわよ」と無雑作に、いいはな

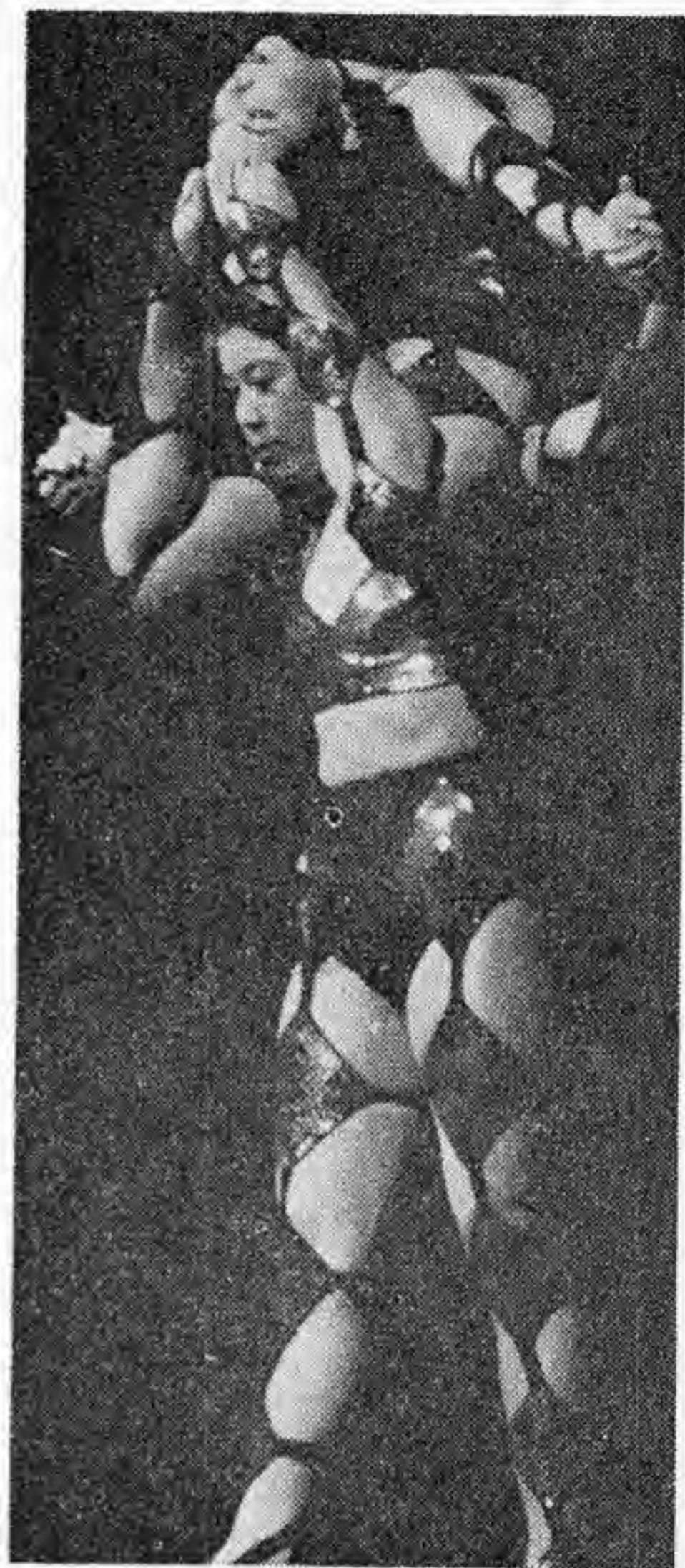
って買物に出ていってしまいます。一晩中、体を折り曲げていると、もう体が変になってしまって、一種の脱力症とい

うのでしょうか、起きようと思っても起きられません。深呼吸をしてから、ゴロンと横倒しになります。そして、やつのことで少しづつ、体の、曲げを解いていくのです。「うーん」と反対側に体を曲げ直すのには、五分もかかるありさまで。今後、アクロ姉妹のショーを、ご覧になるときは姉にも妹にも、均等の拍手を頂きとう存じます。

いつの間にか、お話が脇道にそれてしまいました。が、こういうときと同じように、今、私は姉に、じっと見つめられているのです。一緒に風呂に入ったことはありますが、ヌードの女体を、姉にしみじみと見られるのは、実は私にとって初めてのことなのです。いつもですと、こういうとき、姉は必ず私に舞台衣裳をつけさせるのです。どこか堅物のところがあるのでしよう。

しかし、きょうは、ちがいます。私は全裸です。姉に見られているだけで、どんどん私の興奮は、つのります。体が桜色になってくるのが自分にも、はっきりとわかります。五分たつと、姉はつかつかと私の前にきて、ピツとばかりに一気に、くすりを





引きはがしました。瞬時にしてムダ毛は消え、私の女は、あまねく露出されました。「きれいよー、あなた」

姉はやさしくキスをしてくれました。私には、もはや何の恥ずかしさありませんでした。興奮した女の自己満足というもののなかでしようか。

やがて姉はカメラを構えると、桜色の私を映し出しました。もう、うっとりとしてしまった私は、どんな大胆なポーズも自由にとることができました。そのたびにシャッターが鳴りました。

やがて姉は三本のガラス棒を取り出しま

した。そしてその夫々を、半分ほど私の体深く埋めました。私はもう夢中になって、くねってはくねってはガラス棒をカメラに向けました。それに応じて、三本のガラス棒は、上を向いたり正面を指したり、体の方向を、ことごとく示しながら、キラキラと光ってフィルムに納まりました。

「ごくろうさま」姉のひとことで、この女の、いけにえの儀式は終わりました。エロシヨウという感じは、少しもありませんでした。女と女だけがつくり得る、荘厳にして最高の儀式でした。

私は、ここに姉の協力によって、私の女

のすべてを、アクロバット芸術と貴男のために捧げます。美しいアクロバット画を、今後、たくさん正確に画いていただくために、私の女の内と外とを、あまねく貴男に御紹介できることを、私はアクロバットダンサーとして限りなく幸福に存じます。どうぞ末永く、御身お大切に

かしこ

この二十枚の写真は、いたく私を興奮させた。生れて初めてみるヌードアクロであり、実は、生れて初めてみるビィナスであった。私はこの二十枚の写真をもとにして、むさぼるようにヌードアクロの絵を画いた。そして、当然のことながら、このアクロバット姉妹の夫々に、正確で凄惨なアクロバット画を描いて贈り届けた。

もはや私は自由であった。私の手にかかれば、女体は自由自在に曲り、男の目の前で、その全裸のポーズを惜しげもなく露出した。やまとなでしこは、もちろんのこと、白人の濃艶のポーズも、また自由であった。

三カ月程して、私のところに一通の手紙が届いた。



貴男の画かれた全裸アクロの絵を、友人のアクロ・ダンサーから見せてもらいました。大変な感激でした。ぜひ、私をモデルにした作品を画いていただきたいと思います。ただ私は男の方の前で、全裸アクロのポーズをとる勇氣はありません。勝手ながら、写真をお送り致しますから、ぜひ、うんと曲った私の作品を、おつくり頂きとう存じます。どのような大きさの写真をお送りすればよいか、そして失礼ながら、どのくらいの謝礼をお送りすればよいかを、お知らせくださいませ。ご親切なお返事をお待ち申しあげております。

御許に

こうして私のところにアクロ画の注文第一号が舞い込んだ。今にして思えば、これが私の『曲げ屋』の開業であった。何となれば、以後すべての注文には「もっと曲げて」と切実な注文がついていたからだった。

私は早速、返事を書いた。至極、事務的に次のことを書き送った。躍る胸を押さえて、平常業務のように装った。



一、首から下は一糸も、まとわぬこと。  
一、アクロの限りを尽くしたポーズであること。一、フィルムは現像焼付の必要はない。撮影したそのままを送ればよい。一、ネガは返すが写真は返さない。ただし、決して他に公表することはしない。一、料金、四ツ切、黒白、点描ペン画一枚で五千元。

間もなく、手の切れるような千円札五枚と白黒三十六枚どりのフィルム一巻が、とどいた。これが『曲げ屋』第一号の収入だった。以来、今日まで、ポツリポツリと仕事が続いて切れることはなかった。宣伝や個展をした

覚えはないが、みんなアクロダンサーの口こみだった。そして、何よりも、「もっと曲げたい」というアクロダンサーの悲願が私の仕事を支えている。

◎

くねくねと曲る千変万化のアクロバットも基本のポーズは、たった三つしかない。ひとつは後にそることであり他のひとつは体を前に曲げることである。最後のひとつは、股を百八十度を開くことである。このうち、体を前に折り曲げることは、バレリーナでも、体操の選手でも、みんなできる。足首を肩の後ろに廻して首の後ろで組み合わせることも、練習次第で、できるようになる。股を開くことは素人でもできる人がいる。縦に開いたり、横に開いたり、或は百八十度を越して二百度くらいにまで開いたり、これらも練習によってマスターすることができ。

ところが、背骨を後に折り曲げることとなると、これはもう、十才未満の少女時代からアクロバットのトレーニングをした女体でなければ何ともならない。しかし、日本には、こういう恵まれたアクロ環境で育てられたアクロダンサーは殆んど、いない。大部分は、



十五、六、あるいは二十ぐらいになって、この道に入ったものばかりである。彼女たちの背骨は、そんなことはあっても、折り曲げることは決してない。日本のアクロバットショーが不満足なのは、このせいである。

いつか岡本八重子さんに、お目にかかったとき、女史は「小さな子をなだめたり、すかしたりして教えるのは、ごめんだわ」といっておられた。これでは、日本のアクロバットは、いつまでたっても、ものにならない。アメリカのアクロバット教室の広告では「小学校にあがる前の子供を特に探しています」と書いてある。

ここに、日本のアクロの貧弱なゆえんがある。もはや堅くなって、曲らなくなった女体を、うんうんいって曲げてみて、やっぱり曲がりませんでした、というのが日本のアクロバットショーなのである。

しかし「お陰様で」といおうか、そのために、日本には、曲らない女体と、どうしても曲げたいという強烈な女の意地が残った。ここに、私のような『曲げ屋』の存在し得る理由があった。

「あなたの女体を、あなたの心ゆくまで、曲げてあげます。ただし、四ツ切、白黒、点描

ペン画一枚、一万円です」こういう不思議な商売が存在できるのである。

●

それにしても、私が、この商売に入ってから、予想していたことではあったが、アクロダンサーの一部ではあるが、彼女たちの中には、自分の女体をいじめ尽したいという強烈な妄想にとりつかれている人の多いのには驚いた。

いま私が画いているたえ子、の画には、何とこんな無理難題な注文書が副えてあった。

先生、どうしても、お願い！ これは、私が中学のとき、アクロを習い始めたときからの悲願なのです。いいえ実は、私がアクロを習い始めた動機そのものなのです。先生、私はどうしても、私の首を、後にそりくり返って、自分のふるさとに入れてしまいたいのです。

先生、どうお、素晴らしいでしょう。すらりと延びた二本の足と、白い二本の二の腕が直接、生えているのよ。桜色の女のくちびるが、タートルネックになって、あえぐ私の首を責めるわ。

先生、四本足の、こんなタコのようなク

モのような白い女体が、両股を一ぱいに開いて二分、三分と男の前で踊りくねるの。やがて五分、苦しそうに踊りくねっていた女体が、音楽がやむと共に、息が尽きてバタリと倒れるわ。

思うさま体を拡げて倒れている私の女体を、眺めあかした男たちは、やがて、力を合わせて、私の股を二百五十度にも引き裂き、うんうんいって私の首を私のふるさとから引っこ抜くの。スポッと奇妙な音をたてて私の顔が、とび出すの。

息が絶えて、青白くなって倒れたままの私の女体の背中をめがけて、今度は男たちが力一ぱいに蹴り上げるわ。ぐなぐなに背骨を抜いてしまったような私の女体は、真二つに折れて宙に舞うわ。ドサリと床に落ちるとき、不思議に私の股は一ぱいに開かれて上を向くの。折れ曲って、股を一ぱいに開いた形が、私の最も自然なポーズになってしまっているのかもしれないわね。

五回。十回。十五回目にハンサムな男の蹴上げた一発が、偶然にも活になって、ドサッと落ちたとき、私の顔にポツと明るい血の気が、さします。目を閉じたまま、豊かな胸を波うたせて、苦しうに大きく息



をする私。二つ。三つ。そして十も深い息をついたかと思うと、桜色にのみがえった私はスックと立上がり、私の命を助けてくれた男たちにニッコリと、ほほえむの。

私は、やおら横を向き、わずかに股を開き、丸いお尻を張り出したかと思うと、両手を高く上げ、再び大きく、そり返るの。曲るわ、曲るわ。骨無し女の女体は、いくらでも曲るわ。私の首は股の間に、すぐにかくれてしまうの。そして、両肩が、お尻にピッチリと喰い込むわ。あごをつき出し顔を一ぱいに上げると、女のくちびるとくちびるがニコヤカにキスするの。このショーの最も甘い場面よ。

でも、これからが大変。男が何人もかかって引っこ抜いた私の首を、私はひとりですしこまねばならないの。しかも、ショーですもの、最も美しくしなければならぬわ。私は、まず両方の手を、ゆっくりと優雅に使って髪をかき上げ、体の奥深くしまいます。

残念ながら、優雅なのは、いまはここまです。これからは凄惨な孤独の女の斗いが始まるわ。恥ずかしいから、このところは先生に教えてあげられません。男たちに

も股の間に、はさんで見せないの。

でも、とにかく入っちゃうの。痛いなんでもものじゃないけれど、私の首は私の体深くピッチリと納まってしまふのよ。先生、ほめてください。

さあ、再び女体タコ踊りの始まりよ。男たちがアレヨアレヨと見ている間に、私はぐるりと、ひっくり返り、股を二百度にも横に開くと、男たちにゆっくりと見せてあげるの。首のつけ根がキラリと光るわ。こんどは両手両足を真横に拡げて、乳房をつぶして、ぐるりぐるりと床をころがるわ。ちようど、ひとつ団子の串ざしを、ころがすみたい。胸骨から恥骨までアバラをむき出してピーンと一直線に張った私のお腹の皮が、ピクリピクリとときどき動くの。そろそろ私の息がきれてきたからよ。先生、息がきれる前の一分間の苦しさをたらないわよ。でも、いま私は、男の前で全裸でショーをしているんだ、そんな気持が最後まで私を支えるの。最後に美しい総揚げのポーズを男たちにさらすまで、私は落ちたりなんかしませんわ。でも、恥ずかしいながら、そんなとき、苦しさのあまり、もうお腹の皮がピクピク、ピクピクと動くんです

って。でも、男たちは、その方が、かえっていいと、いってくれますの。優しい方たちですわ。

いま、私は総揚げのポーズで力がつき、床に動かなくなってしまうました。二回目のタコ踊りが終わったのです。

やがて男たちは、私の首を引っこ抜き、再び女体サッカードを始めることでしょう。私の骨なし女体は、まっぴたつに折れて宙に舞います。そして、私はこの親切な男たちの助けで再び桜色にのみがえることでしょう。

さあ、すぐに第三回目のショーが始まります。こんどこそは、きっと優雅に私の首を私の肉体に埋めます。そして、こんどこそは、お腹の皮をピクリともさせずに私は満ち足りて静かに息を引きとります。

先生、お願い！ 私の第三回目のショーを画いて。題して『タコ踊り』を。

たえ子

私はいま、この絵の構想に困っている。

(完)



## 連載・時代S小説

淫、極まるを聖といい、  
聖、極まるを淫という。  
その帰するところ不二。  
然るに、その善、不善を  
論じ給う人ありしか。

## 紫 蘭 の 門

(27)

## 風 流 極 道 ・ 軒

## 福 寿 草

福寿草の匂う床の間を背に、ゆったりと坐った元禄屋は、甲・乙・丙・丁と四つのロザリオを手に得心した笑みを、うかべていた。新玉の年がよみがえった天保四年癸巳の年の一月も、なかばのことであった。

珊瑚四十七箇を貫いた飾緒をもつ長さ五寸の黄金の十字架の立柱に刻まれている文字は甲夜のロザリオに——「色は匂へと散りぬるを」とあり、つづいて乙夜、丙夜、丁夜とそれぞれに「我か世誰そ常ならむ」「有為の奥山今日越えて」「浅き夢みし酔ひもせず」とある。これが「いろは歌」であり、弘法大師空海が創造したといわれる人生の悟り、汚れ多き此岸から彼岸への導きの深い意味を秘めた「四十八文字」であることは、よく知られている。問題は、それとともに刻まれた和蘭文字にあった。

甲夜のロザリオを例にとれば「色は匂へと散りぬるを」と刻まれたあとに「16・14・22・12・3」とある。

この不可解であった和蘭文字が、異国の数字であることを、老中領田下野から知らされ

前号まで——豊太閤の遺した五夜のロザリオをめぐって元禄屋の手中にある女は、小紫のお景、豊香、千登世、そして菊亭貴子と久我雅子。老中・領田下野の中屋敷の牢には御弓組百五十石衣笠内記の新妻・美和が拷問に喘いでいる。いま新玉の年がよみがえった天保四年正月、ゆうに一国を購うことのできる秘宝の謎の一端が、元禄屋によって、あきらかにされようとしている。

た元禄屋は、いま、豊太閤こと豊臣秀吉が、一子秀頼に遺した莫大な財宝を解く手がかりを得たのであった。

遺宝は、世界でもっとも芸術的価値が高いといわれている貨幣——天正大判を、千五百枚あわせて鑄造された大分銅金、ひとつで十六貫にもなるものを三千箇。昭和四十八年の現在でもゆうに一国や二国は買収するに足るほどの「黄金」であった。

それがいま、元禄屋の手に入ろうとしているのである。

元禄屋の思索の結果は——

甲夜のロザリオの「16・14・22・12・3」という和蘭数字を「いろは歌」の「い」を、

「1」に「ろ」を「2」に「は」を「3」に以下、順繰りに読んでいくことであった。





そうすれば「16」は、いろは歌の十六番目であり「た」となる。「14」は従って「か」となり「22」は「ら」となる。こうして指をくっていけば、甲・乙・丙・丁のロザリオのいろは歌と和蘭数字の謎は、たちまち解けたからをば  
われはひめなむ

ふしみねの  
こかねなす  
と、なるではないか。

「宝をば我れは秘めなむ富士嶺の……となるの。そしてそのあとは「黄金なす」であろうが、玲瓏・富士のいづくかに、やはり秀吉は遺産をのこしておったか」

もし十六、十七世紀の頃、つまり日本歴史上で、一度だけこの島国が「金銀湧出」——ゴールド・ラッシュのチャンスを迎えた時代に生れておれば、黄金造りの館々をたてなれば、国中を「現世の桃源境」にしてみせると豪語している元禄屋である。

いま、豊太閤の遺した秘宝をとく鍵をえて胸さわぐものをおぼえながら、もう一度、秘文を噛みしめるように呟いてみた。

が、

「富士山は東西四里・南北五里、そのいづくの場所に黄金を秘めたというのであろうか」確かにこれでは、広きにすぎる。

元禄屋の権勢をもって、何千、何万の人々を動かしたとしても、ただ「富士嶺」だけでは秘宝発見は難しいであろう。

「フッフッフ、問題は、戌夜じゃ。戌夜のロザリオに刻まれた和蘭文字を読みとることじゃわ」

元禄屋は臉のうらに、まだ逢ったことはないが、將軍家齊公の御落胤と称し、ここ数年来、関東一円で「怪盗」との名の高い徳夜叉の顔を描いてみた。

その名のように夜叉のような怨念に狂った男のようでもあり白眉端麗な若者のようにも



思われてくる。

「徳夜叉め、最後の切札を握っておるわ」

好敵手をたたえるような笑いをうかべた元禄屋は、

「どちらが勝つかのう。人間六十年と申してな、人間六十になるまでは、あらゆる情熱を注ぎこんで自分の夢の実現にわきめもふらず猪突猛進するものよ。墓場のなかから、つかい残した情熱がうらめしうにさまよいでるなど真平御免じゃ。僕は六十才までの間に」

グイッと屠蘇の大盃をあおった元禄屋は

「僕は六十歳までに、あらゆる肉体と精神力を完全燃焼させてしまふ所存じゃ」

黄金製の呼鈴をふったのは、番頭をよぶためであらう。

「還暦という言葉もあるが、六十才をすぎたなおも、のうのうと生きながらえている奴等にろくなやつはおらぬようじゃて」

ゆうに一國をかうにたるだけの秘宝が、手に入ろうというとき、なおも悠然と、ひとり呟いた元禄屋は、福寿草の黄金色の花に眼をやった。そのとき、

「御主人さま、お呼びでございますか」

昭吉の声が、襖のそとでした。

「貴子をよんでくだされや」

「かしこまりました」

はずんだ声がして、勇み立った足音が長廊下にひびくのを聞きながら、元禄屋は、「姫始めなとしてやらざるまいて」とひとり呟くと、福寿草のかたわらの筐から愛用の縄を取り出すのであった。

## 重 ね 餅

白綸子の長襦袢姿の貴子が、昭吉にともなわれて部屋に入ってきたとき、元禄屋の手中には、紅と白とのだんだら模様の紐がおさまっていた。

「明けましておめでとうございます」

元旦から何度か、使った言葉であったが、昭吉にうながされるまま貴子は、すがすがしい青畳に、三つ指をついて挨拶をした。伏目がちに見上げるその眸には、小正月をすぎてもまだ一度も自分を抱こうとはせぬ元禄屋への恨みのような驕りが刷かれていた。

盃を唇に、じいーと貴子のあたまのてっぺんから爪先までを眺めた元禄屋は、つと、「それが小笠原流の挨拶かの。膝を、もそつとひらくのが正式じゃろうに」

「ハイ。こ、これは……」

貴子が、ハツとしたように切長な眸をみひらくと「まことに申しわけありませんでした旦那さま……」と、オロオロした言葉のおわらぬうちに、さらさらっと衣ずれの音がして白綸子でつまれた膝のあたりが、かすかに揺れた。

小笠原流の礼法——といま元禄屋は言ったが、これは元来、武家の礼法であり、足利三代將軍義満が、その美貌のゆえに寵愛したところの、たかが十六才にもみたない四国は阿波の出身・小笠原長秀の挙措進退に範をもとめたもので、いわば「衆道」の所産にすぎなかった。それを後世、徳川家康が幕府を開くに当って三百諸侯に強制し、はては幕府に阿諛追従する公家衆の間にもひろまっていたものであった。

貴子とて前右大臣菊亭政房の息女——その礼法を身につけていないはずはなかった。

だが、正式の辞儀の場合に、両膝の間をにぎりこぶしひとつ開くという規定は、いまの貴子には、あまりに苛酷と思われた。

かすかに衣ずれの音をつたえたものの依然として膝のあたりのたたずまいに変化のないのを見てとった元禄屋は、もう一度「もっと開きなされというたに」と声をかける。



「で、でも……旦那さま……」

消えいるように答えて、伏目がちに、みあげる貴子の頬は、はやくもほんのりと紅色にそまった。それをみて、

「これ、昭吉さんや。私は、なにも腰のものまでとれとは、いつけなかった、はずですぞ。お前も、ちかごろは、めっぽうわるになられたようじゃな」

「申しわけありません。ですが、これもひとえに御主人さまのお導きでございまして」

ニヤッと、笑ってみせる昭吉に、元禄屋もつい、つりこまれるような笑顔をみせ、

「まあよいわ。さあ、貴子や、いつまでも差ろうていても、はじまるまい。膝を開き」

三度、主人から命令されては、貴子も拒むわけにはいかない。

昭吉に言われるままに、紫色の湯文字を座敷牢でとって、この部屋に連れられてきた。

膝を開けば、どうなるか——身をきられるような恥かしさではあったが、

「旦那さま……」

羞かしそうに元禄屋をみあげると、ゆっくりと膝をひらいていった。

青畳のうえで白綸子の布が揺れる光景は、いかにも小正月に応わしい雅びやかな趣きと

いえよう。しかし、「もそっと、にぎりこぶしを二つぶん」と追いうちをかけられて、

「ハ、ハイ……」

と両膝をさらに押しひらき、おもわずせつなそうに喘ぎを洩らす貴子の風情は、なんとも、なまめいたものであった。

「いつに変わらぬ佳い匂いでございます」

青畳に額をすりつけるようにして鼻を、うごめかした昭吉は、

「お内儀さま。今度は、双肌を脱いで」

とまるで自分が主人にでもなったかのような口をきいたが、元禄屋は別に怒ろうともしなかった。

「ひどいことを……昭吉さん」

たたきこまれた被虐反応の炎が燃えあがってくるのを感じながら貴子は、昭吉の言葉がほかならぬ元禄屋の命令であることを察知すると、

「旦那さま……」

震える声で言って、ソッと襟に手をのぼしひだり、右と長襦袢の肩口をずらせていくのであった。

正絹ちりめんの腰紐ひとつで支えられた白綸子の長襦袢が、わずかに腰のあたりを覆っているだけ——むっちりとあらわれた貴子の

裸身は、いよいよ磨きがかけられて、肉が盈ち、二人の男の視線のなかで皎々と、かがやいていた。

「フッフッフ、どこまで色っぽくなることかのう。みるたびに、麗しうなりおって。さあ、おいで。縛ってやるによってな」

「ハイ、旦那さま……」

右手で乳房を、左手で腰紐にまつわる長襦袢を押えて立ちあがり、裸身を「く」の字にまげて二歩、三歩すすんだ貴子は、元禄屋のすぐ前にきて坐り直すと、三指をついて、

「旦那さま、神妙に、お縄をお受けいたします……」

何度、使った言葉であろう。最初は、無理矢理に強制されて、台詞のようにいったものであったが、この頃では言葉の、はしばしにわれ知らず情感がにじんでいるのを貴子自身を感じていた。

「両手を、うしろに回して」

「ハ、ハイ」

巨軀を立ちあがらせて元禄屋が背後に回ると、貴子の双の腕は、それに応じて燦めくような背中中、たかだかと交斜される。

「柔らかな躰じゃ、よう腕が、あがるわ」  
いったん両手首を捉えて、その撓みぶりを



楽しんだ元禄屋は、紅白だんだら模様をの紐をゆっくりと華奢な右手首に絡ませていく。

「ア、アッ……」

つづいて左手首にも紐が搦まり、二本の紐がひとつにされて、クルクルと両手首を括りあげ、それが左の二の腕に二巻きされるときの気持——さらには、背後からの紐が乳房の下へとキリリッと、ひき廻されて締め上げられるときの心情——最初のうちは、まるで焼火箸をあてがわれるような戦慄を覚えていたものであったが、それがこのごろでは一種いいような不快さとなつて、貴子の身体と心を、桃色の露のように押しつつむのであった。

「旦那さま……」

五尺余の黒髪が、青畳をバサツ、バサツと打ったのは、右の二の腕を締めつけた紐が、再び、乳房へと返り、そのふくよかな丘の麓にふかぶかと喰いこんだ、せいであつた。

「い、いとうご、ござりまする……」

「痛いはずじゃわ。だが、それも初手の内。

やがては、じわじわとな」

乳房の上下に、それぞれ三筋の紅白の紐をいつもより強烈に喰ひこませた元禄屋は、

「重ね餅にしてやろうと思つてな、昭吉さん

や。それ、その糸を取つて下され」

重ね餅——といわれてハツとした昭吉であつたが、糸を取つて下されといわれて胸を撫でおろす。重ね餅とは、不義密通した男女を重ねておいて試し斬りにすることではないのか。いくら元禄屋から許されているとはいへ主人の妻である貴子を、さんざんに騷りものにしている昭吉にしてみれば、ハツとしたのも無理からぬことであつた。

が、どうやら、そうではないらしい。

すると——、まさか正月のお飾りの重ね餅というわけでもあるまい。

「御主人さま。この糸をどうなされます」

筐のなかから金糸銀糸をよりあわせた糸をとりあげて訊ねる昭吉に、

「餅がありましようがの。極めつきの餅がのう」

いわれて始めて気がついて、

「これは、これは。私としたことが。まさしくこれこそ、まことの餅……」

「その餅をできるかぎり重ねてみたいのですじゃ。だが、弾力のあるいきもの。はたしてどこまで重なつてくれましようかのう」

「大丈夫でござりましよう。半分くらいは、

結構、重なつてくれるものと存じます」

「まあ、やってみましよう。お前さんは、左をな、できるかぎり右へ寄せて下され」

「かしこまりました」

正座している貴子の左側へ、ぴったりと身をすりよせた昭吉は、

「お内儀さま。御主人さまの御命令ですので失礼させて頂きます」

「な、なにをなされますの。お、おやめ下さい。昭吉さん、やめて下さいまし……」

番頭の手が左乳房にのびてくるのをさつた貴子は、ハツと反対側に上半身を向けたがそこには、元禄屋の大きな掌が待ちうけており、がっちり右の乳房を、つけねから驚づかみにされて悲鳴をあげた。

久我雅子のそれに較べれば、いくらか処女のようにかたく、乳首が上に反った乳房であつた。ましてや、いくら高炬燵や長火鉢で暖められているとはいへ、時は小正月。貴子の乳房が、いっそう硬く、ひきしまっているのはやむを得ない。

その乳房を、ときほぐすかのように元禄屋の五本の指が這いまわつた。

「旦那さま……お、おいたは、おやめ下さいませ！」

すぐ眼のまえで揺れうごくたぶさを眺めな



がら貴子は臍を締めようとしたが、のびてきた昭吉の手で左乳房を掴まれると、

「アレッ……昭、昭吉さん！」

と叫んで、つい、膝が崩れる。

「膝の乱れは、心の乱れと申すな、貴子」

ほのかに漂ってくる蘭麝の香りに鼻をうごめかした元禄屋は、今度は左手をも加えて、右の乳房を、ゆっくりと揉みほぐす。

主人のやりかたを真似るのが番頭の役目とばかり、昭吉も両手をつかって、まるで餅でも、もむように左乳房を蹴っていく――

「ア、ア、アッ……」

胸もとを二人の男に襲われて、貴子がどんなに身を悶えさせたかは、想像にあまりあることであろう。

こうしていまの時間にして二十分くらい。

当時の言葉でいえば「半花――花、つまり一本の線香の半分が燃えつきる」くらいのときが経ったであろうか。

いくら「反応」の遅い貴子であっても、次第に臍がはててくることは自然のうごきというものであり、喘ぎが甘ったるくなり、肩も、背も太腿も、朝日をあびた牡丹雪のようにとろけてきて、きれながの眸が、うっとり

と潤んでくるのも当然のことであった。

と、

「もうよかろうかの、昭吉さんや」

つと顔をおこして、淡く桃色に染まった胸もとを眺めた元禄屋は、

「さあ、こちらへ引き寄せて下されや。私もほれ、こうして！」

力のこもったのは声だけではなく、右乳房を掴んだ指先にも、いっそうの力をこめるとグイッと横に、まげようとした。

同時に、昭吉も左乳房を右に傾けたが、とてものこと、重ね餅になるどころではない。ゆたかな乳房はプリーンと、またもとにもどってしまふ。

「これは、おどろき！ ご主人さま、重ね餅には、とうてい、なりませぬ！」

が、元禄屋は、あわてなかった。

「乳房を重ねることは、これほど豊かに熟しておっては、やはり無理じゃったの。だがな

昭吉さんや」

含み笑いをうかべた元禄屋は、

「餅は餅でもぐみ餅、真珠餅、紫式部の重ね餅というのもありましょう」

「ムラサキシキブ……ですって」

「さよう。夏になると濃い紅色というか淡い紫色というか可憐な実をつけてくれる花のこ

とですじゃ」

ここまですわれて、やっと気がついた昭吉の眼が、紅白だんだらの縄の間からとび出している貴子の乳房のいただきに注がれた。

「御主人さま、これでございましょう。このふたつを重ね餅になされますのでしょうか」

言葉の終らぬうちに元禄屋の指がスウィッと右の乳首にのびた。遅れじとばかりに昭吉が左の乳房のつけねを搾りあげると、右の方へと押しつけて乳首と乳首を触れあわせる。

「ア、アッ……アッ……」

乳房のなかでも、もっとも敏感なのが乳暈の中央にそそりたつ乳首であることは誰でも知っている。その乳首――紅真珠とも、桜んぼともムラサキシキブの花の実ともおもわれる可憐な輝きを見せる双つの珠寶を、二人はニヤニヤ笑いながら、寄せあわせていくのであった。

「だ、だんなさま……昭、昭吉さん」

いつのまにやら、ほのかに汗ばんできた首頸をのけぞらせて貴子は喘いだ。

「どうだい、気分は？ え、貴子」

何度も何度も双つの乳首を擦り合わせていた元禄屋は、昭吉がさし出した金糸銀糸をよりあわせて強靱な糸を右手で持つと、



イメージギャラリー

『乙女の妄想』

須坂

旭



「少しは痛い、我慢するのだよ」

双の乳頭を力いっぱい交差させておいて、クルクルと巻きつけて、二重、三重に縛る

——というよりも巧妙に括りつけていった。

「く、くるしい……い、いとう、痛うござり

まする」

「お内儀さま、だから御主人さまが我慢せよと、おおせられましたでしょう」

甘い吐息をはきかけられた昭吉は、たっぷりと肉の盈ちた肩から背中へと、われ知らず

唇を這わせていった。

「旦那、那さまア……」

双つの乳首を重ねて縛りつけられた乳房は、ちょうど象牙の橋のように見えた。いや、ほんのりと桃色にそまっているのだから、太い虹のかけ橋というほうがより適切であろう。

「さあ、出来たよ」

ボンと貴子の肩をたたいた元禄屋は、正絹ちりめんの腰紐を、するりと抜きとって「アッ！」と喘がせ、

「お立ちなさい、貴子」

羞恥にそまった顔をあげた貴子であったが、やがて、思いきったように立ちあがった。

白綸子の長襦袢が、百合の花びらが散るように青畳にすべりおちた。

「さあ、あの柱のところへ」

このうえなおも、どのようにしていたぶろうというのであろうか、元禄屋は、正面の文弥柱をさして、はずんだ声で貴子に命じるのであった。

## 蜘蛛の巣縛り

文弥柱は別名・哭き柱ともいう。なぜそうよぶのかはあきらかでないが、享保の頃に岡



本文弥という男がでて「文弥節」という浄瑠璃の一派をひらいたがその音声が、閨中の女の叫びに酷似していたところから、ただたんに文弥といえは嬌声をさすことになったという。さすれば、正面・床の間の向って左側にある木肌をもろに出している丸柱を、なんで文弥柱とよぶのであろうか。

桧なり杉なりの木肌が、女の肌似ているところからか、それとも――。

やはり女が、この柱で、春情を招いて哭くからであらうか。

とまれ、元禄屋はその木の香の匂う文弥柱に、大きく股をひらかせて貴子を立ち縛りにしてしまつたのであつた。

「重ね餅につづいてしめ飾りをしてやろうと思うのじゃが」

「しめ飾りと申されますと、あの正月の」

「そうじゃ。だが、門松やお注連縄しづなとは、ちと違ひましてな。フッフッフッフ」

またもや金糸銀糸の、より糸をとり出した元禄屋が含み笑いをうかべて指さしたところは、柳の葉をたてにしたような、へその下であつた。

はやくも、それと察した昭吉が、

「面白うござりまする。これはまことに面白

い遊びでござりまする」

と手を拍って喜び、

「お内儀さま。お喜びなされませ。御主人さまが、ほれ、この糸で飾ってやろうと申されておりまする」

うっすらと眸をひらいた貴子にも元禄屋の意図が、おぼろげながらわかつた。

「旦那さまア！あまりに、あまりに……」

（ひどうござりまする！）という叫びをかみころしたのも、自分の想像が、あまりに、ふしだらで、万一、違つていた場合の恥かしさを考へてのことであつたろう。

が――、

貴子の想像は間違つてはいなかつた。

「貴子や。姫遊びというのはな、姫。つまりは……」と元禄屋は、貴子がはげしく身悶えするのにかまわずに、

「この美しい肌に、この金糸銀糸を蜘蛛の巣のようにはりめぐらせてみることをな。じゃ。フッフッフッフ。それもこれも、みな、お前が可愛いせいですぞ。誰が吉原や深川の芸者や女郎たちに、こんな遊びを、するものですか。お前なればこそ、からかつてみたくもなるのじゃ。つまり、もとをただせば、お前の

駄が余りにも美しいからじゃ」

「ヒ、ヒイイ……旦那さまア。お、お許しを！」

「許しませぬ。お前の肌が、男を惑わしてやまぬこの美肌が、罪づくりのもとですじゃ」乳首縛りのときの悠々さに較べて、短兵急な、いたぶりを元禄屋が開始したのは、どうやら彼自身、燃えあがるものを覚えたからであらう。

元禄屋が、そうであれば昭吉とて同じ。いや昭吉のほうは、もう座敷牢で貴子の湯文字をとりさつたときからだといつてよかつた。その昭吉が、

「御主人さま。私にも、お手伝いを、ぜひ」

金銀の糸を捕縄のようにピンと眼のまゑで張つてみせ、貴子の真正面に坐りこもうとしたから元禄屋が、

「一の糸は、この私。二の糸もな」

と、それを押しのけて、どっかりと、あぐらをかいた。

「このこと、ここを、まず、こうして……」

握つた元禄屋の手が、巨軀に似合わぬ器用さで「しめ縄」を張り合わせ始める。

「ヒ、ヒエエッ……」

その痛さは、乳首を縛られたときのものと較べようもない烈しさであつた。



「おやめになって……ど、どうか、おやめになつて。ヒ、ヒエエッ……」

見栄も外聞もなく下をみて、自分のどこがどうされているのかを知った貴子は、次の瞬間には咽喉元をのけぞらせて絶叫していたが、

「痛い痛いのは初手の内。なんどいえばわかるというのかな、貴子さんや。フッフッフ」

閨中の嬌声を「文弥」ということは、先に述べたが、別にまた「鬼声」「騒声」「世迷声」「叫快」「快悦」「喜悦」……といい、あるいは「叫死」とも、名づける。なかでも「叫春」と呼ぶのは、まことにいいえて妙。いま細くて強い糸で、あちらからこちらへ、こちらから又、あちらへと括られていきながら、貴子の唇から、ほとぼしりつづけた叫びは、まさに「叫春」そのものであった。

「フッフッフ、金糸銀糸がよく似合うわ」

思う存分に「しめ縄」を張り終わった元禄屋が、満足したように立ち上がると、つぎは昭吉であった。

「お内儀さま、失礼いたします。御主人さまのお許しを得ておりますもので、どうか、どうか……」

あとは言葉にならず、ゴクンと生唾をのみ

こんでみつめたが、心残りにも、もはや糸を絡ませる余地は、なかった。

「御主人さま。これじゃあ私は、いったい、どうすればよいのか……」

泣きべそをかいて訴える昭吉に、

「花園があるじゃろうが、花園が。それに菊・花も咲いておることじゃろう」

「菊の花でございますって！」

「そうじゃ」

「でも私には、そのほうの趣味は、まったくございせんので」

やっとわかった昭吉は、そのほうの趣味はない、といったが結局は主人のいう通りにするほかは、せつかくの金銀の糸をつかうすべはなかった。

「御主人さま！ 意地の悪いことを、なされます。せめて一カ所なりと、残しておいて下さればよいものを！」

と、半ば自棄くそで金糸をからませたところ、偶然にも、貴子にとっての最深最秘の「泣かせ所」であったことは、昭吉にとって幸運であった。

貴子は、とたんにギューッと、身がちぎんだ。もちろん、呼吸もとまっていた。その反応の烈しさに、昭吉が「おやっ」という顔で

貴子を振り仰ぐと、

「ヒ、ヒアアア……」

ひときわ高い叫びが、ほとぼしって「人」の字型の裸身が、大弓のように反った。

「御主人さま……こ、これはいったい！」

「やっと気付いたようじゃの。それを知っておるのは、この私と、いまひとり、ほれ、鞭兵衛の子分の斑縄の斑猿」

「ああ、あのときの、こ、これが」

二カ月ほどまえであつたらうか。貴子を廊下の中央で曝しものにしたとき、麻布六本木の別邸からやってきた斑猿が、ちょっとしたひと責めで、貴子を陶醉させたことを思い出した昭吉は、

「こ、ここがそうでございますのか、ここがお内儀さまの泣き所でございましたか」

金糸銀糸を投げすてると、宝の山にでも行き当たつたように、小躍して喜び始めた。

「ア、アアア……昭、昭吉！ お、おやめおやめになつて！ ね、アアア……昭吉ったら！ い、いけ、いけません、いけせんたらッ！」

貴子の唇から絶え間なくあがる叫びが、部屋中にただよっている蘭麝の香りを鋭く引き裂いていく。



「フッフッフッ、これは嬉しうございます。

これは、ほんとに！ 何という幸せ！ これからは、この昭吉、いつでも、お内儀さまを骨の髄まで痺れさせてさしあげることが出来ます！ お内儀さまア！ ア、アアアオオオ……」

叫びは貴子の唇からだけでなく、いつしか昭吉も、これにならって「世迷言」を声高にくり返し始めたのであった。

そして、興奮しきった手つきで「泣き所」を攻めたてる、あいまいに昭吉は、金糸銀糸のより糸をはりめぐらせていくのであった。

乳首重ね餅、つづいてこの蜘蛛の巣縛り。さらに「泣き所」まで攻めたてられる貴子。蘭麝の香りにかわって、より強くて雅びな麝香鹿の香りが漂い出てきたのも、当然のことと、いえた。

文弥柱——これは、まさしく泣き柱。

つやつやした木の肌に柔肌を、すりよせる貴子の姿態には、ふだんの慎しみぶかさは、もうどこにもなかった。

これを眺める元禄屋の精悍な顔に、われ知らず笑みが、うかんでいた。

「この分では、はやばやと雑司ヶ谷の寮に行

かずばなるまいのう、フッフッフッフ」

二刻がほどまえに昭吉をよぶために鳴らされた黄金製の呼鈴が、ふたたび鳴った。

貴子と昭吉が、なにひとつ気づかない間に襖の外で手をついた二番番頭の和吉の耳に、「駕籠を二つ、いや、三つ、三つじゃ、急いでな」

「かしこまりました」

長廊下を小走りに急ぎながら和吉は、三つの駕籠に、誰と誰とが乗るのであろうと、指をおって考えていた。

「半花」ののち——

駕籠がきたことを知らせにきた和吉は、そこに揮一本の昭吉が、お内儀の貴子により添って立っているのを認めると、

「昭吉さん！」

と声を、はりあげた。

「この二人は、ひとつの駕籠にのせますよ、和吉さん」

そばで元禄屋が笑いながらいう。

「御主人様。すると駕籠が、ひとつ、あまりまする。もう一つの駕籠には、いったい誰をおのせになりますので」

せきこむような和吉の問いに、

「和吉さん、お前がのるのじゃ。そして雑司

ヶ谷では、この二人の世話をして貰います」

思いがけない幸福に、和吉がとびあがって喜んだのは、いうまでもない。

たちまち、お得意の女言葉で、

「旦那さま。ありがとうございます。ぜひおともさせてくださいませ。あちきが、せいっぱいお世話させて頂きますゆえに、どうかおよろしくお願いいたします」

嬉しさを顔中にうかべると、駕籠を中庭にひき入れるために駈け出していった。

「旦那さま、雑司ヶ谷の寮へ……なぜ、妾が……まいらねば……。こ、こんな恥かしい姿のままで……」

文弥柱から解き放たれて、紅白だんだらの紐で厳しく縛りあげられた裸身を「く」の字にまげて抗議する貴子に、

「水野さまが待っていらっしゃるのよ。フッフッフッ、狎という、けだものと、ごいっしよにな、狎という……」

狎——

「あ、あの、犬の、犬の狎でござりまするか、あの小さな……」

「そうじゃ。さすがは水野さま。おやりになることが人の意表をつく」

水野出羽——昨年の秋、勅使押小路中納言



高明が江戸に下向したとき、それが貴子の前夫であることを知って、なおかつ、その饗応を元禄屋に命じた筆頭老中であつた。

じいっと唇のはしを噛みしめる貴子に、そばから昭吉が、

「たとえ相手が御老中さまであろうとなんであろうと、私が、いつもおそばにおりますゆえに、お内儀さま、ご安心なされませ」

返事はなかつた。

貴子にしてみれば、いわばここまでは、いくら恥かしいといつてもうちうちの遊びといえた。

だが、まだ行ったことのない雑司ヶ谷の寮へ、しかも、狎がいるという「責め場」へ、なぜ、行かなければならないのか！

貴子は（旦那さま、お許しを！）と心のそこから訴えようとしたが、そのときはすでにおそく、和吉のはずんだ声が中庭でした。

「駕籠が揃っております、ご主人さま」

元禄屋が、ゆっくりといった。

「のう、貴子よ。人の世というものは、いかにも面白いものではないか、のう」

と、美肌を飾る金糸銀糸で、よりあわされた糸を、ゆっくりと眺めながら、

「フッフッフ……狎・鰯・か。水野さまも人

がお悪い」

## 動く閨房

駕籠の垂れはおろされていたが、一つの駕籠に男女二人が押しこめられているのだからいかに、せまい。

せまいだけならまだしも、昭吉のねちねちした掌が、縛りあげられて自由のきかない身体のおちこちを這いまわり、

「昭、昭吉さん……おやめになつて、おやめあそばしませ」

貴子は低い声で何度も懇願した。

駕籠にのせられるとき、金銀彩糸の惣縫模様のある打掛を羽織らされ、昭吉もまた唐様のきものをまとったものの、きものはあつて無きにひとしかった。

「お内儀さま よい機会おりでございます。私は一度、駕籠のなかで……」

昭吉の声も押しこめられていた。高い声をあげれば駕籠昇きに聞え、さらには往來を行きかう人々の耳にも入ろう。

「お内儀さま……」

長く垂れる黒髪をかきわけて顔を両手でさしはさんだ昭吉は「おゆるし下さいまし」と

いうがはいか、眸から鼻、そしてわななく唇と、貴子の顔中を烈しく舐めまわした。

「アッ……な、なにをなされます……」

上体が後に反つた貴子は、あわてて、もとの姿勢に、もどろうとした。

そのとき、駕籠がぐらりと揺れて、はずみをうけた貴子は、両膝の間が二尺もひらいてしまった。

その一瞬を、どうして昭吉が見逃そう。

「アウ！」

思わず洩れる叫びを、唇に手をあてがって押し殺す昭吉であつた。

眉と眉の間に一筋の皺をうかべて、しっかりと瞼を閉ざした貴子は、抵抗しようにもそのすべを知らない。

暴れることは可能であろうが、それでは二人とも駕籠からころげおちることになりかねない。

すでに大きく右足首が、垂れのそとへ一度とび出したのを知り、ハッと内にひいた貴子である。

叫ぶことも喘ぐことも、できなかった。

せめてもの抵抗を、身を縮めることで示そうとしたが、和吉とはちがつてこの昭吉は力が強く、その堅い膝頭は、がっちりと自分の



太腿を捕えて離そうとはしなかった。

「ア、アア……」

唇を何度も吸われ、

「昭、昭吉さん……お、おやめになって……」

アアア……」

叫ぶことができないだけに、その声は、まるで睦言のように昭吉には聞えた。

駕籠が揺れた。

昭吉たちは、元禄屋から「責め賜ること」

だけしか許されていない。だから、昭吉にとっても、一つ駕籠の道中は苦行に等しいに違いない。

右に左に揺れる駕籠の速さは、元禄屋にいつけられているのだろうか、遅くもなく、また早くもなかった。

日本橋から雑司ヶ谷まで二里一町あまり、そのなかばをすぎた頃であつたろうか。

貴子は、自分が次第に夢見心地になりはじめていることに気づいてハッと眸をひらく。

その眸の前には、昭吉のあかくほてった顔が近々と迫っていた。

「昭……昭吉さん……」

低く、ささやくような声であつた。

「お、お内儀さん……」

あとは烈しく唇を吸われ「ム、ムム……」

まるで猿ぐつわでもかまされてでもいるような呻きが洩れた。

と、

「おい、雲州」

「なんでえ、予州」

「この駕籠のお二人さん、ご気分でも悪くなつたのじゃあるめえか」

「そーいやあ、なにか呻き声が聞えたようだなあ」

駕籠昇き二人の言葉を耳にした昭吉の胸が早鐘をついたように鳴り始めた。万一、駕籠をとめられて垂れでもはねあげられたら、前代未聞の珍事となろう。

「お二人さん、大丈夫ですかい」

前棒の男から声がかかった。

高鳴る胸を押えた昭吉は、

「なにがでえ！」

せいっぱいの啖呵をきった。

「いえ、ね、なにか呻きが聞えたもんで御気分でも悪うなりなすつたのかと」

「て・や・ん・で・え！ 駕籠にのったくれえで気分

の悪くなるような江戸っ子がいると思うのけえ、この土阿呆！ つべこべぬかすひまがあ

つたら、早う、走りやがれ！」

ふだん一度もつかつたことのない言葉であ

つたが、効果はあつた。

「まったくで。この江戸の町に駕籠に揺られて気分の悪くなるやつなんか一人もいねえ。

こいつは、どうも、失礼さんで」

雲州と予州という二人の駕籠昇きは、すでに前方の角をまがった元禄屋の乗っている駕籠を追いかけるように速度を早めて行った。

何度も書くようであるが、駕籠の揺れというものは想像以上にひどいものである。

どうやら危機を脱した昭吉は、その揺れを最大限に利用した。

唐土の雲南とかいう秘境に棲むといわれる麝香鹿の得難い香りが駕籠のまわりにまで馥郁としてただよっているのを、駕籠昇き二人はどう受けとっていただろう。

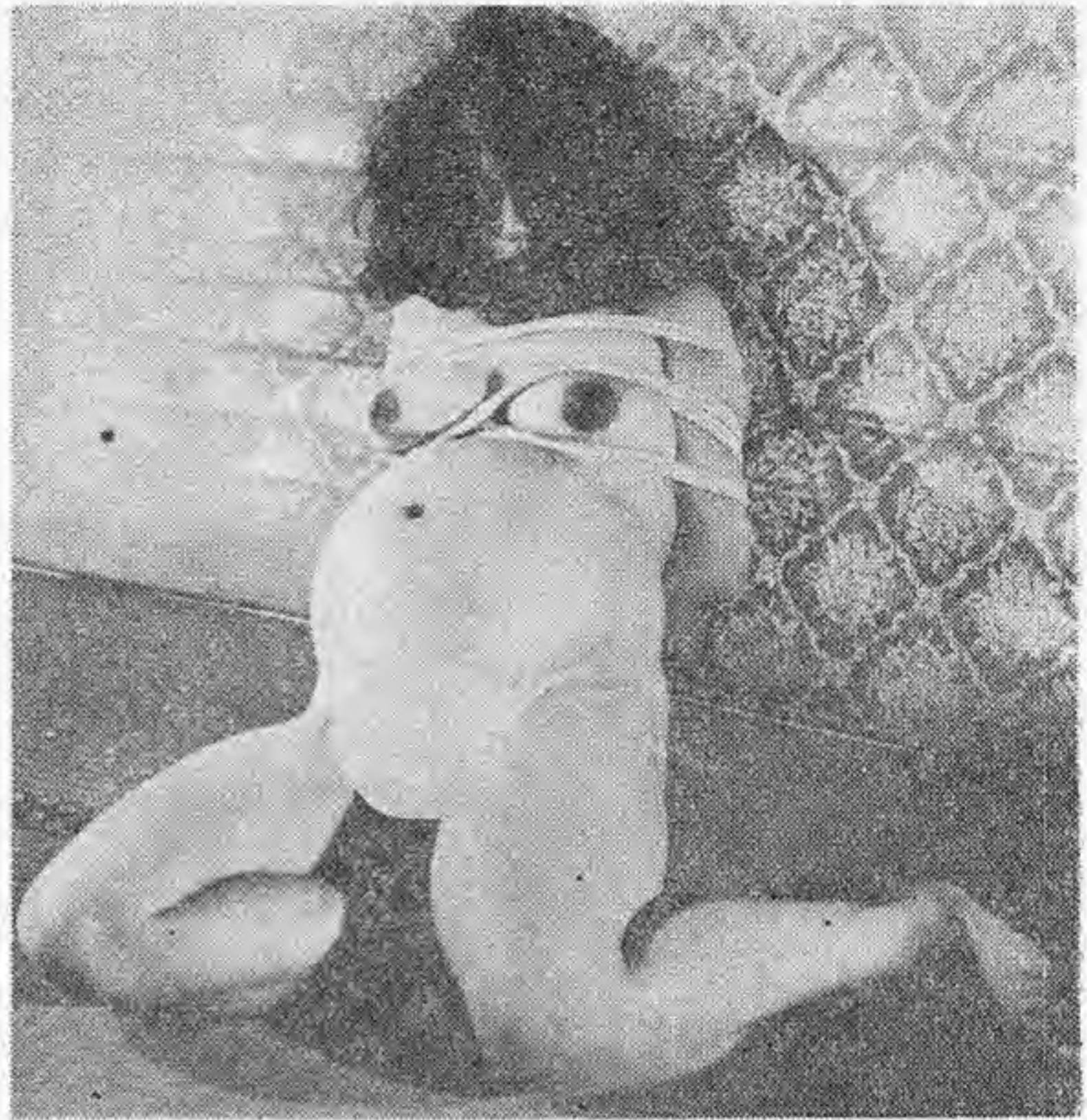
おりからの西陽をうけて江戸城の白壁があかかと輝いていたが、往きかう人々の誰が駕籠のなかのこの光景を、想像したであろうか。

と、

微風の戯れであろうか。めくれあがった垂れのかげから、もつれ合つた二人の姿が、幻影のようにうかびあがつた。

——(つづく)——





## 佐渡黄門君の手紙

私は、このところ、ずっと続けて、割合精力的にカメラ・ルポを書いている。やはり毎月、こうしたレポートを継続して書いていくと、読者ファンの方々から、いろいろと、

手紙を貰うことが大変、多い。

玉木章子さんや西条紀代さんの、その後の取材はどうなったのか、早く誌上で発表してくれとか。交通事故で負傷をした鈴木千鶴子さんの経過は、どうなのか。再起可能だったら、再び誌上に姿を見せてほしいとか。或は木村洋子さんとプレイをやるときには、是非

助手に使ってほしいとか。その内容は、さまざまであるが、いずれの方も、熱心な奇クの愛読者であり、私のファンでもあった。

今日も編集部気付の、私宛の通信を転送されてきたので、早速、一読した。

＊

拝啓、塚本鉄三様。

「カメラ」と「ペン」の

ルポルタージュ

臨<sup>りん</sup>月<sup>げつ</sup>の妊<sup>にん</sup>孕<sup>よう</sup>美<sup>び</sup>

を

暴<sup>あば</sup>

く

△南加津子の巻▽

塚<sup>つか</sup>

本<sup>もと</sup>

鉄<sup>てつ</sup>

三<sup>ぞう</sup>



盛夏のおり、ますます、ご活躍のこと、お喜び申し上げます。私は現在二十二歳、京都の×××大学に籍を置く学生で、昨年の奇ク11月号に、拙文『告白的A感覚論』なるものを、編集部のご好意により掲載していただきました佐渡黄門という青二才です。

私は高校時代、友人から奇クの存在を教えられて以来の愛読者で、先生のカメラ・ルポを毎月興味深く読ませていただいている者です。今月号（9月号）の「M女加津子がすすり泣く時」も、たいへん興味深く読ませていただきました。

特に、美しい加津子さんの妖艶なお尻に、イチジク浣腸を挿入された場面など、私の生来のアヌヌ願望を刺戟しふつつか者の私は秘そかに先生に、嫉妬の念をいだいたほどです。私は、拙文『告白的A感覚論』で、私の生来のアヌヌ願望について書かせていただきましたが、奇クを購入する最大の目的は、常に美しい女性に対するアヌヌ責めの写真や読物、殊に浣腸責めに対する関心を満足させるためです。

その点、昨年10月号の、先生のカメラ・ルポ「東京の踊子浣腸記」は、まことに、めくるめくような素晴らしいものでした。可憐で、

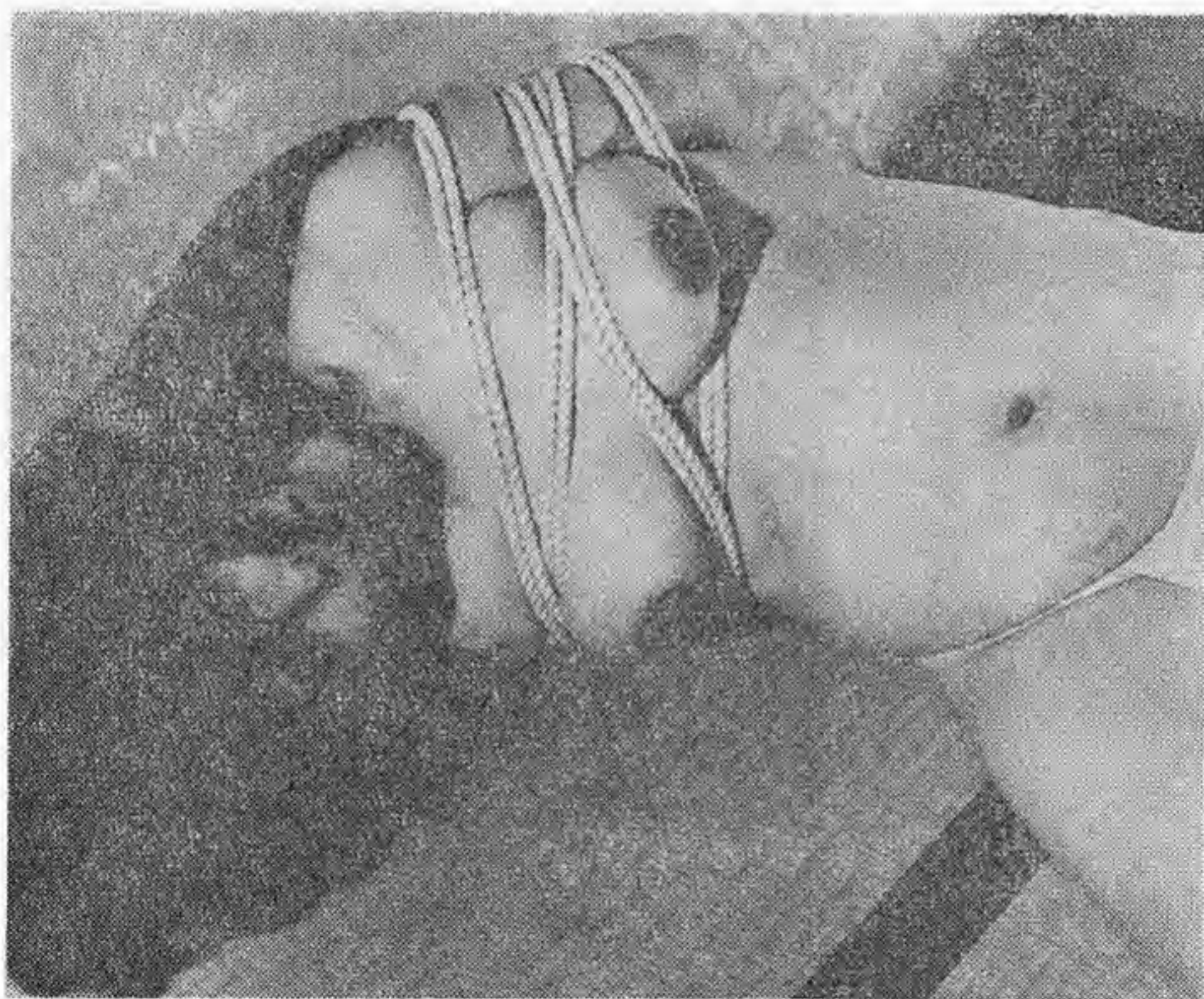
愛くるしい鈴木千鶴子さんが、その水蜜桃のようなプリツとしたお尻を、高々と持ち上げ四つばいになって、巨大なガラス製浣腸器をその菊花に受け入れている写真は、

私を狂喜させ、購入した当時は一日中、ながめていたものです。今後の先生のご活躍を、なおいっそう期待するものです。

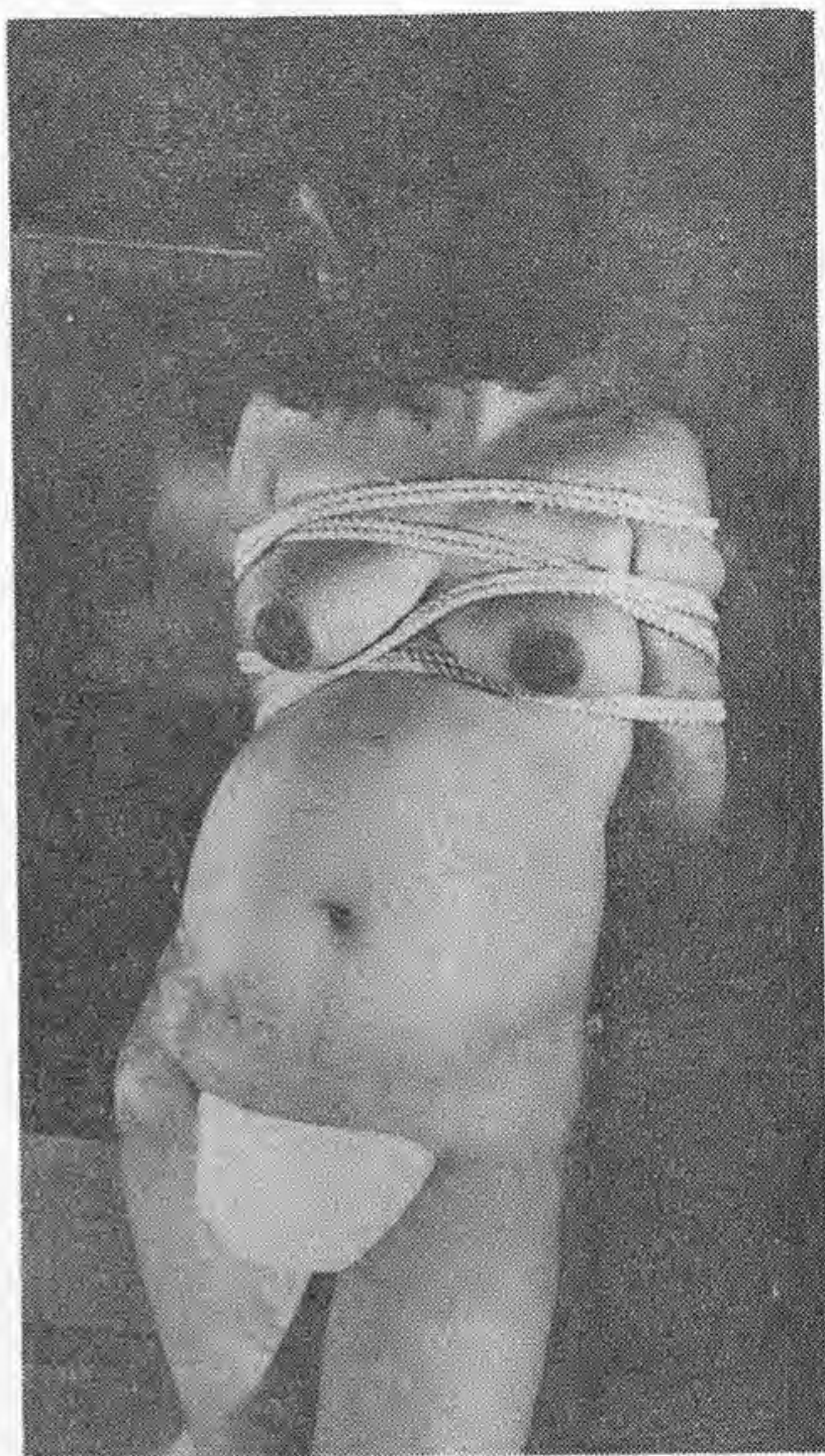
最近では、小杉千恵さんが、アヌヌに興味をお持ちの様子、先生によって、千恵さんがその艶美なアヌヌをさらされ、浣腸されたら……と希望的に思いめぐらしております。

これより私事にわたり恐縮ですが今すこし、お耳をかたむけ下さるよう、お願いいたします。先ほども申し上げましたように、私は昔から、女性の肛門に対して、人並み以上の関心をいただいている者で、奇クにも、そのことに関しての拙文を、奇クサロン等に、四、五回投稿し、掲載していただいたことのある者です。

普通の男性なら、美しい女性を見れば、思い浮かべる所といえば、パギナでしょうが、私はすぐに、その







女性の臀部の奥底に、ひそやかに息づく、あの秘密の部分想像してしまいます。

恥をしのんで告白しますが、世の男性たちの大部分が見た経験がありであろう、かのストリップなるものに、私も二、三回行ったことがあります。私の関心は当然、普通の男性のそれとは異なりストリップ嬢のアヌスにありました。しかしながら、どういうわけか不思議なことに、ストリップ嬢たちは、前面は、あからさまに衆目に晒すのに反して、決

してアヌスを見せようとはしませんでした。私はすっかり失望してしまったわけです。

それ以来、私はストリップ劇場へ足を向けることなく、奇クを読んだり、浣腸写真をながめたりして、自らの性癖を慰めているらしいです。今はフリーセックスの時代だといわれています。しかしながら、私には、そんなことは何の関係もありません。

今まで、二、三人の女性とつき合ったことはありますが、肉体関係を持ったことはあり

ません。私の側で、何らかの、それを阻む障害があったのです。その障害とは、やはり、バグナではなく、アヌスに、私の性的目的を果したいという欲求だったのでしょうか。

そんなわけで、このフリーセックスの時代において、いまだに私は女性を知らないのです。塚本先生、このような、ふがない青二才の私を、お笑いなさるでしょうか。

今一つ、どうか私の願いを、お聞き入れ願えないでしょうか。お忙しい中、このような願いをすれば、不快指数も、きわまれりとは、お察しいたしますが――。

一つには、これは、まずダメだろうとは思いますが、私を先生のカメラ・ルポの助手に使っていただけないでしょうか。昨年11月号にて、先生は確か、鈴木千鶴子さんを責めるために、助手を公募なさっていたと思います。が、今でも必要があれば、どうか私を助手に使っていただけないものでしょうか。

でも、これは、ご無理なお願いとは思いますが、今一つのお願いを、どうかお聞き入れますので、今一つのお願いを、どうかお聞き入れます。それは、まことに、あつかましくも、はしたないお願いですが、どうか、先生のお手持の浣腸写真を、二、三枚お譲り願いたいのです。



どうか、先生、一枚で結構です。もっとも私の好きな浣腸ポーズ、つまり、四つばいになった女性が頭部を低くし、臀部を高々とつき出すようにして、ガラス製二〇〇CC浣腸器の先をアヌスに深々と挿入され、苦悶と悦楽に顔を、ゆがめている図があれば、どうか一枚で結構ですから、私にお譲り下さい。

できますれば、昨年10月号の「東京の踊子浣腸記」にあった、あの鈴木千鶴子さんの浣腸ポーズが、私の最も理想的なポーズです。で、どうか、あの写真を一枚、お譲り願えたら……と思っています。

先生、まことに、ぶしつけで、無礼なお願いとは思いますが、どうか、恥をしのんで書きました。この手紙にめんど、私のこの願いを、お聞き入れ下さるよう、切にお願い申し上げます。

敬具

八月五日

塚本鉄三様

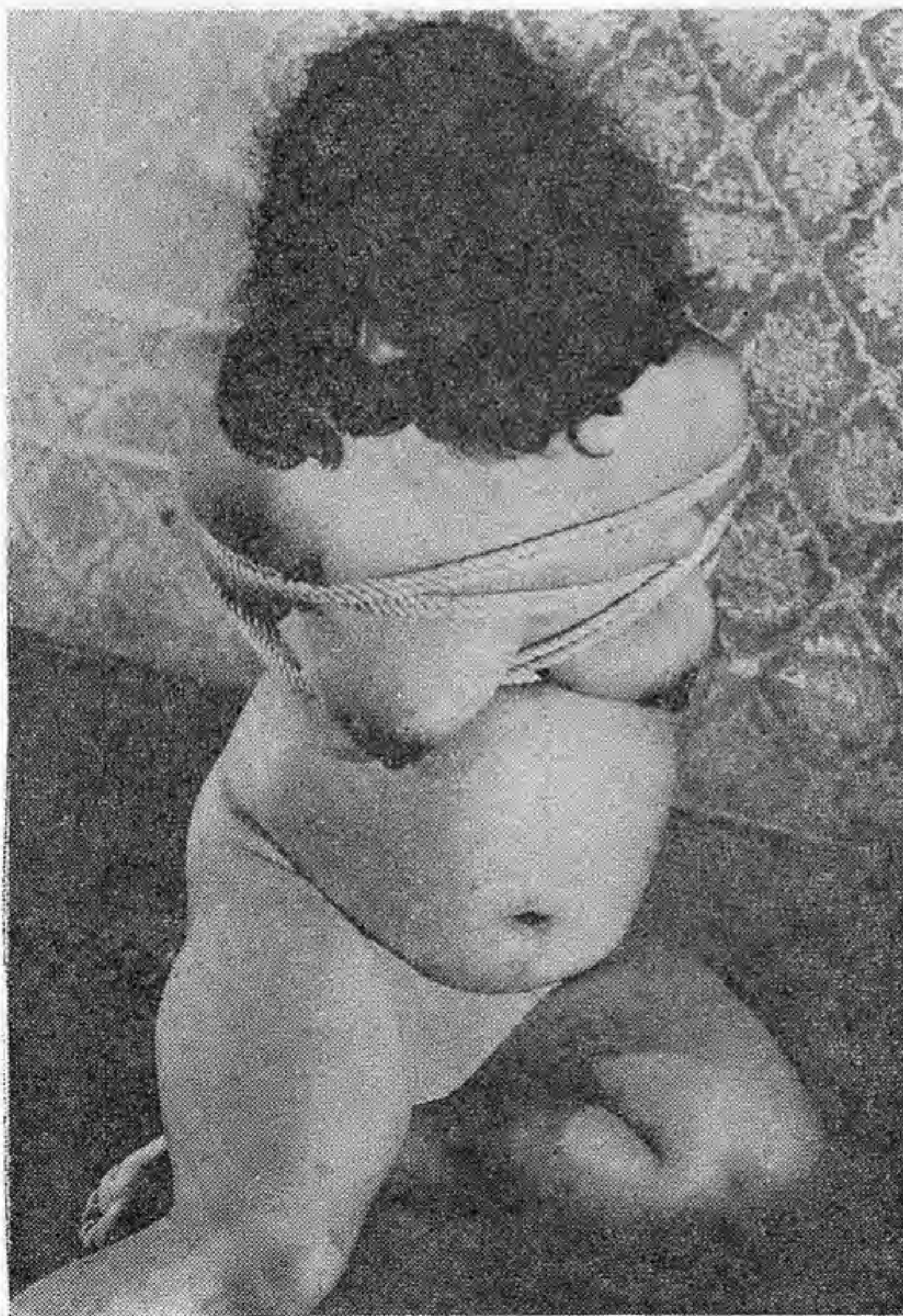
\*

便箋六枚に亘る、この手紙を読んで、私は自分の若き日の一時期を思いうかべた。なんとかして、この青年の希望を適えてやりたいものだと思う。

私は助手に志願してきた人の中から、三回

ばかり文通したことのある京大生の某君を呼んで、今年の四月、プレイをしたことがあった。激甚な競争を突破して大学への入試に合格しただけあって、手紙の文章もしっかりしていて、私は頼もしいと思って依頼したのだが、実際に会ってみたら、性的な知識は非常に幼稚なばかりでなく、この佐渡君と同様、

女性を未だ知らないということだった。このときのSMプレイは、カメラ・ルポを書くアテがあったわけではなかったので、私の同伴した女性が、初心な助手君を、さんざんにいたぶり、いじめるという一幕に終わってしまったが、それに懲りもせず、再度、助手を志望してきているところを見ると、あのプ







レイも万更でもなかったのかもしれない。

佐渡黄門君が、鈴木千鶴子嬢を思うままに  
△流腸責め△にするのが望みなら、出来たら  
そうした機会を与えたいと思うが、片や、ベ  
テランの鈴木千鶴子嬢が相手では、果して、  
うまく料理できるかどうか。

「不可解なるもの、それは女性である」とい

う言の通り、女性の扱い方は、まことにむづ  
かしい。ましてや△M女△となると、「不可  
解のなかでも一層、不可解なもの」に属して  
いるから、慎重に対処する必要がある。

佐渡黄門君は、私に対して、先生と書いて  
いるが、私は、こうした呼び方は好かない。

私は学校を出てすぐ、女学校に奉職したが

△先生△という職業に、嫌気がさして二年足  
らずでやめてしまった位なので、先生と言わ  
れることは好まない。だから、その頃の教え  
子で、未だに、△先生△と書いて手紙をくれ  
る女性があるが、そんなときは、懐かしさよ  
りも、先生と呼ばれることに閉口する。

その女学校の教師時代、女性の心理を解し  
ないため、一失敗をやったことがある。

赴任して間もない放課後のこと、私はピア  
ノを弾こうと思って、音楽教室へ入っていっ  
て、思わず、どきっとした。そこには津田英  
学塾を出たその学校で一番若くて美しい女教  
師を囲んで、四人の女生徒が、よよと泣いて  
いた。女教師は椅子に坐り、鍵盤に寄って泣  
き伏し、五年生の女生徒は、そのまわりで、  
先生にとりすがって、涙を流していた。

私は何事が起ったのかと驚き、駆け寄って  
「どうしたの？」と訊いた。

「校長先生が、校長先生が……」

そう言うなり、五人とも、わっと大きな声  
を挙げて泣き出した。ハンカチを出して涙を  
ぬぐいながらも、泣き声は益々大きくなった  
ので、私はおろおろして、慰めてみたが、そ  
れでも一向に泣き止まない。わけを訊いても  
何も言わず、泣き声は、まさに号泣というの



にふさわしい激しさだった。

私は、とても自分の手にはおえないと思ったので、走って職員室へ行った。「校長先生が……」とか口走っていたから、校長に言うのは拙いと思って、宿直室で将棋を指していた首席に、事の次第を報告した。

「また、やってんのか。放っとけ、放っとけ」

それが首席の返事だった。周囲の教師たちも少しも関心を示さない。

私にしたら、あれほど大声を挙げて号泣してるんだからきっと大事件に違いないと思ったのに、みんな平静なのである。

私は自分の席に戻って、翌日の教案を書いていても、心配で心配で落ち着かない。そつと職員室を抜けだし、再び音楽室へ向った。途中、裁縫室の前を通ると、キヤツキヤツと、ふざけあう賑やかな声がするので、硝子窓越しに、内部をのぞいてみた。



ああ、何たることぞ。さっきの連中が、お手玉をして、如何にも楽しそうに遊んでいるのである。私は、一瞬、狐につままれたような気持で、ぼんやりとしていた。

不可解なのは、若い女の心だなあ――。後程、年輩の男性教師から、そつと教えて貰った。「君が年若い異性の教師だから、余

計、大きな声で泣いたのだ。君が出て行ったのでつまらなくなって、止めたんだよ」

教員の免許状を取得するため、心理学を相当勉強したつもりだったが、所詮、机上の勉強だけでは、玄妙不可思議な女性心理の裏までは、見抜けなかったわけだ。

## 不可解な

## 女性心理

さて、ここで私は、佐渡君に対して最近の一つの経験を述べて、参考に

供したいと思う。それは、私が書いた八月号のカメラ・ルポ「同棲時代の甘い優雅なSM生活」と、九月号の「M女加津子がすすり泣くとき」で登場した南加津子のことである。

女性に対して、相当経験を積んだつもりのも私でも、危うく、彼女の手管には翻弄されそうになった。女性の中でも、M女は特に、不



可解さが複雑な軌跡を描くものだから、十分、注意しなければならぬ。

始めて南加津子に逢ったとき、彼女は全身をガタガタとふるわせていた。気分が昂揚しているためか、或は、どんなことをされるかわからないという不安のためか。いや、恐らく、その双方の理由からだろう。

男性という者は、こういう状態の女性を見ると、いたく嗜虐心にかられるものだ。それは理屈として、良いとか悪いとかいうよりも本能として、そうあるのが当然だった。

戦時中の占領地でのことだった。私は数人の部下を連れて、或部落を搜索していた。今まで日本軍に従順で協力的だった、この部落の住民が、連合軍の進攻と共に、どうやら寝返るらしいという噂が、もっぱらだったからだ。部落に入ってみると、至って静かで表通りには、人影もなかった。



ただ、一軒の大きな家にだけ、人の気配がしたが固く戸を閉ざしていて、いくら呼んでも返事がなかった。入口を蹴破って中へ入ってみると、女と子供ばかりが、一処にかたまつて、恐怖におののいていた。

武装した数人の一団に突然、踏み込まれて彼女たちは、がたがたとふるえていた。その

異常なまでのおびえようを見てみると、正直なところ、いたく嗜虐心にかられた。

「男たちは、何処へ行つたんだッ」

いくら訊いても、顔を真青にして、歯をカチカチ鳴らし、唇をふるわすだけで誰も返事はしない。今にも襲われはしないかという余りにも強烈な恐れに、気も動転してしまったのだろうが、私たちの目からは、逆に、如何にも、今すぐ襲つて下さい——と、いう風に一瞬、見えてしまった。

これが、例えば平静に応待されてみると、そんな嗜虐的な気持が私達にだって起る筈はなかったのだが、恐怖におののく若い女たちの姿は、極めて刺戟的であった。部下達は当然、いきりたつて、一斉に襲いかかろうとしたのを、私は制した。

「まだ、去就がきまっているわけではないのだから、手荒なことはするな」

私も正直なところ、この若い女たちのガタ



ガタと、ふるえ、何をされるかと、おびえきっている姿を見ると、無茶苦茶に犯してやりたいという気持が起った。だが、理性としては、女子供を痛めつけても、何らプラスにならないと解釈して、そのまま帰った。

そうした私の折角の心遣いも空しく、結局は、その部落も、全面的に日本軍に反抗し、それからの数十日間、血みどろの殺し殺されつの戦いがくりかえされたものだ。

話が横道へそれたが、南加津子と二回目に逢ったときは、彼女は、もうガタガタとふるえてはいなかったが、私が上半身を抱きすくめたら、おかしい程、ふるえだした。

私にしたら、ただ、いとしさの余り、親愛の情をこめて、抱いたのだ。というより、その場の雰囲気からして、そうしなければいけないような気持が昂まってきたのだ。

だが、南加津子に、予想

していなかった激しい反応——即ち、全身を強く緊張させて、ガタガタとふるえだされてみると、何かを、即ち、彼女の秘かに期待しているようなことを、仕出かさなくてはならなかった。

あとになって、私は彼女に対して二〇〇ccの浣腸をやるうと思いたって、結局、果さな

かったことは、九月号のルポで書いた。

実際、浣腸に対しての彼女の拒否は強く、最初、私が予想したのとは全く違っていた。きゅっと強く括約筋を締めつけたアヌスに対しては、浣腸器の嘴管は容易なことでは挿入することは出来なかった。

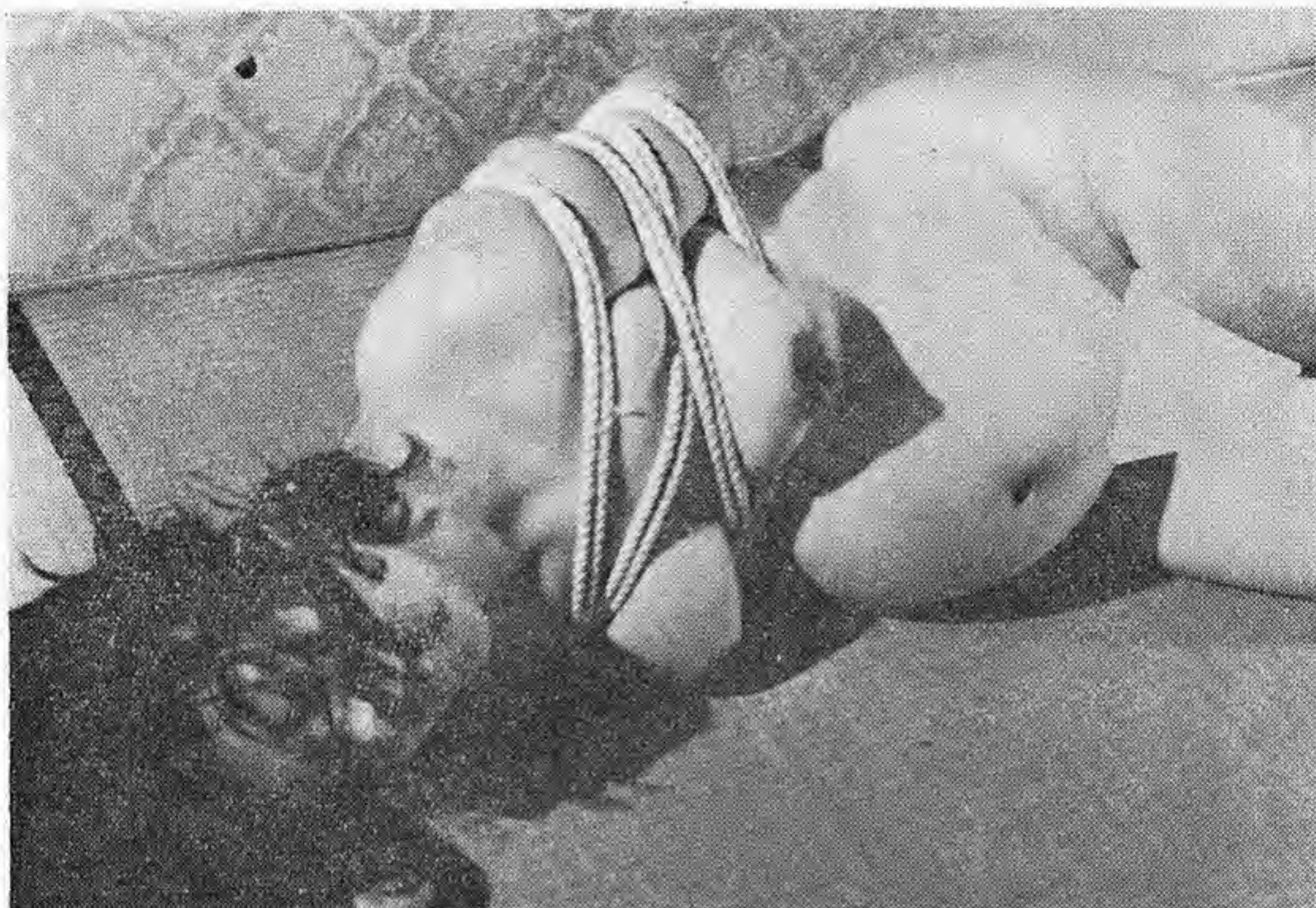
十分に押し開いて、まわりに綺麗な菊花の紋様を描いたような彼女のアヌスを眺めた私は、その余りの美しさに見とれてしまった。そして、今迄の彼女の言動からして私は容易に浣腸できると思っていたのだ。

佐渡君は、女性の臀部の奥底にひそむものに、すぐ目がゆくことを卑下しているが、実は、私も、ぱっとすぐさま、そこへ目が行ってしまう。そこが、予想したように、美しかったら、いつも、ほっとするのである。

鈴木千鶴子のときは、ピンク色の色彩的な美しさばかりでなく、絹のような柔軟さに魅せられた。小造りで、つつましく鎮座ましましていながら、何の抵







抗もなく、どんなものでも容易に包含してしまう、そのあくなき抱擁力に、度肝を抜かれてしまった。

それに比較して、南加津子の方は、嚴重に城門を鎖して一兵たりとも寄せつけないといった有様なので、ここで、うっかりすると、彼女が、本当に真底から八浣腸嫌いVであるのかと錯覚してしまう。事実、私も、うっかり、そう思ったくらい、彼女の拒否はきびしかったのである。

そのとき、私は、イチジク浣腸の奇襲戦法で以て、ともに角にも、彼女に浣腸を施したのだが、あとになって、彼女に「何故、あのとき、あのように激しく拒否したのか」と訊ねたところ、「だってエその方が、無理矢理、強制的にされるんですもの。それとも、素直に、された方がよかったの?」と、けろっとした

顔で答えたものである。

## 都会の砂漠をゆく

私の日記帳を見ると、七月三日の夕方、夕立気味の雨が少し降っただけで、七月中、殆ど雨らしい雨は降っていない。

連日、カンカンの日照りで、三十数度の気温が示す通り、車道のアスファルトも、ぐにやぐにやになる暑さが続いている。幸いにして、暑さには強い私は、まるで夏の虫のように、気温の上昇と共に、益々元気にとびまわることになる。「天神祭に来た女」を七月二十五日に責めてから、六日目の三十一日、私は、南加津子との約束を果たすべく、例の広田神社の境内けいだいへ向っていた。

境内の樟の木には、蟬が降るように鳴いていて、むっとする熱風が、乾ききった駐車場の赤土の上をよぎってきた。夏は、汗をかくのも一つの健康法だと思って、私は手がのせられぬくらい熱くなっているボンネットにもたれて南加津子を待っていた。

集金の車で道路の混雑する月末を私は好まなかったが、彼女は、三十一日だったら、少し晩くなってもいいから——と、言ったので



第三回の逢瀬を、この日にきめたのだった。彼女との約束。

それは、大阪の近辺をドライブすること。絵と写真を見せること。テープを聞かせること。そして、写真抜ききのプレイをすること。

これが、彼女からの要求だった。

私からの注文、それは、出産間際の太鼓腹を、カラーとモノクロで撮影させること。そのあとでの責め場面をカメラ・ルポに書くこと。この二つであった。

八月十六日が出産予定日なので、うろろろしている、なにもしないうち、陣痛——入院ということになりかねない。そうになってしまったら、もう万事休すである。

ここ一週間ぐらいの間に、なんとしても、この二つの約束を果たさなければならぬ。

可愛い赤い花模様のマタニティドレスを羽織った南加津子のお腹は、もう、誰の目にも、臨月妊婦だと、はっきりわかる盛り上がるような大きさだった。

私は蛙腹の南加津子を伴って、カンカン照りの都会の砂漠を走った。コダカラー20枚撮りを装填したペンタックスを提げて、時々停っては、彼女のスナップを撮った。

「雑誌、読ませて頂きましたわ。どんな風に

書かれたかと、凄く興味がありましたので、買ってきて、第一番に読みましたの」

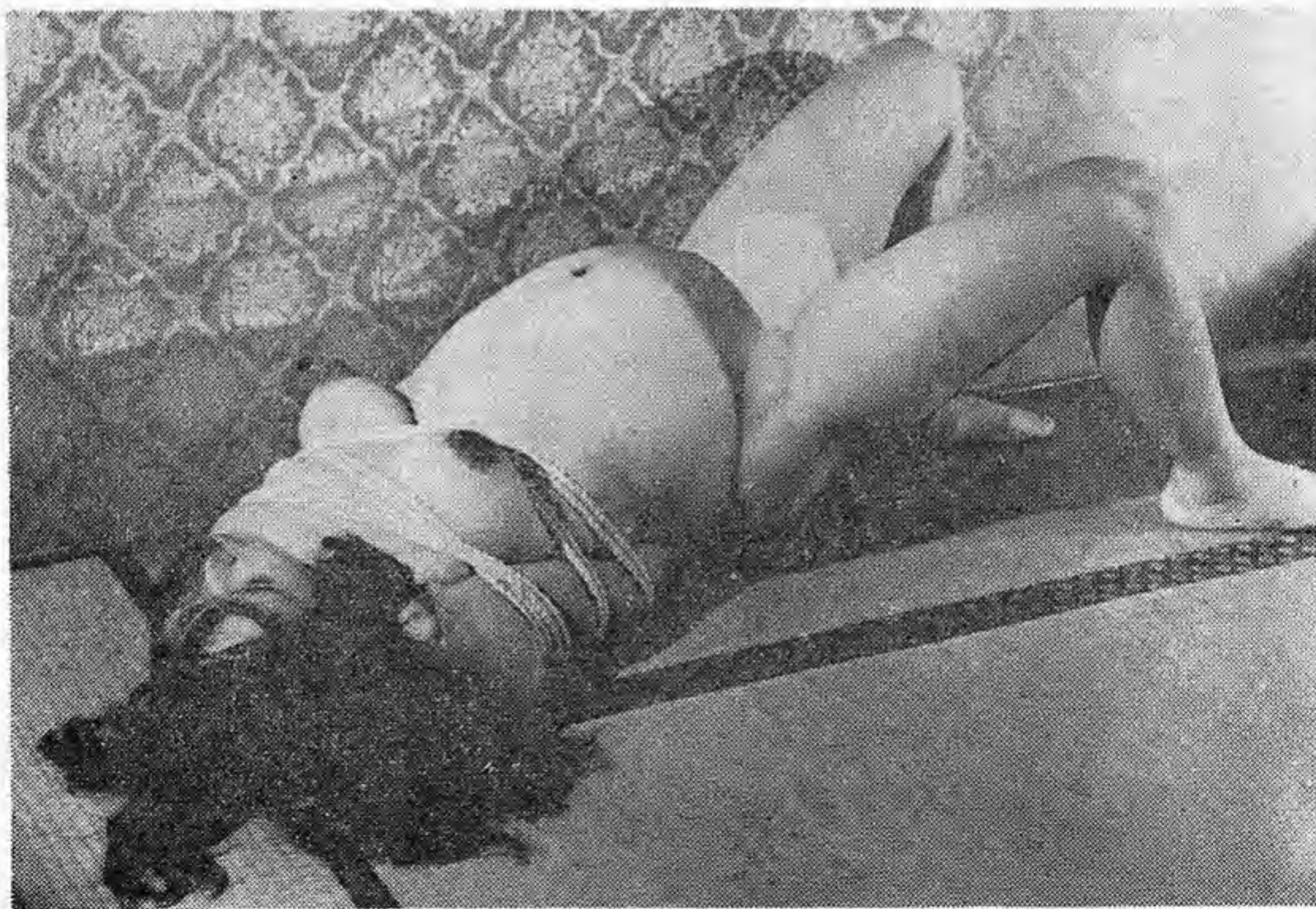
「それで感想は如何です？」

「会話なんか、あの通りなんですけど、私、あんな上品な言葉、使いませんでしたわ。田舎の方言、まるだしなんですもの」

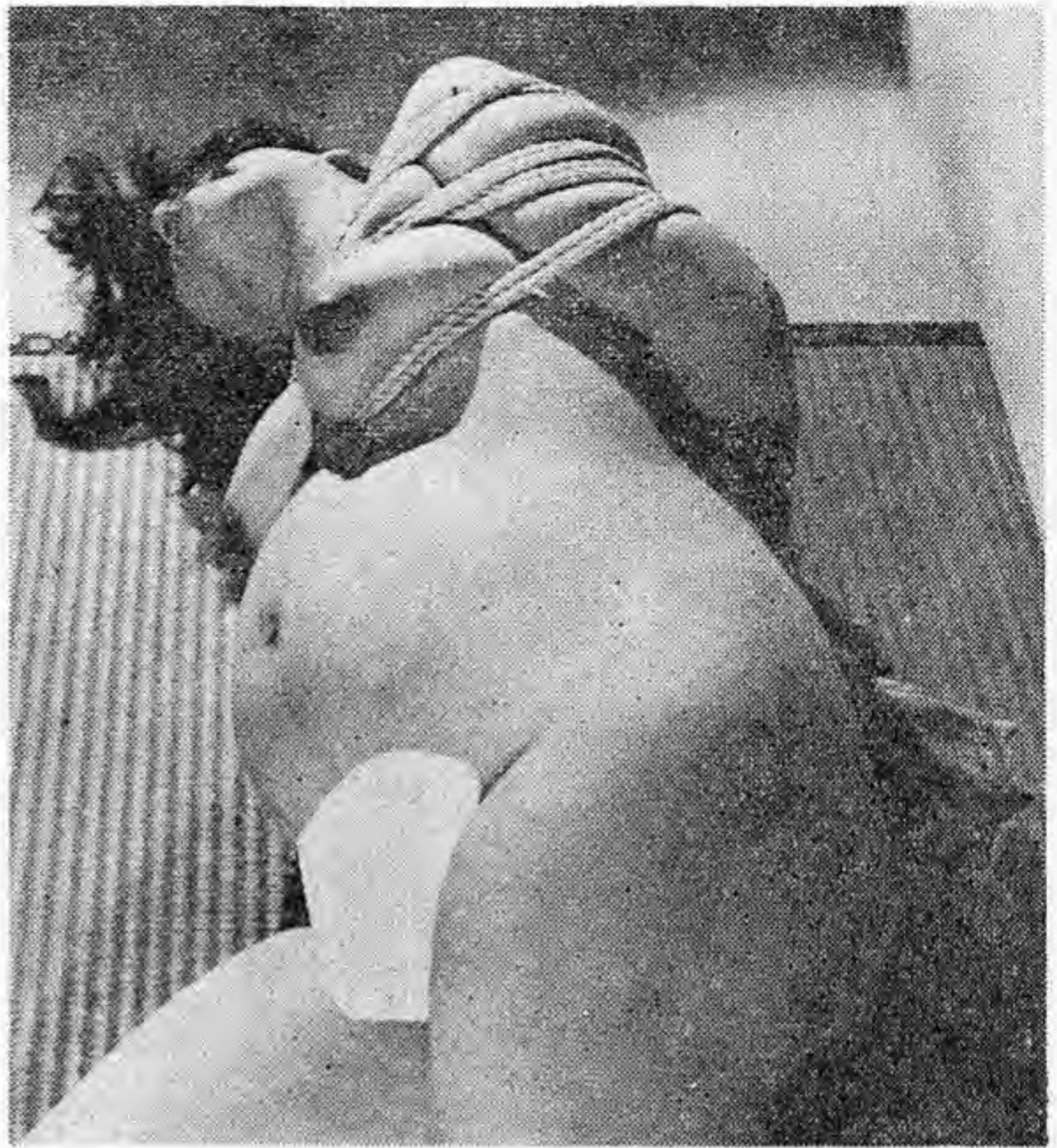
「そうでしたね。でも、僕は貴女の方言のニュアンスを、そのまま文章に、ようしませんのですね。あんな風になってしまったんですよ。まあ、仕方ないですな」

南加津子が、故郷の方言のまままで私に話しかけてくるということは、それだけ気を許している証拠である。私にしても親しみが持てた。といって、文章にするとき、その方言がどうしても出てこないものである。

「私の心の裏まで、あんまり鋭く書いてあるんで、こわい







お写真、持ってきて下さいました？」

「ああ、うしろの座席の鞆の中に入っているから、自分で出してごらん」

彼女は、ハترون紙の封筒に入れた緊縛写真を取り出すなり、パツと目を通して、素早く袋の中へ戻した。

「まあ、凄い！ びっくりしたわ。こんなに大きいと思わなかったもの」

それは六つ切りに伸ばした前田真知子、深田菊子、高村浩子、笠井奈保子、西条紀代玉木章子、鈴木千鶴子、荒尾慶子などの緊縛写真であった。

一旦、袋にしまった写真を、怖いものでも見るように、そろそろと再びとり出した。写真を持った手が、ぶるぶるとふるえているのが、私にも、よくわかる。

ふーうと、深い息を吐いたかと思うと、彼女の上半身が、私の左肩の方へ、ユラユラとゆらめいてきた。私が、ひょいと肩をすくめると、そのまま倒れ込んで、私の膝を膝枕するような格好に身体を横にして寝そべった。一枚、また一枚、彼女は丹念に写真に目を通している。

「まだ、ポルノグラフィと絵とがあるが、それは、あとで出してやるよ」

私は前方を注視しながら言った。彼女は、それに答えず、熱心に緊縛写真に魅せられたように見入っているばかりである。私は都会の砂漠を離脱すると、とあるホテルの駐車場へ、車を乗り入れたのであった。

## 離れ難い思い

へいつも、溢れるような新鮮な気持で、身も心もありがたいVと思う。

三回目に逢うのだ。

南加津子は、もう、はちきれそうな大きなお腹をしながら、まるで、娘のような仕事で私に、そっと寄り添ってきた。

「いとしい」——真実、私は、そう思う。やにわに、ひしと抱きしめた。両腕と胸の

みたい。読むのこわかったわ」

「僕もね、貴女が必ず読まれるってことを予測して書くんでしょう。だからね、大分、筆<sup>ほこさき</sup>の鋒先も鈍りましたよ。実際にやったことでも、書けないこともありますしね」

「そうお。私にしたら、何もかも、書いてあったように、思いますけど。あの、お約束の



中で、ぶるぶるっと、ふるえている彼女の肥り肉の女体が、噛んでしまいたいように、いじらしい。

背中のファスナーを開いてドレスを、ずり下げてから、シュミーズの肩をはずさせ、腹帯を、ゆるりゆるりと剥いでゆく。

剝玉子のような巨腹が、むっくりと顔を出すのへ、私は掌で、いつくしむように撫でていった。今までとは違った硬さである。それに、お臍を頂点として、膨らみが下の方へと移っている。所謂、垂れてきたのだ。

「ああ、あ——あ」

熱い吐息と共に、彼女は私の腕の中に倒れ込んできた。太鼓腹ばかりか、臀部にまで、恐ろしいほど肉がついているので、まことに逞しい感じの下半身である。

私は倒れ込んできた彼女を抱えたまま、掌を蛙腹からずらして、太股から内股へと這わしていった。何事かを期待して、彼女の瞳は妖しくキラキラと光り、唇をつき出すように顔を寄せてきた。うっすらと開いた唇と唇との間から覗いた歯が、まぶしいように白い。

歯と歯が、かちかちと鳴った。

私の手は、いそがしく這いまわっている。

今や彼女は、すっかり衣服を脱がされて臨月

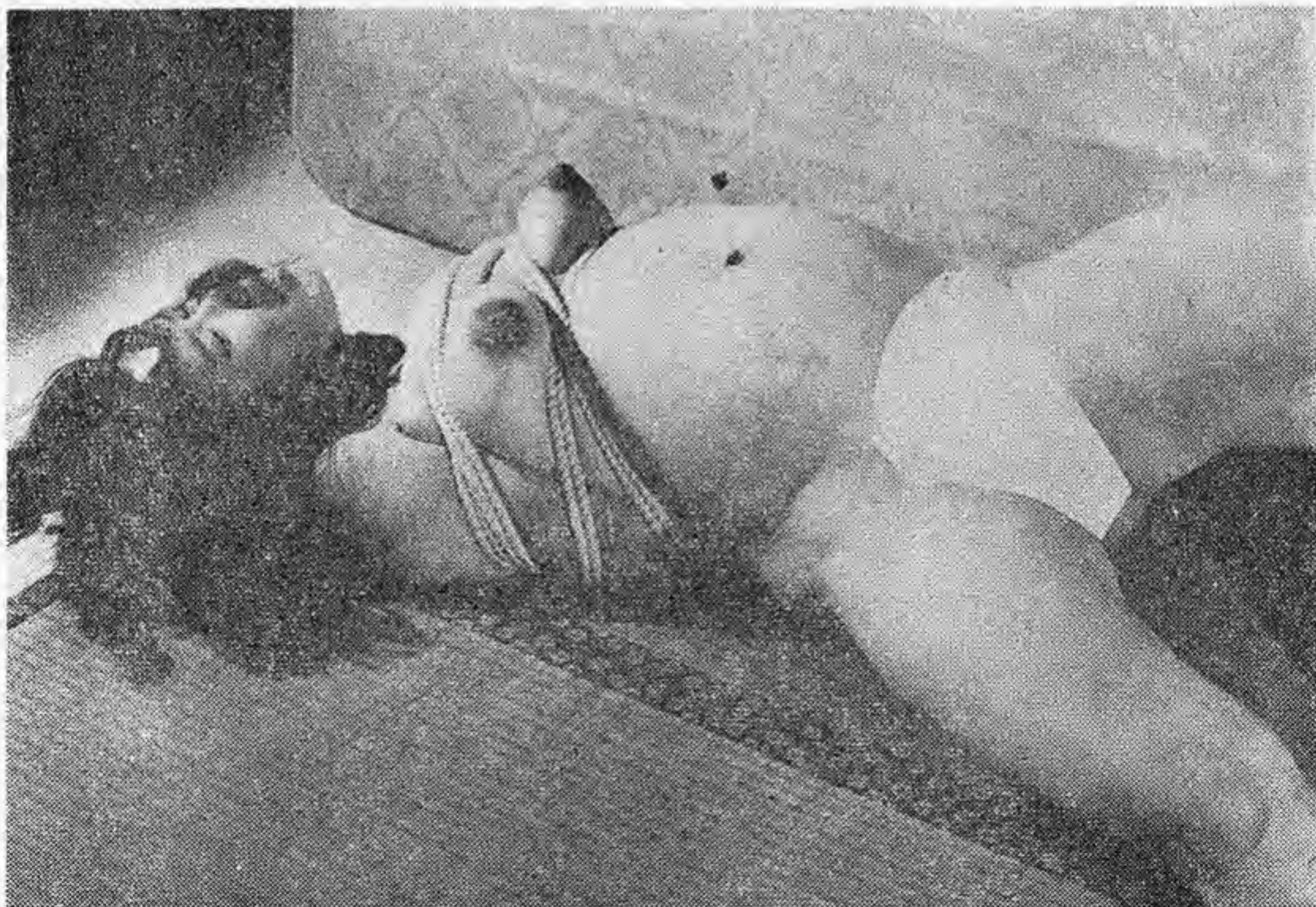
の巨大な腹を裸のままさらしている。

「私って、凄くハレンチな女なのよ。見たとこ、大人しくて、真面目そうで、控え目なんだけど、心の中で思っていることは違うの。まだ、学校に行ってる時のことだけど、通学の時、電車の中でスカートの下に、なにも下着をつけないで、乗ったことがあるのよ。スリルで、もうわくわくしたけど、誰も、いたずらなんか、しなかったわ。その時は……」

南加津子は、呟くように私の腕の中で、喋りだした。私が、これからの責めを、やりよいうに、誘っているのだろうか。

「というと、それからあとでそんなスリルを味わう場面があったというのかい？」

「ええ、三人の男に、犯されたわ」







「なんだって？ 三人もの男に犯されたって言うのかい。そりゃ本当だろうな」

私は、むらむらと、嫉妬の念が兆してきて彼女を抱いたまま、ずるずるとベッドの方へひきずっていった。

「この間、清水正二郎さんの訳で『O嬢の物語』って本、読んだんだけど、おしまいの方

で、主人公が獣のように扱われる場面はショックだったわ。私も、あんな風にされてみたかって思ったわ。読んでいて、物凄く興奮したものだ。でも、実際に、あんなにされたら、怖いみたい」

私は、益々いらいらしてきた。南加津子がいとしくて、いとしくて、たまらないのに、

嫉妬心と猜疑心のために、いじめたくて仕方がなくなってきた。

「縄のあとが残っても俺は知らないぞ」

私は唇をきゅっと噛みしめて、後手首から二の腕、胸へと縄を掛けていった。半透明の乳汁が縄を胸に回すたびに、ぽたぽたと溢れて、縄目にしみ込んでくる。カサのような黒ずんで大きな乳暈を中心に、洋梨のような乳房は、縄と縄との間で、むっくりと顔を垂れて、ゆらゆらと揺れていた。

身体をよじって、私が縛りよいように身をこなしていた彼女は、縛り終ると、ぐぐぐ、と私の方へ、そのたっぷりと肉のついた女体を、もたせかけてきた。縛るとき、彼女ほど協力的な女は珍しい。私のまわす縄の先々を読んで、自分から身体を縛りよいように、もってくるのである。

私は、いじらしいと思った。だが、その気持も、次の彼女の言葉で打ち破られた。

「痛い、痛いわ。縄が肌を挟んで痛い。それに、こんなにきつく縛ったら、縄のあとがついて、外を歩けないわ。ねえ、ほどうて。早く、ほどうてよ」

たしかに、現在のような肩から腕、背中まるだしのルックで、身体に縄目のあとを残し



ていたら買い物にも行けないだろう。そこで私は困った。いや、困ったふりをした。

実際、これから、いよいよSMプレイが佳境に入ろうとするとき、こんな半畳が入ったとしたら、興ざめも甚だしい。で、初心なS人士は、このM女のテクニクで、ころりと参ってしまうのである。だが、ここで、彼女の言葉の裏を考える必要がある。

「いやあ、それは困ったナ。

さあ、どこが痛いんだ。ここか、ここか。どこなんだ」

私は、努めて優しく言葉をかけておきながら、それとはうらはらに、右手の指先は、大きく膨らんだ乳汁の溢れる乳頭へ向い、左手の掌は内股の柔らかい肌へと伸びていった。

「ううん、少しぐらい、痛くっても、辛抱するわ。だからだから……」

「だから、どうしたって、言うんだッ」

「痛くされてみたいの。痛く

されると怖い。怖いけど、でも、そうされてみたいのよ」

「いよいよ、本音を吐いたナ、こいつめ」

私はマットレスの上へ積み重ねた蒲団へ彼女をもたせかけておいて、その目の前へ鞆から取り出した絵を、ずらっと並べた。それは私がポーズの参考にと集めておいた緊縛画や

責絵であった。中には空想的な獣姦の図も混じっていて、一見、極めて刺激的であった。

「これが、お前が見たいと言っていた絵なんだぞ。そら、とっくりと見てみんか。折角、約束通り、持ってきてやったんじゃないか。さあ、見るんだ、見るんだ」

チラッと一度視線をやった南加津子は、顔をそむけて見まいとする。私は

両掌の間に彼女の頬を挟んで、畳の上に置いた絵の方へいやでも見なければならぬよう視線を向けさせる。

「あああ、こんな絵って、あるの？」

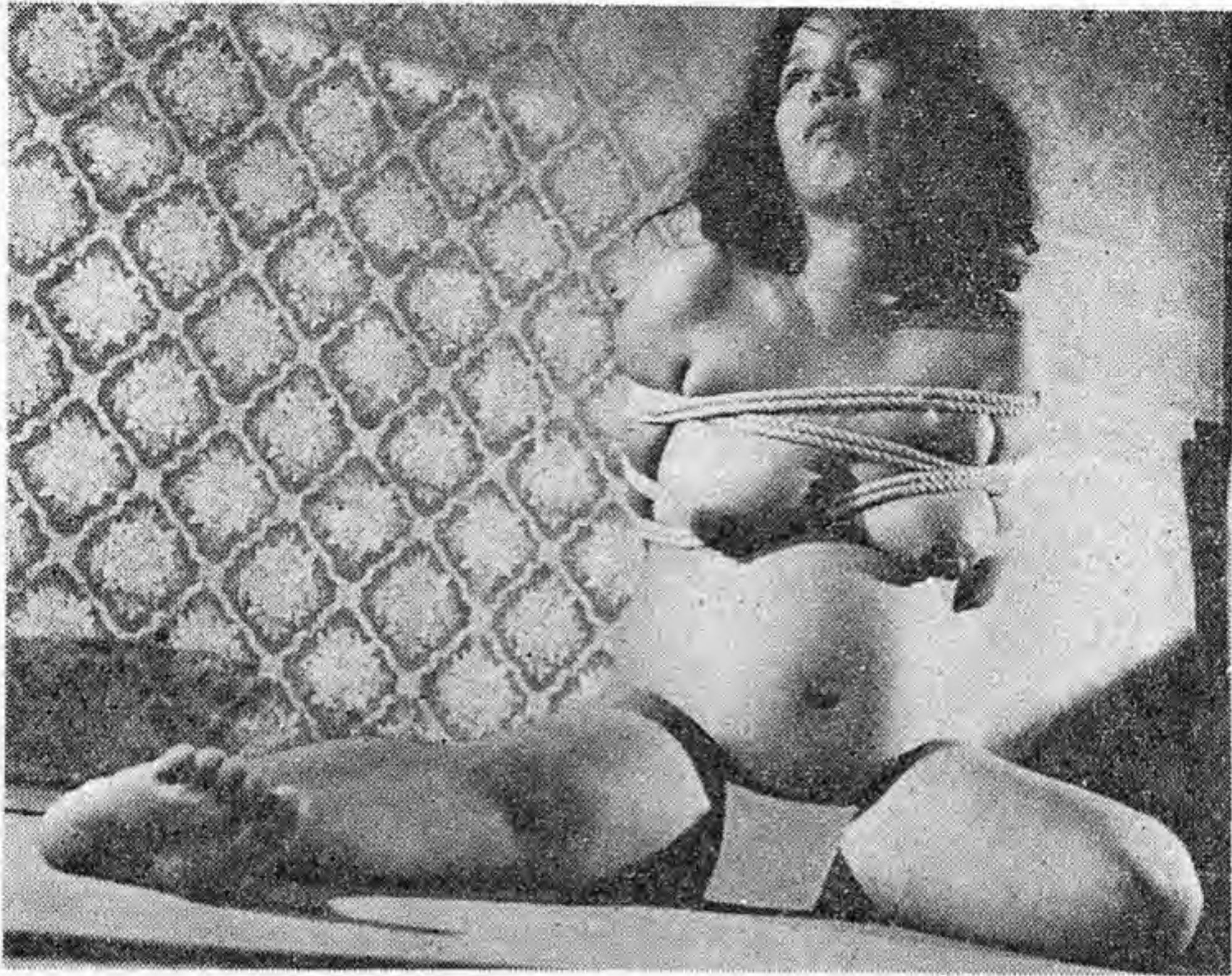
「あるさ。あるから、見てるんだろう」

「でも、こんな、犬となんか……」

そう言っ、じっと目をすえて見つめている。それは奔放に空想を具体化したダイナミックなアブノーマルきわまる絵であった。真白い肌の若い女が後手高手小手に縛られていて、それに、ムク毛の逞







しい牡犬を、けしかけている、ぞくぞくするような構図の絵であった。

南加津子の目が妖しく光を放って、ぎらぎらと輝いてきた。

私は畳の上の絵を一枚、また一枚と、めくっていった。めくった絵は、部屋の隅へ投げすてて、ちらばらしていった。

最後の一枚まで、見せ終ってから、私はスツールを持ってきて、彼女の真正面に置いてから、でんと腰を下ろした。

「加津子、足を開いてみんかッ」

まんまるいお腹が、まるで熟しきった西瓜のように目の前にころがっている感じだ。お臍を中心にした正中線に、はっきりと筋がついていてメロン腹を二つに割っている。皮膚が、ちょっと手を触れても、はちきれそうなほど緊張していて太鼓腹は、もう、これ以上大きくはならないというく

らい、大きくなりきっている。

「いやいや、そんなこと恥かしいワ」

「僕はここにいて、指一本触れないから、命令通り行動するんだぞ。さあ、足をぐっと大きく開くんだ。思いきって開いてみる」

「恥かしいわ、そんなこと……」

「言う通りにしないかッ」

私の強い言葉に、彼女は仕方なさそうに、控え目に、少し足を開いた。

「もっと開くんだ。そんなことで、俺の目が届くとも思ってたのかッ」

M女の心理――。

それは、最初から、乱暴な言葉や下品な言葉遣いだと侮辱されたような気持になる。だが、気分が昂まってきて、SMプレイが高調に達してくると、命令口調で、力強く、きびしく、強要して欲しいものだ。

その緩急。やさしく、きびしく、上品に、乱暴に荒々しく――をうまく使って、あしらってゆくと、面白いように意のままになる。

絶対的な自信、必ず、そうさせて見せるという強い口調で命令すると、彼女は、その言葉に魅せられたように足を開いてゆく。

「恥かしいワ、恥かしいワ」

口ではそう言いながらも、本心は、自分か



ら開きたくって、開きたくって、うずうずしているのだから、どうせ開いてゆくさ。

でも、このタネが、暴<sup>ば</sup>れてしまつては、実もフタもない。あくまでも、彼女は恥かしくて恥かしくって、仕方がないのだが、私の命令によって、やむなく、従つてゆく——、それが建前なのだ。

だから私は、どんなかなあ——と、興味を持ちながらも、十二分な余裕をもって、けしかけていった。「開け、開け」と。

口先一つだけで、臨月の妊婦の脚を、このように、大きく八の字に開かせてみせるということは、なんと嗜虐的だろうか。

私は十分に観察する事が出来た。

佐渡黄門君。

君は、ストリップ劇場に於いて、ストリップ嬢がアヌスを見せないことを悔んでおられたが、もし仮に、そこを見せたいと本心から思っているストリップ嬢だとしたら、却って公然と見せることを渋つただろう。

よく、M女になんか逢つたことなんか一回だってない。だから、あれ

は極端に書いた作り事だろうと言われる。事実、首にM女というラベルをぶらさげた人はいないし、逢つて話してみても、そんな片憐さえ見せない人が殆どである。いや、SMに関心があればある程、却つて、そんなことは私は何も知りません——という、ふりをするのが当然だ。

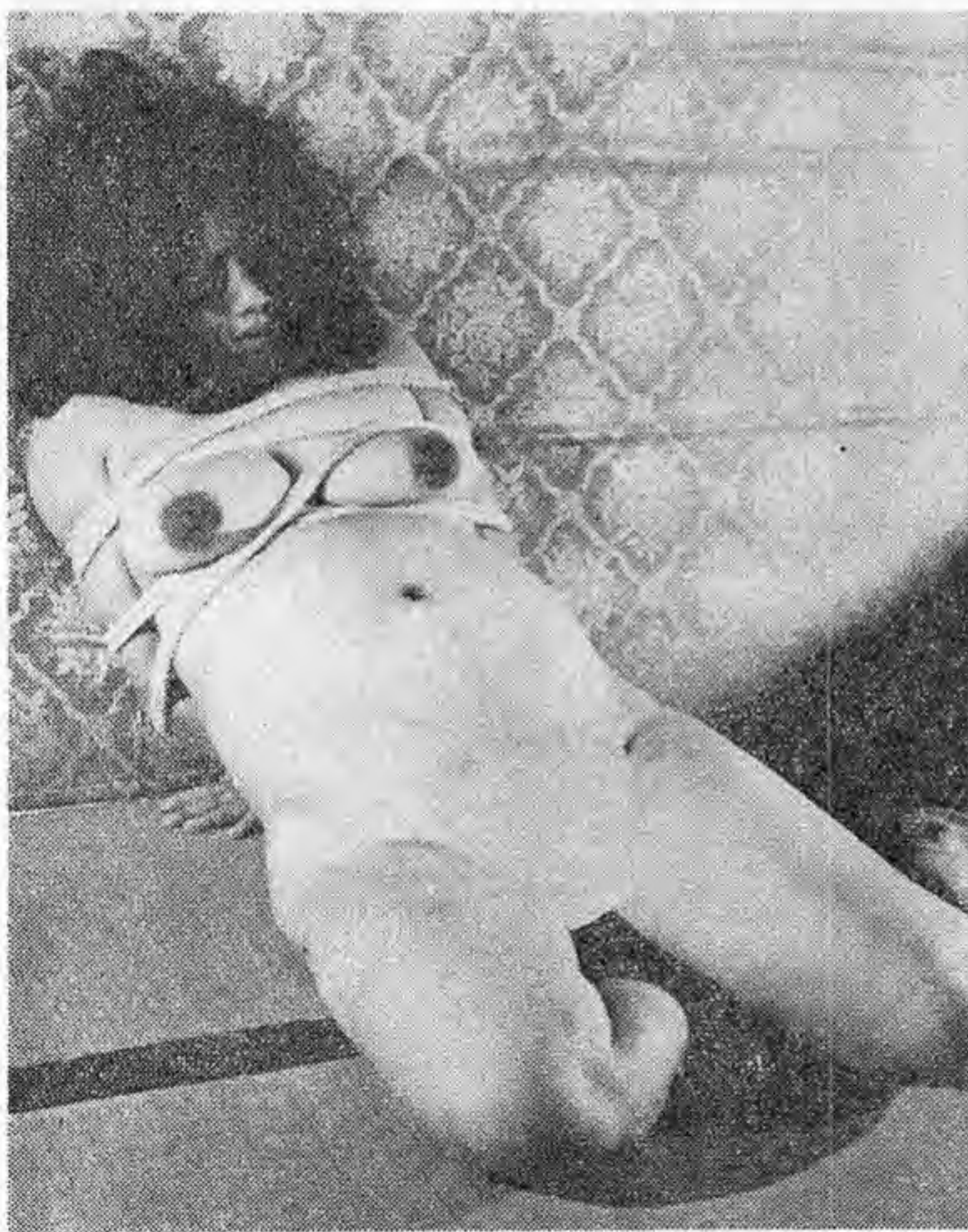
発掘のための努力をやらない限り、如何に貴重な素材を与えられても、ただ、失望を招くだけではないだろうか。というのは、えてして、アヌスに強い関心を持っている女性に限って、強い拒否反応を示すからだ。

表面だけを見て、「そんなのは嫌ッ、大嫌い」とか「駄目、駄目」という言葉を、言葉

通り真に受けていてはいくら経つても、望みの女性は、この世にはいない——という嘆きをかこつことになる。

私も、南加津子について、前回に行った浣腸のときの余りにも激しい拒否にあつて、こいつは、よくよくの浣腸嫌いかな——と、危うく誤つた先入観を持つところだった。

ところが、なかなかどうして、私の訊きだしたところでは、アナルセックスの相当の経験者なのである。







それならば、何故、あのように拒絶反応を示したかといえ、そこに強い関心があるための羞恥心に対して、余りにも単刀直入の私の行動が失敗だったのだろう。

## 迫りくる出産予定日

時間なのだ。

「今日はカメラの準備をしていないから、もう一度、出産までに逢ってくださいね。是非プレイをして写真を撮りたいんです」

「ええ、いいですわ。私の方はいつでも結構ですわ。でも、十日を過ぎると入院するかもしれないから、六日頃までに……」

蒲団の上へ仰向けに寝かせて、便々たる太鼓腹を撫でさすって、顔を近々と寄せて鑑賞する。もうあと二週間ばかりに迫っている出産予定日予定通りだと、二週間あとには、赤ちゃんが産まれてしまうのだ。

そうなる、この見事に膨れに膨れた蛙腹を愛撫することかなわな。今こそ、貴重にして、限られた

「よし、それだったら、六日にきめておきましょう。一時に迎えに行きますから」

縄で縛られた臨月の妊婦が、全裸のまま蒲団の上で仰向けに寝ている図。それは、まさに妙な構図であった。

もし、彼女を縄で縛ってなければ、起き上って逃げてゆくか、浴衣か洋服を着てしまふに違いない。また、彼女が臨月の妊婦でなかったら、今までに、もう何人もの女性で見たきた、ありふれた緊縛のポーズである。

しかし、南加津子は違う。便々たる太鼓腹を晒して、縛られたまま仰向けに寝ているのである。これに勝る異常美はないだろう。

私は彼女の傍に、長々と寝そべった。まことに心のなごんだ気持である。今日は写真は撮らなくてもよい、というより、撮影用具を持ってきていないということが、これほどまでに、私の心をリラックスさせてくれるのだろうか。静かに、刻々と流れてゆく時間だけが、惜しい気のするひとときだった。

私は、彼女の小山のように大きなお腹にやった視線を、漸次、全身へ走らせてから、いとおしむように、肌に掌を這わしていった。

奇譚クラブの内容のこと。O嬢の物語のこと。さっき見せた緊縛写真と絵のこと。話題



は、あとからあとからと続いて尽きない。

「それで、ご主人は、お腹が、こんなに大きくなつてからでも愛してくれますか？」

私は縄と縄との間から、むっくりと盛りあがっている乳房に、手をやりながら訊ねた。

「彼ったらね、そりゃ面白いのよ。」こんな大きなお腹だったら駄目だ”って言ってね、そして、ウフフフ、恥かしいわ、こんなこと言うの。とても変なんですもの」

「へえ、変て？ 一体、どんなこと？」

「いあー、恥かしい、とても言えないわ」

「言い出しておいて、止めるなよ。余計、聞きたくないじゃないか」

「だってエ、こんなこと、他<sup>ほか</sup>の人に、とても言えやしないわあ。そうでしょう」

「そうも、こうも、あるものか。すっかり言ってしまう。こら、言わないな。言わないんなら、こうしてやる」

幸いにして、彼女は高手小手に縛られたまままで寝かされているのである。私の責めの手は直ちに、彼女の肌に迫ってゆく。但し、巨大な膨らみを見せたメロン腹に対しての攻撃だけは避けたのは勿論である。

「だって、普通の人だったら、こんなこと、しないでしょ。いくら妊娠してるからって言

って……、ああ、やめて、やめて……」

私の適確な責めが、核心に迫るにつれて、彼女の会話は次第に喘ぎに変わっていった。

女体が燃えあがれば、羞恥心は次第に快感に変わり、そして、徐々に大胆になって、露悪的な意欲が、火がついたように爆発する。

「さあ、言え、言うんだッ」

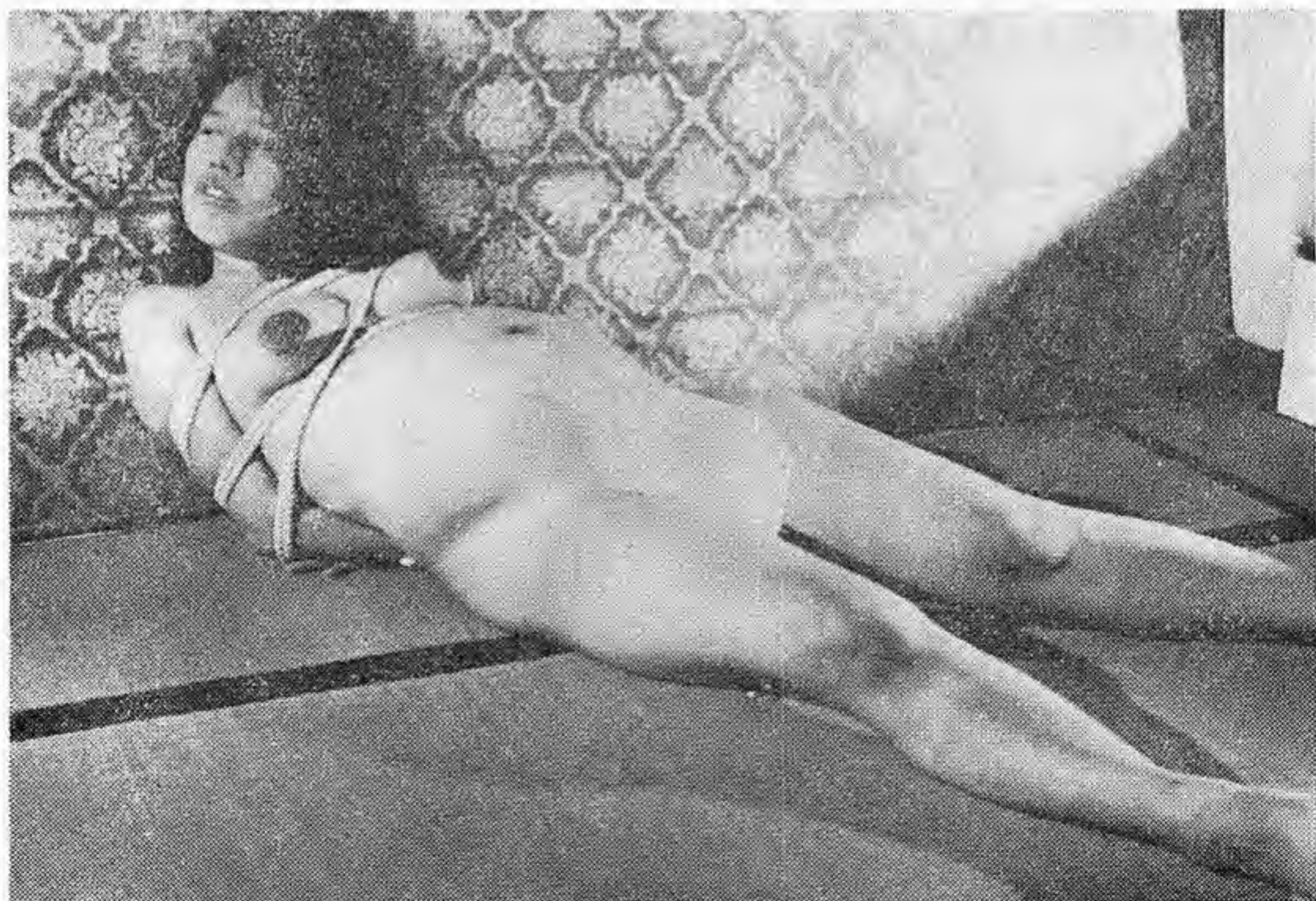
私は、そこで引導を渡す。

「彼ったら、うしろ……ほらここんとこを、使おうって言うのよ」

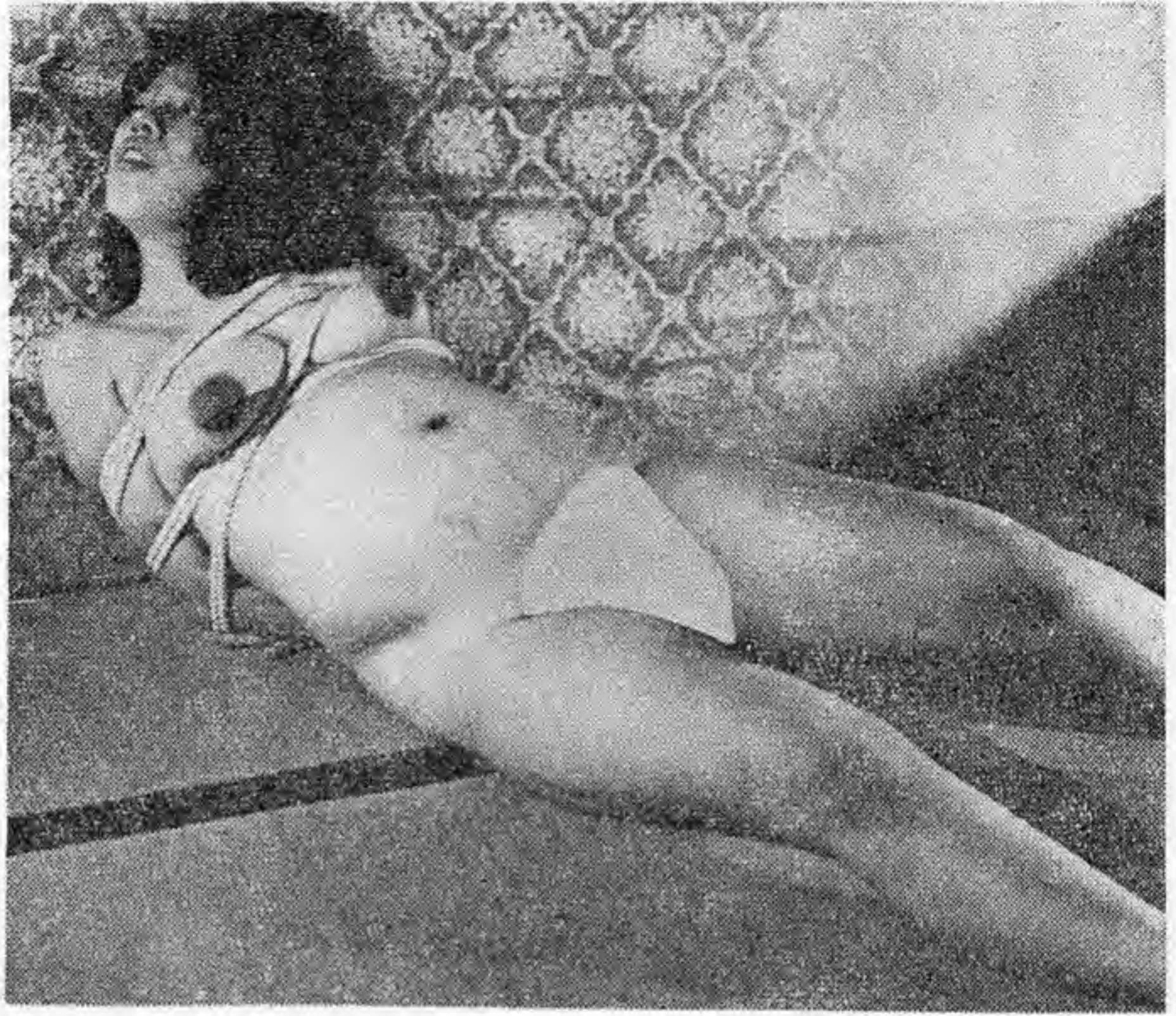
彼女の指の導いたところ、そこそこ、佐渡君、君の憧れの個所でもあったのだ。

正直言つて、私は、その部分に限って、強烈な関心を持っているという自覚はない。私を魅惑しているのは、ただ香ぐわしく匂ってくる好奇心であった。

「すると、浣腸もしてくれる







「ええ、ええ。それは、もう、その前に、何  
度も何度も、浣腸をして、お腹にたまったも  
のを、すっかり出してしまいますのよ」

「今日はまだ、風呂へ入っていなかっただろ  
う。だから、綺麗に洗ってやろう」  
私は備付けの石鹸を使って、丁寧に且つ懇  
切に、しかも念入りに洗ってやった。

「こんなに、お腹が大き  
くなったら、膀胱を圧迫  
して、当然、尿意は近  
くなるだろうが、便秘は妊  
婦と美貌の敵だから、こ  
りゃ、いいかもしれない  
な。それで、浣腸を何度  
も繰り返してから、次は  
どんなにするんだ？」  
「いやん、いやん。それ  
からあとは、聞かないで  
……。浣腸でも、なんで  
もされるから、聞くのだ  
けは、やめて……」  
私は浣腸用の器具を何  
一つ、用意していなかつ  
た。といって、アヌス  
責め”に対しての方法が  
ないわけでもなかった。  
彼女を起して浴室へ連  
れて行った。

どこを洗ってやったかって？  
それは、佐渡黄門君だったら、よくわかっ  
てくれることと思う。化粧台には、洗髪用の  
シャンプー、歯磨と歯刷子、簡便剃刀、それ  
にクリームなどの化粧品一式が揃っている。  
未知の鐘乳洞探検に、私がそれらの小道具  
を、如何に活用したか。また、そのとき、可  
憐な南加津子が、どのような狂おしいばかり  
の痴態を示したか、それは、いずれ機会を見  
て語ることにしよう。

## 出産予定日、十日前

八月六日（月）晴、気温三十二・六度。  
今日こそ、臨月腹の南加津子を取材できる  
最後の機会だと、私は心にきめていた。  
もしも、六日までに陣痛が起ったりして、  
彼女が入院したりしたら、もう、この出産予  
定日十日前のカメラ・ルポのチャンスも、は  
かなく潰え去るところであった。  
約束の一時きっかり、ゆっくりと一歩一歩  
踏みしめるようにして、こちらへ歩いてくる  
彼女の姿を見たとき、私は内心ほっとした。  
人目がなければ、抱きしめたいほどの、い  
としい気持であった。



「よく来てくれましたね。お元  
気ですか？」

「ええ」

彼女は、はにかんだように笑  
ってみせた。

きらりと光った白い歯が可愛  
い。如何にも娘らしい風情で  
ある。妊娠する前に逢いたかっ  
たなあ、そして、無茶苦茶に、  
いじめてみたかった——。そん  
なことを、私に悔ませるほどの  
彼女の純朴な笑顔であった。

当然のことのように、私は彼  
女のお腹へ目をやった。マタニ  
ティドレスの前を、支え上げる  
ようにして膨らんだ腹部だが、  
一見して一週間前と比較して、  
そう変った様子もなかった。私  
は、なんとなく安堵した。

「さあ行きましょう」

私はいたわるように、彼女の肩へ手を掛け  
た。はからずも、このとき、福井桃子の出産  
間際のプレイのことを、ふと思い出した。

奔放でお俠きやかな桃子は、転んだらいいな  
いというので、踵のない運動靴のような軽快



な靴をはいて、駆けるように寄ってきた。

それとは対照的に、淑かで、ゆるゆるとし  
た動作の南加津子。出産予定日を、あと旬日  
に控えて、私は、その西瓜を抱えたような大  
きなお腹を、つくづく眺めて、彼女の身体  
のことを慮った。

こんなことをしていて、若し、陣痛でも起

ったら、どうなるんだ  
——という心配も、心  
の隅にはあった。たし  
か、一月前の新聞紙上  
では、道を歩いていた  
妊婦が、急に産気づい  
て、近くの派出所にこ  
ろげ込み、警官があわ  
てて医者呼びに行っ  
てる間に、出産したと  
かいいう記事が載って  
いた。

マタニティドレスを  
着た、若い妊婦という  
ものも、極めて魅力的  
である。道を歩いてい  
るのを、正面から眺め  
ても、また真横の側面  
から眺めても、はっとするような衝撃を与え  
る。南加津子の、もう、これ以上、大きくは  
ならないと思われるくらい、見事に膨らんだ  
はちきれそうな腹部を、近々と目のあたりに  
眺めていると、また、別の興味がわく。

この衣服を剥いでみたら、どのように、不  
細工な裸身（普通の女性のスタイルの標準に





合わせて考えてみたら、が現われてくるだろうか——という、うずくような期待が、私の胸を痺れるような甘さで、うずかせる。

普通だったら、とても、そんな臨月の裸身を見せてくれる筈はない。たとえ、夫の眼にだって、晒したくないのが人情だろう。

だが、南加津子は、聖女のような南加津子は、それを敢て、許してくれるというのだ。

普通のスタイルでないからこそ、その異常美に強く魅せられる私。妊婦の美しさは、や

はり実際に観賞してみないと、わからないのではないか。美の標準から照らせば、不細工きわまりない、この妊婦が、何故、かくまでの神々しいばかりの美しさを発揮するのだろうか。それは神の摂理だからなのか。

私は一刻も早く、南加津子の裸像を見たくなった。そして出産を目前にした彼女のM女ぶりを、この眼で、しかと確かめたかった。

ホテルの一室へ落着くなり、私は彼女に入浴を促して、カメラの準備をしながら、隣室

で脱衣する彼女の方へ、チラチラと視線をやった。腹全体に胸の近くまで、ぐるぐると巻いていた腹帯を、ゆっくりとほどいているところだった。次第に姿をあらわしてくる青白い蛙腹を、生唾を飲み込む思いで、私は横目で、じっと眺めていた。

腹帯が、すっかり解かれてしまうと、むっくりと静脈をうかべた巨腹が、見事なばかりの張りを見せて、盛り上って見えた。

今こそ、千載一遇のチャンスである。私は一台のカメラにカラーフィルムを詰め、あと二台のカメラにモノクロフィルムを詰めて、彼女の浴室から出てくるのを待った。

「恥かしいわ、こんなに大きくなったお腹をカメラの前にさらすなんて——」

ピンク色に染まった若々しい肌からは湯気が出そうだ。見たところ、先日よりは、一まわりも二まわりも、お腹ばかりではなく、身体全体が大きくなったような感じがする。

縄で縛らない臨月のヌードを、カラーとモノクロで先ず撮りたいと思った。だが、縛っていないと、カメラの前に立つ彼女の羞恥心が、強いのだろうか、私が促しても、浴衣を羽織ったまま、うずくまってしまって、カメラの前に出てこようとはしない。



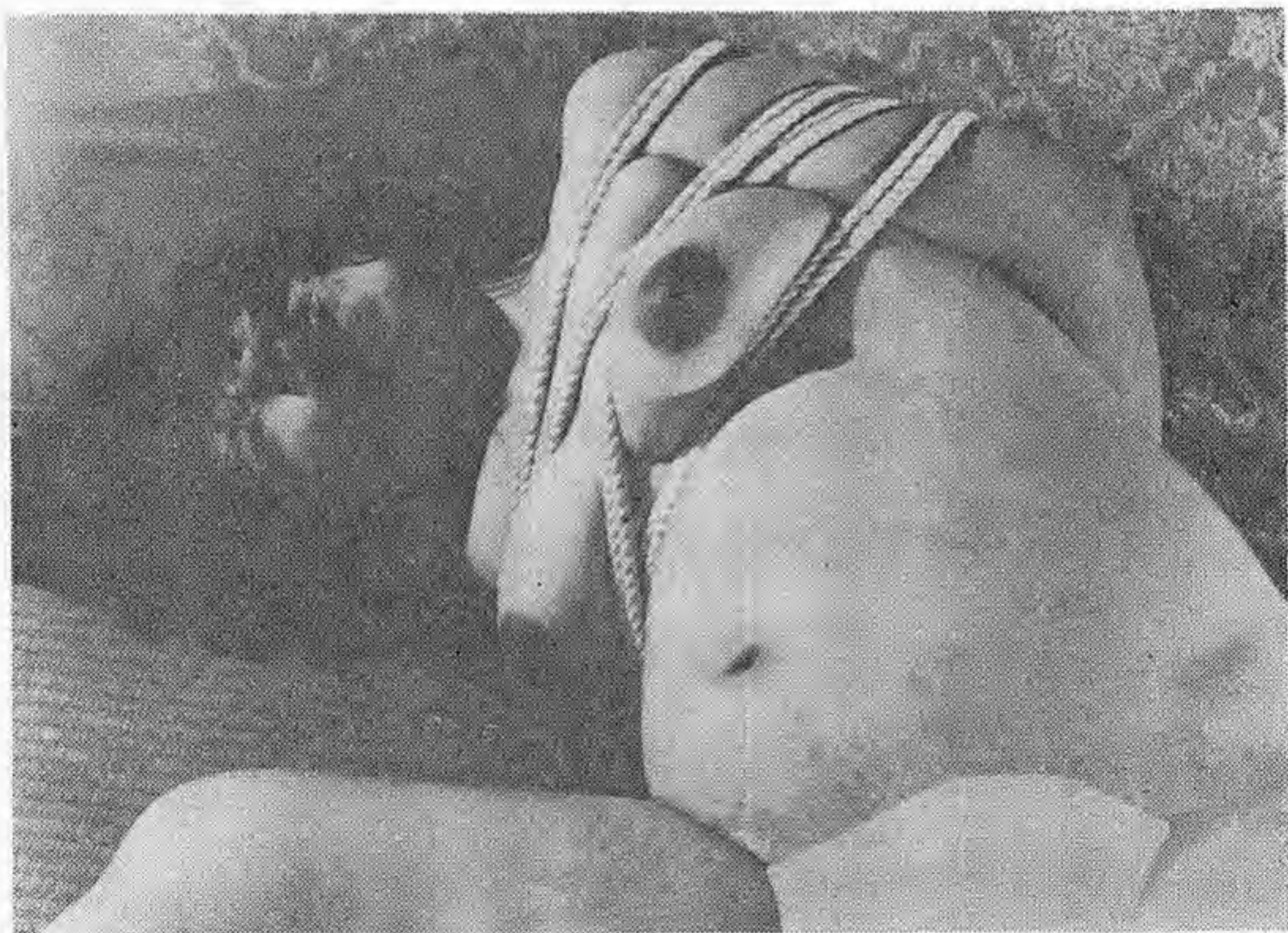
私は近寄ると彼女を立たせて、両腕のなかに、ぎゅっと抱きしめた。向い合って立った彼女の膝頭が、がたがたとふるえているのが私にはよくわかった。肩口から二の腕にかけても、ぶるぶると痙攣しているのが抱きしめた私の手に伝わってくる。なんとという、新鮮な魅力なんだろう。

大きな乳房が、私の胸の前で息づいていて、手荒に引き寄せることも出来ない。

私は立ったままで唇を合わせた。仰向けに反ったように、私の両手の中に上半身をあずけ、徐々に全身の力を抜いてゆく彼女を、畳の上に、そっと横たえた。

襟首に汗の玉が浮かび、石鹸とも化粧品とも、体臭ともつかぬ、ほのかな匂いが、ぷんと、私の鼻先に漂ってきた。

恐ろしいほど緊張していた南加津子の全身が水母くらげのように、やわらかくなり、逆に下から、私の身体に力一杯、抱きついてきた。



ふと、視線を背後へめぐらすと、三脚の上に据えたカメラが、人待ち顔にこちらの方へレンズを向けている。私は彼女を抱き起こして浴衣を剥ぐとカメラの前に立たせた。

「こんな大きなお腹で羞かしいわ。さぞ、そちらから見て、無格好なんでしょう」

「とんでもない。神々しいくらい神聖な美しさだよ。妊婦のヌードだからって、淫らな目で見るのは間違っていると思うよ。なるべくお腹の大きさを強調するように、腰を押しだすように、お臍を突きだしてごらん」

異常に膨らんだ乳房と腹部——。二十四才の初産婦、南加津子にとって、今は、一番肉体的にポリュームのある時だろう。

出産日が近づいたことを示すようにメロン腹の膨らみも、まん丸いボールのような形体から、次第次第に、下へ垂れてきている。

もう、いつ何時なんどきでも外部へ出て一個の生きた生命として呼吸することの出来る胎児が、この大きなお腹の中に宿



っているのだ。そう思うとパンパンに張ったお腹の皮が、ピクピクと動いたような気がした。

平べったく押しつぶされた臍窩のまわりが一段と小高くなって、割合に濃いウブ毛が、ふわふわと、風もないのに、そよいでいるといった感じである。

私は跪いて、お臍に唇を当て、両掌でお腹の両脇をさすりつづけた。唇をお臍から、徐々に下へと、ずらしてゆく。

「撫ったいから、やめてえ……」

彼女は身をよじる。私はそんな臨月妊婦の媚態を、角度を変えて何枚も何枚も、丹念に写していった。立ったポーズが終ると坐らせて、便々たる太鼓腹を前に突き出させた。

## マゾの決定的瞬間



マゾだと自覚している女性が、妊娠して、しかも、臨月を迎えたとき、果してマゾ精神は、どのように変化するだろうか。

この点については、私は中河恵子で具に体験したことがあった。娘時代から何回となくSMプレイを繰り返して、身体の隅々まで知りつくしていた彼女が、突然、妊娠し、妊娠

六カ月頃から、出産直前まで一週間か十日毎に、責め続けたものだ。

愈々、二、三日後に産院へ入院するという日まで、激しいSMプレイに没頭して、しかも、その高邁なマゾ精神をあくまで忘れず、その渦中に惑溺していた、あの崇高な姿は、未だに、私の臉から消え去らない。

南加津子のマゾ心境に関しては、私には、まだまだ、未知の部分が多かった。

「私、お腹が大きいから、そんなことするのいやって、言ったの。そしたら、彼って、俺を独りで放っておくのかって、襲いかかってくるのよ。私って、そんなに暴力を揮われると弱いからね。だから、そんなときは、喜んで許してしまうのね。もし、大人しく出てきたら、断然、拒絶してしまっただわ」

この前、逢ったときは、彼女は、そんなことを問わず語りに喋っていた。



「そうか、それだったら、僕が大人しく迫ったとしたら、どうなんだ？」

私は彼女に抱きつく真似をした。

「いやよ、いやよ。私って、こんなにお腹が大きくなったら、そんな興味はないわ」

「そうか、そりゃ仕方ないね」

私が身体を離そうとしたら、彼女は急に、手を伸ばして下から抱きついてきた。

「あら、今のは冗談よ。もしも、貴方が本当にお望みになるんなら、私はいいのよ。でも出来たら、私を暴力で犯してほしいのよ。その方が、私、凄く興奮するんですもの」

暴力——、その象徴化されたものが、縄であらう。いや、実際に縄を用いなくても、呪縛の手段は、いくらでもあるだろう。

犯さなくては、燃えない女。

南加津子は、そんな女なのだろうか。

夏は、どうしても薄着になって、肌を露出する機会が多い。それに、今の彼女は、医師によって診察を受けるため、その裸身を見られる機会が多いわけだ。

二の腕や胸、手首、背中などに縄で縛った痕がついていては困ることは明らかだ。私は縄目の残らないよう十分に配慮しながらも、一分のすきもない緊縛感溢れる縛り方を彼女

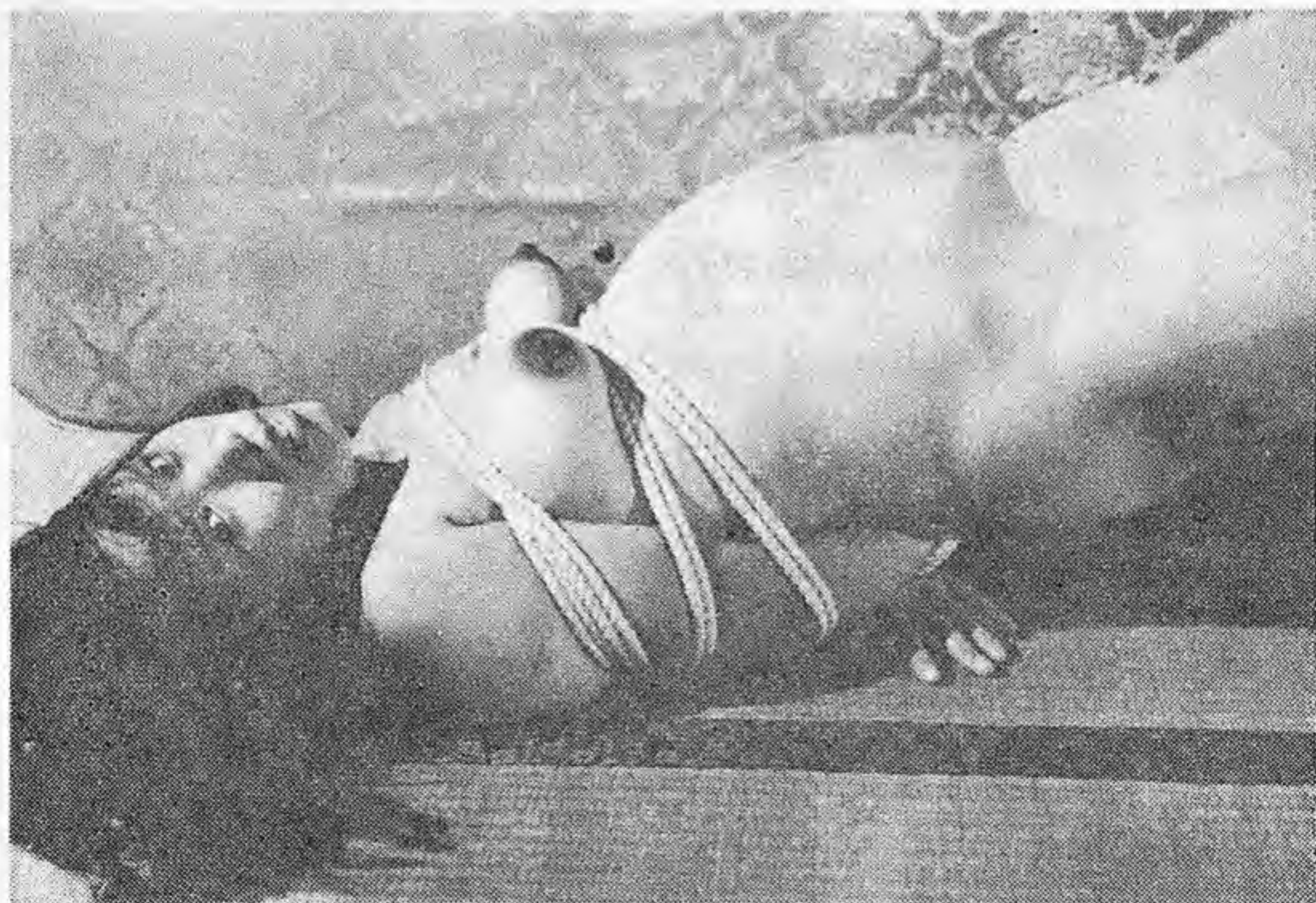
に施した。縄は、幾多の女性の肌の脂を吸って、若干柔軟性を帯びているとはいえ、白いロープは、肌に縄目の痕をつけながら、しつとりと締めつけている。

南加津子は、縛られてしまうと、両手を使えないという空しい無防備感から、身体の前を気にしながらも、も早や、諦めざるを得ないという安心感で、身を私のなすがままに委ねている。

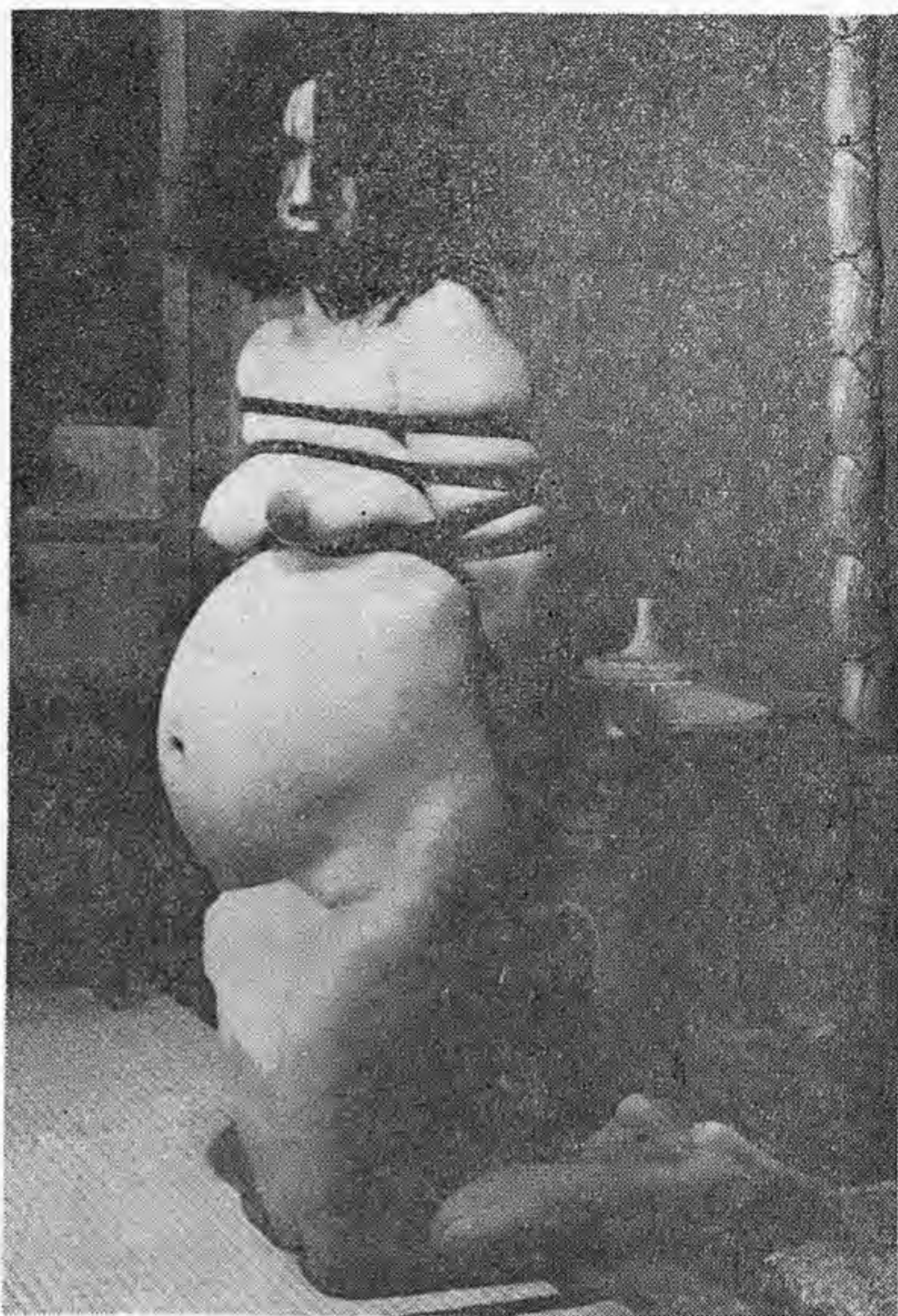
私の手が、彼女の肌の如何なる個処に、這いずり回ろうとも、もう彼女は、自分の意志では、どのようにも防ぎようがない。私は、それをいいことに、背後へまわって、掌では握りきれない乳房の先をむんずと掴む。

「ううう、うーむ」

呻き声と共に、半透明の乳汁が乳頭からにじみ出てきてそれが水粒となって、ぽたり







ぽたりと落ちる。私は口をつけて吸った。味はなくて、なんともいえない生臭い匂いだけが口中から鼻孔へ抜けていった。

乳房を握めば、握むほど、後から後から出てくる乳汁を吸って嚥下しようと思ったが、なんとも、その生臭さには辟易した。どうにも、咽喉を通らないのだ。舌の先に、乳首の

ざらざらとした棘とげのようなものが、痛く感ずる。これは、なんだろうか――。

と、彼女の上半身が、ぐらりと大きく揺れて、私の手元に倒れ込んできた。メロン腹が呼吸のたびに、激しく上下に息づいている。

私は、畳の上に、ころりと彼女を転がしておいて、臨月妊婦の緊縛肢体に、観察の視線

を向けた。お臍を中心にして、太鼓腹の真只中に、上から下へ正中線が一本通っている。

もし、この臨月妊婦の巨腹を真二つに断ち割るとしたら、この中心線を通して、鳩尾みぞおちから下へ切り裂いていったら……と、そんな、あらぬ妄想にかられた。

一つ家の鬼婆ではないが、臨月の妊婦を逆さ吊りにしておいて、砥石で出刃庖丁を研ぎそして、太鼓腹を断ち切る――。そんな凄惨な構図が、私の脳裡を一瞬、よぎった。

しかし、私の現実の実現可能の構想は、そんな陰惨なものではなかった。

痺せこけて、骨と皮ばかりの老婆の手が、手づかみで胎児を握み出している、血みどろの絵なんかは、私は好まない。

もっと、甘美で、惜しみなく与える妊婦に対する凌辱の構図を、私は考えていた。

「手は痛くないかな。痛かったら、いつでも縛り直してやるからな」

「ええ、少しは痛いけど、辛抱しますわ」

「痛いって言って、縄を解かれたら、困るんじゃないかな？」

「あら、そんなことはありませんわ。無理に括られるので、私、辛抱してるんです」

「そうだろう、そうだろう。だったら、いい



子だから、僕の言う通りにポーズをとってごらん。ホラ、足を開いて……」

「エッチだわ。すぐ、足を開けだって。そんなことをしたら、見えてしまうじゃないの」

彼女は、太股と膝を合わせたまま、膝から先の脛と足先だけを、ピンと弾ねあげる。そのはずみで、上半身が横倒しになって、大きなお腹が、垂れ下って畳につく。

縄が二の腕と乳房の上下に、ぐぐぐと喰い込んで、彼女は、思わず、「いたた……」と苦痛の表情を、あらわにする。

「どうだ、辛抱できるかい？」

「下になって、畳とすれている二の腕と肘がとても痛い。このまま、そっと仰向けにして、少しは楽になるかもしれないわ」

私は加津子の右足の甲を持って手荒に、ぐいと押し開く。

「いやよ、いやよ。こんなに縛られたままでは、いやよ」

私は強引に足を開く。もがけばもがく程、縄は肌に喰い込んで痛々しそうだ。

縄目の痛さは、喘ぎを増し、喘ぎは、太鼓腹の上下の起伏運動に変わっていった。私は、仰向けになるよう、彼女の腰のあたりを足で押した。縛られた両手首が背中の下になり、

ツツツ、と、疼痛に顔をしかめる。

彼女は、いやでも背の下になった手首に対する圧迫をゆるめるため、腰を浮かさねばならず、期せずして、狸腹を一層、大きく誇張して見せる結果となった。

私は太鼓腹を、真上から、真横から眺めてカメラに収めてから、彼女の足の拇指をぐっと握った。足の拇指を握られてしまうと、不思議と下肢の運動を制圧されてしまう。私は易々と彼女の脚を開けることに成功した。

## 前と後の共犯者

縄を解いてしまっても、南加津子は、下半身の膨隆部分を晒したまま、畳の上に、どたりと横になったままだった。

私は冷えてはいけないと思って、バスタオルと浴衣とを、彼女の裸身の上にかけておいて、次の責めの準備にとりかかった。

さっきは白のロープを用いたが、今度は正





反対に、黒のロープをとりだした。黒といっても真黒ではない。以前、十年程前には茶と白のまんだら斑のロープとして、使っていたものだが、これを黒の染料で染めた奴だ。

この黒縄を植木の支柱止めに二年ばかり使っていたら雨に打たれ陽に晒されて、染料が大分、落ちてきたので、もう一度、女体緊縛用に使ってみようと思いついたのだ。

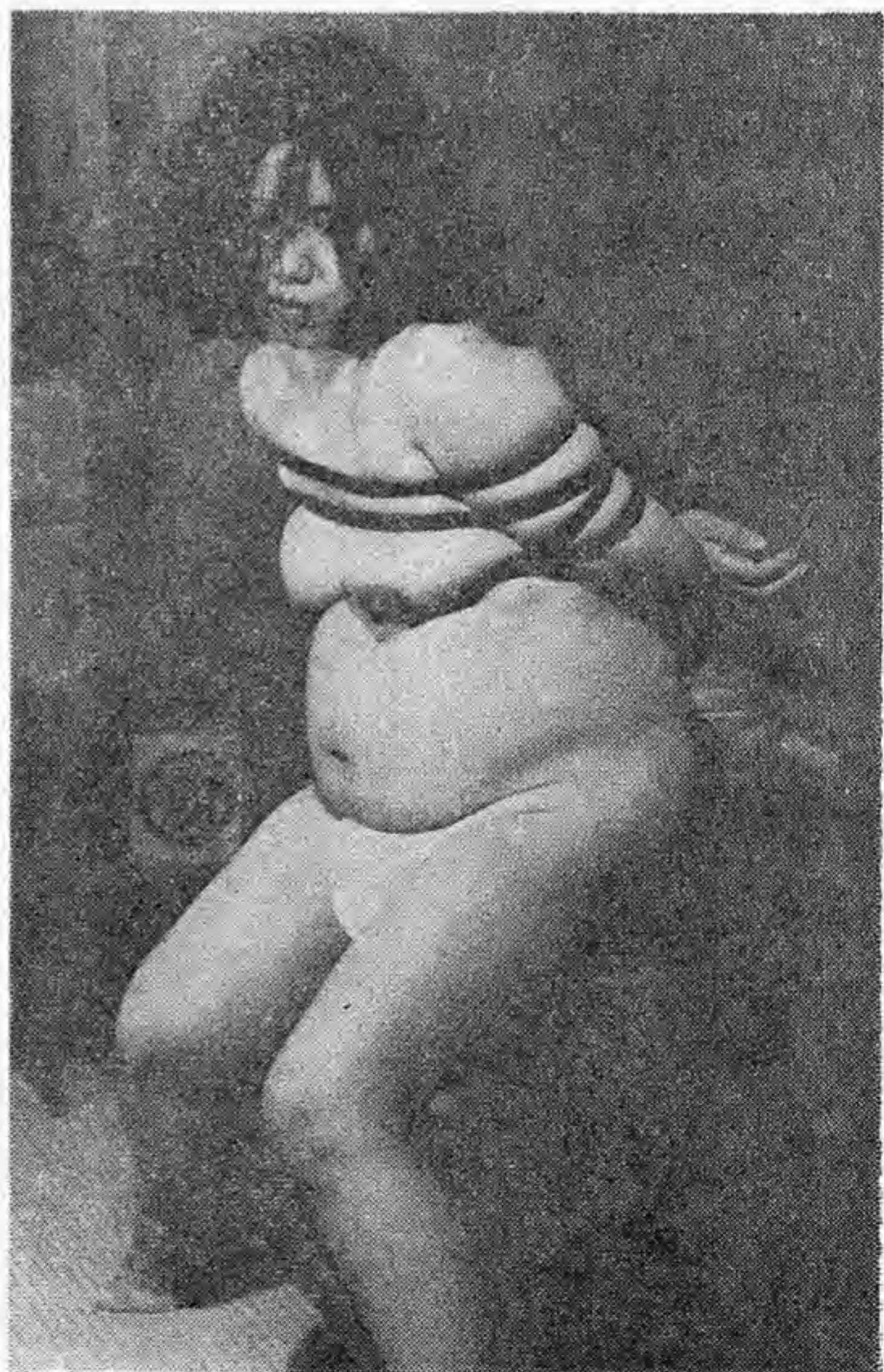
白い肌に黒い縄の、鮮かなコントラスト。

私は情容赦なく、肌もくびれよとばかり、締めつけていった。二年以上も雨ざらしにしておいたので縄自体としては、相当にくたびれていて、肌に喰い込む割には、見た目よりは痛くはないであろう。

「加津子、君は妊娠していなくなつて、うしろの方は、好きだったんじゃないのかい？」  
「あら、そんな風に見えまして？」

「どうも、妊娠によって、仕方なしに使っているなんて風には、見えなかったものね」  
「そんなに、お気に召しましたの？」

黒縄で縛り上げて、引き起していても、彼女は、夢見るような目なぞで、全身にも力が入っていない物懶い表情である。まだ、先程の余りにも異常なSMプレイの余韻が、身体の節々にまで残っているような身のこなし



方であった。

縛る縄を変えろということとは、プレイの気分を一新することにつながる。

私は、もう一つのチャンスを狙って、哀<sup>かな</sup>し<sup>い</sup>ままで、まん丸く膨らんだ彼女の蛙腹に目をやりながら砂利の上に正座させた。

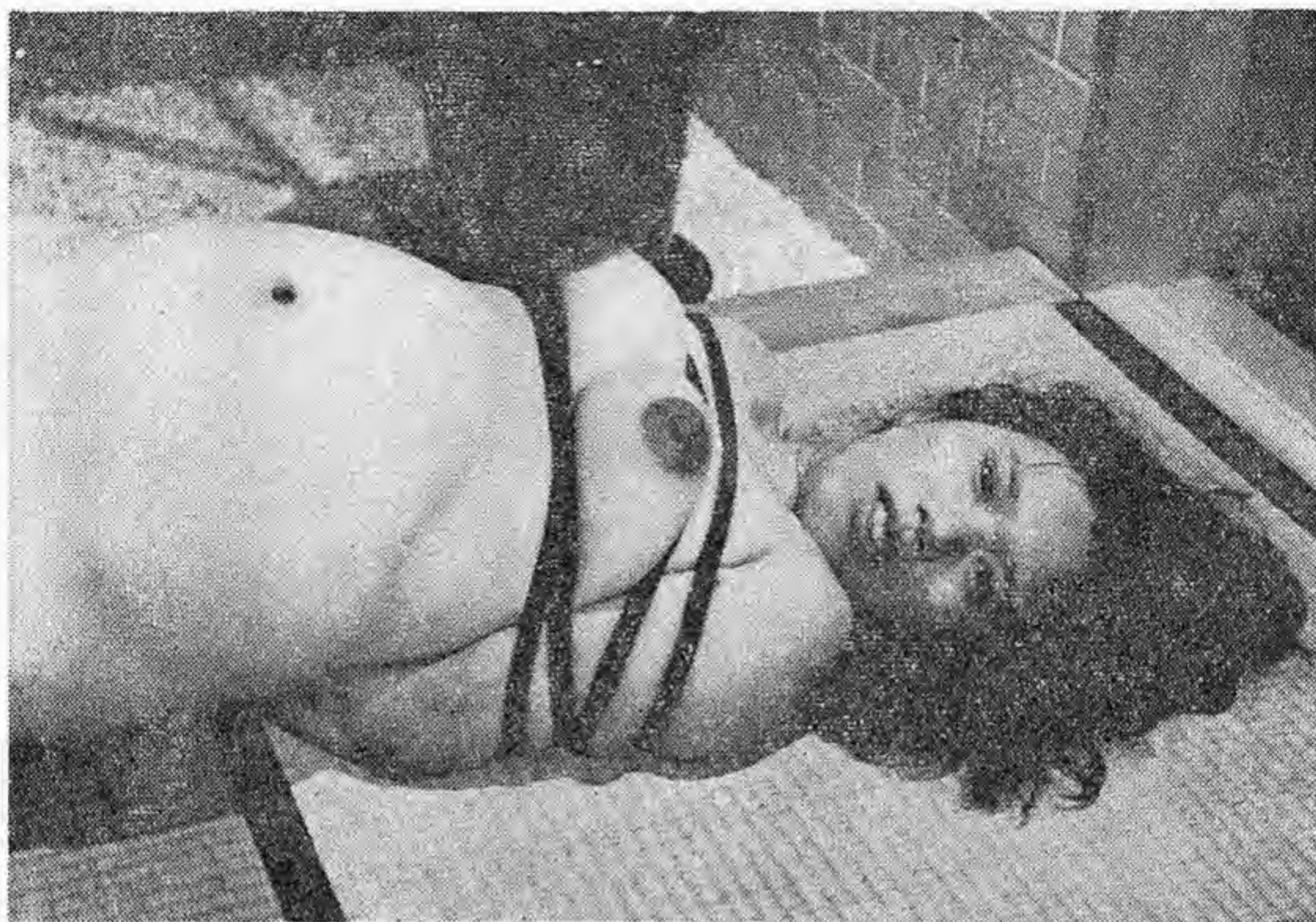
「もう、今日限りで、当分、逢えなくなるわけだね。赤ちゃんが生まれたら、放っておい

て、出られないものね」

「ええ、<sup>ひとつきふたつき</sup>一月や二月は、駄目かもしれないけど、乳離れするようになったら、預ってもらえる心当りはあるの。だから、二時間や三時間<sup>は</sup>は出られると思うわ」

「こんな出産間際のプレイだなんて、一生に一度の思い出になるくらい感激だけど、また反面、お腹の大きくない加津子を、思いつき





り責めて、責めて、責めまくって、Mの感度を試してみたものだね。臨月の妊婦を責めるなんて、貴重なチャンスを持ちながら、こんな考えを起すなんて、贅沢だろうか。僕に、そんな不遜な気持を起させるくらい、加津子って、素晴らしいもんなあ」

「あら、そうかしら。そんなに言って下さると嬉しいけど私って、すぐ、どんなことにも反抗する意地っぱりなところがあるんです。ですから彼には、いつも叱られていますわ。ほめられたことなんか一回だってありませんのよ」

「うん、その反抗するところを逆手にとって虐めたらいいんだよ。加津子っていったらそんな素晴らしい女なんだ。少なくとも、SMに関心のある男性にとってはね」

「どんなポーズをとったら、いいのです？ 私、おっしゃ

る通りの、どんなポーズでもとりますから、命令して下さい。その代り、お写真が終ったら、私の一つのお願ひ、きつときいて下さるわね」

「その、願ひというのは、なんだね？」

「それは、あとで言いますから、早く、早く写真を撮って頂戴！」

私は、全身が燃えるように火照<sup>ほて</sup>って、じっとりと汗ばんでいる加津子を仰向けに寝かせて、カメラの方へ戻ってシャッターを切ってから、彼女の足下へ回った。

括られた両の手首が下になっているため、腰を浮かして、お腹を上へつき出している。黒縄によって、乳房が一層、強調されて、縄と縄との間から見事な隆起を見せている。豊満な乳房を好む人にとっては、たまらないくらい大きな乳房だ。

彼女は下になった手が痛いのだろうか、腰を浮かしながら、私が視線を向けているのを意識してか、両膝を徐々に開きだした。腰を浮かしては、下になった手首をずらし、その度に、脚を少し宛、開いてゆく。

「ああ、見たら、いや、いや」

彼女は、なまめいた声を洩らす。

妊娠によって、新陳代謝が旺盛になったの



か、全身が汗ばむばかりか、生理機能もまた必然的に、平常よりは激しいのだろう。

妊娠——という女性にとっては、当然の生理現象も、それをいつも見ていない私にとっては、まことに興味深いものだった。

「ねえ、ねえ、早く、写真に撮って——」

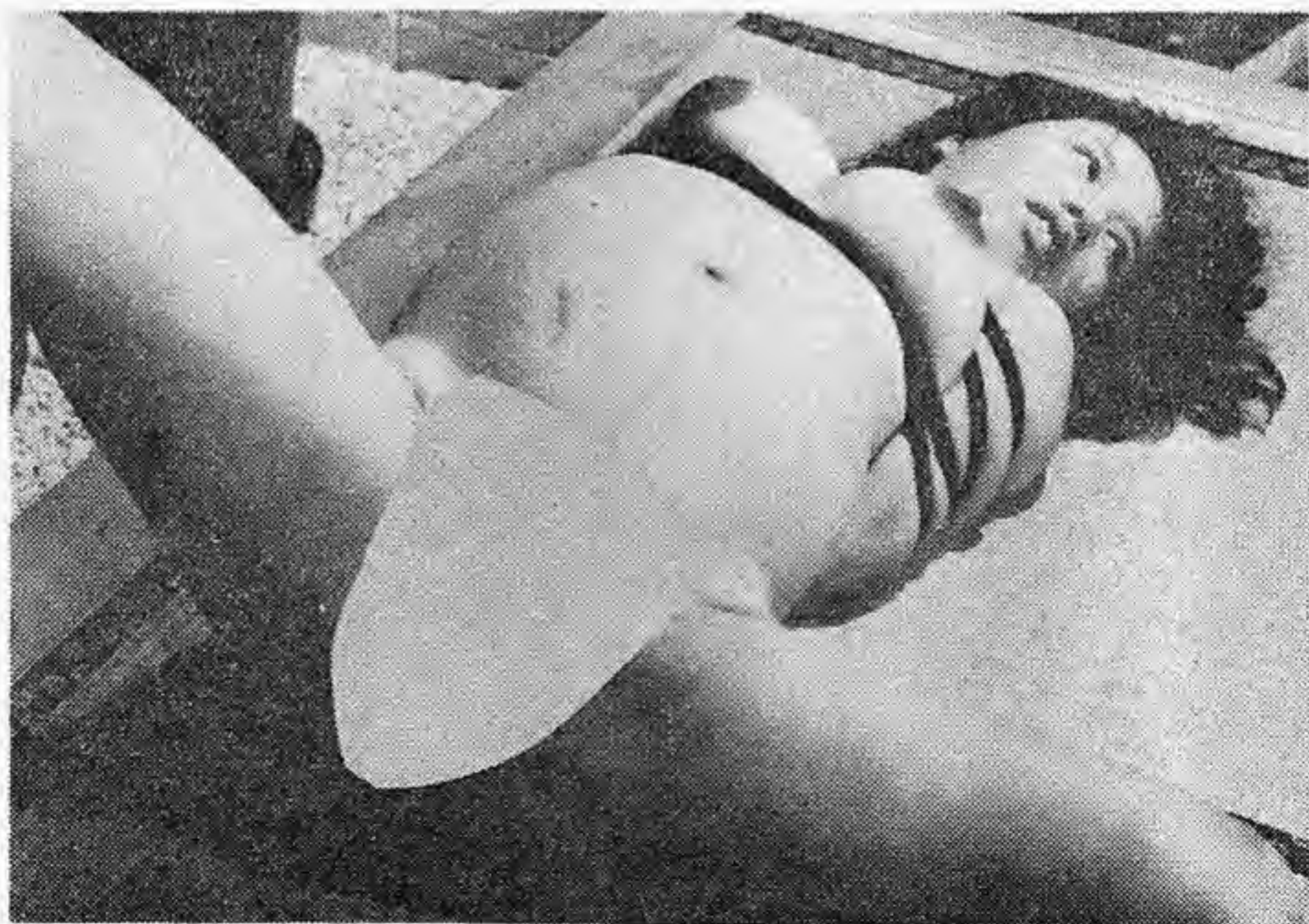
彼女の口から、そう頼まれるまでもなく、足下で、具に觀賞していた私は、それをフィルムに印したくて仕方がなかった。



高く、低く、カメラを構えてはシャッターを切っていた。シャッターを切るたび、私の胸の動悸が、ドキンドキンと自分にもわかるくらい高鳴っていた。

私が命じたのでもないのに、彼女の脚は、次第次第に、大きく広げられてゆく。私の視線が、無言の威圧を加えているとでもいうのか。それ

とも、仰向けに寝かされた彼女の手首が下になったのを、痛さから逃れるためにそのようなになったものか、それは、私にも、わからなかったが、現実には、私の目を、こよなく楽しませてくれたし、被写体としても、絶好のシャッターチャンスを与えてくれた。



私は、彼女に誘発された格好になった。彼女は、次から次へと、あられもないポーズを自ら展開してくれたし、私は、もう、狂



ったようにカメラを駆使していた。

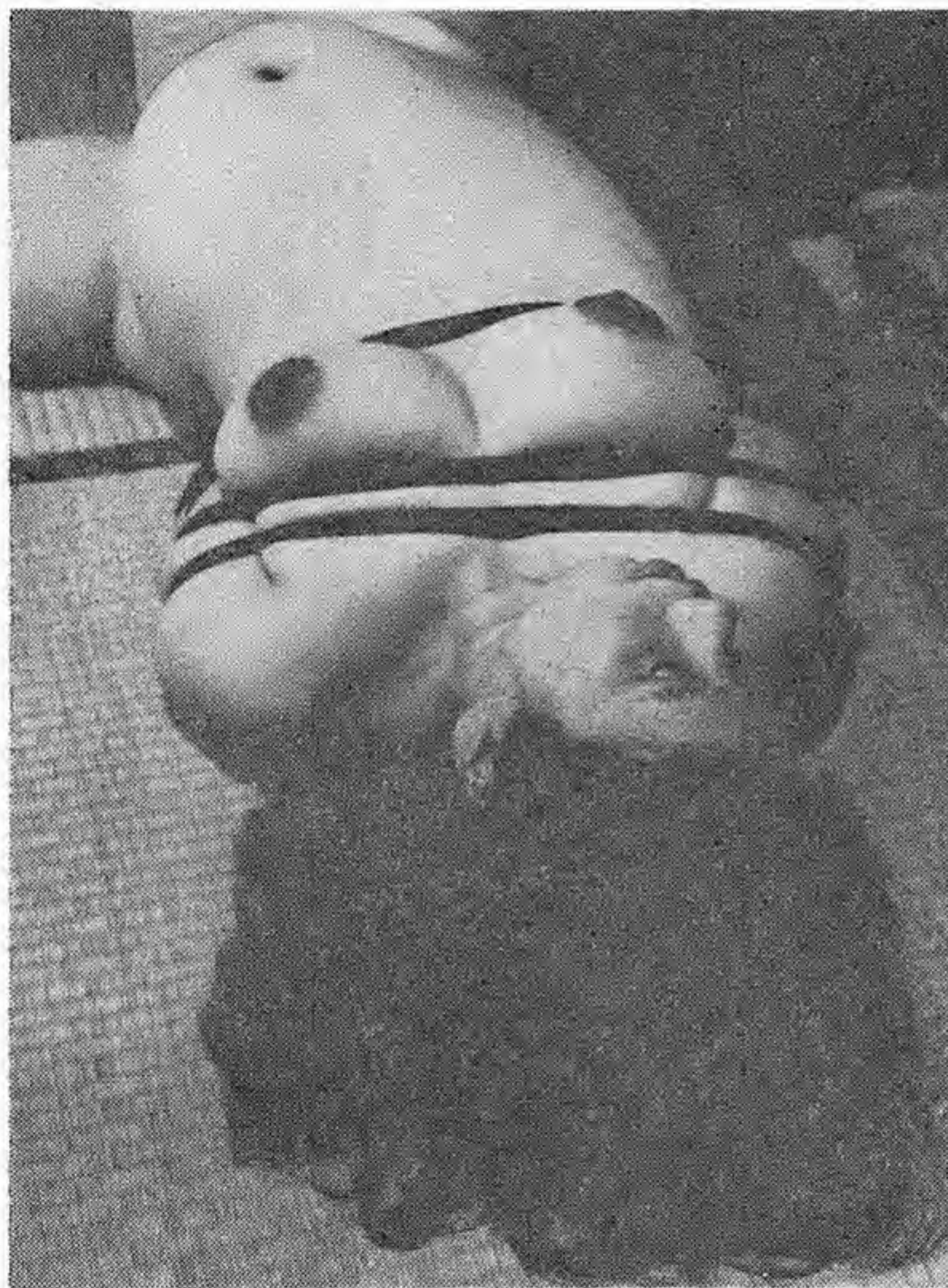
悪虐の限りをつくして、この妊婦の妖精を射止めなければならぬという、切羽つまった立場に追い込まれていた。追い込んだのが彼女だったのか、或は私なのか。いや、二人は、今日のSMプレイの共犯者なのだ。

最初、私が彼女のMの琴線に誘発音を出し

彼女がそれに共鳴し、

次いで彼女が私を誘発したのだ。やがて、誘爆は誘爆を呼んで、止まることを知らなかった。

彼女が尿意を訴える  
と、縛ったままでトイレへ連れて行って用を足させ、再びプレイの場へと連れ戻った。その間、彼女は一度だつて、縄を解いてほしいなどとは言わない。それどころか、あとに残された僅かの時間を、惜しむかのような熱の入れようだった。



私は、臨月の妊婦に対して、これほどの激しいプレイを継続してもいいのだろうかという懸念に、しばし躊躇したが、それがまた、彼女の被虐心を一層、あふりたてる結果となった。

便々たる臨月の巨腹が波うって喘ぐ。汗まみれの太鼓腹は、電光に輝いて美しい。マゾ

の心に火がつけば、それは、無間地獄の深淵に、はまり込んだ亡者のようなもので、その行き尽くところを知らないのだ。

臨月妊婦の南加津子はタフだった。

いくら進んでも進んでも、対岸には到達しないという、じれったさが、このような激しいプレイの連続になったのだろうか。

むさぼり尽しても、まだまだ飽き足りなくて、それでいて、甘美きわまりない感覚が五官をしびれさせていった。

対岸に行きつくことが目標なのか、甘美な波にざわめき立つしびれの海に漂流するところが目的なのかも判然とせぬままに、夢幻の刻が流れていった。

やがて、帰らなければならぬ時刻が迫ってきた。去り難く、離れ難い気持を、時刻という冷酷な使者が、この濃密なSMプレイの共犯者に対して終止符を打ってくれた。

——(おわり)——



カット・岡 たかし



獣 じゅう

性 せい

の

器 うつわ

——民子は、何度も呻き上体をねじった。ねじりながら、彼女は、体を回転させていった。ちょうど、豊子と十字に交叉した態位までくると、民子は左掌を豊子の乳房の上に置いた。——

品 しな

川 がわ

民 たみ

子 こ

民子は久しぶりに旅に出たいと思った。丁度、女子大の前期試験が終ったので、今年はゆっくり最後の学生生活を、楽しもうと思ったのである。「民子、どうするの？ 今から——」言い寄る友人の伊東豊子にと、きっぱりと民子は答えた。「わあ、いいなあ。どこ？」「どこって、まだ未定なのよ。これから考えるとこなの」そう答えた民子の脳裡に、もう風光明媚な場所が、パノラマのように浮かんできた。民子は、夢見るような瞳になった。人気のない、しかも、心に清澄な感触を与えてくれる場所。



湖畔のロッジ——。林間の透明な空気の山道と、それにつづく湖の蒼い水。

そういった場所が、いかにも、あと半年で実社会の泥濘の世界にとび込まねばならない自分に、ふさわしい憩いの場と思えるのであった。しかし、東京近在には、そんな場所には、人跡の生々しい傷が残っているようで民子の気分には、しっくりこなかった。

「できたら、遠い所がいい」

脳裡のイメージを追うように、遠くを眺めながら民子は言った。

「学生生活の垢を落してこなくっちゃ」

「賛成！」

豊子は応じた。

「賛成って？」

「もちよ、私も、その案に——」

「とすると、豊、あなたは？」

「水臭いな、民、わかってるくせに」

伊東豊子は含みのある瞳を民子に向けた。

「ね、そうでしょう」

「仕方ないわね。物見遊山じゃないんだけどな。仕方ない」

伊東豊子は、民子と同じ国文学を専攻している最も仲のよい学友だった。

結局、豊子は民子の旅行についてゆくことになってしまった。

二人は二日間、日本地図を前に、頭をつき合わせて行先を検討した。人気がなくて、しかも宿泊施設があり、且つ風光明媚な場所。しかし僻地は敬遠された。

「行きあたりばったりにしましょうよ」

二日目が過ぎようとした日の午後、民子は諦めたように言い放った。どの旅行案内書にも、自分の想像に似つかわしい場所は、発見できなかったのである。

地図をにらみながら民子は、自分に恋人でもいたら、今頃、こんな淋しい計画など、思いつかなかっただろうにと思った。

地図を仲立ちとして向い合っている豊子の横坐りになっている、むきだしの膝は、むっちり肉がつまっている。民子は、自分のこの佻しい計画の中へ、豊子の太り肉の体が介入してきているのを自覚して、かすかに、自己嫌悪と嫉妬の感情が、胸にわいてくるのをおぼえていた。

彼女は、自分の肉体を連想した。

決して不細工なスタイルではなく、むしろ均斉のとれた方である。この三年有余の間、数えきれない程、鏡に映してきた腹のくびれ

であり、腿の肉づきであり、胸のふくらみであった。豊子と比較して、何一つ、劣ることのない肉体であった。しかし、どういうわけか、彼女は男と縁がなかった。キッスさえ交した相手も、いなかったのである。

豊子が同意したので、さっそく無計画な旅の計画が成立し、その翌々日に、二人は揃って列車に乗り込んだ。二人とも、リュックに登山靴という軽装だった。

二人で駅の構内を歩いていると、派手な色彩の豊子とは対照的に、民子は地味であったが、しかし、彼女の方が余計、目立った。

背丈に比べて肉が目立つ豊子より、均斉のとれた民子の方が、人目を引く要素を持っていたのだ。冷たい感じのノーブルな顔立ちが美しい造形を見せていた。

二人は、東京を皮切りに、日本列島の東部を南下した。東京—横浜—熱海。ここまではどちらも降車の意志を示さなかった。

熱海—清水—静岡と下って、ようやく、豊子の方が、「もう、そろそろ降りない」と民子を促しはじめた。

浜松を過ぎたあたりから、空間が展げ、視界は一挙に黒々とした塊りに支配されたのである。浜名湖であった。豊橋から伊勢湾へ突



出している半島が二つあって、旅行案内書では、ここも快適であると謳<sup>うた</sup>っている。

渥美半島と知多半島の二つの半島なのであるが、どうも民子には、もうひとつ、ぴんと胸に来るものがなかった。人跡未踏という民子の念頭に、どうも噛みあわない。

「名古屋で、ゆっくり考えましようよ」

民子は豊子の丸い顔をみて言った。

時刻は夜中の二時をまわっている。車内は薄暗い照明が、ぼんやりとしていて、乗客の顔に不眠による疲労の翳があった。

民子はトイレに行きたくなった。

車中の用便は何か佗<sup>た</sup>しい気分になるせいで行きたくない民子だったが、尿意は急を告げていた。名古屋まで泳えれそうにない。

不承不承立って民子は車中のトイレへ行った。トイレの前に立つと、突如、涼しい風が突風のように吹きあげてきた。尿意のせいか民子は、ぶるんと身ぶるいをした。そして、あわてて、把手を回して扉を横に引く。

そして、次の瞬間、彼女は「あッ」と軽い悲鳴をあげていた。

突如、目の前に現われた光景は、彼女が今までに、一度も見なかったことのない破廉恥きわまるものだったからである。

民子の視界には、まず女ののけぞった顔が飛び込んできたのである。目をうつろに、半眼に開き、そして口も開いていて、その唇は唾液で光っていた。

女は民子の方に正面に向き、男の肩に覆いかぶさるように両手をかけている。男の顔はこちらからは見えなかったが、女のその恍惚の顔は、民子によって視られていることも、気づかないのである。

彼女は肝をつぶさんばかりにして、座席に帰ってきた。顔は赤く充血していて、胸の鼓動も早鐘のように打っている。

「どうしたの？」

豊子が訊ねた。

「なんでもないわ」

民子は胸をおさえて、そう答えた。

それから名古屋に着く間、民子の臉には、トイレの中の男女の密着した姿が、灼きついていて離れなかった。自分が夢にまで見た甘美な男女の愛の営みの姿を、突然、あの薄暗い照明のトイレの中で見せられたことが、彼女にはショックだった。

彼女の性への夢は、無惨にも醜体をさらけだしたといった方がよい。

民子は思わず頭をげしく振った。しかし

自分ながら、乳房の芯や腰のまわりが、熱くだるい感覚を、彼女の嫌悪感とは別な、生き物のように伝えてくるのを覚えていた。

名古屋に着いたとき、外はまだ暗かった。二人は疲れていた。待合室で暫く時間をつぶしてから、旅館で一休みしようかと相談した。

これから名古屋を起点として、何処へでもいけるという安心感も手伝って、豊子と民子は、ほっと安心して、数時間をベンチにもたれて眠り込んだ。夜の帷<sup>とばり</sup>が払拭され、構内が白い光で包まれはじめると、二人はタクシーを拾った。タクシーは、二人を、とある中級の下とみられるホテルの前で降ろした。

「なに、これ、ホテルじゃない？」

豊子は運転手に抗議をしたが、運転手は、へらへらと笑ってとりあわなかった。仕方なく、二人は、そのホテルに入った。

ホテルの部屋には浴室があった。小さい湯舟で、民子と豊子と一緒に入ると、それでも一杯だった。二人は体をくっつけあって、湯にひたった。

民子は、これまでに豊子の裸を何度か見かけたことがある。豊子にしてもそうである。

いつか、二人でプールに行った際、海水浴の時、民子は豊子の、豊子は民子の豊満な裸



を、お互いに、まぶしく眺めあったこともあった。が、今のように、体をくっつけて過すというのは、これが最初であった。

豊子の肉体は、弾じけんばかりに豊かで、光沢があった。胸も女の成熟したきわみの跡があった。成熟は、自分と違って、男の手で加工された明らかなシルシがある。

湯舟の湯のなめらかな面の自分の腕を、ちらっと民子は眺めてみる。女の本能として、豊子と自分を比べているのだ。

「きれいなね」

豊子が上気した顔で呟いた。

豊子も民子と同じことを思っていたのだ。

民子は、にっこりと、ほほえんだ。

「民子の体って、きれい」

「あら、そうかしら。そうでもないわ」

そして、二人で顔を見合わせて、く、く、く、と忍び笑いをしあった。

笑いおわってから、豊子は次に、民子に、ふと、近よってきた。民子は不意に、映画のアップシートのように、目の前に立ちふさがった豊子の顔を感じたと思ったら、柔いもので口をふさがれていた。柔らかくて温い肉が民子の胸に押しつけられてもいた。

民子は、乳房の奥が、ずーんと疼くのと同

時に頭がぼおっとした。豊子のすべすべした感触が、感覚全体を占めている。そして、その感覚の一角が、ふいに鮮烈な快感に変わってゆく。

唇の感触が、乳房の感触に移っていったのである。民子は、豊子の掌が、自分の乳房のうえにおかれ、ゆっくりと揉みだしているのに気づいた。

民子は、しだいに気分がたかまってゆく。

唇は、まだ、ふさがれたままである。掌はしだいに力をこめられていて、吸いついたように離れなかった。民子は自然に、豊子の肩に両の手をもたせかける恰好になっている。

その時になって、豊子は、やっと唇を離れた。顔が離れると、体と、ついで、掌がはなされた。うるんだ瞳の光を、民子は豊子の中にみてとる。

「ごめんね」

豊子は、小さくうつむいて詫びた。

民子は、自分に今、何が起ったのかを理解しかねるといった風に、ぼーっとしていた。

そして、二人とも、そのまま、湯舟の中で肉体を寄せ合って、じいっと、息をひそめていたのである。

民子といえ、風呂から上ってから、豊

子の唇の感触の名残りを感じていた。

それは、始めての経験である。自分で、ひとりで指先でなぞってみたことのある唇が、奇しくも、豊子によって先鞭をつけられたのだ。そして、それは、自分が空想していた、その感触と全く同じだった。

二人は、そのホテルで、半日位、仮眠をとる予定だった。疲れてもいた。

ベッドに入ってから、二人は寝つかれないまま、しばらく体を横たえていた。

「民、さっきのこと、怒ってる？」

「ううん、ちっとも」

「よかった」

「豊」

民子は小声で言った。

「何？」

「もう一度、同じこと、して欲しい」

そう言い終るやいなや、民子は豊子に手をさし伸べ、体をずらしていった。

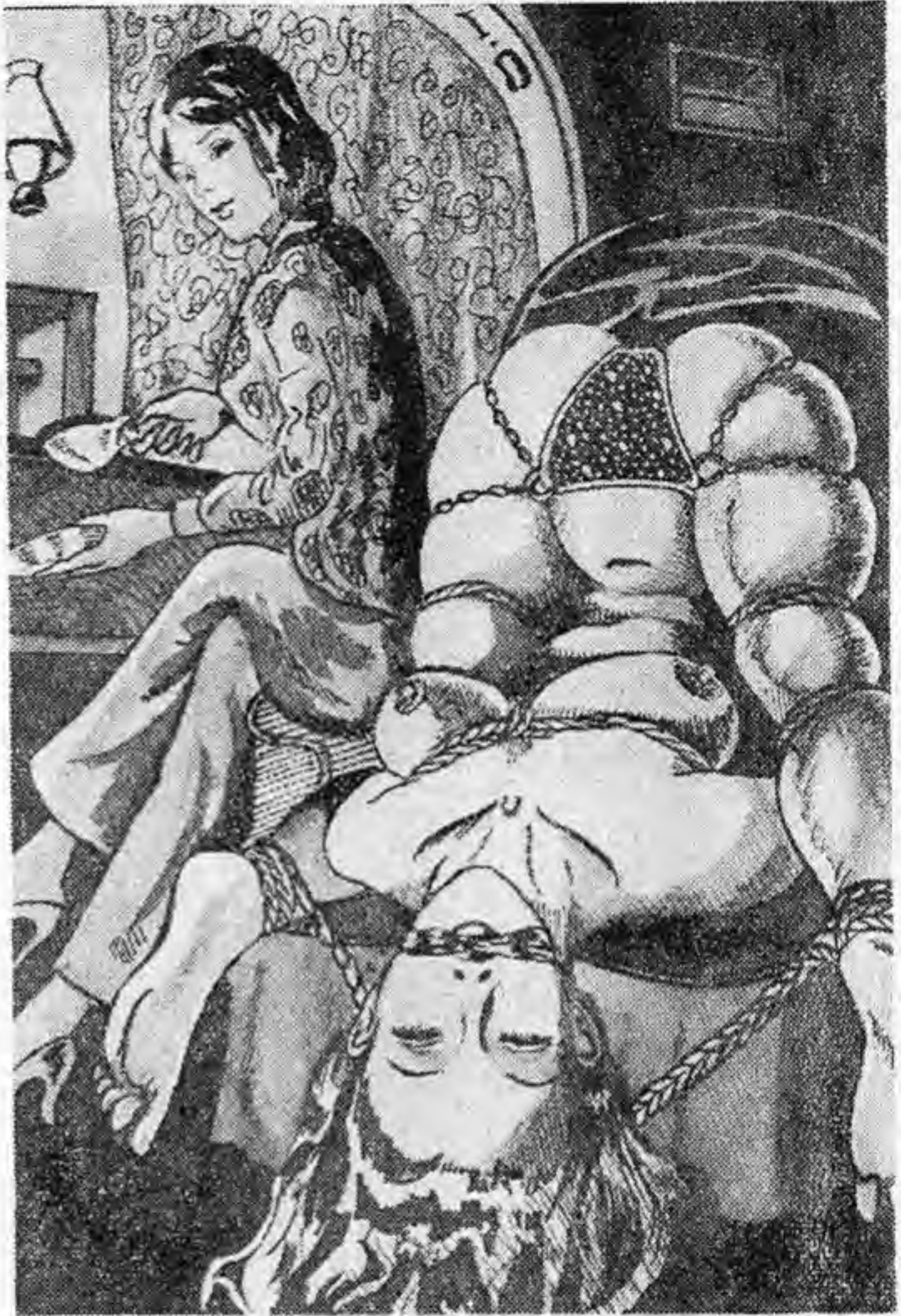
豊子の手が、民子の体の動きに応ずるようになり、民子の肩にからまってくる。

「学生生活の記念よ。それに、あたしに対する豊の記念……」

民子は、そう言うのと、豊子の唇に、唇を重ね、舌を吸った。



イメージ・ギャラリー 『休憩』 三鷹 I・O



今度は、民子の方が積極的である。

二人は、唇を合わせたまま、お互いの衣服に手をかけ、交互に脱ぎあった。そのときも唇は、ほとんど重なり合ったままであった。

それから、民子は豊子によって、静かに横たえさせられる。横になった二人は、もう、すっかり裸であった。肉づきの豊満なピンク色の肌は豊子、痩せ型だが、固肉かたしの小麦色の

肌の民子。

二人の肉体は、ゆっくりと重なった。

豊子の口から、軽い吐息がもれる。唇が重なったままの状態は、それで打ち切られ、吐息は、豊子の口腔で尾をひき、それが呻き声に変わる。民子の掌が、豊子の乳房を愛撫しているのだ。その掌は、民子が、かつて自分で自分をいつくしんだ、そのままの動きであ

った。

豊子は、次に、民子の体の上で徐々に上に移動しはじめる。下にいる民子の顔が、ちょうど、豊子の胸のあたりにくる部分で、その動きはとまった。

「ね、ね」

豊子が、せがんだ。その声は次の瞬間、

「ああッ」

豊子の喘ぎに変わる。

民子が、豊子の乳房の先端を、口に含んだのであった。含みながら、舌で先端を、くるくると舐める。その都度、豊子は上体をそらして、蛇のようにくねる。

民子の両掌は、豊子の腰の窪みにおかれていた。豊子はベッドに両手を支えている。

それは、二匹の美しい獣の絡みともいうべき光景だった。

片方を口に含み、片方を掌のしなやかな指で刺戟する。指は、いっばいに拡げられ、乳房に吸いつき、しなやかに律動して握りしめられる。そして、更に、豊子が体を上へ移動させようとしていた。

ベッドは、ダブルで充分に広い。と、今度は、体をずらしたのは、豊子ではなく、民子の方であった。民子は豊子と、上下換ったの



である。充分、坂をのぼりつつあった豊子は突然の中断で、さらに泳えきれなくなり、眉をひそめ、切なく身を、ねじった。

その余波が民子に、およぶ。民子は、強い接吻を長い間、した。民子の掌が、豊子の肩にかかっている。豊子は、下から民子を抱きしめているのである。

今度は、長い接吻のあと、民子が徐々に、上の方へ移動しはじめたのだった。また、さき程と同じことが、くり返された。

○

民子の整った顔は、目がうつろで半眼になり、上気して、ふくらんでいた。美貌を引立てる唇は、なにかを耐えているように、わなわなと動いた。

上から見ると、民子の肉体は美しい。汗ばんで、光を帯びてもいた。

空腹感で目をさました時、窓外は、すでに昏れかけていた。

二人は、ぼんやりした瞳を見かわし、どちらからともなく微笑しあった。その微笑は、含羞と、それに、何よりも、性の共犯者であるためのシークレットめいたものが、秘められていた。

改めて、二人は唇を重ねる。しかし、今度

は、軽くそっと触れあっただけである。お互いの肩に手をもつれあわせるようにして、かけ合った。

優しく、愛しみ合う仕草であった。

瞳と瞳を見交わし、相手の瞳の奥にのこっている、さき程の情事のあとを、たしかめようとする。

そして、そこに、瞳の中に、豊子は民子の民子は豊子の、愛の肢態が乱舞しているのを発見したのである。

旅行は、勢い陳腐なものとなった。

民子が当初、空想した、人気のない寂しいロマンの異郷は、名古屋で名古屋城を観るという珍妙なものになった。

もう彼女には、学生生活の記念旅行など、どうでもよくなっていたのである。今のままで、充分過ぎる位、ロマンがあった。

豊子の方は、民子とちがって、感傷家ではない。だから、彼女は名古屋城でも、その他の、どの場所でも、よかったのだ。

夕刻、薄暗い帷の中に、白く浮かんでいる名古屋城を目のあたりにして、

「まあ、きれいだわ」

「ほんと」

言い交わしあったのも、二人の情としては

嘘いつわりのないところだった。

「もう帰ろう」

民子が豊子を促し

「うん」

豊子が頷いたとき、帰るべきところは、勿論、東京であった。

二人にとって、もう旅行は、何の意味も持ち得なくなっていたのである。二人は、指と指をからませて、名古屋駅へ戻り、すぐ東京行の列車に飛び乗った。

列車内でも、二人は他人目からは、必要以上、仲むつまじく見えた。掌を握りあい、頬を寄せあって、瞑想に耽っているかと思われた。が、実際は、二人とも、眠っているわけではなかった。しみじみと、互いの体内を流れる激しさを秘めた血の音に、聞き入っていたのである。

「愛してるわ、豊」

瞼を閉じたまま、民子は囁いた。

「私もよ」

豊子が応えた。

「私以外の人とは、いやよ」

そう言った民子の頭には、豊子に関係している男たちの姿が去来していた。

「もち」



豊子は言った。

言ってから、ちらと豊子は民子を見たが、その時の民子は、ほんのりと頬を染めて、ひとときわ美しかった。豊子は、掌にそっと力をこめた。

○

再び、大学が始まっていた。

民子と豊子の、以前より、さらに仲の深まった二人の影が構内に見うけられた。二人は互いに影のように寄り添っていた。

しかし、ここで民子にとって、忘我の恋の境地に、ひとつだけ、障碍となるものがあった。それは、豊子に声をかけてくる男達である。民子と違って、奔放な性格の豊子は、これらの男に気軽に応えるのである。

それに、一日中、民子と豊子は、くっついていれるわけではなかった。カリキュラムの都合で別々になる時間がある。別々の授業が終って、豊子のところへ行くと、豊子は談話室で、ソファに坐り、男と笑いあっていることが度々あった。彼らは以前、豊子と関係していた男達に違いなかった。

民子の胸は痛んだ。

彼女は、何げない素振りで豊子に近よってゆくことが憚られた。その男たちから、強引

に豊子を引き離すことが不可能というより、後髪を引かれる気持ちがあるのである。それは嫉妬といえたかもしれない。民子は、心に淋しい翳がおちるのを感じたものだった。

そんな時の民子は、豊子との営みを、一層激しく燃えあがらせた。豊子が、ぐったりと弛緩してからあとも、民子は、豊子に、さらに、それ以上を請がんだ。

「忘れられない」とも言った。

「貴女だけよ、豊」とも、うったえた。

「あなたのシルシがほしい」と言い出すに至っては、初恋そのものである。

それに応えて、豊子は、民子の乳房の斜め上の柔肌に歯型をいれた。血が歯の跡からふきだして、その傷痕は、容易に消えそうにもないと思われた。鋭い痛みが走るのを、民子といえば、恍惚とした表情で耐えていたのである。

さらに民子が、自分の腹部に、縄目の跡をつけてくれと豊子に頼んだ。手首も同時に縛ってほしいと請がむ。

その時になって、豊子は、民子の示す細面の美しい顔が、ぞっとする位、無気味に感じたのだった。

「おねがい」と民子は言う。

豊子が難渋していると、

「私が嫌いになったのでしょう。やっぱり、男の方がいいのね。騙された——」

眉を逆立てて、難詰するのである。

民子が美人でなかったら、凄みはなかったかもしれない。美人であり、レスビアンであり、かつ、マゾヒストであるから凄惨さは、一層、際立ち、豊子のもう手の及ばないところにあった。

元はといえば、豊子が点火した民子の性である。眠っていた獸性を、ゆり動かしたのは豊子であった。

民子の腹部と手首に、紐を結びながら、豊子は、民子の異常な潔癖さを想った。民子が二十才を過ぎても、恋人もなく、まだ処女であること。それに豊子が知っている民子の知識を、全部統括してみても、若い女性特有の性の匂いが感じられない。

「もっと強くよ。駄目、それじゃ駄目よ。力一杯、力一杯なのよ」

豊子は、懸命になって紐を握る手に力をこめる。

額から汗が、にじみでてくる。それが暫く経つと、額から乳房にかけて、幾すじもの流れとなった。二人とも裸である。



「もっと強く。豊が、私の体内に入らない。豊、入って、私の内部に……」

それはもう、殆ど、叫び声に近かった。

豊子を愛するあまりなのか。それにしても民子の意識は奇怪といえた。縄目がつくほど緊縛されることによって、豊子の愛が克ちられるとでもいう風だが、それも極めてナルスチックである。

「こう、これでいい？」

「まだよ、もっと、もっとよ」

豊子は内心でびくつきながら、渾身の力をふりしぼって括っていった。

民子の肌の縄痕は、学校に行っている昼間でも、その手首、首筋、足首に歴然としてい

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

た。しかし、民子是一向に氣にかけてない様子である。

その民子の変わりようは、如何に豊子でも堰止めようがなく、勢い豊子は、次第に民子を避けだしたのである。

それから幾月かを経た。

豊子によって悦びの本質を知り、また、自分自身が気づかなかった自分の悦楽の所在を知って、裏切られ、怒り、耐えに耐えた民子は犬を飼いはじめていた。

そのことは、豊子も知る由がなかった。ひとりで、ひそかに民子は、愛玩動物によって豊子との傷跡を癒やしていた。

その頃、民子は短歌をやりはじめた。大学で発刊している短歌誌の類であったが、民子のどこに、そんな短歌への傾向があったのかと思わせる程、彼女の作は華麗であった。

民子の作に、次のような短歌がある。

庭に咲くバラの花こそうるわしき  
わが獣性を盛る器かな

学生達は、誰も、この歌の意味を解しなかった。そして、それは当然のことであった。それは民子の直接の経験が、そのまま語句に掘えおかれているだけなのだから。

民子の家の庭には、赤いバラの花が所狭ましと咲き誇っている。裕福な家庭である。

実は民子は一人娘であり、母は早く死別して、父は若い女の元へ入りびたっていて、滅多に自宅へは帰ってこなかった。

犬を愛玩する。このことは、当の民子にとって、豊子との離別の時期だけに、並々ならぬ愛情の対象になっていた。民子は、父のいない空虚な部屋で、犬と向いあって毎日を過した。が、それも毎日を平凡に過していたわけではない。

彼女は、部屋では、一糸まとわぬ姿になり犬と戯れあい、犬に腕を噛ませたり、自らも犬を噛んだりした挙句、犬の耳を手にした針で突きさしたりした。犬に対してサジスチックになった民子は、さらに、その性に複雑さを加えていった。

学生達に、その短歌の意味が、判る筈は毛頭なかったのである。

そして、民子が、その後、短歌界では、ある程度、名の通った歌人になったことを付記しておこう。

己れの性の正体と同様、この運命は彼女自身も予想していなかったのである。



## 赤ふんどし

百合子が危く溺死を免れたのは、有明の到着が僅か数分の間であったことによるからなのだが、もう一つ、ペルラとて百合子を殺す意思はなかったし、又、余りにも脆く水底に沈んでしまったので、慌てて、逆に引きあげようとしはじめていたということも付け加えておかねばなるまい。

この椿事を有明がどうして素早く知ったかは少しも異とする必要がない。前に述べたこ

ともあるのだけれど、予備役要員による情報管理が徹底的に行われているこの国では、たとえ百合子が一人で華清池に行ったとしてもその行動は逐一監視されることになる。もっと言えば、ペルラとオーストラリア娘も他の監視者が担当して見張っていたから、或は未然に防止することすら可能だった筈である。それをしなかったのは、或は非常に穿った見方であるけれども、有明自身が、このような事故の起ることを期待していたのだと、とれない事もないのである。

それ程、この国では情報というか監視とい

うか、あらゆる手段をつくして全員が見張られていたから、有明が知らないで何かが起るということなど、殆ど考えられなかったからである。

事件が起ったのは、早起きの有明が貴妃たちと日課の運動を終って、スチームバスに入っていたときだった。

情報を担当しているサラが顔色を変えて飛び込んできた。

「ユリコガ、オボレル……」

思わずフランス語で叫んだものである。そ





れだけで、しかし、有明には充分、呑み込むことが出来た。

「よしッ」

有明は猛然とダッシュした。

更衣室を素通りして、しかも何の前触れもなく全裸で飛び込んできた有明を見て、東館の女達は全員が棒立ちになったが、さすがに明石の局だけは、すぐに事態の重大さを覺つて、有明より早く木戸に走り寄ると、大きくそれを開いた。

「佐野ドクターを呼べ」

颯風のように駆け抜けた有明の背後に、声だけが残った。

華清池の舟着場では、百合子が乗って行ってしまった筈、スベアの舟は間に合っていない。有明は少しも躊躇せず、水の中にとび込んで援手を切った。

水しぶきをあげて近づいてくる有明を見て哀れなペルラは絶望の叫び声をあげ、折角引きあげようとしていた百合子の身体を放すと本能的に逃れようともがいた。勿論、理性では到底、逃れ得ないと覺悟していた筈だったのだけれど、はじめて犯したコトの怖しさを覺ったのであろうか。だが、ただオロオロと

するばかりのオーストラリア娘とパイプに連縛されている身では、思うようにまかせず、島の近所をグルグル廻るばかりという結果となった。

有明は当然のことながら、そんなものには目もくれずに、再びズルズルと沈みそうになった百合子の髪をグイと握って、コンクリートの岸边に引きあげたのである。

西陣の丸帯は水を吸って鉛のように重くなっていた。それを、もどかし気に解き放つと細紐をひきちぎった。凄い力だった。うつぶせにして膝の上に乗せ、肺に侵入した水を吐かせてやる。普通なら、これで気がつくのだが、だめだった。

仰臥させて、ギョッと胸をはだけた。素晴らしい乳房が、こぼれ出る。一瞬、息を呑む有明だった。美味しいものを、あとへあとへと残そうとしていたのに、今はそんなことをしている余裕がなかった。

またがって、その胸に両掌を押しつけ人工呼吸をはじめた。

有明の額に豆粒のような汗が泛んでいた。

百合子が意識をとり戻したとき、彼女はもう東館の離れに寝かされていた。

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその機質に応じて、五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。かつて、ミス・フィリップインだったペルラは、盲腸の創痕が災いして、その美貌にもかかわらず、海の愛玩畜（サカナ）の地位に甘んじなければならなかった。人格を踏みにじられる凌辱に、彼女の心はたかぶり、遂に暴発してしまったのである。

最初、心配そうに覗き込んでいる幾つかの顔を意識した。佐野女医の顔は始めてだったけれども、そのキビキビした処置の仕方医者であることは、すぐわかった。その隣に明石の局がいた。そして、ホッとしたように顔をゆるめた。いつものネットリした調子が、それでも上ずって聞えた。

「お氣がつかれましたか。よかったですね。マスターが今まで、つきっきりでいて下さったのですよ」

百合子は知っていた。正氣にかえった瞬間から、力強い手が自分の右手を握っていることに気付いていた。気付いていても、正視す



ることが出来なかったのである。

胸元までシートがかけられていたけれどもその下は一糸纏わぬ素裸であることを直覚していた。

「マスターが、勿体ないことに、ご自分で人工呼吸をして下さったのですよ。それも十分間も……」

明石の局が百合子の耳元でソツと、ささやいた。高橋ドクターも、

「マスターがいらして下さらなかったら、貴女は助からなかったでしょう」

と口を揃えた。

胸がズキズキと痛んでいた。それよりも、知らない間に有明が自分の素肌に触れたのだと思うと、忽ち血が激しく浪立ち、五体を駆け廻りはじめる。

「は、はずかしい」

自由な左手を顔にのせて百合子は僅かに顔を反対に背けて、さめざめと泣きはじめた。

「もういい、もういい」

子供をあやすように、百合子の顔をさすってやりながら有明が言った。

「何も考えずに、ゆっくり休むことだ」

「いいえ」

泣きじゃくりながら百合子がつぶやいた。

「命を、イノチを、助けていただいたのですわね……」

ぞくぞくするような欲びが胸元をつきあげていた。そういえば、今泣いているのも、肌を見られた恥かしさというより、やっと有明が荒々しいことをしてくれたという、変に安堵感のようなものが、彼女の涙線を刺戟したのかも知れなかった。ともあれ、彼女が地上的な一切をかなぐりすてて、有明に仕えることを正当化することが出来る裏付けになるのは確実だった。

身体中のけだるさ、発熱、吐き気などが依然として続いていたけれど、不思議と苦にならなかった。

それだけに百合子の回復は早く、丁度一週間目に有明がたずねて来てくれたときは完全に、もとの健康体に戻っていた。

例によって茶を立てながら、彼女は今までとは打って変わったように饒舌になっていた。「あの方たちは、どうしてわたくしを殺そうとなさったのでしょうか」

「殺すつもりはなかったのさ」

有明が無造作に断定した。

「乏しきを憂えず、ひとしからざるを憂う。という言葉がある。皆が平等に苦しめられたり、悩んだりしている時は、人間は案外、我慢するものだ。一人でも例外があると、そうは行かない。君の立場は、彼らから見たら羨望を通り越して、憎悪の対象となっている。同じ囚われびとなのに、どうして此様な大差があるのか、と皆が考えるだろう」

「わたくしは、なにも……」

「そうさ。君は何もしちゃいない。ただ、今の君の立場、そのものが憎まれてるんだ」「できるだけ、やさしくして差上げたのに」「それがいけないのだ。この国に根をはやすつもりならば、このところをハッキリさせておくことだ」

再服を注文しながら、有明は膝を進めた。

「君が心配するようにはならない。君に危害を加えたからといって、彼女たちは特に酷い仕置きを受けることはないだろう。何故なら飼犬に噛まれたといって犬を罰する主人はあるまい。反省するとすれば、自分の仕込み方が悪かったということになる。今度の事件でも君の無防備が人魚の反抗を誘発したのだから、責めるとすれば、寧ろ君が責めらるべきだというのが理屈さ。これからは余程、気を



つけなくっちゃね」

百合子は、うつむいて唇を噛んだ。この国では鏡の中の自分を見ているようで、時とすると右と左が反対になってしまう。やさしくしたこと、それが逆に酷い仕返しの原因になったというのだ。

清純な百合子、深窓に育まれて憎むことを知らなかった彼女の心に、チロチロと憎悪の灯がともった。それは今のところ、小さな口火のようなものでしかなかったけれど、機会さえあれば、有明の敵に向かって爆発するだけの可能性と、エネルギーを

秘めていたのである。有明はその豊富な経験によって、百合子のような乙女が、「女」そのものに成熟して行く内心の変化を間違いない読みとることが出来たが、百合子の方は全く無我夢中で、有明が慎重に筋書きを書いた通りに、翻弄されるばかりだった。

愛には憎しみが、楽しみには苦痛が裏付けになってこそ、はじめて浮き立ってくるもの



86

ものだ。

「得をしたのは私だった。思いがけず、君の素肌に触れることが出来たのだからね」

たちまち羞らいに頬を染め伏目がちになる楚々とした容姿を、楽しそうに眺めながら有明は、さらにもう一撃を与えようとしていた。

「どうかね。ここで君のハダカを見せてくれないかね」

「アア……」

両手を揉むように、よじりながら百合子が呻いた。一瞬、真赤になった顔色が忽ち血の気を喪って蒼白になる。とうとう、

その時が来てしまった。何時かは来るだろうと半ば怖れ半ば期待していた要求が、遂に有明の唇から出てきたと思うと、目の前がくらくらとしてくるのだった。

「どうだ、私の頼みを聞いてくれるかね」

有明の声が、どこか遠くの方で聞えるようだった。

「でも……」

であろう。背景のない名画だった百合子は誘拐されてからの苦しみ、最近いよいよ嵩まってきた愛憎の葛藤が添加されて、その美しさは更に深みを増し、その花蕾は今にも、ほころびそうな成熟を示していたのである。そして、その花を開かせるには、あとホンの僅かの刺戟で足りると見てとった有明は、ふと、何気なさそうな素振り、こう言った



何となしに口ごもるのに、

「でも、なに？」

と意地悪く聞き返してくる。

「もう、わたくしの知らない間に、全部で覽んになったんじゃないですか」

一旦、口に出したことを撤回するような有明ではない。百合子の自由意示で着物を脱いで見せろというのが有明の要求だった。

人工呼吸をして貰ったという弱身がなければ百合子も、もっと抵抗したかも知れない。一旦、肌を見られてしまったという想いが、彼女の心を萎えさせていた。濡れぬ先こそ露さえも、いとう気持がある。しかし一度、濡れてしまえば……と、いささかヤケツパチになるのも無理はあるまい。

ガタガタ慄えながら、それでも健気に立上って帯をほどきはじめる。

「腰巻もとるんだよ」

イヤイヤをするように上体をゆする百合子は、両手で胸をシッカリと押えていた。

「オ、おゆるし下さい」

「サア、自分でとりなさい。そうすれば私は君の身体に手を触れたりはいらないよ」

絹布が、それと同じように、なめらかな腰

のあたりを這って落ちた。

「アッ」

もうおさえようもない裸身が剥き出しになった。僅かに残ったのは、今日も又、無理矢理につけさせられた真紅の六尺褌だったのである。

## 水上自転車

奇妙な心理状態だった。今の百合子は腰に喰い込んでいる赤い木綿切れを一刻も早くとり除いてしまいたいという焦燥感に、わなないていた。そして、そんなものを着けさせられている位なら、全裸の方が余程ましだとさえ、思うようになっていた。

「ほかの方々と……」

「ほかの？」

例によって意地悪く聞き返す有明に、美しい素肌を羞恥に染めた百合子は、おずおずと蚊のなく様な声で、うったえるのだった。

「せめて、ほかの方々と同じようにさせて下さいまし」

「ほう、どういふことかね」

——意地悪ッ。おわかりになっいていらっしやるくせに。

百合子は唇を噛んだ。ぐぐつと喉元が、つまってくる。たまらなく、みじめだった。それでも思い切ったように、

「これもとらせていただいてよろしうございましょう？」

哀願のまなざしが一層なまめかしかった。

「ダメだ。私がとれというまでは、とってはいけない」

ニべもない返事がハネ返ってくる。

「それより、早く脱いだものをキチンと畳むものだ。行儀が悪いぞ」

肌着を前にあてて裸身をかくしている百合子に、又も意地の悪い命令がかかった。

有明に背中を見せるようにすると臀部が丸出しになる。しかも、十文字にかかった褌がギュツと締め上げられている。ベそをかきながら百合子は、有明に正対して着物を畳みはじめた。

気軽に立上った有明が、水屋から乱れ箱をとってきて、衣類は全部ここに入れなさいと言いつけた。

ボン、ボンと手をたたく。

たちまち、ニジリ口のところで、

「お召しでございますか」



と、明石の声がハネ返ってきた。

「これを片付けてしまってくれ」

ソツと小さな出入口が開いて、差出された乱れ箱が持ち去られてしまう。

「うろたえるな。茶の心は静心だよ。ハダカで茶を立てられない位なら、もう止めてしまえ」

平気で、もう一服と所望されて、オロオロしている百合子を有明が一喝した。

——そうだわ。こんなことぐらいで……。

ハッと氣をとり直した百合子。まるで催眠術にでもかかったように胸を張って坐り直した。不思議に裸身を恥じる氣持が消えていった。相手は有明一人、しかも、今となってはその人の胸に飛び込んで行くしかないのだから、平気でいればいいのだ。——と我と我胸に言いきかせる。

「ウーン、美味しいね。今日は一段と結構だよ」

茶碗を戻しながら、有明が満足そうに言った。そして、

「さてと、これから華清池へ遊びに行こう」  
サツと百合子の顔色が変わった。あのおぞましい記憶がマザマザと蘇ってきた。

「今度はもう大丈夫。何も着ていないのだから」

ら」

イヤといっても、所詮は聞きいれて貰える筈もないので、仕方なく承知する他はない。

禪一本の裸身では恥かしくて歩けないと、うったえる百合子を引立てるように追い出した有明は、

「ゴダイバ王妃が素裸になって、裸馬を走らせたとき、彼女を慕う住民は顔を背けて、彼女に恥かしい思いをさせなかったという。東館の女どもだって、私の命令なしに君のハダカを見ることは出来ない」

といいながら、自分もスルスルと帯をとって、サツと薩摩を脱いだ。彼もマツ白な六尺をキリッと締めていた。

二人はハダシのまま庭におりて、木戸に近づいて行った。木戸の錠は、予め外されていた。百合子を恥かしがらせないようにという明石の配慮で、彼女を含めて誰一人、二人の前に姿をあらわさなかった。

まっくらな九十九折りを抜けて華清池の舟着場に来ると、顔見知りのガリー（漕ぎ女）がゴンドラの後にながらって、まるで彫刻のように、凝然と静止していたが、二人が乗り込むと、音もなく岸辺を離れる。

舟の中で有明が何か合図でもしたらしい。次々に照明が灯って、たちまち真昼のような明るさで華清池全体を照し出した。

池の中心にある直径十メートル程の小島の上で、二人の人魚たちが驚いたように動きはじめた。いうまでもなく、百合子を水の中に突き落したペルラと、その相棒、オーストラリア娘だった。

有明は百合子に、飼犬に噛まれたからといって、ペットを罰する主人があるだろうか。——と言った。しかし、この一週間、この二人に襲いかかった苛酷な運命は、彼女たちにとっては仕返し以外の何者でもないように考えられたにちがいない。

それ程の激変だった。

優雅な金の鱗を飾った尾鰭が、剥ぎとられる。これはまあいい。彼女たちの下半身を締めつけ苦しめる原因がなくなったのだから。膝と足首を拘束していたシナヤカな鋼パイプも取り除かれた。美畜は、ホッと膝をさすった。曲げることが出来ないばかりか、ピンと伸ばしたきりになっていた両足だった。

ペルラとその相棒にとって、解放感にひと



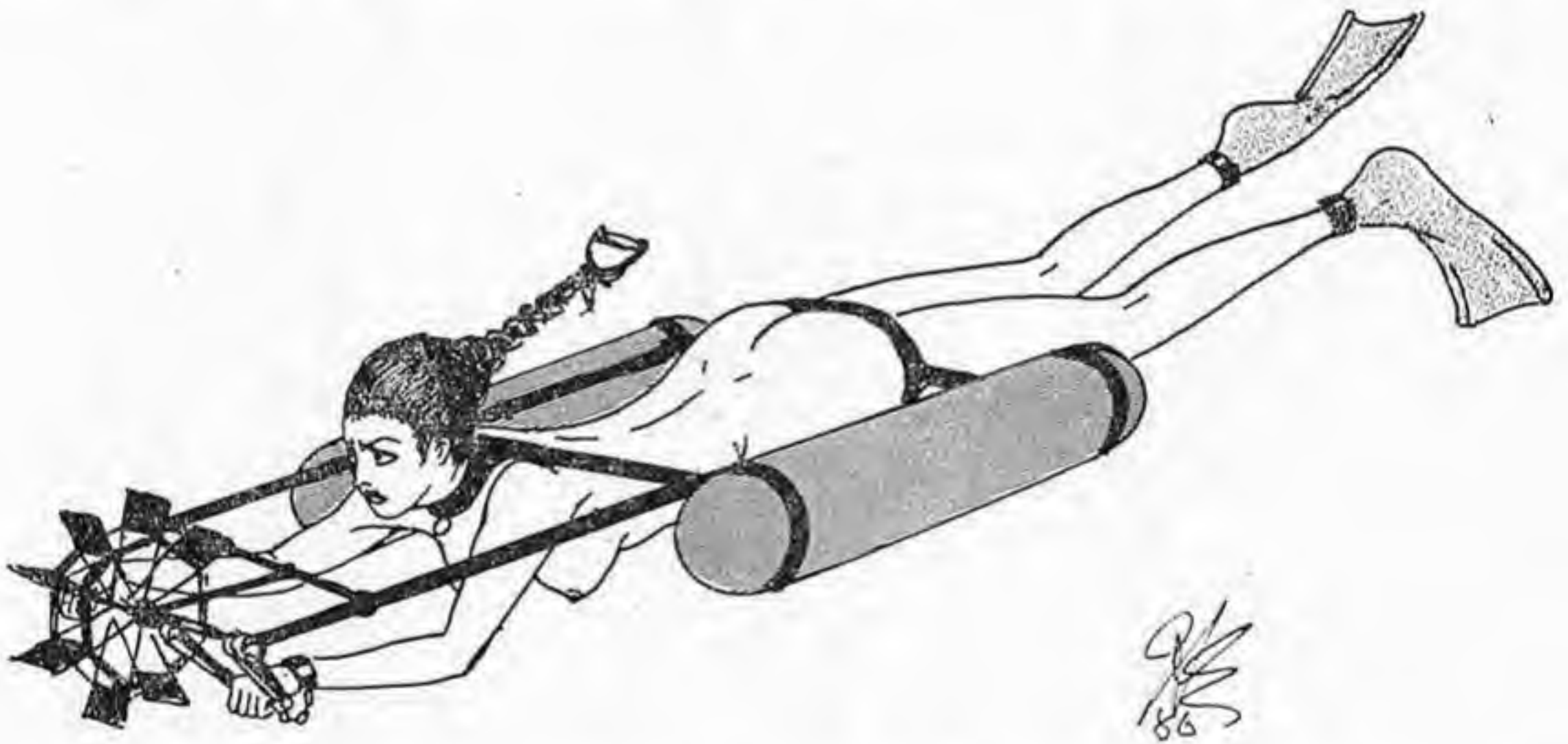
息つけたのはホンの数分のことではしかなかった。今度は、二人別々にではあったけれども新しい戒具が装着されたからである。

それは装着されたというより、肉体がソレに嵌め込まれたといった方が適切かも知れない。

それは丁度「日」の字型に組まれた枠組みのようなものであった。巾は八十センチ位、タテは一メートル弱だろうか。タテの部分は直径二十センチ程の円筒状の浮き二本になっていて、三本のパイプが、それらを繋ぎとめようとしていた。全部アルミ製である。

まん中のパイプは中央が首枷になっていて美畜の喉をガツチリと押さえつけている。後のパイプは、自然に腰の位置に当るが、これは①型にこしらえてあり、左右の太腿が押しこまれる。

女体をセットするに当っては、先ず足を①型に入れさせVロックをとめて、それから首枷を締めつける。これで胴体が「日」の字型枠組みの中パイプと後パイプの間にピンと張られたように固定されたことになるのだが、更に両手は真直に伸ばした姿で前のパイプにロックされる。このロックはクランクになっていて、パイプの中心部にある小さな水掻き



車を回せるようにしてある。

「新考案の水上自転車だよ。二人でこれに乗って遊ぼうという趣向だ」

まだ恥かしそうに胸乳をおさえ、身をかたくしている百合子に、有明が快活に言った。少しでも彼女の緊張を解きほぐしてやろうという配慮がアリアリとしているのだが、まだ輝が残されているとはいっても、はじめて有明に全裸を見せた百合子は何としてもギョギョになったのである。

「進水式だ。ホラ……」

有明は百合子の方を見ないようにしながら二つの水上自転車を水の中に押し入れた。

「大きい方は私が乗る。君はこっちの小さい方だ」

ペルラの背中にまたがれというのだった。

水の中に入るということは、裸のはずかしさを幾分やわらげてくれるような気がして、百合子は素直に言われた通りにした。膝の上まで水に漬かった。快い水温だった。

ガバツとペルラが、もがいた。百合子の体重が加わったためにパイプ枠が沈んで、頭を水中に、押し込まれることになったからである。



「百合子、髪毛を引っばるんだ」  
有明が叫んだ。

長い髪毛を残した二人の美畜は、それを後頭部で一本にまとめて、編まれていた。そして芯に細いパイプが入れてあったので、毛髪の組み紐は一本の棒のようになっていたのである。

それを引っばると美畜の頭は上に反って、鼻が水面に出るから、やっと呼吸が出来る。それを押すと、いよいよ顔が水に漬かるから息をすることが出来なくなる。

有明の着想は、この髪棒をアクセルの代りにしようということにあった。

美畜が一生懸命に足の水かきで杵を進め、さらに前の水掻き車を全回転させる。つまり全力で前進すると前が浮き上がって、顔全体が水面に出るように調整してあった。つまり人を乗せた場合、全速で進んでいる間だけ彼女達の、呼吸がラクになるという仕掛けだった。

このことを、有明は手にとって百合子に教え込んだ。簡単な機構だけに、百合子もすぐに呑み込んでしまった。右に行きたいときは髪棒を右に、左に行きたいときは左に押せば

よい。前に押せば早くなり、手前に引けば停る。

サディスティックな感情は、誰の心にもある。百合子のような深窓の生娘とて例外ではなかった。

その上、ペルラには煮え湯を吞まされていたので、普通なら彼女を苦しめたであろう罪悪感や、同情の念は殆ど、うすれてしまっていた。

たしかに、徐々ではあったけれど、ここに来て蓄積された異様な体験が、彼女を嗜虐に馴れさせてしまったとも言えないことはあるまい。

それ程、彼女は元気に、この水上自転車を乗り廻したのである。

「さあ来い。競走しよう」

という有明の挑戦に、さすがに声は出さなかったものの、ニッコリと笑みを返して、力一ぱい髪棒を押したものである。

ブクブクとアブクを出しながら、ペルラは猛然とダッシュした。も早や、ペルラには百合子を憎む余裕さえもなかったのである。ただ前進、それだけが彼女に息をつく可能性をあたえてくれる。

手と足が、はげしく振動する。その揺れが百合子に快かった。

しかし、長距離選手だったオーストラリア娘の方が、より本物だったのであろう。百合子の急追撃も、中々、追いつけそうになかった。

二人は、さして広くもない華清池を、ほぼ一周したけれど、二人の距離は少しも縮まらなかったのである。

わるいことに、あまり急追した百合子は、結果としてペルラを弱らせてしまうということになった。

いくら押しても、ペルラの動作は緩慢で、出発当初のようににはキビキビと反応しなくなり、次第にスピードが落ちて行くのが、よく判った。

「どうした、もう乗りつぶしてしまったのかね」

有明が引き返してきたとき、百合子の水上自転車は、もう、完全に停止してしまっていた。

これは、哀れなミス・フィリップン、ペルラ・ティエオが疲労の極、とうとう失神してしまったことを意味していたのである。





縛　黒田・カット

## A 感覚に憑かれた女の告白

## 病　院　歩　記

田中早智子

それは、お便所に行った時に、おしりに痛みを感じ、少量ですが出血するようになったことなのです。

私は高校時代から少々便秘気味だったのですが、それが生活環境の変化で、ますますひどくなり、慢性的便秘の結果が招いた「じ」病らしいと気がつきましたが、何分にも場所が場所だけに、すぐにお医者さんに行くことが、ためらわれて我慢を続けました。

でも、長続きするわけもなく、お便所で、しばらくは立ち上がれない程の痛みを覚えた、出血がだんだんひどくなり始めると、とても放っておくことが出来なくなり、ついに大学の講義をサボって、診てもらいに出掛けたのでした。

二十才前の娘が、独りで「肛門科」の扉を押すのは、かなり勇気の要ることです。医院のそばまで行ってはためらい、通り越したり

引き返したりを繰り返しました。でも便秘の苦しさ、あの痛さや出血のことを思うと羞かしいなどとはいつてられません。私は目をつむって、走り込むようにしました。

そう広くもない待合室には五、六人の人が居て、一斉に私を見詰めているように思われました。足が、すくむ思いでした。受付の窓口で「お願いします」といった私の声は、たぶん、慄えていたと思います。

待合室でどのくらい待たされていたのか、五、六人は確かに居たと思う患者さんたちがどのくらいのトシの人だったかも、その時には、わかりませんでした。

ようやく名前が呼ばれ、はじめたように診察室に入った私は、ほっとした思いになりました。先生が相当、年輩の人でしたし、待合室では皆の視線が私に集中して、じろじろ観察されているような気がしてならなかった

二年前の今頃のことです。私が、生れてはじめて親の手許を離れ、自活し始めてから三カ月余り経ち、ようやく独り住居にも慣れてきた頃、別の悩みごとがでてきました。

裏日本の小都市ですが、出てきた当時は、独りの生活に対する不安よりも、一応、第一志望の大学に合格できたという喜びと、うるさい親の目から逃れられるという解放感みたいな気易さで、ウキウキするような気持ちだったのですが、この悩みごとがでてきてからは心細い思いになりました。



からです。

柔和な先生に訊かれて、私は症状をありのままに話しました。頷かれた先生は「わかりました。では診てみましょう」と、傍に居た看護婦さんに合図をされました。

「こちらへどうぞ」という看護婦さんに従って、私は、奥の一仕切りに行き、そこで看護婦さんに「おしりを出して、このベッドへ横になって下さい」といわれ、また頬が火照るような思いになりました。

“じ”を診てもらうのですから、おしりを出すのは当りまえのことですし、私も当然、覚悟していたのですが、いざ、下着を脱ぐようにといわれますと、やはり、羞かしいものです。私は勇気を出して看護婦さんの指示どおりにしましたが、ベッドに横たわろうとしますと、「ア、それでは反対です。頭を向こうに」といわれて、ヘンだなと思いました。だって、そうしますと、ベッドに置かれてある小さな枕がおしりの方になるのですもの。

「ここでは、おしりが枕をするのですよ」と私の不審顔に気付いたらしい看護婦さんは、横になった私の腰の下にくるように枕をずらしながら、ニッコリ笑って、

「先生がみえたらこうして下さいよ」と、私の両足を挙げさせ、膝の裏側を両手で抱えますように、優しく手助けして受診のポーズを教えて下さいました。

私は羞かしさでポーツとなるような気持ちでした。そこへ先生が入ってこられました。私はますます羞かしく、思わず目をつむってしまいました。先生は無造作に診察にかかられたようでした。

先生の片手と看護婦さんの両手の掌をおしりに感じながら、私は消えてしまいたいほどの羞恥と斗わねばなりませんでした。

すると、突然ヒヤリとする金属の感触を感じて思わずピクツとなりました。とたんに、「お腹の力を抜いて！」と先生の声がしました。そして、夢中で力を抜いたらしい私は、続いて起こってきた、いい表わしようなないヘンな感覚に、思わず食いしばった歯の間から呻きを洩らしてしまったようでした。

「痛いですか？」と看護婦さんが訊いて下さったのに、私は夢中のまま頭を横に振っていました。本当にその時には痛くはなかったのです。痛いどころか、なんともいえないそのヘンな、生れてはじめてのヘンな感じに、引

き込まれるように酔ってしまったという方が正しい状態の呻きだったのです。大学のお友達と一緒にお酒を飲んだ時、フラフラするような快さというものを、はじめて知りましたが、この気持ちに似かよっていて、それよりももっと直接的で、はっきりした快さ、とでもいふべきでしょうか。

それでも「もうすぐ済みますよ」と先生がいわれた直後に、つまり診察の最後ぐらいの時には、ちょっと、本当の痛みがあつて、私は小さく悲鳴をあげました。

看護婦さんが、テキパキした手付きで診察後の処置を済ませて下さった後、ハンカチぐらいのガーゼを私に差し出して「汗をお拭きなさいな」といわれました。それほど、私は汗だらけになっていたようでした。

「大丈夫です。ちょっとした痔核が出来ていたのが切れて出血しただけです。これぐらいの痔核なら飲み薬だけで、すぐ、治るでしょう」といって下さる先生の柔和なお顔を見ながら、私は、安心と一緒に、ちょっと残念な気持ちになりました。

何が残念だったのかは、下宿へ帰って落ちついてからハッキリしてきました。私は、あ



のヘンな気持を感じた瞬間から、もうそのトリコになっていたようなのです。ですから、自分では意識しないまま、薬を飲むだけで治ってしまうのが残念に思われたのです。薬などではなく、直接治療をして貰いたいという潜在願望が芽生えていたのです。それに気付いた私は、独り頬を赤らめながらも、自分を叱りつけませんでした。

その日は結局、心づもりしていた午後の授業もサボってしまった、ボンヤリと一日を過ごしましたが、頭の中ではずっと、あのヘンな気持、不思議な感覚のことが渦巻いていたのでした。

先生がおっしゃった通り、私の「じ」は、すぐに治ってしまっただけで、二日ほど出血も痛みもなくなりましたが、私にはそれが大変ものたりなく、せめてもう少し続いてくれるように念じながら考えた末、小さなキエウリやオナスで、あの受診の真似事をして痔核の復活を願いました。けれども、意地悪にも、あのいうにいけない不思議な感覚を呼び戻すことも、出血を誘い出すことも出来なかったのです。

日が経つにつれて、私の願望は、だんだん

強くなってきて、今度はそれが、私の大きな悩みになってしまいました。

そこで私は、別の医院か病院に行ってみようと思い立ったのです。でも「じ」が殆ど治ってしまったので、診察をお願いする口実がないのです。何かないだろうか、何か……と考えた挙句、一番簡単なことに気がつくきました。それは、出血さえさせればよいだろうということです。口実にさえなればよいのですから、直腸に傷さえあれば問題は解決すると思いました。

早速に私は、傷製造の準備にとりかかりました。治すことは出来なくても、傷をつけるだけなら私にだって出来そうですもの。

その「凶器」は針金です。少し太い目の針金を、ほんの十センチもあれば足りると思うのに、五メートルも買ったのは、金物屋さんへんに思われはしないかと思ったからです。それを苦勞して切り、先をLの形に曲げました。Lの先端で腸壁を、ひっ搔くつもりだったのです。

「自分でつくる痔症状」——私は、その素晴らしい思いつきに心がおどりました。そして、それさえ出来れば、又、あの不思議な恍惚感

が味わえると思うと、そんな無茶な行為も少しも怖いと思えなかったのです。

でも、さすがにいざとなると手が慄えました。そのうえ、頭だけで考えていたように簡単には行かないことがハッキリしました。何度かやり方を換え、ひっ搔き方も変えて奮闘してみたのですが、どうしてもうまく行かず遂に、針金では駄目だと知って投げ出してしまったのでした。

夜中にたった独り、鏡の前であられもないポーズで、自分の直腸を傷つけようとして転げまわっている若い女……われながら気違いめいた姿だったことと思います。

でも、私の執念みたいになった願望は、それで諦めようとはせず、ふと思いついたのが事務用の細いハサミでした。

「搔き傷でも切り傷でも一緒なんだから」と私は、自分にいい聞かせて机のひき出しからそのハサミを取り出したのでした。

ひっ搔くのは、腸壁などの場合、うまく鉤先が掛からないので無理とわかってハサミなら切るのだから様子が違うだろうという期待が、再び私を勇気づけてくれたのでした。

その時の私は、完全に理性を失った女、倒



錯性に恋い狂った女、だっただけに違いありません。でも、その目的の為に必要な慎重さは、普通の時以上のものであったようです。そう私自身が思うのは、ハサミの先端の届き具合腸壁を切る為に充分な刃の開き加減などを、何の知識もないのに推し測るカンを働かせていたように思われるからなのです。けれど、ふだんの私ではない私であったことだけは間違ひありません。

「今だワ！」と感じた瞬間、私の手がハサミの柄を思いっきり握りしめました。と同時に私の体全体が、ピョコンと跳ね上がったほどの激痛に包まれました。きつと、獣じみた悲鳴も洩らしていたと思います。

予想していたより遥かに激しい痛みで、ハサミをそのままに、しばらくは畳に爪を立てて這いつくばってしまっただけでした。

自分で招いた烈痛に呻きながら、ようやくにしてハサミを取り出すと、もう何をする気力もなく寝床に倒れこんだのですが、よくも失神しなかったことだと今でも思います。

それこそ「じ」の痛さとは比べものにならないくらい苦しみで、その翌朝からまる二日間、大学へ行くことは勿論、食事もうろくろ

くせずに寝床で呻吟しました。下宿の人が心配してくれるのをとりつくろうのに苦心したものでしたが、三日目には少し楽になったようでしたので、いよいよ病院行きを果すことにしました。

勿論、以前の医院は避けて、他の「肛門・外科」の病院へです。

その病院の先生は、「痔だと思ひますが」という私の言葉をどう受けとって下さったかはわかりませんが、診察だけは、前の医院の時と同じようにして下さいました。

私は早鐘のような動悸を聞かれはしないかと心配しました。

ですのに、どうしたことだったのでしょうか。その時の場合は、あれだけ恋い、あれだけの苦しみを耐えてきたのに、あの医院で味わったような素晴らしい感じはなかったのです。ただ痛く、ただ事務的な処置だけで、私は、空振りした悔みで余計に痛みがひどくなったように思えるおしりを庇いながら、トボトボと下宿への帰途を辿ったのでした。

その翌朝はムズ痒いようなおしりの鈍痛で目が覚めました。お便所に行きますと「じ」の場合と同じような痛みが、まだ残っていま

す。出血の方は殆ど止っていましたが、それでもまだ完全とは思えません。私はペーパーにその証拠を見て、また別の病院か医院へ行ってみようと思ひたちました。

「どうか昨日のような空振りではありませんように」と心で祈りながら、下宿から、かなり離れた医院で診てもらったのですが、やはりあの素晴らしい感覚は、得られませんでした。

「こんなはずはないわ」と、私は、何か大切な落とし物でも探すような気持ちで、五、六カ所の医院や病院を、廻り歩きました。勿論、大学の方はサボリ放しでした。ですのに、その大切な落とし物は一向に私の感覚の中に戻ってききれないのです。病院によってはただの問診だけで坐薬をくれ、肝心の器具での診察をしてくれないところもありました。

私はイライラし始めました。あんなのを欲求不満というのでしょうか、仕方なく自分で診察の真似事をして、少しでも、その不満を慰めることにし始めたのです。それは、二年後の今でも続いています。でも、どうしても物足りなさを補うことは出来ません。私はきつと又、あの素晴らしい受診時の感覚を求めてさまよい歩くようなことになると思います。



連載・M派交友録 (四十四)

# グラマーな猛女

植座たき子の巻 (7)

鬼山 絢 策

カット・岡 たかし



## 二十万円の札束

村中二郎から、たき子へ毎日、しつこく電話が、かかってきた。

泣き言、懇願、哀願、うらみ言、哀訴……の、くり返しである。たき子は焦<sup>じ</sup>らすだけ焦らせてやるのが面白かったが、しまいには、うるさくなってきた。

「よしよし、じゃ今晚おいで」

村中は勇躍して約束の夜12時ジャストに、たき子のマンションの扉を叩いた。

「あら、ひげ、はやしたのね」

村中は最近、鼻下にチョビひげを、たてていた。

「どうですか、似合いますか」



「フフ、ゼーんぜん。小野栄一のチャップリンみたいだわ」

「これでも課長ですからね。貫録をつけるために、はやしたんだが……」

たき子はバヤバヤと生えたひげを見ながら

「あのひげに泣きづらをかかせてやったらいい気味だろうな——」

と、あらぬことを想像して思った。

「それはそうと、お約束のもの、頂戴できませんか」

「約束は守ってあげるわよ」

紅色の襦子に黒い襟のついたガウンを、まとった、たき子は、裾を割って大きく足を組んだ。紅のもすそからチラリと覗く白い足。その太腿の、白い豊かな肉づきが村中の瞳にやきついた。

——ガウンの下は、何もつけてないな——

村中の視線は、どうしても裾から割れて出ている、かたちのよい脚線に惹きつけられるが、いまの村中は、それよりも金の方が、より重要だった。

「じゃ、済みません。いま頂けますか」

「そんなにガツガツするもんじゃないわよ。大会社の課長さんともあろうものが、みっともないじゃないの」

「このところ、借金で首が廻らないんです」

村中は小豆に手を出して損をし、二十五万の追い証拠金を迫られている。明日までに追い証を入れないと七十五万も、つぎ込んだ小豆を安値で仕切られてしまうのだ。

「だけどねあんたも、かなり図々しいわね。」

今度のことは、あんたは、ちっとも役に立っていないのよ。あたしがパパに頼んで承知させたんだからね。あんたは名義変更の手続きをしたただけなんだから、それは分かっているわね」

——ハハア、イザ金を渡す段になって、値切るつもりだな——

と村中は想像した。だが、ここで二十万を値切られたのでは追い証が払えなくなる。

「そりゃそうかもしれませんが、前々から、おやじさんに、そうしると、すすめてきたのが実を結んだんですからね。お蔭で、おやじさんの御機嫌は損じるし、僕としては大損害ですよ。そのところを買って下さいよ」

「でも二十万というのは高すぎたわね」

——やっぱり値切るつもりだ！

「でも、あなたが口に出して約束したことでしよう。あなた、ほんとに、お金を用意して下さったんですか」

## 登場人物紹介

植座たき子 26才。1米72、68キロ。美術学校出。学生中にモデル、パニーガール等のアルバイト。橋本宇吉の援助を受けて絵の勉強中。

橋本宇吉 69才。中央生命常務。初恋の娘サリーに似てゐるたき子を、サリーと呼んで愛している。最近、ほとんど不能。オーラルセックスに頼っている。

村中二郎 35才。商社会社の課長。モデルのたき子に羞かしめられてからトントン拍子に昇進。たき子を宇吉に世話する。マンションを世話したりして宇吉から目をかけられているのに、たき子を盗もうと野心をおこし、度々失敗する。マンションを、たき子名義にした報酬として二十万円と、身体を望んでいる。

安井安芸雄 33才。たき子のマンションに住む画家。たき子の恋人。

鬼山絢策 雑誌の編集長。安井の紹介で、たき子を知り、挿絵の仕事をさせ、たき子をモデルに写真を撮る。

「あら、あんた、あたしを疑うの。失礼ね」  
たき子は、つと立って机の上の封筒を、とりあげると、中の札束を見せた。村中は、それが確かに20枚近くあるのを確かめた。  
「ホラ、この通り、ちゃんとあるわよ」  
「ああ、有難い。これで僕も助かりました」



村中は思わず手を出した。たき子はサツと手を引っ込めた。

「これは、あげるけど、その代り、約束してちょうだい。今後は、あたしのところへ一切足を踏み入れないとね。パパから、そう言われたんだもん」

「ハイ、約束します」

「電話もかけて来ちゃだめよ。もう、あなたの仕事は、すべて終ったんだからね」

金を見て安心した村中は改めて、たき子の伸びやかな姿態を舐めるように見まわした。

ガウンの黒い襟からふくらと覗く二つの乳房。裾を割って組まれた長い長い足。その太腿が悩ましい陰影をつくっている。

——あの足にどれだけ悩まされたことか。あの太股に、どれほど苦しめられたことか——

視線を顔に戻せば、ハーフかと見まがうエキゾチックな彫りの深い鼻。長いまつ毛の中の、うるんだ瞳。その目は、人を小馬鹿にしたような、いろを見せている。下唇に淫蕩な太々しい曲線を描いて、あざ笑っているように見える憎いほど美しい女——

それが、今宵限りで絶交を言いわたしてきた。今夜が最後のチャンスと思えば、過去の、

数々の失敗が想い出され「今夜こそは……」という慾望が強く、もりあがってきた。

「わかりました。それじゃ今夜が最後のお別れの夜、ということですね。それなら、もう一つの約束も果してくれませんか」

### 金の奴隷

「それは、だめよ。パパが知らないうちならともかく、あんたの出入りを止められてるんだもん」

「でも、約束は約束でしょう。それに今夜限りなんだから、分かるわけじゃなし、約束は守って下さいよ。一度でいいから、僕の男としての機能を果したいんだ」

「なに言ってるの。フフ、あんたはダメよ。あんたはコリーちゃん。犬の役目しか、できない男だわ」

「それが、つらいんだ。いままでは、そうだったけど、僕は決してそんなダメな男じゃない。あんたほどのひとを、あの助平おやじにだけ専有させておくのは、もったいない」

「余計なお世話よ。年はとってても、あんたとは人間が違うわ。パパのこと悪く言える義理なの、あんた。さんざ目をかけてもらって

おきながら」

ウィスキーを、あおっているうちに、村中の情慾は次第に昂まってきた。

「とにかく約束したんだから、それだけは実行してもらいますよ」

「犬の役目ぐらいなら、させてやるわ」

村中は、いきなり立上がった。

「今日は立派に男の役目が果せるんだ。君を夢中にさせてみせる！」

村中は、たき子に抱きついて行った。

「何すんだよ、汚らわしい！」

たき子は村中を突きとばすと頬へピシッと平手打ちをくれた。

「お前は犬！ コリーだよ。身のほど、知れッ」

「犬だろうと何だろうと、僕も男だ。男の意地がある。どうでも君を——」

村中は、たき子を組み伏せようとした。

「馬鹿野郎っ」

たき子も立上がり、組み打ちとなった。

テーブルが、ひっくり返ってグラスや酒びんや小皿が散乱した。

力づくとなっても体力にまさる、たき子の方が勝った。子供の頃、男の子と相撲をとっていたことのあるたき子は、村中を外がけに



かけて浴びせ倒した。ドシッと凄い音がしてじゅうたんの上に、男女の身体が折り重なった。

女とは言え68キロの巨体に、村中は息が詰まるほどの重圧に喘いだ。

起上がった、たき子は村中の肩へ馬乗りに跨がった。

「フフフ、ばか。あたしに勝てると思ってるの。何度、向って来たって、だめだよ。所詮犬は犬だけの務めを果していればいいのさ」

激しい格闘のあとで、たき子の髪は乱れ、はだけたガウンの襟元からは、豊かに盛り上った乳房が、はみ出て大きく息づいている。

裾が乱暴に捲くられて、太い巨大な足が細い村中の両腕を踏みしだいている。

たき子の巨体が少しずつ前へ、せり出してくる。太腿が、村中の頬に触れた。

汗ばんでジットリとした太腿だ。女の香気をムンムンと発して迫ってくる。

「あたしの御機嫌をそこねると二十万円、やらないよ」

村中の顔にサッと不安と苦渋がはしった。

「そ、それはないよ。卑怯だ」

「なにが卑怯だ。こん畜生ッ」

たき子は口をゆがめて嘲笑いながら、ひと

膝前へ乗り出し村中の首を太股ではさんだ。

「お前は、あたしのためにパパから百万以上の金をもらってるだろう。今度のことだってお前は、ちっとも役に立っていない。ただ目的が果せたから、お前にくれてやる二十万だよ。いわば、お涙金だよ。約束したと言っても、お前はムダ働きだから、やらなくてもいいんだ。あたしを怒らせたなら、びた一文も、くれてやらないよ」

強烈な匂いが村中の顔の上に、かぶさってきた。

「わかった、わかった。言う通りにするよ。言う通りにするから金の方だけは約束を、たがえないでくれ」

「フフ、お前も、とうとう金の奴隷に、なり果てたね。金と、あたしの奴隷に。奴隷なら奴隷らしくしな。ホラ、これが奴隷のつとめだよ。フフフ、バカだよ、お前は。ほんとに大バカだよ身のほど知らぬ間抜け野郎だよ」  
がっしりと締めている太股に、ひととき力が加わった。避けようにも避けられぬ奴隷の宿命的な枷かせであった。

村中は過去の失敗や、野望の崩れる口惜しさ、舌先からジーンと、しびれて伝わってきた。

「フフフ、苦しいか。もっと苦しめ」

村中は声もあげ得ず、ふしぎな魔力に、あやつられるように奴隷に叩き落とされたことを知って、思わず涙が目頭に浮かんできた。

「あら、泣いてるのかい。犬でも涙を流すのかねえ。お涙金を恵んでやろうというんだから、涙ぐらい流すのが当り前というものさ」

たき子は内股に力を入れて村中の首を絞めあげながら村中を見下ろした。村中が目を閉じた時、たき子の視線がチラと横にそれた。たき子は寢室の扉の方を横目で見やったのだ。

さっきまで閉まっていた扉が、いつの頃からか、少し開けられていた。たき子は、それを確かめるように、視線をはしらせたのだ。

### 窃視の効果

橋本宇吉は最初、たき子のそのプランには反対した。

「いくら何でも、そうまでしなくともいいだろう」

「でも、あの人の根性が汚いのよ。何でも金金でしょう。パパからだって、どれだけお金



ナミオM画廊 『雨乞いの儀式』 春川ナミオ



もらってるかしれないでしょう。そりゃそれだけのことをした報酬かもしれないけど、十分すぎる報酬を受けていると思うわ。それなのに蔭に廻るとパパのこと憎んでるのよ。あたしに向ってパパの悪口を言うんだもん。それだけなら、まだいいわよ。あいつ、あたしを狙っているのよ。そりゃ、しつこいわ。しかも、いつか必ず、あたしをパパから盗んで

やるって公言するんですもん」

たき子は、宇吉が村中に対する憎悪の念をかき立てるようにしたが、宇吉は意外に冷静で、顔色一つ、変えずにいた。逆に、たき子の方が自分の言葉にひかれて、大して憎んでもいない村中が、憎くてしょうがないような気分になってきたのだ。

「あたし何でもかくしておけない性分だから

前にもパパに打ち明けたけど、このマンションに移った時、まあお礼と言っちゃ変だけど村中がしつこく望むもんだから、一度だけ、ということ、ホテルへ行ったことがあるのよ。そしたら、イザとなったら、あいつ、駄目なのよ。ウフフフ、おかしいったら、なかったわ。犬のように舐めるだけよ。だから、コリーちゃんて仇名つけて、犬にしてやったわ。でも、その時、一度だけよ。だけど村中の奴、その後も、また、しつこく挑んでくるのよ。今度はチャンとやるって。男の意地だって。フフフ、笑わせるわ。へんな男の意地だわね」

宇吉は腕を組み、目をとじていた。

「ねえ、パパ。聞いてるの」

「ああ、聞いてるよ」

宇吉は目をあけ、やさしいまなざしを、たき子に向けた。

「何だかパパ、あたしの話を信用してないみたいだわ」

「そんなことはないよ」

「あんなキザな奴、あんな奴に誰が、まともに相手なんか、してやるもんですか。それなのに、あいつに二十万もくれてやるなんて。あたしもバカだわ。うっかり口に出して言っ



ちゃったから。それに、まあ何といっても、いままでの行きがかりもあるし、それにケリをつける意味で、仕方がないと思うけど、ただくれてやるのは、もったいないと思うのよ。だから、いままで、あたしがパパに言ったことが、ほんとうだという証拠をパパに見てもらいたいよ。そういう意味なのよ。そりゃバツのわるいことだって、おきるかもしれないけど、どうせパパは、あいつと手を切るつもりなんですよ。だったら、構わないじゃないの」

「うん、そりゃ、まあそうだな」

結局、宇吉は賛成した。

たき子は自分の話を理解してくれたので賛成したのだと思ったが、宇吉は全然、別の理由から賛成したのだった。

「覗き」という行為は、宇吉にとって刺戟的な興味を覚えたが、紳士のやるべきことではない、と理性が抑えていた。

最近、体力が、とみに衰え、たき子に対して、ノーマルな性行為が、ほとんど不能に近くなっている。

年のせいで仕方ないかと思っていたが、さる会合の席上で医者から「セックス能力というものは、年令とは必ずしも一致しない。個

人差が激しく、四十すぎてインポになる者も居れば、七十すぎても壮者をしのぐ絶倫な男も居る。また一人の老人に絞ってみても、その人が、ある時は衰え、ある時は復活することもある。その原因は体力、精力よりも、むしろ多分に精神的なファクターに支配され、左右される場合が多い。三十代、四十代で突然インポになるなどというのは、完全にこのレースである。がんらい、性能力は脳神経が支配しているのだからストレスが原因でインポになることなどは当然、ありうることなのだ。だから精力剤を飲んでも、その薬の直接の効果よりも「これで俺は元気になる」という暗示力の方が大きい効果があるのだと言われた。

「要するにですね、精神的な、何かショックを与えることによって、性能力はマイナスになることもあるし、プラスになることもあるのですよ」

この医者の一言が宇吉の脳裡に強く灼きついていた。

——ここで、そういう刺戟を加えれば、復活するかもしれない——

現に宇吉は、たき子と会うまでは諦めていたのだ。それが、たき子に刺戟されて、見事

に復活したではないか。その後、刺戟が馴れるにつれて、また衰えてきてしまっている。薬剤による肉体に刺戟を興えることは、副作用その他で、健康に害があるかもしれないが精神的なショックなら、肉体に与える害も少ないだろう。

そういう意味から、この「覗き」のプクンに同意したのだ。

——たき子も最近、衰えの目立った、わしに対して慾求不満を抱いているだろう。あるいはたき子も、それを考えてのことかもしれない。彼女自身、刺戟が、ほしいのだ——。

そうも考えた。

寝室のベッドにひっくりかえって、宇吉は村中が来た時からの会話を聞いていた。

平素、慎み深く、いんぎんに話す村中とはガラリと変って、野卑な教養のない人間であることを剥き出しにしている、村中という男の裏側も覗き見た気がした。

——声を聞くだけでも結構面白いものだ——  
ドタンバタンと二人が格闘をはじめた時、ベッドから起上がって扉を細目に開けた。

すでに、たき子が村中を圧倒して、その胸ヘデンと跨がっていた。長くて太い腿が異様



に平べったく、ひろがって巨大に映った。ガウンの胸がはだけ、上を向いた乳首が片方だけポツンと覗いている。少し乱れた髪を、かき上げ下を向いて嘲笑う、たき子の表情は、宇吉にとっては初めて見る、たき子の顔だった。たとえようもなく凄艶であった。

——自分に跨がってきた時には、あるような顔は見せなかった——。

男を征服し、男の意気地なさを喘う女の顔というものが、いかに美しいものであるか、魅力的であるかを知った。

巨大な太腿のコンパスが描く半円がジリジリと縮んで行く。その先に、みじめな男の敗北の顔があった。

村中が、こんな顔をするのも、また見たことがなかった。それは恐怖と懊悩とで極端に緊張したように見えるが、それでいて避けきれない魔力に引きずりこまれて行く——

そんな風に見えた。

「フフフ、お前も金の奴隷になり果てたね。金とあたしの奴隷に。奴隷なら奴隷らしくしな。ホラ、これが奴隷のつとめだよ」

巨大な太股に締めつけられると、村中の顔は狐のように細くなった。

——なるほど、コリーに、そっくりだ——

たき子が村中をコリーちゃんと言ってるのが、はっきり分った。

「フフフ、バカだよ、お前は。ほんとに大バカだよ。身のほど知らぬ間抜け野郎だよ」

村中の顔が、除々に埋もれて行く。

宇吉は、その瞬間、思いがけない異様なショックを自覚した。

抵抗力を完全に奪った男に加える汚辱の快味に酔う、たき子の美しさ。

宇吉はジーンと、しびれるような興奮が全身をはしるのに慄えていた。

宇吉はソツと扉を閉め、ベッドへ戻ると、

「オーイ、サリー」

と大きな声で呼んだ。

### 札 束 の 餌

たき子の重圧におし潰されていた村中の目

が、とびあるような驚愕をあらわし、一瞬、

犬としての動きが、とまった。

「ハァーイ、なに？ パパ」

「こっちへ、おいで」

「いま、手が放せないのよう。フフフ」

村中は猛烈な勢いで暴れ出した。

たき子は両膝にグッと力を入れて、おさえ

つけ、苦しみもがく村中の顔を面白そうに見下ろしながら、太腿の枷を、きつく締めた。

「パパ、来て頂戴」

村中は渾身の力をこめて、たき子を、は、ねとばそうとするが、70キロ近い、たき子の巨軀は、ユラリユラリと上下に揺れたのみでガッシリと跨がり、おさえつけた身体は、傾きもしなかった。

扉が開いて、浴衣一枚の宇吉が出て来た。

たき子は宇吉を見るなりテーブルの上の、室の鍵を指さした。

「かけて頂戴」

宇吉は言われた通り、扉に鍵をかけた。

「よう、村中君。妙なところで会ったね」

髪を乱し、額に、みみずばれのように静脈を浮かせ、真っ赤な顔をした村中は懸命に、もがいた。ゆらりゆらりと、たき子の尻が揺れていた。

「サリー、ホラ」

宇吉はたき子だけに通じる云い方をした。

「アラ、パパ。すごい！」

「こっちへ、おいで」

宇吉は寝室へ入った。たき子も、立ち上がった。

「お前も、くるんだよ」



「たき子さん、帰らせて下さい」

「二十万円、ほしくないの」

「それとこれは別でしょう」

「おいで、コリー。お前は、ついてくる義務があるんだよ」

たき子は二十万円入りの封筒を見せびらかすようにヒラヒラさせた。

寝室は天井のあかりを消し、ベッドの傍のスタンドに10ワットほどの赤い電球がついているだけだった。

たき子は勢いよくベッドにとび上がった。

宇吉は、大きな肉体を抱きとめた。

村中は開け放されたドアの外に立って、中を見ていた。

たき子は宇吉の顔にキスの雨をあびせた。扉の外に立っていた村中は目を伏せて扉から離れようとした。その一瞬、

「コリーちゃん、お入りっ！ 入って扉を閉めるんだよ」

たき子が命令した。

その声には絶対の権威があった。村中は、よろめくように寝室に入り、扉を閉めた。

居間の方のあかりが遮断されると、寝室は写真の暗室のような暗い赤い光線のみとなった。

宇吉が、何か、うめくよう云った。

「そこへお坐り。お坐りして、こっちを見るんだよ、コリーちゃん」

村中はギリギリと歯ぎしりした。

この屈辱！

たき子を盗もうとした野心の挫折！ 恐らくその野心は宇吉に筒抜けに知られてしまった。

その報復が、このざまなのだ。

それとともに、おさえきれない慾情にも悩ませられた。

——いまなら、たき子を十分、満足させることができるのに——俺は男として、決して弱い方ではないのだ。せめてそれだけでも、たき子に知ってもらいたかった。一度でもいいから俺の実力を示したかった。

彼は、じゅうたんの上に、言われた通りに坐った。もはや、居ても立ってもいられぬ焦燥感に襲われた。

宇吉は大きな、たき子の全身を貪るように愛撫していた。たき子は寝たままでガウンを脱ぎ捨て、淡く赤い光の中に白い裸身をさらしていた。

「すてきよ、パパ」

宇吉の頬といわず唇といわず、目茶苦茶に

キスした。

宇吉としては、近年にないことだった。

その宇吉の様子は、見ている村中にもそれと察せられた。

たき子は宇吉に頼ずりしながら、村中の方を見た。

暗くて村中の表情は、よみとれなかったが「見せびらかしてやる」

というサディズムが、ズキンズキンと脈打って心を、くすぐった。

「コリーちゃん、パパは、こんなにも立派な男だよ。お前なんかと違ってね。分かったかい」

村中は黙って坐っている。

「フン、お前なんか口先ばかりで、なにをやらせたってダメじゃないか。男の意地とか言ってたのは、どうしたのさ。アハハ。バカ」村中は黙ったまま動かない。顔は確かに、こっちを向いてはいるが。

たき子は、なおも口汚なく悪罵を浴びせたが、村中はじっと石のように動かない。

反能がないと却って、たき子のサディズムを、かき立てた。

たき子は、起き上がると村中の坐っている前に立ちはだかった。



「どした？ コリーちゃん。お前にも、お裾分けしてあげようか」

村中が、はじめて動いた。

「アハハハ、ばか！ 勘違いするんじゃないよ。お裾分けといっても犬のお前には、人間らしいことは、させてやらないよ、犬には犬のお勤めが、あるだろ」

たき子は足を上げて村中の肩を跨いだ。

村中は、あわてて身を反らし、避けようとした。

「アハハハ、何で逃げるのさ。そうだ、お前は、おなか为空いてるんだったね。犬の餌をあげようね」

たき子は封筒をとってきた。中から一万円の束を半分ほど出して、村中に見せた。

「お前は、この餌が、ほしいんだろ」

たき子は宇吉の寝ているベッドの端に腰かけて、

「サ、おいでコリーちゃん、餌をあげるよ」

村中は立上がって傍に寄った。

「そこへ、お坐り、お坐り」

足もとに坐らせた。たき子は改めて、ゆっくりと足をあげて村中の肩を跨いだ。

「サ、芸を、しな。コリーちゃん」

片一方の足も上がって、太腿の間に村中の

顔を、はさんだ。

「お掃除だよ、コリーちゃん。フフフ」

村中にとって、もはや避けることができなかった。

「ホラ、これもお前には餌だよ」

たき子は封筒から札束を、とり出した。

「ホラ、約束の二十万円、ちゃんとあるかどうか、数えてやるからね」

太腿をギュッと締めながら、

「いちまあい……」

一万円札を村中の頭の上に置いた。

「ホラ、どうしたい。しっかり、お勤めをするんだよ。にまあい……」

村中は本当の犬になったような気がした。

「パパから、お金をふんだくるのはやさしいだろうけど、あたしから、お金をとるのは骨が折れるだろう。フフフ、さんまあい……」

たき子は、いたずらっぽい目でチラと宇吉を見た。

を見た。

「どうパパ。いい眺めでしょう。よまあい」

村中は息が詰まって苦しく、うめいた。

たき子は、たのしそうに、ゆっくり札束を数える。

「どう？ お前みたいな能なし野郎はパパのお流れでも戴いて、ちっとはマシな男に、な

んな。ホラ、じゅうまあい」

札束が村中の頭の上に重ねられて行く。

「十万円かせぐには、世の中の人は、どれだけ汗水たらして働くか。それに比べたら、お前は楽しい思いをさせてもらいながら、お金が儲けられて、こんなうまいことはないよ。そうだろ？」

たき子は札束をおさえて落とさぬようにしながら村中の顔を、ひっぺがすように、はなした。

「お前も、そう思うだろう。どうなのさ。返事を、おし！」

村中はクシャクシャな顔に、くやし涙を浮かべて、たき子を見上げた。

「どうだ。ありがたいと感謝してるか。おい返事を、おしよっ」

「ハイ……」

「ハイじゃないよう。犬にしてもらえるのはありがたいのかい。それともイヤなのかい。イヤなら、これでやめとくよ。十万円で十分だろ」

「感謝しています」

「それじゃ、もっとやってもらいたいのか」

「ハイ、お願いします」

「フフフ、能なし野郎。お前、こんなめにあ



「でも、お金がほしいの？ この犬野郎、このサリー・ウエザーさまに大それた野心を抱いた罰を与えてやる。こん畜生っ！」

たき子はサッと片足をあげて、村中の額を思いきり、蹴とばした。

力強いキックに、村中は車にでもはねとばされたように吹っ飛んだ。札がバラバラと部

屋中に散乱した。

後頭部を、したたか床に、ぶっつけたが、そこはフカフカした、じゅうたんなので救われた。

村中は這いつくばって、散らばった札を拾った。

「どう？ 10枚あるだろう。あとが欲しかった。」



イメージギャラリー

『不老の秘訣』

岡

たかし

たら、此処へこいっ！」

たき子はベッドに股をひろげて腰かけ、太腿の上に肩を、いからせ両手を踏んばった。

「煙草を、とって来い！」

村中は居間からポルモールとライターを持ってきて、ポルモールの赤い箱から、煙草を一本、つまみ出して、たき子に差し出した。

「馬鹿！ 汚い手で、つまんだ煙草なんか吸えるかよ」

たき子は、その煙草を抜いて引きちぎり、村中の顔へ、ぶっつけた。自分で改めて一本抜いて村中に火をつけさせた。

「サ、あとが欲しかったらそこへお坐り！」

村中は、たき子に対して反抗する意慾を全く失い、恐る恐る、たき子の前に坐った。

たき子の白い足が、サッとあがった。また蹴とばされるのかと思って身を低くめる村中の首へ巻きつけるようにして、グイと手元へ引き寄せた。

「馬鹿野郎！ なにをビクビクしてやがんだい」

両腿でガッチリ顔をはさんでおいて、たき子は煙草の灰を村中の髪の中におとした。

「フフフ、今夜限りで、お前は一切、お払いばこだよ。もう電話もかけてきては、いけな



いよ。十一まあい……」

たき子は悪罵の限りを続け、ゆっくりと札を数えながら、時間をかけて村中を弄んだ。

「これがすめば、ハナもひっかけてやらないんだから、そのつもりで念入りにサービスするんだよ、コリーちゃん」

ベッドに寝そべって眺めていた宇吉は、まとも身体中があつくなくてきたことに、宇吉自身、驚いた。

「もうそのくらいで勘弁してやりたまえ。村中君、君には、いろいろ世話になったが、サリも言う通り、僕との間も、これっきりにしてくれたまえ」

「パパが言うから、勘弁してやるよ。二度と来るんじゃないよ。サア頭の上のお札をしまいな」

たき子は扉の鍵を開け村中をうながした。

「たき子さん。ねえ、もう一度、もう一度だけ会ってくれませんか。ね、もうお金には関係ないことです。ねえ」

扉のところでは村中は坐りこみ、哀願するよ

うに、声をひそめて言った。  
「なにを言ってるんだい。もう来ないと約束した。てめえなんか、もう用はないんだ。サッサと出て行きやがれ」

たき子は足をあげて村中の頭を蹴とばして室の外へ蹴り出すと、ガチャンと鍵をかけてしまった。

「たき子さん……、たき子さん」  
声をしのばせて呼びかける村中の耳に、たき子の笑い声が、はね返ってきた。

す っ ぽ か し

安井安芸雄は四十日振りで帰ってきた。

羽田へ夜遅く着いて電話すると、たき子は羽田へ、すっとなできて迎えた。

「ずい分、長かったのね」

「うん、予定が、のびちゃってね」

「淋しかったわ」

人前ではばからず、たき子は抱きついてキスした。

一ぱいある荷物を、たき子も手伝って車のへ詰め、マンションに戻ると安井の室に荷物を運び、一カ月余も留守した室を、たき子は甲斐々々しく掃除した。

「どうだった？ 面白かった？」

「ウン、得るところがあったね。ニューヨークの雑誌社から頼まれて、仕事も少し、やってきたよ」

「まあ、すばらしい。あんたも世界的なイラストレーターになったのね」

「フン、大げさだな。まだまだ、そこまではほど遠いけど」

持ってきたジョニーウオーカーを抜いて、二人は乾杯した。

「向うで、外人の女のひとと遊んできたんでしよう」

「冗談じゃないよ。そんな暇はなかった」

「ウソウソ。本当のこと、言いなさいよ」

「ポルノ映画ぐらいは見たけどさ」

「何言ってるのよ。コラ、白状しなさい」

たき子は安井に抱きついてキスした。

「おい、裸になれよ。久し振りで君の肌が見たいね。俺、いつも君のことを頭に描いていたんだぜ」

二人は競争するように服を脱いだ。

その時インターホンから、たき子の室の扉がバタンと閉まる音がした。

「あ、親父さんが来たんじゃないか」

安井は耳を澄ませた。

ガサガサと室の中で何かいじる音がする。

「チェッ、わるいときに来るわねえ。今夜は電話もなにも、かかって来なかったから安心してたのに……」



「好事魔、多しか。フフ」

安井は力強く、たき子を抱き、濃厚なキスをした。

「サ、行かなきゃならないんだろう」

「うーん、いやんなっちゃうなあ、この頃、しつこくなっただから。昨夜も来たのよ」

たき子もキスを返した。

「いいわよ。少し待たしといてやるわ。その方が、いいのよ。あんまり都合よく、すぐ帰ったんじゃ、却って変に思われるわ」

「いいのかい？　こうしても……」

安井はニヤツと笑った。

「いいわよ。爺さんより、あなたの方が大事だわ。ことに今夜は、四十日振りですもの。あたし、ずい分、待たされたわ。気が狂いそうになって、毎晩ヤケ酒、飲んだのよ」

「構わない？」

「構わないったら。サア早くう……」

燃えているのは、たき子の方だった。四十日間、焦れて待たされた強い男のちからに飢えていたのだ。

安井の方は13時間も飛行機の狭いジャンボに、すし詰めにされて相当、疲れている。ジャンボの機内は広いけれども、座席は五人掛けで、かなり窮屈なのだ。

しかし不思議なもので、疲れている時ほど却って情感が昂まることがあるものである。

たき子に挑まれて、言葉の不自由なアメリカの女よりもムードが全然、違う。白い女や黒い女、ハーフの女と、いろいろ遊んでみたが最初は珍しさに刺戟されたが、二度三度と馴れると味気なさを覚えた。

——やはり日本の女が一番いい。殊に、この女は最高だ——

アメリカに居る間、女を抱かぬ日は数えるほどしかなかったくらい連日、奮戦してきた安井だったが、新鮮な刺戟には、敏感に呼応した。それだけ安井はタフで強靱な精力の持ち主なのだ。

「やっぱり、君が一番いいよ」

「エッ？　なにさ。やっぱりアメリカで遊んだんじゃあないのさ」

たき子は安井の身体をゆすぶり、背中に爪を立てた。

「アッ痛てっ。痛いよ、君」

「ちき生。あたしが我慢してきたのに浮気してたのねッ」

ボタン！　と、かなり大きな音がして、たき子の部屋の扉が叩きつけられるように閉まる音が聞えた。

「でも君には、爺さんが居るじゃないか。だいぶ、焦れてるようだぜ。いいのかい、行ってやらなくても」

「いいわよ、構わないわよ。そんなに気を使わなくても。爺さんの焦れてる顔を想像しながらってのも面白わよ。ウフフフ」

これは安井を強く刺戟した。

「そんなら、こうだっ」

イヤホンからは、紙をいじる音や、いろいろな音が流れてくるが、もはや、たき子の耳には入らなかった。安井の方は、それが、いちいち耳に入っていたが、却ってサジスチックな刺戟になった。

——旦那が、焦れて待ってる。それを知りながら、盗んでやるんだ……

という快感が身内をゾクゾクとはしった。

「サ、もう部屋へ行くんだ」

「なによう。ふたことめには、せかせて。行くかどうかは、あたしが決めるわよ」

「静かになったな。寝たのかな」

「気にしないでもいいわよ。あたし、もう今夜は行かない。一ぺんすっぱかしてやるわ」

「いいのかい、そんなことして」

「構やしないわよ。今夜は安芸雄さんと寝る



わ。久し振りだもん」

二人は裸のまま起き上ってウイスキーを飲み、チーズやクラッカーをパリパリ噛んだ。

「あ、あたしの冷蔵庫に、おいしいローストビーフがあるんだけどなあ。爺いが居るからとりに行けないわ。早く帰ればいいのに」

インターホーンからは、ガラスのふれ合う音が聞えた。

「あっちでも一人で一杯やってるわ。フフ」

たき子は、首をすくめて笑った。

ひと休みして又、二人はベッドに入った。

安井には、たき子の部屋の物音が、よい刺戟となるのだが、いまはサッパリ音が、しなくなってしまう。それが、物足りなく感じた。

「よしッ、今夜は君を爺さんに渡さないぞ。

俺が独占する。途中で帰ると言っても今夜は俺が許さんからな」

「フフフ、いいわよ」

たき子は安井の顔中にキスした。

突然イン・ターホーンからジャズが流れ出す。

宇吉がラジオのスイッチを入れたのだ。

「気がきいてるわ。いい感じじゃない」

一時間ほどして扉の締まる音がした。

「あ、出て行った」

たき子は扉の音を聞き分ける耳をもっていた。室内の扉と、入口の扉とでは、はっきり音が違うのだ。

「とうとう諦めて帰ったわね。ウフフ」

「爺さん、怒ってるだろう」

「仕方ないわよ、予告なしに来るんだもん。ざま見やがれだわ。アッハハハ」

### チャンスは二度と来ない

鬼山は、安井とたき子を六本木のフランス料理に呼んで三人で食事した。

旅行の話、向うの出版界の動向、絵の話と話題は、つきなかった。更に今後の仕事について打ち合わせになると、安井は

「留守中、植座さんが代役をつとめてくれて有難う。お役に立ちましたか」

「結構でしたよ」

「だったら今後も引き続いて彼女に描いてもらっても結構ですよ。僕はアメリカから持ち帰った仕事を仕上げなきゃ、ならないですから」

彼の仕事を全面的に、たき子に譲った。

安井は他に用事があるからと、食事どころ

そこで出て行った。

鬼山は、さっきから、それとなく、たき子を観察していた。

——今日のたき子は、ガラッと変っている。——  
と思った。第一に一番、変わったことは、女らしくなったということである。

いままでは何となく荒っぽい、ふしぶしが見られた。それが現在は女らしい、やさしさが何となく感じられるのである。

——恋人が帰ってくると、女は、こうも変わるものか——

「あ、そうそう。この間の写真ね、できましたよ。見ますか」

たき子は案の定、ちょっと眉をくもらせ、不愉快そうな表情になったが、すぐにそれをおしくして

「アラ、そう。見せて……」

鬼山は、彼女の表情やポーズの美しいものだけを選んで持って来ていたので、それを見せた。

「フフフ、イヤねえ。あん時、あたし相当、酔っぱらってたのね」

あたりを気にしてサッサツと見ると、すぐに鬼山に返した。

「どうです。もう一度、やってくれますか」



「ホホホ、もう勘弁して下さい」

鬼山の期待通りの返事が返ってきた。もうやらないだろうことは、察しがついていたのだ。ただ、ちょっと気を引いて見ただけのこと

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一二〇〇円 (送共)
半年分	6冊	二四〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四八〇〇円 (送共)

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替(大阪四二七八三番)』のいずれかをご利用

とである。

——もう二度と、やらないだろう……

写真の出来が素晴しかっただけに、鬼山としては残念だったが、一面、考えようによって

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

ては、安井が、ずっと居たら最初から実現しなかっただろうと思うと諦めもついた。

安井と一緒に居る時のたき子は、まるで夫婦気どりのような親密さを見せていた。

一方、安井の方は、蔭では鬼山に、たき子との情事を、いろいろ、ぶちまけているくせに面と向っては照れ臭いのか、変によそよそしいところがあった。「植座さん」などと、たき子を苗字で呼んだりするところなども、たき子の方が「あきおさん」と言うのに対してはチグハグだった。

——たき子の方のお熱が、ずっと高いな。とは、容易に察知できることだった。

女らしく、やさしくなったとは言っても、たき子のセックスアピールは、ますます濃厚に、にじみ出ている。

辺見まりのような妖艶さは、若い男だったらクラクラするような魅力がある。

あごのあたりに肉がついて、どうかして下を向いた時、僅かに、あごが二重になることがある。それが、また、すばらしい魅力だった。鬼山は、たき子の美しさを、もっともっとカメラに記録しておきたかった。

あの時、もう少し撮っておけばよかった。という残り惜しさが、いまさらながら悔や



まれた。

あの夜、たき子は確かに荒れていた。

奴隷の阿保にユーリンを飲ませた時のクラ  
イマックスシーン！

「写真、撮っちゃ、いやよ」

と拒んだが、鬼山がライトを当て、シャッターを切っても、平気で阿保の顔に激しい音を立てて「滝」を浴びせていた。

あの時の表情が、すばらしかった。

「この野郎、ザマ見ろ！」

と、勝ち誇ったSの女王の顔だった。

そのあと、たき子は鬼山を、からかうように挑んできた。鬼山は戸惑いながらも、応じてしまった。

「飲ませたら、もうあとは、お終まいだよ。」

お前にはハナも、ひっかけてやらないから」

と宣言していたが、阿保が哀願し、足もと

にすがって、ねだるのを、何度も蹴とばしながら、結局は阿保の哀訴を容れて、また、な

ぶってやった。その時、鬼山は疲労してしま

って、写真を撮ることが、できなかった。

それが、いまになって悔やまれるのだ。

——あの時、たき子は、さまざま、いいポーズ、すばらしい表情で、阿保を責めた。いずれ、また撮ろう——

と思っていたのだが、現在のたき子を見ると、もう写真は絶対、撮らしてはくれそうもなかった。

——チャンスというものは二度と訪れないものなのだ！——

いままでにも「この美女をモデルに、いつか写真を撮ってやろう」と思っていたのを、結婚してしまったり、所在不明になったりして、みすみすチャンスを逃がしたことが何度もある。

あの時は安井が長く留守にしたために、たき子が生理的に一時、歯車の狂っていた時だったのだ。だからこそ、あすこまで狂態を演じたのだろうが、安井が帰ってきてしまっただけは、もう二度とカメラの前には立ってくれないだろう。

確かにあの頃のたき子は、やけっぱちだった。顔にもギスギスした荒さが、にじみ出ていた。

それが、いまは、どうだろう。精神面でも物質面でも総べてが満ち足りた顔になってしまっている。

満ち足りている女というものは、女性本来のやさしさに立ちかえるものなのだ——

たき子を見ながら鬼山は、そう思った。

鬼山のこの観察は、必ずしも全般的に的を射ているとは言えなかった。

女性というものは、そんなに簡単に割りきれる性格のものではない。

女心と秋の空——と言うように、今日は春風飈蕩としていても、明日は嵐を呼びおこすかもしれないのだ。

間もなく彼女に大きなトラブルが、まき起り、彼女の環境に一転換が招来するのだが、それは鬼山には当然、予測できるはずがなかったし、たき子自身にしても、それを察知することは不可能であった。

バイトをしながら苦勞していた女子画学生のたき子の前に、橋本宇吉が現れ、さらに安井芸雄の出現に及んで、環境は著しく変化した。

この二人の男性によって、社会的な地位や収入の向上とともに、女性の価値を、みがきあげられて行った、たき子であるが、それははからずも大きなトラブルに直面するのである。

植座たき子という女性の運命は、この先、どこまで発展して行くか、たき子自身にも、わからない。神のみ知ることであった。

——(続く)——



## 編集長への或る手紙

## 私に御主人様をお与え下さい

なえ  
苗 木 陽 子

(イラスト・マエダヒオミ)

一才にな  
る一人暮  
しの未亡  
人のござ  
います。  
三年前  
とかく病  
弱がちな  
夫をなく  
しまして、  
それ以来、ある化粧品  
のセールス  
などをや  
り、生活  
をたてて  
おります。  
夫は真面目  
一方の男  
でして、酒  
も煙草も、  
身体に悪  
いといっ  
て、賭こ  
となんか  
に手を出  
すといっ  
たこと  
もない、  
仕事本位  
の典型的  
なサラ  
リーマン  
タイプで  
ございま  
した。

そんなわたくしは、結婚して間  
なしに、貴誌を知りました。この  
世の中に、こんなに、自分の気持  
にぴったりの雑誌があったのか、  
と、口の中に甘ずっぱい唾液をた  
めながら、夫にかくれて、むさぼ  
り読みました。

風流極道軒さまの『紫蘭の門』  
に出てきます雅子姫のように、沢  
山の人の見ている前でめっちゃめち

やに、いじめられたいという、大  
それだ思いが、いつも、わたくし  
の心のなかを占めておりました。  
そして、現実には、塚本鉄三さ  
まのカメラルポに登場される女性  
を、心から羨ましく思い、出来ま  
したら自分も、あのようになり、い  
められて、写真にとられてみたい  
という強い気持が、わたくしの心  
を、そのかすのでございます。  
それは、時には強く、時には妖し  
く、わたくしの心を揺り動かしま  
した。

でも、わたくしは、もう三十を  
越した女でございます。貴誌を飾  
っておりますような、若くて美し  
い女性とは、お世辞にも、同じに  
はできません。それに、身長一五  
二、体重が六一という豚のように  
ふとった女でございますもの、と  
ても、大きな顔をして、モデルに  
など、志願できる柄ではございま  
せん。

とりえと申しましたら、ただ色  
が白いいだけの、このわたくし  
を、プレイの際の介添えにでも  
使っていただくわけには、まいり

編集長さま

毎日、暑い日がつづいておりま  
すが、お元気にてお励みのことと  
かけながら、およろこび申し上げ  
ます。

突然、このようなお手紙を、お  
出しして、さぞ、お驚きのことと  
思います。

わたくしは、貴誌の数年来の愛  
読者でございます、只今、三十



ませんでしょうか。もし、それが  
かないまでも、この色の白い  
肥った女、いや、白豚と呼んで下  
さい。この白豚を、責めの実験台  
として、思いのままに、責め、弄  
んで頂けませんか。

こんな大それたお願いは、とて  
も、お聞きとどけは頂けないとは  
存じますが、わたくしの心のなか  
でだけ、強く期待しておりますの  
は、アヌス責めとムチ打ちの二つ  
でございます。こんなことは、誰  
にお願いできるといったことでも  
ございませんので、恥を忍んでペ  
ンを持った次第でございます。

編集長さま

こんなわたくしを哀れと、お思  
いでしたら、どうか責めの実験台  
にでも、或は、気がむいた時の、  
おもちゃ、なぐさみものとして、  
責めて頂けないでしょうか。もし  
編集室に於いて、わたくしのよう  
な者は、必要ないとお思いました  
ら、どうか、お知り合いの方で、  
責めのお好きな方がございました  
ら、御紹介願えたら、こんな幸せ  
はございません。

実は、わたくし、夫がなくなっ

て一年後、二十九才の折に、一人  
の男性と知り合ったことがござい  
ます。セールの途中、余りに暑  
くて咽喉がかわいたことと、足が  
棒のようにくたびれたので、一軒  
の余り大きくない喫茶店へ入って  
コーヒを、注文したのでございま  
す。他に、アベックが二組ばかり  
いただけで、いくらも席があいて  
いるのに、わたくしの前へ「いい  
ですか」といって、一人の男性が  
坐ったのです。

その男と、二度ばかり喫茶店で  
逢ってからアパートを教えたのが  
運のつきで、身体の関係ができて  
からは、ずるずるべったりに住み  
ついてしまいました。わたくしよ  
りは一つ下の二十八才というのに  
これといった定職はなくて、いつ  
も盛り場をうろうろして、パチン  
コにばかり精をだしているといっ  
た遊び好きの男でした。

二十代もあと一年だと焦ってい  
たわたくしが、こんなつまらない  
男と知り合ったのも、自分の運が  
悪かったのだと諦めて、それでも  
半年ばかり一緒に暮しましたが、  
なまけ癖は一向に改まらないばか

りか、寝る場所と小遣いに不自由  
しなくなってから、一層、遊びが  
激しくなっていました。

ハンドバッグの中のわたくしの  
小銭を黙ってくすねている間は、  
まだよかったのですが、わたくし  
の衣裳や装身具まで持ち出すよう  
になってしまったので、彼の留守  
中、目ばしい家財道具を売り払い  
アパートの権利金を回収して今の  
所へ引っ越してしまつたのです。  
それから、それに懲りて、ずっ  
と一人暮らしをつづけております。

今の住居は、都市から電車で四  
十分ばかりの郊外で、プレハブな  
がら一戸建ての家で、何不自由な  
く暮しておりますが、この家はわ  
たくしがセールで貯めたお金を  
もとに建てたもので、以前のよう  
に、逃げだすわけにはまいりませ  
ん。

編集長さま

再びお願いで、恐縮でございま  
すが、どこの誰ともわからない不  
安の方よりも、出来ましたら塚本  
鉄三さまの責めの実験台としてで  
も、お使い頂けないでしょうか。

勿論のこと、わたくしの望みま

すアヌス責めやムチ打ちばかりで  
はなく、どのような苛酷な責めを  
も甘受するつもりでございます。

貴誌を毎月読んでおりますうち  
に、心の中だけでは、相当のベテ  
ランになったような気持でおりま  
すものの、実際には何一つ、経験  
はございません。これから、わた  
くしの身体を通して、お教え頂け  
ましたら、こんな幸せはございま  
せん。

わたくしの只今のお仕事は、身  
体の自由がききますので、お呼び  
出し下さいますれば、いつなりと  
も、編集室へ出頭させて頂きま  
すので、二、三日前にお知らせ下  
さいませ。一人身の気安さ、何もの  
をおいても飛んでまいりとう存じ  
ます。でも、先に申し上げました  
通り、貴誌に飾って頂けるような  
容姿でもスタイルでも、ございま  
せんので、その点は呉々も御諒承  
おき願ひとうございます。

もし、マゾ女の資料制作とでも  
いうべきものがございましたら、  
そのモルモット代りにでも、この  
わたくしをお使い頂ければ、どの  
ような責苦にでも耐える覚悟でお



ります。

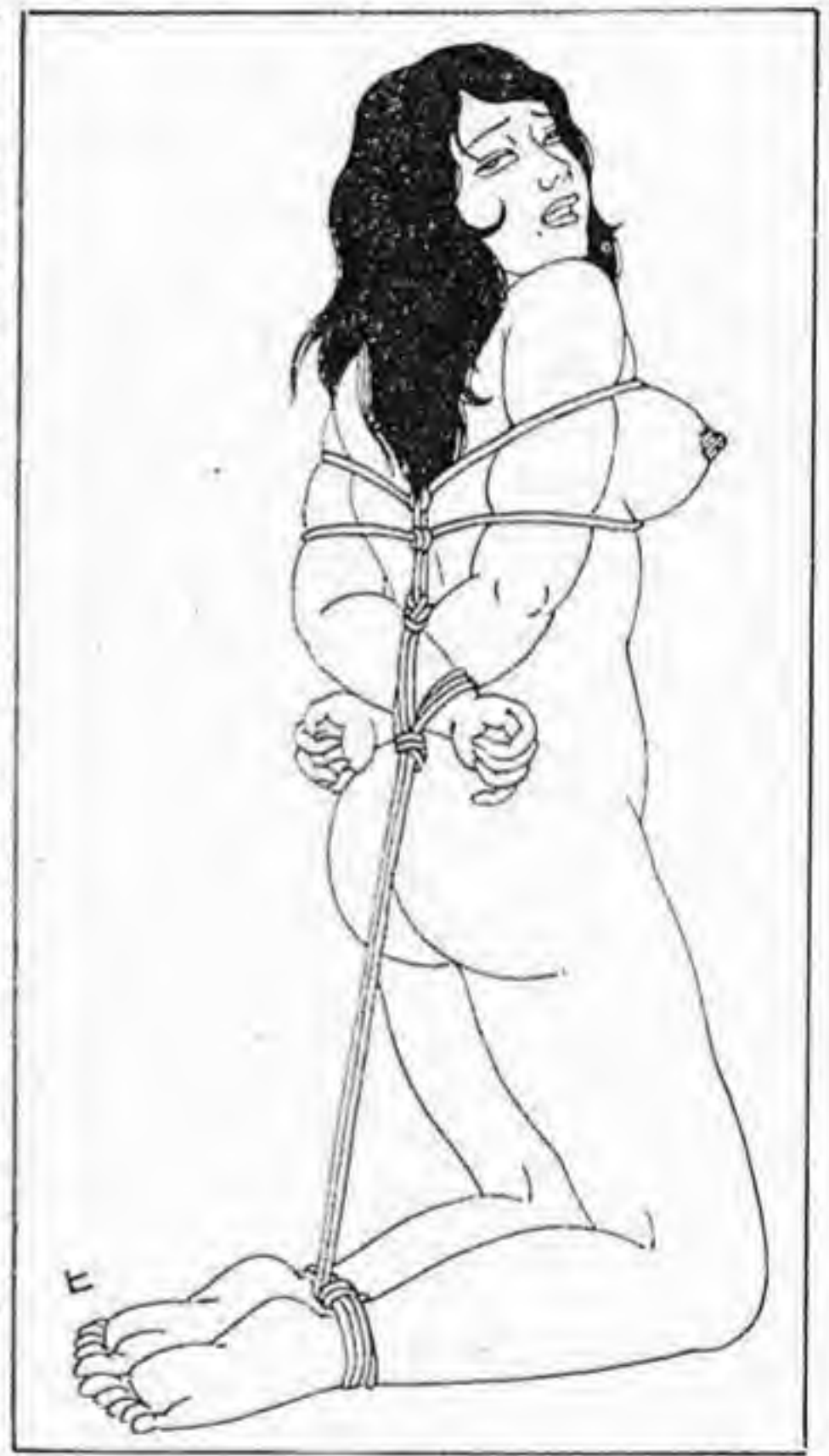
三十代の女盛りとでも申しましようか、この二、三年の間に、思ひ切り奔放なSMプレイの泥沼にひたり切った生活を、してみたいという強い欲望が、しきりに致します。

こんなわたくしって、本当に好色な女だと自分自身で思っております。

貴誌に載っております女が責められる小説は、みんなわたくしの愛読するところで、その責められるヒロインを自分に置きかえて、責められているのだと想像しただけで、ついつい、エクスタシーに達してしまいます。

八月号の口絵のトップを飾っております関谷富佐子さまのようにこんなに縛られてムチ打たれたらどんなでしょうか。わたくしでしたら、それこそ、何度となく、エクスタシーを感じてしまいうだろうと思います。

『紫蘭の門』のあそこの、あの場面、この場面にあるように、あらゆる性的な責めを受け野卑な言葉



でからかわれながら、恥しらずの境遇にのめり込んで行けたら、女として最高の幸せなことだと思います。

九月号で鈴鹿晶子さまがハソ連兵の餌食になる日本女性Vという文章を書いておられますが、わたくしも、ここに出てまいります高松夫人のような目にあいたいのです。

お恥かしいことながら、わたくしはこの文章を読んで、何度も何度もエクスタシーを感じてしまいました。それはムチで責められるところがあったからです。

わたくしは、こんなに欲望の強い女です。

普通の男女の間では、アヌスすら責めてくれず、わたくしには、物足りないのです。

わたくしをいじめ、責めて、思いのままに飼育して下さる御主人って、いらっしゃらないでしょうか。わたくしは、そんな御主人様にお逢いしたいのです。

年令的には、決して、もう若くはございませんが、御主人様に対しましては絶対服従のマゾ女として、どのようなヒドイ性的な責めをなされようと、従順にお仕え

する事を、お誓いします。

編集長さま

こんなわたくしに、なにとぞ、心からお仕えできる御主人様をお与え下さい。

そしてマゾを強めて、やがて、三人、四人と多くの人達のオモチャとして、あらゆるセックス責めを加えられ、やがて見世物になっで行きたいのです。

こんな太ったブタ女、いや白豚に対してでも、もしも、いささかでも興味をお持ち下さるようでしたら、どうか、一筆のお返事を賜りますようお願いして、お願い申し上げます。

永々と、つまらない事ばかり書きつらねまして、申訳でございます。

どうか、この脂ぎった白豚女をマゾの喜びにひたらせて下さいませ。

かしこ

八月十日

奇ク編集長さま

苗木陽子



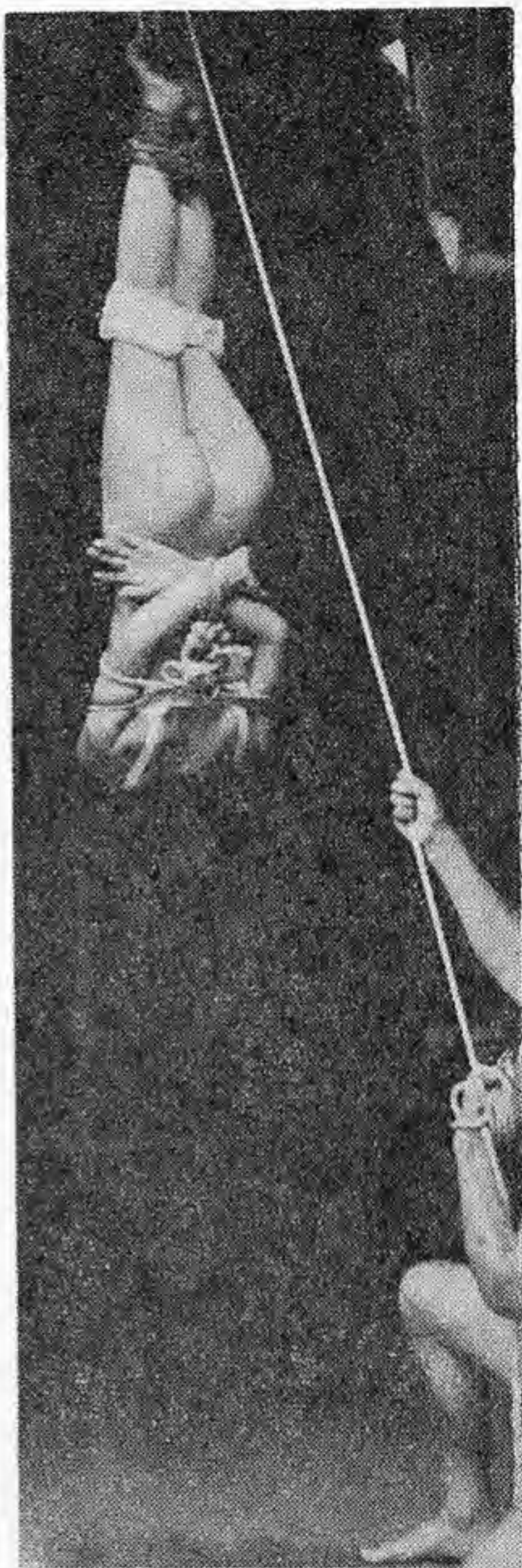
## 楽 多 控 《第八回》

漫

考

(第二部)

隆



先回では、妊娠九カ月の金原奈加子。典型的マゾ女性木村洋子。永遠の恋人、梨花悠紀子。夫婦プレイの増田みゆき。妖艶な左近麻理子。それに東映スターなどの逆吊りを紹介したが、耽奇房には、まだまだ数多くの、M女性の逆吊りが眠っている。当時、強烈すぎるので遠慮したのも含めると十指を数えるがどうしても発表出来ない女性もあるので、茲では、その許容される範囲内で、逆吊り女性を登場させてみたい。

## 夫婦プレイの逆吊りの実態

昭和四十二年十二月号のSMカメラ・ハント『妻よ薔薇に似て』で発表した田宮恭介、

寿子夫妻の、夫婦プレイのルポを記憶されてる方も、彼が十月号の奇クサロン欄で『緊縛の屋外実験』という手記を寄せているのを憶えておられる方は少ないのではあるまいか。奇クサロンには、この手記に附して、彼の撮った、二葉のフォトが掲載されている。

鉄製の脚立を伸ばして梯子にして逆さに縛りつけたのと、物置での逆吊りの二つである。

彼は、緊縛の屋外実験という手記で、彼等夫婦だけのプレイの如く書いているが、真相を話すと、このプレイには、実は私が一枚、噛んでいたのであった。

その理由。この逆吊りの時を含めて、それ迄に、三度、夫婦プレイのアドバイザーとして協力したが、田宮恭介は、この時点ではまだ、SMカメラ・ハントに書きたいという私の申し出を拒否していた。寿子夫人の顔が誌上に出るのを懼れ、万一の危惧を慮おもんばかっていたからであった。夫婦プレイに対しては、強烈、且つ、積極的であっても、誌上に公表されることには逡巡するのが、世の夫婦プレイヤーの常である。今から六年前といえ、や



我、房、奇、耽

逆

吊

村 辻

つとSMプレイが、静かなブームをまき起しつつあった頃で、現在、すっかり顔を曝してしまった私にしろ、その当時は、やはりアンダーグラウンドの存在で、自分をプレイの掲載フォトに入れることに、若干のためらいを感じていたのだから、彼のためらうのも無理はなかった。

この日の、屋外での緊縛は実に素晴しかった。それだけに、これほどの素晴らしい逆吊りの緊縛を、あたかも眠らせておくのも惜しいと私は田宮恭介を口説き、顔の判然とせぬもので、せめてこの日の屋外の緊縛プレイの一端なりとも、手記風に発表してみてはと、かなり執拗に奨めたのであった。

私の熱心さと根気に負けて、彼はようやく

承諾する。その日の緊縛プレイの状況を、原稿用紙三、四枚に纏めて、私にみせる。書くことなど苦手な彼のことだから、これだけでも精一杯のようであった。しかし正直いってどうも拙劣である。骨子はその俚にして、私もお節介焼きで、書き直してやった。それがあのレポートであった。

この月号の奇クサロン欄には、読者投稿の緊縛フォトのめぼしいのは、これといってなかった。それだけに、田宮恭介の『緊縛の屋外実験』の二葉の、強烈な逆吊り緊縛フォトは、かなり反響があったようで、私が今、発表しようとしている逆吊りの状況を、手記は左記のように簡潔にしている。

〔前略……。この日はすぐ、滑車による逆吊

りの実行にかかりました。

滑車の一個を、梁にしっかりと結びもう一個を、両脚を縛った細帯に結びつけて、下から吊りあげてゆくのです。これは長尺リリースを利用して、吊り上げてゆく行程を撮りました。カメラはこのために新たに買った、リコーの連続ショットのカメラです。このカメラは、今日の逆吊りが撮り始めです。うまく撮れること





を心に願って、私の作業は始まりました。

小柄といっても女一人吊り上げるのは、流石に力が入ります。ウンウン言いながらも、妻の体が、徐々に足から吊り上がり、ついで頭が地上を離れ、十センチ、二十センチと上がってゆく時は、身の震えるような快感にジーンとしました。のどがカラカラになってきます。こうして寿子の両足が、梁にほとんど、すれすれになるまで高々と吊り上げた時、私は全身で快哉を叫んでいました。遂に念願を達した。やったぞ！という、こたえられない喜びでした。地上一米以上も吊り下がって妻は、全身の重味を、僅か一本の脚首の紐で耐えていました。

プレイを開始して、僅々二カ月足らずで、(これも、編集長様よりご紹介していただいた辻村氏のご協力のお蔭で)ここまでのことが出来るとは、まさか私も想像してはおりませんでした。夫婦プレイの真髄には、まだまだ到達しませんが、私の妻への飼育は一応成功したようです。……後略

右の彼の手記のうち、( )は、いずれ将来の、SMカメラ・ハントの布石を考えて、私が彼の原稿から削除した個所である。( )以外は、奇クサロンの手記の原文通り――。

本来なら、私はこの、逆吊りの強烈なプレイを、カメラ・ハントに書きたかったのであるが、私が奨めて、彼が自分の単独のプレイとして発表した以上、あとあと、それが痛し痒しとなって、私は、その次のプレイの有様をカメラ・ハントに書いたのであった。

読者通信の反響に彼は氣をよくし、箕田氏からの口添えもあって、彼はやっと決断してSMカメラ・ハントに協力する気になってくれたのである。

奇クのバックナンバーをお持ちの方は、些か面倒でも、一九六七年十月号の二〇ページの、田宮夫人逆吊りフォトを御一覽していただきたい。ブラジャーをつけ、パンティを穿いた、逆吊りの夫人の乳房を、ブラジャーの上から押えている男性の姿はカットされている。何を隠そう、それが私だからである。

長尺レリーズの、連続ショットのカメラで撮ったことになっているが、このフォトをみても分る通り、一方で吊縄を引き、一方の、しかも右手で乳房を掴んでいては、かなり器用なカメラマンでも、同時撮影はむづかしいのではあるまいか。

この日、寿子夫人は、二度に亘って、逆吊りをうけている。吊り上げてゆく私を、彼は

私のカメラで撮ってくれる。吊り縄は、横の柱にしっかりと縛りつけて固定しておいて、私は夫人のパンティを膝許までたぐり上げ、毛抜きで一本一本、丁寧に脱毛した、すべやかな肌を、さらけ出す。首縄かけて、胸もとをしっかり縛って後手にしてあるので、ブラジャーは外されず、己むなくその上から、愛撫を加えざるを得なかった。

地上から約二米半――。高々と吊り下がった女体は、逆吊りの醍醐味を存分に味あわせてくれたのであった。

身長一五七センチ、体重三九キロの小柄な女体は、私独りの力でも、滑車応用の力のかかりで、意外なくらいスルスルと上昇し、トタン屋根の梁に殆ど両足が届くまでに、高々と逆さ吊りになった。

いつもいう様に、逆吊りの場合、頭部が、地上から一センチ離れても、数米距離が開いても、与える苦痛というものは均等である。

しかし、緊縛の逆吊りプレイの場合、この引上げる高低によって、S的な感覚は相当、違ってくるのである。

ホテルや、部屋などで鴨居に吊り下げた、敷居スレスレの逆吊りにくらべ、こうした屋外の、トタン屋根の雨除けの場所での、高々



とした緊縛逆吊りは、与える苦痛は等しくても、嗜虐欲は格段にみたされるのであった。

三分——四分——やがて、夫人の苦痛の色は濃くなってくる。時宜を計って、降下させる。セメント張りの地面に一枚の筵が伸べてある。小休止のあと、私の行為を見習って、田宮恭介が、再び、夫人の女体を、じりじりと吊り上げてゆく。彼のカメラで、その逐一を撮る私——。

何を隠そう、この吊上げ方式——私は箕田氏に伝授をうけたもので、田宮恭介も将来、この吊り方を踏襲してゆくことであろう。

彼が夫人にしたように、私も又、見事に逆吊りになった彼女の体を、空中でグルグルと数度、回転させる。手を離すと、弾みがついて、女体は独楽こまのように回転する。小柄でたおやかな女体のうち、臀部だけが異常なまでに発達していて遅く、飼育の果ての完全剃毛と関連して、私は田宮夫妻の、SMプレイのあとの、爛熟した耽溺の生活を、そこにありと見る思いがしたのであった。

彼は、逆さにういた妻の唇を貪るように吸う。喜悅の呻きが奪われた唇から洩れる。

私はもう、燎らかに、情景描写に専念するアシスタントに過ぎない。

私を混じえての、二度、三度のSMプレイは、いつしか、私という人間の介在が、一入夫婦のSMの想念に、拍車をかける役割を果しているようであった。

彼は、いつものように一糸纏わぬ裸身になる。立ちほだかる彼——。しかし、逆吊りに吊り下げた夫人の顔は、余りにも高く、彼が懸命に背伸びしても届く筈もなかった。

それが恒例の、ソワサン・ヌーフをあきらめた彼は、立てかけてあった竹箒を手にとると、ささくれた竹束の方で、キュツと締まって、鍛えられて強靱になった双脛を、発止、発止と打擲する。打擲のはずみで空中で揺れゆるやかに回転する女体から、むしろ甘い苦痛の呻きが、夫の嗜虐心を、あふり立てるかのように洩れる。

そして、この強烈逆吊りは長かった。

やっこのことで、降下を許された夫人の体は、遅しい夫の胸の中で、しっかと抱かれ、彼は、この大役を果し終えた妻が、いとおしくて堪まらぬかのように、紅潮した夫人の、すべやかな頬に、粗々しい頬ずりを繰り返して、いたわるように、ほんの先ほどまで、打擲を繰り返していた双脛を、そっと撫でさすっていたのであった。

夫の嗜好である、強烈な嗜虐に耐え抜く妻——。夫の氣に入るように努めようと、懸命に努力するのが、田宮恭介にとっては何ものにもかえがたい欲びであったことであろう。そこに夫婦プレイの真髓がある。

田宮恭介は、夫婦交換プレイの実践者でもあり、私に対しても、最愛の妻を、惜しみなく顔ち与えてくれる。それでいて、夫婦の相寄る魂と、互信の絆が強いのか、はためにも羨ましい鴛鴦の仲であった。

昭和四十二年の秋頃から、翌々年の二年間ぐらいは、この夫婦にとって、SMプレイは不可欠の、面白くて堪まらぬ、耽溺の時期であった。私のよく謂う「急々緩々」の、急々の時代である。奇妙なもので、そんな時期には夫婦の心はピタリと一つになっているから仕事も順調で万事すべてがウマくゆくものである。毎日が愉しいから、仕事をするにも、ハリが出来てくるのだらう。

彼は、些細なことにかこつけては、よく私に電話を掛けてき、時には内心、迷惑に感じるくらい、しばしば夫婦で訪問してくるのであった。

三度に一度ぐらい、離れのSMの間で、プレイする事もあったが、当時は、私の四人の



子供が家にいた頃で、そうそうは自由もきかず、資料の開陳や、同好仲間の消息、奇クの噂話、カメラハント女性の情報などの話に終ることの方が多かった。

昭和四十四年の一月半ば、珍しく冬にしては暖かい一日、年始を兼ねて夫婦が訪れてきた。

珍しく、寿子夫人は訪問着の和装で、それが小柄な体に、よく似合い、いつになく化粧も濃いめで、まるで別人の様に美しい奥様然に、私の心は、何故ともなく、ときめいた。

四方山話のうちに、夫人の表情に折々苦渋がはしる。座敷机に向って行儀よく坐ってはいるが、私の眼を窺むようにして、腰をもじつかせている。

私はその時、ある直感が走った。ひょっとしたら、このきらびやかな訪問着に包まれた裸身に、強烈な緊縛の縄を受けているのではなからうかと——。今の田宮恭介なら、それくらいのことはいかりかねないからであった。

「何だか奥さん、苦しそうやネ。縛って来たのと違う？」

と訊ねる私に、流石に眼が高いという風に彼はうなずき、

「エラいもんですなあ、やっぱり分りました

か。どうして分ったんです？」

と、聞き返す。

「だって、さき程から、腰をもじもじさせているし、時々、眉をしかめているもの。ハハンときたわけや。家を出る時からずっと？」

「ええ、車で来ましたので、一ぺんやってみたのです。しかし、縛り上げてから、もうカレコレ、二時間ぐらい経つでしょう。国道が混んでいましたから……」

「そりゃ大変だ、早速解いて上げなくちゃ」「ついでにネ、ウイスキーのオードブルを、あたためさせてきましたよ」

田宮恭介は、さも愉しそうに笑った。今日の彼の手土産は、ウイスキーであった。

部屋にガストロブを引いてあるから、そう寒くはないにしろ、裸になる温度にしては少し低かった。

やっと彼のお許しが出て、夫人は、そくさと、帯紐解いて、訪問着を脱いでゆく。

眼にも鮮やかなトキ色の長襦袢一枚になって、流石にためらい乍ら、腰巻をはずす。

「さあ、早く脱いで」

夫の叱咤で、夫人は思い切って最後の一枚をぬいだ。

着物に不粋な、パンティは穿いておらず、

いきなり、緊縛の裸身が、私の眼に飛び込んできた。愧らうように、夫人は、両手で、さして豊かでもない乳房を蔽って腿をにじらせた。

その乳房は、細引で上下をきつくしめられ薄紫に変色して、ポクリと盛り上り、乳房の割には大きい、エンド豆程はある両の乳首は根元を赤糸でくびられて、まるで乳首だけを別にとりつけたように、乳房から飛び出していた。ウエストを締めつけた細引は、肌に没して見えぬくらいで、乳房の谷間からウエストの細引に垂直に連結された、もう一本の細引は、臍下から股縄となつて、乳房を縛った背で結ばれていた。それぞれの結び目は堅く真結びにしてあり、細引だけに、ちよつとやそつとでは、解けそうにもない。

寿子夫人は、細引で、ポイントをしめつけられた上、更に訪問着という厄介な和服の着付で、数本の紐を使い、帯で締めつけて、柔肌を思いきり虐めつけられて、尚且つ、苦しさに耐えて、私の対面で、さりげなくアルカイックな笑みを泛かべていたのであった。

その忍耐力は素晴らしい。私はしばし、夫人の、細身で小柄な肌に、感嘆の眼を送っていた。



田宮恭介は、洋服のポケットから、サックに入った、小型の鋏をとり出す。鋏の先端は丸くなっていて、メッキの小鋏は、まるで、医療器具のようにピカピカ光っていた。

肌と、細引の合間に小鋏を差し込むと、無雑作に、パチリ、パチリと細引の要所要所を剪ってゆく。小鋏は意外な程、鋭く、よく切れる。乳首の根元の赤糸の一本に、要心深く先端を押し込み、プチンときると、クルクルと糸を廻して解いていった。

続いて彼は、夫人に両脚を拡げるように命じたが、ややあって私に向き直った時、かなり太目のサラミソーセージが、彼の手に握られていた。

「さあ、これで一杯やりましょう」

どうだといわん許りに、彼はサラミを私の眼前に突き出す。その背後で、ヘナヘナと夫人は、崩れるようにヘタリ込んでいった。

昼間のウイスキーの強烈なアルコールが、私達を放恣にさせた。

「一寸、どうですか？」

「ウン、やってみよう」

それは、小春日和めいた、冬の陽射しの戸外での、杏の大樹への逆吊りである。

暖いといっても冬のこと、流石に全裸とは

いいかねて、長襦袢一枚、裸身につけさせ、その上から、絆と太縄で縛る。田宮恭介の眼は、快楽と酒の酔いで、赤く充血し、嗜虐の<sup>ほむら</sup>炎で、吐く息は荒かった。

両足首は、晒布で縛る。長時間に耐えさせる為には、一点にのみ力のかかる、この両足首だけは、柔らかな布で縛らないことには保たなかった。

酔いが私達を物臭さにさせたのか、滑車もとつけず、一番太いロープを、じかに足首を縛った布に、結びつける。

太いロープは長い。

張り出した杏の太枝にロープを放り投げ、数度、試みて、うまく掛かると引っ張ってみて、私は二本のロープを纏んで、両足を地上から離れた。重みで太枝はしなったが、折れる気遣いはない。

心得て彼は、両足首を縛られて佇立する愛妻の体を、軽々と抱き上げる。

じかに摩擦の激しい枝に縄をかけてあるので、独りで引っ張っても到底、上がらない。

二人の阿吽の呼吸が必要であった。

抱き上げる——引っ張る。呼吸を合してのその繰り返しで、夫人のたおやかな、真白い両肢は天を向き、一呼吸、一呼吸、尺一尺と

吊り上ってゆく。

持ち上げた彼の力も、こちらで精一杯であった。素早く、ロープを幹に、しっかりと結びつける。O・Kの合図と共に、彼はゆっくりと、夫人の体を離してゆく。

長襦袢の裾が、腰の辺りから垂れ下がって縛った上半身はおろか、夫人の端麗な顔も蔽い隠してしまう。

その代り、下半身が、初春の陽射しを浴びて、白々と輝き、鮮やかに、私の眼を射るのであった。

しかし、これでは、フォト的にはまずく、数枚撮り終ったあと、長襦袢の裾を両足にはさみ込ませる。さながら、あるべきものを、公表のため、削除、修正したさま、その俚であった。改めて私は、この初春の白昼夢にも似た逆吊りの女体をゆるやかにゆさぶった。

風もなき裏庭に、初春の陽を一杯にうけて夫人の体は揺れる。呻きも洩らさず、夫人はさながら恍惚境に遊ぶ思いで、ゆるりゆらゆらと、被虐の欲びを、全身で噛みしめているようであった。

この逆吊りのあと、彼はまるで憑かれたように、夫人を強烈極まる緊縛の檻の中へ閉じこめてゆく。私の眼も憚からず、彼は酔った



ように、妻に嗜虐の愛撫を加え、それはいつになく度を過ぎた激しさであった。

嗜虐の激情に身をこがす夫妻の為に、私はそっと、離れの居間から、気を利かせて立去っていった。

激情のおもむく処、懼らくは私の想像通りのことが行なわれたらしく、一時間ばかり経った頃、身なりを整えた帰り支度で、茶の間

実績が一朝にして消え、課長を目前にしなから、夫婦の夢は果敢なくなってしまうのであった。

その彼からの手紙が、ヒョッコリ舞い込んだのは、正月のあの日から八カ月も経った夏の終り頃であったが、確か寿子夫人の郷里だときいていた山口県の、日本海側の古い格式のある市から差出されていた。

捲土重来、もう一度、一からやり直して頑張るから、いずれ又、上阪の折はよろしく頼むと書いてあったが、その後、毎年、キッチンと年賀状と暑中見舞は届くが、もう山口県に住みつくのか、来阪の気配もない。

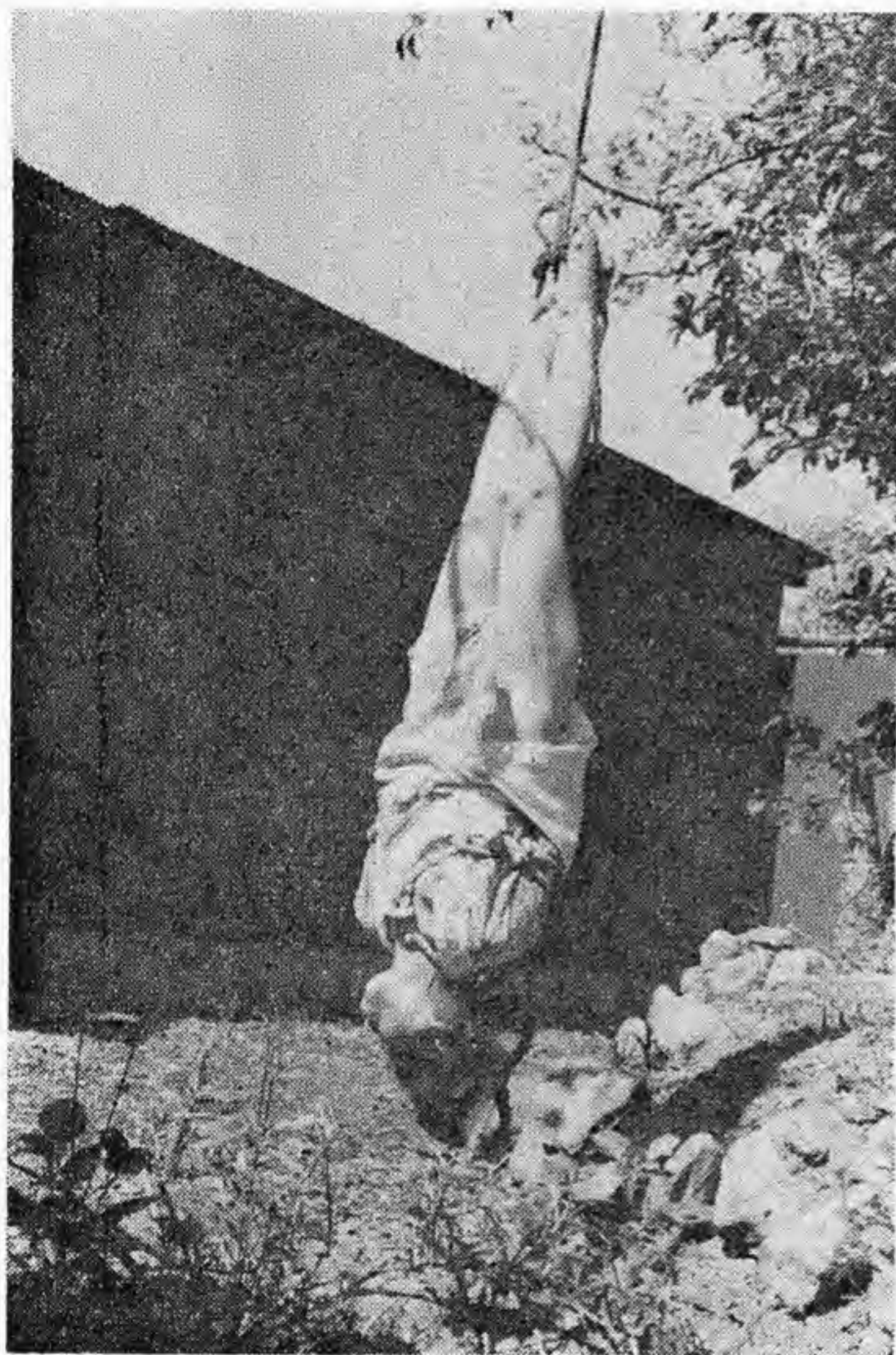
公害と、光化学スモッグの関西より、今では山陰の、空気と人柄のいい土地の方が気にいったらしかった。

で漫然と、テレビに眼をやっていた私に声をかけた彼は、照れたような、それでいて、満足しきった飽和の表情を泛かべていた。

寿子夫人の髪は、今日の訪問のためセットしたてにもかかわらずかなり乱れていた。

幸か不幸か、彼等夫婦とのナマの交際は、この時が最後になってしまった。

ドルシヨックで彼の勤める会社が倒産し、過去十六年間の勤務の



衣食足ってSMを知り小人閑居してプレイを為すという心境も、境遇と生活が変わると、SMへの関心も又、変っていったのであろうか。

私の謂う「緩々」の時期に入ったのかも知れない。執れにしてもSMに關しては梨の礫——。若し君が今も奇クの愛読者ならば、この一節、思い出のよすがと偲んで、プレイの風の便りなど寄越し給え——と、こい願うのである。



## 渡部好美の逆吊りの思い出

SMプレイの夫婦を語る場合、まず私の脳裡に浮ぶのは、渡部光雄・好美夫妻のことである。勿論、過去の交遊では、新宮明夫・洋子夫妻。水野弘・香代夫妻。須磨松男・由美夫妻。増田喜代司・みゆき夫妻。三浦敬一・純子夫妻など、いずれもカメラ・ハントに登場し、今も一応、交友は続いているが、過去数年、私の身边を賑わしてくれたのは、何といっても、渡部夫妻が、その最たるものであった。SMプレイについても、積極、且つ行動的であって、私の要請で、東映のドキュメント映画『性倒錯の世界』にも出演したが、夫婦プレイヤーで映画にまで登場したのは、彼等夫妻を以て、犒矢とするのではなからうか。

彼のSMプレイは、針責めが最大の得意であったが、夫人も又、よく、その針責めに感応し、陶醉し、しばしば私は、彼のその針捌きに感嘆させられたものであった。

注射針三本を糸で束ねて、さながら鍼灸師の如く、女体を針でついばんでゆく。緩急自在の手付、そのツボを心得た責め振りは、必

殺仕掛人の梅安たりとも兜を脱ぐであろうと思う鮮やかさで、これは、一寸、真似手がない。試しに私も、好美夫人に、彼の針を借りてこころみてみたが、忽ち悲鳴をあげられ、痛いといわれては、もう再び試みる気力もなく、その時一度限りで、ついぞ手にしたこともない。針に鍛えられた好美夫人は、更にエスカレートして、遂には、追羽根の、羽根に注射針をとりつけた、投げ針を甘受するようになり、これはドキュメント映画でも御存知の諸賢もあろう。

ついで、彼の試みた責めは、蛭責め——。追々と、蛭滴を殖し、女体と蛭燭の距離を近づける。飼育の結果、夫人はこれも甘受するようになる。勿論いずれの責めの場合も、強烈極まる緊縛が必須条件であった。

魚拓ならぬ、蛭涙をもって、愛寵措く能わざる形態をかたちづくる、これなど、渡部光雄の、面目躍如たるものがあった。

かほどの数々の責めを甘受する好美夫人がムチには弱く、高所恐怖症であったことは意外中意外であった。

窈窕の楚々たる肢態は、犇々と微動だに出来ぬくらいに緊縛されようと、種々の責苦を受けようと、それを被虐の甘い悦虐にすり替

えて、陶醉と恍惚の淵に溺れるというのに、私が始めて試みた逆吊りに対して、彼女は顔面蒼白に变じ、怖い、怖いと、真底から恐怖の叫びを発して、絶句するのであった。

それは不安定で、空間に縋るものもない、地上から身の離れた、高所恐怖症に繋がっていることを、あとにして知ったのであるが、彼女は、ビルやデパートの高い屋上も怖く、東京タワーに上って、気絶しそうになったというのであった。飛行機などは死んでも乗らないというし、遊園地のジェットコースターや飛行塔など見ただけで怖気が走るといふ。

彼女は、私の書くSMカメラ・ハントで、単独、又複数で、最多登場した女性であるがそれだけ、接触する機会が多かったということになる。ハント以外でも屢々出会ってプレイしたが、それは一々、夫の寛大、且つ、絶対信頼の許の行為であった。

昭和四十五年十月号『悦虐の甘き戯れ』で誌上に始めて登場して以来、私の未稿の分も含めて、好美夫人は、まるで輪廻りんねのように、数多くの男性、女性とSMプレイしている。

川路叢子、谷山久美子、森川美紗、村上喜美——、これらの女性同志との複数プレイはいずれ（好美をめぐる四人の女）として、別



稿で書くつもりであるが、唯いつの場合でも好美夫人は、弱々しげで痛々しく、奇妙に庇護したいような気分になり、相手女性の心を無意識に傷つけ、ゼラシーさせる結果になるのであった。

その楚々たる弱々しさ、かばそい肉体で、強烈な緊縛や責めに耐える可憐さが、彼女の身上なのであろうか。渡部光雄の妻として、有夫の女性に、うかつに口に出せぬ、親愛の慕情が、彼女をいたわるのであろうか――。

そんな私に絶大な信頼感を抱いた渡部光雄は「急々」のプレイに日夜耽溺の頃は、前述の田宮恭介と同様、唯一のSMプレイのよき相談相手として、よく電話をかけて来、新手的責めやプレイの構想が熟すると、子供二人を親許に預け、SMプレイの強烈さをみせつけるため、何回となく私を訪問したのであ

た。

増田喜代司が、いつの場合でも鼻責めが伴う如く、渡部光雄も、手を変え品を変えても究極は、緊縛態位の異なるだけの、針責め、蠟責めであった。旨い料理も何度も喰えば飽きる道理で、最初は驚嘆で迎えた、針責め、蠟責めも、度重なると、又かということになってくる。ということは、夫婦で訪問してもSMプレイの主導権は、いつも彼が握ってい

たということになる。しかし彼は、好美夫人を、私にプレイの対象として提供するに、やぶさかでなかった。

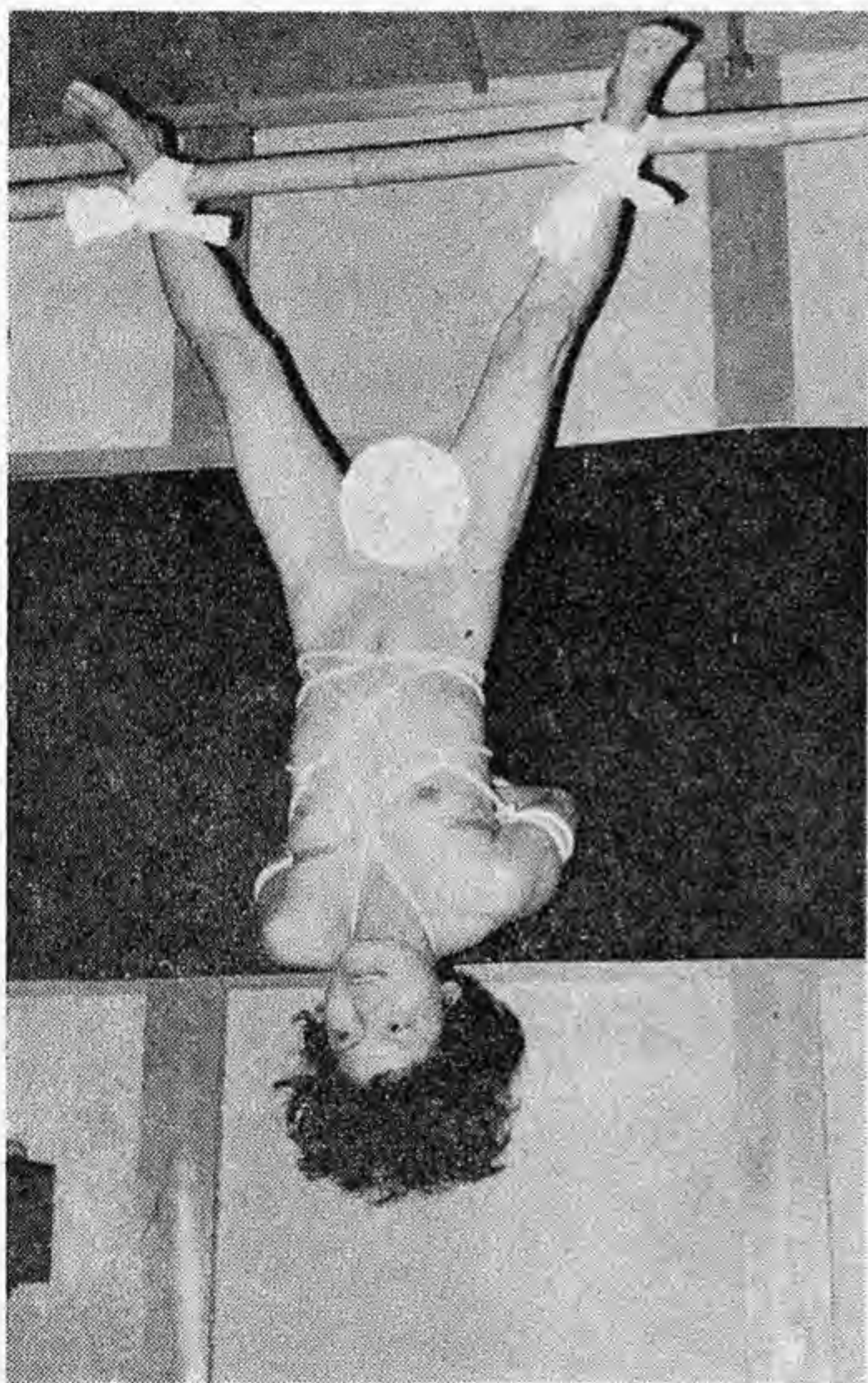
「たっぷりと辻村さんに虐められて、可愛がって貰ってくるんだよ」

と彼は、二人の子供のお守を引受けて、むしろ欣然と夫人を送り出すのであった。

一対一の密室でのSMプレイの状況は、逐一残らず、夫人の口から夫に伝えられる。

憂鬱たるゼラシーを胚胎させ、私とのSMプレイを根掘り葉掘り聞き訊して、彼の嗜虐欲は昂揚し、妻とのSMプレイは激しくエスカレートしてゆく。謂わば私の存在は彼にとって、一種のSMプレイの、刺激興奮剤であったのだ。

過去数度に亘る二人だけのプレイの場合、私はいつも、モーターを選んだ。車を乗入れたらシャッターが降りて、まったくの密室になってしまう





今流行りのアレであるが、幸か不幸か、セックスには申し分なくつくられていても、緊縛プレイ——それが逆吊りとなると、行ったモデルは、どれも、これもふさわしくなかった。体重の軽い好美夫人のことだから、一人でも吊り下げられる自信はあったが、部屋のしつらは逆吊りを拒んでいて、遂に一度も果せなかった。

その願望がやっと果せたのは、彼等夫妻の何度目かの来訪の時であった。

私が逆さ吊りを提唱すると、好美夫人は、真剣な表情で拒んだ。半時間近くかかって、彼女をやっと口説き落したのは、夫の渡部光雄である。

夫人にとっては、逆さ吊りの縄目の苦痛よりも、体が地上を離れて、宙に浮くという恐怖の方が先に立っていたのを、彼女の拒みの口のはしばかり知り、私はその時、始めて夫人の高所恐怖症に気附いたのである。

いやと拒めば、尚更やってみたくなるのが嗜虐者の根性というか、色々になだめ、しかし、奴隷妻は一切、拒否する権限はもたぬなどと、芝居がかりに脅して、夫はやっと妻を納得させる。とはいえ、私の離れ座敷も、残念乍ら天井は高くとも梁はなく、鴨居の上

は壁になっていて、逆吊りにふさわしいところはない。折角納得させたものをと、そこは窮余の一策で、裏庭から移動式の物干台を、エンヤラサと室内に運び込み、竿掛けのパイプの中心が、ごく浅い鈍角になっているのを利用して、ここへ太竹を掛けて吊り下げるところにした。

上半身を亀甲に縛り、太竹にじかに開股の両足首を晒布で縛りつけ、太竹の両端をかつぎ上げて、物干台のパイプに掛けるという手段である。怖い怕いと、好美夫人は唇を慄わして連発する。絶対大丈夫だからと懸命にだめて、いよいよ、かつぎ上げる。軽い体重は、二人の男共によって、忽ち逆さに物干台にかかる。そこに見事な逆吊りのフォームが完成したが、好美夫人の形相は恐怖にひきつっていた。数々の責めを甘受し、被虐に訓練されていても、逆吊りは生れて始めての経験である。苦痛より恐怖が先走っているそのポーズに、私達のカメラは、いろいろな角度から、貪婪に収めてゆく。

静止のポーズが、何となく物足りなくなつた私は、よせばよかったのに、前後に女体をゆさぶり、揺れる女体のスナップをとりたいた気になって、彼女の体に手をかけると、前へ

押し出すように、ぐいと押した刹那、三脚になった物干台の土台が軽く、まるでスローモーションのフィルムのように、女体の重みで平衡を失って、物干台は倒れかかる。

ヒヤッと絶叫と共に、逆吊りの女体が前のめりに崩れ落ちてくる。呀ッと、咄嗟に全身で受け止め、辛うじて落下を防いだものの蒼縋めて彼女は声もなく、恐怖の余り失神しそうになっていた。

「大丈夫、大丈夫。ちょっと、ゆすってみるからね」

といって、ゆさぶった途端、何が大丈夫なものか、倒れかかっては、私も一瞬、度胆をぬかれ、且つは恰好もわるく、これでは、私の大丈夫も、信用してはくれまいと、内心、忸怩たるものを覚えて、バツの悪い逆吊り始末記であった。

しかし、それで反って度胸が据つたのか、その後の好美夫人は、数々の逆吊り、吊り責めにも、よく協力してくれるようになった。

唯、必ずといってよい程、吊った女体から手を離す時、

「大丈夫？ 落ちないでしょうね」

と、何度も念を押すのは、最初の逆吊りの倒落が、余程、身にこたえたのであろうか。



緊縛プレイに、吊りがなかったら、ワサビのない刺身同様と仰有る、大の吊りマニアのドクター氏と、今は取壊されて跡方もない琵琶湖畔のモーター「湖城」で、彼女を吊り責めオンリーに徹したことがあるが、好美夫人は、私が意外に思うくらいによく協力してくれ、延々五時間に亘る吊り責めオンパレードの長時間、じっと我慢の子であったのは、何とも見事なヘンシン振りであった。

強烈に縛って吊り下げた、華奢な細身の体は、いかにも被虐の対象にふさわしく、彼女のマゾ性が、全身から滲み出ているようで、まるで、虐められる為に生れてきたのではなからうかと思われるくらいであった。

この時の状況をハントした、昭和四十七年九月号の『吊りの醍醐味』で、私はその時の模様を、くわしく書いていたが、何分にも、次々と、吊り縛りのフォームが多過ぎて、こ

の号で八十二枚、書いても到底、書ききれず余り長くなるのでカットしたフォームが、かなりあるが、この掲載のフォトは、発表したくてウズウズしながら、ハント文の構成上、惜しくもカットしたうちの一枚である。

この時、私達は、何と四度に亘って、彼女に逆吊りを敢行したのであった。

腰から下を縛って、両手を自由にしてダラリと垂れ下がった逆吊り。

茄子型固体を口に押し込み、革製の嵌口具をはめた、猿轡の逆吊り。

この二態は『吊りの醍醐味』で発表済である。

ゆらゆら揺れる、自由の逆吊りの両手が、何かを掴もうとして、あえなくもがいていたが、むなしく空を切り、彼女は嵌口具の奥で声にならぬ呻きを挙げ、恐怖を訴えていたようだ。

なまじ両手が自由だと、何かを掴もうとしてもがき、反って怖いという。

しからばとドクター氏は、再び降ろして、両手を短い縄で簡単に縛り、両足も、足首に

晒布を巻いただけにして三度逆さに吊りあげた。

手足のみ縛った、最もシンプルなフォームが第三態であるが、逆吊りの苦痛と恐怖は等分である筈なのに、見たためには、も一つ迫力がない。

しからばと、今度は私が、腕によりをかけて縛り上げ、足首と膝頭を晒布で縛り、膝頭の晒布に吊り縄を結びつけて足首通してここで更に結び逆





吊りしたのが、掲載のフォトである。

この二葉の逆吊りフォトを逆さにして好美夫人の表情をみるとよく分るが、いずれも必死の形相で、懸命に恐怖に耐えているのが、いじらしい。

本当は怖くて仕方がないのだ。しかし出掛けてくる時、夫の渡部光雄が、よく協力する様にといいつけ、且つは私達の好みと知っては、我慢に我慢を重ねて、必死の思いで、私達の為すが儘に耐え忍んでいたであろう。

私は、この逆吊りの女体を、ぐいと引っ張って見たが、縄はしっかりしていてビクともしない。試みにソロソロと、左右にゆさぶりを始めた。呀ッと思わず口をついて出た恐怖の叫びを、ぐっと耐え、女体は私の手によって次第に、振幅の度を増して、大きく揺れてゆく。

やや蒼褪めた顔に、じっとりと冷や汗が泛かび上がっている。しかも私は、好美夫人が好まない責めの一つであるムチ打ちを、振幅の女体めがけて、ピシリ、ピシリと、縄を束ねて振りおろしていた。

みるみる赤らむ臀部から腿のあたり。

桃色の線条を交錯させ、空中に揺れる夫人の恐怖の表情に、甘い陶酔がよぎり、今はこ

らえようもなく、縄ムチの走る度に、控えめの呻きをあげながら、確かに好美夫人はエクスタシーに酔っていた。

吊りの醍醐味を満喫するにふさわしいフィナーレであった。

そのあとはハント『吊りの醍醐味』のエピローグ通りである。

この華奢にして従順。嗜虐の激しい願望をみたすため、この世に生を享けたのではないかと思われる、愛すべき好美夫人も、最近は気の毒にも不遇である。

夫の渡部光雄の、若年性糖尿病が次第に悪化し、片眼が失明に近い重症で、仕事も出来ず休む日が続いて、しかも、子供さんの一人が、先天的な心臓疾患で入院するなどして、昨年の秋から今年にかけて、暗い日々の連続のようであった。

収入が乏しくなり、反対に出費は嵩む。

嘗ては、東映のドキュメント映画に迄も欣然と出演してくれた夫婦も、今は失意の生活とあっては、SMプレイに憂身をやつす気になれないのは当然であった。

好美夫人は、子供二人を抱え乍ら、パートタイムの仕事に出ているそうである。

あれほど琴瑟相和した仲も、糖尿に加えて

胃潰瘍気味の、彼の固疾の身では、諸事すべて思いに任せぬ焦燥か、夫婦仲も、SMプレイに耽溺した頃にくらべて、やはり、とげとげしく、先日、病状を心配して電話した時も彼の返事は何となく、よそよそしく思われたのであった。好漢今一度、健康をとり戻して再び以前のような、仲良きSMプレイ夫婦になられんことを切に祈っている。

## 手で吊り下げても吊りは吊り

前述したように、SMプレイのおもむく限に、大いに興趣盛り上り、逆吊りでもやってみたいという段になって、そうした場所や適当な梁や鴨居のない時は、ハタと弱るのである。モーターや、狭いアベックホテルなど、そうした構造になっていないので、私もしばしば切齒扼腕したことがある。

私が折々に使う、離れの間も、梁や鴨居のない部屋であった。渡部好美の時のように、移動物千台を使うのが関の山であるが、これとても、偶々、洗濯物の満艦飾の時は使えない。

昭和四十六年三月号『乳房に咲くほりもの桜』の和泉弥栄夫人が、夫の和泉五郎と、夫



婦揃って二度目に訪れた時も、恰度そんな都合の悪い状態の時であった。

生憎と、末娘の友達が三人も遊びにきていて、離れの間から、四、五米しか離れていない娘の部屋で、キァキァと黄色い声を張り上げて遊んでいては、気になって、緊縛プレイも碌々出来ない。

最初は弥栄夫人と一対一で撮ったが、意馬心猿の彼は、一つは私の緊縛振りもみたく、蒐集の資料などにも興味を魅かれて、慢性的な持病の体を押して、同伴してきたのであった。

娘の友達が帰ったら始めようと、手ぐすね引いて、帰るのを待ち兼ねていても、意地悪く、そんな時に限って、なかなか帰らない。しびれを切らして彼は、まあ見てやって下さいと、弥栄夫人の着物の胸許を押し拡げ、一生涯、消えることのない、乳房の自作のほりものをみせつける。

乳房の乳首を花芯に見立てての八重桜。乳房の谷間の波のほりものは、夫人が痛さに耐えかねて未完であった。

女の急所ともいうべき乳房への素人彫りは和泉五郎のサド性の激しさを端的に現わしていた。そしてもう一カ所――。潜在している

相合傘。

過去の二人の強烈きわまるSM生活は、正に小説よりも奇なりであった。精しくは『乳房に咲くほりもの桜』に書いたが、夫の口から聞けば、それもごくホンの一部で、若しこの日の緊縛フォトに見るべきものがあれば、続篇を書きたかったくらいである。

と、いうことは、裏返せば、その日のプレイは、声を潜め、辺りに気を使つての、誠に物足りぬものであったということである。

もともとこの夫婦は、相互理解の上の、SMの夫婦プレイではなく、暴力によって生涯涯消えぬ、ほりものを乳房に、ほどこされ、やむなく彼のいいなりになったという、謂わば彼の一方的な、強引な愛虐の果てのSM夫婦だけに、今病を得た身であっても、夫はどこ迄も強圧的で強引のようであった。

「さあ、辻村さん。早く、こいつを裸に、ひんむいてやって下さい。行こうといい出したのは、こいつなんですから」

私は困惑の眼で、弥栄夫人をみたが、女の眼はうるみ、それを希んでいる様であった。私は物静かに弥栄の着物をぬがしてゆく。

小康を得て、彼は三日前に退院したというが、どうやら彼の長患いに、体よく放り出さ

れたというのが真相の様である。

退院の夜、彼は待ちかねたように、不自由の体で長い時間かけて、妻を想像の無惨絵その儘の姿に縛り、その逆海老は、肩胛骨と太腿部の骨が、まさに骨折寸前という凄いやつで、苦悶の声を弾かって、彼の最も汚れた、病床中のパンツを口中に詰め込んで、両唇を三コのクリップで挟んで閉ざし、その上から頬もヒン曲るくらいの猿轡をしたという。

耳にイヤホンの古いのをつめて餌で密封。両眼にセロテープをはって、見ざる、聞かざる、いわざるの状態で、機能不全の彼は、長い病院での斗病生活の欲求不満を、一気に爆発させたのであった。

入院中、若しも妻が他の男と、という嫉妬めいた気持も、弥栄が水商売の出だけに心配であるらしかった。私に対して、あのハントの時、示した媚態から考えても、それはなきにしもあらずかも知れない。

背で、両手足を一束にして縛るといふのはなかなか至難な技で、よほど女体が柔軟か、忍耐強くなければ、たえられない縛り方である。

これをやられ、ヘレンケラーの状態で、弥栄は徹底的なしごきを受け、夫はどうやら納

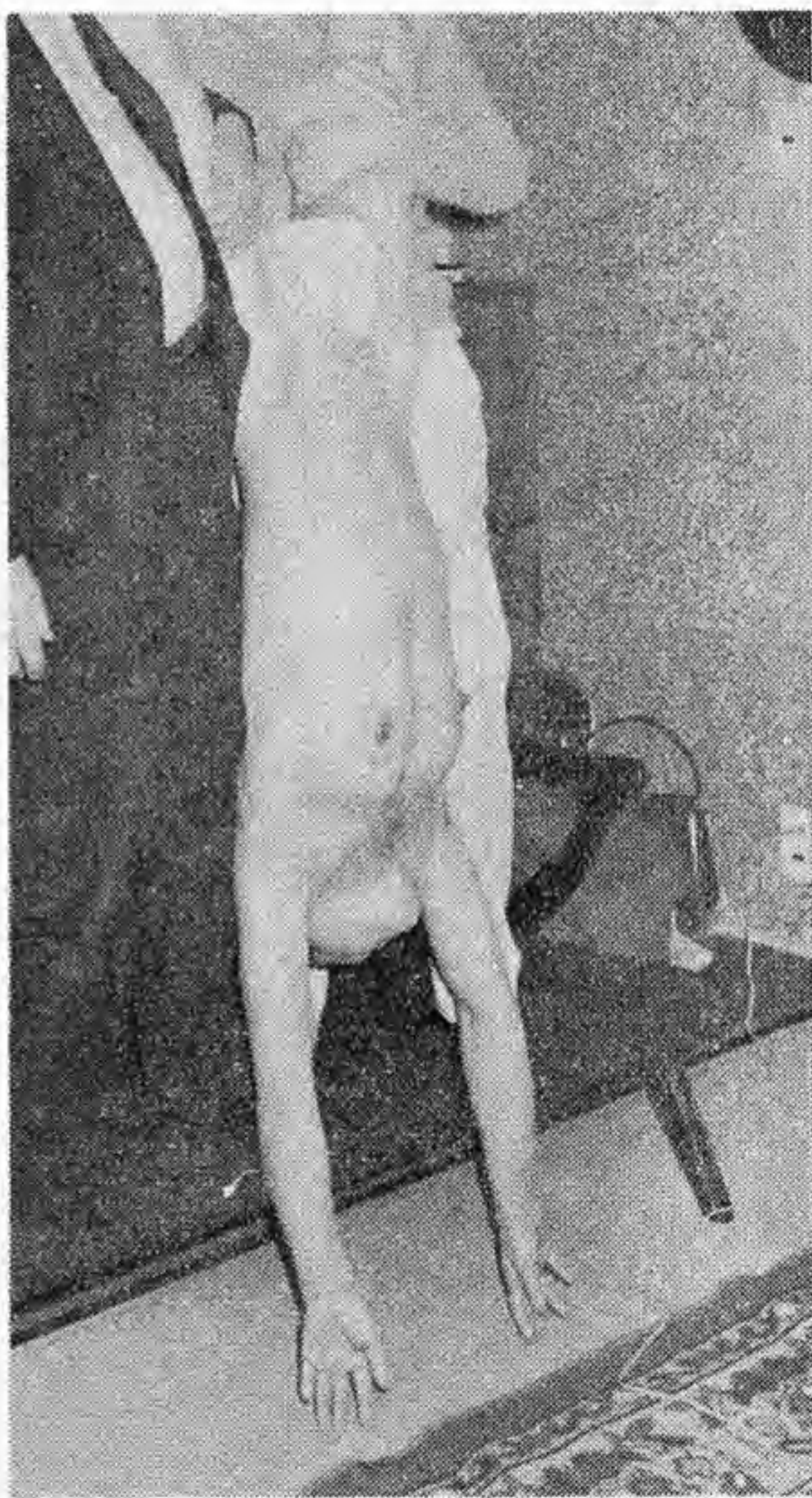


得したらしかった。不倫の有無は分りようもなかったが、そうすることによって、彼自身の気分が納まったのかも知れない。

それは病床にあってそのこと許り執念のように考え続けた男の、当然の行為ともいえだが、彼のそんな自虐めいた告白に、妻は自嘲の笑みをうかべて、こんなほりものだらけの愧かしい体を、どうして曝せるものかと、夫の愚を笑うのであった。

彼が私の家についてきたのも、或は入院中私と何か交渉でもあったかを疑うような、彼の眼の色で、私達の会話の中に、秘かに観察しているようにも受けとれて、私は内心、哀れに思うと共に、幾分は不快でもあった。

疑い出せばきりのない疑心暗鬼——。それは不治の病いのなすわざでもあろうが、過去に、妻に強制し、虐め尽した罪業の酬いのようにも思われるのであった。



そんな微妙な雰囲気で弥栄を脱がした私。「こいつを、片輪にならぬ程度に、思い切り縛り上げて下さい」

と、私をにらみ据えていう和泉五郎。

「どうも気が進まないんだよ」

「どうしてですか」

「だって、娘や友達が、部屋の近くでワイワイいってるだろう。だから気が散って……」

「そうですネ」

洩々、彼もうなずく。

「悪い日に訪問したものですね」

「そうですよ。だからソツと、奥さんの裸でも撮る程度にしましょう」  
「じゃあ、ズバリを撮って下さい。思い切ったクローズアップで」

私はカメラをとり出し

ストロボを装填する。弥栄は、病人の夫の気持を荒立てぬように、彼の命ずる俚、素直にあられもないポーズを次々としていった。それは彼女にとっても、懼らくは羞恥の極みであった事だろう。

やや悲しげに、そして羞らいをこめて、彼女は自らの手にパイプを握った。辺りを憚かって、押し殺す喘ぎ——。

そして、窮極に、逆吊り願望の、彼の懇願もだし難く、ソファに上り、彼と二人で、心労で肉の落ちた太腿を抱えて、逆さに抱えたのがこれである。

縄はなくても、根底にSMの観念が流れている。フォトから、SMの匂いが紛々と伝わってくる思いである。



不満と満足をミックスさせて、和泉五郎は憔悴の身を、夫人に抱えられるようにして、私の車に乗った。駅まで送り、ホームに降りてゆく二人の後姿は、傷つき合ったお互いをかばい合う、愛憎を超越した、いたわりと諦観の念を宿していた。

和泉弥栄と同様、二人の男性によって、開股で、逆さに吊り下げられた佐倉絹子のこのフォトは、昭和四十五年三月号『悦虐に憑かれて』の再録である。

（酔いの廻った二人は私の存在を無視して、いきなり絹子の両足首を左右から掴むと、ヒョイと軽々と逆さに吊り下げ、股裂きの刑のように、ぐっとひっぱりながら、ぶらぶら宙に振り、ゆさぶるのであった。ゴクリと大きな音を立てて安さんは唾をのみ込むと、揺れる絹子に顔を近々と寄せて、女臭を嗅ぐように鼻をクンクンいわせ

さも愉しげにヨイシヨ、ヨイシヨと声をかけてゆさぶり続けていた。——中略——やめてエとも叫ばず、あッ、あッと唖れた声を立てながらも、彼女は男達のなすが儘に任せていた。逆立って揺れる髪につれて、ガクン、ガクンと顎が突き出し、絶え間なく悲鳴に似た絶叫が流れた。

海の男は、SMのプレイを無視した残酷さを持ち合せているのであろうか。プレイの意

味は分らなくても、虐めるという行為が、男達を夢中にさせていたようである。全裸の女を思うままに翫る喜びが、安さんの心を有頂天にさせるのか、彼は夫、昭二の思惑もものかわ、

「おい、手を離すぞう」

と叫ぶと、ぽいと軽い荷物でも投げ出すように、彼女の体を、どさりとタタミへ、はずみをつけて放り出したのであった。ニ

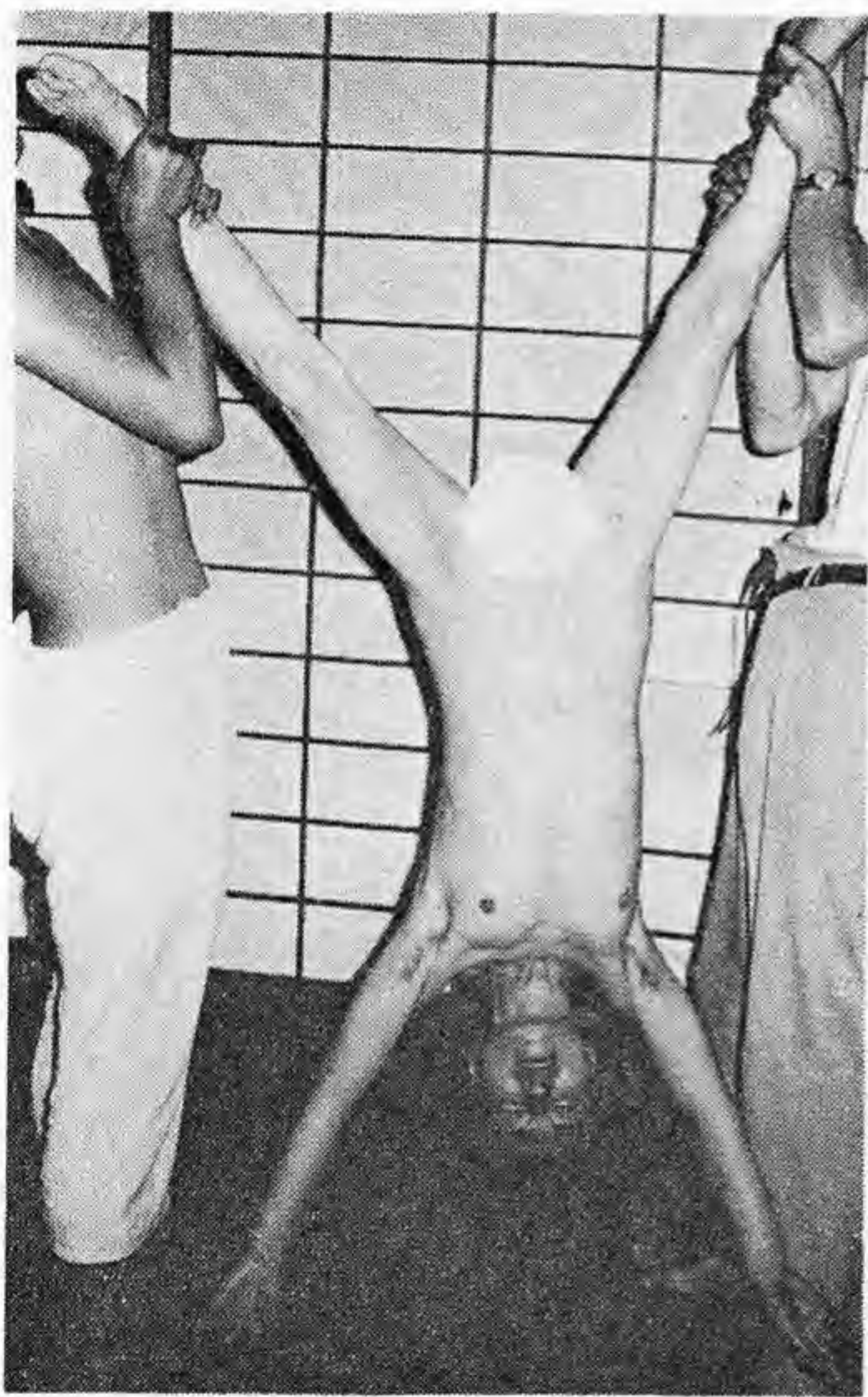
というシーンである。

このカメラ・ハントの一篇、正直いって、かなりのフィクションがある。

が、掲載フォトの描写は大体在りの俚であった。

佐倉絹子とその夫。安さんという近所の夫婦。

これが昨今でいうスワップिंगの仲で、そこへ偶々、私が傍観者の立場でアブノーマルな修羅場を現出したのであった。絹子夫人の夫は若干のSM気があるが、安さんと称





する海男には、全然といってよい程SM気なく、専ら交換プレイ一辺倒の、赤銅灼けした筋肉の塊りのような精力絶倫タイプの男であった。

佐倉絹子の淫乱めいた眼付、華奢でしなやかな牝獣のような体付などは、度が過ぎての憔悴のように思えるのであった。

住居を五〇米ばかり先に新築して、今は廃墟に近い、倒壊寸前のボロ屋敷で、海の男達が折々に集まっては、家人に内密で、夫婦交換プレイに耽溺し、絹子の夫は、安さんの嫁さんだけで満足せず、嫁さんの妹にまで手をつけての、乱痴気振りであった。

「どや、よかったら、おまハンも仲間に入ったら……」

と誘われ、我にもなくその気になったが、こんな屈強な男達に、わが女房の精気吸いとられたら、そうでなくても細いのに、やがては骨と皮とになってしまふと、恐れをなして近づかないようになった。乱色のみだらが、ちっとも罪悪ではなく、愉しいことやと、大っぴろげでやっているのが怖くなって、いっそこんな仲間に平然と加入出来たら、私もひとかどの悪人であるが、日常性の私の理性が邪魔して、どうしても、この邪道の仲間入り

は出来なかった。

恰度、丸一年になるが、去年の八月、近くまできたついでやと、私の家にひょっこり立寄り、眼許はいよいよ猥らになって、眼尻のしわもふえ、双頬だけが、いやに赤く脂ぎって、痩せた体で佐倉絹子は、家内がサイダーを出して立去ったあと、声を潜めて、

「今、仲間が五組にふえましてん。こんなフリーセックスの時代や。残された人生の方が少なくなってきたのやから、精々楽しく暮したらどうですネン」

と、ぞっとするような切長の猥らな眼を細めて誘う。家内がイヤだといってるのだ、と、いって断わると、

「何も馬鹿正直に、奥様をつれてこなくてもいいのよ。知合いの未亡人でも、ハントした女性でも、こんなことに関心もって、好きそうな人、連れてきたらいいの。みかけによらず辻村さんもカタいのねえ」

と、しきりに乱交のすすめである。これと、いった深いたくらみはないにしろ、今の私の肉体では、到底、安さんや絹子のダンナのようないエネルギー、活力ある筈もなく、いざという時に限って意気銷沈する昨今。不特定多数の前で、喋々囁々の元気はなかった。

いずれそのうちと言葉を濁した俣、今日に到っているが、あれ以来、誘いの電話が、つづけさまに二、三度あったが、見込みなしとあきらめたのか、近頃はトンと連絡もない。それでいいのかも知れぬ。愚子危うきに近寄らずか――。

この佐倉絹子のハント記事を書いた頃と相前後して知己を得たのが、大隅という若いサラリーマンである。結婚二年で子供はなく、大阪府下のマンモス団地に住む夫婦プレイヤーであったが、夫唱婦随で、二十五才の若妻敬子さんは、彼のS性をみたす為、よく協力しているようであった。

真面目青年で、ギャンブル、麻雀もやらずに、SMの夫婦プレイが唯一の愉しみという羨ましい生活であった。彼は愛妻敬子さんの緊縛をカメラに納めたが、DPEまではゆかず、数度の文通のあぐく私宅を訪問した時、撮り溜めのフィルム十五、六本を、私を信用して依頼したのである。内心、大いな期待で現像したが、大半はピンボケや、露出の過不足で、満足なものは数十枚もない。しかし、そのフォトでおめにかかった敬子さんは、なかなかの美人であった。折角撮っても、これでは惜しいと、カメラの手ほどきし、カメラ



はやはり、連動距離計付か、一眼レフをすすめ、彼の熱心に負けて、ついでに自家現像の愉しさを説いたら、すっかり乗気になり、ボーナスの貯金引出して、早速、一式整える熱の入れ方であった。

妻を口説き落したから、是非一度、撮って欲しいといわれ、棚からボタ餅の、願ってもなきことと、河内平野にあるマンモス団地の、彼の部屋を訪問する。高層林立、度胆をぬかれるような団地の外観に比して、その一室の狭いこと、所謂二DKと称するやつだが広々と暮している私にしてみれば、何とも息詰まるような一室である。勝手によくしてあり、防音壁か、隣室の物音も聞えないが、子供でも出来たら嘸かし手狭まであらうと察しられる。

二人暮しの愛の巢ならば、これでも結構、愉しいのか、二十七才の夫と、二十五才の妻は、団地暮らしに不自由は感じていなかった。

彼は、新品のキャノンの一眼レフをとり出し、張り切っている。

敬子さんは初対面の私に、やはりか



なりの羞恥を抱いていたが、夫が常日頃、私のことを話していたらしく、いざとなると脱ぎっぷりはよかった。共働きの生活で、彼女は近くの工場の給食の栄養士であった。

彼が妻をさっさと縛り始めたので、つい私は手を出し損ね、緊縛は彼に任せて、シャッターをきる方に廻る。

次々と、緊縛ポーズがとられ、変化してゆく。若く美しい体なので、縄を余り使わず、どちらかというと、羞恥責めの縛りが多い。

エスカレートしてくると、つい露出のものが多くなり、彼は愉しくて堪まらぬように咫尺にカメラを構えて、拡大しての接写ばかりやっている。

掲載のフォトは、この日の逆さ吊りであるが、下半身きってあるのは一寸意味がある。

彼は押入れを開いて、タンスの上にほしもの用の鉄パイプの竿をのせて、一方は座敷机を立て、机の両脚に、左右の高さを平均させるべく箱などを積んで、パイプ竿を渡しかけ、それに敬子さんは両脚をかけて、膝裏に力をこ



めて、ぶら下がったというポーズで、何のことではない、鉄棒に、両脚かけての懸垂であった。

彼の好みで猿轡をはめ、胸を縛った敬子さんを、エンヤラサと、二人掛かりで担ぎ、彼女はパイプに両脚かけて膝を曲げる。パイプの竿が、四十五キロの彼女の体重で、かなりしなったが、何とかタタミすれすれで吊り下がったのであった。僅かの間なら辛抱出来るので、大急ぎで撮りまくる。

こうして下半身、切ってみると、如何にも開股逆さ吊りに見えるが、全身を撮すと、ついタネが曝れるので、こんなフォトになったのであった。

団地のこの部屋の天井はクロス張りで低くリビングとの仕切りの鴨居の上は壁塗り。これでは逆さ吊りは全然無理で、こうした手段も彼が懸命に考えてのことであろうか。



最初の約束で、私の撮ったフィルム二本はすべて彼に進呈してしまった。

数日後、彼の気に入ったフォト十枚ばかりが送られてきた。私の撮ったものばかりである。私はパイプ竿を入れて撮ったのだが、トリミングしたのか、送られてきたフォトは上を綺麗にカットしてあり、その他の緊縛フォトも、露出は一枚もなかったのであった。やはり結婚二年の愛妻であれば、他人の眼には触れさせたくなかったのだろう。或は敬子さ

んの意志が働いていたのかも知れない。

この美しい若妻を撮る機会に浴したのは、この時一回きりで、なまじ自家現像を奨めたのが仇になって、彼はせつせと、妻を縛っては撮りまくり、毎夜、DPEしては楽しんでたようで、もう私に、おハチは廻ってこなくなつた。彼は一度だけ奇クサロン欄に匿名で敬子さんのフォトを発表したが、勿論、顔の分らぬ後姿の緊縛で、二葉のうちの一枚は私が一緒に撮った時のものであった。

彼は脱サラを目指し、目的を果して、現在ささやかな内装インテリアをやっている。この稿を書くに当って電話で諒解を求めたら、快く承諾してくれた。仕事が軌道にのって、彼は今その方に多忙で、SMプレイも御無沙汰勝ちだと、夫婦プレイヤーの誰しもが通るコースを、同じように歩んでいるようであった。去年、女の子が出来たのもSMプレイのブレーキに



なっているのかも知れない。

二人の男性に両脚を抱えられて逆さに吊り下げられているのは、オールドファンには懐かしき、伊吹真砂子である。

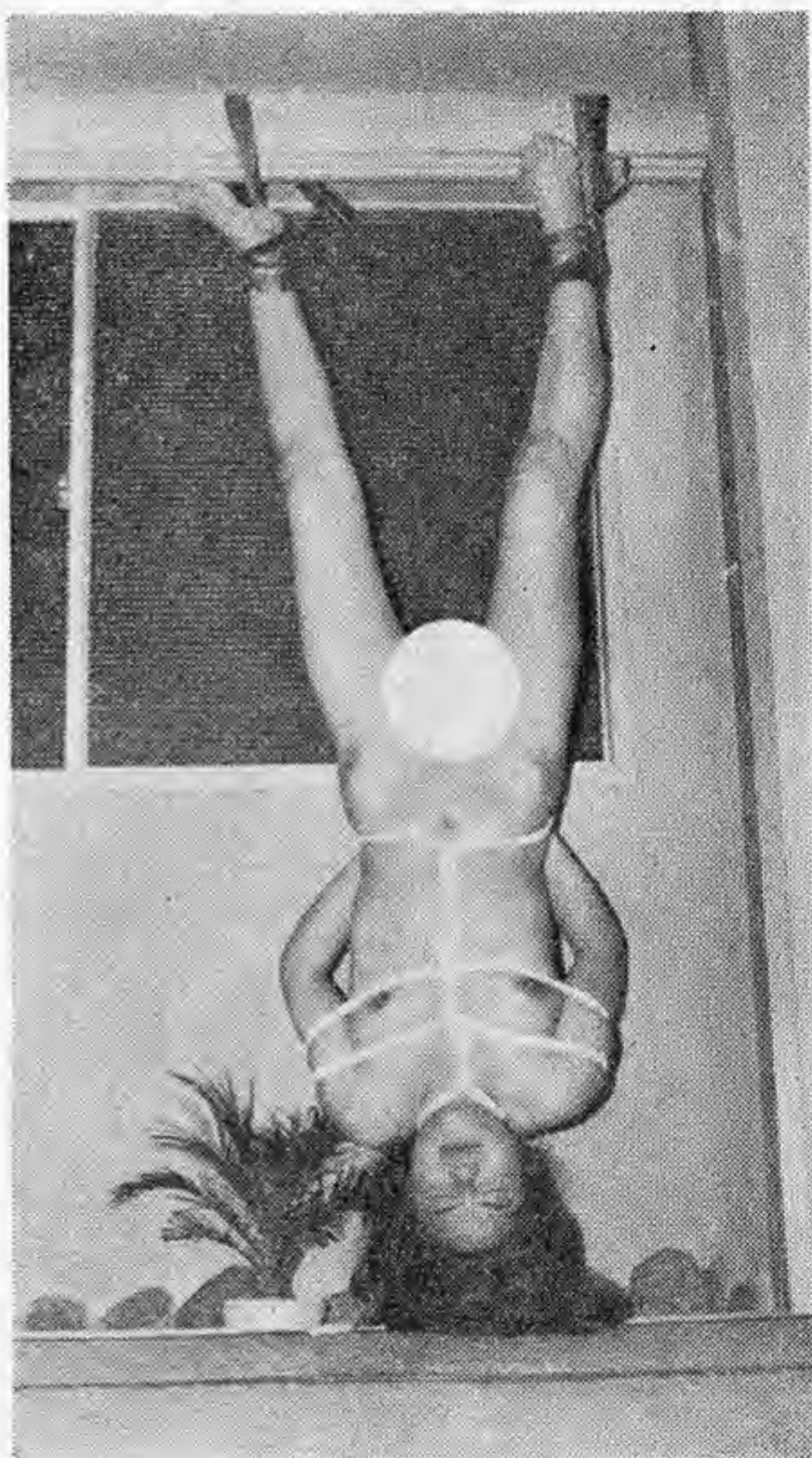
確か昭和三十年頃だったと思うが、これも部屋に逆さ吊りの場所がなかったため、縁側へ連れ出して抱え上げたのであった。当時と

しては、これでも随分ショックなポーズであった。彼女は、かなりのグラマーだったところへ、抱え上げた二人の男性が背の低い方ときているから、精一杯、抱え上げても、彼女の頭は床についていた。

撮影は私一人、カメラは、今は懐かしい、リコーの二眼レフの6×6判である。

恰度この頃、伊吹真砂子は梨花悠紀子とレズの間で、よく私宅を訪ねたものである。

男性の一人は、箕田氏と一緒に撮った「腰元折檻」で、武士に扮装して、よく協力して



あるのを覚える。

## 逆さ吊り

### アラカルト

伊吹真砂子が出たついでに、彼女の唯一の逆吊りを紹介するが、これは昭和四十三年頃の冬、東京から出てきた賀山芳男氏の要請で、余り気の進まなかった彼女を何とか口説き落して、ホテルで行なったものである。

あの頃、賀山氏は谷ナオミや辰巳典子というピンクスターを、次々紹介してくれ、上京のたびに、ハントによく協力してくれたので、私としては、せめても彼の彼に対する酬いのつもりであった。

伊吹真砂子は、奇クのモデル女性の中でも一番の大柄で、グラマーでもあった。私の記憶を辿っても、奇クのグラビアにも彼女の逆吊りは、ついで、みかけなかった様に思う。

梨花悠紀子との数度に亘るWプレイでも、私は撮ったことがなく、筐底を引っ掻き廻しても、彼女の純粹の逆吊りは、この時のプレ

くれた、根っからのSMプレイ好きの踊りの師匠で、もう一人は、伊吹真砂子の緊縛フォトを撮るために、家を提供してくれた家主である。当時は、私の家も四人の子供が育ち盛りで、いつヒョッコリ現われるか分らないという恐れから、踊りの師匠の紹介で、この空家を借りたのであったが、今、取り出して、あの時の緊縛フォトを眺めてみたら、どれもこれもおとなしいものばかりで、この逆さに吊り下げたのが唯一の圧巻であった。十八年前と今とでは、SMプレイも正に隔世の感が

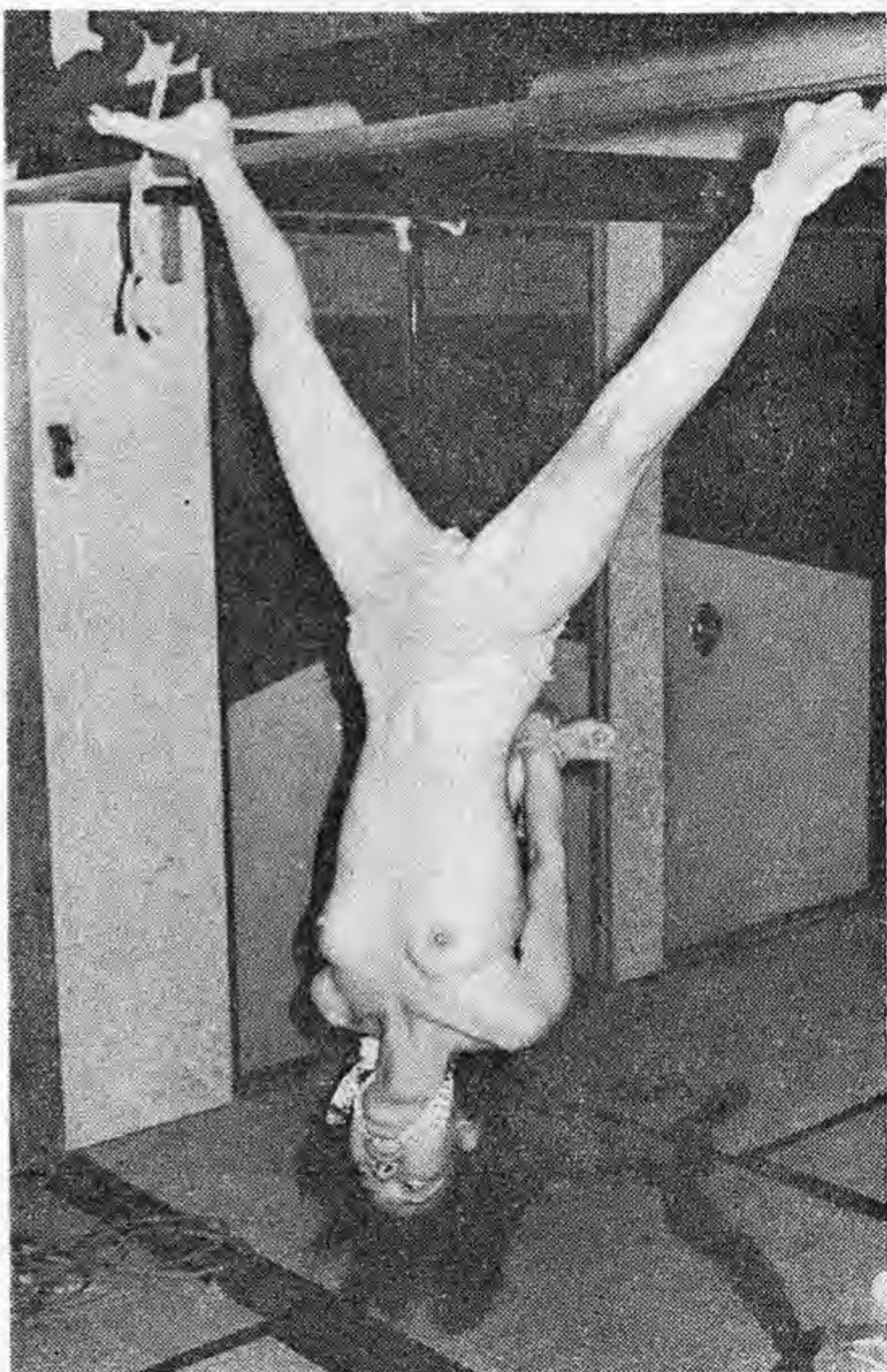


イだけである。

ホテルの窓際に面した、飾り鴨居に私はブラ下がつてみて、折れないことを確かめ、二人がかりで、やっと思いで、開股逆吊りしたが、体重があるだけに、彼女自身も苦しうで、必死に耐えていたが、気の毒になり、精々二、三分足らずで降ろしたが、あの重い彼女を抱き上げていた賀山氏は、もうひたい一杯の汗で、フウフウといったのを覚えて

いる。私は彼女の両脚を縛りつける方に廻ったから、さほどでもなかったが、逆吊りの場合、やはり重い女性は、吊る方も吊られる方も苦手のようである。

この時以来、私は伊吹真砂子には会っていない。彼女自身、自分の年令を考えて、もう緊縛のモデルには、ふさわしくないことを自覚していたようであった。



ごく最近の情報によると、彼女は、長い長いレズの生活に遂にピリオドをうって結婚したということであった。私の知る限りでも彼女のレズの相手は三人ぐらい変っていた。

Sにもなり、Mにもなる伊吹真砂子自身、そうした倒錯の世界の中で、人生の半分を生きてきたが、彼女が、まともな結婚に踏み切った原因は、くわしくは知らない。

昭和四十六年九月号に発表した『化身』の龍珠子は、根っからのマゾ女性で、この掲載フォトを撮った時も吊りに次ぐ吊り責めオンリーであったが、実に我慢強い娘であった。

長身であったが瘦躯で体重は軽い方であった。マゾ気が強いときいていたので、足首を縛るにも晒布など使わず、縄で縛って開股一杯の逆吊りをしたが、かなりの時間よく耐えていた。こんな逆吊りは勿論一人で出来る

わけがなく、この時は塚本の鉄ちゃんと一緒にであったが、私が意欲的に、吊り、吊りと、吊り責めオンリーでハッスルしたのだから鉄ちゃんは、これは私の分野だからと、書く方を私に譲ってくれたのが真相である。

S Mカメラ・ハント『化身』には、塚本鉄三は全然、登場しないが、本当は二人で彼女を縛りに縛ったのであった。この時の逆吊り



フォトが、その後の奇クに登場しない理由は一つあって、上手の手から水が洩れるというのか、カメラの名手鉄ちゃんにして、こうした失敗もあるのか、彼の撮った数本のフィルムは全部ダメだったのであった。現像してみても切歯扼腕したが、原因は、シンクロナイズの接点で、エにするのを、うっかりM接点でとって、同調していなかったのであった。

その口惜しさは、よく分るので、私も一度大塚啓子の女囚の責めを、彼と一緒に撮った時、同じ失敗をやらかし、無念残念やる方な

しといった苦い記憶がある。使い馴れているようでも相手はメカニク的な器械——。一寸のウツカリで、二度とないチャンスを見失う時があるから、カメラマニアの諸賢、くれぐれも御用心である。

『逆吊漫考』の第二部で、ハント女性の逆吊りの種々

相を網羅するつもりだったのに、私は又ぞろかなりのハント女性を残してしまった。書けば、追憶につながり、ついその女性の身辺を述べてゆくので、今回も積み残しを沢山つくったが、稿を改めて、次回に譲りたい。

最後にショッキングなフォトを持ってこようとして、結局、次回廻しになってしまったが『マゾヒスティックアニマル』として、今は他誌にまで、その被虐ぶりを謳われている谷山久美子の、逆吊りは、実に数多い。

彼女にして、始めて可能だった、一本脚の

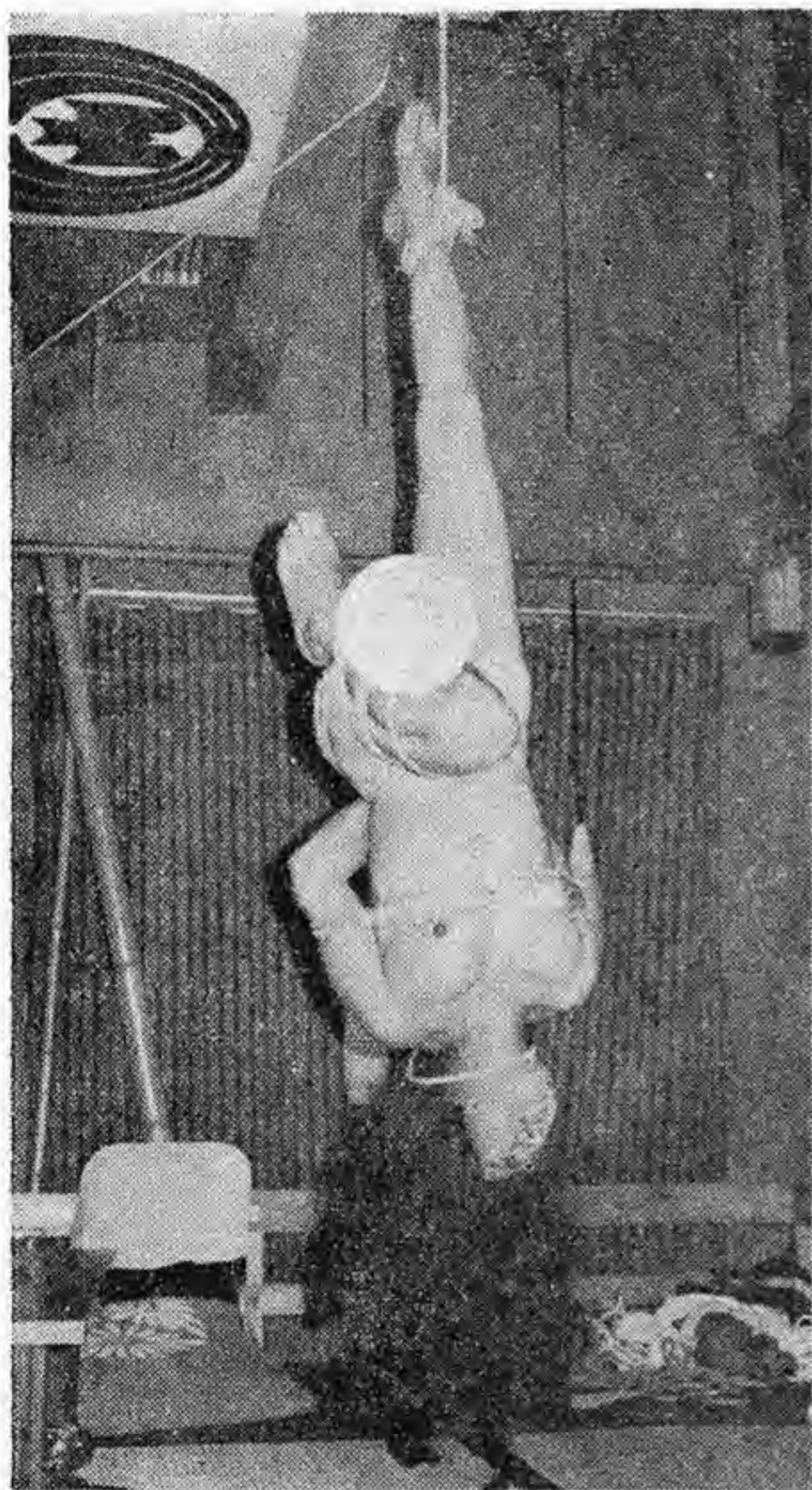
逆さ吊りは、今以て尚、空前絶後である。

掲載フォトでも分る通り、何の誤魔化しもない、一本縄吊りである。

彼女の身辺些事を記述すれば、実に絢爛、多事多端で、到底、残り少ない紙数では書き尽せない。ここでは、彼女の最強烈の可能の限界の一枚に止めて、谷山久美子のバラエティに富んだ逆吊りの数々は次回に廻したい。

筐底をまさぐれば逆吊り女性は、まだまだ数が多い。追憶の花びらの、それらの女性の多幸を祈ると共に、思い出のよすがとするのも、あながち無意味ではなからうと思う。

なぜならば、そこには長短に拘らず日時の流れがあるからである。彼女達にとっても又、私にとっても、すくなくとも現在よりは若い情熱で以てSMの情念を燃焼せしめ、体当りで、のめりこみ、意欲的に実行したプレイの汗みどろの記録なのだからである。これらの思い出を明日の糧に出来ないものだろうか。





# 手記

## 〓浣腸〓 という名の

### シークレット

白<sup>しら</sup> 木<sup>き</sup> 幸<sup>さち</sup> 江<sup>え</sup>

私は、なにかしら、この自分のことを、洗いざらい書いてみたいという、いたたまれない気持ちから、ペンを持ってみました。でも、誌上に載せていただけるなんて、大それた考えを持ったわけではありません。

編集部の皆様、ご一読下さいまして、つまらないと、思いになられましたら、屑籠へおすて下さいませ。私としましては、どなたかお一人にだけでも読んでいただければそれで本望でございます。

私は今年、二十四才になる女です。

生活のために、デートクラブに勤めたり、ヌード写真のモデルをしたこともあります。

私は元来、享乐的な女です。今さえ楽しければ、と思っていました。誰にも知られなくて、誰にも迷惑をかけないのだったら、自分の楽しみのためにだったら、どんなことでも

する女なのです。

こんなことをペンにする私って、露出症のような気がします。小さい時から、自分の裸体を鏡にうつすことが好きでした。鏡にうつった自分の姿を、何時間でも飽かずに眺めていたこともあります。

不思議なことに、私は自分の裸を美しいと思って眺めましたし、それに、手の指、足の指、膝小僧、お臍などを見ると、惚々とする程、美しく見えるのです。それは、鏡にうつして見た方が一層、美しく見えました。

手製のビキニパンティをつけて、こわごわ物干しへあがっては、ひそかに快感を覚えたりしました。私はSというよりもMに近いのだと思います。

同級の女の子が屋上で男の子達に追いかけられ、縄跳びの縄で金網に縛りつけられてい

るのをみて、私もそうされたく思いました。ドッジボールをしていて、ボールを身体に投げつけられて、ハリツケにされた時も、熱っぽい感じがしたことも覚えております。

中学の時は、私は腕白少女でした。いじめられる方が楽しいのに、反対に、いつも、お仕置する側になりました。身体が大柄だったので男の子達も私には一目おいていました。

女の子を校庭の立末に縛りつけたり、お小水を時間中、我慢させたり、変な遊びばかりしておりました。三年生になると女の子同士パンティを交換しあったり、教室の窓から花模様のパンティを、わざとたらししておいたり変な悪戯ばかりしていました。

ブルーディの日は、メンスバンドを机の上にひろげて、これ見よがしに、ナプキンをかさねたり、その日、メンスの者が集ってバンドを見せ合ったりしたこともあります。

高校へ行くようになってからは、私の我慢は通りませんでした。今でも噂に聞きますけれど、成績がよかったりすると、生意気だといって、お仕置されるのだそうです。みせしめのためだといって、裸にされたりする女の子も大勢いましたが、私は幸か不幸か、そう成績はよくなかったもので、そんな目には、ありませんでした。

二年生になって、テニス部へ入ってから、〓浣腸遊び〓というのを知りました。私の学



校では、テニス部やバレー部で流行していたそうです。それは、練習の前に、身体を敏捷にするためにという理由で、上級生が下級生に強制的に浣腸をするのです。

たしかに、浣腸をして、お腹のものをすっかり出してしましますと、身軽になるのは、事実です。授業中でも、生理痛だといって、医務室へ行き、そこで浣腸してもらっている女の子もいました。

体育部の合宿では、浣腸しておいてプールへ入らせ、排便を我慢させるようなシゴキもされました。練習のたびに、浣腸されていると、いつの間にか、浣腸の楽しさというものを知ってしまうのです。

家庭的にも余り幸福でなかった私は、学校でテニスの練習をしている時が楽しく、そして、いつしか、「浣腸」されることにも、羞かしさというものを感じなくなっていましたし、もともと、自分の裸を見せることには、ある種の快感を持っていましたので、他人に浣腸してもらうことは好きでした。

なかには、浣腸されることが非常に嫌いで皮ヒモで手首を括られ、「おケツをお出し」と言われながら、無理に浣腸されている女の子もいました。

高校を卒業して、すぐデパートへ勤めました。背が高くてスタイルがよかったので、すぐ装身具の売り場へまわされました。始めは

そうでもなかったのですが、そのうち、一日中、立っているのが苦痛になりました。周囲のお友達の中に意外と便秘症の人が多いのに驚きました。私は、ずっと「浣腸」をしていましたので、その心配はありませんでした。そのうち、いつの間にか、タバコとお酒をたしなむようになりました。お勤めの帰りお友達にさそわれてビヤホールへ行ったりしているうち、次第次第に、いつしか、それがやみつきになり、やがて一人で飲みに行くようになってしまいました。享樂的な私は、快



楽に対して、自分の意志をおさえることが出来ず、私の給料をあてにしている家庭（両親や弟妹）のことも忘れて、その大半をお小遣いに費ってしまったのです。

そんな時、私は一人の男を知り、その男に教えられて、お金になるというので、ヌードの写真のモデルになったのです。露出症の私にとって、お金になるのだったら、ヌードを写真に撮られる方が楽しかったのです。

一日中、デパートの売場で立っているよりも、いくらましかも知れないと思いました。縛られて写真に撮られたら、どんなにいいかと思ったこともありましたが、そんな機会はありませんでした。でも、ヌードのモデルもやってみると、思った程、収入のある商売でもありませんでした。デートクラブの方がよいというので、半年ぐらいで、そちらの方へ移りました。

十九の年でした。私は今まで守りつづけてきた処女を、お客の中年男に、あっさりとあげてしまったのです。私は病弱の両親と弟妹のために、稼げるだけ稼げという気持で、男から男へと渡り歩きました。

それから私は、ずっと水商売の道を歩きつづけてきました。二十四才になる今日までキャバレーやバーのホステスを中心に、男から男への行脚を断ちきれないでいます。でも、心の奥底深くには、いつも、裸の全



身を人前にさらしたい。縛り上げられて、お尻に、あの浣腸の責めをかけられたいという思いが、しきりにいたします。

私は享樂的な女です。ですから、お金のために、男の人とホテルへ行くということを、別に悪いこととは思っておりません。でも本当に、私を真から楽しませてくれるのは、そんなことではなくて、その男の人から、浣腸されることだと思っております。

バーやキャバレーで美しく着飾っている女性達も、一皮むけば不眠と便秘の人が案外、多いのです。そのいずれもが、こうした女性にとっては、一番おそろしい美容の敵なのですから、女たちが三人四人と集まると、よくこの話が出ます。

私は、自分が男の人から裸にされて浣腸されたいのに、逆に同性に対して、自分の方から浣腸してやる破目になってしまいました。

悦子という私より二つ年下の新米のホステスですが、頭痛がして吐気がするというので聞いてみると、ひどい便秘症なのです。私が毎日、浣腸していると、「やって、やって」と、せがむので、出勤時に彼女の部屋へ寄ってやったのです。

プリプリとした悦子のお尻をむきだしにさせて、五〇CCのガラス製浣腸器でグリセリンを注入してやったのです。同性の私の前ですが、彼女は恥かしがって顔を真赤にして

両手で目を掩っていました。本当は、私が他人にやってほしいことを、彼女がされているということに、私は激しい嫉妬、いや、そんな悦子が憎らしくさえなりました。

私は乱暴に、続けて、五〇CCの浣腸を二本してやりました。私より小柄で可愛いらしいお尻にも腹が立ちました。私は自分では、Sではないと思っています。それなのに、悦子に対しては、いじめてやりたい気持ちが強く起ってくるのを、どうすることもできませんでした。

意地悪く、長く辛抱させ、とどのつまり、その効果が出て、何日ぶりの快便を果して私に感謝している悦子を見ると、また、腹が立ってくる私でした。

今も、私は一人で自分に浣腸をしております。浣腸液を石鹼液、グリセリン、ドナン、食酢、ビールなどと、いろいろ変えてみると、浣腸しているところを大鏡にうつして見るのが、今日この頃の私の楽しみの一つになっております。浣腸したあとの自分のアヌスの状態を見るのは、手鏡にまたがって眺めるのが一番です。

そんな浣腸のひとりプレイをするときは、いつも部屋の鍵をしめておいて、素裸になってやります。私って露出症なのですね。素裸になるだけで、ひとりで興奮してしまうのです。興奮してきますと、どうしても浣腸し

たくなってしまう。

誰にも話しておりませんが、この癖だけはどうしても、忘れることができないのです。

「浣腸」こそは、私にとっては、シークレットです。恥かしいのですが、度々さなる浣腸によって、この頃では括約筋も少しゆるんできたのか、いろんなものが入るようになってきました。いや、いつの頃からか、鏡を見ながら、自分で入れるようになったのです。

はじめのうちは、ボールペンとか、使い古したルージュなんかでしたが、今では相当大きなものまで入るようになりました。お風呂へ入っているときなんか化粧石鹼を、するりと呑み込んでしまうのですから、自分でも、びっくりしてしまいました。

今、私が考えておりますプレイは、鏡を見ながらアヌスに、お化粧することと、牛乳やビール、お酒なんかを、入るだけ入れてみたいということなのです。それが出来ましたら、固型物も入れてみたいと考えております。

後の方も前と同じくらいに許容力のあるものにしたいものと願っております。

私って女は、なんと享樂的なんでしょう。前ばかりでなく、後も楽しみたいだなんて、ほんとうに、あきれ果てた女だと、お思ひでしょう。でも、これがいつわりのない私の姿なのです。



「T A T T O O」について

S

M

落

書

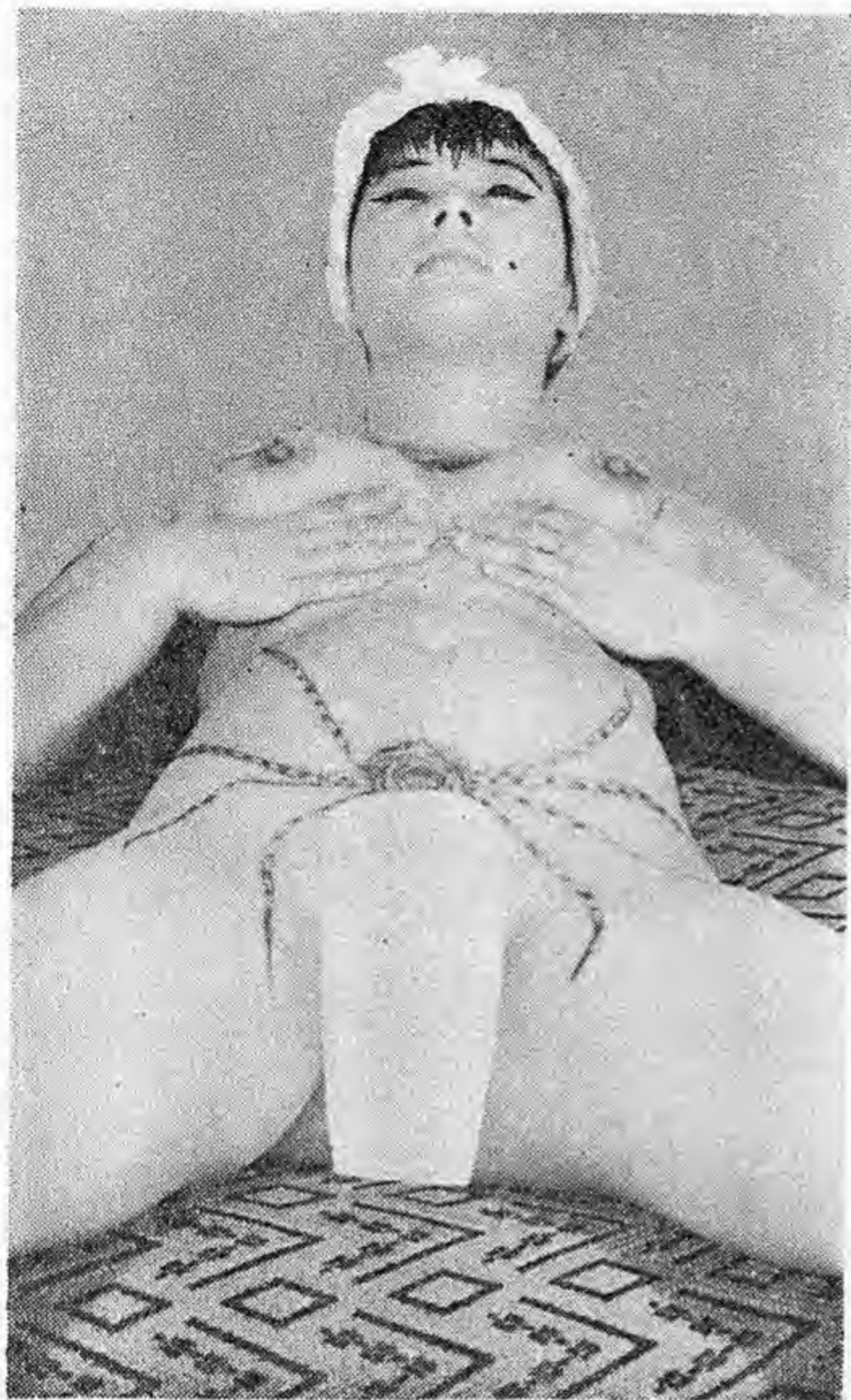
帳

長 谷 田 亀 治

刺 青 偶 感

ヨーロッパを回ってみて刺青愛好家が意外に多いのに驚かされました。大都会のメインストリートには例外なく「TATTOO」の看板を掲げて、刺青師が堂々と営業しており「門前、市をなす」といえばいささかオーバーですが、それに近い繁盛ぶりです。王侯、貴族から一般庶民まで、気軽に刺青を楽しんでいるありさまは、日本では想像もできないことです。

これに反して日本では刺青といえば「悪の紋章」の代名詞のように思われ、事実、一部の刺青人種の暴力沙汰は善良な人たちの眉をひそめさせるものがありました。以前の刺青





禁止令こそ廃止されましたが、それに変わる刺青防止条令を設けている地方自治体も、少なくありません。そのため、刺青をしたくても刺青師がどこにいるのか、探し出すだけでも一苦勞のようです。

小生は刺青については、まったくの素人ですが、今度のヨーロッパ旅行で下腹部にバラの美しい刺青を施した女性と交渉を持って、その妖しい性的魅力を見直さざるを得ませんでした。若くピチピチした女体を鋭い針が突き破り、色素が注入されていく過程は、まぎれもなく性行為を暗示しているのではないでしょう。

数年前、小生は社用で九州東南部のN市に一月ほど出張していたことがあります。このとき隣室に地方回りの刺青師が滞在しており、土地のヤクザたちが刺青をしてもらうため毎日、通ってきていました。宿の女中さんたちが恐いもの見たさに、ときどき現場をのぞかせてもらっていましたが、当時の小生は刺青、とくに男性のそれにはまったく興味がなかったので、勧められても見に行く気にはなりませんでした。

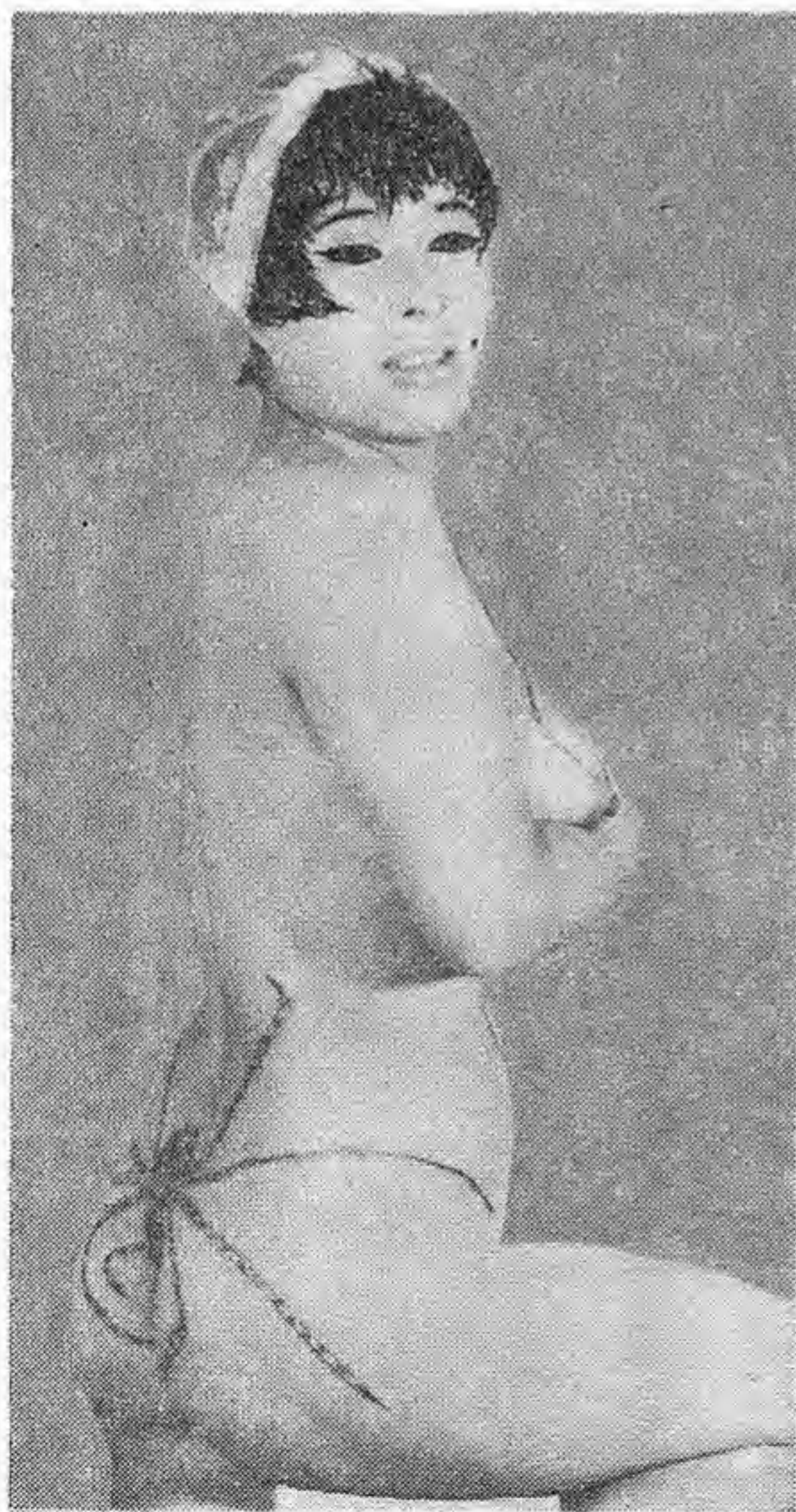
ところがある日の夕方、どたばたと大きな音がして刺青師の部屋から、若くてちよいと

イカす女が廊下へ逃げ出してきました。しかし、たちまち追いかけてきたヤクザにつかまり、殴る、蹴るの暴行を加えられたうえ、元の部屋へ引きずり込まれてしまいました。おそらくヤクザの女だったのでしょう。いくら因果を含められていても土壇場になって、刺青を入れられるのが恐ろしくなったのにちがいありません。

しばらくは『許して……』とか『いやよ、いやよ。止めて……』と泣き叫ぶ声が聞こえていましたが、やがて静かになりました。き

っと縛り上げられて猿ぐつわをかまされたのでしょう。いずれにしても女が全裸にむかれうぶ毛をすっかり剃り上げられたうえ、泣く泣く墨を入れられているのだと思うと、わけもなく興奮してきて、一目だけでも隣の部屋をのぞいてみたいという気持ちを抑えるのに苦勞しました。

女ががっくりと首をうなだれ、目を泣きはらしてヤクザに引き立てられるようにして帰っていったのは午前1時を過ぎていました。その後、女は2週間ほど通ってきました。た

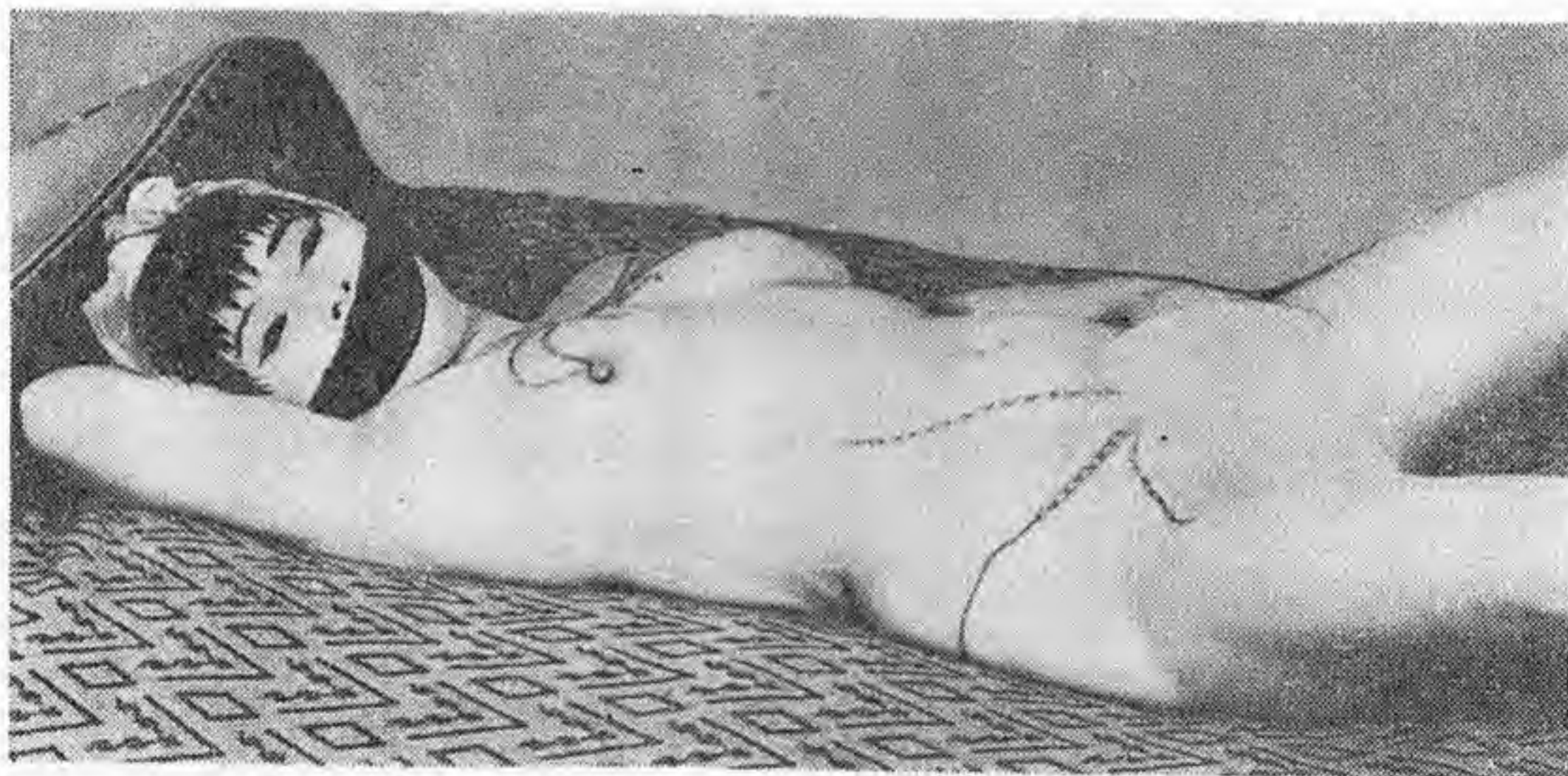




またま風呂で刺青師といっしょになったときそれとなく聞いてみますと、女はこのN市の郊外にある古い城下町Oのバーにつとめているホステスで、やはりヤクザの彼女でした。下腹部から内股、そして臀部にかけて多彩な色素を使って刺青を入られたそうですが、どんなデザインのものか、刺青師はニヤリと笑っただけで教えてくれませんでした。しかし、その淫らな笑いと、場所から考えて人にはいえないような猥褻な図柄だということは容易に想像されました。

ヤクザが女の逃亡を防ぎ、隷属を強いる手段として、無理矢理、その白い肌を刺青だけがするのは、日常茶飯事のようにです。神戸の福原といえば売春禁止法が施行されるまでは女郎屋が軒を並べた赤線地帯でしたが、最近でも「浮世風呂」を利用した売春が盛んです。ここで働く「湯女」たちもヤクザの食い物にされている例が多く、簡単に見分けることができます。

なぜならヤクザに稼がされている女たちはまるで申し合わせたように内股にぴったりと大きな絆創膏をはりつけているからです。おそらく組の代紋か男の名前を彫り込まれているのでしょう。さすがに客の前にひけらかす



ような真似はせず、いろいろ質問を浴びせても、さびしげに笑っているだけです。『なぜこんな美人が……』と驚くような女が多いのも痛ましい傾向です。

女性というものは先天的にMなのか、いったん刺青を、それも人には見せられないような恥かしい箇所に入れられてしまうと、もはやあきらめきって、男のいうがままになっってしまうようです。午後3時から午前6時まで15時間という、かつての「女工哀史」も顔負けするような夜を徹した苛酷なセックス労働を強いられている「刺青湯女」の世界も一つのMの象徴といえるのではないのでしょうか。

経験のない小生にはわかりませんが、なにしろ延べ何千本、何万本という針が生ま身の肌を突き破り、色素が注ぎ込まれるのですから、その苦痛は想像を絶するものがあるにちがいありません。発熱や白血球の減少による体力の消耗―自らの意志で行う場合はともかく、女性が強制的に墨を入れられる場合は、苦痛に加えて、一針ごとに、まともな堅気の世界には帰れないという悲しみも加わって、肉体的にも、精神的にも文字どおり地獄の責め苦を味わうことでしょう。

『女の柔肌に血が噴き出してくるまで針の束





を刺し込み、墨を埋め込んでいく——あの痛さと、辛さを思えば、どんな苦痛を伴った責めでも私は甘んじて受けられる』

本誌9月号で山原清子さんが、いみじくも告白されています。全身にみごとな刺青をされている山原さん。ぜひ体験記を寄せていただきたいものです。

昔の原始的な手彫りによる、朱と墨だけの単純なものから、能率的な電動刺青器を使い無害な各種の色素を注入して、目も鮮やかなカラフルな刺青が可能になりましたが、日本人の刺青に対する偏見だけは一朝一夕にはぬぐい去れないようです。刺青に対して秘かなあこがれを抱く小生も、この世界ばかりは踏み

込むことができず、妻の下腹部から臀部、そして乳房にかけて、大きな女郎蜘蛛の下絵を描き、これを本物の刺青になぞらえて満足している状態です。ヨーロッパのように刺青が大手を振って歩ける時代が、一日も早く来てほしいものです。

### 刺環後日譚

9月号で刺環の魅力について駄文を弄したところ、多数の刺環ファンの方々からお便りをいただき、恐縮しています。そのほとんどが自らの経験にもとずく、貴重なお話ばかりで、同好のマニアが意外に多いことを知って意を強くしている次第です。

小生も先日、拒み続けていた妻に『ダブルウェイか、花卉への刺環か』の二者択一を迫り、とうとう刺環をOKさせました。妻にしてみれば、小生を含めるとはいえ、二人の男性を同時に受け入れるハレンチなダブルウェイには、どうしても踏み切れなかったようです。現在、錘りをかけて花卉の肥大を図っているところですが、成果は着々と上っています。ご参考までに小生が実施した方法をのべてみましょう。

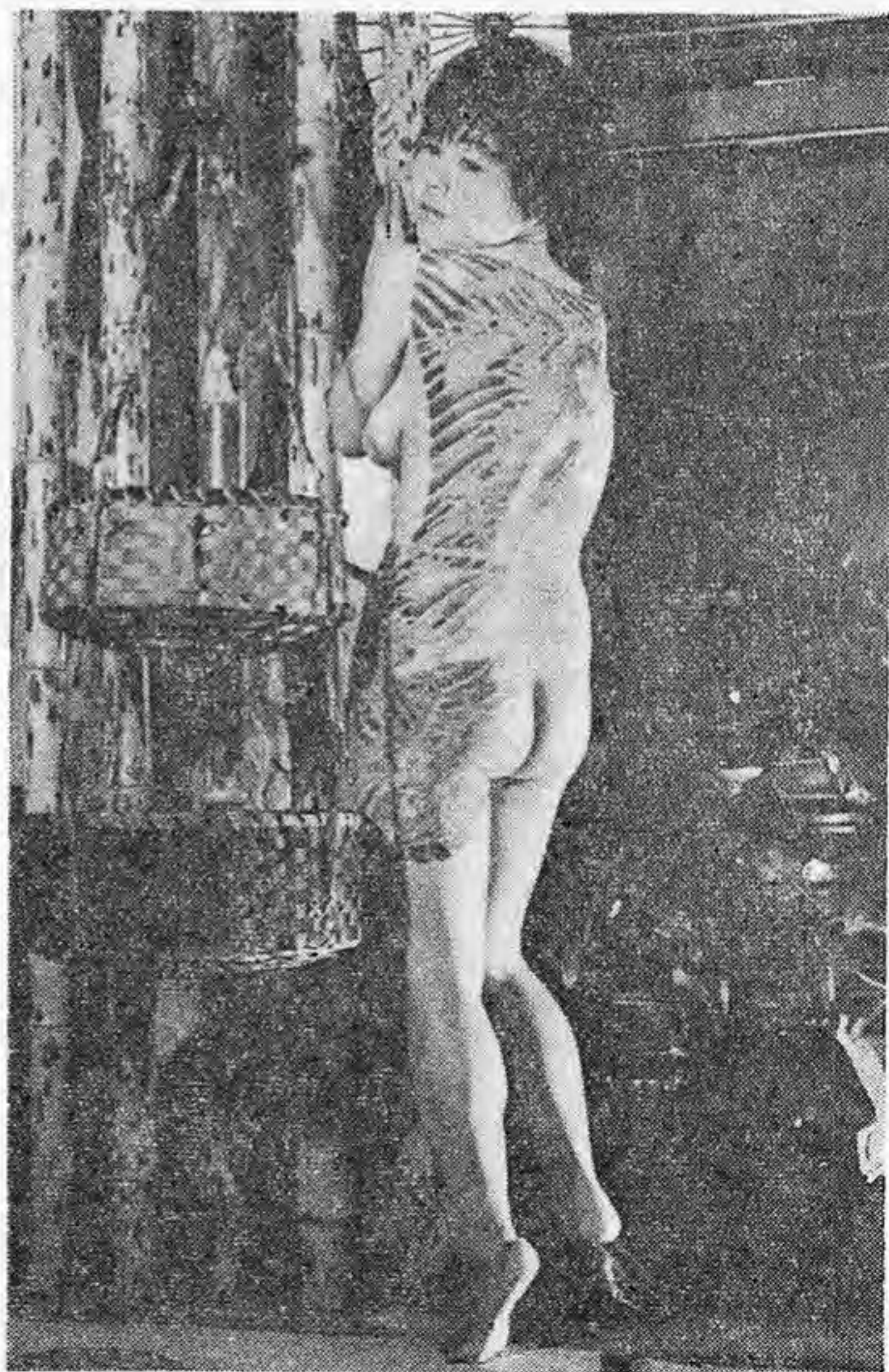


なにしろ、鋭敏な性感帯である花弁を刺し貫ぬいて孔をあけるのですから、どんなに辛抱強い女性でも激痛に耐えかねてきつと悲鳴を上げるでしょう。これではあまりに可哀そうなので、局部麻酔によって感覚をなくすることを勧めします。

小生は塩酸プロカイン2%水溶液の2ミリリットル入りアンプルを手に入れ、左右の花弁に1ミリ・リットルずつ注射しました。こうしておけば、女性にまったく苦痛を与えることなく、落ち着いて穿孔に取りかかることができます。

穿孔には目打ち、錐、アイスピックなどを用いますが、よほど強い力を加えないと、刺し貫ぬくことは、できません。かといって力まかせに突き破ると、手術者の手まで傷つける危険があります。これを防ぐには、花弁をできるだけ薄く引き伸ばしながら、その外側に、そえ板を当て、花弁もろとも、そえ板まで一気に突き刺すことです。

むろん出血しますが、たいした量ではなく間もなく止まります。術後、すぐにリングをはめ込む場合は、金以外の金属では傷口が化膿するおそれがあります。ヨーロッパのように花弁用のリングが市販されていない日本で



は、6・7号程度の18Kの指輪をペンチで切って用いるのも一つの方法でしょう。

小生の場合は細いアイス用のビニール線を通し、一日、数回、左右に動かして肉が巻くのを防ぎました。こうして一週間あまり様子を見て傷口がほぼ癒着してから、鋼製の本格的なリングを装着しました。この方法をとればどんな金属のリングでも、化膿する心配は

ありません。

いうまでもないことですが、刺環に用いる錐、ビニール線、リングなどは総て煮沸滅菌し、さらに抗生物質を含んだ軟膏を十分に塗っておく必要があります。とくにペニシリン軟膏、アイロタイン軟膏などは化膿を防ぐばかりでなく、傷とリング、ビニール線との間の潤滑剤の役目を果して、一日数回の移動



をスムーズにします。マーキユクローム液（赤チン）は傷口が乾いてしまつて、リングやビニール線を動かすたびに出血しますからお勧めできません。

さて花卉を肥大させるための特訓ですが、小生は釣り具店で、いろんな重さの鉛の錘りを求め、刺環に連結しています。ごく軽いも



のをを用いても、驚くほどよく伸びますが、長時間、放置しておきますと、やはり痛みを訴えます。妻の話によりますと『実際にぶら下げられると、見た目以上に重く感じて、とてもつらい』そうです。

S M プレーもよく行いますが、大きく斜め上にオープンして、胴鎖と連結するもの（9

月号35ページのフォト参照）はパンティを着用していても可能ですので、昼の間はもっぱら、この方法を用い、鉛の錘りを連結するのは夜の就寝時から翌朝までにしています。こうした特訓によって、たえず刺戟され、充血しているためか、反応もすこぶる敏感で、閉口するくらい燃え上ります。思わぬ刺環の副作用といえるでしょう。

最初は直立させてわずかに見える程度だったのが、特訓一カ月で、ほぼ全貌を現すようになりました。近い将来には雄鶏のトサカのようなみごとなものに変貌するにちがいありません。あまり大きなものはマガマガしくて病的だときらう人もありますが、小生は発達した花卉に強烈なセックス・アッピールを感じます。また実際、ほとんどの男性が求めて止まないものではないでしょうか。

なお、目打ちを使って刺環を実施している生々しいシーンや鎖を連結しての特訓プレーの数々を8ミリ映画や35ミリのフォトにしていますので、いずれ機会をみて発表させていただきます。

——（おわり）——

× × × × × × × ×



カット・マエダヒオミ



浩が行く (2)

# 病めるヒナゲシ

久留木 栄

(一)

バー「蟻」は重い檜<sup>カン</sup>の扉に、南部鉄のリングをとりつけた会員制のクラブで、ママの有馬広子がおっとりとしていて、口が堅いことから、上流階級の人にも人気があった。

中に入ると、長くて細いカウンターの前にとまり木のイスが五個、そのうしろの空き地つまり、フロアーに小さなボックス（テーブル）が四個、並んでいるだけの狭い店で、ママのほかにホステスが三人。バーテンは一人

だった。二十歳になったばかりのママの妹の鶴子、二十三歳のすけあごのお鈴、それに最年長二十五歳の多賀子。多賀子はママの姪である。バーテンは上田強、四十七歳で名前と正反対の優しい紳士で、この五人がここのメンバーだった。

鶴子は気がよく、鈴はオッチョコチョイ、多賀子は優しく泣虫。それだけに、だれからも愛され、明朗なバーというのが看板。もちろん一匹狼の素浪人の浩も、ここの五人全員が気に入りで、浩はどこよりもここにいらることに安らぎを覚えていた。浩のような現代の

漂民にとって、少なくともバー「蟻」は故郷だったのだ。

このバーの容は防犯協会長の井上光医学博士や友人の医師たち警察署長や、その友人たち、財界人、一流紙のジャーナリスト、大学教授らが多く、客の質は、よかった。上品で豊富な話題で、いつも賑わい、チョッピリ色気がありインテリジェンスにも富んでいた。こんな雰囲気の中で広子は、滅多に歩き回ることもせず、ボックスについてサービスすることも少なかった。だが、だれからも慕われ尊敬されていた。ハニカミ屋で内気でシニッ



クで、無愛想な浩とは好対照だった。

その違うところが気に入ったのか浩は、いつの間にか、宿り鳥が大木に住みつくようにこのバーに、もぐり込んでしまった。浩は顔見知りの者がいないと、ひっそりと止まり木の一番奥で、だれと話すでもなく、笑うでもなく黙々とウイスキーだけを、のんだ。そして、もしちょっとでも顔見知りの客が現われると、すっと消えて、いつの間にか二階の三畳の間にあがっていた。ここにそなえつけられたベッドに寝ころんで酒をのむのが常だった。

この二階には三畳と四畳半があった。このバーができた頃は、ママが住んでいたそうだが、ママが別にすまいを作ったのでいまは更衣室になっていた。本一つ持つでなく、トラंक一つでやってきた浩は、いままそのままでの生活態度だった。どこか別に住居はあるらしいが、それに帰るでもなく、平気で何日も何日も寝て過ごすこともあった。もっとも浩は生来のぶしょう者らしく、服もきたままねたり、ぬぎっ放しにしたりした。したがっていつしかママや三人のホステスが身の回りの世話をやくようになっていた。ママが太っ腹で何もいわないこと、ホステスたちが世話好

きなのをよいことに、浩は女たちに甘えていた。男性的な仕事をさせればカミソリといわれた男も、女と世帯には全くダメな男だったのだ。

そんなだらしないこと、無愛想なところが女たちの母性本能をくすぐるのだろう。いつしか浩は女たちの共通の恋人、いや女護が島のキングになつていった。店のイザコザにはいっさい口を出さず、ぼんやりとそらとぼけていたので、まことに頼りない（キング）だったが、やはり男性がいるというだけで、女たちはどこか心強く、ついくりかえされるぐちや口喧嘩も、浩が顔を見せるだけでおさまるのが常だった。

浩は定職をもたなかった。だから日中でもぶらぶらしていたが、どうかすると、一日でも二日でも、ぼんやりと考えごとをすることがあった。いったい何を考えているのか、全く女たちにはその気持や心が想像もつかなかった。そして仕事となると、急にとび出して行き、三日も四日も帰ってこなかった。そんな時の寂しいこと……女たちは、こうして、いつの間にか浩のペースにのせられ、浩なしでの生活は考えられなくなっていた。

浩は不思議な男だった。女たちにたいし弱

いようで、強かった。三人がかりで浩を「ムシってやろう」という相談がまとまったときも、いつの間にか逆に女たちの方が浩からしてやられるということが常だった。一見弱々しいぶしょう者のどこにそんな魔力がひそんでいるのだろうか……ともかく浩は女たちにとっては都合のよい優しい兄だったのだ。

その浩が、ある日、突然、変身した。変身したといっても、優しさや、ぶしょう者が変わったわけではない。全く偶然の出来ごとから、突然、女たちを縛ることに興味を持ったのだ。そんな矢先「女の一人や二人、自由にでけんで、どうする」と井上博士たちが、たきつけたから、たまらない。浩は図にのってやたらと女たちを縛り回る。その偶然の事件は、酒ぐせの悪い鈴が原因だった。

鈴は酒がすぎると、からむくせがあった。ある晩、鈴は、のみすぎて客にしつこく、からんだ。

「鈴ちゃん、もうおよしよ」

とママの広子が制したが、きかなかった。

顔が青くなり、目がつりあがっていた。

「イヤ！」

と鈴は反抗、あまつさえ、お客の肩に手をかけ、胸をたたきながら、わめいた。お客は



はじめ迷惑そうに、がまんしていたが、さすがに顔色が変わった。ママが、ゆったりと近付いてきた。そんなとき、どこにいたのか、浩が突然、現われ、あっという間に鈴の動作を制すると、ていねいにお客にわびた。傍に来たママが、それをうけ、うまくその場をつくらううち、浩は鈴を押し出し、さっと二階の三畳の間に、つれ込んでしまった。いつものぼんやりした男の面影は、その動作には、みじんも見られなかったが、二階にあがると、もういつもの、とぼけた男にもどって、畳の上におおむけになり、じだんだふむ鈴を、なぐさめていた。

鈴は何かわからないことをわめき、自分で興奮し、手に持っていたオシボリを引きさき始めた。浩は、そんな鈴を、ひややかに見つめていた。鈴は、そんな浩の態度が頭にきたのか、浩に、むしゃぶりついていった。

そんな鈴を、浩は赤ん坊をあやすように優しくいたわり、あやした。鈴もそのため、いくぶんおさまりかけてきた。そこへスタンパーになって店の戸締りをしたらしいママとホステス二人が心配そうにあがってきた。鈴は三人の顔を見ると、再びわけのわからないことをいい、浩に八ツ当たりしてきた。浩のネ

クタイをひきちぎり、上衣をはいでひき破った。びっくりした三人はあわてて鈴をとり押えようとした。その姿勢に鈴はさらに興奮、破った上衣をふり回し、手当たりしだいに物をなげた。その一つがママに当たった。さすがにおとなしい広子も立腹して叫んだ。

「や、やめなさい。鈴！ あっ、ダメ！ ダメよ。浩ちゃん、加勢して、とり押えて。縛ってよ、縛りあげて！」

浩は、それまで無表情に、じっと鈴らの動きをみていたが、やおら立ちあがると、背後から鈴をとり押え、皆と協力して、腰ヒモや洗濯干し用のロープで、後ろ手に鈴を縛りあげた。鈴は縛られながらも暴れた。それでも結局は手足を一カ所にからめられると、どうしようもなく、おとなしくなった。

そんな鈴を心配し、その日は多賀子が家に帰っただけで広子姉妹と浩の三人がその場にザコ寝することになった。床をとり、電気を消しても浩らは、だれも寝つけなかった。縛られた鈴だけが、うなっていたが、いつしかすやすや寝込んでしまった。鈴が寝込むと浩は起き出し、さっそく縄をほどいてやった。頭をタオルで冷やし顔をふいてやり、着物の帯をゆるめてやるなど行きとどいた看病ぶり

だった。ママの広子と鶴子はそんな浩の姿を見て安心したのかトロトロと、まどろんだ。

朝、皆が目をさましたのは午前十時を過ぎていた。心配した多賀子が顔を出したからでママの広子は「あら寝すごしたワ。多賀子ちゃん、あと頼むワ」と、家に帰っていった。

多賀子と鶴子が昨夜のことを話し合っていると、やっと目をさました鈴が、気持よさそうに手を大の字に広げ、大きなあくびを一つした。

「ああいい気持。よく寝たワ。あら、どうしたの、そんなこわい顔をして」

と鈴は、いつものオッチョコチョイの鈴にもどってケロッとしていた。

「何いってるの。何も覚えていないの？ あんた、大荒れよ、ヨッパライの暴力団！」

と多賀子も鶴子もいっしょに、なじった。「いったい、どうしたというの」

鈴は不安げにきいた。

「その手をみたらいいワ。それに、この跡」鈴の手首には鮮かに縄の跡が残っていた。

そして皆の指さす枕元には鈴が投げて割った花びんや、ひきさいたカーテン、おしぼり、浩のネクタイや上衣が散乱していた。

「どうしよう。わたしがしたの？ よっぱら



「っちゃったの？ 覚えてないワ。全く覚えてないの。どうしよう、鶴ちゃん」

そういうと、鈴はワッと泣き伏した。浩はあいかわらず無表情で黙ってみていた。鈴はひとしきり泣くと、浩の前に来て手をついて頭をさげ、あやまった。浩は、その肩に軽く手を置き小声で「もういい」といった。だが鈴は、それでは気が、すまないらなかった。

ママがあがってきた。朝食の用意ができたという。「フロもわかしているので気分一新しなさい」と皆を、さとした。鶴子が、朝食を運ぶと下に行った間に、多賀子が鈴をうながして部屋を片付けた。鈴は、ちょっとした間をみてママに頭を下げ、神妙にあやまっていた。広子は浩の想像どおり、

「心配しなくていいのよ、酒のせいなんだから」

と、おうように笑っていた。

パンと牛乳、卵焼きという軽い朝食だったが、おいしかった。朝食が終わると女たちは一人ずつ、朝風呂に行った。浩は朝風呂は好まない。することもないので、ぼんやりとしていたが、思い出したようにベッドにもぐり込んで、うとうと二時間ほど寝た。ボンと柱時計が一時をさすころ浩は目をさました。

見ると鈴が浩のそばに立っていた。

「どうしたんだ？」

「寂しいのよ。ダレも私を、とがめないんだもの」

「そりゃそうさ、大人だもの」

「だからつらいのよ。浩、子供のころのように、お仕置してくれない？」

「お仕置って?!」

「罰を加えるのよ。ゆうべのようにでもいいの。ゆうべは縛りあげたんでしょ。皆にきいたワ。でも、何も覚えてないの。身にしてみても知りたいのよ、バカさ加減を」

「そう自分をいじめなくてもいいんじゃないのか。君は一晩中、苦しんでいたよ。それで十分だろう」

「でも、気がすまないよ」

鈴は、ぼつんとそういい、うらめしそうにそばにすわっていた。そしてしばらくして、

「ねえ、縛って……」

と、また要求した。

「いやだなあ、オレ……」

と浩は否定した。そんなとき多賀子と鶴子が隣の部屋から顔を出した。

「鈴が、自分からあんなにいつてんのだから縛ってやりなさいよ。少しぐらい思い知らせ

てやるといいワ」

「ヒトの事となると女は、こわいなあー」

「だって、皆、被害者なのよ」

「その気持はわかるが、それだけじゃあ……」

「弱虫!」

「え?」

「浩の弱虫! 男だろ、浩ちゃん。浩ちゃんは子供の頃、女の子をいじめたことがないの? 男だったら、いじめたいのじゃない?」

「そりゃあ、いじめたいさ。だが、それとこれとは……」

「同じよ。女って滅多に男に、そんなことをいうことはないワ。口に出して言うのは、よくよくのことなのよ。縛ってやらなかったら鈴が、かわいそうよ!」

鶴子は直情径行だけに一気にまくしたてた。「そうかな!」浩はそれでもしばらく考えていたが「よし、わかった!」と答えた。

それから鈴の顔を見た。浩が決心したと知って鈴は暗れやかな顔をしていた。浩は女とは思議なものだなあと、そのとき思った。

「ことのついでだからいつておくが、オレ、皆にお願いがあるんだが、きいてくれるか」

浩は起きあがりながら皆を見回した。

「ええ、いいわ」



三人は三様に答えたが、その顔は、にわか  
に緊張した。

「鈴だけを縛るのはイヤだ。きょうは鈴だけ  
にするが、オレが縛りたいといったら、こん  
ど、だれでも、いつでも縛らせるか」

浩の言葉には力があつた。女たちは、さす  
がに、すぐに「ええ、いいわ」と声を出して  
は答えなかったが、皆申し合わせたように、  
かすかに、うなずいた。

「よし、それじゃ、今日は鈴だ」

と浩は鈴をつかまえた。鶴子と多賀子に昨  
夜、鈴を縛ったロープを、とってこさせた。

「鈴、お仕置してくれといったな。罪人がそ  
んな立派な着物を着ていいものか！ 上衣を  
とり、ユカタか長襦袢一枚、それがいやなら  
スリッパだけになるんだ」

浩はキ然といった。二人がロープを持ち出  
す間に、鈴はうなずくと素直にスリッパ一枚  
になった。浩はその鈴の両手をわしづかみに  
し、まず腰ひもで後ろ手に縛りあげた。つい  
でロープで菱縄をかけた。寝台の横に正座さ  
せ、足首、ヒザを縛りあげ、手首の縄と連絡  
をし、その余りで、寝台の足に縛りつけた。  
それから口をあけさせ、鈴が裂いたハンケチ  
類を押し込んでサルグツワをはめた。

「よし、これでいい。お仕置だから、オレは  
とかない。皆も、解くことはならん。自分で  
とけるまで、存分に苦しんでもらう」

といって、ぶらりと外に出た。それから浩  
は、まるで風にふかれた一匹の羽虫のように  
ふんわりと町並を歩き、繁華街の人ごみの中  
に消えていった。残された自由な二人の女た  
ちは顔を見合わせ、それから申し合わせたよ  
うに鈴を見た。そして次の間に消え、しばらく  
くすると、きれいに和服を着かざって階下へ  
降りて行った。

浩が酒をのみにバー「蟻」に現われたのは  
その夜も、スタンパー間近だった。鈴の姿は  
見えなかった。

一、二杯ストレートをのんだあと、多賀子  
に「鈴は？」と聞くと「あのままよ」と答え  
た。浩はあわてた。「バカな！」と言いな  
がら二階にとんでいった。二人のいうとおり、  
鈴は浩の縛ったとおりの姿で縛られていた。  
りきんだせいか顔が紅潮し、組目が膚にくい  
込んで、もがいた跡があつた。浩が縛って行  
った昼過ぎと変わっていることといえば、鈴  
の体の下にビニールの布がしいてあることで  
したまりこそなかったが、プーンと小便のに  
おいがした。あとで聞くと、ママから小用も

そのまましなさいといわれて、そうしたとい  
う。すると広子もこのお仕置のことを知って  
そうさせたのだ。——浩は改めて女のシンの  
強さというものを思い知らされた形だった。

## (二)

浩がおぼつかない手つきで鈴の縄をとい  
てみると、かすかな足音がして、ママの広子が  
あがってきた。浩が思わず顔をあげると

「あら、解くなといった人が解いているの」

と広子は艶然と笑った。浩はテレた。

「あと仕末は私がしてあげるワ。それよりパ  
パに電話して下さい。もう一時間も前に、電  
話がかかったのよ」

「用件は？」

「会いたいって。書斎で夜二時までは待つて  
いるんですって」

「ありがと。それじゃ、まだ時間がある」

と、浩は縄をほどく手をやめなかった。

鈴が自由をとりもどすと、浩はママにめく  
ばせして部屋を出た。鈴は自由をとりもどし  
ても体がしびれているらしく、ぐったりとベ  
ッドにもたれて体の力をぬいていた。力を入  
れたくてもはいらないといった風情だった。



「どう、こりた？」  
 「もうこりごりよ、ママさん」  
 「どうだか。でも浩ちゃん優しいワね」  
 「さあ、わかんない。あの人、こわいところ

もあるの」  
 「たしかにね。何を考えているかわからない  
 のよ」  
 「ママも？」



イメージギャラリー

『諦観促進療法』

四馬

孝

「ええ、そうよ。普通の人と違うでしょ。だから……」

二人がそんな話をしているころ、浩は音もなく井上博士の書斎に入りこんでいた。

井上博士は内、外、精神科の総合病院を経営する医学博士で、山野地区防犯協会長、名を「光」といい、この町の医師会長もしたことがある人物。山根浩の主人みたいな人だった。やせ形で白髪、背の低い、もの静かな紳士だった。六十一歳である。浩の主人みたいな男といっても、浩といっさい仕事の契約をしたわけではない。だが浩が井上博士から仕事をもらっていることは事実である。

部屋に入ってきた浩は、いつものように、ゆったりと大幅の足どりで歩き、博士愛用の机の横にあるソファに、ゆったりと腰をおろした。一言も、しゃべらない。

「退屈の虫退治をしてもらいたいんだ」

そういう博士の声はいつに似ず重かった。

博士は浩にウイスキーをすすめながら、自分は、しきりと考え込んでいる風だった。

「この町に緒方医院というのがあつたのを、君は知っているかね」

「お年寄りの変人先生、人格者の平九郎さんですか」



「そうだ。よく知っているな」

「それが？」

「うむ、それがもう長わずらいで、半年ぐらい寝ている。入院してゆっくり治療させてやらねばと思っているんだが、あのとおりの偏屈者だから、だれも手をかそうとしない。誘ってみたがことわってきた。よく調べてみると、あの気質で人に施していたから、たくわえもないらしい。だから入院できないというのが真相だと思う。それでせっぱつまったのか、見るに見かねたのか、古くからいる看護婦が片手間に治療していた。とにかく、何とかしなければ生きていけない——先生としても、そんな気持で黙認していたのだろう。カゼや下痢の患者ぐらいならと思ったのかもしれない。そうこうするうちに先生の病いは重くなる。誰れに相談する人もないまま、重症の患者をみることになる。肺炎の子供をカゼといたり、結核に腹痛の治療をされたのは患者もたまるまい。緒方先生が人格者だったので、いまのところ、まだ表沙汰にならなかったが、きょう、うちに来た患者は胃かいようにもかわらずカゼといわれたと、立腹していた。その他、色々な苦情が出ている。何とかせねばならないと思っていたら、福島

署長から電話で、このままでは告訴をするという投書が警察にあったそうだ。投書者の住所が書いてないので、署長も困って電話したというのだ。そこで何とか対策をこうじて院長を入院させ、代診を置いて経営を軌道にのせてやらねばと思っている。かといって、いまこのことを直接、院長に言うのは酷なほど病状がよくない。院長に知れず何とか処置したい。いま一つ、奥さんは加那さんといって我々の恩師で細菌学の大家、上田久志先生のお嬢さんだ。医師の娘だけに、もっと医師の内情に詳しいのではないかと思い、そっと当たってみたが、細菌学の先生は学者であって、いわば開業医ではない。深窓の令嬢で何も知らず人を疑うことも知らない。従ってその看護婦に絶対の信頼を置いているそうだ」

博士は、そこまで語って、しばらく間を置いた。浩は、あいかわらず、むっつりとしたまま姿勢をくずさず、態度もかえず、ゆっくりウイスキーをのんでいた。

「その看護婦は山本志津子という。三十六、七才になろうか。看護婦としては働き盛りでカルテから一切、薬の管理までやっている。だから問題がおきても、下手にのりこんでカルテを調べるわけにもいかない。この女を丸

一日、誘拐してもらえば、その間に処置できるのだが……」

「むつかしいな」

浩はポツリといった。

「君もそう思うか」と博士も素直にその言葉をみとめた。

「長く待って下さい」

と浩はそれからウイスキーの手をやめて、冥想した。この男がこんなに考え込むのは珍しいことであった。

だがしばらくして浩は、にやっとした。

浩がわらえば、しめたものであった。

浩の性質を知っている博士の胸にホッとしたものが流れた。

### (三)

翌日、浩が現われたところは山根警察署だった。次長と署長指揮の汚職事件について打ちあわせを終えたばかりの福島署長の前に、浩はまるで、場ちがいの所に来た被害者のような姿で立っていた。

「こりゃ珍しい。あれくらい、一カ月ぶりかな。あのこ、山塩光枝とかいったな、オレの郷里の弟の会社に就職させたが、よく働いて



いるそうだと。池田も、いまはパリパリの警部になったよ」と署長はまず、部下の池田俊次郎事件のその後について浩に報告した。井上博士の紹介で、署長に会い、浩が解決してやった事件である。

しかし浩は、そういうわれてもニコリともしなかった。

「ま、すわれ」

と署長は大きなデスクの横にあるソファを指さし、自らもデスクをはなれ、浩の前に腰をおろした。

浩が無表情で、ゆっくりと腰かけるのを見ながら署長は、あいかわらずの男だなと思っていた。

「で、こんどは何用？」

「緒方医院の件です」

「ああ、あれか。君にお鉢が回ってきたかなるほど、君ならうまくやるだろう。で？」

「投書をかしてもらえませんか」

「わかった」

署長は呼びリンをならした。若い美しい女事務員が顔を出した。

「照ちゃん、お茶を入れてくれ。それから捜査のガンさんに、ちょっとと、呼んでくれ」

照ちゃんというこが姿を消すと、入れかわ

りに、山田武夫という山野ライオンズクラブの幹事が顔を見せたが、署長はあわてて手で制して、「ちょっと失礼」といって浩の前を立ち、署長室の外で二、三、立ち話をしていたが、用件は、それですんだらしい。署長がひきかえすと、あとから若い精悍なつらがまえの男が入ってきた。その男を浩の目の前につれてきて、署長は楽しそうに浩に言った。

「紹介しよう。この男が、ガンさんこと岩元文夫警部だ。うちの捜査課長で柔道四段のモサ。頭も切れる。……ガンさん。こちらは山根浩。無任所大臣というところかな」

署長の紹介が終わると、すぐ岩元は、さもあり直な役人の一面をみせ、

「岩元です」と浩に頭を下げた。浩は岩元をジロツと見た。それからゆっくりと「山根浩です」と、あいさつした。

「緒方医院の例の投書の件だが、あれを持ってきてくれないか。この人が万事うまくやってくれそうだ」

「ハイ」

「それから、君が知っていることを、この人に教えておいてくれ」

「わかりました」

福島はそういうと、あとはまかしたという

顔をした。浩はそれから岩元につれられ、いわゆるデカ部屋に入って行った。多くの顔付きの悪い連中がごろごろしている中を、浩はにこりともせずに通りぬけ、一先ず奥の課長の机の前にすわった。岩元警部は、そこから一通の手紙を出し、浩に渡した。

「相手にわからぬよう調べろといわれていたので、駐在にもいわず、そっと当たってみたが、不平をもっている患者もかなりいるようだ。早くテを打った方がよいと思うが」

「わかりました。さっそく、やりましょう」

「どうする？」

「乗り込んで行って院長を入院させ、立派な代診をおいて、明朗な運営ができるようにしましょう」

「そううまくいくかな」

「さあ、どうでしょうか」

浩は、とぼけていた。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」急に岩元警部は声を出して笑った。そして急に「暴力団を丸めこむくらい朝めし前の君だから、軽い、かるいだろう」といい、二係長の熊井三次警部補を呼んだ。浩は、そこではじめて、自分が山野警察署の中で、かなり有名になっていることを知った。



「熊ちゃん、山根浩さんだ。みかけは、ぶっきら棒だが、こわいんだよ」

と紹介した。

「緒方医院の処理をするそうだ。協力してやってくれないか」

といった。熊井は「わかりました」と、すなおにいい、浩に向かって「私で何か役立つことがありましたら」と話しかけた。浩は、ゆっくりと「医師法違反と詐欺罪の構成のとで、くわしく聞きたいのだが」と答えた。

熊井は浩を取り調べ室に案内し、六法全書などを持ってきて、浩に納得がゆくまでゆっくり説明してくれた。したがって浩が、そこを辞したのは、もう夕ぐれも近かった。

浩は帰りに記者クラブの前をとおりかかった。そっと中をうかがってみたが、だれもいなかった。それをよいことに浩は中に侵入し東西新聞の紙袋を一枚と机の上にちらばっていた東西新聞社会部東弘太郎という名刺を失敬した。それからゆっくりした足どりで外に出ると公衆電話ボックスに入り、緒方医院に電話をかけた。

警察の調べによると、山本志津子という看護婦は意外に年が若く三十二才。引きあげ者の子供で海千山千のしたたか者。独身で、県

の看護学校を二番で出たという。緒方医院には花江マリという二十才になるお手伝さんもうるという。浩がそんなことを考えていると電話がかかり、若い女の声がした。

「東西新聞社会部の東というものですが、緒方医院ですか」

「はい、そうです」

「看護婦の山本志津子さん、いますか？」

「はい」

「あなたですか？」

「いいえ、ちがいます。替りますから、ちょっとお待ち下さい」

女は多分、花江マリだろう。しばらくすると「山本ですが」と落ちついた声がした。浩は再び偽名を使った。

「東西新聞社会部の東記者です。少々お聞かせ願いたいことがあるのですが、よろしかったら、ちょっとそこまで御足労願えませんか？」

「どんな用件でしょうか」

「投書がきましてねえ。恐らくだれかのいやがらせと思うんですが、警察でも不審に思っていたようです。緒方先生はおからだがよくないとのことと、ともかくあなたにおたずねしたいと思って」

「わかりましたワ、すぐ参ります」

「それじゃ、いまから三十分後、あなたの家の前に東西新聞の車を走らせませう。それまでに準備して下さい。車は、黒のセドリックです。病院から百メートルほど西側の道路に駐車してありますから」

「わかりました」

山根はそれで電話を切った。それからすぐ井上病院に電話を入れた。

「あ、博士、浩です。五分後に警察の前にクロ塗りのセドリックをお願いします。それから防犯剣道大会のときにかりた東西新聞の小旗があったでしょう。それをセドリックのポールにつけておいて下さい。それから約三十分後に、紫水館に彼女を案内します。その離れを予約しておいて下さい。山根浩こと東西新聞社会部記者東弘太郎ですから、よろしく。あとはまた電話で——」

浩は一方的に、そういつて電話を切った。

待つほどに車が現われ、顔見知りの運転手がにやっと笑った。井上博士の愛車の前に東西新聞の社旗がひるがえっているのを見て浩ははじめてニヤリと笑った。それから山本志津子と待ち合わせる道路に向かって車を走らせた。浩が指定の場所につくと、白い看護婦の



制服の上にイキな羽織をひっかけた美貌の女が立っていた。浩が近づき

「山本さんですか？」

と聞くと、かすかにうなずいた。

「東です」と浩は、わざと名刺を出して相手に渡し、車に案内した。

「お忙しいときにすみませんね。しかし問題は急を要するので、それに人にきかれても困りますから、社で使っている旅館があるのでその離れを借りておきました。ここから車で五分のコースです」

と浩はいい、山本志津子を紫水館の離れに案内した。

紫水館では経営者の山中修治と支配人の人見悟が出迎え、案内してくれた。それで志津子は、すっかり浩を信用してしまった。

離れにつき、お茶が出ると、人見がカギを浩にあずけ「では、ごゆっくり」といって出ていった。こうして浩は、やっと本論に入ることができた。

「投書は、これです」

と浩は、昨夜、井上博士から内容をきいたあと、蟻の鶴子に代書させたニセの投書を手渡した。志津子は、それを見て

「ひどい中傷ですネ」

と平静な顔をして、押しかえした。

「警察に、こんな投書もきています」

と、浩は捜査課長から、あずかった投書を手渡した。

志津子は、それを見ながら、

「どうして、こういうじめるのでしょうか」

といった。それから浩に、病院長の病気のこと、それをかくしながら、病院を守る自分の苦しい立場を、るると、のべ始めた。

浩は同情したふりをし、巧みにあいづちをうちながらも追及した。話が一段落つくと、

浩は自らその患者にあったこと、医師会や健康保険組合に行つて調べたことなどを語り、

「私は志津子さんのやっていることを責める気はありません。しかし警察の岩元捜査課長らの話によると、明らかに医師法違反になるというし、場合によっては詐欺になるそうです」

と追いつめた。

「詐欺に？」

「そう。あなたの場合、医師の免状を持たないことも自分でご存じだ。だから、あなたが医療行為をすることは、患者をだまして金をもうけることになるということですよ」

「そ、そんな、だますなんて！」

と志津子は絶句した。

「そんなつもりじゃなかった……」

と浩の前の机の上に泣き伏した。浩はその背中をさすってやりながら、志津子のからだの感触を楽しんだ。志津子は意外と肉づきのよいからだだった。女の体臭と髪油のにおいにまじってホルマリンのにおいがした。

しばらくそうされるままになっていた志津子は顔をあげ、浩をにらみながら

「それを新聞にお書きになるのですか？」

「そりゃ商売ですから書くことになるでしょう。ここに来るには、上司にも相談しています。だから一存では、いきません」

「そうですか……新聞社は血も涙もないのですね。この私に死ねというわけですネ……」

「え？」

「死ねというわけですね……」

「死ねと！」

「そうですワ。こんどのが表沙汰になったら、私のしたことはなにもなりませんワ。緒方医院も、もうおしまいです。私は、どうなってもいいのですけど……もう生きていられませんわ」

志津子は、いささか、ヒステリックにいった。そして浩の手を、にぎった。



イメージギャラリー

『実験用生物』

マエダ・ヒオミ



「困りましたなあ！」

浩は、別にその手をはずそうとはせず

「ともかく顔をあげて下さい。私だって、何もあなたを、そんなにいじめる気はないんで

す。……ただ社会が」

「社会がどうしたというの。社会正義のためとおっしゃりたいのでしょうか。私は人殺しはしませんでしたワ。むしろ私がしたのは人

助けじゃありませんか。その私に死ねという東西新聞は、そんなつめたい新聞ですか！ 社会部記者というのは、血も涙もないのですか！」

「困りましたなあ！」

「ともかく書かないで。ね、お願い。このとおり、おがみます。あなたのいうことなら、なんでも、ききます。ね、書かないで」

と志津子は手を合わせて浩を、おがんだ。

「わかりました。ともかく志津子さんの気持は、わかりました。それじゃちょっと待って下さい。社に電話してきます」

そういつて浩は志津子をそこに残して、外に出た。別に社に電話する必要はなかった。浩は志津子という女が思った以上に、しっかり者であることを知った。それだけに、いまが一番大切だと、胆に力を入れないわけにはいかなかった。

(四)

二十分ほどたって浩は引きかえした。志津子は神妙にすわっていた。ゆっくりとその向かい側にすわると、浩はしげしげと志津子の顔をみた。鼻すじがとおって卵形、まゆとま



ゆの間が広く、黒目がやや淡く、幾分エキゾチックな顔をしている美人だった。この顔が白い看護婦の制服に、よく似合っていた。

「で、どうだったんですの？」

志津子が、まず口を切った。

「いっさい、僕にまかせるそうだ」

「ほんと？」

「そうだ」

「そう」

そういうと志津子はホッとしたような表情を見せた。この瞬間、浩は勝ったと思った。

「書くも書かないも、君しだいということになるな」

「わかりました。もう何もいうことはありませんわ。あとは、あなたにおまかせします。

生かすも殺すも存分になさいませ」

「おやおや、えらく度胸をすえたものだな」

「だって、この期に及んで、じたばたしても見苦しいだけでしょう」

「そりゃそうだな」

「早く決めて下さい」

「それじゃ判決をいおう。書かないことに決めたよ」

「まあ！　ほんと？」

志津子は思わず声の調子を変えた。

「ああ、君には、まけたよ」

「そう、うれしいワ」

「そりゃ、君はうれしいだろう。だが僕にはかわりのないことだ。じゃきょうは、これで失礼しよう」

「もう帰るの？」

「いやか」

「何となく気がひけて」

「どうだか。志津子さんといったな。気にいったよ。志津ちゃんといってよいかしら」

「いいわ」

「きょうは、これで退散するが、あす、もう一度、あってくれないかな」

「あす？」

「あすがいやだったら、今夜でもいい。オレは一杯のみたいんだ。つきあわないか——」

「そうね」

志津子は、しばらく考えた。そして

「今夜なら、いいワ」

と答えた。

「OK、じゃ八時半に迎えに行くよ」

「ハイ」

約束をかわすと二人は席を立った。その時浩は、これで万事OKという気がした。一方志津子は、自分の気が通じたと暖かい気持ちに

なっていた。

その夜、浩は最初、志津子をバー「カトレア」に誘った。ここはクラシックを聞かせる珍しいバーで、女性客も多かった。志津子は藤色のワンピースに身をかため、いかにも若い職業婦人らしく、さっそうとした、いでたちであった。酒はつよいらしく、コークハイを作ってもらい、ダブルでのんだ。酒が回ると志津子は浩を

「東ちゃん」と呼んだ。

浩は、いろんな名をよばれるのに、なれていた。顔を知っていても名前は知らない人たちばかりだった。マダムの里枝も「まあ珍しい」と大歓迎はしてくれたものの名前は知らなかった。ふらりとやってくるのでフリーさんと呼んでいた。志津子は、それを東なのでフリーさんかと、感じがいていた。

浩は酒が強かった。酒におぼれることはなかった。そこでしばらくのむと、だまってそこを出、久しぶりに宇都木に行った。マダムの郁子は「まあ珍しい、友常さん」と、いった。その名に志津子は、びっくりした。浩はそんな志津子を、にこにこ笑ってみながら「いろんな名前を使うのでネ」



と、とぼけて見せた。

浩は、そこにも長く、いなかった。二人で肩を並べるとネオンの町を、ゆっくりと歩き回った。繁華街をぬけると、公園があった。そのベンチに腰をおろし、

「好きだよ」

といった。

「私も」

いつしか二人の口が、かさなった。キスをしてみて浩は、志津子が、なかなかのテクニシャンと、わかった。しばらく二人は抱きあって動かなかった。

「あの場で、君を口説きたくなった。しかしそうしたら男じゃないと、いままで、がまんしてたんだ。わかるかい？」

「わからないでもないワ。でも私が、こんな気になったのも初めてよ」

「お互いにきょう初めて会った客だからな」

「初めてでも、気があえばそれでいいのよ」

「そりゃそうだね」

浩は、志津子をうながすと近くの旅館に消えていった。旅館は山水荘といった。ホテルで浩は予め手を回しておいた。だから番頭が出迎え、そっと一室に案内してくれた。

「初対面で、こんなところに案内する記者を

けいべつするかい？」

「ううん。今日のあなたのやり方、すばらしかったワ。いまどき、こんな人がいるのかと思ったワ」

「お世辞か」

「ほんとよ。だから書かれても仕方ない、と思ったの。そしたら度胸が、すわったの」

「なるほど、それが逆転のホームランになったわけか」

「まあ！」

「いや、それが尊いんだよ。ところでこんどはオレの頼みだが、君が緒戦で勝利を収めたことを認め、二次会ではオレの好き勝手にしたいんだが！」

「まあ、勝手な人ね」

「くよくよしている人より、いいだろう」

「そうね。あなたにかけたのだから仕方ないわ」

「おやおや、からめ手からきたね」

「しかし、どうして、いまごろ、そんな事をいうの。好きな女を好きなようにするのは男の特権じゃない」

「そりゃ、そうだ。だがボクは実はいまSMの研究にこっている。だからそのことをことわりたいたって速回しにいったただけだよ」

「まあ！」

「つまりボクは君を縛りたくなったわけさ」

「まあ！ いやな人」

「いまさら、おそいよ」

「仕方ないわね」

「そうと決まれば早い方がよい」

そういうと浩は、ぐいと女をひきよせキスした。それから、ゆっくりと女の体をたのしむように体を、まさぐった。女は敏感に反応した。そうしておいて浩は、女をつき放し、一呼吸した。それから、おもむろにカバンをとりよせ、中から捕縄の束と黒皮のパンティやブラジャーを、とり出した。

「あら、準備がよいのね」

「千載一遇のチャンスだから」

「まあ、ひどい」

「フフフ、さ、観念しろ」

浩は、ゆっくりと志津子に迫った。そして金属の手錠をとり出し、後ろ手にハメた。足にもハメると、志津子は、それだけで完全に自由を失った。

そんな志津子の前に浩は楽しむように、いろんな道具を並べた。そして、いちいち説明しながら、まずこれからしようとしてプラスチックの大きな玉のついたサルグツワを手にと



った。志津子の口を大きくあけさせて玉をくわえさせると皮をその上からかけ、頭の後ろでとめた。細い皮ひもがその皮バンドについており、その一組を、あごから首の後ろへ、その一組をハナの両側から後頭部に回して頭の後ろで、しめあげると、サルグツワは完全に装着された。それから浩は、ゆっくりと志津子の着物を、はぎにかかった。

さすがに志津子は驚いたらしかった。体をぴくりとさせ、モガモガとなにかいったが声にならなかった。しかし別に体を動かして抵抗するわけではなかった。抵抗したくても四肢の自由はきかなかったらう。浩はワンピースをぬがせ、スリッパをはいた。ぬがした服が手首や足首にたまるのを見ながら、いい知れぬ優越感にかられていた。

やがて、まっ白い上半身があらわれ、形のいい乳房が、あらわれた。それから男を魅了するすべての、ふくよかなラインが浩の目の前にあらわれた。浩は一息いれ、ゆっくりとその景色をたのしんだ。手をさしのべ、つややかな、よく手入れした膚をたのしんだ。乳房の弾力をたしかめながら、このまま、この女性に溺れきったら、どんなに楽しかろうと思った。しかし浩は、そうしなかった。

カギをとり、まず足の錠をはずし、足首にたまった、すべての着物をとると、すぐそのあとに、黒い皮のパンティをはかせ、それをきっちり腰に装置した。そのパンティは太い皮のベルトが入っていて、あわせると錠がかり、自由にとりはずせなくなる。博士がいたずら半分にフランスからとりよせたもので、チャックがついていて、用を足すには困らなかった。だが、そのチャックにもカギがかかるようになっていた。

浩はこのパンティと同じように乳房をしめつける皮のブラジャーをペアで博士からもらっていた。これらの品は、浩にサジズムの気があることを知って博士がプレゼントしたもので、浩は、まだだれにも、ためしたことはないものであった。サルグツワとブラジャーとパンティで一組であった。だからパンティを装着させたあとはブラジャーだった。

後ろ手錠をとると、志津子は痛そうに手首をさすったが抵抗はしなかった。浩は上衣類をぬくと、すぐブラジャーを装着した。手首が自由になっても志津子は、じっと後手に手首を組んでいた。そんな姿に、浩は愛を感じた。いじらしいなと思った。だがそれは一瞬で、黙々と浩は皮ブラジャーをしめた。この

ブラジャーは乳房のところだけが、くりぬいてある典型的な責め具用のものだった。それをつけるロープをとり、ゆっくりと厳重に後ろ手に縛りあげた。二の腕から胸に回し、さらに背中中。こうして、まるで荷物のように志津子をしばりあげるのに、たいした時間はかからなかった。

こうして浩の仕事は終わった。

浩は、ゆっくりと、そこから交換を呼んで井上病院につないでもらった。

間もなく井上病院の救急車が訪れ、このことを病室の一つに運んで行くだろう。その事を思うと浩は胸が、いたくなった。浩は電話をかけ終わると、ゆっくり志津子をだいてやった。それから軽くヒタイにキスし

「許してくれよ」

と一言いって、その部屋を出た。

(五)

女を縛るということがこれほど楽しいものとは、浩は思わなかった。鈴と志津子の事件があつてから、しばらく浩は、バー「蟻」の二階にひきこもっていた。博士から、そっとしておいてやれという指令が広子に届いてい



たのかもしれない。だれも逆らうものがないので、勝手放題をしていた。

一番に犠牲になったのが鶴子だった。

「こんどは、お前だ」

といわれ、鶴子は首をすくめたが、あとのまつりだった。いやいやというのを素っ裸にされ、うしろ手に縛りあげられた。

「ひどいワ、ひどい。生まれて誰にもみせたことのないからだなのよ」

おいおい泣く鶴子を、浩は平気で責めた。

「うるさい！」

と口につめ物をし、わきの下に手を入れてくすぐった。鶴子はまだ男を知らない。そのことはママからも聞いていた。嫁にもうなから鶴子のようなことがよいと思い、ママも鶴子も、そう信じていた。だが浩は、嫁にしたら苦勞がたえまいと話にのらなかった。だからまだ処女でいた。そうでなければもう三年前浩が広子姉妹の目の前に現われたとき、すぐに女にしていたらうと浩は思う。

だから浩は鶴子には遠慮がなかった。だから縛り方も鈴や多賀子の場合とちがって、きびしく露骨になる。鈴や多賀子の場合、浩は決して裸にできなかった。そんな気持ちがわかっているのか、わかっていないのか鶴子は、と

もかく浩に甘え、浩に反抗した。それが、いじらしかった。

わきの下をくすぐると鶴子は人一倍、苦しかった。普通するときでも、とびあがるくらい敏感だった。そこを容赦なく、くすぐられるのだ。手も足も背中と一緒にされ、動けない上に、どっしりと浩は馬のりになって、くすぐる。すると鶴子はゲーゲーいいながら、体をけいれんさせて苦しむ。

あとで手を止め、サルグツワをはずして感想をきくと、

「もう殺して。その方がいい！」

と、せつなそうにいった。

鶴子の体は、若いだけに、しこしこしていた。縄も、はずむように、まきついた。それに比べると鈴の体は、汗ばんで縄にすいつくようであり、多賀子の体は縄目が膚に沈んで見た目に残酷な感じがした。同じ縄を使っても三人三様の味があった。

くすぐることもそうだ。鶴子は、まるで死ぬような声を出す。鈴はゲラゲラ笑い、多賀子は体をゆすって笑いこぼれた。そんな比較検討をしながら、浩は「縛り三昧」の悦楽を何とか記録に止めようと写真をとった。

一しきり責めたあと、鶴子にその写真をみ

せると、鶴子は顔をしかめた。

「いや、いや。そんなの、いやー」

といいながら、鶴子がその実、一番写真をみたがった。

縛られることに三人の女たちは三様に反応し、すこしずつ、その味がわかってきているように思えた。そんな浩の修羅場に、ときどきママの広子が現われ、緒方医院の話を伝えた。浩が志津子を縛りあげて緒方医院に送り込んだ翌日、井上博士らが乗り込み、緒方医師を入院させ、井上病院から代診を送りこんで医院を続けられるようにしたこと。一切のカルテを整理し、患者に不都合のないように点検し、おかしい患者は訪ねて、再診するなど、めんどろをみたこと等を伝えた。浩は、それでホッと胸をなでおろした思いだった。

そんな一日、浩は鶴子を、また裸にして責めていた。責めるといふより、その日は手だけを縛り、いっしょのベッドにねて、ふざけていた。乳首をいじり、からかう浩に鶴子は真顔で訴えていた。

「いつだったか、鈴ちゃんを初めて縛ったとき、女が哀願することは滅多にないといったでしょ」

「ああ、覚えているよ」



「きょうの鶴子は、そんな気持ちよ。浩、どんなことでも我慢するから、浩の手で女にしてくれない？」

「ああ、いつかね」

「いつかは、いや！ きょうでなくては」

「ムリだな」

「どうして」

「どうしてもだ」

「だったら殺して……」

「そんなに好きか」

「好きよ」

「そうか……オレみたいな男のものになったら、一生ウダツはあがらないのに」

「それでも、いいの。いまのようなヘビの生殺しよりは、いいのよ」

「ヘビの生殺しか……」

「浩は、つめたいのネ」

「そう思うかな」

「そうよ。血が通っていないの。だから自分の女でもない人を平気で縛れるのよ……」

「こりゃ手きびしい……」

そう答えながら鶴子を女にする日のことをちらっと、夢見ていた。きょうでもよい、あすでもよい。だれも文句をいわないだろう。だが浩は、自分が、子供のできないように自

分のからだを処理していることを、相手は知っているかなと思った。そんな男でなく、いい人に惚れてくれたら、とも思った。

「ともかく、二、三日うちに決める」

浩はそういつて鶴子をだきしめキスした。

「うあ、うれしい」

と鶴子は体をふるわせて喜んだ。

そこに広子があがってきた。鶴子はそれを見ると、ひとみを輝かしていった。

「姉さん、浩ちゃんが近いうちに女にしてくれるんですって」

「ほんと？」

「ほんとよ」

「そう。よかったわネ」

といいながら広子は浩のそばによってきて

「いよいよカンラク？」

「ああ、頭がいたいよ」

「自分でまいたタネでしょ」

「ああ、仕方ないな」

「オバカさんネ。下にも浩亡者が一人来ているワ。井上博士から聞いたって」

「そう。じゃ、ひとつ連れてくるか」

浩はそういうと、むくむくと起きあがり、上衣を、ひょいと、ひっかけた。

女は予想したとおり志津子だった。見ちが

えるばかりに盛装していた。浩を見ると

「あ……」と軽い声を出した。

「いつぞやは大変、失礼しました」

と志津子はていねいにあいさつした。浩は頭をかいた「約束もはたさずにすみません」

「いいえ、あれはあれでよかったんです。井上先生からしみじみいわれました。井上先生のはからいで、N県の県立病院の内科婦長で働くことになりました。私の後任は先生のところの俵さんがして下さるそうです。だからきょうはお別れです。会えば、つらいと思っただですが、先生に無理にお願いしました」

と志津子は、はきはきと、ものをいった。

それだけに情感がにじみ出て、哀れだった。

「何もできずに、すまなかったな！」

と浩は、ついにやさしい言葉一つかけず志津子を送り出した。鈴や多賀子が、もてるわネと、ひやかした。浩は、ものすごい顔で二人をにらみつけ足音荒く二階に駆けあがっていった。そしてベッドに近寄り毛布をはぐと鶴子が縛られたままの姿勢で、まんじりともせず待っていた。見ると目からこぼれた泪でふとんの枕許がぬれていた。浩はそれを見るとたまらず、鶴子の体をだきしめた。そして浩は人間の生きる重さをしみじみ感じた。



## ある観念的なプレイ

／＼覗くものと

覗かれるもの＼

との関係

吉田和男

——はじめに——

私の略歴から書いてみよう。

私は三十八才、関西のK市の郊外に住んでいる。

人文科学関係の著述を業とし、その他、週に一度ずつ、二つの大学の講師として顔を出すほか、あまり時間にしばられない生活をしている。



妻は三十四才、小学校の教員として、毎日勤めている。結婚して十年になるが、子供はない。一応、親の資産もあったので、結婚した時に自分の持家としてK市の郊外に約三十坪の家を建て、現在も、そこに住んでいる。

新築当時は、比較的、田園風景に恵まれた空気のない住宅地であったが、御承知の建築ラッシュに巻き込まれ、現在では家のまわりは可成り、建て込んできている。

以前は、二階の小生の部屋として使っていた六畳の和室から畑や、たんぼが眺められたものだが、既に現在では、家々が次々と建ち並び、往年の見はらしも何もあったものではない。

裏の境界線ぎりぎりにまで建てられた裏の家の二階と、それこそ、五米と離れず、まともに、のぞかれる事となり、殆ど一日中、そこで仕事をする私にとっては、いささか迷惑な事になっている。

もっとも、裏の家の人にしても、私と同じ思いであろう。従って、私は裏の家に面する側に、薄色のカーテンをたらし、空気を入れかえる時とか、掃除の時とか以外、カーテンをひきっぱなしにしている。

——A夫人のこと——

今年の春、いや初夏だったか。

私の妻は、勤めの為、早朝出勤すると晩まで帰ってこないの、講師として出てゆかぬ限りは、家には私一人だ。

私は二階の部屋で、締め切り近い原稿に手を入れ、一段落した頃であった。

裏側の家の二階で、ウキウキしたハミングとともに掃除器のウナリ音が聞こえた。

裏の家（以下A家としよう）は、新婚後二年位の夫婦で、私の家と同じで子供はない。

主人はサラリーマンで、遠方に勤めている



らしく、早朝に出かけ夜もおそいので、私は顔は、はっきりと知らない。しかし、A夫人は二十七、八才位で、お世辞にも美人とは云えないが、中背、色白で、やや太り気味の、愛嬌があると云うのだろうか、云うならば、何処の団地でも見うける豊満な若妻タイプである。

若妻の性感は、結婚後半年、或は一年で開き始めるものだそうだが、A夫人を見ていると、正に性感が咲きほころび始めたと言う感じを人に感じさせた。

やや下がり気味の好色そうな細い目、艶々した顔色。うつむいた時に、ややくびれる頰などに「好きそうな女だな」と感じさす何か、A夫人にはある。

### ——のぞくもの——

夫人は明るい色のニットブラウス。膝小僧が出る位の茶のスカート、髪をターバンで巻き上げ、盛んに部屋の掃除に余念がない。

私は生来、世に云うところの窃視症では、決してない。

勿論、ストリップに行った事も何度もあるし、電車の前に腰かけた女性のミニスカートの奥に、或は階段を上る女性を下から見上げる興味はある。

しかし、それは男性一般が持っている範囲からは、決して逸脱しない程度だと思っている

る。とはいって、目と鼻の先で、私に見られていると知らず、せつせと掃除しているA夫人を、カーテンのすき間からのぞいているうちに、何か性的な興奮が身体の中を貫いた。今に、あの若妻は裸になるに違いない。そして、人目のないのを幸として、あの肥えた身体を開いて、オナニーでも始めるに違いない。現実には、そんな事があり得る筈がないのに、馬鹿馬鹿しい中年男の妄想だ。

その日以来、私はカーテンのすき間から、A夫人の挙動を覗くことに、奇妙な情熱を持った。

ある時は、外出前の念入りな化粧姿を、ある時は、とり入れた洗たくものをたたんで、ダンスにしまう姿を、或は、寝ころんで週刊誌を見ながら菓子を食べている姿を——。

また突然、立膝をして、捲れ上ったスカートから出た太くて白い太股を見た時などは、思わず私の男性は興奮に躍ったものだ。

勿論、私がカーテンを明け放ち、机に向かっていている時など、A夫人が二階の部屋にいる事も度々あった。

A夫人から見て、私は横向きで座卓に向かつており、私は時々チラチラとA夫人の方を

うかがう。明らかに私の視線を意識した動作は、カーテンのかけから覗いた時とは、心なしか違うものがある様だ。

A夫人と私は当然、お互いに裏家の主人、裏家の主婦と意識しながらも、強いて視線も合わせぬし、また会釈も挨拶もしない。

### ——ある出来事——

そんな事が、ずっと続いていた、ある日。私は大学に出たところ、学生騒動の為、講座が流れ、所在なく、市内で二、三の用事を足してから家に帰った。

無論、妻は出勤していて家には、いない。私は階下で和服に着更えると、執筆の為、二階の和室へ何気なく入った。

その朝は、好いお天気だったので、久し振りに掃除をし、カーテンはひきあげたままである。A家の部屋へ目をやると、偶然にも外出から帰ったところらしく、着物姿で二階へ上ってくる途中の上半身がチラッと見えた。

私は咄嗟に、無意識に、片側にひき寄せてあったカーテンの裏に素早くかくれた。

見つかったはいない筈だ。彼女は、こちらに誰もいないと思っている筈だと確信した。







私はドキドキする心臓を押え、カーテンのたまりのかげから覗いた。彼女はハンドバッグを三面鏡の前に置くと、帯締めをシュッと音高く抜いた。

あつ。彼女は着替えるのだ。私は目の眩む様な興奮を覚えた。

彼女は、こちらのカーテンが開かれ、私の部屋全体が見えるのだから、当然、誰もいないと思っっているのだ。

彼女は全身をこちらに向けたまま、手早く帯をほどき、下紐類も完全に、とき捨てた。

着物と長襦袢が肩よりダラリと下る。彼女は、無防備に、それらも肩からスルリと外した。淡トキ色の腰巻姿。プックリとふくらんだ乳房は丸出し。その腰巻も、いとも簡単にパツと脱いだ。

身にまとうものは白足袋のみ。白いズン胴の姿態。黒々と密生している陰毛。私の男性は興奮の為、怒脹し始める。

彼女は全裸のまま、白の様な臀を、ドサリと畳に置く。そして、こちらに正面を向けたまま、片膝を立てて白足袋を脱ぎ出す。

臍の下に密生する陰毛。さらに、その下部に見えかくれする陰裂。私は自分の男性に、

ゆっくり抽送を加え始める。

勿論、私の今迄の経験からストリップの特色も充分知っているが、あれは単なる見世物に過ぎぬ。これは静かな白昼の住宅街の出来事であり、充分知り過ぎた（実際には声もかわした事もないが）A夫人なのだ。

夫人は、ことさらに、ゆっくりと足袋をぬいでいる。私の妻の裸体に対しては、この様な私の興奮は起らない。

妻の場合は、公然（互いに）と裸を見せ、また見られるからだ。A夫人との場合は、あくまで窃視している事が興奮に結ぶのだ。

### ——のぞかれるもの——

その事があって、その後、何回となく夫人の着更えの際の全裸を覗く機会があった。

片隅にひきあげたカーテンのたまりのかげで、A夫人の全裸は申すに及ばず、陰毛の生えざわ、臀部から見た陰裂の様子などまで、拝見に及び、私の精がカーテンの裾にしみ込み始めた、或日の昼過ぎの事だった。

私は例の通り、二階の机で執筆していた。とある時、私の机の上にあるポケット・アラーム（組立てる様になっている十稜角位のもの）のガラスに、A家の二階が、はっきりと写っているのが、わかった。

部屋は、いつもの通り、明け放たれ、森閑としていたが、よく目をこらすと、A家の引き寄せたカーテンの後で、A夫人が、こちらを窃視しているのが、はっきりと写っているではないか。

私は彼女から見て、横向きなので、彼女は私が気づいていないと思っっているらしく、彼女の身体が半分位、カーテンのかげから出ているのだ。

私は覗かれていたのだ。その時、私の身体の中を、奇妙なセンチツが走った。

今まで覗く度に感じたと同じ様な性的興奮が、丁度、裏返しに覗かれる事によっても、体を貫くのだ。

彼女は、かつて私が彼女を覗くことによつて得たと同じ興奮を感じているに違いない。よし、私は彼女の期待に、そつてあげよう。

私は、さも執筆に疲れた風をよそおい、両手を上にウンとのばして、のびをすると、いかにも誰も見ていないなという思い入れで、A家の方をチラと眺め、そのまま、後ろに仰向けにゴロンと寝ころがった。

そして、和服の裾を割って、男性をパンツの裾から引き出した。A夫人に詳細を覗かれているという意識が、忽ち脈打つ程の怒脹となつて、そそり立った。



どうだ。A夫人。

君は今、耳たぶを真赤に染めて、口中をカラカラに乾かせて、僕の一物を覗いているのだろう。君の子宮は、此の凄い……を受け入れたがって、いつもの……をしとど、ぬらしているのだろう。

久し振りの興奮、張りさけんばかりの性的興奮の果てに、私は最後の時を迎える。

私はA家の方へグラッと横になり、A夫人に、はっきりと見える様に、おびただしい量の……を、畳の上に……したのだった。

——翻然として悟る——

数日して、お天気の良い日。

執筆に疲れた私は、駅の方へ散歩に行き、洒落た喫茶店の片隅に坐り、ボンヤリとコーヒを飲んでいた。

私の外に、もう一組、三人の主婦と覚しき女性が、買物帰りか、普段着のまま、買物籠などを持って、楽しそうに、おしゃべりをしていた。

私は、彼女達の感じから、はからずも、A夫人との事などを想い出し、ひそかに、心中に過ぎた日の楽しみを思い浮べているうちに、ふと、ある事に気づき、がく然とした。

A夫人の裸の様々な姿態を、覗き見したと置いていたけれど、A夫人も、私がのぞいてる事を充分に承知の上だったのだ。

丁度、私がA夫人に、のぞかれていると知っての上での動作の興奮に、彼女もまた酔っていたのだ。

そう私は考えだすと、一人で赤面し、心臓が早鐘を打つ様な恥かしさを覚えた。

これは、如何した事なのだ。のぞかれている事を承知の上で、のぞかせる心理。

相手が、のぞく当方を意識して、のぞかせるのを、相手の心理迄推察しながら、なお、のぞく心理。いやはや、説明すればする程、ややこしく、こんがらかる心理は、もはや、窃視症と露出症という相反する独立した変態心理でなく、のぞくものと、のぞかれるものが、共同して作りだす一つのプレイなのだ。しかも、SMプレイ、ホモプレイに於いて屢々役割りの交替が、突然ある（ドンデンとかいう）如く、此のプレイにも、のぞかれるものと、のぞくものが、或日、役割りを交替するのだ。

私は、A夫人に対して、同好の友としてのたまらない友情を感じた。

——新しい計画——

私は今、素晴らしい計画をたてている。

私の妻は、私の此の秘密のプレイ、性癖については全く知らない。

妻の日曜以外のウィークデイの休日の昼、私は妻を二階へ誘い上げてセックスを行い、それをA夫人にのぞかせよう。

眼前五米の所で展開される赤裸々な中年の男女（それもA夫人からみれば、裏の家の御主人と奥さん）のセックスプレイをのぞいては、如何なる心境になるだろうか。

私はA夫人の視線を意識して、益々興奮し平素の数倍の精力振りで妻に接するだろう。

のぞかれているとは露知らぬ妻は、平素と打って変わった私の動きに感激して、声を上げて、のた打つに違いない。私は妻の身体を抱きながらA夫人に向かって遂情するだろう。

A夫人は、それに対して、何を以て、私に報いてくれるだろう。オナニーの姿か、浣腸か、友人を誘ってのレスシーンか。情夫を引きずり込んでのセックスか。（此の際、奇妙な事に、A夫人と主人とのセックスは見たいと思わない）

私は、近く実行する此の計画に、既に胸をわななかせているのである。

（以下——次回）





〔美貌のサジスチン春日ルミの手記〕

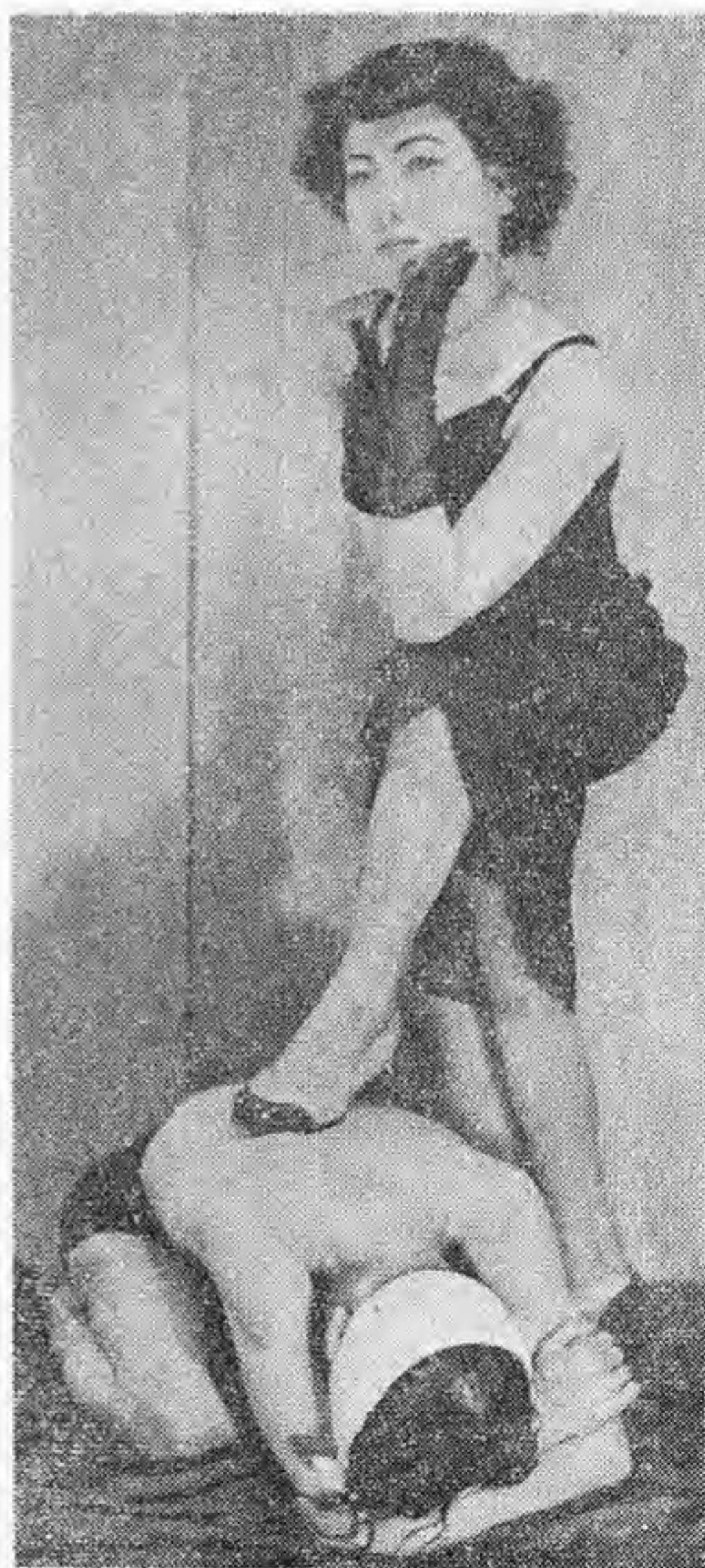
# 昼は紳士で夜は奴隷

春 日 ル ミ

私の穿き古した下着がほしいと言っていた男が、いつの間にかやら、実は貴女の奴隷となっていて、いじめてほしいのだという風に話が進展して、いって、私は、彼の住む土地を見物がてら、出かけていったのです。

そして、その第一日は、私の滞在するホテルの一室へ入るなり、彼は完全に私の奴隷となったのです。昼は街の有力者である紳士であるのに、夜になると、そんな社会的地位や職業上の体面、メンツなんかを、かなぐりすてて一匹の奴隷となっていました。

「これが私の本当の姿なのです。昼の私は、虚飾の私です。いわば、偽りの仮の姿なので



す。でも、私には、家庭に妻も子供もあり、また親戚や友人の目もあります。職業上、沢山の人達とのかかわり合いがあって、自分本来の姿のまま、いるわけにはいきません。こうして、貴女と逢っている時こそ本来の自分に返れたようで嬉しいのです」

昨夜、帰りしなに、彼はしみじみと、そう言って述懐していましたが、今日の私は、彼が差しまわしてくれた個人営業の車に乗って、近くの名所旧蹟を巡回したのです。

一時間ばかり走って、海岸へ出ました。海女の実演とか、水族館、ヘルスセンターなんかがあって、きっと日曜日なんかは賑やかな



のでしょう。その土産物店で、私は場違いなものを見つけました。貝殻に色をつけたのをアミの袋に入れて、ぶらさげてある中に、三本の革ムチが飾ってあったのです。今でも私は何故、あんな所にムチが売っていたのかと不思議でなりません。

西部劇でカウボーイあたりが、人間の首に



巻きつけて引き倒すのに使うほどの極めて長い、しなやかな革のムチ。それは一本一万二千円の値札がついていました。ムチを巻いてゆくと、くるくると、手の中に入ってしまったような柔軟さ。伸ばせば三米ぐらひはあるでしょう。もう一つは、八千五百円の値がついていて、少し堅くて、長さも、それほど

でもありません。私になんか、丁度、使いごろのように思えて、それを求めました。もう一つ、一本六千円というのは、柄が長くて、房のようになった皮の部分が短く、ムチという感じから言えば、貧弱なようなので一応、敬遠しました。

私はムチが手に入ったことで、今夜のプレイは、さぞ楽しいものになるだろうと、心の中が、なんとなく、うきうきしてくるのでした。しなやかなムチの皮の手ざわりが、なんとも言えない気持よさを私に与えるのです。

運転手の人は、そんな私の心のうちは、なにもわからないのでしょう。次の行楽地へ向って車を走らせました。さんざん乗りまわして、タクシーのメーターが一万円のところまできて、再び0に<sup>ゼロ</sup>戻ったところで、私はホテルへ戻るよう運転手に命じました。

「お客さん、もう一カ所、最近出来たスカイラインで、それは素晴らしい眺めのところがあるんですが、行ってごらんになりませんか。そう時間は、かかりませんが……」

商売熱心な運転手のすすめで、海岸沿いのレインボーラインを走った時は、まるで南イタリアの保養地にきているようで、いいなあと、思わず嘆声を洩らしてしまいました。



ホテルに帰ったのが三時すぎ、シャワーで汗を流してから、一時間半ばかり午睡をとりました。レースのカーテンを透して明るい陽ざしが部屋中、いっぱいに注いでいるのが、却って私には快く、ぐっすりと眠りました。

目がさめてから三十分ばかり、ベッドの上で、うとうとと、眠っているでもなし、はつきり起きているでもなし、掛蒲団の上に足をのせて、ぼんやり休んでいました。

バスで全身を石鹸の泡の中に沈めて、ゆっくりと洗いました。今夜は、彼をどのようにして責めてやろうか、と考えると、胸がわくわくして、楽しくなっていました。

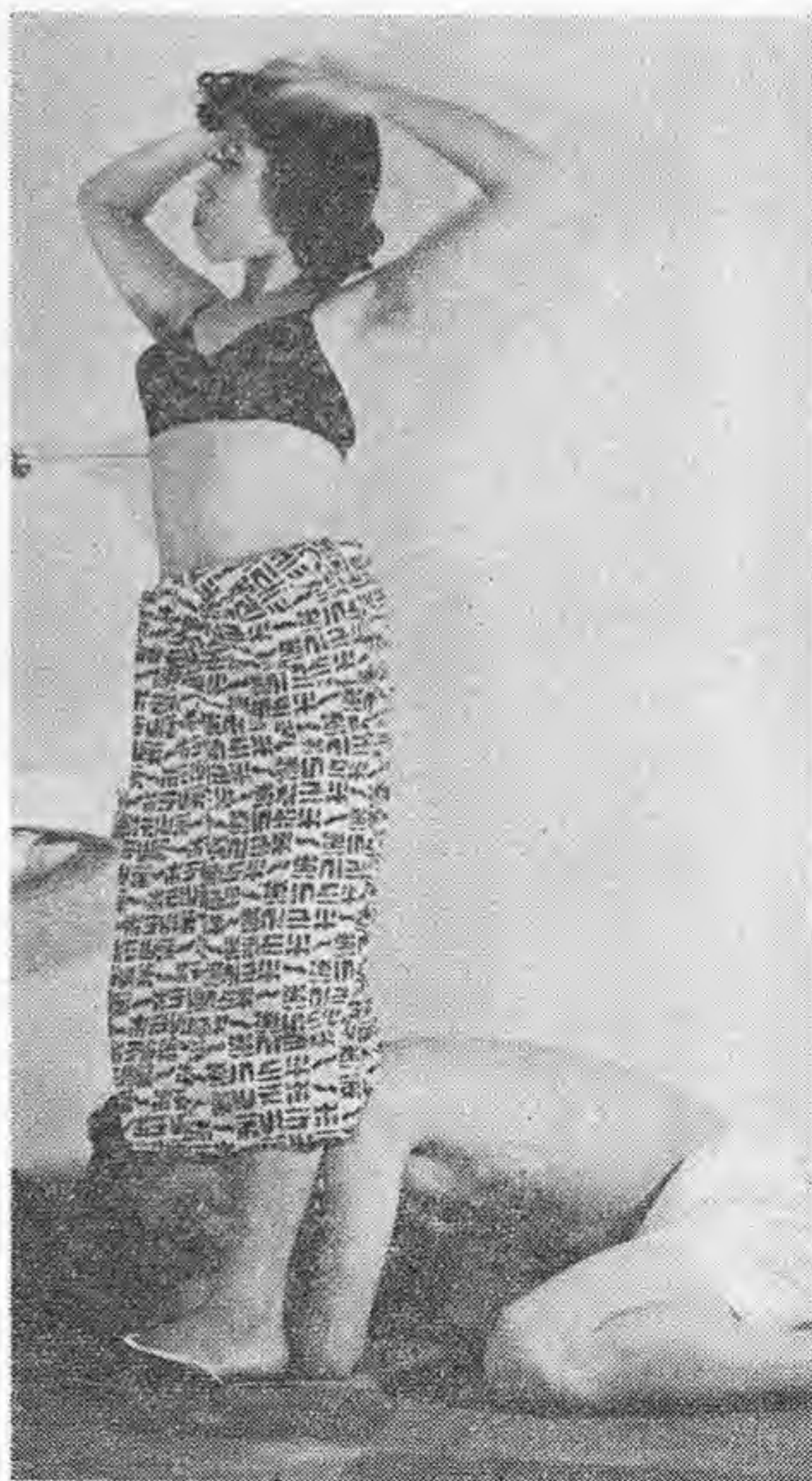
ホテルの一階にある中華料理のレストランで、鱈ひれスープとか水母、車海老のケチャップ煮などの濃厚でボリュームのある夕食をすませて部屋へ戻ると、ソファアに長々と寝そべって夕刊に目を通していました。

一日の疲れも午睡によって、すっかり取れたばかりか、夕食を摂ったことで、もりもりと精力がついたように思えました。

七時すぎになった頃、ドアをコツコツコツと三つノックする音が聞えました。

「どうぞ」

私は立ち上って、扉の方へ向いました。



Eが入ってきたのです。彼はドアを閉めると、私に顔を合わせることもしせず、背広のまま、その場に両手をついて土下座しました。

「ルミ女王様、大変お待たせしまして、申し訳ないことをしました。奴隷奴は、そのためには、どのような罰でも、お受け致しますから、どうか、お宥し下さい」

彼は、額を床にすりつけるようにして懇願していますが、中々真に迫っています。

「そんな弁解は、ききたくない。早く、その

服を脱いで、素裸になるんだッ」

私は、今日買ってきた新しいムチを使いたくって、むずむずしていたのです。はいていたスリッパを、はねとばすようにして脱ぐと素足のまま、床の上をペタペタと歩いて、彼の背後にまわると、パシッとムチを床へ叩きつけました。そして、左手で素早く、ドアのノブを押して施錠しました。

彼は、私に見守られながら、上衣、ネクタイ、ワイシャツ、ズボンと次々と脱いでゆき



ました。勿論、土下座したままの這いつくばった格好でやるのですから、スミーズにはいきません。ズボンなんかは、裏返しのようになって、床の上に脱ぎすてられます。

私はそれを一々、足で蹴とばしては、部屋の隅へ放り投げます。

「女王様、これだけではどうかお許し下さい。これを取ってしまうことは、女王様のお目をけがすことになりますから、奴隷奴としては恐れ多くて、とても、とても……」

パンツ一枚になった彼は哀願します。もう彼が興奮の極に達していることは、よくわかります。男という動物は、素裸にただけで最高に興奮してしまうものらしいです。

その時、私は彼の傍に皮製のバッグが置いてあるのに気づきました。私の方からは陰に



なっていてわからなかったのですが、きっと右手で提げてきたのでしょう。

「これは、なんだね」

私は素足を、そのバッグの口金の上にのせて尋ねました。

「は、はい、奴隷奴が、女王様へのプレゼントとして、持参したものでございます。どう

か、御披見、下さいますように……」

私は、口金をパチンと足の先で、はね上げて中を開けてみました。ああ、そこには奴隷愛用の犬の首輪、房のついた曳綱、犬調教用の短いムチ、麻縄、白ロープ、ローソク、日本手拭などが入っていました。

「フン、これで責めてほしいとでも言うのかい？ 殊勝な心掛けと言っているが、私は私の流儀で、自分の好きなようにするんだからね。そう、お眺めむきにはいかないよ」

そう言うておいて、私は、鞆の中から出した犬の首輪を、彼の首にはめて尾錠を止め、曳綱の金具を鎖にとりつけ、ぐいと引っ張りました。飼主が飼犬を運動させる時の要領でソファの所まで、連れてきました。もう、それだけで、彼は感激を全身にあらわし、身ぶるいするように、身体を振ったかと思うと、鳥肌だった肩や背中を見せて、私の前で平伏しました。





「ルミ女王様。この奴隷に、どうか、御慈悲をお与え下さい。女王様のお身体から出されたものでしたら、どんなものでも、奴隷奴隷は有難く頂戴いたします」

「そうかい、これだったら、どうだい？」

私は左手に飼犬の首輪につないだ曳綱を持ち、右手にした昨日、買い求めたムチを振り上げて彼の背中に発止と打ちすえたのです。

ピシッ

快い手応えが手元にズンと響いてきます。

びっくりしたように彼は、顔を上げましたが、私の鋭い視線にあうと、射すくめられたように這いつくばって、全身でムチを受ける覚悟でポーズをとりました。

「それでもか、それでもか——」

それから、もう、私の右手がくたびれるまで、ムチの乱打でした。彼の浅黒い背中の肌が、忽ちのうちにミミズばれに赤く腫れ上がり、それを避けようとして、肘を落してお尻を持ち上げると、臀部にも、ピチッ、ピチ

ッと、柔軟なムチの先が確実に当たってゆきます。そして、そこもまた、ミミズばれです。

「う、う、ううう、うーむ」

痛いのか快いのか、彼の口からは、ただ呻き声が洩れるだけで、その他の意志表示は、ありません。ようやくムチは、背中、臀部から移行して、太股や膝、足の裏へと攻撃を加えてゆきます。太股を叩けば、それをかばって、お尻を出します。出したお尻にムチを加えれば、お尻を引っ込めます。すると、今度は肩口をムチは襲います。

目の前に逐次あらわれる目標に向って、私の右手にしたムチは、妖蛇のように、まつわりついてゆきます。と、いつて、私は決して力一杯、ムチを彼の肌に叩きつけていたのではなく、ありません。情容赦なく、という表現の通り、大きく腕を振りかぶって、適確にムチを当てていながらも、彼の急所にはムチの先が誤ってでも当らぬよう気をつけました。

パンツは、もうムチによって、はじきとばされて、膝頭のところまで、ずり下ってきています。私のムチは一しきり臀部に集中して猛威を揮ったのです。

「女王様、奴隷の身体はどこを、鞭打たれても結構でございますが、どうか、顔をぶつこ



「ただけは、お許し願います」

「うん、わかってるよ。だが、今日のお仕置は、こんなことぐらいで終わると思ったら、大間違いだよ。そら、お前の大好きな、これやるから、舐めるんだよ」

私は床の上へ、ペッと唾を吐きました。彼は這ったままで、とびついて、その唾に口を当てようとしますが、私は曳綱を手元に引き寄せて、そうはさせまいとします。でも、彼は、じりじりと這い寄って、とうとう、如何にも、おいしいものを食べるように、床の唾をペロペロと舐めています。

「ペロ、こっちへおいで」

振り向いた彼の顔へ、プッと唾を吐きかけてやりますと、舌を伸ばして、鼻や頬についたのを舐めています。

「そんなに、おいしいんかい？ ペロ」

「はい、もう、どんな御馳走よりも美味しくて、有難いことです」

「そうかい、それだったら、今までハダシで部屋の中を歩いていて、大分、足の裏が汚れたから、お前の舌で清めてごらん」

私はソファに寝そべって、彼の頭の上へ足を載せました。彼は両手をついたまま、顔をずうと起して、私の踵へ口をつけました。



「ゆっくりと、上手に舐めるんだよ」

彼の濡れた舌が、踵から足の裏へかけて、這い上ってきます。足の裏をひとわり舐め終ってから、今度は唇で、すぽっと足の指をくわえて、舌でくるくると、しゃぶるようにします。両手は床についたまま、一切、唇と舌で私の素足を清めているのです。

擦ったような、むずがゆいような快感が

足の裏と足の先とから、全身に這い上ってきますが、足の指と指との股に生温かい舌をまわして、しゃぶられた時は、思わず、身ぶるいするような激しい快感に下半身が襲われ、無意識のうちに、はしたない声を出してしまいました。上半身をソファに、のけぞるようにながら、奴隷に聞かれはしなかったかと気づかっただけでした。



私の身体の中心部に、熱い火の柱のようなものが燃えさかって貫いてきますと、一層、狂暴な精神が、私を駆りたてました。

自分の快楽のためにだったら、この奴隷男を、どのように利用しようとも、悔いのない気持でした。自分から積極的に、この男を利用して、自分のS性を試してみたい気持もありました、大の男をムチによって、自分の思いのままにすることが、こんなにも楽しいものだということが、わかったような気がしました。いつの場合でも、自らが主導権を握って、相手の男を自由にしたいのです。

私は、ネグリジェの下には、下着は何もつけておりませんでした。ソファから立ち上るなり、首輪を引っぱって、ベッドの脇へ連れて行き、曳綱をベッドの柱に結びつけると、四つ這いの彼の頭を蹴って仰向けに倒しました。「あっ」と驚く、彼の声も、忽ちのうちに、打ち消されてしまいました。

私のお尻が、ぴったりと彼の顔の上に据えられたからです。私のお尻の下で、むずむずと動く、彼の鼻、目、唇。もう、息が出来なくなってきた、必死にもがいているのです。う。それがまた、私にとっては、たまらない快感になるのです。



いつの頃から、このようにして、私は男の人の顔に、裸のお尻をべったりと押しつけてみたいと思ったことでしょうか。世の中にこんな優越感って、またとあるでしょうか。

目も鼻も口も、お尻でふたをされてしまったては、呼吸することも出来ません。苦しまぎれに、お尻の下でもがく彼が哀れに思えて、ひょいと、お尻を浮かせてやりました。

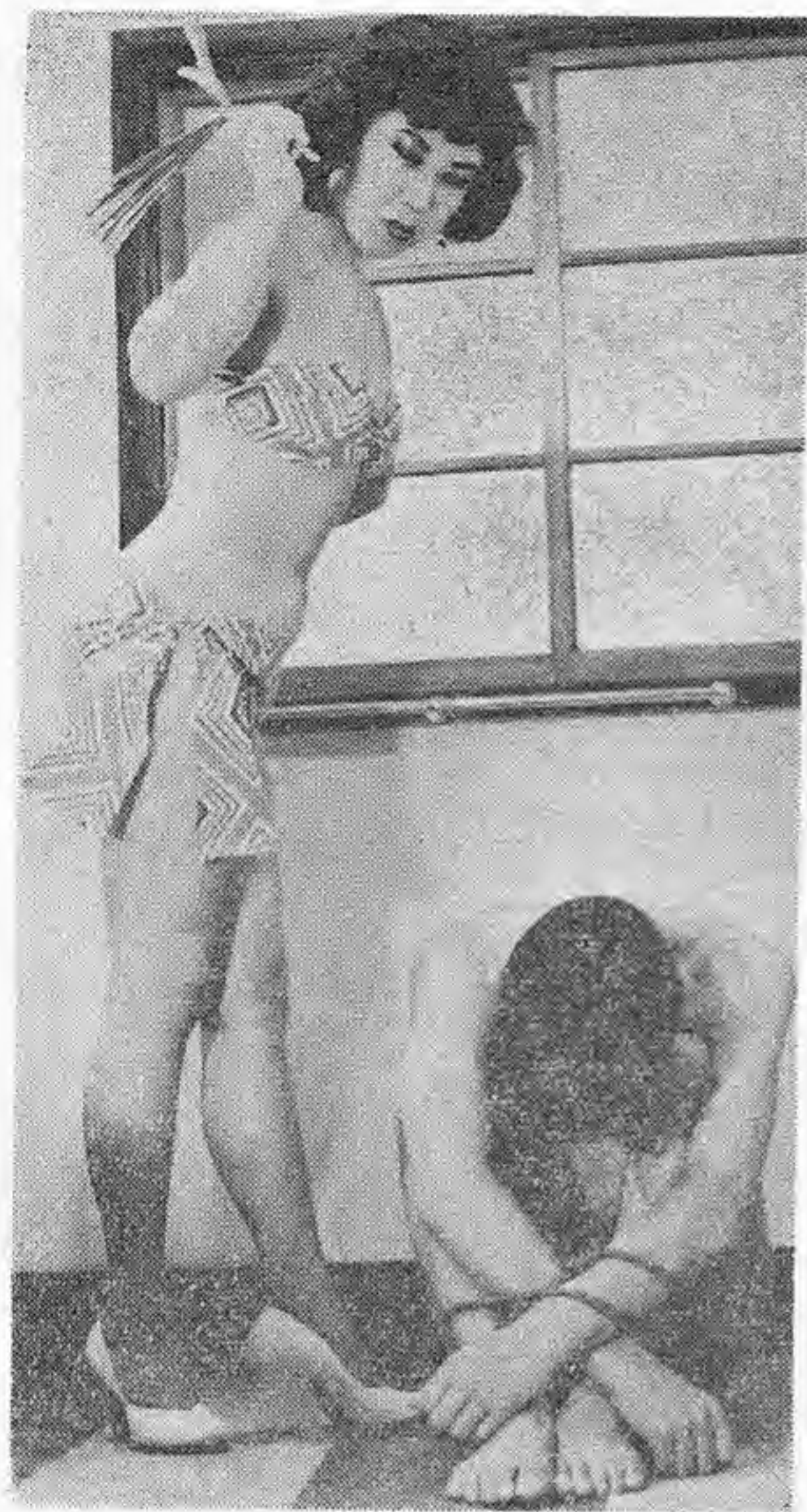
ふうと一息ついた彼は、濡れた唇と舌を伸ばして、自分の好みの個所を求めて顔を動か

そうとしますが、無慈悲にも、私のお尻は再び彼の願いを踏みにじるかのように、顔面全体をべったりと掩ってしまったのです。呼吸困難のために、必死にもがく奴隷男の顔。

この繰り返しは、先程から昂まってきていた私の好奇心に、拍車をかけました。それは彼にとっても、嬉しい私の変化だったでしょうが、やがて私は、止めることの出来ない爆発的な衝動に襲われはじめました。

なんという嗜虐的な快感でしょうか。





臀部を中心とした下半身から湧き上ってくる妖しげな快さが、じわりじわりと上へ向っては背中から肩口へ、そして、腕から指先まで痺れさせてゆくのです。上半身をのけぞらせながらも、次第に力が抜けてゆくのを、ぼんやりとした頭の中で不思議に思っていました。それでも、まだ、上半身はよかったのです。臀部から下へ向っては、大腿部がひきつったようになって、足先がピクピクと痙攣するのを、自分では、どうしても、止めることが出来ないのです。

呼吸困難の彼も、さぞ苦しかったことでしょう。こうした難行苦行が、二人の男女の間で約束事として行われるということは、なんという運命のいたずらでしょうか。

この時、私は、ふと、彼の口中に、私の小の方を放出したいという悪魔的な想念に、身をさいなまれました。そうした欲望に一たび取りつかれますと、もう、いても立ってもいられない気持になってしまいます。

それは、なんという感激的な場面でしょうか。私にとっては想像するだけでも、辛抱で

きない程の魅力的な誘惑でした。

彼の唇と舌による私に対する奉仕は、依然として休みなく続いています。私の彼に対する欲望は、益々嗜虐的となって空想の上では益々飛躍してゆきます。

ドシャ降りのぬかるみ道を、ハダシで歩いてゆく時のような音が、どの位続いたでしょう。私は、最後の奴隷に対する洗礼を浴びせるために、彼の首輪を引っ張りながら、浴室へと連れて行きました。

浴室は洋式便器とシャワーとバスとが一室にありますので、かなりの広さがありますがタイル張りにはなっているものの、日本の浴室のように洗場というものがありません。

私は便器の中へ彼の後頭部をすっぽりと、はまり込ませ、便器のふちが枕になるように仰向けに寝かせました。断頭台の上に首を差し伸べたように、彼はじっと目を閉じて、僅かに口を開け、これから行なわれる神聖なネクタール拝授の儀式の姿勢をとっています。

私は、そんな彼を冷ややかに見すえながらぱっと、顔の上に跨ったのです。私にとっては、男を凌辱するという限りない優越的な快感が全身をしびれさせていました。

——（この項おわり）——



江戸残酷帳

凶盗気違い伝鬼

白鳥大藏

カット・志羽利也



妹を探す賊

慶長六年、五十三駅が定まった東海道の宿場宿場は、以前にも増してにぎやかに発達し

神出鬼没の行動に、役人たちも手のくだしようがなかった。

甚内の部下に、片腕とも影武者ともいえる

た。江戸の繁昌とともに五十三次の往来は、ますます繁栄をきわめていく。

箱根山中に根城をかまえ、手下数十人を従え、悪業のかぎりをつくしていた兇盗向坂甚内にとって宿場の繁栄は新しい稼ぎ場の出現でもあった。

この甚内一党は駿足を利用し、宿場宿場に配置してある子分達に命令しては、残虐きわまりない手口で荒しまわる。

男がひとりいた。飛驒の伝鬼という甚内の腹心である。伝鬼の働きは、首領をしのぐほどといわれ、その残忍さは仲間うちからも恐れられていた。

伝鬼は飛驒の生まれで、はじめは武士になって一旗あげてを、こころざした。

関が原の合戦には、石田三成方の雑兵に加わったが、味方は敗北し、立身出世の夢は、一朝にして崩れ去った。

心ならずも同輩とともに野盗になりさがったが、そのとき、甚内にひろわれた。

以来、甚内と同じく腕っぶしの強さと駿足とで、わずかの間に首領の片腕といわれるまでに、のしあがってしまった。

短気な性格で、虫ケラのように人を殺す。



その凶悪な所業に、街道の庶民は飛驒の伝鬼とも、気違い伝鬼とも呼んで、おそれおののいた。

伝鬼には、お鈴という名の妹がいた。たったひとりの肉親である。その妹とは関が原のいくさの前に別れたきりである。

いま、どうしていることか。

伝鬼は急に妹に会いたくなった。妹に会うことを念願として伝鬼は、盗み仕事のかたわら各地を歩きまわった。そして、一心に妹を探しとめた。

兄に置いていかれてひとりになった妹は、故郷をあとにして旅に出、いまはどこにどうして生きているのやら、その後の消息は絶えてしまっている。悪党の伝鬼だが、そのことだけは気がかりだった。

ある年の夏の夜、ひと仕事終えた伝鬼は、平塚の娼婦宿にあらりこんだ。

その夜の伝鬼は、女なんかどうでもよかった。役人の目の届かない安全な場所で眠りたかったのだ。

ひと眠りしてから伝鬼は、ふと目をさました。真夜中に近い刻限だった。

この家のなかの、どこかで異様な物音がするのを、伝鬼は耳ざとく、きいた。

女の悲鳴にまじって、ピシリ、ピシリとなにかを打つ音が、伝鬼ほどの凶暴な男の耳にも、うす気味わるく、きこえる。

伝鬼は、そっと起きあがると廊下へでた。

暗い廊下を、いくどか曲がると、奥まった物置き部屋に突きあたった。物音は、その部屋から、きこえてくる。伝鬼は、板戸の小さな節穴から、なかをのぞきこんだ。

若い女が縛られ、中年の男女に責められている光景が伝鬼の目に映った。どうやら、この店の主人夫婦が、抱え女を縛りあげ、痛めつけているところらしかった。

「やい、お鈴。おめえもまったく強情っぱりな女だな。二度も三度も逃げだして、大切な親方にタテをつくことばかりしていやがる。もう、今夜という今夜は容赦しねえ。半殺しにしてやるから覚悟しろ」

伝鬼の目にもうひとりの男の姿が映った。

でっぶり肥った人相のわるい男で、どうやら、これが親方らしい。夫婦のうしろで、その男は、ゆうぜんと腰をおろしている。五十年配の男であった。

お鈴と呼ばれたその抱え女に、伝鬼は思わず眼を光らせた。だが、女の顔はよくわからない。女は縛られたまま、うつ伏せになり、

床板に吸いつくような形で、うめいていた。

ひと巻き、ふた巻き、三巻、残酷な縄がキリキリと女の腕を後ろ手にして固く縛りあげている。女はよほど抵抗したらしく、その縄の上にまた荒縄がかかり、首、乳房、腰、股下にかけて、食いこむような残忍さで乱暴に縛りあげられていた。

背中にもわされた両の手首には、もう無数の赤い縄目の痕ができていて、フツフツと血がにじんでいる。裸にむきだされた肩や背中にも、赤アザや青アザが無残な、いろどりを見せて、しみついていていた。

雪のように白い女の柔肌が、苦しげな呼吸をみせて、あえいでいる。

(もしや、妹のお鈴ではないか)

伝鬼は、胸をおどらせて、そう思った。

もしお鈴だとしたら、あまりにも悲惨な運命におちこんでいる。伝鬼は、その責められている女が、妹ではないことを願った。

気違い伝鬼と呼ばれる非情な男でも、妹を思う心はあるのだ。

「まったくふてえ阿魔だ。こんな強情な女は見たことがねえ」

店の主人は、息を荒くして憎々しげに言った。女はこれまでに、よほど頑強な反抗をつ



づけてきたらしい。

「お前さん、手を休めちゃ駄目だよ。もっと  
ぴしぴし、痛めつけるんだ」

そういうと、こんどは女房が主人の手から  
割れ竹をもぎとり、大きくふりかぶって女の  
尻を叩くのだった。

女の下半身は、わずかに赤い腰巻でおおわ  
れているが、それも、いまにも落ちそうであ  
る。燭台の灯に、女のまるい尻が、半分ほど  
も浮かびあがっていた。

「ヒイッ、ヒイッ！」

割れ竹で尻を打たれ、女は悲痛な声をあげ  
て身悶える。

だが、のぞいている伝鬼の目に、女の顔は  
なかなか見えない。

（まさか、おれの妹が、こんな娼婦宿にいる  
はずはない。あれは、ちがう女だ）

そう思って自分の部屋へ、もどろうとした  
が、どうにも気になって、また板戸の節穴を  
のぞきこむ伝鬼だった。

女房の割れ竹が、ひとときわ激しく女の白い  
肩先を打ちすえ、その苦痛に女はのけぞって  
悶え狂う。腰巻が左右に割れ、むっちり和白  
い太腿が、妖しい女の美しさを見せて躍り、  
このうす暗い物置き部屋の中に凄艶な色香を

まきちらしていた。

女房は、わずかに女がまどっている赤い腰  
巻を、ビリビリと引き裂いた。縛ったまま、  
まるはだかにひんむいて、女の羞恥全体を、  
二人の男の目の前にさらけだしてやろうとい  
うのだ。女らしい残忍な責めだった。

女は芋虫のような格好でもだえ、悲鳴をあ  
げて抵抗する。乳房が痛々しくあえぎ、縄目  
のあいだでふるえた。むっちりした白い尻が  
あらわになった。

女房は、その尻へ割れ竹を叩きつける。

豊満な尻は、みるまに血のにじんだ、むご  
たらしい肉塊となって、固い板の間の上で、  
のたうちまわった。

女は、救いをもとめて、なにか叫び、顔を  
あげた。百目蟬燭の光が、まともに女の顔を  
うつしだした。

「あっ、お鈴だ。やっぱり妹の、お鈴だ！」

伝鬼の頭に、カッと血がのぼった。

この男は、頭に血がのぼると、前後の見境  
が、つかなくなる。伝鬼は板戸を蹴破るよう  
な勢いで、物置き部屋のなかへ飛びこんだ。

## 悲しい再会

伝鬼は気性の荒い男である。これまでに、  
かずかずの虐殺、暴行、強奪をくり返してき  
ている。自分以外の人間は、虫ケラぐらいに  
しか思っていない。

肌身離さず持っている短刀を引きぬくと、  
猛獣のように躍りかかった。

親方と呼ばれている男と、主人を、ほとん  
ど同時に突き殺してしまった。

二人の男は、声をあげるひまもなく、伝鬼  
の短刀で命を失った。女房はあまりのおそろ  
しさに足をすくませ、ふるえあがっている。

伝鬼はニヤニヤ笑いながら、血に濡れた短  
刀を女房の顔の前に突きだした。

女房は、わなわなとふるえ、真ッ青になっ  
て、しだいに隅の方へ追いつめられていく。

伝鬼は冷笑しながら、女房の胸ぐらを、ぐ  
いとつかんだ。

「おい、おかみ。命が惜しけりや、早くこの  
女の縄を解け。いやか。いやなら、おめえも  
殺すぞ」

女房は息の止まるおもいで、お鈴の縄を解  
きはじめた。嚴重ないましめなので、ひどく  
手間がかかる。やがて女の素肌から離れた数  
条の縄が、蛇のように、くねくねと床に散ら  
ばった。



伝鬼は、その縄を取りあげた。

「よし、今度はおめえが裸になる番だ」

伝鬼は女房の顔を激しくなぐりつけると、その帯を手荒く解きはじめた。

女房はますます青くなつて悲鳴をあげた。

おびえて尻ごみする女房を伝鬼は血に濡れた短刀を突きつけながら、恐ろしい目つきでおどしつけた。

女房はふるえあがり、着物をぬいだ。豊満な肉体が、さらけだされた。

その女ざかりの肉感的な裸身に、伝鬼は思わず舌なめずりした。何年ぶりかで、やっと妹に再会し、その妹は苛酷な責めにあつて半死半生でうめいているというのに、女の裸をみると、すぐにそのことを忘れる伝鬼は、やはり異常な性癖の男なのである。

「おう、いい肌をしてやがる。ちよいと見たところ三十二、三というところか。女ざかりの素ッ裸を、こうして見るのもまた、いいものだぜ」

妹のお鈴の安否をたしかめるのが、この場合、先なのに、女房の裸に目を奪われている伝鬼は普通の人間とちがって、やはり、かなり狂ったところのある男なのだ。あれほど妹に会うことを念願していたのに、それをける

りと忘れて、女房を縛りはじめたのである。

ふたりの男の死骸を三尺ほど離して並べ、その間へ、縛った女房のからだを、わりこませた。まだ縛っていない両足を、片足ずつ右と左の男の足に縛りつける。

伝鬼という盗賊には、常識では、とても考えられない、こういう妙なことをやる性癖があるのだ。

冷たくなりかかった男の足の感触を素肌にうけて、女房は、ひいっと悲鳴をあげた。その口に伝鬼は固く、さるぐつわを噛ませた。

残忍な笑いを浮かべた伝鬼は、割れ竹をひろいあげた。女房が、いま、お鈴にしていたように、からだじゅうを、ぐりぐり力まかせに、こじりあげた。おおむけになっている白い裸身が、恐怖と苦痛に、くねった。

女房は顔を醜くゆがめて、二人の男の死体の間で、ごろごろと、もだえ狂った。

「ひひひ、死骸のあいだで責められる味はどうだ。泣いてみる、吠えてみる」

伝鬼は割れ竹で女房の裸身を激しく打ち叩いた。すぐそばには、ようやくめぐり会えた妹が、瀕死の苦しみで、うめいているのに、こんなことをしている伝鬼である。

「そら、どうだ、おかみ。おもしろいか、こ

わいか、返事をしろ」

返事をしろと言われても、さるぐつわを噛まされているのだから、声をだせるはずがない。右を向いても左を向いても、女房は男の死顔を見なければならぬのだ。女房の表情は恐怖で、ひきつった。

縛られた裸身をよじらせて哀願のうめき声を噴きだす。

伝鬼は、むっちりと白い女房の太腿のあいだへ顔を寄せた。内腿のもっともやわらかいところを歯で噛むのだ。

「ぐうッ！」

女房は背中をのけぞらせ白い喉をひくひくさせてうめいた。左右にひらいた足は、縛られているので閉じることができない。

伝鬼は、さらに強く内腿を噛んだ。

このとき、女房の全身を駆け抜けるように鋭い感覚が走った。それは、この女が生まれて初めて感じたものであった。女房は濁ったうめき声をあげながら、この妖しい痛感に溺れこんでいった。

いつのまにか女房は恐怖も屈辱も忘れ、伝鬼の奇妙な責め方を、自ら求めるように体の力を抜いていた。

その変化を知ると、伝鬼はニヤリと笑って



立ちあがった。

もっと苛めてと言うように、女は妖しく尻をふるわせた。伝鬼は、それを横目でにらんで、お鈴のそばへ近寄った。

妹の存在をようやく思いだしたのである。

お鈴はまだ裸身のまま、身動きもできず虫の息で横たわっていた。伝鬼は女房が着ていた着物を、お鈴の肩に手早くかけた。

「お鈴、元気をだせ、兄の伝吉だぞ。わかるか。やっと会うことができたな。早く、ここから出よう」

伝鬼はようやく女房を責めなぶることをやめて、妹を背負った。

一刻後、伝鬼は妹をいたわりながら、まだ夜の明けきらぬ街道を走っていた。

## 裏切った男

慶長の年も、なかばとなった。

この頃から、江戸城修復、築工、増築と城の内外の工事が、さかんになっている。

伝鬼は、平塚で妹お鈴を救いだしたあと、江戸に移った。

神田お玉が池に近い豊島町の裏長屋に住んでいるのだった。

伝鬼は盗賊をやめようと思い、江戸城増築工事の人足となって働いていた。妹を安心させるために盗みをやめたのだ。

気違いの発作が嘘のようにおさまって、いまは割り合いに、まともな人間に落ちついてゐる伝鬼であった。

自分が殺した男のあいだに、裸の女を縛りつけて責めさいなんだことなど、けろりと忘れはてているのだ。そのへんが、やはり気違いと言え言える。

だが、いくら盗み商売をやめたつもりでも盗賊仲間からは、やいのやいのと仕事の誘いが矢のようにかかってくる。

兄貴分の向坂甚内までやってくるのだ。

お前がいないと片腕をもちがたうだ、と盗賊らしくない愚痴をこぼしたりする。

そんな愚痴をきくと、伝鬼の心に、またもとの生活にもどりたいたいという欲望が芽生えてくる。

伝鬼は、妹を早くまともなところに縁づけようと、兄らしい考えをもっていた。

たとえ裕福ではなくても、その日その日が安穩にすごせる男のもとへ嫁にできれば満足だと思った。だが、なにしろお鈴は娼婦だったのだ。そううまく縁談がまとまるはずはな

かった。

伝鬼の心には、まだ強奪、殺人、暴行を働くときの快感がしみついていて、ときどき疼く。自分では改心したつもりでも、やはり耐えきれなくなつて月に二、三度は、甚内の片腕となつて荒仕事をやるようになった。

慶長十六年、冬のことである。

古くからの盗賊仲間である十右衛門が甚内を裏切った。仕事の分け前のことから、甚内や伝鬼たちと口論になり、それが原因になったのである。

十右衛門の裏切りには、もうひとつ理由があった。十右衛門は伝鬼の妹に惚れこんで、いやらしく言い寄り、手ひどくはねつけられたのだ。

執念ぶかい十右衛門は、お鈴を誘拐し、甚内を訴人した。

そのころ、甚内はふとした怪我をして、破傷風から瘡おこりの病にとりつかれていた。役人に包囲されても、逃げることもできなかった。襲いくる焦熱の苦しみにうなっているうち、甚内は手向かいひとつせず、あっけなく役人に捕えられてしまった。

伝鬼のかくれ家へも捕り方が乱入した。

伝鬼は、からくも屋根伝いに血路をひらき



逃がれでた。ようやくめぐり会えた妹との暮らしも、わずかの月日で終わった。

伝鬼は江戸の北方にある牛田村に一人で隠れ住んだ。捕えられた甚内が、浅草鳥越明神裏の刑場で処刑されたことを噂にきいた伝鬼は、くやしくてたまらなかった。

甚内の最期を思いうかべると、無念さに腹が煮えくりかえる。そして、薄幸な妹の運命に血の涙を流した。

甚内や自分が役人に襲われたのは十右衛門の裏切りのせいだと知ると、伝鬼は気が狂ったようになり、またもとの残忍な凶賊にたちもどった。もう仲間など信用せず、一匹狼となって、妹をたずねながらの、ひとり稼ぎをはじめた。

自分たちを裏切り、妹をさらって消えた十右衛門には、どうしても一矢を報わなければならぬ。気違い伝鬼は、ますます、その本領を発揮した。

せっかく兄妹して今度こそ、まともな暮らしをしようと思ったのに、その夢は消え去ってしまった。怒りは噴炎となって、盗みの仕事に向けられた。押し入った家に娘がいると、かならず、なぶり、犯し、殺す。

妹お鈴の生死は、もうわからない。安穩に

暮している家の娘たちをみると、お鈴の運命を憐れみ、よけい憎しみが、わくのだった。

江戸の娘たちと、お鈴の運命には、なんの関係もないのだが、それを呪って残忍な仕事をするところに、伝鬼の狂った異常性があった。こうして伝鬼は、ますます人々から怖れられた。

## 女の執念

十右衛門は、江戸の市中やその近辺の旅籠<sup>はたご</sup>を転々として隠れひそみ、伝鬼や役人たちの追跡の目から巧みに逃げまわっていた。

十右衛門という盗賊は、人相を変え、さまざまな職業の者に変相することに特殊な才能をもっていたのである。

誘拐した伝鬼の妹のお鈴は、自分が、さんざん、もてあそんでから、小田原の女郎屋へ売り飛ばしてしまった。

この十右衛門に馴染みの女ができた。

江戸の街のあちこちに散在している娼婦たちのひとりで、おろくという女だった。

このおろくこそ、数年前、平塚で伝鬼のためにふたりの男の死骸の間へ縛りつけられてさんざんに責められた、女郎宿の女房であっ

た。あのとき伝鬼がお鈴と一緒に逃げたあとで、店から火がでた。

家は焼け、女郎たちも多く死んだ。

女房のおろくだけは、かろうじて助けだされたが、丸裸になってしまった。

おろくは流れ流れて江戸に入り、娼婦の群れの中に身を投じた。

十右衛門と深い仲となったのは、江戸へきてからである。この二人は、なぜか互いに心を惹きあうものをもっていたのである。

元和の年になった。

伝鬼の悪事は、ますます凶悪残忍になり、ある夜、尼寺に侵入し、八人の尼を、すべて犯したあとで、なぶり殺しにした。

ついに黄金五枚の賞金が伝鬼の首にかけられた。伝鬼の神出鬼没の行動に、役人たちも手を焼いてしまったのである。

この伝鬼を、発見したのが、そのとき鎌倉河岸の女郎宿に巣食っていたおろくだった。

伝鬼は、その女郎宿へ女を買いに現われたのである。

(あっ、あのお客は確か、あのときの……)

おろくは首を、ひねった。

平塚で、おろくが、ひどい目にあわせられたとき確かに賊は、自分で伝鬼と名乗ってい



イメージギャラリー 『帳(とばり)の中の悦楽』 岡 たかし



た。おろくにとって、あのときのくやしさは寝た間も忘れたことはない。

亭主の仇でもある。その夜、遊びにきた十右衛門に、おろくは、このことを告げた。

十右衛門は、こおどりして、よろこんだ。

「おろく。そいつは、もと、おれたちの仲間だった男だ」

十右衛門は、伝鬼が、いかに残忍な男であるかを、おろくに話してきかせた。

「よし、おれが伝鬼のかくれ家突きとめて

やる。お前は、すぐに役人のところへ訴えるのだ。ほうびの金で、おれたちは、いい思いが、できるぞ」

十右衛門は浮き浮きとしてきて、夜のふけるまで、おろくと戯れた。

伝鬼が自分の命を狙って探しまわっていることは、容易に想像できる。

伝鬼が生きているあいだは、枕を高くして寝られない十右衛門である。

「そうだねえ、お前さん。黄金五枚の賞金をもらったら、三年ぐらいは遊んで暮らしていけるよ」

「おい、おろく。今夜は、たっぷり可愛がってやるぞ。もっと、こっちへ寄れ」

十右衛門は、おろくを裸にすると、両手を背中にねじあげ、縄で縛りあげた。

「ああ、お前さん。そんなに強く縛っちゃいやだよ」

「なにを言やがる。こうやって縛られるのがうれしくてたまらねえくせに」

江戸の水で磨かれて、おろくの肌は、ますます白くなり、むっちりと厚みをおびて豊満に熟れきっている。十右衛門のかける縄が、そのやわらかい肌の中に、小気味がいいほど喰いこんでいく。



こうやって後ろ手に縄で固く縛りあげられると、おろくは自分でも不思議に思うくらいに妖しく燃えてしまうのだ。

数年前、いきなり伝鬼に襲われ、二人の男の死骸のあいだで責められたときの不思議な悦びが、よみがえってくるのだ。

伝鬼は憎いが、あのときのしびれるような甘美な痛覚を忘れることはできない。自分は今もともと、そういう性癖をもった女なのかもしれない、とおろくは思う。

十右衛門は巧妙な縄さばきで、おろくの足を、あぐら縛りにして締めあげた。その縄を首にまわして海老責めの形にするのだ。

凶悪な盗賊である十右衛門にとって、女を縛りあげるのは手慣れた仕事である。海老責めにしてから、夜具の上にくろがすと、全裸のおろくは熟れきった柔肌を慄わせて、あさましい姿で悶え泣くのだ。

「ああ、お前さん、恥ずかしいよ。いくら女郎でも、こんな形にされたら、あたしゃ恥ずかしいよ！」

その恥ずかしさが、また快感になって、おろくを甘く責めなぶるのだ。

「ふふふ、いい格好だぜ、おろく。お前みたいな女でも、こうやって縛りあげると、妙に

ゾクゾクした気分になってきやがる」

妖しい色気をまきちらしている、おろくの肌を十右衛門は、じわじわと責めなぶるのである。

盗賊には手先の器用な者が多い。十右衛門の巧妙な責めかたは、たちまちにして、おろくの肉体を、悩乱の極致に追いあげてしまうのである。

「ああ、お前さん。ひ、ひどいよ、お前さん……」

全身、汗まみれになって、おろくは早くものたうちまわる。汗を浮かべた肌が、いよいよ白く光って、おろくの熟れきった女ざかりの情欲は、醜悪なくらいに狂乱の悶えをみせて、男にせまるのだ。

十右衛門も、いまは夢中になって、おろくを責めなぶる。

おろくと十右衛門の心が通じ合うというのは、実は同じ嗜虐の性癖をもっているためなのかもしれない。

「ふふふ、おれは、こうしないと遊ぶ気持ちになれないんだ。そのかわり、縛りあげた女の前だと……」

「ひいーッ！」

おろくの髪は、もう乱れに乱れ、汗で白い

肌に貼りついている。真っ白な内腿の筋肉がねとねと光って微妙な悶え方をする。その姿が、また凄艶な色気を、むきだして、十右衛門の嗜虐欲を、かきたてるのだ。

豊満な乳房が縄に締めあげられて、異様なほど大きく盛りあがり、汗に濡れながら悦虐にあえいでいる。

十右衛門の脳裏に、ふと、伝鬼の妹のお鈴を凌辱したときのことが、よみがえる。

抵抗するお鈴を、十右衛門は裸にして海老責めに縛りあげてころがし、思う存分に弄んだのである。あのときの征服したという実感は今でも忘れられない。なんといいかわからないような感激で、十右衛門ほどのしたたかな男が、わあわあ声をあげて泣きだしたほどであった。

「もっと、うんと苛めて！」

目の前で、おろくが、あさましい姿を誇示するかのよう、縛られた縄を慄かせながら哀願をつづけている。

そのおろくの白い肉体を見詰めていると、十右衛門の目には、お鈴のように見えてくるのだ。

すると、十右衛門は狂おしくたかぶってきて、海老責めに縛りあげたおろくを、もっと



も残忍な方法で責めなぶらねば納まらぬ気持ちになってくるのだった。十右衛門は燭台の上の太いろうそくを手につかんだ。炎は大きくゆれたが、消えないで燃えている。

「な、なにをするんだよ。い、痛いよう！」

おろくの白い尻が恐怖と苦痛にくねったがそれは、すぐに悦虐の悶えに変化して、炎がおろくの妖艶にゆがむ表情をあかあかと照らし十右衛門の欲情を、いっそうかき立てた。

「ふふふ、やい、おろく。おめえのことは実は伝鬼の口からも、きいているぜ。おめえは伝鬼の野郎に責められ、ヒイヒイ泣いてよろこんだそうじゃねえか」

鋭い苦痛に、おろくはヒイッとして絶叫して一瞬、全身を硬直させたが、同時にしびれるような感覚に襲われ、泣き声は甘美な、あえぎに変質していくのだ。

十右衛門が、ろうそくを近づけるたびに、妖しいあえぎが、海老縛りにされたおろくの柔肌から、にじみだし、被虐の欲情にまみれた白い全身が、ぶるぶると、けいれんする。

「痛い、痛いよう。そんなに尻を責めちゃ死んじゃうよう！」

涙にぬれ、うるみきった瞳を十右衛門にむけながら、おろくは自分から苦痛を求めている

のに気がついて激しく悩乱するのだった。

尻責めのろうそくは、もはや狂気の責具と変ったといえるようだった。おろくの苦痛は並み大抵のものではない。だが、苦痛が激しければ激しいほど、おろくの肉体は燃えてうずき、強い快楽を得ることができるとだ。

「ああ、ああ、お、お前さん、痛い。そ、そんなにひどいことをしないでくれよ。お尻が熱い。死んじゃうよう！」

喉をひきつらせて泣き悶えるおろくを、おさえつけて十右衛門は、せせら笑う。

「なにを言やがる。おめえのような、しぶとい女が、このくらいの責めで死ぬものか」

手につかんでいる太いろうそくで、なおもぐりぐりと責めつけるのだ。

「ひいッ、ひいッ。ああ、駄目、駄目。あたしは殺される。殺されるよう！」

苦痛にあえぐ左右の内腿が、いっそう白く変色して、なまなましく挑発的に、うごめき悶えている。

「いっそ、殺してやろうか。おい、おろく」「ヒイッ、殺して。殺してようッ」

固く海老縛りに縛りあげた縄が、豊満な柔肌の中へ非情に喰いこみ、その凄惨で、しかも妖艶な光景に、十右衛門も汗びっしょりに

なって、夢中で責めつけている。

（江戸に女郎は何百人いるか知らねえが、これほど好きな女も、二人と、いねえだろう）興奮した十右衛門は、握りしめている太いろうそくに尚も力をこめた。

「ぐえーッ！」

凄絶な苦痛に、おろくは悲鳴をあげて、のけぞった。いや、のけぞろうとしたが、海老縛りの嚴重な首縄のために、背中や胸をのばすことはできない。

「お望みどおり、殺してやるぜ」

「ひ、ひいッ。う、う、痛い、痛い。たまらないよう！」

大粒の汗が、おろくの白い、むちむちした首筋から噴きだし、豊満な乳房のあいだを流れ、脇の下まで濡らしていく。

「ろうそくで責め殺される気持は、どうだ。ええ、おろく」

なおも執拗にぐりぐりと力を加える。そのたびに、おろくは甘美な悲鳴をあげるのだ。

「も、もうゆるしてよう、駄目だよ。か、かんにんしておくれよう！」

もう髪の毛も、ざんばらに乱れ、汗のために水を浴びたように濡れている。

「おめえを、こんな体にするとは、伝鬼のや



つも罪なことをしたなあ」

十右衛門は手をゆるめ、思わずつぶやく。

「駄目だよ、手をゆるめちゃあ。もっと、もっとだよッ！」

燭台の灯が汗に濡れて淫らに光る、おろくの尻を照らした。

「ひ、ひどいよう、お前さん！」

苛烈な、ろうそく責めを、おろくはかえってよろこび、自分で尻をよじるようにして、なおも苦痛を、むさぼろうとするのだった。

さすがの十右衛門も、おろくのこの狂乱の悦虐に、ふと、うそ寒いものを感じた。

蠟涙が垂れて、おろくの皮膚に、したたり流れた。白濁の熱い蠟のかたまりが肌を汚していく。

「熱い、熱い。熱いようッ！」

だが、蠟涙を皮膚にうけ、おろくは、なおも快楽の声をあげて、あさましく尻をふるわせるのだった。

暁方になって、十右衛門は、ようやく、おろくの縄を解いた。おろくは、さすがに疲れ果て、いびきをかいて眠った。

## 伝鬼の死

牛田村の百姓家の物置き小屋に隠れていた伝鬼を、役人たちが急襲した。

おれは絶対に捕まらないという自信を伝鬼は、もっていた。だが、寝入りばなを襲われて逃げることはできなかった。

それにしても、この隠れ家が、どうして役人たちにわかったのだろうか。

（十右衛門のやつだ。あいつをおいて、ほかにおれを指すやつは一人もいねえ）

と、伝鬼は直感した。

縄をかけられてからも、伝鬼は暴れた。

血走った眼が、伝鬼の顔面をいっそう凶暴なものにした。伝鬼は歯ぎしりをしながら役人をふりとばし、抵抗した。

「ちくしょう！」

伝鬼はからだを横にねじ曲げると、がぶりと、ひとりの役人ののど笛に噛みついた。

びっくりした役人たちは、よってたかって伝鬼の頭を、ぶちのめした。

伝鬼は、ざんばら髪となり、眼は吊りあがって、からだじゅうが血に染まった。

見るも無残な伝鬼の死にざまだった。数日後――。

おろくは自分の寝部屋で、役人からもらった賞金を、しっかりと抱いて夢をみていた。

いやな夢だった。左右に男の死骸が寄り添っていて、足が氷のようにつめたい。

おろくは、ぶるぶるっと身ぶるいして目をひらいた。眼前に、ぬうっと立ちほだかった男がいる。伝鬼の姿だった。

血潮に染まった、ざんばら髪。つぶれたような青い顔。胸や腰や、手足の先から、だらだらと鮮血が流れだしている。

ぎょろりとした鋭い目で、伝鬼は恨めしうに、おろくをにらんだ。

あっと叫ぼうとしても、あまりの恐ろしさに、おろくは声がでない。

やがて伝鬼は接近して、おろくの硬直したからだに、無気味に、のしかかってきた。

重い。苦しい。おろくは、ううん、ううんと、うなりながら悶えた。

そこでおろくは、はっと目がさめた。のしかかっているのは、伝鬼ではなく十右衛門だった。

十右衛門が馬乗りになって、おろくの胸を圧迫しているのだ。

「おい、おろく。おめえみてえな女には、もう飽き飽きしているんだ。金だけ頂戴すればもう用はねえ」

十右衛門はキラリと短刀をぬいた。おろく



の胸に、ひと突きと、ふりあげた。

おどろいたおろくは夢中で足を、ばたばたさせ、十右衛門の刃をふせごうとして両手をのばした。それを片手で払いのけながら、十右衛門は短刀を、ふりおろした。

刃先は、おろくの、のどの急所をはずしてざっくりと耳の下を斬り裂いた。

おろくは、ギャツと叫んだ。

数人の役人が躍りこんできたのは、ちょうど、そのときだった。十右衛門が、おろくに愛想が尽きていたのと同様に、おろくも、ひそかに十右衛門を訴人していたのだ。

十右衛門は役人に縛られながら、上半身血みどろのおろくを、無念の形相でじっと見すえた。

「うッ、おのれ、伝鬼！」

そう叫ぶと、十右衛門は目を大きくみひらいた。おろくの顔が、伝鬼の恨みをこめた顔に変わっているのである。

おろくは十右衛門をみあげ、イヒヒヒと無気味な笑い声をあげながら死んだ。

## 遊女をのぞく幽霊

元和三年五月のことである。

隅田堤に近い、関屋の里の遊女宿では、京の六条から、はるばるやってきた遊女たちが酒を飲みながら明るく騒いでいた。

遊女取りしまりの頭領、庄司甚右衛門が、再三再四、幕府に申請していた遊女町建設の許可が、やっとおりたのである。

甚右衛門は、もう一年も前から、これらの遊女たちを、関屋の里に借り受けた元郷士の屋敷に、住まわしていたのだった。

その辛抱の甲斐があつて、いよいよ江戸のまんなかで商売できるのだ。

遊女たちは、よろこびの声をあげ、にぎやかに酒を飲んでいた。

関屋の遊女宿は、早くからこの辺りの里人たちに噂されていた。遊女といっても、女たちは、みんな美しく、しとやかで、里人は好感をもっていたのである。

遊廊の建設は、はかどっている。

夏であった。

この年の夏は、ことに暑く、昼の暑さにうだっていた十数人の女たちは待ちかねていた夜になり、涼風がおとずれるとホッとした。

縁側に腰をおろし、薄やみの庭に向かいながら、めいめい雑談の花を咲かせはじめた。

まだ五ツをすぎて間もない刻限であった。

庭の小さな池の向こう側に据えてある石灯籠の灯が、ふいに明滅した。ギョツとして女たちの目は、一せいに石灯籠に向けられた。まばたきをするように明滅する、その灯の前に、黒い人影が、ぼんやり現われた。

その黒い影は、ひよろ、ひよろと池のふちを歩きはじめた。

女たちはゾツとして青くなりながらも、多勢をたのみにして、その黒い影を、こわごわ見つめていた。影は、やはり、ひよろひよろと揺れながら、女たちのいる縁側に近づいてきた。男である。

女たちのなかのひとりが、行灯に灯をいれて、ぶらさげたり、かざしたりして、その男の正体を見ようとした。

男が接近してきたとき、女は行灯を、さつと、つきつけた。男の顔をみて、女たちは、びくっとして息をのんだ。

あまりにも怖ろしい形相であった。

青い蓮の葉のような顔に、赤茶けた目と瞼が貼りついている。

歯ぎしりをしているような口もとは、噛みつきそうな激しさで裂けている。

女たちは悲鳴をあげて縁側の上にうつ伏した。さむけをおぼえて女たちは、ふるえがと



まらず、息がとまりそうな怖ろしさである。しばらくたって気がつく、怪しい男は、いつの間にか、いなくなっている。

女たちはホッとした。

そして、無言で顔を見合わせると、座敷の中へ、われさきに駆けこんだ。

つぎの夜、女たちはもう庭に出なかった。怖ろしいおもいをするのは、いやだった。

だがその無気味な男は、真夜中になって、女たちの熟睡中に、今度は広間に現われたのである。女たちのひとりひとりの寝顔を、男は立ちどまっては、のぞきこむ。

二、三人の女が、その気配に、ふっと気づいた。金切り声をあげて女は、さっと飛び起きた。その悲鳴におどろいて、女たちが、いっせいに目をさましたとき、男の姿は、もう消えていた。

### 四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫があり、是非蔵書の一部未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。

略号『花』

定価五〇〇円(送共)

この話が、いつのまにか里人のあいだにもひろまっていった。

顔形からいって、その男は、もしや飛驒の伝鬼ではあるまいか、とだれかが言った。

忘れかけていた盗賊、伝鬼の噂が、幽霊となって、ふたたび現われたのである。

このあたりに住む人々のあいだに、新しい恐怖が、わきあがった。

「生きているあいだは、さんざんに盗みを働いて、たくさんの人を殺してきたのに、自分が殺されたとなると、幽霊になって人をおどろかせるなんて、伝鬼という男は、どこまで悪党かわからない」

人々は、こんなことを言って噂をした。

そんなある夜、伝鬼の亡霊は、もうろうとして、煙のような白い影を見せながら、遊女宿のなかを、さまよっていた。

なぜか声だけをかすかにだして、その醜貌を見せなかった。

女たちを脅かすことをやめにしたらしい。その声は低くはあったが、女たちの耳に、はつきりと聞きとれた。

「お鈴。お鈴は、いないか。この家には、たしかに妹が、いたはずなのに」

伝鬼の影は悲しそうな声で低くつぶやきな

がら、なおも、さまよい歩くのである。

女たちのなかに気丈な者がひとりいて、寝床から首をあげ、ふるえながら答えた。

「お鈴さんと言いましたね、伝鬼さん。たしかにいましたよ、そのひと。悪い人に売られてきました。私たちの旦那さまに助けられました。庄司甚右衛門という旦那さまです。」

お鈴さんは、しばらく私たちと暮らしていました。あなたが死んだことを知ると、旦那さまのおすすめで、浅草の明王院という尼寺にきました。ええ、お鈴さんは尼さんになられましたよ」

その言葉に伝鬼の亡霊は、いちいち、うなずいているようだった。

やがて女の話が終わると、そのまま、すうっと消え失せていった。以来、このあたりで伝鬼の亡霊話は、きかれなくなった。

尼寺へ行ったお鈴は、兄伝鬼の仏事供養を一日も怠らなかつた。世間の人々を苦しめた恐ろしい人間ではあったが、自分にとっては妹おもいの兄だった。江戸で兄と暮らした楽しい思い出だけを、いつも胸に刻んで、お鈴は読経に明け暮れていた。

そしてお鈴は、八十歳になった年の秋、安らかに目をつぶった。



告白

恋人とのプレイ・レポート

山田 一作



私と恋人笑子（エミコ）とのプレイフォトを同封してみました。私は二十四才の会社員で、笑子は二十一才の女子大3回生です。昨今、売り出し中の浅田美代子に、ちょっと似た可愛い娘です。

知りあって、もう半年以上になります。すでに奇巧の大ファンであり、心情的サディストであった私と違って、笑子は、そんなことを、まったく知らない汚れない乙女でありました。

親元を離れ、一人でアパート暮らしをしている他しさ故か、私と笑子は、急速に親しくなっていました。私を兄とも慕う笑子は、いろんな相談をしかけてきました。幾分か遊びの要素のある私と違って、笑子の私への親愛の情は、本物になってきているのが、私は、よくわかりました。それがわかるだけに、私の隠された性向（SMプレイ、特に浣腸、アヌスプレイ）を、笑子に打ち明けることができなくなって、私は、とても中途半端な気分です。彼女とのデートを続けていました。

そんな、ある日のことです。例によって、私にかけられてきた、いろんな相談の一つに、便秘を直す方法を教えてほしいというのがありました。笑子は至って真面目な顔で私に尋ねていました。

「浣腸したら、いっぺんに直ってしまうよ」

突然、言ってしまった私は「浣腸」という言葉に、はっとしてしまいました。今までかくしかく



してきた自分の性向が、バレてしまうのではないだろうか、一瞬ドキッとしました。変態呼ばわりされて、さげすまれるのではないだろうか。そんな不安でいっぱい私の耳に、とび込んできたのは「カンチョウって、あの、お尻にするのしょう？ なんだか、嫌だなあ。子供のころ、病院でされ



たこと、あるんだけど、とっても苦しかったのを覚えてるわ。でも浣腸って、効くのかしらね？」

興味ありそうな笑子の言葉でした。そこで私は、あとで思い出しでも恥かしくなる程、能弁に、浣腸の種々相について、喋りつづけたのです。西洋では美容術の一方法であり、親が子にしてやっていると、何とか、とにかく、イルリガートルからイチジク浣腸に至るまで、こと細かに話しつづけたのでした。

次のデートの日、世間話の後で笑子は、ちよっと照れながら、私に話しかけてきました。

「あのね、この前、教えてくれたでしょう。あれ、やってみたの」

「あれって？」

「便秘直す、カンチヨウ」

「ああ、あれ」（内心、ドキッとせざるを得ませんでした）

「薬屋さんへ行って、恥かしかつたわよ。大人用って、二個入ってるのを買って帰って、してみたのよ。いやだわ。恥かしい！」

私は顔はニコニコさせてはいるものの、もう、次にくる笑子の言葉が待ちきれなく、胸の高鳴りを押えるのに苦労しました。

「で、どうだったの？」

「苦しかったのなんのって、油汗



がでたわよ。本当よ。でも、本当に効くのね。スルスルッて、気持ちよかったわよ」

私は生つばを飲み込むのが、やっとでした。

それから三カ月たった現在では同封のフォトを撮ることに成功しました。自家現像なので現像ムラがあったり、乾燥機もないので、仕上りは汚いですが、もしよろしければ、誌上に発表されてもかまいません。



ごらんのとおり、私達のは、SMプレイといっても、まだ一度も縄は使ったことがありませんし、もっぱらアヌス責め中心のプレイであります。

写真1と2は浣腸してるところと、排便後ふいてるところです。排便中の写真は、絶対に嫌だと駄々をこねられ、そのかわり、全裸開脚の写真を撮ることを許してくれたのが写真の3と4です。先輩諸氏に御笑覧願えれば幸いです。



# プールに関する提言

野村多津男

暑い夏の消化方法としては、プールでの水泳は最も楽しいもののひとつでしょう。

近頃は、大都市の近海は汚染されて、水泳には適さなくなってきましたから、水にたわむれるというのは、どうしても、プールでということになります。

澄んだ、きれいな水、輝く太陽色とりどりの美しい水着姿、その場に居るだけでも、楽しい雰囲気です。

しかし、プールには問題があります。

大腸菌です。

保健所の調べによりますと、都会の一流ホテルのプールにも、大腸菌が、うようよしており、衛生基準に合格するものは、なかなかないそうです。

プールの管理をする方でも、塩素などを、どんどん入れて、菌を減らそうとします。

でも、これでは、根本的な解決になりません。なぜかといえば、大腸菌は、自然発生するものでもなく、水が汚くなると増えるとい

うものでもありません。

原因は一つ、プールに入る人のアヌスにあるのです。

一流ホテルのプールに入る、貴婦人のアヌスだって同じです。

みんな、アヌスが汚いのです。かって、私は、駅の便所で、女性

性の拭き方を、調べたことがあります。さすが、十人中八・九人までは、

簡単な拭き方しかしないのです。あれでは、プールの水が汚れる

のも無理もないことです。

風呂に入る前には、誰でも必ずアヌスと、女性のばあい、〇〇〇

を洗って入るではありませんか。温泉や、公衆浴場で、もぐった

り、湯の中で目をあげたりする人は、いないでしょう。

プールでは、もぐって水の中で目をあげるどころか、多かれ少なか

れ、必ず水が口に入るものなのです。それにもかかわらず、汚い

ままのアヌスで水の中に入ること

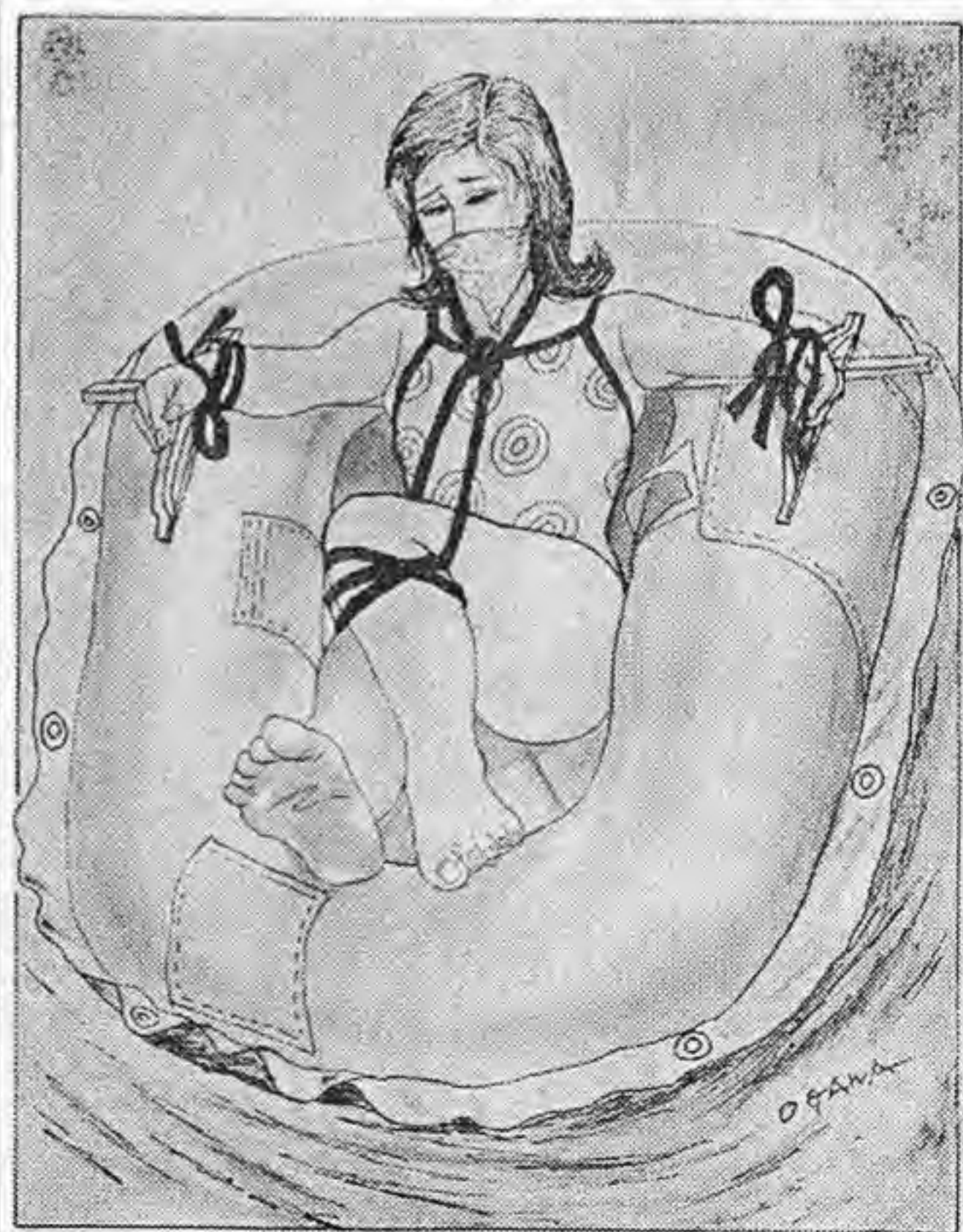
に問題があります。

しかし、汚いアヌスは、ほんとうに汚いものなのでしょうか。私は、そうは思いません。プー

ルに入るぐらいの年齢層の女性の汚い、くさいアヌスが大好きなのです。

関西には「ねぶりつく」ということばがあります。ただ舐めるというのとどまらず、吸いつくように舐めるといえばよいのでしょうか。

ねぶりついてみたいのです。そこで提案があります。



イメージ画 『海の収穫』 小川茂正

プールに入るまえに、きれいにしてほしいとおっしゃる方があれば、私がねぶりついて、きれいにしてあげたいのです。

遊泳中「あら、わたし、したくなってきたわ」と、いって、トイレへ行かれたときには、私も同行し、人目につかぬ所で、またきれいに、ねぶりついてあげたいと思います。



ただ、この方法は、女性にとっ  
ては馴れるまで、勇気が必要で  
すので、もう一つ方法があります。  
それは、プールサイドに、もう

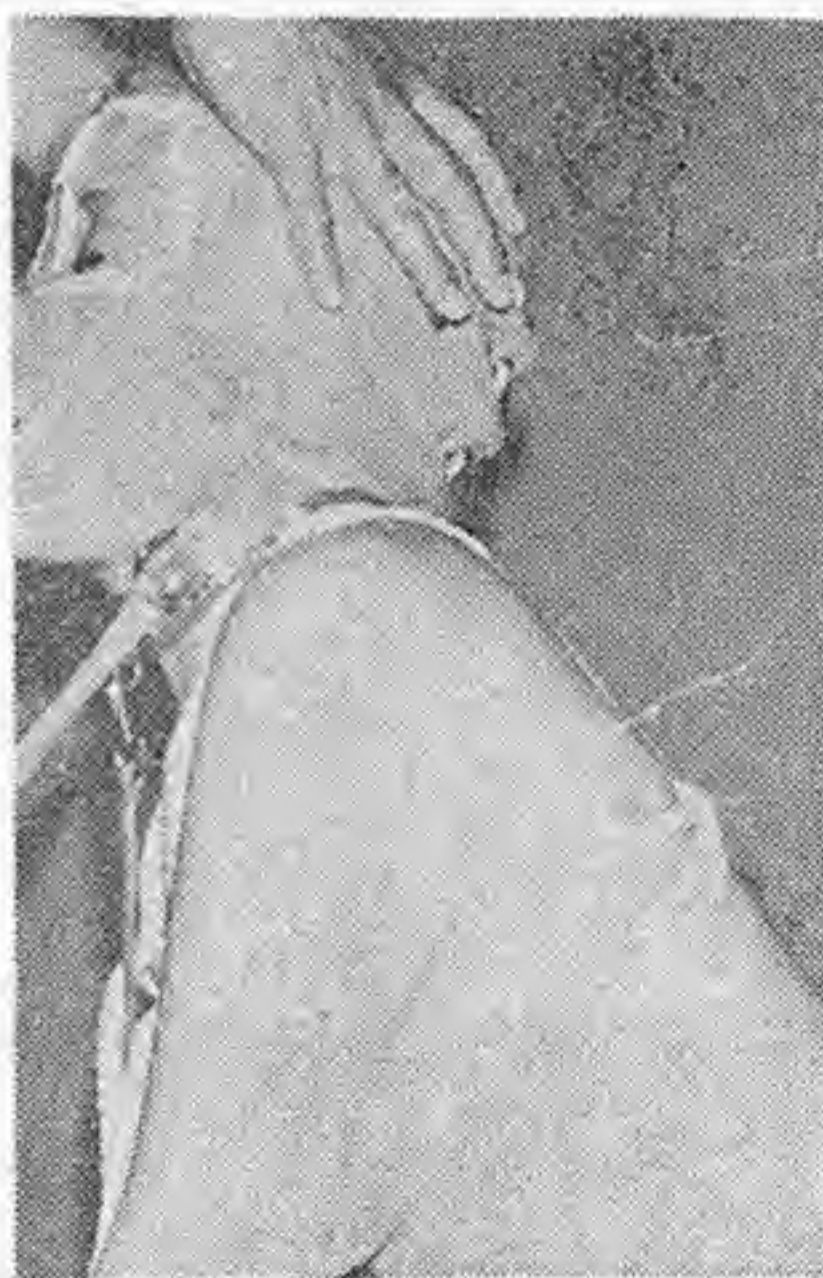
## 拝啓、編集長殿

青木 順一

七月号で、思いがけない頁数  
を占めた自分のの雑文と対面、  
びっくり致しました。投稿が誌  
上に掲載された時の気持は、な  
んとも云えないものです。ただ  
よもや採用されるとは想わな  
かった代物だけに、資料写真を添  
付しなかったことが悔まれてな  
りません。と申しますのは、小  
生の好みはあくまでゴムの猿ぐ

一つ、小さなプールを作り、その  
前に水道栓をつけ、女性の方々に  
は必ずそこで、アヌスと〇〇〇を  
洗っていただく方法です。

そして、洗うのに使った水は、  
その小さなプールに流れ込むよう  
に、します。トイレまで行くのが  
めんどろな方は遠慮なく用を足し



つわでして、そ  
のきびしさに悶  
える女の表情を  
主流としたプレ  
イに憧れている  
からなのです。  
しかし、小生  
のプレイ写真は  
所謂SMプレイ  
としての鑑賞に堪え得るものでは  
なく、ゴムぐつわを  
ポイントとする意図  
が、どこまで強調で  
きるかと思うと心細  
い気がします。

時々、マニアの投  
稿が載っている貴誌  
を、マニアの自分が  
心躍らせて愛読する  
根本の心情は、一体  
何なんだろうかと考  
えこむことがあります。

ですが、どうも、同じSMの中でも  
違いがあるので、自分に類するも  
のを無意識に求め、その分野のは  
での未知の責めをたずね、出来得  
れば共同プレイ可能の同好者と知  
己を得たいという願望が作用して  
いるように思えます。

小生の場合「求めて得られぬ」  
そうした悩みを奇クによって幾分  
でも解消しているわけですが。七  
月号ではゴム責めマニアの投稿文  
が比較的多く見られ、たいへん心  
強く思った次第です。

てもよいことにするのです。  
そして、すぐ洗ってきれいにす  
ればよいのです。

そのために、水着も改良する必  
要があります。トップレスの逆に  
ボトムレスとって、底のない水  
着にするか、あるいは、ホックで  
股部が簡単にあけられるようにし  
ます。

この方法が普及すれば、プールの  
大腸菌は、たちまち、零となり  
ます。

言い忘れましたが、女性はこの  
ようにしてきれいになっていただ  
きますが、男性は別に設けた風呂  
に入って、石ケンで、ていねいに  
洗ってからでないと入れないこと  
にしては、どうでしょう。

私には、ホモの方達の気持は、  
わかりませんが、男性の体につい  
ては、ほんとうに汚いものと思っ  
ております。

このようにして、メイン・プー  
ルは大腸菌零の理想的水質のプー  
ルとして、保健所から表彰状をも  
らえる状態になり、その反対に、  
サイドの小プールは、女性の大腸  
菌がいっぱいです。

私は、この小プールで、心ゆく  
まで泳ぎたいと思います。



裕子の乳房とプレイへの誘い

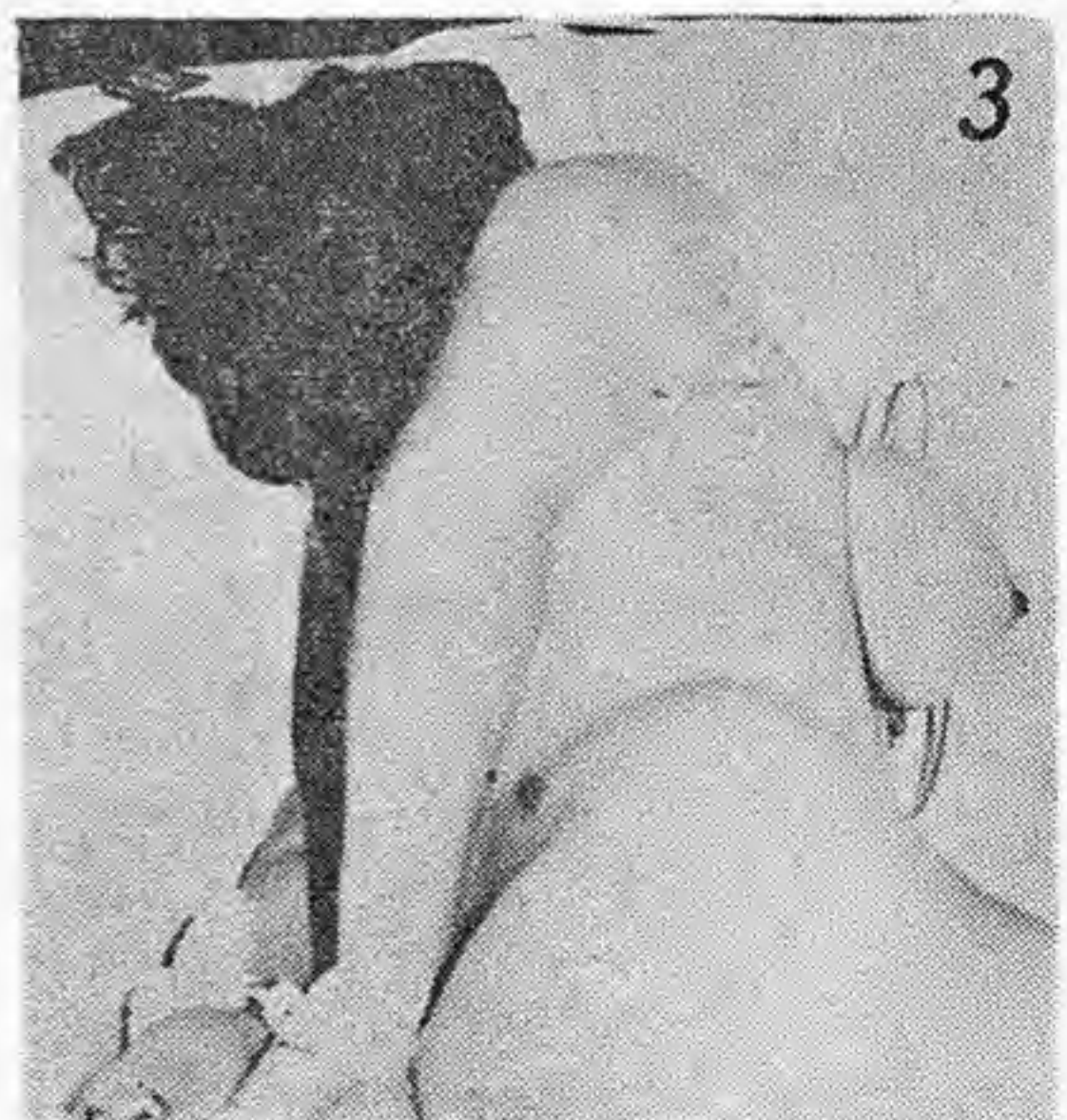
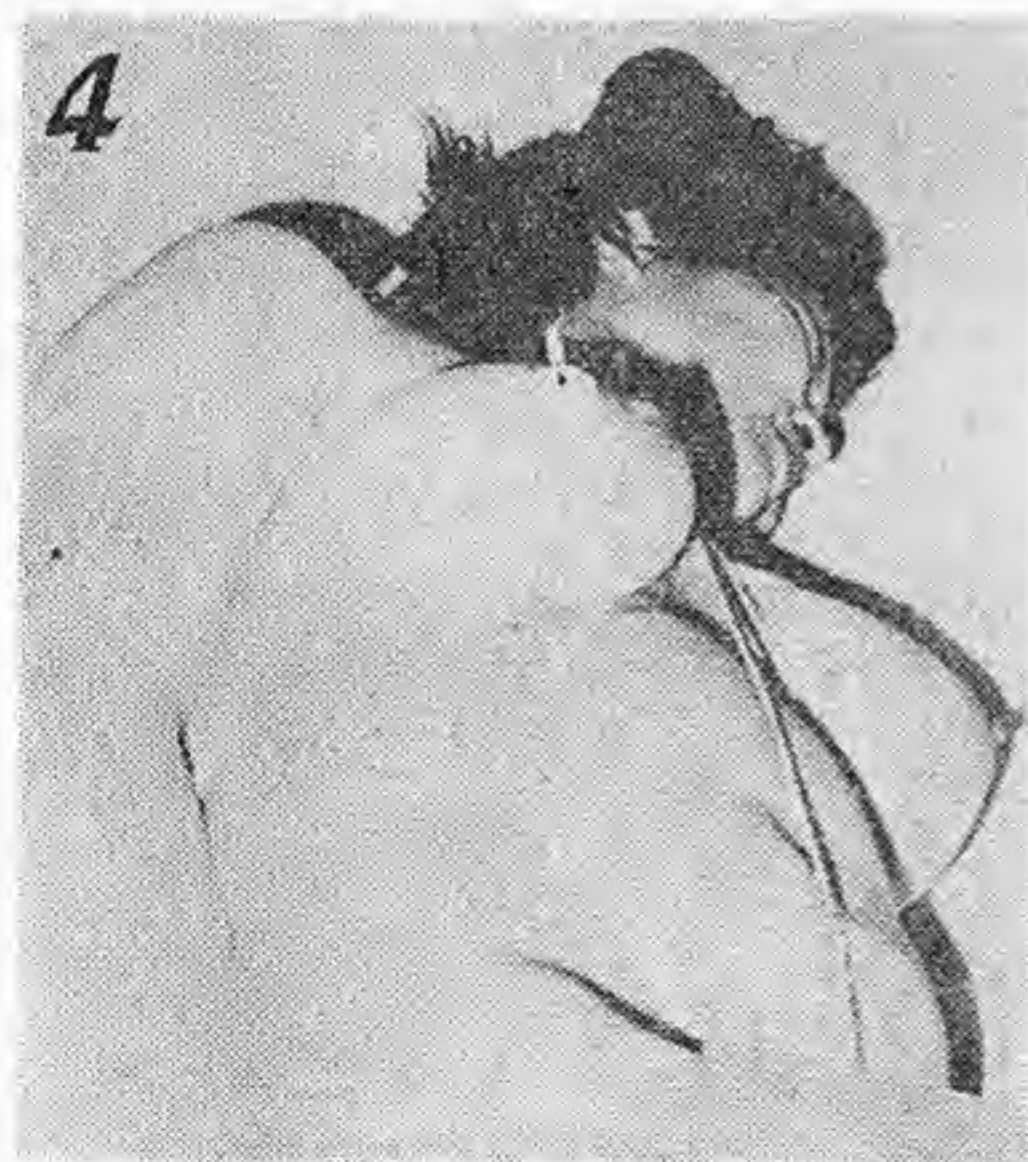
最上卓也

九月号のサロン欄で小池明男氏の「裕子の乳房が二、三号前より張りがなくなつたのでは……」という御意見を拝承。そうかな? と早速に裕子を誘い出し、車の中で改めて検査をしてやりましたが、なるほど、意識するほどではないにしろ、以前ほどの手応えはなくなっているようにも思えます。しかし、裕子の話によるとバストが八十八から九十一に



上がっているそうなのです。小池氏の記事を見せますと乳房吊り(同封写真)で苛められるセイじゃないかとボヤいておりましたが、写真にする場合、カメラアングルや、

感情的な盛り上がりによって、多少、その形に変化を来たすようです。ともあれ、この件については、ふとしたことで知り合った米沢市の大学生と、花笠祭りの夜、裕子にプレイさせることになっておりますので、その大学生に意見を聞かせてもらつつもりです。写真関係は私が受け持つことになっていきますので、最近の裕子の肢体を御披露できると思いますが、とりあえず、ここに、二三年前のもの(1・2)と最近のもの、(3・4)とを同封して、裕子の乳房くらべをしていただこうと、思い立ちました。見くらべてやっ下さるようお願いします。

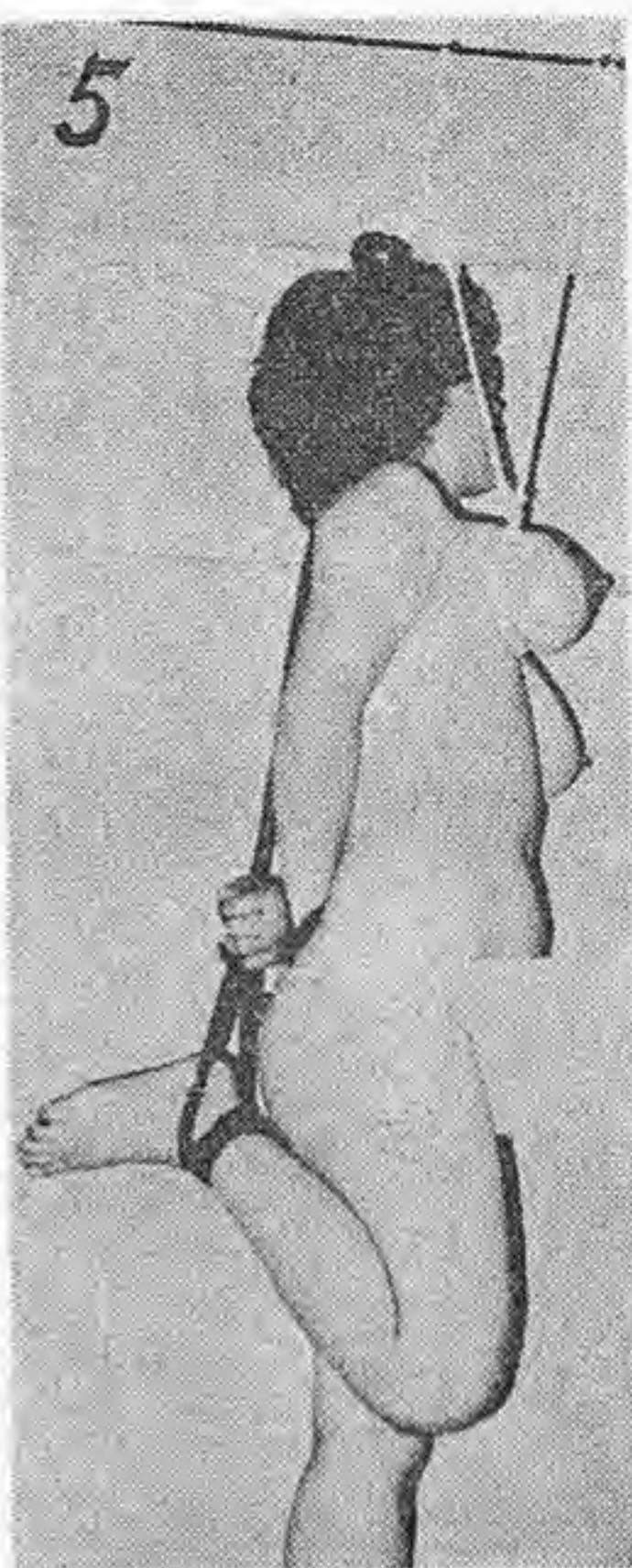




……と裕子がボヤいた乳房吊りが  
(5)と(6)ですが特に(6)  
のように、鍾りのついたクリップ  
を乳首に噛ませてやりますと、頭  
のシンまでしびれ上がるようだ

裕子は云います。

東京・品川の内山さん。同じ九  
月号にご投稿の宇津木さん。いか  
がです、私達と一緒にプレイしま  
せんか。私は以前、本誌にも紹介



しましたが、某誌上の呼びかけに  
だまされたニガイ経験を持ってお  
りますので、自分に引きくらべて  
貴殿らご夫妻を失望させるような  
ことは絶対に致しません。尚、私

達の行っているプレイは勿論、私  
の好む責めということになります  
が、それぞれ好みがあることも、  
よく心得ているつもりです。お便  
りをお待ちしております。



## 獣交姫

### 二美人に想う

加納

操

私は、初めて奇クを手にした  
時、誌面を飾る魅力的な写真に  
新鮮な感動を覚えました。

奇クの虜となった私は、夜の  
明けるのも忘れて夢中で読破し  
諸先生方の豊富な体験記や読物  
小説に、アブノーマルの世界に  
すっかり魅せられてしまいました  
た。

そして、甲斐千恵子様の『人  
と獣の交り』を拝見しまして、  
その勇氣ある発言に驚嘆いたし

ました。私も過去に於いて獣との  
交合の経験がありますが、罪悪感  
がわざわざいして、とても発表する  
勇氣がありませんでした。

私の場合は牝豚でしたが、急に  
羞恥と嫌悪感におそれ、何とも  
言えない屈辱感で、その場から逃  
げだしたものでした。

もし、私が甲斐千恵子様や南政  
子様と、お会いする事が出来まし  
たら、私以上の屈辱感を味あわせ  
てやりたいと考えております。

千恵子様と政子様を裸にして、  
椅子の上に、うつ伏せにして手足  
を椅子の脚に縛ります。そして、  
お二人の真白い臀部に、発情した  
牝犬の分泌物をたつぷりと塗りつ  
けます。

立てば大人の背丈ほどもある逞  
しい牡犬を、けしかけます。さて  
結果はどうでしょうか。想像する  
だけでも、素晴らしい光景となるの  
と違いますか。快楽の波に翻弄さ  
れた貴女の末路は、手首を縛りつ  
けられた椅子の脚を掴んで失神し  
てしまうでしょう。

人と犬との交りを、実際にこの

目で見ていない私は、只空想力  
を働かせるだけです。私の願  
いは獣交姫の甲斐千恵子様と南  
政子様に、お会いしたいこと  
です。私は今年30才、S性もM性  
もありますので、貴女方のその  
日の気持次第で、マルキ・ド・  
サドにも、マゾッホにもなる用  
意があります。私の舌で、貴女  
方のアヌスに奉仕する日が来ま  
したらこの上ない幸せです。

どうか、甲斐千恵子様、南政  
子様、私を犬とのプレイの介添  
えとして、或は又、助手として  
使って下さい。お願いします。



# 奴隷光林裕二への命令 高橋千寿代

おまえを正式に奴隷にするため個人的にコンタクトしたい。次号にお前の住所を載せよ。命令に背けば、私との間も、これまでとお思い。お前は、まだプレイの経験はないようだがもし私の専属奴隷になったら、あらゆるマゾヒスチックな思いができるだろう。

武道と水泳で鍛えた、逞しい太腿に挟まれたお前の顔は、ぐしよぐしよに濡れることだろうね。私は今、専属の奴隷がなくて大変な欲求不満なのよ。来月には新しい奴隷が来る予定だけど、これもすぐに穴掃除というわけにはいかないし、とにかく、お前の住所がわかったら、こちらから連絡をするから奴隷の身を片時も忘れぬこと。



## イメージ画『あて替え』 原由貴子



## おしめカバーの合法性

山田裕治

一、おしめカバーの目的  
本誌に於いての、おしめカバー論争も、相当、高度となり、読者も真剣になって来ます。  
九月号、岩手氏の「おしめ学」を読んだ時の充実感も素晴しく、特に女性のおしめ姿は感激しました。今後も、このような素晴らしい写真が掲載される事を望みます。  
ところで、おしめカバーの目的について岩手信夫氏は、本誌昭和四十三年十二月号から一貫して、「夜尿願望」であると、されています。  
岩手氏によると「赤ちゃんのようにおしめカバーにおねしよう」



ブルマーに憑かれて

## 灰色とバラ色

博多 弘

奇クの皆さん、お元気ですか。ぼくは浪人生活二年目で毎日が灰色の連続です。現在の楽しみといえば、ブルマーの絵を描くことと、こっそりブルマーを穿いて鏡に映し、眺めることです。このごろ流行のびったりしたのはあまり好きでなく、昔の人が用いていたといわれる少しゆったりした感じの物が好きです。それで男物のいろいろなパンツの裾にゴムを入れたり、自分で裾口にレースをつけたりして穿いています。



踊り子がよく穿いているようなサテンの光ったものや柔らかくさらっとしたブルマーが欲しいのですが、残念ながら手に入れません。若い女の人の夏服には、袖口にゴムの入ったいろいろの形の上衣がありますが、ぼくは、そんな服を着ている女の人を見ると、下着も同じようなブルマーを穿いているに違いないと想像してしまします。よく見ると、いろいろなゴムの入れ方や、しぼり方があるので楽しいです。ぼくは、そんな時が最高に幸せで、うっとりするとが出来るのです。奇クにも、いろいろのブルマーの絵を載せて下さい。

をすることが、おしめカパー愛好者の本質とされるのですが、確かに夜尿症になれば、お母さんが、赤ちゃんのように、おしめカパーをしてくれるかもしれません、それは手段であって、目的は「赤ちゃんのように、おしめカパーをすること」にあるのです。

以前、岩手氏は、夜尿願望であるから「一人のおしめ遊び」ができる旨、書いておられますが、目的からして当然に「一人のおしめ遊び」が可能なのでありまして「おねしよう」をするか否かは、「おしめカパー遊びの」態様の内の一個であるにすぎないのです。故に私は愛好者の一人として、岩手氏の主張される「おねしよう」の必要性に反対するわけでありま

す。従って私は、おしめカパーの目的は「赤ちゃんのように、おしめカパーをする」ということにあると思っております。故に、おしめカパーに洩らさないでも、おしめカパー愛好者たる資格は充分にあると考えます。

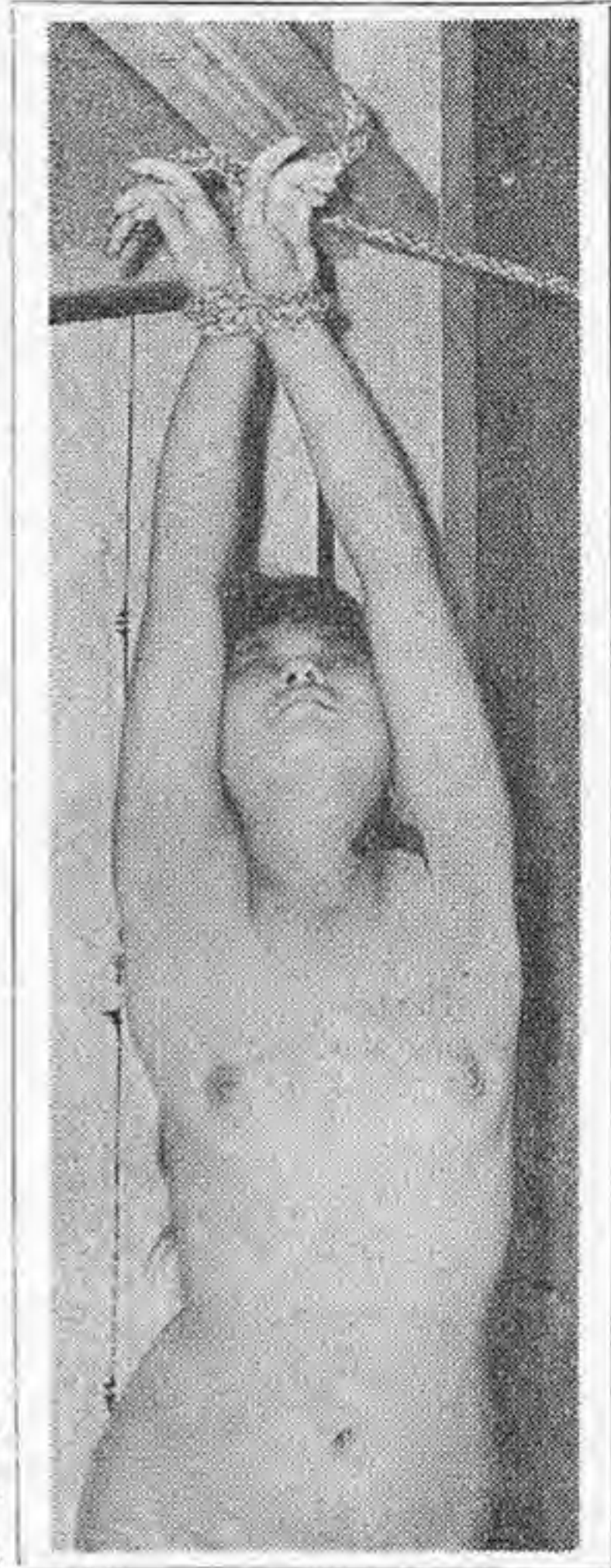
二、おしめカパーの合法性

おしめカパー愛好者の特色は、極めて規範意識が強いことにあるでしょう。正確に言うなら、悪いことができない人なのです。この規範意識は、育児を担当した母親によって作り上げられたものです。が、母親に逆らうことさえできない程度に強く作用しているのです。ります。この強度の規範意識の故に、おしめカパー愛好者は、自己の行為の内に反社会性を知覚して悩むのであります。おしめカパーをすることは、確かに道徳的な行為ではありませんが、不道徳と強調する程、悪いことではないと考えられます。おしめカパー愛好者は、育児担当者たる母親の過失によって成立したものです。憐れな存在です。もう一度、赤ちゃんに

なりたくて、おしめカパーを慕う心に悪意はなく、おしめカパーを慕わないことについての期待、可能性に欠けるものと考えます。

私の仮説によれば、おしめカパー愛好というものは心のマスターベーションではなにかと思えます。おしめカパー愛好者は、日本特有の文化現象であり、ゴムのおしめカパーのなくなった現在の社会からは育つことはなく、限られた年代の内にのみ存在する私たち、おしめカパー愛好者は、今後本誌を通じて、おしめカパーを合法的に使用することを学んで行く必要があると考えます。





甲斐千恵子さまの提唱に答えて

## 我が青春の思い出 舟橋一郎

7月号「奇クサロンV」に「妻初縛りの記」を掲載いただいた舟橋でございます。その後、おりおり妻を飼育いたしておりますが、本来のM性でないのか、あまり発展いたしません。少し変化をつける

と（例えば猿ぐつわ、目かくしなど）怖がって、どうしようもありません。無理にやって気分をそこなっても良くないので、やめてしまします。なにかよい方法はないものでしょうか。

ご投稿諸兄姉の琴瑟相和すプレイがうらやましくなりません。例えば『SMプレイ初心者入門』として、プレイの方法、順序と、

それによる女性の心理的、生理的な変化など、誌上にても、ご指導いただければと願っています。

さて、9月号では、サロン欄に甲斐千恵子さんの獣姦部落への提唱がありました。非常に興味深く、感銘をもって読ませていただきました。私は、あなたの提唱で20年前に体験した獣姦をなつかしく思い出しました。大学に入学の年に罹病、その療養中のことです。別にどこに痛いところもなく毎日、栄養のあるものばかり食べさせられ、ご多分にもれずセックスの欲望に苦しみはじめました。暇はあり余るほどあり、考える

いずれも雑種のおとなしい犬でした。牝犬は白で、子どもを三回ばかり産んで、人間でいえば中年婦人というところでしょうか。シロと呼んで私が一番、可愛がっていました。

ある夏の暑い日中の事でした。シロが気持よさそうに庭先の木蔭で昼寝をしていました。後肢の間からAとVが見えていました。私はいたずら心を出し、ソレにさわってみました。ぐっすり寝ていたシロも、もう目覚めていました。私のするにまかせていました。うっとり、目を細めてさえました。犬にも快感があるのだ、というところが、それでわかりました。そういうことが、三度ばかりありましたが、シロと契りを交すことはありませんでした。今になっ

てみると、愛情を交しておけばよかったと後悔しています。本物の、獣姦を見たことはありませんが、写真では一度見たことがあります。女性はいずれも外人で、相手は犬でした。舐めているものとか、いわゆるワンワンスタイルで交っているものでした。大きな犬で、胴回りなど、その女性より太いくらいでした。そのシェパードに非常にジェラシーを感じたことと強烈な印象は、今でも忘れられません。

獣姦ではありませんが、男女が同衾している傍で、犬が交尾しているものもありました。犬の愛情交歓を見ながら、というのでしようが、犬にしてみれば、人間様の間を見ながら、と、いうことになるのでしよう。

いずれも二十年以上も前のことであり、妻と結婚してから、そんなことも出来ないままに、すっかり忘れていました。あなたの告白提唱を読み、なつかしく思い出し、また、そのような趣味の方とお友達になりたいと思う、この頃です。また、あなたと、あなたのペットの神秘的な儀式に立ち合いさらに写真で記録を担当したいと願うものです。





千恵子のその後の成長

## 獣姦部落の住人

甲斐千恵子

この初夏以来、獣姦についての話が誌上を賑わし、そして私のささやかな経験も加えて頂きまして、私も立派な読者の一員としてお認め下さったことに心はずみ暗かった世の中が急に明るみを帯びて参りましたようで、心から喜んでおります。

大きなシェパードと白人美女との交歓写真（八月号記載）には息つまらせてしまいました。それ以後は大きなシェパードを思いながらペットのチエを愛玩しております。あのお写真のカラープリントは、お分け頂けませんかしら。お尋ね致します。

次に、私共、犬に関係深い鎖を操って刺環の魅力に犯されている美しい白人女の開股写真（九月号34、35頁）は、私の血をわかし、私を新しい道に引きずり込んでしまいました。

花卉刺環の国産第一号発表をめざして、私は今、どなたかと競っている気持でございませう。先馳けられそうなら中途でもいいから公開告白しちゃおうかしらなんて考えています。いやいや、どなたか陰唇刺環プレイ御経験の方、いらっしゃいますか？ 御指導、お願い申し上げます。

さて、私の愛犬チコは中型以下の雑種でございます。名古屋の田中或文様、御指摘の通りでびっくり致しました。先に申し上げましたシェパードのことやら、貴方様の御意見やらで、近頃、むしろ巨犬に憧れる気持が強まってきてチコの手前、自分ながら困っているのです。九月号で告白しましたように、私って移り気多い女でございませう。

尼崎の南政子様。もう既に、広

大なお庭で飼育におはいりになりましたの？ 無様な呼びかけ申上げて申訳ございません。ごめんなさい。なにしろ相手が犬なもので、私の移り気までは察してくれませんの。私一途で、その点うれしいんですけれどねえ。

こんな体験は、大変複雑な気持ちでございます。変質的な身の上相談として、お取り上げ願ひ度いくらいです。どうしたら、よろしいのか、よき御意見を、お聞かせ下さるよう、是非お知らせ下さいませ。お待ちしております。

神戸市の国川栄一様のおっしゃる巨犬との交歓を幻想美の極致から、現実美の激昂景として、私が貴方様初め奇巧の皆々様の前に差し上げたいと心を燃やしている近頃でございます。思えば、中型以下のチコとの交歓は、些やかな個人的な枠内に過ぎず、広く社会性があるのは、巨犬との激悦関係ですと今教えられて、私も大きく成長いたしました。

私の味方になって下さる奇巧の皆様にも、どう酬いていいものかと、御礼の気持で一杯でございます。特に名古屋の田中或文様のペット飼育過程の心理的分析、獣姦の歴史的考証、或は獣姦の類別的

体系など、貴重な論説に、すっかり魅せられてしまいました。

体当りだけのモルモットに過ぎない千恵子の無智を開眼して頂き今やと、獣姦の価値観を認識し私の日々に一安らぎを深めている昨今でございます。

千恵子のようなものを、善人とおっしゃって下さる貴方様に、止めようのない敬愛の念が湧いてまいります。貴方様、商店経営者として、お偉い地位にたたれてるお方で、とてもこわそう——。千恵子の住む獣姦の檻を外からつぶさに観察なさって、科学的に論説される頭の冴えたお方で、近寄り難い思いでございます。

モルモットの千恵子と同じ世界に住むお方でないような感じがいたします。檻の外から千恵子を見下ろすだけの冷徹な目の覧んか、檻の中にまで入って、千恵子を牝犬として蔑んで下さる愛情を持つて下さるお方か、今のところ判断がつかかねております。

もっとも、いろいろとお話を伺って、どうぞ、いつまでも、千恵子の棲む獣姦部落のよりよき先生として、お導き頂けますようお願い申し上げます。



サロン

落穂抄 (7)

野外で放尿させる

—T・T 生—



『プレイ随想』

お処刑申し渡し

早木夢二

私と一緒にならない前、水商売をしていた慶子が、二、三の男とかかわり合いを持っていたとしても、そんなことは百も承知であった筈の私としては、どう責めようのあるものではなかった。

むしろ、拷問プレイの中で、彼女の初めての体験や、その後の男

たちとの交渉を白状の形で彼女の口から聞き出して、それを繰り返しては楽しんでる形であった。その男たちの中には、私もちょっと知っている男がいたことなども責め道具の一つとして、私は拷問にかけられている慶子に、しっかりと問いただしたりするのだった。最近では慶子も、もう慣れていて、拷問のある段階にさしかかると、すらすらと一部始終を申し上げることに、何か喜びを感じているようだった。

毎度のことなのに、こんな拷問

プレイに一向、飽きが来ないのはどうしてだろう。十年一日の菱縄股間縛りに、ちゃんな拷問ぶり。そして「私こと拷問に堪え兼ね」と白状する慶子。

こんなパターンを繰り返しながら、その都度、いつも新鮮な感激を覚え、飽くことなく情熱を傾けて止まない私たちに、業の深さをしみじみ感じながらも、そうザラにはない愛情の表現の姿に「変態性欲」夫婦の喜びを噛みしめているのである。

いやクドクドいうことはない。

私は拷問台にのせられてブロック石を二枚、抱いている慶子の後に回ると、後ろに回されている股間縄を握って、

「女囚、申し上げろ」

と声をかけながら、ぐっと縛っては、また弛める。抱き石におされて尻を動かしようのない慶子は「あ……」と切なそうな呻きを洩らしながら菱縄がけの胸をはり、顔をのけぞらせる。

縛っては放つ私の手に、やがてしたたかな手応えが、伝わってくる。私は、がっちり海老縛りに固められた慶子の裸身を目の前に引き据えると、時々縄を束ねた責め苔を彼女のむき出しの背中や尻にピシッピシッと振り下ろす。

……これで、いいのだ。

白状を終った女囚慶子は、蓮の上に菱縄股間縛りの一糸まとわな全裸を正座させて、私のお処刑の申し渡しを待っている。

そんな慶子に、いつものようにお処刑の申し渡しをしながら、ふっと、ずっと前、一緒になろうと慶子にいった時、それこそ慶子にとって本当のお処刑の申し渡しではなかったろうか。そんな思いが湧いてきて、心から、いたわってやりたい気持になるのだ。



男性には「立小便」という便利な解決方法があるが、こと若い女性となると、そう簡単にはいかない。尿意はしきりに催してくるのに、トイレはどこにもない、といったことになる、勢い、野外で放出させるより仕方がないということになる。

私は、そうした若い女性の野外放尿の図の監視役として幾度となく立ち合ったことがあるが溜りに溜った大量の貯水池から一挙に放出させる水流の勢いということは大変なもので、地面を掘り返すぐらいの激しさである。

千恵さんとデート

## 自転車あそび

秋野 美水

小杉千恵、二人でどこか山奥へ行きませんか。冷たい谷川のせせらぎに、あなたは服を着たまま身を沈めます。くちびるがみるみる紫色になっていきます。すっかり冷えきったあなたを、誰かが林の中へ捨てていった古びた自転車に乗せてあげましょう。ゴムチューブもなく鉄だけの車輪。ブレーキ

ることは、音を聞いていてもよくわかる。

なにしろ、恥も外聞もなく、排泄したいという生理的欲望が熾烈な反面、人が来ない間に終ってしまわなければならないという急ぐ気持ちがあるものだから、その激しさも一段と凄いのがある。

ハイキングなんかへ二人連れで行って、道からはずれた草むらの中へ分け入ってみると、案外、絶対に人目のつかない、この世の別天地というものがあるものだ。まわりが背丈ぐらいの草や灌木が生い茂っている中だと、靴で踏みつ

などはもちろんありません。坐るところもこわれてバネが出ていますね、危ないですから枯れ木でも置きましようか。それとも山奥の川辺には先の尖った形のいい岩がいっぱいありますからそれを置いてあげましようか。どちらでもあなたの好きな方を選んで下さい。

濡れた服など脱ぎ捨てて、さっそく自転車にまたがりましよう。ブラジャーやパンティなどは始めから着ていませんよね。

両手首はハンドルに縛りつけておきましようね。左右の足もペダルに結えつけましよう。お尻の下

けると、格好の天然の筵が出来上るといふものである。

SMプレイは勿論のこと、ポルノ行為だって可能だし、浣腸とか排尿とかいったことだったら、白日の下、これは、なかなか興味のある場面が展開しそうだ。

あながち、草の中にかくれなかつても、地形を考えて、近寄ってくる人を遥か彼方から見通せる位置であつたら、山の斜面であつてもプレイは可能である。いつ人が来るかなと思ひながら、女にゆつくりと放尿させるのなんか、考えただけでも楽しいではないか。

には何がいいですか。岩でいいですか。安定のいい三角の形のものもいいですよ。走っていて岩が落っこちると、こまりますから、お尻もしつかり坐席に縛りつけておきましようね。

さあ、それでは用意も出来たしそろそろ出発しましよう。あの向うの丘の上の木を回って来るんですよ。その間、私は釣りでもして待っていますから。

あなたはお尻で、いろんな事をして、遊びたいそうですね。だったら、あなたに猿ぐつわをして戻って来る間に釣れた魚を全部、食

べさせてあげましよう。もちろん生きたままですよ。もし途中で転んで戻れなくなったりしたら今夜は家へ入れませんよ。外で蛾やカブトムシやホタルなんかといっしょに夜を明かすんですね。

ホタルといえば、あなたもホタルにしてあげましよう。松の枝に火を点けてあげますから、それをお尻に着けて昼に行つた丘へ行つて来るんですよ。あなたにとってただ駆けて行つてもおもしろくないでしょう。手は必要ありませんよね、だったら手首と足首をそれぞれ縛っておきましよう。私は窓からゆらゆら揺れながら丘を登つて行く火を見ながらビールでも飲み、巣を求めてうずうずしているウナギといっしょに、あなたの帰りを待っています。

ウナギを巣から釣り出す時は、3センチ引いて2センチ戻すようにしながら、あわてずに釣り出さなければいけないですよ。ウナギの腰は非常に強く、急いで引っ張り出そうとすると、あの長い体を折り曲げて、いくら引いても出てこなくなり、ハリのかかつているアゴがちぎれてしまふくらいなのを、あなたは知っていますか。そのウナギが待っているのです。



マゾ牝のうた

# お 客 接 待

北川 まりこ

たいせつな取引客をもてなせといいつつ主人は縄目あらたむ

うしろ手の厳しき縄に喘ぎつつ  
○ 蹴り手の待つ居間に曳かれぬ

一斉の好奇の視線につつまれて  
○ 羞恥に燃える我が肌覚ゆる

縄うけし後ろ手のまま酌せよと  
○ 盃出すは責めのはじめか

しびれたる背後の手指に持つ徳利  
○ 慄えて空しく酒は盪に

わらいつつ引き倒されし客の膝  
○ 羞恥に火照りし頬に酒息

弓なりに反りて晒せし我が乳房  
○ 蹴りに任せてマゾの火燃立つ

これほどの深き縄目も柔肌の  
○ 故なりせばとの讃辞うれしや

柔らかさ肌のみならずと我が主人  
○ アクロ縛りを客にすすむる

## <告 白>

### 夫婦交換

プレイの妙味

八 田 輝 雄



機嫌な不満そうな顔つきをしているので、妻は私に、一回ぐらいだったら、やってみると言い出したのです。

妻も十分、好奇心はあったようですが、先ず家庭を乱しはしないかと、心配していたそうです。その点について私は、お互いに愛し合っていたらこそその夫婦交換Vだから、その心配は全くないと言

ってやると、安心したようです。約束の日、打ち合わせたホテルで先方の夫婦の方と落ち合いまし

た。レストランでビールを飲みながら、男と男、女と女同士で雑談しているうちに、だんだんと打ち解けてきました。部屋へ戻ってから、私の持参した妻とのポルノフ

ォトを先方夫婦に見せ、先方の夫婦の方もまた写真を見せてくれました。妻も数杯のビールを口にしていたので、顔を赤くしながらも

次第に大胆になってきました。先方の奥様も目のふちをほんのり赤らめて艶っぽい目つきで私の方を見ています。だんだん会話もハレンチになってきて、四人共興奮しているのが、ありありとわ

奇クを愛読しだしてから早や七年。私が今の家内と結婚したのが六年前ですから、独身生活の最後の年になります。今では夫婦円満の本として、夫婦共々愛読しております。

実は、私達夫婦は夫婦交換Vプレイの経験を持っておりまして、そのことについてお話しします。私は三十三才、妻は二十八

才になります。交換の相手と知り合ったのは、新聞紙上に広告してあったフレンドグループに入会したからです。

交換の話がきまって、第一回目の会合のときは、さすがに私も躊躇しましたし、妻もかなり抵抗を

示し、この話も結局、話だけで終り実行は駄目かと諦めたくらいです。帰ってきてから数日、私が不

機嫌な不満そうな顔つきをしているので、妻は私に、一回ぐらいだったら、やってみると言い出したのです。

妻も十分、好奇心はあったようですが、先ず家庭を乱しはしないかと、心配していたそうです。その点について私は、お互いに愛し合っていたらこそその夫婦交換V

だから、その心配は全くないと言

ってやると、安心したようです。約束の日、打ち合わせたホテルで先方の夫婦の方と落ち合いまし

た。レストランでビールを飲みながら、男と男、女と女同士で雑談しているうちに、だんだんと打ち解けてきました。部屋へ戻ってから、私の持参した妻とのポルノフ

ォトを先方夫婦に見せ、先方の夫婦の方もまた写真を見せてくれました。妻も数杯のビールを口にしていたので、顔を赤くしながらも

次第に大胆になってきました。先方の奥様も目のふちをほんのり赤らめて艶っぽい目つきで私の方を見ています。だんだん会話もハレンチになってきて、四人共興奮しているのが、ありありとわ

示し、この話も結局、話だけで終り実行は駄目かと諦めたくらいです。帰ってきてから数日、私が不

機嫌な不満そうな顔つきをしているので、妻は私に、一回ぐらいだったら、やってみると言い出したのです。



## ゴダイバ夫人 佐野 寿

禁を犯して覗き、失明したのは有名な「ピーピングトム」ですが、もし

「ゴダイバ夫人」が再び現世に現われて、写真のようなショッキングシーンが現出したとしますと、



我が腿に頬はさまれての海老縛り  
苦しくあれど誇らしさもあり

○ 次々と奇形縛りの縄目受け

客の好奇に媚びる我がハダ

○ 日頃から叩きこまれし悦虐の

サガあさましく色責めに哭く

○ 目をみはり息はずませて縄を持つ

客にゆだねしハダ熱からん

○ 未練げに靴穿く客の見送りも

マゾ牝裸身は後ろ手のまま

私が部屋へ入るなり奥様が抱きついてこられましたので、いきなりキッスをしながら互いに堅く堅く抱き合いました。お互いに、今までの会話と雰囲気です。十二分にハレンチになりました。あとは、もうスムーズに事が運びました。服を脱がし合って、一緒に入浴。そして浴室での排尿ポーズを強要。最初、軽く拒否されましたが、私のたつての願いによって大胆にも大きく股を開いて、しゃがみ込み、勢いよく水流を放出しました。

私にも出せと奥様が言うので、私は彼女の白い身体目がけて、放尿しました。それから奥様のオラールとフィンガーのテクニクの素晴らしいこと。次には私の方の奉仕の番で、奥様を犬のように四つ這いにさせました。それから私の指が大活躍をしました。私には、奥様が、その様な羞恥の場面を、見られたい、見て欲しいと思っているのが、よく、わかりました。私はその気持を十分に満足させてやりました。

縛り、バイブ、こけしで責め、くすぐり責め、イチジク浣腸責めと快楽の限りを尽しました。夕方になって、ペア二組が同室に入って相互に觀賞しあったり、輪になって四人連れのペッティングなど、もう筆舌では言い尽せません。私の妻も、もうこうなつては淫虐の限りを楽しみました。交れば変わるもので、最初あれほど抵抗していたのにとすると、私も女の心理の変化に驚いています。此の頃では、妻の方から、交換をそのかしくくる始末です。

さしずめ私などは、とても失明どころのさわぎではなく、いちころで悩殺されてしまふだろうと思ひ

ます。それでも尚、宙にとぼしたマゾヒスト魂は、彼女を慕って離れないことでしょう。





## 編集者に物申す

モデル志願者小松裕子さんについて

山田一郎

拝啓、編集者殿。

貴誌六月号に手記としてモデル志願されていた小松裕子さんについて、私は、今か今かと、彼女のモデル登場を期待して、貴誌の発売を楽しみにしていたのですが、すでに三カ月がすぎてしまっても

登場の気配すらもなく、又小松裕子さん自身の投稿も、あれ以来の状態です。

どうか編集者殿。彼女を、私の否我々S男性の眼前にさらして下さい。ぜひ、お願い致します。又小松裕子さん、あなたも、ぜひ奇

クに投稿して下さい。私は六月号にのった、あなたの告白文や写真をみて、あなたの真の清楚な美しさにひかれ、その肉体ににくい込む荒なわ姿や、アヌスに突きさされた二百CCの浣腸器姿を想像し、一度でいいから、あなたを責めてみたいと、心から願ひ続けています。

ただ残念なことに、私は未だにSMプレイを実際に行ったことはなく、あなたを満足させる自信がなく、せめても、裕子さんのM女性として花開いたモデル姿を見たもののだと念じております。そして、いつの日か、私自身で直接、裕子さんと思う存分、はずかしめられるようになりたいと願うしいです。(東京都・山田一郎)

### △編集者よりの回答▽

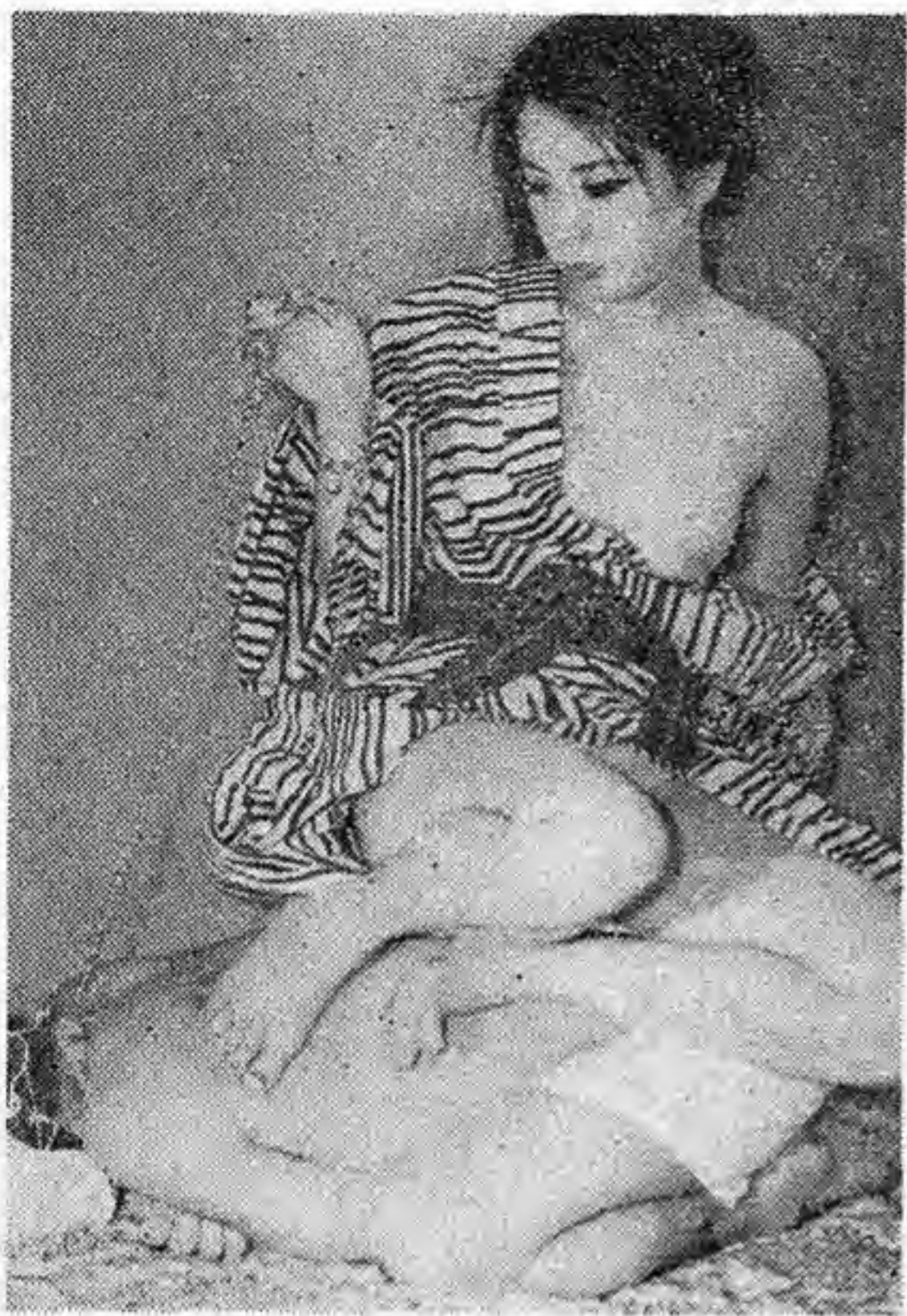
編集部としても貴殿と同じように、折角モデル志願してこられたのですから、小松裕子さんに誌上で登場してほしいと強く願っております。ただ、その頃、塚本ルポライターが所用のため出勤できず、その代りに彼女の希望によって、通信を転送してあげたのです。その中から、レポートの提出される方を期待していたわけですがその方は期待はずれでした。

## 編集部だより

○西独ではポルノが解禁されたかと思うと、逆にアメリカではポルノの取締りが強化されるなど、チグハグな動きですが、日本に関する限り、ポルノ解禁は、まだまだ遠い夢の話のようです。それから、九月号と連続して、所謂刑法第一七五条のわいせつ図書頒布販売罪の容疑で取締りを受けた雑誌があったようです。

○本誌では、ここ二十年来、刑法に抵触しないよう十二分に配慮して編集しているのは勿論のこと、東京都青少年の健全な育成に関する条例の第八条にも指定されないよう注意して編集しております。そのため、カラーグラビア用の写真も多数撮影しながら、自粛のため発表を留保している次第です。○その代り、特異な風俗雑誌としてのSM性に関しては、法の許す限り、ファンの方々の期待にそうべく極めて密度の高いものを豊富に、しかも多岐に亘って提供します。最大限の努力を払っております。どうか二十数年の歴史を持つ





それでも、二、三の意気投合した愛読者があったとかいうことです。小松裕子さんに、手記でも書いて下さればと目下依頼しているところです。彼女にしてもプ

ロではありませんから、すぐさま文章を綴るといことが可能かどうかは、わかりませんが、今しばらく、時間を与えてやってほしいと思います。

## 絹川文代の再活躍を乞う

清 瀬 不 老

最近の奇ク誌上に、時々、往年の美女モデル絹川文代さんが、サジスチンとしてカムバック(?)されているのを見かけ、彼女のオールドファンの私は懐かしく、大

変にうれしく拝見しています。絹川さんの全盛時代(?)には私も公私共に好調な時代でした、絹川さんほど美貌ではありませんが、体つきは似通っている女を一

それから、写真の方は、彼女にプレイメイトが出来た今でもモデルになる気があるようでしたら、編集部に於いて取材したいと考えております。

人、プレイ用として困っていました。つまりSM二号というわけでした。当時の奇クや分譲写真の絹川さんの艶姿を見せては憶えていることを明言し、彼女に競争心を起こさせてプレイに励ませるというアクラツ(?)な手段に利用させてもらっていたものです。

その女は、私の二年余りの飼育でどの程度のSM気が染みついたかはわかりませんが、私の仕事ですこし落ち目になると、いち早く察したらしくサッサと蒸発してしまいました。私は未練たっぷりでしたが、探すほどの暇もなく、しぶしぶ諦めたものです。

そんな苦い思い出に連なる絹川さんなのですが、今の私にとって、S女絹川、M女文代に拘らずその艶姿は、もはや中老の澁みを自覚する血液に活を入れてくれるカンフル剤とも申せましょう。

今後とも叶う限り、不老の妖精絹川文代嬢を誌上の明星とせしめられんことを乞う次第です。

奇クの一発主義ではない、地道な歩みに対して、御声援下さるようお願い申し上げます。

○さて最近、先月号の「SM落書帳」で八ヨーロッパポルノ紀行Vの名文を書いて下さった長谷田亀治氏の制作にかかる8ミリSM映画「絶叫! 発情女」と題する六〇〇フィートの大作を見せて貰いました。カラーの発色もよく、真赤なネグリジェに黒の網ストッキングの配色の妙が真白い肌をよく引き立てていました。ポルノ雑誌を一人で見る女の部屋を鍵穴から覗いていた痴漢がナイフで脅迫するという設定も不自然でなく、あとはもう、SMマニアなら誰でも頭に血が忽ちにして上るような場面展開の連続。いや全く、感心し且つ、堪能いたしました。

○今月号で編集長宛に通信を寄せられた「私に御主人様をお与え下さい」の苗木陽子さん。その後の連絡に依りますれば、八月下旬か九月上旬に来阪可能の由。もし出来れば、塚本鉄三氏のカメラ・ルポにて誌上に紹介して、読者の皆様に彼女のマゾ性の神秘を、白日の下に晒してほしいものだと思いますが、果して、如何なる結果になりましょうか、楽しみです。



## ☆満員電車通勤もまた楽し☆

神 田 浣 吉

小生は人一倍の浣腸狂である。小生程の浣腸狂になれば、人生もまた楽しからずやである。

すなわち小生は、毎日地下鉄と国電を利用して一時間位ゆられて通勤している者であるが、その一時間が毎日楽しくてならない。

だからといって、決して痴漢ではない。大手企業に勤める若手社員として将来を嘱望されている現代的な猛烈社員の一入である。

さて、通勤電車の中は、例の通り殺人的ラッシュで、時には女性のお尻が、小生の後向きになっている臀部にピッタリ密着する事も再三です。そういった時、私は常に心の中で彼女と浣腸プレイをしております。

先日私の右モモに、二十才前後であろうか、いかにもステナイといった初々しい女性が後向きになったままピッタリ密着してきた。勿論満員なので小生も身動きできない。当然、そこで彼女との浣腸プレイが走馬灯のように繰りひろげられます。未知の男性に、雪のような双尻が、おののきふる

える風情で、小生の目の前に高く突き上げられている。

四つ這いなので、ハジライのあの顔がみえないのが、せめてもの彼女としての救いであろうか。白く盛り上がった双尻のなか程にこれらも恥じらいをたたえた菊の花がいろどられていた。

「お母さん」というウメキともいえぬ言葉が彼女の口から洩れたのを合図に、私は人さし指にポマードをベトリと、すくい上げる。

「いや、あまり……どうしよう」と、顔をうつぶせに畳に伏せているので彼女の声も声にならない。ポマードのせいか、菊の蕾もようやく少しふくらんで来た感じである。そこで二百CCのガラス浣腸

器に即効用のドナンと持続性のグリセリンとを半々に混ぜ、それに食塩を大サジ一杯いれ、よく攪拌した溶液を一杯、すい込ませた。臀部が思い切り高く突きだされているので、浣腸器の角度は畳に

対し大体六十度位である。はじめはユックリ注入し、百二十CCの目盛りのところで急にス

ピードをつけ一気に注入した。

四、五秒たつたためか「ああお腹が突、ああ、痛、痛い」と切なる悲鳴を上げる彼女。「馬鹿、まだ何秒しかたっていないじゃないか。もっと辛抱しろ」だって、もう大変、早くウ」言葉にならない声をはわせながら、彼女の雪のような臀部はホンノリと赤味がかったて左右にゆれた。

「もうしばらくの辛抱だぞ」「だって、もう駄目なの、早く、トイレへ行かせて」いまから佳境には

いろうとしている時、無情にも下車すべき駅に到着。あわてて彼女を押しつけて、長かった電車から飛び降りた。

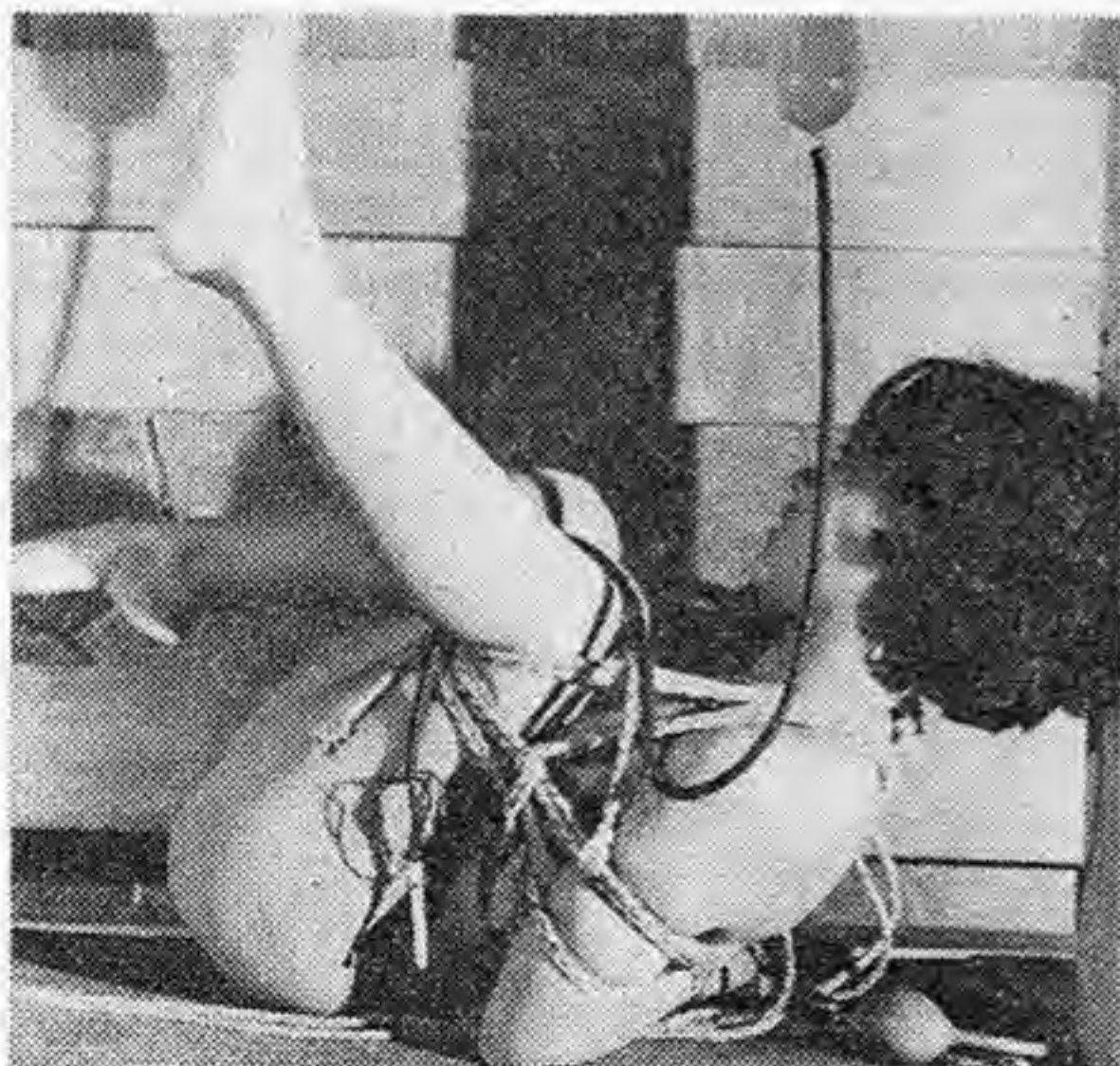
降りしなに彼女の顔をそっとのぞきみると、たとえ満員電車にしても自分の双尻を見知らぬ男のモモにピッタリと密着させた幾時の恥じらいからか、彼女のふくよかな耳たぶに紅が、うっすらと

ひかれていたようであった。

狭い改札口から、ドッと押し出される乗客の群れに混じって歩きながら、ふと、浣腸後の佳境の状態に似ているナ、と思った。

現実の世界にもどった私は、再び真面目人間にもどり、ハタからみると、さもエリート社員のような、しっかりした足どりで会社へと足は急ぐのであった。

束の間の彼女との空想の浣腸プレイ。通勤もまた楽しからずやである。





# 滋養浣腸と排便浣腸

石 黒 貫 二

私は浣腸とオムツに大変、興味を持っており、自身で浣腸して胸をワクワクさせています。

私が高校二年の時、病気で重症になり、三カ月間というものの、病院でイルリガートルの、お世話になりました。体が衰弱して、口から普通の食事ができないので、滋養浣腸で体を保たせなければならい

ませんでした。リンゲル等の点滴より痛くなく、結構でした。



しょうか。とにかく深く、さし込んで固定します。それでスムーズに入るように、ワセリンを使うのだろうと思います。しかも普通の浣腸よりも、ゆっくりと時間をかけて液を入れるのです。排便でなく、腸管から栄養を吸収するのが目的だからです。滋養浣腸した後

は、丁字帯で肛門を圧迫し、栄養液が流れ出るのを防ぎます。体が弱って排便する元気もないので、毎日、排便浣腸も、かけられ

ありました。Y字管を使って、液の注入と排出を交代させる、やり方です。はじめは凄く嫌だった浣腸も、やさしい看護婦さんの介添えで、待ち遠しくなるほど、大好きになりました。

便器も使えないので、おむつをあてがわれました。そして後仕末もしてもらえるので、とても安らかな気持ちでした。それに、看護婦さんから「うんちが、よく出るといいわね」と言われて、便器をあててもらったときの恥かしさ……今も滋養浣腸の方が普通の食事よりもいいなあ……と思うこともあります。そういうわけで私は浣腸や、おむつが大好きです。

さて、貴誌四月号の口絵に載った前田真知子さんの浣腸フォトは実際にすばらしかったです。思わず生ツバをのみました。いかにも浣腸のムードがあり、ポーズもよかったです。特にイルリガートルで浣腸されているのはいい感じが、よく出ていました。

この四枚の口絵写真は、私たち浣腸ファンにとっては、またとないプレゼントでした。

浣腸のポーズとしては、同じく四月号に載っていた塚本鉄三氏の

カメラルポ「縄で縛ればMの感度抜群の娘」の中に出ていた写真九十五頁、九十八頁、百六頁等の姿勢で浣腸すると大変面白いと思います。私の好みとしては、縄はない方がよいと思います。

これは私の希望ですが、浣腸フオトの一枚は、ぜひ、このようなものをいれてもらいたいと思います。浣腸液の作用に耐えられずに被術者がゴム・シーツの上に失禁してしまった決定的瞬間を写して下さい。これこそ浣腸のクライマックスで、クローズ・アップで、いいと思います。それから「浣腸とオムツ」「浣腸と便器」等の組写真を構成して欲しいものです。

また浣腸プレイも「相対浣腸」とでもいうものがあってよろしいかと思えます。それは二人(女と女、あるいは女と男)が互いに相手に浣腸し、ちり紙をあてがい急に離して、互いに失禁させるプレイで、いわば浣腸で互いに差しちがえるようなものです。

貴誌三百号突破記念の一つとして、ベテランの大塚啓子さん、深田菊子さん、前田真知子さんなどによる、「浣腸されての失禁シーン」のコンクールの特集ができたら素晴らしいと思います。



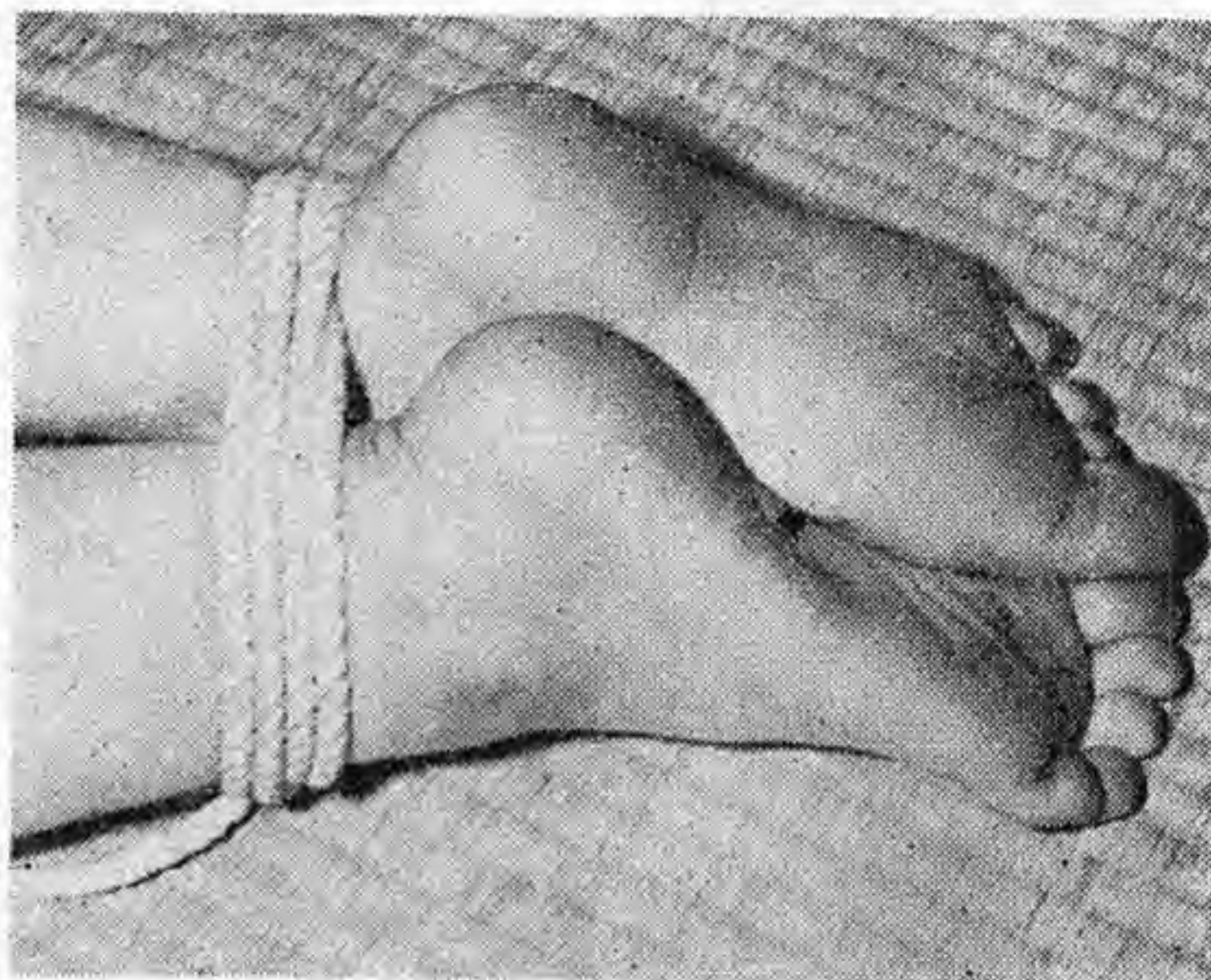
# 女の足の魅力

村井 清

私は女の足が好きである。街を歩いていて、美しい足の女性を見かけると、その素足を見たいばかりに、どこまでも、その女のあとをつけてゆくのだ。

白くて艶やかな女の足を見てみると、私はたまらなく性感を刺激される。こんな気持を持っているのは私一人だけだろうか。美しい女の足を、自分の思いのままに弄びたいという気持は、思春期の頃からの私の夢である。

自分の足を弄んで欲しいという女性の方はいないだろうか。素足の指から足の甲、踵から足の裏、



それに胫、踝、太股へと、私の熱い視線は、つい、そちらの方へ走ってしまうのである。今は幸いにしてミニスカートとホットパンツの流行で、私のような足マニアは目の保養をさせてもらっているが一度でいいから、じかに手で弄び愛玩したいものである。そんなことを快くさせて呉れる女性って、いないものだろうか。

△論 評▽

浣腸セックス論 里見文彦



私はここ十数年来の奇クの愛読者です。身体中がふるえる思いで雑誌を手にした最初の頃から、いつも△浣腸▽の記事を豊富に載せておられることは感謝にたえません。

五月号では塚本先生のカメラルポで「浣腸」という名の飼育に耐えた紀代」に出てきた西条紀代さんの浣腸セックスを拝見した時には凄く興奮しました。

田舎から出てきたばかりだという西条紀代さんが、この雑誌に載っているような「浣腸」を受けたのかと思うと、私の胸は

蜂の巣をつついたように、たまらなく騒ぐのです。私は若い女性に自分で浣腸したいばかりでなく、女性が浣腸されているのを見るのも大変刺激的なのです。

女性に浣腸するということは、便秘の治療とか美容にいいとか言う外に、セックスとしての役割りも大きい筈で、長谷田亀治氏が妻女に飼育されているように、アナロイトスも、快楽の一手段として重要なものです。

勿論、「責め」の一分野としての「浣腸」も欠かすことの出来ないものですが、浣腸をただ責めと



## 私とお灸

佐々木昭夫



は快感としか受けとれない。だから、私の便秘症は、ずっと治らない。

「お通じ、やはりないの？」

「ええ。お灸をすえた翌日には必ずあるんですが……」

「そう。じゃあ今日は大きいのにしてみましようか」

「ハイ、お願いします」

「灸点も下げますから、ズボンは脱いだほうがいいわね」

センセイはニコリとして準備にかかられる。私も、パンツ一丁になって、相手に努力

を要したパンパン腹を治療台に横たえる。

あれは中学一年の時だった。胃腸の弱かった私は、母に連れられて「お灸やさん」へ行った。べつに治療室というほどのものもない

点灸室で、先客の女性が白いお腹から煙をたちのぼらせていた。私

はおびえた。逃げ出したかった。

センセイのしなやかな掌が、私のパンパン腹をすべり、軽いマッ

サージの後、一点がぐっと押される。灸点の確認らしい。私はドキ

ドキしていた。患者にあるまじき

しての面からだけ眺めることは片手落ちだと思っています。

私は女性に「浣腸」を施すことは大好きです。でも、それは浣腸―排泄という一連の羞恥行為に伴う、女性美というものに

限らない憧憬を抱いているのは勿論ですが、今や正常なるものとして公然と認められつつある

オーラルセックスと共に、このアナルセックスもまた、性愛テ

徴候が、早くも明らかになっているのを指摘されないかと……

だがセンセイは素知らぬ表情で「今日は灸点を増やしてみましょ

うね。すこし熱いでしょうが」とパンツを、すこし、ずり下げる。

私の徴候は、ますます顕著の度を加える。だがセンセイは平気。

ヘソの両わきと、その下辺りにモグサが並べられた。なるほど大

きい。いつもの倍以上もある。次々と煙がたちのぼり始める。

だんだんと熱さが、私にとっての快感を、くすぐり始める。思わず

呻いてしまう。

「動いちゃダメッ！」

センセイの掌が、グイッと私の腹とモモを抑えつけてきた。

「あっ、あちちち……！」

クニックの一つとして認められつつあるのではないでしょう。幸いにして奇巧の寄稿家の中には竹迫誠也氏をはじめとして浣腸

分野のベテランが揃っていられるのだから、頻繁に浣腸論議を交してほしいものだと思えます。こ

うしたことは、奇巧ならではの快挙だと考えるのですが、浣腸ファンの先輩諸兄姉の御賛同を頂けます

でしょうか。

ジリジリッと、文字通りの火に焼かれる、この熱さ！ 私は一瞬

われを忘れた。

「じゃ今日は、これだけにしときましょ。また便秘したら、いらっ

しゃい。今度は、もっと大きいのをすえてあげるから……」

フーッと息をつく私に、センセイはニコリ笑って、ハンカチぐ

らいのガーゼをくれた。

「お拭きなさいな」といって……

奇巧愛読者の中には、必ずお灸に興味を持つ人々がいるはずだ。

女性の中にも……

便秘、生理痛、冷え症等々。治療を兼ねたプレイに興味ある女性

方、お互いに患者になり合おうではありませんか。

いつからだろうか、私がお灸に一種の快感を覚えるようになったのは……。最初はイヤでたまらなかつたのに……。便秘症の胃腸を治療するためと、歯を喰いしばって我慢していたお灸だのに……。今では違う。お灸には変りないが、受ける気持はずいぶん違う。時には、もぐさとお線香を両手に自分で自分にすることもあ

今、週に一度、お灸をすえてもらいに通っている。便秘症の治療ということで……。センセイが二十代の若い美女だ。だから、もぐさの熱さも苦しさも、私にとって



## 開股高手小手縛り逆吊り

大手札二枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△つほ▽

## 高手小手縛り逆さ吊り正面

大手札二枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△つふ▽

## 髪を引き廻される豊満美女

大手札三枚一組 五〇〇円  
関谷富佐子 略号△ほむ▽

## 縄目に悶える妖艶な肉体

大手札三枚一組 五〇〇円  
関谷富佐子 略号△ほく▽

## 股間縛りに喘ぐ刺青女性

大手札三枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号△ほき▽

## 立縛り髪責めの哀歓

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△おけ▽

## 片足吊り上げ羞恥責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△おて▽

## 猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
左近麻里子 略号△ちつ▽

## 後手吊りにもかく裸女

大手札三枚一組 五〇〇円  
川越美佐子 略号△むた▽

## 芋虫コロコロ責めの女

大手札四枚一組 六〇〇円  
川越美佐子 略号△むせ▽

## ムチ打ちの陶酔境に遊ぶ

大手札三枚一組 五〇〇円  
関谷富佐子 略号△へさ▽

## 両手吊りで痛めつける肌

大手札四枚一組 六〇〇円  
大島 照代 略号△へし▽

## 後手縛り竹棒開股責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
大島 照代 略号△へす▽

## 股間縛りに苦悶する乙女

大手札五枚一組 七〇〇円  
一宮百合子 略号△るり▽

## 膨満臀部責めの魅力

大手札三枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号△なに▽

## ゴムカバリの猿ぐつわ責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
左近麻里子 略号△せな▽

## 逞ましき臀部の無茶責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
大島 照代 略号△せね▽

## 首枷手枷責めに泣く女

大手札三枚一組 五〇〇円  
美木乃々子 略号△みき▽

## 豊麗全裸の女体を縛る

大手札四枚一組 六〇〇円  
遠藤百合子 略号△ゆり▽

## 両手吊り全裸の晒しもの

大手札四枚一組 六〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆひ▽

## 煙草責めに喘ぐホステス

大手札二枚一組 四〇〇円  
佐々木真弓 略号△こぬ▽

## 海老責めに苦悶する女体

大手札三枚一組 五〇〇円  
佐々木真弓 略号△こお▽

## 禪の前袋をさらす羞恥

大手札五枚一組 七〇〇円  
横尾 峯子 略号△ふか▽

## 強烈縛りに悶悦する裸女

大手札三枚一組 五〇〇円  
刑部 典子 略号△けそ▽

## 強烈エビ責めの美しき女

大手札三枚一組 五〇〇円  
松本アサ子 略号△まと▽

## 緊縛写真に埋れた緊縛裸女

大手札四枚一組 六〇〇円  
大塚 啓子 略号△けお▽

## 柱の前に晒す全裸緊縛麗姿

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△はの▽

## 羞恥責め寸前の妖艶姿態

大手札三枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はひ▽

## 片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
愛知 葉子 略号△つお▽

## 逆さ吊りと足吊り責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
愛知 葉子 略号△つよ▽

## 強烈エビ責め地獄

大手札三枚一組 五〇〇円  
玉田美佐子 略号△ねむ▽

## 羞恥のアグラ縛りで責める

大手札三枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号△えめ▽

## 海老縛りで悶える全裸

大手札三枚一組 五〇〇円  
水本 茂美 略号△えひ▽

## 菱縄縛りの美と愛の表情

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△その▽

## コードで柔肌を喰いちぎる

大手札四枚一組 六〇〇円  
大島 照代 略号△しく▽

## 狙われた和服の娘襲わる

大手札十二枚一組 一五〇〇円  
愛川 悦子 略号△ねい▽

## 美しき臀部を晒して泣く

大手札四枚一組 六〇〇円  
左近麻里子 略号△つや▽

## 全裸の刺青女後手強烈縛り

大手札五枚一組 七〇〇円  
山原 清子 略号△けの▽

## 羞恥の足挙げ御開帳責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
長井葉津子 略号△これ▽

## 柔肌にムチは弾けて喘ぐ女

大手札三枚一組 五〇〇円  
関谷富佐子 略号△こな▽

## ホステスの爛熟した女体責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
佐々木真弓 略号△こち▽

## 悦虐責めの終着駅

大手札三枚一組 五〇〇円  
長井葉津子 略号△こた▽

## 全裸の強制開股責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆみ▽

## 陽光に映える裸身の縄目

大手札四枚一組 六〇〇円  
左近麻里子 略号△せい▽

## 菱縄雁字搦目ヤケクソ縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
木村 洋子 略号△せえ▽

## 瑞々しい裸身に本縄を許す

大手札四枚一組 六〇〇円  
左近麻里子 略号△せゆ▽

## 大の字に磔けムチ打つ

大手札四枚一組 六〇〇円  
関谷富佐子 略号△わま▽

## 淫らな開股羞恥縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
一宮百合子 略号△やす▽



## 出産十日前の臨月妊婦カラープリント

妊婦資料を蒐集しておられる方にとつて、それこそ垂涎の出産予定日を旬日に控えた初産婦の生々しいフォトをカラーにて提供することにしました。どうか貴重なコレクションの一端にお加え下さるよう自信を以ておすすめます。

### 太鼓腹正面の媚態

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やろV  
出産を間際に控えた、はちきれそうな臨月腹を抱えた妊婦の全裸を正面から大胆に捉えた写真。

### 妊孕美ヌード鑑賞

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やほV  
もうこれ以上大きくならないと、うとところまで膨らんだ妊婦の妊娠線も鮮かな全裸の肢体を開陳。

### 出産寸前の太鼓腹

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やへV  
出産予定日十日前まで待つて、特に撮影を果した見事な太鼓腹の持主のいろいろな姿態を披露す。

### 全裸蛙腹の異常美

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やとV  
今まさに破裂せんばかりに膨らんだ巨腹を、このようにカラーカメラの前に晒す異常な美しさ。

### 後手高手小手正面

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やろV  
本格的な高直前の妊婦に危険を冒して太鼓腹をいやが上にも誇張さす。

### 膨大乳房蛙腹緊縛

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やぬV  
メロン腹ばかりか乳汁の進る豊かな乳房にも被虐美で熱く彩る。

### 太鼓腹をいたぶる

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やちV  
強烈な縛りに出直前の妊婦は太鼓腹をゆすつて悶えるのに対し更に嗜虐の念がいや増すのだ。

### 胎動の巨腹で呻く

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やわV  
巨腹の中で胎児が盛んに動いている妊婦を厳しく縛れば泣くよう呻き声を洩しながら転がる。

### むごき臨月の責め

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やよV  
全裸にされるだけでも初産婦の身としては恥かしいのに身動きできぬように縛られて検身される。

### 強烈責に喘ぐ妊婦

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八やたV

緊縛によって乳房と腹部とがむくむくと盛り上って次に迫りくる悦虐責めを期待して喘ぐのだ。

### このマゾ売りもの

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 〇号八ふろV  
極度のマゾ癖が彼女をして吊り下げられながらも尚も見世物になりたいたと動物的に願うのだ。

## 南加津子の臨月妊孕美カラープリント

### 羞恥の臨月腹開陳

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八つけV  
臨月妊婦の美しさと羞かしさとを余すところなくヌードになつてさらけ出した稀有なチャンス。

### 美しき臨月の蛙腹

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八つむV  
まんまるく膨らんだ美しい蛙腹を中心にして初めての妊娠に恥かしがる一糸まとわぬ裸身を写す。

### 太鼓腹の美を晒す

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八つろV  
今まさに乳汁を洩らしそうな豊かな乳房と便々たる臨月の太鼓腹との見事なコントラストを描く。

## 凌辱してほしい女

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 〇号八ふほV  
男の手で無茶苦茶に凌辱してほしいと願うマゾ女に對しては、このように願うマゾ女が一番効果的だ。◎お申し込みは前金にて大阪市内の郵便局私書箱第14号天竺宛へ当方負担にて急送申上げます。

## 便々たるメロン腹

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八つはV  
十カ月の便々たる妊娠腹の異色美を適確に奇麗なカラーにて把握した妊婦マニア垂涎のフォト。

## 臨月妊婦の開股責

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八つへV  
はち切れそうな太鼓腹の妊婦が高手小手に縛られた上で思い切った強制開股させられている場面。

## 膨隆腹緊縛羞恥責

カラー三枚一組 略号一〇〇〇円  
南加津子 〇号八つとV  
脚を高々と頭上に挙げさせられの羞恥責に臨月の妊婦は大きな乳房をゆすつて悶えるのだった。



浣腸責め地獄の妊産婦	大手札四枚一組 六〇〇円 増田みゆき 略号八ほなV	浣腸責めの甘い恐怖	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八とかV	浣腸液注入直後の状況	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八とまV	強制浣腸の各美姿態	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八とみV	浣腸責め的美態開陳	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八とめV	浣腸を待つポーズ	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八ともV	エネマと縛りの恐怖	大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号八よてV	エネマ責めの恐怖	大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号八よるV	浣腸器を弄び愛撫する女	大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号八よるV	イルリガートルの浣腸責め	大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号八よたV	浣腸にむせび泣く女	大手札四枚一組 六〇〇円 大島 照代 略号八つゆV	身動き出来ぬ浣腸地獄	大手札四枚一組 六〇〇円 大島 照代 略号八つえV
浣腸とオシメ装着	大手札四枚一組 六〇〇円 大塚 啓子 略号八ひそV	強制浣腸責めの序曲	大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号八よかV	襲いくる浣腸器嘴管の先	大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号八よりV	鼻孔の奥を探索する魔手	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八はむV	開孔器にてひらく鼻孔	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八はらV	なぶられる拘束裸身の鼻	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八はれV	仰臥した緊縛女体の鼻なぶり	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八はにV	美女の鼻をもてあそぶ	大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号八ちるV	美女の鼻孔を觀賞する	大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号八ちれV	開孔器で検査する鼻孔	大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号八ちきV	鼻孔に煙草挿し込み責め	大手札三枚一組 五〇〇円 美木乃々子 略号八ぬとV	可愛い鼻責めのアップ	大手札五枚一組 七〇〇円 美木乃々子 略号八ぬはV
強烈縛りで顔面翻弄	大手札八枚一組 一二〇〇円 美木乃々子 略号八ぬほV	可憐乙女の鼻をいたぶる	大手札四枚一組 六〇〇円 一宮百合子 略号八るえV	鼻責めと鼻孔のアップ	大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号八ねけV	鼻責めの陶醉境	大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八なはV	淫虐鼻なぶりの形相	大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八ないV	鼻の穴を責める	大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八なくV	夫婦連縛にて鼻責め	大手札十枚一組 一五〇〇円 増田みゆき 略号八らかV	鼻責めに悶える女	大手札七枚一組 九〇〇円 木村 洋子 略号八むるV	顔面を凌辱される女	大手札四枚一組 六〇〇円 木村 洋子 略号八むよV	鼻責めと緊縛	大手札五枚一組 七〇〇円 大塚 啓子 略号八ういV	鼻責めによる悦楽	大手札二枚一組 四〇〇円 東浦・大塚 略号八きなV	美しき鼻をいたぶる	大手札三枚一組 五〇〇円 遠藤百合子 略号八ゆはV
乳房いじめの責め	大手札二枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号八とおV	豊かな乳房を責める	大手札三枚一組 五〇〇円 東浦ひかる 略号八ときV	逆エビ吊り責め	大手札六枚一組 一〇〇〇円 梨花悠紀子 略号八りつ1V	逆胴吊り責め	大手札六枚一組 一〇〇〇円 梨花悠紀子 略号八りつ2V	大の字逆さ吊り	大手札二枚一組 四〇〇円 増田みゆき 略号八むのV	豊満乳房しばり責め	大手札三枚一組 五〇〇円 長野 良子 略号八うはV	吊り打ち責め	大手札三枚一組 五〇〇円 関谷富佐子 略号八やりV	腰元の吊り責め	大手札二枚一組 四〇〇円 村井知可子 略号八こりV	乳房強調膨隆責め	大手札三枚一組 五〇〇円 佐々木真弓 略号八こわV	エネマシリンジ挿入責め	大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八えねV	ワシづかみ責めの乳房	大手札三枚一組 五〇〇円 大塚・東浦 略号八えうV	強烈乳房責め五態	大手札五枚一組 七〇〇円 山原 清子 略号八てらV



## 妊婦資料と妊婦責資料

妊婦のヌードと妊婦の責め写真

未婚の妊婦の両手吊り

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△わさ△

突き出た若妻妊孕美の腹部

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△わし△

麗わしの妊婦責めの魅力

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△おひ△

身籠った美しき裸身縛り

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△おも△

裸身縛り恵子の妊孕美

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△おす△

初妊娠の裸身を羞らう

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△おぬ△

妊婦全裸の羞恥フォト

大手札 三枚 一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号△やま△

妊婦全裸縛りフォト

大手札 三枚 一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号△やむ△

妊婦の九カ月腹フォト

大手札 三枚 一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号△にみ△

妊娠六カ月のヌード

大手札 三枚 一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号△にそ△

双胎妊婦腹全裸の鑑賞

大手札 二枚 一組 四〇〇円  
増田みゆき 略号△にえ△

膨満双胎の腹部強調縛り

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にく△

妊婦の豊かな乳房と腹部

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にま△

羞らしいの妊婦媚態をさらす

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほこ△

便々たる腹を突き出す妊婦

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほろ△

双胎臨月腹の威容を誇る

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りて△

見事に垂れた太鼓腹開陳

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りな△

臨月の蛙腹のアップ写真

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りに△

仰臥する臨月の蛙腹

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りね△

双胎の臨月の剣玉子腹

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りふ△

堂々と誇示する双生児腹

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りま△

素晴しく巨大な臨月の蛙腹

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りは△

豆絞り猿轡をされた妊婦

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りの△

蛙腹に腹帯をする妊婦

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りへ△

臨月妊婦を革具で責める

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りむ△

全裸の見事な臨月腹を鑑賞

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りす△

出産間際の垂れた太鼓腹

大手札 三枚 一組 五〇〇円  
安原さゆり 略号△りみ△

臨月妊婦腹のヌードフォト

大手札 二枚 一組 三〇〇円  
安原さゆり 略号△りく△

臨月腹の背面ヌードフォト

大手札 二枚 一組 三〇〇円  
安原さゆり 略号△りも△

膨隆七カ月妊娠腹を見る

大手札 五枚 一組 七〇〇円  
増田みゆき 略号△にひ△

妊娠七カ月の妊娠線

大手札 五枚 一組 七〇〇円  
増田みゆき 略号△にほ△

七カ月の妊娠腹大写真

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にも△

孕んだ若妻裸身に羞らう

カラー 四枚 一組 二〇〇円  
中河 恵子 略号△ぬね△

孕んだ美女の妊婦腹観賞

カラー 四枚 一組 二〇〇円  
中河 恵子 略号△ぬめ△

羞恥を晒す女体縛り

カラー 三枚 一組 一〇〇円  
前田真知子 略号△すそ△

柔軟肢体二つ折り緊縛

大手札 三枚 一組 五〇〇円  
美木乃々子 略号△ぬに△

全裸正面の縄掛け艶姿

大手札 三枚 一組 五〇〇円  
小池 美喜 略号△れる△

柔肌の高手小手縛り

大手札 三枚 一組 五〇〇円  
小池 美喜 略号△れほ△

後手首を縛られた全裸体

大手札 三枚 一組 五〇〇円  
小池 美喜 略号△れへ△

飼育された可憐な美少女

大手札 三枚 一組 五〇〇円  
小池 美喜 略号△れと△

猿ぐつわ着用全裸縛り

大手札 五枚 一組 七〇〇円  
美木乃々子 略号△ぬへ△

真紅の腰巻着用縛り

大手札 三枚 一組 五〇〇円  
美木乃々子 略号△ぬち△

可憐な表情の全裸縛り

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆめ△

股間縛りの柔肌いじめ

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆも△

雁字搦目の後手縛り

大手札 四枚 一組 六〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆあ△

浴室での全裸刺青さらし

大手札 五枚 一組 七〇〇円  
山原 清子 略号△よな△

全裸の高手小童女縛り

大手札 三枚 一組 五〇〇円  
長井葉津子 略号△よの△



奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組 百態 大手札印画紙 (9×13 極鮮明焼付写真)

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇〇円  
十組十枚 一五〇〇〇円  
二十組二十枚 二八〇〇〇円  
五十組五十枚 五〇〇〇〇円  
百組百枚 八〇〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社  
大阪市阿倍野局 私信箱14号

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで活躍している若くて美しいM女たちの印画紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為に譲ります。この素晴らしく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さいよう願います。

☆

1 正面から狙う眼(鈴木千鶴子)  
2 引回し股間縛り(深田 菊子)  
3 ポリウムを縛る(笠井奈保子)  
4 M女なればこそ(高村 浩子)  
5 柔肌にむぎき縄(深田 菊子)  
6 後手足首後吊り(高村 浩子)  
7 縄で開股を強要(深田 菊子)  
8 臀部と後手縛り(前田真知子)  
9 排泄を耐える女(笠井奈保子)

36 椅子開股両足吊(鈴木千鶴子)  
35 屋上のいたぶり(前田真知子)  
34 臀部を晒す緊縛(笠井奈保子)  
33 高々と後手縛り(鈴木千鶴子)  
32 首縄に泣く屋上(前田真知子)  
31 美女両脚柱縛り(深田 菊子)  
30 豊満な尻部責め(深田 菊子)  
29 惨美貌の羞らい(深田 菊子)  
28 猪宙吊りの浩子(高村 浩子)  
27 棒責めにあえぐ(鈴木千鶴子)  
26 美へ与える汚辱(前田真知子)  
25 縦縄に呻く女体(深田 菊子)  
24 白き裸身の縄目(笠井奈保子)  
23 両足吊浣腸姿態(鈴木千鶴子)  
22 闇での羞恥責め(深田 菊子)  
21 正座しての懇願(前田真知子)  
20 仕置と折檻の果(高村 浩子)  
19 奴隷の誓い宣言(笠井奈保子)  
18 菱縄縛りに喘ぐ(笠井奈保子)  
17 強烈な股間縛り(鈴木千鶴子)  
16 総てをさらして(前田真知子)  
15 片足挙げ柱縛り(深田 菊子)  
14 全身に喰込む縄(高村 浩子)  
13 宙に浮いた苦痛(鈴木千鶴子)  
12 もっと股を開け(笠井奈保子)  
11 転がされた女体(笠井奈保子)  
10 形よきお脐悦情(深田 菊子)

68 そんなのはイヤ(前田真知子)  
67 喰込む股間縛り(高村 浩子)  
66 菱縄正面髪振み(鈴木千鶴子)  
65 両足吊り逆エビ(高村 浩子)  
64 縄束の中の折檻(深田 菊子)  
63 乳房強調の猿轡(笠井奈保子)  
62 責め抜かれた果(鈴木千鶴子)  
61 全裸の緊縛正坐(笠井奈保子)  
60 階段に呻く女体(深田 菊子)  
59 後手縛りの模範(深田 菊子)  
58 両足首逆さ緊縛(深田 菊子)  
57 階段で逆立縛り(深田 菊子)  
56 責めに反る指指(前田真知子)  
55 豊満な全裸縛り(笠井奈保子)  
54 プロポーズ(鈴木千鶴子)  
53 羞恥を晒す女体(深田 菊子)  
52 海老責二つ折り(高村 浩子)  
51 正面開股菱縄縛(深田 菊子)  
50 白肌に喰入る縄(前田真知子)  
49 尻立てアヌス責(深田 菊子)  
48 竹と棒責め地獄(前田真知子)  
47 豊隆乳房へ責め(高村 浩子)  
46 海老棒責めの惨(鈴木千鶴子)  
45 羞恥股裂き責め(前田真知子)  
44 高々棒吊り両足(深田 菊子)  
43 正面片足引上げ(前田真知子)  
42 強烈麻縄の魔力(笠井奈保子)  
41 ニツ折りの仕置(鈴木千鶴子)  
40 猿ぐつわの表情(笠井奈保子)  
39 逆片足エビ責め(前田真知子)  
38 嚴重な後手縛り(笠井奈保子)  
37 反り返った女体(鈴木千鶴子)

100 縛りに放心状態(笠井奈保子)  
99 美を汚辱する時(前田真知子)  
98 片足吊りの正面(深田 菊子)  
97 乳房強調の縛り(深田 菊子)  
96 片足吊りの序曲(笠井奈保子)  
95 縄で攻める開股(深田 菊子)  
94 縄痕むごし柔肌(前田真知子)  
93 淫らな羞恥責め(鈴木千鶴子)  
92 開股を攻める縄(高村 浩子)  
91 放置された縛体(笠井奈保子)  
90 憂愁の美女緊縛(深田 菊子)  
89 足挙げ開股責め(深田 菊子)  
88 猿轡苦痛の表情(笠井奈保子)  
87 悦虐に泣く乳房(高村 浩子)  
86 責められた悦楽(鈴木千鶴子)  
85 屋上の引き回し(前田真知子)  
84 写真マニアの顔(笠井奈保子)  
83 臀部突出足縛り(深田 菊子)  
82 気懶るき責の宴(鈴木千鶴子)  
81 さあ立たないか(前田真知子)  
80 棒縛り開脚責め(深田 菊子)  
79 人身御供の裸身(笠井奈保子)  
78 悶えに悶えた末(鈴木千鶴子)  
77 痛いから許して(前田真知子)  
76 乳房責と股間縛(高村 浩子)  
75 諦観の晒しもの(笠井奈保子)  
74 階段で開く両脚(深田 菊子)  
73 強制された開股(笠井奈保子)  
72 顔を向けないか(前田真知子)  
71 大の字開股責め(深田 菊子)  
70 美しき縛り表情(深田 菊子)  
69 豊かさを縛る縄(笠井奈保子)



## 血紅女体切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 六〇〇円  
梨花悠紀子 略号八せん

## 女体切腹シリーズ

大手札12枚一組 一八〇〇円  
大塚 啓子 略号八せい12

## 血紅切腹祭壇に果てる女体

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八せぬ

## 首桶に落ちる女的首

大手札三枚一組 五〇〇円  
水野加代子 略号八せへ

## 愛妻の切腹を介添えする

大手札三枚一組 五〇〇円  
水野加代子 略号八せほ

## 切腹する女体を介錯する

大手札三枚一組 五〇〇円  
水野加代子 略号八せは

## 血紅使用介添え切腹

大手札五枚一組 八〇〇円  
大塚・東浦 略号八きつ

## 介添え切腹の女

大手札四枚一組 六〇〇円  
甘木 春子 略号八あか

## 自刃した血まみれ屍体

大手札10枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号八えし

## 自らの腹を切り裂く女

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八やい

## 自ら柔肌を切り裂く場面

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八やえ

## 自らの下腹に突き刺す刃

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八やお

## 血紅女体切腹苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚 啓子 略号八くえ

## 哀婉美女の血紅切腹

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚 啓子 略号八るな

## 絞首刑に果てる女体

大手札二枚一組 四〇〇円  
新宮夫人 略号八るく

## 引回しと晒の処刑

大手札二枚一組 四〇〇円  
新宮夫人 略号八るに

## 血紅使用血まみれ切腹

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚 啓子 略号八わい

## 殿中の自決女体切腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八わこ

## 切腹美態から絶命ポーズへ

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚 啓子 略号八わは

## 女体自刃の美態

大手札三枚一組 五〇〇円  
細川アヤ子 略号八ねに

## 女体切腹媚態

大手札二枚一組 四〇〇円  
細川アヤ子 略号八ねは

## 肉体美少女全裸切腹

大手札五枚一組 七〇〇円  
長野 良子 略号八なせ

## 裸女血斗凄惨場面

大手札五枚一組 七〇〇円  
絹川・大塚 略号八らは

## 和洋争斗場面展開

大手札六枚一組 八〇〇円  
田中・愛川 略号八らり

## 血紅使用斬られる美女

大手札七枚一組 一〇〇〇円  
絹川 文代 略号八らふ

## 鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 四〇〇円  
愛川・田中 略号八らく

## 咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 四〇〇円  
愛川・田中 略号八らみ

## 斬首の瞬間

大手札三枚一組 五〇〇円  
新宮夫人 略号八のき

## 晒台の女の生首

大手札三枚一組 五〇〇円  
新宮夫人 略号八のく

## 全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八のみ

## 切腹に悶える悦虐裸身

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八のそ

## 切腹した裸女の屍体

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八のい

## 美しき裸女の屍体

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八のり

## 屠腹される女体

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八のる

## 立腹切腹に悶える女体

大手札10枚一組 一八〇〇円  
大塚 啓子 略号八のさ

## 切腹に苦悶する裸女

大手札10枚一組 一八〇〇円  
大塚 啓子 略号八のむ

## 絞首された女体

大手札六枚一組 一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八のひ

## 斬首処刑場面

大手札二枚一組 四〇〇円  
新宮夫人 略号八くし

## 絞首刑にされる女

大手札三枚一組 五〇〇円  
新宮夫人 略号八こけ

## 血まみれ血斗場面

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
山原清子外 略号八えみ

## ゴムフエチの美体

大手札四枚一組 六〇〇円  
梨花悠紀子 略号八こま

## ゴム包みの束縛女体

大手札四枚一組 六〇〇円  
東浦ひかる 略号八こは

## メンスバンド只今着用

大手札三枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号八もか

## 白禪刺青女体脇差切腹

大手札10枚一組 一八〇〇円  
山原 清子 略号八ひに

## 白禪刺青女体短刀切腹

大手札10枚一組 一八〇〇円  
山原 清子 略号八ひぬ

## ゴム衣着用緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
水本 茂美 略号八みす

## メンスバンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 五〇〇円  
遠藤百合子 略号八ゆお

## 月経帯を着けた緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
遠藤百合子 略号八ゆす



## 両足首括り逆さ吊り

大手札五枚一組 略号八〇〇円

## 手足逆さ宙吊り

梨花悠紀子 略号八〇〇円

## 逆さ吊りの女体を析檻

梨花悠紀子 略号八〇〇円

## メンスバンド着用替ゴム見せ

梨花悠紀子 略号八〇〇円

## 股に喰い込む黒フンドシ

東浦ひかる 略号八〇〇円

## 股を開いた黒フンドシ姿

東浦ひかる 略号八〇〇円

## 開股逆さ吊り姿

東浦ひかる 略号八〇〇円

## 強烈責め被虐の果て

梨花悠紀子 略号八〇〇円

## 踊り子の美しき緊縛

梨花悠紀子 略号八〇〇円

## 股間縛りの法悦境

梨花悠紀子 略号八〇〇円

## 相撲着用艶姿

梨花悠紀子 略号八〇〇円

## 美木乃々子

梨花悠紀子 略号八〇〇円

## 六尺褌着用の艶姿

大手札七枚一組 略号一〇〇〇円

## パリスマスバンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

## サカエメンスバンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

## サカエ軽便型バンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

## パリスマスバンド前開き

東浦ひかる 略号八〇〇円

## 携帯用白色メンスバンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

## パリスマスバンド着用縛り

東浦ひかる 略号八〇〇円

## 相撲着用締めた女

東浦ひかる 略号八〇〇円

## メンスバンド着用開股ポーズ

東浦ひかる 略号八〇〇円

## 黒ゴム衣後手縛り

東浦ひかる 略号八〇〇円

## ゴム衣緊縛悶悦姿

東浦ひかる 略号八〇〇円

## 大手札五枚一組

東浦ひかる 略号八〇〇円

## ゴム衣とゴムの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号五〇〇円

## 甘美なる椅子プレイ

中河恵子 略号六〇〇円

## 開股拷問椅子の正面責め

中河恵子 略号六〇〇円

## オムツ着用の股間縛り

東浦ひかる 略号六〇〇円

## オムツ着用フェチフォト

東浦ひかる 略号六〇〇円

## オシメをつける二人プレイ

東浦ひかる 略号六〇〇円

## ゴムのオムツカバー強制着用

東浦ひかる 略号六〇〇円

## 生ゴムの猿ぐつわ責め

東浦ひかる 略号六〇〇円

## オシメ着用と女学生

東浦ひかる 略号六〇〇円

## 六尺フンドシの女性像

東浦ひかる 略号六〇〇円

## 黒フンドシを着用した女

東浦ひかる 略号六〇〇円

## 黒フンドシの女(背面)

東浦ひかる 略号六〇〇円

## 黒フンドシの女(正面)

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 黒フンドシを誇る姿

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 黒フンドシ背面刺青模様

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 黒フンドシ入墨姿

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 黒ふんどし媚態の魅力

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 白晒六尺フンドシの姿

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 黒六尺フンドシを締めた女

遠藤百合子 略号八〇〇円

## フンドシ姿の羞らい

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 六尺褌の羞じらい

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 双臀に喰い込む褌

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 横尾 峯子

遠藤百合子 略号八〇〇円

## 禪美に羞じらう女

遠藤百合子 略号八〇〇円



## 最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

S M 組百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円

十組十枚 一五〇〇円

二十組二十枚 二八〇〇円

五十組五十枚 五〇〇〇円

百組全部百枚 八〇〇〇円

(郵便番号 545-91) 天星社  
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新しいマゾ女性の方が、清純に或は妖艶に、それぞれその個性にマッチした縛られ方責められ方をされて甘い吐息を洩しています。マニアの方の蒐集帖の一頁に更に新鮮な資料を加えて頂きたく、ここにS Mの香ぐわしい魅力に溢れるニューフォトを提供いたします。

☆

9	8	7	6	5	4	3	2	1	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
八の字開脚責め(玉木 章子)	開股責めの正面(玉木 章子)	口陰の女の羞恥(玉木 章子)	右足挙げ柱縛り(玉木 章子)	菱縄縛りに泣く(玉木 章子)	開股縛りの片足(玉木 章子)	猿轡に呻く縛女(玉木 章子)	柱に晒す全裸女(玉木 章子)	片足吊りに喘ぐ(玉木 章子)	両足首開脚吊り(鈴木千鶴子)	棒責め裸女失神(鈴木千鶴子)	大の字開脚晒し(鈴木千鶴子)	凄絶海老なぶり(鈴木千鶴子)	浣腸にのけぞる(鈴木千鶴子)	縄の痛さに泣く(鈴木千鶴子)	答で強要の汚辱(江口 淑子)	欄間に晒す開股(江口 淑子)	排便姿態で縛る(江口 淑子)	耐久カガシ責め(江口 淑子)	排泄姿態の強制(江口 淑子)	奴隷の誓を開陳(江口 淑子)	辱恥をさらける(江口 淑子)	強制する開股責(江口 淑子)	鞭打ちにもがく(江口 淑子)	強烈海老責縛り(江口 淑子)	強烈縛りに開脚(玉木 章子)	縄は女を泣かす(玉木 章子)	卓上の開股痴態(玉木 章子)	正面で足を開く(玉木 章子)	臀部からの苛虐(玉木 章子)	手吊り足吊り責(玉木 章子)	絶叫！開脚責め(玉木 章子)	パイプ責め姿態(玉木 章子)	正座正面晒縛り(玉木 章子)	開股縛りの強要(玉木 章子)	乳房縛り真正面(玉木 章子)	全裸手吊り正面(鈴木千鶴子)	エビ責にあえぐ(鈴木千鶴子)	艶美椅子に悶ゆ(鈴木千鶴子)	全裸緊縛浣腸責(鈴木千鶴子)	足の裏の温い女(深田 菊子)	亀甲縛乳房責め(深田 菊子)	足を吊るのは嫌(深田 菊子)	強制開股椅子責(深田 菊子)	交叉した手首結(深田 菊子)	伸びやかな肢体(深田 菊子)	のけぞる両の足(深田 菊子)	開股で見ないで(深田 菊子)	縄轡轡海老責め(三浦 純子)	令夫人緊縛横顔(三浦 純子)	引回された裸女(福井 桃子)	色気発散の脚線(福井 桃子)	さあどうするの(福井 桃子)	寝乱れたマダム(福井 桃子)	臀部晒し柱縛り(福井 桃子)	高手小手臀部晒(福井 桃子)	長髪的美女緊縛(福井 桃子)	縛られてお喋り(福井 桃子)	縄が痛いんだよ(福井 桃子)	高々と上る手首(福井 桃子)	ポリウムを括る(笠井奈保子)	遅ましき臀部責(笠井奈保子)	太股に喰込む縄(笠井奈保子)	飛出す乳房責め(笠井奈保子)	柔肌に喰込む縄(笠井奈保子)	豊満臀部鞭打ち(笠井奈保子)	首縄高手小手縛(笠井奈保子)	縄の束に埋れる(笠井奈保子)	開股強制を拒む(笠井奈保子)	喰い込む股間責(笠井奈保子)	美少女逆エビ責(前田真知子)	足吊りくの字指(前田真知子)	股間縛りで開脚(前田真知子)	交差した後手首(前田真知子)	強烈股間縄涕泣(三浦 純子)	パイプ責で悶絶(松本 たえ)	高々と後手縛り(松本 たえ)	強烈海老開股責(松本 たえ)	柱縛り正面晒し(松本 たえ)	後手両手逆吊り(松本 たえ)	責められた乱髪(大塚 啓子)	後手縛り足吊り(大塚 啓子)	全裸柱抱き縛り(大塚 啓子)	太ロープ首縄責(大塚 啓子)	麻縄亀甲絞縛り(荒尾 慶子)	喰込む縄股間縛(荒尾 慶子)	首縄縦縛り正面(荒尾 慶子)	強烈緊縛で絶頂(荒尾 慶子)	美体乳房強調縛(荒尾 慶子)	股間縛りの麗姿(荒尾 慶子)	海老責浣腸地獄(長井葉津子)	後手吊りの全裸晒(長井葉津子)	迫るイルリ嘴管(長井葉津子)	素人娘緊縛全裸(長井葉津子)	浣腸責めの恐怖(長井葉津子)	半減した浣腸液(長井葉津子)	稚き臀部を開く(長井葉津子)	麻縄縛りの正面(長井葉津子)	注ぎ込まれる液(長井葉津子)	洋裁生のM姿態(長井葉津子)



## 〔秘蔵版写真一掃分譲品〕

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天竺社に於て分譲して、おりに止つて再開を強く望まれたが、最近になって再開を強く望まれたが、増をいたします。御注文の方に、五日間位の予定で、作成の上、早速御送付申し上げます。

## △Mフォト▽

## 馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円  
花田沙登子 略号△わふ▽

## 両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円  
花田沙登子 略号△わむ▽

## 肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円  
花田沙登子 略号△わら▽

## 女王様の臀臭をかかす

大手札二枚一組 略号△〇〇〇円  
花田沙登子 略号△わけ▽

## 足舐めの強制

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円  
花田沙登子 略号△わな▽

## 女王様の牡犬調教

大手札八枚一組 略号△五〇〇円  
花田沙登子 略号△わね▽

## △入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よひ▽

## 全裸の入墨女賊折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よせ▽

## 入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よゆ▽

## ハリツケ女賊拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よめ▽

## 凄絶エビ責め拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よす▽

## 全裸の四つ這い木馬責

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よも▽

## 逆さ吊りのお仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よき▽

## 大の字磔女賊処刑

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よさ▽

## △日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もと▽

## 石抱き算盤責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もへ▽

## 凄惨女囚海老責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もに▽

## 女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もち▽

## 白洲答打ち折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ▽

## 非情の囚女開股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よせ▽

## 美木乃々子 略号△もぬ▽

## 土壇で胴斬りの仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もり▽

## 白洲調べに悶える囚女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もは▽

## △M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まふ▽

## 二女にいじめられるM男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まも▽

## 美女二人から縛られる男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まね▽

## 男馬を乗り潰す裸女二人

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まめ▽

## 痛烈、ムチ打ちのご馳走

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まれ▽

## 首絞めでM男に止どめを刺す

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まむ▽

## 汚臭と足舐めの強要

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まり▽

## 二女の臀臭にむせび泣く男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まみ▽

## パンプスの下に喘ぐM男

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 略号△わそ▽

## 豊満な太股で首を股責め

略号△わそ▽

## 大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円

## 大塚 略号△わよ▽

## 男奴隷緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 略号△わた▽

## 顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号△一〇〇〇円  
大塚 略号△らも▽

## △女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹 略号△一五〇〇円  
大塚 略号△せ10▽

## 全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円  
大塚 略号△ひた▽

## 全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円  
大塚 略号△ひと▽

## マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
甘木 春子 略号△まに▽

## 血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 略号△れは▽

## 血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 略号△れみ▽

## 血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 略号△のせ▽

## 血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
絹川 文代 略号△ちた▽

## 豊満腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
長野 良子 略号△ほふ▽



明瞭な臨月腹の妊娠線

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号八りきV

双胎の臨月腹を鑑賞する

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号八りけV

妊婦の乳房を縛り弄ぶ

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号八りさV

妊婦後手縛り引き回し

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号八りしV

亀甲縛りの臨月妊孕美

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号八りたV

乳房緊縛の双胎臨月腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号八りちV

臨月双胎蛙腹の股間縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号八りぬV

浣腸される妊産婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号八りひV

臨月妊婦の全身像

大手札二枚一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号八りせV

臨月妊婦腹の側面

大手札三枚一組 五〇〇円  
安原さゆり 略号八りそV

妊婦臨月腹のアップ

大手札二枚一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号八りとV

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八おにV

膨満の妊娠腹の緊縛

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八おみV

妊婦開股縛り哀歎

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わうV

八力月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わのV

妊婦腹誇張の開股縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わえV

妊孕美人の媚態立像

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わおV

妊孕美人の媚態坐像

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わきV

両手吊り片足挙げの妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わくV

両手吊り妊婦の正面

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わすV

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わせV

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八わちV

臨月の妊婦三態

大手札三枚一組 五〇〇円  
安原さゆり 略号八よむV

動物的な臨月妊婦の腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
安原さゆり 略号八よみV

産み月の膨大な腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
安原さゆり 略号八よまV

麻縄でくびった妊婦腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八よはV

ころがされた緊縛の妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八よほV

臨月妊婦の革紐縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八よにV

見事に美しい臨月腹妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八よちV

臨月の妊婦麻縄縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八よらV

臨月の妊婦全裸鑑賞

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河恵子 略号八よへV

九力月妊婦全裸正面立像

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のまV

羞らう妊婦の裸身前向立像

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のめV

九力月の妊婦腹を晒す

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のやV

九力月の妊娠腹を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のこV

便々たる太鼓腹に縄掛け

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のしV

膨満腹も露わな両手挙げ縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のろV

竹棒責めに喘ぐ九力月妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のはV

十文字縛りの妊婦腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のにV

柱縛りに苦しむ九力月の妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のほV

開股責めと椅子縛りの妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
木戸悦子 略号八のへV

脈打つ全裸の臨月腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
中河恵子 略号八こふV

猿轡につめく臨月妊婦腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
中河恵子 略号八このV

革紐による臨月腹股間縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
中河恵子 略号八こやV

逆さ吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号八さめV

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号八さるV

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号八さるV

妊婦全裸縛りの全身

大手札三枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号八さにV





伏見区・輪記賀須喜夫

私は若い女の子のワキガが大すきだ。黒々とした腋毛から発するワキガ。このごろはデオドラントスプレーが多く使われて、この楽しみが、すっかり無くなってしまった。通勤電車の中に一人のワキガの女の子が居ると、その日一日が楽しい。男と女のおいは、すぐ区別出来る。女の子のワキガを楽しみながら、その子に思い切り浣腸してみたい。イチジク浣腸を見せびらかしながら、いやがって逃げる子が無理やりに押えつけて肛門をぐっと開いて深々と差し込みたい。苦しみもだえる彼女の腋をなめまわしてみたい。(京都市)

○ 奇クファンの皆さん、お元氣ですか。益々SMプレイに励んでいることと思います。当方、25才真面目なサラリーマンです。M度の強い女性とプレイしたいと、思っています。私の好みは、鞭でたたいてM女性の苦痛に歪む顔を見る事と、もう一つは相手の女性の人間としての人格を認めず、徹底的に犬か豚の様に扱い精神的に苦痛を与える事です。しかし自制力は強い方です。から納得できた範囲内でプレイするつもりで、決して自分本位にやろうとは思いません。私の理想の女性、関谷富佐子さんの様な人です。70年2月号の塚本鉄三氏のルポ「妖精を鞭打つ」は、何度読んでも、私を凄く興奮させます。今年8月号の口絵写真、あの苦痛に歪んだ顔を見ていると、一度でも関谷さんを鞭打ちたい気持ちがふくらんできます。貴女の様な人気者とプレイできるとは思っておりませんが、これからの御健斗を祈ります。(大阪府四条畷市・村川久三)

○ 奇譚クラブというのは、なんとも、すばらしい雑誌ですね。先ず内容の豊富な事に驚いてしまいました。最近妊娠の緊縛写真も載るようになって、よろこんでいるひとりですが、私は出産の場面の写真(あるいは文章、記録、ルポ)などものをせたいだきたいと願っております。またもし編集者の皆様方のお知り合いに産婦人科医か助産婦あるいは看護婦の方がおられましたら、何とかお願いして、私の興味をもっております出産その他診察シーンなどルポを書いていただけたらと思っております。(上越市本城町・古井新也)

○ 九月号を読んでいて奇クサロンのところに宇津木清子さんの「アゲタムの花に添えて」という文章があるのに大変興味をひかれました。貴女はきつと花を愛する心やさしい方の方ですね。私は28才、ある法律事務所で弁護士の卵としての修業をしています。数年來奇クを愛読していますので沢山の法律書と共に本棚には百冊近い奇クがずらりと並んでおります。といってSMが特に好きというわけではありませんが奇クのもつムードが好きで、旅やスポーツの雑誌と同様欠かさず愛読しております。ソフトムードの貴女にはきつとこんな私が適当しているのではないかと思いますが如何ですか。(大阪市・春日井一郎)

○ 奇ク愛読者の皆様、お元氣ですか。私は久しぶりに奇ク誌を買いました。私が以前に求めていた頃にはモデルには絹川文代さん梨花悠紀子さんなどの写真が出ていました。今度9月号を買って南加津子さんが、いっぺんに好きになりました。塚本さんのルポ「M女加津子のすすり泣くとき」のページを息もつかせずに読みました。次に「ソ連兵の餌食になる日本女性」も興味深く胸をわくわくさせて読みました。私はサド・マゾの経験は一切ありませんが、女性愛読者の方の中で、そっと私をコーチして下さる方はおられますか。(広島市・観音寺志朗)

○ 山口幸子様。九月号に「もぐさと共に青春を」の文章を書いておられましたね。お灸に関心のある私は楽しく読ませていただきました。おねしょの癖のある私は幸子様は、お灸の治療をお願いするしだいです。どんな恥かしさにも



熱さにもたえる覚悟です。親指ほどの大きなモグサを下腹部に六つほどおき、火をつけて下さい。どんなに熱くても我慢します。幸子様の家がすぐそばなら、今からでも飛んで行きたい気持です。幸子様、おねじょうと便秘の治る大きな熱いお灸をすえて下さい。私は二十五才の男性です。(四日市市・吉田灸夫)

○ 乙女の柔肌に一針一針、じかに刺し込んで彫ってゆく刺青。思っただけでもゾツとします。私は鼻環、耳環、それに性器に対する刺環に殊の外興味を持っています。九月号で長谷田亀治氏の「刺環の魅力」は私にとっては、ゾクゾクするような好読物、この「S M落書帳」は、どうか永く続けて下さい。それから奇クサロンの山原清

〓御送金についてのお願ひ〓  
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願ひ致します。他に、振替、定期小為替、普通小為替等の方法もあり、普通小為替の利用下さい。便宜上「切手代用」にて結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願ひ致します。

子さん、生ぬるい責めでなくて生身に針のつき刺さるスゴイ責めをお望みの由、貴女だったら、きつと耐えられるでしょう。私は座談会で貴女の素晴らしい生身の刺青を拝見した、出席者の一人です。もう一度(あの時も責めさせてもらいました)じかに刺青の肌を責めぬきたいものです。この頃の御活躍、かげながら喜んでおります。(東京都中野区・菅井市太郎)

○ 最近奇クで塚本鉄三氏のカメラルポでの大活躍は高く評価しております。八月号と九月号と二カ月に亘っての南加津子さんの取材は写真といい文章といい、見ごたえ読みごたえありました。特に九月号の「M女加津子のすすり泣くとき」は、思わず興奮させられた。一四八頁のお腹を正面にした妊婦腹は本物でした。私は今まで小説を読んで、この世の中に、果して

M女が存在するのだろうか、不審に思っていました。毎月カメラルポを愛読するうち、M女は存在するのだという念を強く持つようになつてきました。どうか、これから素晴しい取材をして下さるよう、お願ひします。(神奈川県・川崎克美)

○ 九月号には私の拙い告白をおのせ下さいまして重々お礼申し上げます。先月号同様、南加津子様のカメラルポの記事は非常に興味をひかれました。私は奇クに感心している点がふたつございます。そのひとつは昔はどうであったか存じませんが、現在の奇クはこれだけの本でありながら、商業的な広告を一切掲載していないということ

とです。同人誌であればいいが知らず、商業誌で広告を全く排除している本というのは、珍しいと思います。もうひとつはノンフィクションの記事が多いせいか、内容がすぐく身近に、感じられるということです。巷間には種々のS M誌がハンランしているようですが、それらのいくつかの内容には、作られた面白さはあっても奇クほどのリアリズムに徹している本は全然ございません。奇クのメリットは、やはりこの点にあるのではないかとと思うのです。最近S Mという言葉が一般化されてきてテレビなどでも「浣腸しちゃうから」などと平然といわれております。先日「お笑い頭の体操」を見ておりましたら、小野やすしが、あられもないマゾ男の替え唄を歌っ

ておりました。(神奈川県・村田恭子)

○ 山村国子様、九月号の読者通信拝見しました。仕事の性質上とは言え浣腸をするとは思っていませんでした。私も旅行が好きでバスガイドさんが、あわててトイレにかけこむって言う事を聞いた事もないから、なる程と変な所で感心している次第です。夏の休暇はいかがでしたか? 私は高山までドライブに行きました。貴女は恋人が出来ましたか。旅行する人の相手ばかりであまり行かないのでしょうか。もしよろしければ一度貴女とS M旅行でもしたいものです。いつも近くのコースを受持つと言いますと京都市内を走っておられるのでしょうか。私はSの性格故、そういった事を気楽に話せるM性の女性が好きです。もし貴女と逢えるなら頭だけのプレイから脱脚して、この世界の甘さを教えられただけの自信は持っているつもりです。(滋賀県大津市・山里広三)

○ 女性に飼育されたいと願う三十一才の男性です。半年から一年という期間を定めて、女性(複数で



も可)に犬の様に飼育されたいのです。庭に犬の檻を置いて頂き、全裸にされて首輪と鎖につながれて人間性を全く無視され、女王様のお好みのままに飼育されたいのです。奴隷のシルシとして全身の毛という毛(頭髮も含む)を剃れと命令されれば従います。手枷足枷をはめられ、四つん這いで人前に引きずり出されても従います。

食事は女王様の残り物を生きてゆけるだけあれば、犬の様に直接口で頂きます。飲物は女王様の御神水を頂ければ幸いです。とにかくある期間は女王様に絶対服従します。どなたかグループで、こんな男をおもちゃに飼育して下さる方はありませんか。(摂津市・犬飼M男)

○ 武井綾子様。読者通信によりますと、今迄の私とそっくりだと思いましたが、只違ふのは私は既にあなたの願いのように見て貰っているということ。同じ気持ちの方とお友達になりたいと思っていました。私とあまり違わない人だと思いました。私は婦人服のデイズイナードが仕事で東京大阪神戸と月に何度も往復しています。いつかお目にかかって、いろいろお話で

きたらと思います。溝口英子様。私はあなたと同じ興味を持てているのですが、怖くて人には言えませんでした。あの通信を読んで貴女ならコワイ特殊な感じがしなかったのと同じ悩みを話し合えると思ったのです。よろしかったらお友達になって欲しいと思います。(東京都・木川百合子)

○ 山原さん東浦さん、あなたのオシメ写真、大変興味深く、快感をおぼえ乍ら見ております。私は四十九才の男性ですが、無類のオシメマニアです。昼の間は活動的に不便です。使用致しませんが、夜の九時頃就寝前に自分で着ています。今はまだ暑いので放尿も夜間一回だけです。乳幼児と違い一回の放尿でオシメがぐっしょりと濡れ、べったりと肌に吸いつきますがニシキゴムのカバーが蒸し上げるので欲望が高まるばかりです。ムズムズとこそばゆくて、ぞくぞくします。でも、私の場合は一人プレイです。あなたのように他人の手でオシメを巻かれてピチピチとオシメカバーを巻かれたい。 (奈良県・駒井主人)

○ 関冬子様。十月号のあなたの呼

びかけを見て、早速ペンをとる気になりました。というのは、あなたのお名前が、かつて私が秘かに憧れていた人妻の名前と同じであるからなのです。もちろん、同名異人であることは二十八才というあなたの年令だけ見てもわかります。私は辻村隆氏と、そう違わない年です。その人妻に憧れたのも、もう二十何年も前の話なのですから。しかし、関冬子という名前を見つけて一瞬、はっとしたことは事実です。そしてもう一度、最初から読み返して「ああ、やはり違う人か」と思ったようなわけです。あなたは「お話だけでも伺える男性の方、お友達になつていただけませんか」と、おっしゃっています。私でよかったら喜んでお友達にしたいなと思

います。あなたの希望通りのプレイをして上げることができると思っています。もっとも「お前のような五十に手の届きそうな年寄は、まっ平だ。友達は若い人に限る」と言われるのなら、これはもう、しっぽを巻いて引き下がるより、しようがありません。二度目の失恋です。しかし、決して名前だけ見て、こう言っているのではありません。あなたの書かれたことの中

に、あなた自身が、まだ気づいていないかも知れないSMに対する強い願望が読みとれるからです。あなたのことを「冬子」と呼べる日が来ればいいと思います。(東京世田谷・竹田信正)

○ 私は毎日、若い女の子に責められてる夢を見ている二十八才になる気の弱い独身の男性です。この孤独なM男を飼育してくれる女王様にめぐりあいたいと思ひ、お便りした次第です。女王様の御命令をお待ちしております。(千葉・佐藤真二)

○ 9月号の口絵解説(塚本鉄三)の項で脚光を浴びた想念(木村洋子)を読んで、私は彼女に大変興味を持ち、こんな強いマゾ性の女を一度でいいから責めてみたいと思つた。というのは塚本氏が一緒に責めてみないかと書いてあるからだ。木村洋子は7月号でも「Mの性に泣く私」という手記を書いていて彼女のことは、よくわかつたつもりでいたが、今度10月号でカメラルポ「天神祭の女」で再度登場した彼女。豊富なフォト入りで文章を読むと思わず、ぞくぞくとした。自分がその場に、い合



わして自分の手で責めているような気持ちになったからだ。そういえば9月号にも「二人の男に責められた」事を書いているが是非彼女を思いっきり縛りあげ、とことんまでこの手でいじめたいものだ。

(愛知県・蒲田俊春)

○ 鈴鹿晶子さまの「ソ連兵の餌食になる日本女性」心にしみて拝見しました。と申しますのは、その頃満州にいて恐ろしい目にあつたという母から、いつも話に聞かされていたからです。今は両親が揃っていて何不自由のない平和な暮らしをしています。娘時代に異国にいたために、それはそれは、ひどい仕打ちにあつたという母の思い出を聞くにつけ、鈴鹿さまの文章はなつかしく思いました。今月号を求めましたところ、引続いて「汚辱にまみれた身体検査」という文章がのっていて思わずむさぼり読んでしまいました。私は母の話とダブってしまつて、どちらかわからなくなつてしまいました。まるで自分が、文中の鈴鹿さまになつていくようで、読んでいても何かなんだか、わからなくなります。私も怖ろしいけれど、こんな目にあつてみたい気がします。こ

れからも、どうか、最後までお書き下さるよう、お願いします。私は胸をわくわくさせて待つております。私は二十三才のOLで奇くは二年ほど前から時々手にしております。(東京都北区・木崎妙子)

○ 例年にならない暑さが続きましたがやっと秋らしくなってきました。編集室の皆さん、お元気ですか。私も奇くを参考にして暑さにも負けず夫婦プレイに励みました。と申しましたが、まだ、他の方に見て頂けるような満足な写真もとれない駆け出し者です。でも、この世の中で一番よいパートナーだと思つています。八月号の巻頭のあらうら縛りになつて前田真知子さんそっくりの妻です。この縛り方ポーズを真似てプレイをやってみました。口絵やルポの写真をそのまま使って参考にプレイします。が、ルポの文章の通りは未熟のため中々出来ません。しかし、プレイのあとは、いつも夫婦生活は円満でハッスルします。私達はまだ子供がいないので、これでいいと思つていますが、二人が若い間にどなたか気安い方にプレイの指導と写真撮影をやつてほしいなあと考え、妻に相談しています。私は二

## ☆妊婦資料と南加津子の縄による凌辱

従来、数多くの妊婦の資料を提  
供して貴重な文献―蒐集という役  
割りを果たしてきました本誌が、こ  
こにマニアの方々の為に、新鮮で  
素晴らしい妊婦資料を贈ります。

### 初妊娠に羞らう女

大手札 三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八みいV  
初めて妊娠した一糸まとわぬ裸  
身を正面に晒して隠すすべもない  
肌を羞らう、縛りなしのムード。

### 腹の膨らみを曝す

大手札 三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八みろV  
ぽってりと可愛いく膨らんだ妊  
娠腹を何のかくすこともなく真正  
面にあらわに見せた女の素直さ。  
以上の二組は緊縛なしの資料。

### 乳房と腹部を縛る

大手札 三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八みにV  
たわわに実り乳汁の溢れそうな  
乳房とメロン腹に、その二つを強  
調する縄が無惨に掛けられる。

### アグラ縛りで責る

大手札 三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八みへV

十六才、妻は二十三才です。妻は  
奇くを読ませると、いつもプレイ  
をせがみますし、プレイのあとは  
いつもおきまりのコースになつて

両足首を揃えて縛り両膝が左右  
に大きく開くように引きつけると  
彼女はどうな格好になるか？

### 開股縛りに悶える

大手札 三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八みえV  
両膝頭を左右から縄を掛けられ  
て、これ以上は開けられない程開  
かされた太股に彼女の悦びが？

### 足吊り開股の羞恥

大手札 三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八みるV  
椅子の上で足を吊られながら右  
と左に開かされたM女加津子の果  
汁もしたたるばかりの緊縛姿。

### 妊婦海老責め地獄

大手札 三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八みりV  
腹に子を宿しているのを圧迫す  
る苦痛に額から脂汗をたらして耐  
える凄絶な妊婦の海老責め実態。

### 豊満M女の哀しさ

大手札 三枚一組 五〇〇円  
南加津子 略号八みとV  
彼女に情容赦なく縄の悪魔が襲い  
かかり、そのすべてを剥ぎとる。

しまいます。ですから、SMプレ  
イは私達夫婦にとっては欠かせな  
いものです。奇くは非常に役に立  
ち、いつも愛読しています。妻を



もっと高度に飼育するため手ほどきや指導をして下さる中年の方、男女を問わずお便り下さいませんか。今のところ夫婦交換プレイまでは考えていませんが産制中ですので妻さえ納得すれば出来ると思います。(三重県・津山実)

○

奇クの愛読者になって、まだ日も浅い私が、勇をふるって出した通信が、八月号に活字となっていましたので、とても嬉しく思いました。これで、やっと私も皆様の仲間入りができました。そして通信を通して先輩諸姉諸兄に可愛いがって頂けると思いますと、その喜びで胸が一杯になりました。通信を出しますときは、一体どのようにならいたらいいのか随分、思案もし、迷いました。私の気持が皆様のところに通じるのは、いつの日であらうかと思いましたが、生来の筆無精の故もあって、三日三晩考えての拙文、御笑覧下さい。奈良県五條八郎様。お便り拝見させて頂きました。お恥かしいですが、次頁に私の拙文があります。貴兄のように卒直に記せないのが私の欠点です。同じ奈良県の高田珠一様にも、お呼びかけします。若し差しつかえがありませんでし

## 総天然色カラー新作女体緊縛資料

カラープリントに依るM女の美しくも可憐な姿態を皆様のコレクションの一端にお加え下さい。いずれも各組極鮮明な大手札判プリント三枚一組一〇〇〇円です。

アグラ縛りに悶える美女

前田真知子 略号／まへ

襟り責めに呻く美女

前田真知子 略号／まほ

悦虐の裸身を大胆に晒す

前田真知子 略号／まよ

成熟した女体のマゾの謎

前田真知子 略号／まち

明眸を汚すむこい縄目

前田真知子 略号／まお

全裸の開股開脚開陳縛り

深田 菊子 略号／ある

白肌と赤白まだら紐の変態

深田 菊子 略号／あり

浣腸と緊縛の弄戯

福井 桃子 略号／あや

縛りの羞恥に喘ぐ乙女

笠井奈保子 略号／あむ

羞らいのルツボの中で呻く

笠井奈保子 略号／あも

衆人に晒された緊縛女体

笠井奈保子 略号／あめ

猿ぐつわに悶えるマゾ女

笠井奈保子 略号／あみ

全裸で見せる挑発の狂態

松本 たえ 略号／あき

強烈な後手縛り展開

松本 たえ 略号／あい

臨月腹緊縛の発端

福井 桃子 略号／あろ

便々たる太鼓腹を縛る

福井 桃子 略号／あね

拘束された臨月の蛙腹

福井 桃子 略号／あれ

蛙腹に強烈な縄目を掛ける

福井 桃子 略号／あよ

海老責めの後手吊り

江口 淑子 略号／あお

苦痛と喜悦の不思議な交錯

江口 淑子 略号／あわ

たら文通など、お願いできないでしようか。他に、大勢の愛好者の方々にも呼びかけます。愛好家が一堂に集まって、お互いに体験談などを話し合っって一日を過ごしたら、どんなに楽しいことだろうと思っております。これは常々私の希望であります。マニアといった良いのか分かりませんが、マニアの真意は、非常に難解とされておりますが、どの道、オシメとオムツ、オシメカバーとオムツカバーの二道があると、いわれておりますが、実態は、それほど差違はないと、思います。ですから、愛好

○

奇クファンになって一年。はじめてペンをとりました。読者の立場になった編集と読者との接触を大切にしたい奇クは、数あるSM雑誌の中で読む人をひきつけます。今回は、はじめてですので、よく

の自己紹介をしますと、年令は二十一才、完全なM、身長百七二センチ、体重五十八キロ、色白、童顔、女性的体質、職業ファッション・ヌードモデル。性向、女性下着をつけ、三十以上のS男性かS女性に恥かしいポーズをとられ縛られて責められることです。また、ご夫婦のおモチャとして、写真のモデルとして御利用下さい。(大阪市・池田ススム)

○

SM恋の処方箋に御共鳴下さった瞳次郎さんへ。次号欄へ御返事をと思いながら、月を越えてしま



って、お詫びいたします。貴男が御夫妻が楽しい旅をなさったことを、お喜びしたいと思います。貴男方御夫妻とは私達もペアで、お附合願えるようですね。私達も会って話し合ったり楽しい時を持ちたいと望みます。私は今は、いつでも、貴男方と心を通わす時がもてるでしょう。御夫人も愛奴として、奉仕されたとか。あなたの広い愛が、しのばれるようです。我々にとって一番大切なのは、自分を捨てることによって得られるこの世の旅路の幸せではないでしょうか。私達は確かに貴男達御夫妻より若干、年を重ねてはいるでしょう。ただ、それだけで誇るべきものとしてありませんが、私達には健康な身体と純粋を愛する求道心があります。私達と貴男の写真を交換し、妻の麗花とともに一緒に道を歩いて参りましょう。この文が掲載される頃には私達は薩摩から天草路を辿っていると思います。会える日を楽しみにして何かを得て参りましょう。貴男と御夫人の愛が真実に輝くことを祈ります。(神戸・瞳耀太郎)

○  
お便りするのには本当に十何年ぶりでしょうね。その間、グラビヤ

にマゾ写真のない味けなさを堪えながら、ずっと愛読して参りましたが、ここ二号ほど、ほんのちょっぴりながらサジスチンの再登場となり、心から喜んでおります。逸毛恵須子様の御写真は初めて拝見すると思いますが、やはり旧作に比べて、非常に感銘を受けました。恵須子様の女王ぶりは、本当にM男をいたぶって楽しんでいらっしやる御様子で、よく出ていてもっと多くの頁をさいていただきたいものです。もし、かなうことなら、恵須子女王様のおみ足で踏んずけていただきたい。美しいお尻で馬乗りになって責められてみたいと願っておりますが、この夢が現実となった時、果して私は女王様のお気に召すように勤め上げることができそうですか。恐らく心わくわく、気もそぞろ。やること、なすことすべて失敗という状態で、女王様のきついお叱りをお受けすることになるでしょう。奇クと親しんで二十年近く、空想マゾの域を脱し得ない私ですが、なかなか機会に恵まれません。雀百までではありませんが、私もこのままマゾの世界を空想しながら人生の終りまで行くのかと思うと一寸、悲しい気持ち致します。ど

なたかマゾの館でも、お建てになりませんか。会員をつのつてもよろしいでしょう。全国にマゾヒストが何人いるかわかりませんが、千人いるとして、一人十万円の入会金をとって一億集まります。一億あれば東京の郊外で土地建物とも、でき上がるでしょう。発起人になる勇氣もないくせに、こんなことを申し上げて失礼致しましたが、おやりになる方がいらっしやれば建物の設計ぐらひは協力させていただきます。久しぶりの投稿で筆がすべってしまいました。奇クの盛々の御発展を祈りますとともに、マゾ物に対する内容の充実をお願い申し上げます。(直木昭)

○  
ゴムマニアの皆様、お元気でしょうか。近頃「奇ク」では、それらしき読者投稿が少なくなりました。うですが、奮起してもらいたいものです。いつ頃の「奇ク」だったか、はっきり記憶していませんが、弾六夫氏の告白「ゴムマニアの告白文によせて」を一度、拝見したことがあります。それ以来、余り見かけないようです。実は私もゴムに魅了されて久しいのですが、未だプレイ経験はなく、一度は実

現させたいと、念願している夢の一つです。色々と考えし空想を練っては反省している昨今ですが、弾六夫氏の告白文によると、諸外国にもゴムマニアの方々が多くおられるとのこと。また、弾六夫氏は色々アメリカよりゴムに関するカタログ、あるいはゴム製品、下着類を取り寄せていらつしたようです。ゴムに多少なりとも関心がある者としては、一度、手にとって拝見したいと思っております。今なおゴムマニアの道を極めていらつしやると思われる弾六夫氏に再登場して頂いて、若輩な私に色々御指導下されれば幸いかと思います。弾六夫氏、ゴムについてのアメリカのカタログ、また、「ゴムを愛撫する」という8ミリカラー、「ラバーメイト」という写真雑誌等々は、どこで手に入れたら、よろしいでしょうか。御一報ねがえたら、私にとってどんなにか嬉しいことでしょうか。ぜひ、お知らせ下さい。つぎに、M女性が近頃、少なくなってきたようですが、ゴムに関心のある方またMに目覚めた方、ぜひ一度、会って親密に話し合ひましょう。(大阪・ゴム男)

○



# うら若き初産婦出産間際の裸身を晒す

## 臨月の妊孕美鑑賞

大手札三枚一組 略号八つあV  
南加津子 五〇〇円  
妊娠という生理現象によって起った女性の美しさを、とことんまで追究して、その裸身をあばく。

## ベッドの上の妊婦

大手札三枚一組 略号八つあV  
南加津子 五〇〇円  
巨大なお腹をほうり出してベッドの上にて、いろんなポーズをとって見せる露出症気味の妊婦。

## 鮮明な蛙腹妊娠線

大手札三枚一組 五〇〇円

私は今年三十三才になる男性ですが、この種の本を始めて手にしてから、すでに十五年余の月日が過ぎました。店頭で、この種の本を手にしたときの胸の高鳴りは、今でも、はっきり憶えているほどのショックでした。今日では、随分沢山の本や写真を見て来ましたが、十五年前のものと、これぞと思うような差はないように思えます。強いて言うならば、昔より今の方が、ポルノの度合が大巾に緩和され、最近のグラビア等の女性

南加津子 略号八つわV  
妊娠線も鮮やかに蛙腹は日を追う毎に、お臍を中心にして次第に下にさがって出産も間近だ。

## 突き出した太鼓腹

大手札三枚一組 略号八つそV  
南加津子 五〇〇円  
息を吸い込み腰を引いて精一杯太鼓腹を前に突き出して誇張した巨腹をバッチリと狙ったフォト。

## 臨月の妖しき裸像

大手札三枚一組 略号八つこV  
南加津子 五〇〇円  
たおやかな女体の腹部と乳房が異様なまでに膨隆して裸身に醸し出す妖しいムードをおさめた。

## 開股する若き妊婦

大手札三枚一組 略号八つちV  
南加津子 五〇〇円  
便々たる妊娠腹をさらしながら左右の足を八の字に自ら開いて、妊娠した女性の悦楽に酔うのだ。

## 臨月太鼓腹の神秘

大手札三枚一組 略号八つてV  
南加津子 五〇〇円  
妊娠した若き女性の神秘を、これほど間近に、しげしげと眺めることが出来るのは今だ。

## 羞らう全裸の妊婦

大手札三枚一組 略号八つらV  
南加津子 五〇〇円  
只でさえ裸になるのは恥かしい若き女性が、異様なまでに膨らんだ腹部をさらして恥かしがった。

は、まず例外なく全裸でのポーズであること。また、そのポーズそのものも非常に大胆になって来ており、両足を大きく左右に開いている図などは当然のように見受けられます。せいぜい、そんなものであろうと思えます。そこで私の貴誌へのお願ですが、まず言いたいことは、S M誌のマンネリ化を打ち破るために、従来のような緊縛女体の陳列は、そろそろ卒業して、もう少し動きのあるもの、又は迫力のあるものでグラビアを

構成してほしいということです。さて、それでは具体的に、どうするの？ という点、まず簡単なところでは、緊縛された女体に対して何等かの攻撃、または責めを加えている場面が欲しいということです。たとえば簡単などころでは、緊縛された女体に対して、その女の乳房を男の（女でも良し）足が踏みつける場面、また足の裏を舐めさせられているところ等、更には私が思うのは、こうしたS M的な行動は、最終的には全てが

セックスに結びつく、という発想から、セックス的な場面等、つまり私の要望するのは、従来の陳列形式ではなく、加害者がいるというところでの新鮮味を出して欲しいと思うのです。従来の陳列方式では、どうも金でも貰ってモデルとしてこの女は縛られているのでは……といった感じが抜けません。そこで前述のような写真が欲しいし、また、こうしたことは貴誌でなければ絶対、できないものと思います。以上、言いたいことを書きました。以上、ぜひお願いしたいと思えます。更に蛇足ですが、現在の日本ではポルノは未だに解禁になりそうもありません。しかし、私のように相手（M女性）に恵まれず、貴誌やその他の同類の誌でなくさめている状態では、店頭に並ぶものだけでは満足しないことは当然で、貴誌の写真集も何度か手にしましたが、やはり満足するまでには至っておりません。そこで貴編集部にお願したいことは通信販売を利用して、交に白いもので覆ったたりしていない写真の販売をやってもらいたいということ。です。もちろん、その筋に、くまるとは思いますが、貴誌を愛読するファンにしてみれば、面白



半分に言いふらす等といったことは決してやらないはずで。そうした意味では普通のポルノ写真等から比べて、ずっと口の固い人々の集団であろうと思います。多少困難な面もあるかもしれませんが、ぜひ実現させて下さい。常時ということでなくとも、一年の内に二―三回、期間を区切って実現するとか、色々方法はあるかと思いますが、必ずや実現して下さい。(秋田市・山田高志)

○

九月号で貴女の読者通信を拝見し、待ちどおしかっただけに、大変うれしく思います。私のように下手な呼びかけにも返事をして下さる貴女の誠実さが、ますます私の心をかきたてます。さて北田様から、その後、連絡がなかったとのこと。何か訳があったことと思いますが、私なら、もし貴女から呼びかけがあったら絶対に応じるのにと、残念に思います。それから、大変な体験をされたとのこと。ナイーブな貴女には大変ショックだったと思いますが、早く元氣を出して元の貴女に戻って下さるよう、神戸の空より祈っています。奴隷と主人といっても、これはあくまでプレイですから、お互いの

信頼感がなければ、うまくいかないのではないかと、いろいろ考えています。そして、肉体的ドレイは限界があり、精神的に貴女を完全な女奴隷に、したてたい等思っています。貴女の文面で、私の書いているような奴隷生活に耐えられる自信があるとのこと。心がけは大変よろしい。私も貴女を奴隷女として飼育できるような気がしています。貴女の文で、ムチは嫌いだが甘受するとのこと。これは奴隷女として当然のこと、ムチで打たれたくなければ御主人の言葉を一言も聞きのがさないで、奴隷としてのつとめを果たすよう、努力することです。また奴隷としては当然ムチ打ちだけでなく、どんなことでも御主人のために甘受することが奴隷のつとめです。それから女奴隷は大分、鼻クサリに興味をもってきたようですね。私は奴隷を調教するには最良の方法だと思っています。この鼻クサリにより奴隷に屈辱感を与え、そして家畜のように奴隷を飼育し、また主人の絶対性を奴隷に覚えさせます。黒田様の絵のように乳房まで束縛されたいとのこと。私としても望むところで、奴隷女の大きい乳首を縛ってあげましょう。し

かし、手足を自由にしてほしいとのことですが、これは奴隷の心がけ次第で、悠子が女奴隷として信頼できると、自由にさせてやってもよろしい。しかし、少しでも反抗等の様子が見えたら、処罰のムチ打ちをした後、すぐに後手錠に足にも短いクサリをつけた上、労働をさせます。それから女奴隷の好きな責めを教えて下さい。しかし悠子は奴隷であり、主人である私が参考にして、いろいろ責めたいと思っています。それから、女奴隷を女人馬にして乗りまわしたりまた無用のときはオリの中に入れておけるといふことについての意見を聞きたいと思っています。また女奴隷のサイズと特徴、顔は誰に似ているかを知らせなさい。結局奴隷は権利も思想も持つことを許されず、日本なら昔の非人のような立場だと思っています。そして御主人に対する忠誠心と奉仕の義務がすべてだと思っています。大変、勝手な失礼なことを書きましたが、貴女のような貴重な方が現実におられることで私は一層、勇気づけられます。(神戸市・若木一夫)

○ 貴誌を愛読して十年になります。女斗美マニヤです。特に女角力に

興味を持っている一人です。同好の方、どうかよろしく。本誌も、このところ、余り女角力についての記事がなく、残念に思います。私達マニヤにとりましては、若い肥満した女性、裸身に渾一本という、いでたちで、四つに取り組んで、髪を振り乱し、乳房をぶつけ合い、肉弾相搏って二人とも重なり合って土俵下へころがり落ちるところが、私達マニヤにとりまして魅力的です。また愛読者の中に、男女を問わずマニヤの方がおられることと思いますので、お便り下さい。(岐阜・服部不二夫)

○

私の奇ク愛読も十年を過ぎました。編集部の皆様も奇クの企画には毎回、頭を悩ませておられることでしょう。最近読者の体験や創作が大量に掲載されるようになり、奇クも我らの本という親しみが一層、湧いてきました。それらを拝見しておりますと、文章のお上手な方が多いようです。しかし投稿されない方の中にも素晴らしい体験をお持ちの方もしらっしゃると思います。考えてみますに、奇クの読者は、自分の変わった性格や趣味の傾向にとまどい悩みながらも生真面目な社会人が多いにちが



## 次号(十二月号)は十月二十二日に発売いたします

いないと、いささか自画自賛して  
います。ただ奇クが出版物として  
公認され店頭に並ぶ以上、編集内  
容にも、ある程度のブレーキは必  
要でしょうし、読者のエスカレー  
トする要求に歩調を合することがで  
きない場合があって、編集部の方  
も大変でしょう。しかし、いろん  
な職業や階層の人が、奇クをひっ  
そり読んでいると思えば楽しくな  
ります。さて、私の注文と愚痴を  
少々述べさせていただきますと、  
奇クも今や緊縛が主流になってい  
るようですが、緊縛や浣腸だけで  
はなく、ゴムマニヤ、衣装マニヤ  
バンドマニヤのために特集を企画  
して下さい。体験や告白以外に、  
そういったものの歴史等も企画し  
て下さい。私は近頃、緊縛に飽き  
て生理帯に興味を感じています。  
どうかこの方面の知識、及び入手  
方法について教えて下さい。奇ク  
愛読の女性諸氏、文通を待ってい  
ます。目下、下宿中にて収集も思  
うにまかせません。古い型から新  
しい型に至るまで、どなたかお世  
話下さい。三十才、独身男性、技  
術者です。(大阪・伊藤隆夫)

## ○

武井綾子様。あなたは良い誌を  
手にとられました。私も他の人か  
らは、まじめに仕事をしている普  
通の人間にみえると思います。あ  
なたのような方を待ち望んでおり  
ました。写真と絵の心得がありま  
すので、あなたの御希望の方法で  
美しい姿を、めでてみたい気持で  
す。同じ名古屋に住んでいますか  
ら、どこかでお逢いしまして、も  
し気に入っていただければ、おつ  
き合い願いたいと思います。私の  
体重は、あなたと同じくらいです  
が、背は十センチ高く、男で適令  
期といわれる年令です。(名古屋  
・代矢伸一)

## ○

考えただけでもブルブルッと快  
感が身を走る。何といってもアヌ  
スの快感を知っている人は幸福だ  
十三号のカテーテルを奥深くさし  
入れるのもいいが、それを、さっ  
と引き抜くときの背筋を走るすば  
らしさ。私は脱肛で、十年余り前  
に、とうとう手術台に上った。そ  
の時、私の永年たのしんだ快感帯  
は消え去ってしまった。若い看護

婦の差し込む太いカテーテルを何  
度、うらめしく見つめたことか。  
それ以来、何とか昔の快感を取り  
戻そうと、いろんな努力をした結  
果、やっと取り戻したアヌスのよ  
ろこび。私の人生にとってこんな  
大変な喜びはまたとないだろう。  
その一つの方法を紹介しておこう  
印度では紐をつぎつぎと結んだも  
のをアヌスへ入れておいて……を  
しながら、その結び目を一つずつ  
引っ張り出して快感を得るという  
ことを前に読んだことがある。そ  
れからヒントを得て、珠のれんの  
古いものがあつたのを、分解して  
強い麻紐に通してゆく。小さい珠  
を三、四コ通して大きい珠、また  
小さい珠という風に繰り返して約五  
十センチのものを作っておく。た  
っぷりクリームをぬり込んで、こ  
の紐(というより、珠の連なった  
棒のようなもの)を、そろそろ入  
れてゆく。大きい珠の入る時には  
ゾクツとする。全部入れ終るとゆ  
っくり引っ張り出す。カテーテル  
の出し入れとはまた違った素晴し  
さである。時には二十センチぐら  
い一気に引っ張り出す。そんなと  
きは身体全体がピンと硬直してし  
まう。出したり入れたり、興奮の  
三十分ぐらいいは、すぐたつてしま

## ○

う。事前に浣腸しておくことは当  
然だが、あまり大量をするとアヌ  
スがゆるんでしまつて快感が薄く  
なる。イチジク浣腸の特大ぐらい  
が一番よいようだ。要は腸を空に  
しておいて、じゅず珠を受けやす  
くするのが何よりである。ちなみ  
に、私の特製の浣腸液を書いてお  
く。グリセリン一八〇CC、食塩  
一二〇g、水八〇〇CCを混ぜた  
ものが一番気持が良い。イチジク  
の空を一〇コほど、いつも、この  
液を満たして用意してある。ただ  
し、上記の液に、ある特殊な薬品  
をほんの数滴、垂らしたものが特  
に素晴らしいが、私の秘薬として、  
ここには記さない。この液と、前  
記の紐の快感を求める女性の御連  
絡を待つ。(大阪・南原赤秋)

読通の女性、南加活子さんが羞  
恥美を公表して下さいったことに感  
謝しております。妊婦の美しさに  
加える彼女の美しさが最高のM記  
録をまた奇ク史上に残してくれた  
ようです。奇クとは、すでに相当  
の間の文信にて信用もある私とS  
Mプレーをしていただけなんですが、  
しょうか。貴女さえその気なら、  
編集部氏も両者の信頼に事を委ね  
てくれるはず。全裸緊縛の美







# 編集後記

○本号の扉で、豊満な座間明子さんに詩を捧げておられるのが八村尾加根夫V氏。その豊満さに、捧げるどころか貰えないかと唾をのむのが私。そこに違いがあるんでしょうね、詩情あるヒトと、あわてる乞食の……。

○同じく、違うナアと思うのが八坂郁子Vさんの『夫婦プレイ旅行の記録』です。どこへ行くにしろ、亭主をミヤゲ物運びの供と心得えているらしい「妻という名の女」もいることを早坂氏はきつとご存知ないでしょう。

○八坂井靖二V氏の懐しがられる『葉繩』は私も知っています。疎開先引揚の節に何かと重法でした。ただし、それで縛ったのは荷物だけで女体ではなかったところが大きい。

○社会学研修のためと無理算段して『真昼の客』ならぬ真夜中の客で精勤賞ものだった私ですが、八比叡風V氏の書かれたような好女にはついぞ巡り逢えず、なけなしの研修費を強奪されるに似たことの繰り返しでした。でも、懲りた覚えのないところをみると、ケッコウ、モテてたんでしょ。とにかく純情可憐な美青年だったから……。でも、そのワリに近所の娘には一向に騒がれなかったのを未だに不思議に思っています。

○『奴隷妾』の八北川まりこVさんに興味を持つのは、私も正常だから橘氏に劣らないつもりです。罪つくりのまりこ、マゾの牝猫まりこ、男の心をかき乱すようなことを吐いた罰として、晴着を着せて丁寧に扱い、行数が尽きたから、もう何も言ってやらない！

# 読者原稿募集

## 告白、手記、体験

読者の皆さまが御自分で親しく体験されたことや秘められた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけでは、どうしても書き残しておきたいと考えられ、た事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には五千円以上の謝礼を贈ります。

## 小説、読物、創作

本誌の編集内容に適した異色ある力作を大いに期待いたします。すべて自作の未発表

の作品に限ります。これはと  
思う作品は、必ず誌上で取り  
上げます。腕だめしの意味で  
ふるって御寄せ下さい。採用  
篇には五万円迄の稿料贈呈。

## 奇クサロン向原稿

小品、写真、挿絵、通信、  
短信往来、感想、批評、読後  
感、モデル編集者執筆への  
通信、夫婦プレイの報告、S  
Mニュース、映画雑誌新聞か  
らの見聞記など、本誌独特の  
奇クサロンに適した投稿を求  
めます。記念品、写真資料又  
は二千元以上の謝礼を採用篇  
に対して、お贈りします。

## イラスト、カット

本誌の内容に適したSM画  
を求めます。大きさは自由で  
すが必ず白い紙に黒色で描い  
て下さい。優秀な作品は誌上  
に継続的に掲載の上、当方か  
らテーマを与えて制作して頂  
きたいと思えます。腕に自信  
のある方は、どうか、習作を  
お見せ下さるようお願いす。  
画料については、作品に応じ  
て御相談申し上げます。

◎御応募下さいました原稿は  
原則として返却の求めに応じ  
ないことになっております。故  
悪しからず御諒承願います。

# 本誌御購読の葉

予約に限り  
一月分(1冊) 四〇〇円(送共)  
三月分(3冊) 一二〇〇円(送共)  
半年分(6冊) 二四〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

# 奇譚クラブ 定価 四〇〇円

十一月号 (第二十七巻第九号)

昭和四十八年十月二十日 印刷  
昭和四十八年十一月一日 発行

編集人 杉原虹児  
発行人 吉田俊夫  
印刷人 北村

郵便番号558  
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号  
発行所 暁出版株式会社  
A振替口座大阪四二七八三番  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日  
国鉄大局特別取扱承認証第二二〇号)

# ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定され、いような充分に注意して編集いたしました。す、本誌は成人向けとして発行を企図しており、下す関係上、十八才未満の方には絶対お願い申し上げます。特にくれぐれもお願